

天 神 坂 遺 跡
奥 坂 遺 跡
新 屋 敷 古 墳

岡山県総合流通センター建設
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

1983.3

岡山県教育委員会
文 化 認

奥坂遺跡 A 地区全景





1. 大内田廃寺瓦出土状況



2. 奥坂No.81袋状土壤土層断面

序

本報告書には、岡山県総合流通センターの建設に伴う3遺跡の発掘調査結果を収めました。

岡山県総合流通センターの造成工事は、同センターの建設予定地内にある2基の横穴式石室を有する古墳の保存を前提として進められました。ところが、工事のかなり進んだ昭和56年4月吉備地区に大遺跡群が発見され、それらは従来の知見を絶する大規模なものであることが判明しました。本県教育委員会では、工事の進捗状況からその保存は困難であると判断し、急遽発掘調査に着手しました。

調査の結果、天神坂遺跡では、弥生時代から古墳時代にかけての住居跡と古代末の寺院跡を検出しました。奥坂遺跡では、弥生時代から古墳時代にかけての大規模な住居跡と貯蔵穴を検出しました。また、新屋敷古墳については、古墳時代終末期に属するものであることが判明しました。

これらの成果を収めた本報告書が、文化財の保護・保存のため活用され、また、地域の歴史を研究する資料として役立てば幸いと存じます。

最後に、発掘調査ならびに報告書の作成にあたって、岡山県文化財保護審議会委員をはじめ、岡山県商工部商政課、岡山県開発公社ならびに関係各位から賜りました多大な御指導と御協力に対し、厚く御礼申しあげます。

昭和58年3月

岡山県教育委員会

教育長 佐藤 章一

例　　言

1. 本報告書は、岡山市大内田と都窪郡早島町矢尾の丘陵地における岡山県総合流通センター建設用地造成事業に伴い、岡山県教育委員会が岡山県開発公社から依頼を受けて昭和56年度から昭和57年度に実施した、天神坂遺跡、奥坂遺跡、新屋敷古墳の調査概要である。

2. 発掘調査の面積と期間は、以下のとおりである。

天神坂遺跡	3,200m ²	昭和56年4月23日～6月30日
奥坂遺跡	14,100m ²	昭和56年7月1日～10月31日
新屋敷古墳	200m ²	昭和57年8月2日～8月31日

なお、都窪郡早島町矢尾の岡山県総合流通センター建設予定地早島地区については、昭和57年9月1日から10月31日まで、2か所の散布地と遺構が存在する可能性が推定される地点に、トレンチを任意に設定して遺跡の確認調査を実施した。

3. 現地の発掘調査および報告書の作成にあたっては、岡山県文化財保護審議会委員の鎌木義昌氏、近藤義郎氏、水内昌康氏から御教示と助言を得た。

天神坂遺跡と奥坂遺跡から出土した石器の石材鑑定は、岡山理科大学地学研究室の三宅寛氏に依頼して御教示を得た。

奥坂遺跡の貯蔵穴から出土した動物遺体の鑑定は、早稲田大学考古学研究室の金子浩昌氏に依頼し、御教示を得るとともに玉稿をいただいた。その内容は、奥坂遺跡の概要報告に掲載した。

4. 本報告書の作成は、昭和57年4月1日から7月31日までと昭和57年11月1日から昭和58年2月28日まで文化課埋蔵文化財係職員が行い、文責は文末に記した。

5. 本報告の編集は、高畠知功と福田正繼が行った。

6. 現地での発掘作業は、天神坂遺跡と奥坂遺跡については高畠と福田が担当し、新屋敷古墳は福田が担当した。特に奥坂遺跡では、文化課埋蔵文化財係職員の応援を得て行い、岡山県史編纂室の葛原克人氏と伊藤晃氏の援助および亀田菜穂子、平井典子、馬場昌一、武田恭彰、山下聰、安藤満孝の援助を得た。

7. 出土遺物の整理は、岩崎仁司と流王天の応援を得て高畠と福田が行い、綱沢靖枝、平岩章子、森本耶須子の協力を得た。

出土遺物の実測は調査を担当した職員が行い、福田輝子、阪本和子、小竹森直子の協力を得た。

遺構図や出土遺物実測図のトレス作業は、主として調査を担当した職員が実施し、出土遺物の写真撮影は、高畠が中心になって行った。

8. 緑地帯として現状のままで保存した塚山古墳は、発掘調査を実施した新屋敷古墳の関連から地形測量や石室実測を実施し、その概要を付載として収録した。

9. 本報告書で使用した高度値は海拔高であり、方位は第1・2・8・319図を除いて磁北である。

10. 本報告書の第2図は、建設省国土地理院発行の25,000分の1地形図（倉敷）を縮尺したものである。

総 目 次

第1章 調査の経緯と経過	
第1節 調査の契機と経過	21
第2節 調査日誌抄	23
第2章 遺跡の環境	
第1節 遺跡の地理的環境	25
第2節 遺跡の歴史的環境	26
第3章 調査の方法と概要	
第1節 調査の方法と概要	33
第2節 調査および報告書作成にあたって	38
第3節 時期区分について	40
第4章 天神坂遺跡	
第1節 天神坂遺跡の概要	43
1. 天神坂遺跡の概要	43
2. 弥生時代後期の遺構・遺物	44
(1) 住居址	44
(2) 土墳	55
(3) 段状遺構	57
3. 古墳時代前期の遺構・遺物	59
(1) 住居址	59
4. 古代末から中世の遺構・遺物	69
(1) 土墳	69
(2) 寺跡	71
5. 小結	118
(1) 天神坂遺跡の集落	118
(2) 大内田廃寺	121
第5章 奥坂遺跡	
第1節 奥坂遺跡A地区	125
1. 奥坂遺跡A地区の概要	125
2. 弥生時代中期の遺構・遺物	126
(1) 住居址	126

(2) 建物	136
(3) 土壙	139
(4) 段状遺構	146
(5) 包含層出土の遺物	146
3. 弥生時代後期前半の遺構・遺物	148
(1) 住居址	148
(2) 建物	171
(3) 土壙	174
(4) 溝	188
4. 弥生時代後期後半の遺構・遺物	191
(1) 住居址	191
(2) 土壙	225
(3) 袋状土壙	236
5. 古墳時代前期の遺構・遺物	296
(1) 住居址	296
(2) 袋状土壙	307
6. 中世の遺構・遺物	314
(1) 建物	314
(2) 溝・段状遺構	317
7. 時期不明の遺構	324
(1) 土壙	324
(2) 建物	328
第2節 奥坂遺跡B地区	329
1. 奥坂遺跡B地区の概要	329
2. 弥生時代後期の遺構・遺物	330
(1) 住居址	330
(2) 建物	342
(3) 袋状土壙	343
(4) 土器溜り	345
3. 中世の遺構・遺物	352
(1) 溝	352
第3節 まとめ	362

1. 奥坂遺跡の集落	362
奥坂遺跡No.82袋状土壙出土の貝・魚・鳥類遺体について	485
第6章 新屋敷古墳	
第1節 はじめに	501
第2節 立地と調査前の概要	501
第3節 調査の概要	504
1. 墳丘と外部施設	504
2. 石室の掘形	504
3. 石室の構造	506
4. 遺物の出土状況	509
5. 出土遺物	511
6. 周溝内検出近世土壙墓	513
第4節 まとめ	514
付載 塚山古墳	
1. はじめに	523
2. 古墳の位置とその環境	523
3. 墳丘	526
4. 石室	526
5. 古墳南斜面採集の須恵器	526
6. 結語	527
図 目 次	
第1図 遺跡位置図	25
第2図 周辺の遺跡分布図 (1/50000)	27
第3図 天神坂遺跡発掘調査地点 (1/3000)	33
第4図 天神坂遺跡グリッド図 (1/1500)	34
第5図 奥坂遺跡発掘調査地点 (1/3000)	35
第6図 奥坂遺跡グリッド図 (1/1500)	36
第7図 No.2住居址出土遺物 (1/2.5)	43
第8図 天神坂遺跡周辺地形図	44
第9図 天神坂遺跡全体図 (1/400)	45・46

第 10 図	No.2 住居址 (1/80)・出土遺物 (1/2, 1/4).....	47
第 11 図	No.5 住居址 (1/80)・出土遺物 (1/4)	49
第 12 図	No.7・8 住居址 (1/80)	50
第 13 図	No.7 住居址出土遺物 (1/4).....	51
第 14 図	No.8 住居址出土遺物 (1/4).....	52
第 15 図	No.9 住居址 (1/80)	53
第 16 図	No.9 住居址出土遺物 (1) (1/2, 1/4).....	54
第 17 図	No.9 住居址出土遺物 (2) (1/3, 1/4).....	55
第 18 図	No.11 土壙 (1/30)・出土遺物 (1/4)	56
第 19 図	No.10 土壙 (1/30)	56
第 20 図	No.10 土壙出土遺物 (1/4).....	57
第 21 図	No.10 土壙周辺出土遺物 (1/4).....	57
第 22 図	No.18~23 遺構 (1/200)・出土遺物 (1/2, 1/4)	58
第 23 図	No.3 住居址 (1/80)・出土遺物 (1/4)	60
第 24 図	No.4・14 住居址 (1/80)	61
第 25 図	No.4・14 住居址出土遺物 (1/4).....	62
第 26 図	No.6・12 住居址 (1/80)・出土遺物 (1/4)	64
第 27 図	No.1 住居址 (1/80)・出土遺物 (1) (1/1, 1/4)	65
第 28 図	No.1 住居址出土遺物 (2) (1/2, 1/4).....	66
第 29 図	No.24 住居址 (1/80)・出土遺物 (1/1)	67
第 30 図	No.15 土壙 (1/30)・出土遺物 (1/4)	69
第 31 図	No.17 土壙 (1/30)・出土遺物 (1/4)	70
第 32 図	No.13 大内田廃寺跡 (1/200).....	72
第 33 図	No.13 大内田廃寺跡 (1/80)	73・74
第 34 図	出土遺物 (1) 軒丸瓦 (1/4).....	75
第 35 図	出土遺物 (2) 軒丸瓦 (1/5).....	76
第 36 図	出土遺物 (3) 軒平瓦 (1/5).....	76
第 37 図	出土遺物 (4) 軒平瓦 (1/5).....	77
第 38 図	出土遺物 (5) 軒平瓦 (1/5).....	78
第 39 図	出土遺物 (6) 軒平瓦 (1/5).....	79
第 40 図	出土遺物 (7) 軒平瓦 (1/5).....	80
第 41 図	出土遺物 (8) 軒平瓦 (1/5).....	81

第 42 図 出土遺物 (9) 穏斗瓦 (1/5)	82
第 43 図 出土遺物 (10) 平瓦	83
第 44 図 出土遺物 (11) 平瓦	84
第 45 図 出土遺物 (12) 平瓦	85
第 46 図 出土遺物 (13) 平瓦	86
第 47 図 出土遺物 (14) 平瓦	87
第 48 図 出土遺物 (15) 丸瓦	88
第 49 図 出土遺物 (16) 丸瓦	89
第 50 図 出土遺物 (17) 丸瓦	90
第 51 図 出土遺物 (18) 丸瓦	91
第 52 図 出土遺物 (19) 平瓦 (1/5)	92
第 53 図 出土遺物 (20) 平瓦線刻 (1/2)	93
第 54 図 出土遺物 (21) (1/4)	95
第 55 図 出土遺物 (22) (1/3)	96
第 56 図 出土遺物 (23) (1/3)	97
第 57 図 №13大内田廃寺東斜面出土遺物 (1/4)	97
第 58 図 計測点模式図	98
第 59 図 釘分類図	98
第 60 図 №16土壤 (1/30)・出土遺物 (1/4)	117
第 61 図 時期別住居址分布図	119
第 62 図 古代末～中世以降の遺構分布図	121
第 63 図 №32住居址 (1/80)・出土遺物 (1/4)	126
第 64 図 №49住居址 (1/80)・出土遺物 (1/2, 1/4)	127
第 65 図 №66住居址 (1/80)	128
第 66 図 №66住居址出土遺物 (1) (1/4)	129
第 67 図 №66住居址出土遺物 (2) (1/4)	130
第 68 図 №66住居址出土遺物 (3) (1/2, 1/4)	131
第 69 図 №66住居址出土遺物 (4) (1/4)	132
第 70 図 №123住居址 (1/80)・出土遺物 (1/4)	134
第 71 図 №87住居址 (1/80)・出土遺物 (1/4)	135
第 72 図 №77建物 (1/80)・出土遺物 (1/2, 1/4)	136
第 73 図 №69建物 (1/80)	137

第 74 図 №69建物出土遺物 (1/4).....	137
第 75 図 №143建物 (1/80)・出土遺物 (1/4).....	138
第 76 図 №76建物 (1/80)	139
第 77 図 №126溝状土壤 (1/30).....	140
第 78 図 №126溝状土壤出土遺物 (1/2, 1/4).....	141
第 79 図 №68・129土壤 (1/30).....	142
第 80 図 №68土壤出土遺物 (1/4).....	143
第 81 図 №74土壤 (1/30)・出土遺物 (1/4)	144
第 82 図 №73土壤 (1/30)・出土遺物 (1/4)	144
第 83 図 №130土壤 (1/30).....	145
第 84 図 №71土壤 (1/30)・出土遺物 (1/4)	145
第 85 図 №70段状遺構 (1/80)	146
第 86 図 №70段状遺構出土遺物 (1/2).....	146
第 87 図 表採・柱穴内出土遺物 (1/2, 1/4)	147
第 88 図 №95住居址 (1/80)・出土遺物 (1/4)	148
第 89 図 №141住居址 (1/80)・出土遺物 (1/2).....	149
第 90 図 №94住居址 (1/80)・出土遺物 (1/4)	149
第 91 図 №1住居址 (1/80)	150
第 92 図 №1住居址出土遺物 (1/4).....	150
第 93 図 №13・120住居址 (1/80).....	152
第 94 図 №13・120住居址出土遺物 (1/4)	153
第 95 図 №39住居址 (1/80)・出土遺物 (1/2, 1/4)	154
第 96 図 №64住居址 (1/80)・出土遺物 (1/4)	155
第 97 図 №24住居址最終床面 (1/80)	156
第 98 図 №24住居址 (1/80)	157
第 99 図 №24住居址出土遺物 (1) (1/4)	159
第 100 図 №24住居址出土遺物 (2) (1/1, 1/2, 1/4)	160
第 101 図 №25住居址 (1/80)	162
第 102 図 №25A住居址床面・柱穴出土遺物 (1/3, 1/4)	164
第 103 図 №25B住居址出土遺物 (1/4)	166
第 104 図 №25住居址埋土出土遺物 (1) (1/4)	167
第 105 図 №25住居址埋土出土遺物 (2) (1/4)	168

第 106 図	No.101・150住居址 (1/80)・出土遺物 (1/4)	169
第 107 図	No.34住居址 (1/80)	170
第 108 図	No.34住居址出土遺物 (1/4).....	170
第 109 図	No.28建物 (1/80)	171
第 110 図	No.93建物 (1/80)	172
第 111 図	No.93建物出土遺物 (1/2).....	172
第 112 図	No.38建物 (1/80)	173
第 113 図	No.53建物 (1/80)	174
第 114 図	No.119土壙 (1/30).....	175
第 115 図	No.119土壙出土遺物 (1) (1/4).....	176
第 116 図	No.119土壙出土遺物 (2) (1/4).....	177
第 117 図	No.119土壙出土遺物 (3) (1/4).....	178
第 118 図	No.112土壙 (1/30)・出土遺物 (1/4).....	180
第 119 図	No.8 土壙 (1/30)・出土遺物 (1/4)	180
第 120 図	No.98土壙 (1/30)・出土遺物 (1/4)	181
第 121 図	No.9 土壙 (1/30)・出土遺物 (1/4)	181
第 122 図	No.21住居址 (1/80)	182
第 123 図	No.35土壙 (1/30)・出土遺物 (1/4)	182
第 124 図	No.113土壙 (1/30)・出土遺物 (1/4)	183
第 125 図	No.114土壙 (1/30)・出土遺物 (1/4)	184
第 126 図	No.115土壙 (1/30)・出土遺物 (1/4)	185
第 127 図	No.118土壙 (1/30)・出土遺物 (1/4)	186
第 128 図	No.11 土壙 (1/30)・出土遺物 (1/4)	187
第 129 図	No.12溝 (1/80)	188
第 130 図	No.15溝 (1/80)・出土遺物 (1/4)	188
第 131 図	No.104溝 (1/80)・出土遺物 (1/4)	189
第 132 図	No.135溝 (1/100)・出土遺物 (1/4)	190
第 133 図	No.17住居址 (1/80)	191
第 134 図	No.17住居址出土遺物 (1/2, 1/3, 1/4).....	192
第 135 図	No.18住居址 (1/80)・出土遺物 (1/4)	193
第 136 図	No.3 住居址 (1/80)	194
第 137 図	No.3 住居址出土遺物 (1/3, 1/4)	195

第 138 図	No.2・50・78住居址, No.67土壤 (1/80)	197
第 139 図	No.2・50・78住居址出土遺物 (1/4).....	198
第 140 図	No.23住居址 (1/80)	199
第 141 図	No.23住居址出土遺物 (1/2, 1/4)	200
第 142 図	No.36・37住居址 (1/80)	202
第 143 図	No.37住居址 (1/80)	203
第 144 図	No.37住居址 (1/160)・出土遺物 (1/2, 1/4)	204
第 145 図	No.36住居址 (1/160).....	205
第 146 図	No.36住居址出土遺物 (1/2, 1/4)	206
第 147 図	No.22住居址 (1/80)・出土遺物 (1/4)	207
第 148 図	No.62住居址 (1/80)	208
第 149 図	No.62住居址出土遺物 (1/4).....	209
第 150 図	No.80住居址 (1/80)・出土遺物 (1/4)	210
第 151 図	No.20住居址 (1/80)	211
第 152 図	No.20住居址出土遺物 (1/3, 1/4)	212
第 153 図	No.4 住居址 (1/80)	213
第 154 図	No.4 住居址変遷図 (1/160).....	215
第 155 図	No.4 住居址出土遺物 (1) (1/4)	217
第 156 図	No.4 住居址出土遺物 (2) (1/4)	218
第 157 図	No.4 住居址出土遺物 (3) (1/4)	219
第 158 図	No.4 住居址出土遺物 (4) (1/4)	220
第 159 図	No.4 住居址出土遺物 (5) (1/4)	221
第 160 図	No.4 住居址出土遺物 (6) (1/4)	222
第 161 図	No.4 住居址出土遺物 (7) (1/4)	223
第 162 図	No.4 住居址出土遺物 (8) (1/1, 1/2, 1/3, 1/4).....	224
第 163 図	No.16土壤 (1/30)・出土遺物 (1/4)	225
第 164 図	No.111土壤 (1/30).....	226
第 165 図	No.111土壤出土遺物 (1/4)	226
第 166 図	No.127土壤 (1/30)・出土遺物 (1/4).....	227
第 167 図	No.56土壤 (1/30)	228
第 168 図	No.56土壤出土遺物 (1/4).....	228
第 169 図	No.59土壤 (1/30)・出土遺物 (1/4)	229

第170図	No.136土壤(1/30)・出土遺物(1/4).....	229
第171図	No.26土壤(1/30)	230
第172図	No.26土壤出土遺物(1/4).....	230
第173図	No.100土壤(1/30)・出土遺物(1/4).....	231
第174図	No.67土壤(1/30)・出土遺物(1/4)	232
第175図	No.6土壤(1/30)・出土遺物(1/4)	232
第176図	No.147土壤(1/30)・出土遺物(1/4).....	233
第177図	No.128土壤(1/30).....	234
第178図	No.131土壤(1/30).....	234
第179図	No.57・58土壤(1/30)	235
第180図	No.57土壤出土遺物(1/4).....	235
第181図	No.146袋状土壤(1/30).....	236
第182図	No.146袋状土壤出土遺物(1/4)	236
第183図	No.44袋状土壤(1/30)・出土遺物(1/4).....	237
第184図	No.91袋状土壤(1/30)	239
第185図	No.91袋状土壤出土遺物(1/4).....	240
第186図	No.148袋状土壤(1/30).....	241
第187図	No.48袋状土壤(1/30)	241
第188図	No.48袋状土壤出土遺物(1/4).....	242
第189図	No.145袋状土壤(1/30)・出土遺物(1/4).....	243
第190図	No.5袋状土壤(1/30)	244
第191図	No.5袋状土壤出土遺物(1)(1/4)	245
第192図	No.5袋状土壤出土遺物(2)(1/4)	246
第193図	No.102袋状土壤(1/30).....	247
第194図	No.102袋状土壤出土遺物(1/4)	248
第195図	No.138袋状土壤(1/30).....	249
第196図	No.138袋状土壤出土遺物(1)(1/4)	251
第197図	No.138袋状土壤出土遺物(2)(1/4)	252
第198図	No.138袋状土壤出土遺物(3)(1/4)	253
第199図	No.138袋状土壤出土遺物(4)(1/3, 1/4)	254
第200図	No.81袋状土壤(1/30)	255
第201図	No.81袋状土壤出土遺物(1)(1/4)	257

第 202 図 №81袋状土壙出土遺物 (2) (1/4)	258
第 203 図 №10袋状土壙 (1/30)	259
第 204 図 №10袋状土壙出土遺物 (1) (1/4)	260
第 205 図 №10袋状土壙出土遺物 (2) (1/4)	261
第 206 図 №52袋状土壙 (1/30)	262
第 207 図 №52袋状土壙出土遺物 (1) (1/2)	262
第 208 図 №52袋状土壙出土遺物 (2) (1/3, 1/4)	263
第 209 図 №109袋状土壙 (1/30)	264
第 210 図 №109袋状土壙出土遺物 (1) (1/4)	265
第 211 図 №109袋状土壙出土遺物 (2) (1/4)	266
第 212 図 №109袋状土壙出土遺物 (3) (1/4)	267
第 213 図 №109袋状土壙出土遺物 (4) (1/4)	268
第 214 図 №109袋状土壙出土遺物 (5) (1/4)	269
第 215 図 №7袋状土壙 (1/30)	270
第 216 図 №7袋状土壙出土遺物 (1) (1/4)	271
第 217 図 №7袋状土壙出土遺物 (2) (1/4)	272
第 218 図 №99袋状土壙 (1/30)	274
第 219 図 №99袋状土壙出土遺物 (1) (1/4)	275
第 220 図 №99袋状土壙出土遺物 (2) (1/4)	276
第 221 図 №99袋状土壙出土遺物 (3) (1/4)	277
第 222 図 №103袋状土壙 (1/30)	278
第 223 図 №103袋状土壙出土遺物 (1) (1/4)	279
第 224 図 №103袋状土壙出土遺物 (2) (1/4)	280
第 225 図 №108・116・117・122袋状土壙 (1/30)	282
第 226 図 №116・117袋状土壙出土遺物 (1/4)	283
第 227 図 №122袋状土壙出土遺物 (1/4)	283
第 228 図 №108袋状土壙出土遺物 (1/4)	283
第 229 図 №132袋状土壙 (1/30)	284
第 230 図 №132袋状土壙出土遺物 (1/4)	285
第 231 図 №140袋状土壙 (1/30)	286
第 232 図 №140袋状土壙出土遺物 (1) (1/4)	287
第 233 図 №140袋状土壙出土遺物 (2) (1/4)	288

第 234 図	No.140袋状土壙出土遺物 (3) (1/4).....	289
第 235 図	No.140袋状土壙出土遺物 (4) (1/4).....	290
第 236 図	No.140袋状土壙出土遺物 (5) (1/4).....	291
第 237 図	No.140袋状土壙出土遺物 (6) (1/4).....	292
第 238 図	No.140袋状土壙出土遺物 (7) (1/4).....	293
第 239 図	No.140袋状土壙出土遺物 (8) (1/4).....	294
第 240 図	No.140袋状土壙出土遺物 (9) (1/3, 1/4)	295
第 241 図	No.29・30住居址 (1) (1/80).....	296
第 242 図	No.29・30住居址 (2) (1/80).....	297
第 243 図	No.29住居址出土遺物 (1/4).....	299
第 244 図	No.30住居址出土遺物 (1/4).....	299
第 245 図	No.41住居址 (1/80)・出土遺物 (1/3, 1/4).....	300
第 246 図	No.45・46住居址 (1/80)	301
第 247 図	No.45・46・47住居址出土遺物 (1/3, 1/4)	302
第 248 図	No.46住居址覆土出土遺物 (1/4).....	303
第 249 図	No.47住居址 (1/80)	304
第 250 図	No.47住居址出土遺物 (1/4).....	305
第 251 図	No.55住居址 (1/80)・出土遺物 (1/4)	306
第 252 図	No.82袋状土壙 (1/30)	308
第 253 図	No.82袋状土壙出土遺物 (1) (1/4)	309
第 254 図	No.82袋状土壙出土遺物 (2) (1/4)	310
第 255 図	No.82袋状土壙出土遺物 (3) (1/4)	311
第 256 図	No.82袋状土壙出土遺物 (4) (1/4)	312
第 257 図	No.82袋状土壙出土遺物 (5) (1/2, 1/4)	313
第 258 図	No.72建物 (1/80)・出土遺物 (1/4)	314
第 259 図	No.124建物 (1/80)・出土遺物 (1/4)	315
第 260 図	No.63建物 (1/80)・出土遺物 (1/4)	316
第 261 図	No.105建物 (1/80).....	316
第 262 図	No.40溝 (1/100, 1/50)・出土遺物 (1/4).....	317
第 263 図	No.19溝 (1/200)・埋土出土遺物 (1/4)	318
第 264 図	No.89集石遺構 (1/50)・出土遺物 (1/4)	320
第 265 図	No.33段状遺構, No.139・142溝 (1/200)・No.142溝出土遺物 (1/4)	321

第 266 図	No.85・86・90・92段状遺構 (1/150)・出土遺物 (1/4).....	322
第 267 図	No.88段状遺構 (1/80)	323
第 268 図	No.125土壤 (1/30).....	324
第 269 図	No.14土壤 (1/30)	325
第 270 図	No.54土壤 (1/30)	326
第 271 図	No.65土壤 (1/30)	326
第 272 図	No.106土壤 (1/30).....	327
第 273 図	No.107土壤 (1/30).....	327
第 274 図	No.137土壤 (1/30).....	327
第 275 図	No.60建物 (1/80)	328
第 276 図	No.27・61建物 (1/80)	328
第 277 図	No.153・154住居址 (1/80)	329
第 278 図	No.153住居址出土遺物 (1/4)	330
第 279 図	No.154住居址出土遺物 (1/4)	330
第 280 図	No.156住居址 (1/80).....	332
第 281 図	No.156住居址出土遺物 (1/4)	333
第 282 図	No.155住居址 (1/80).....	335
第 283 図	No.155住居址変遷図 (1/120)	336
第 284 図	No.155住居址出土遺物 (1) (1/4).....	337
第 285 図	No.155住居址出土遺物 (2) (1/4).....	338
第 286 図	No.152住居址 (1/80).....	340
第 287 図	No.151住居址 (1/80).....	341
第 288 図	No.151住居址出土遺物 (1/4)	341
第 289 図	No.159建物 (1/80).....	342
第 290 図	No.159建物出土遺物 (1/4)	342
第 291 図	No.158袋状土壤 (1/30).....	344
第 292 図	No.158袋状土壤出土遺物 (1/4)	344
第 293 図	No.160土器溜り出土遺物 (1) (1/4).....	346
第 294 図	No.160土器溜り出土遺物 (2) (1/4).....	347
第 295 図	No.160土器溜り出土遺物 (3) (1/4).....	348
第 296 図	No.160土器溜り出土遺物 (4) (1/4).....	349
第 297 図	No.160土器溜り出土遺物 (5) (1/4).....	350

第 298 図 №160土器溜り出土遺物（6）(1/4).....	351
第 299 図 №157溝（1/80）・出土遺物（1/4).....	352
第 300 図 奥坂遺跡遺構分布図.....	362
第 301 図 奥・中・Ⅲ期遺構分布図.....	364
第 302 図 奥・後・I, II 期遺構分布図.....	366
第 303 図 奥・後・Ⅲ期遺構分布図.....	368
第 304 図 奥・後・IV 期遺構分布図.....	369
第 305 図 奥・古・I, II 期遺構分布図.....	371
第 306 図 奥坂遺跡袋状土壙分布図.....	373
第 307 図 奥坂遺跡中世遺構分布図.....	374
第 308 図 火災を受けた住居址と柱穴.....	376
第 309 図 奥坂遺跡遺構全体図（1/400).....	表 3 折込み
第 310 図 新屋敷古墳調査前測量図（1/150).....	502
第 311 図 新屋敷古墳調査後測量図・近世土壙墓配置図（1/150).....	503
第 312 図 新屋敷古墳墳丘断面図（1/60)	505
第 313 図 新屋敷古墳石室実測図（1/60)	507
第 314 図 遺物出土状況（1/40)	309
第 315 図 新屋敷古墳出土遺物（1/3, 1/4)	510
第 316 図 新屋敷古墳周溝内検出近世土壙墓（1/30)	512
第 317 図 新屋敷古墳周溝内出土遺物（1/4)	513
第 318 図 新屋敷古墳周溝内検出近世土壙墓出土遺物（1/2, 1/4)	513
第 319 図 早島丘陵における塚山古墳関連遺跡分布図（1/50000).....	523
第 320 図 塚山古墳墳丘実測図（1/150).....	524
第 321 図 塚山古墳石室実測図（1/50)	525
第 322 図 塚山古墳南斜面採集の須恵器（1/4)	526

図 版 目 次

卷頭図版 1 奥坂遺跡 A 地区全景

卷頭図版 2 1. 大内田庵寺瓦出土状況

2. 奥坂 №81 袋状土壙土層断面

図版 1 岡山県総合流通センター第 2 期工事用地航空写真

図版 2 1. 天神坂遺跡見学会

2. 奥坂遺跡見学会

図版3 1. 天神坂遺跡トレンチ調査（南西より）

2. 天神坂遺跡トレンチ調査（西より）

図版4 1. №2 A住居址（南より）

2. №2 A・B住居址（北東より）

図版5 1. №9 A住居址火災状況（西より）

2. №9 A住居址（北より）

図版6 1. №9 A・B住居址（北より）

2. №7・8住居址（東より）

図版7 1. №18段状遺構（西北西より）

2. №18段状遺構（南西より）

図版8 1. №5住居址（東より）

2. №6住居址（東北東より）

図版9 1. №3住居址（南より）

2. №3住居址中央穴周辺（南より）

図版10 1. №4・14住居址（東より）

2. №4・14住居址（東より）

図版11 1. №1A住居址（南東より）

2. №1住居址（南東より）

図版12 1. 天神坂遺跡全景（南より）

2. 天神坂遺跡全景（北より）

図版13 1. №15土壙墓（南より）

2. №16土壙（南より）

図版14 1. №13寺跡（東より）

2. №13寺跡埋没状況（西より）

図版15 1. №13寺跡（北東より）

図版16 1. №13寺跡瓦出土状況（南南東より）

2. №13寺跡瓦出土状況（南より）

図版17 1. №13寺跡礎石（北より）

2. №13寺跡礎石（東より）

図版18 1. №13寺跡遺物出土状況（北より）

2. №13寺跡遺物出土状況（南東より）

- 図版19 1. №13寺跡遺物出土状況（南南西より）
2. 調査終了後の天神坂遺跡（奥坂遺跡より）
- 図版20 天神坂遺跡出土遺物
- 図版21 №13寺跡出土遺物
- 図版22 №13寺跡・№15土壙墓出土遺物
- 図版23 №13寺跡出土鉄器
- 図版24 №13寺跡出土軒丸・軒平瓦
- 図版25 №13寺跡出土軒平瓦
- 図版26 №13寺跡出土軒平瓦
- 図版27 №13寺跡出土軒平瓦
- 図版28 №13寺跡出土軒平瓦
- 図版29 №13寺跡出土軒平瓦
- 図版30 №13寺跡出土軒平瓦
- 図版31 №13寺跡出土軒平瓦
- 図版32 №13寺跡出土軒平瓦
- 図版33 №13寺跡出土平瓦
- 図版34 №13寺跡出土平瓦
- 図版35 №13寺跡出土平瓦
- 図版36 №13寺跡出土平瓦
- 図版37 №13寺跡出土平瓦
- 図版38 №13寺跡出土平瓦
- 図版39 №13寺跡出土平瓦
- 図版40 №13寺跡出土熨斗瓦
- 図版41 №13寺跡出土丸瓦
- 図版42 №13寺跡出土丸瓦
- 図版43 №13寺跡出土丸瓦
- 図版44 1. 奥坂遺跡遠景（北西より）
2. 奥坂遺跡A地区全景（真上より）
- 図版45 1. №2・3・4住居址検出状況（東より）
2. 奥坂遺跡全景（東南東より）
- 図版46 1. №32住居址（南より）
2. №49住居址（南西より）

図版47 1. №66住居址（北より）
2. №123住居址（南南東より）

図版48 1. №87住居址（南西より）
2. №93建物（西より）

図版49 1. №77建物（東より）
2. №76建物（西より）

図版50 1. №69建物（東より）
2. №126溝状土壙（南より）

図版51 1. №94住居址（東より）
2. №95住居址（北西より）

図版52 1. №1住居址（北より）
2. №1住居址（北より）

図版53 1. №13・120住居址（南西より）
2. №13・120住居址（南西より）

図版54 1. №39住居址（西南西より）
2. №62住居址（南西より）

図版55 1. №64住居址（南より）
2. №64住居址遺物出土状況（南東より）

図版56 1. №24住居址（南南西より）
2. №24住居址（南南西より）

図版57 1. №24住居址火災状況（北北西より）
2. №24住居址柱穴切り合い状況（西より）

図版58 1. №25A住居址（南東より）
2. №25A住居址（南東より）

図版59 1. №25A・B・C住居址（南東より）
2. №25A・B・C住居址（南東より）

図版60 1. №25A住居址遺物出土状況（東より）
2. №25B住居址中央穴内壺（北より）

図版61 1. №101・150住居址（北より）
2. №34住居址（東より）

図版62 1. №17住居址火災状況（南南西より）
2. №17住居址（南南西より）

- 図版63 1. №.3 住居址火災状況（南南西より）
2. №.3 住居址（南南西より）
- 図版64 1. №.2・50住居址（北北東より）
2. №.2・50住居址切り合い状況（西北西より）
- 図版65 1. №.23住居址（南南西より）
2. №.23A・B住居址壁体溝の切り合い状況（西より）
- 図版66 1. №.37A住居址（南東より）
2. №.36・37住居址（北東より）
- 図版67 1. №.22住居址火災状況（東より）
2. №.21・22住居址（東より）
- 図版68 1. №.80A住居址火災状況（南より）
2. №.80住居址（南より）
- 図版69 1. №.20住居址（南より）
2. №.20住居址（東より）
- 図版70 1. №.4 住居址（南より）
2. №.4 住居址（南より）
- 図版71 1. №.112土壌（南より）
2. №.8土壌（北より）
- 図版72 1. №.140袋状土壌（西北西より）
2. №.48袋状土壌（東より）
- 図版73 1. №.91袋状土壌（東より）
2. №.5袋状土壌（西より）
- 図版74 1. №.10袋状土壌（西より）
2. №.52袋状土壌（北東より）
- 図版75 1. №.7袋状土壌（北東より）
2. №.145・146袋状土壌（南南西より）
- 図版76 1. №.109袋状土壌遺物出土状況（北東より）
2. №.109袋状土壌貝類出土状況（南西より）
- 図版77 1. №.103袋状土壌（北東より）
2. №.82袋状土壌（南より）
- 図版78 1. №.46住居址柱穴切り合い状況（東より）
2. №.46住居址土層断面（西より）

- 図版79 1. №29住居址（東より）
2. №30住居址（東より）
- 図版80 1. №45・46・47住居址（東より）
2. №47住居址（南南西より）
- 図版81 1. №55住居址（北北東より）
2. №42住居址（南南西より）
- 図版82 1. №38建物（南西より）
2. №159建物（東より）
- 図版83 1. №151住居址（西より）
2. №152住居址（北北西より）
- 図版84 1. №155住居址（北西より）
2. №156住居址土層断面（東より）
- 図版85 1. №156住居址土層断面（東より）
2. №156住居址（西より）
- 図版86 1. 奥坂遺跡B地区遺構全景（東より）
2. 奥坂遺跡B地区遺構全景（南東より）
- 図版87 1. №157溝（東より）
2. №19溝（東より）
- 図版88 奥坂遺跡出土石器(1)
- 図版89 奥坂遺跡出土石器(2)
- 図版90 奥坂遺跡出土石器(3)
- 図版91 奥坂遺跡出土鉄器
- 図版92 奥坂弥生時代中期Ⅲ
- 図版93 奥坂弥生時代後期Ⅰ・Ⅱ
- 図版94 奥坂弥生時代後期Ⅲ・Ⅳ
- 図版95 奥坂弥生時代後期Ⅲ・Ⅳ、古・Ⅱ
- 図版96 奥坂弥生時代後期Ⅳ
- 図版97 奥坂弥生時代後期Ⅳ
- 図版98 奥坂弥生時代後期Ⅳ
- 図版99 奥坂弥生時代後期Ⅳ
- 図版100 奥坂弥生時代後期Ⅳ
- 図版101 奥坂弥生時代後期Ⅳ

- 図版102 奥坂弥生時代後期IV (No.140袋状土壙)
- 図版103 奥坂古墳時代前期I
- 図版104 奥坂古墳時代前期I (No.82袋状土壙)
- 図版105 奥坂古墳時代前期II・中世
- 図版106 袋状土壙出土遺物
- 図版107 1. 新屋敷古墳調査前天井石配置状況（南東から）
2. 新屋敷古墳調査前石室正面状況（南東から）
- 図版108 1. 新屋敷古墳調査時全景（北西から）
2. 新屋敷古墳調査時全景（南西から）
- 図版109 1. 新屋敷古墳石室掘形土層断面（南東から）
2. 新屋敷古墳周溝部土層断面（北東から）
- 図版110 1. 新屋敷古墳天井石除去後石室全景（南東から）
2. 新屋敷古墳天井石除去後石室全景（南西から）
- 図版111 1. 新屋敷古墳石室掘形全景（南東から）
2. 新屋敷古墳調査後全景（南西から）
- 図版112 1. 新屋敷古墳石室内遺物出土状況（南東から）
2. 新屋敷古墳石室内遺物出土状況（南東から）
- 図版113 1. 新屋敷古墳周溝内検出近世土壙墓
2. 新屋敷古墳周溝内検出近世土壙墓配置状況（北西から）
- 図版114 新屋敷古墳出土遺物と周溝内検出近世土壙墓出土遺物

表 目 次

表 - 1 編年対比表	42
表 - 2 天神坂遺跡遺構一覧表	45
表 - 3 天神坂遺跡竪穴式住居址一覧表	68
表 - 4 平・丸瓦凹面布目密度表	93
表 - 5 鉄釘計測値一覧表	98
表 - 6 軒平瓦計測値一覧表	99
表 - 7 軒平瓦一覧表	99
表 - 8 燐斗瓦（堤瓦）一覧表	100
表 - 9 平瓦一覧表	101～108
表 - 10 丸瓦一覧表	109～116

表 - 11 奥坂遺跡遺構一覧表	353
表 - 12 奥坂遺跡竪穴式住居址一覧表	354～357
表 - 13 奥坂遺跡袋状土墳一覧表	358
表 - 14 奥坂遺跡建物一覧表	358
表 - 15 天神坂・奥坂遺跡石器一覧表	359・360
表 - 16 天神坂・奥坂遺跡・新屋敷古墳金属器一覧表	361

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査の契機と経過

岡山県総合流通センターは、瀬戸大橋の架橋、山陽自動車道の開通に備えて、流通機構を再配置して物流拠点の整備をすべく、昭和49年岡山県において基本方針が定められた。続いて、昭和53年9月に同センターの建設位置を岡山市大内田（吉備地区）と都窪郡早島町矢尾（早島地区）に決定する「建設基本構想」が発表された。

一方、岡山県教育委員会は岡山県開発公社からの依頼を受け、昭和53年7月建設予定地内の埋蔵文化財の分布調査を実施した。調査は岡山市教育委員会文化課の全面的協力によって実行し、次の遺跡を確認した。

1. 塚山古墳、横穴式石室
2. 大内田祭祀遺跡、近世の祭祀遺跡
3. 大内田貝塚、縄文時代貝塚
4. 新屋敷古墳（早島町内）、横穴式石室

この結果については、岡山県商工部に次のとおり申し入れた。

資料

岡山県総合流通センターの建設に伴う埋蔵文化財の保護・保存について
のことについて昭和53年度において建設予定地内の埋蔵文化財の現地踏査を行った結果、別添の4遺跡を確認した。しかし現地は樹木が繁茂し、詳細な分布調査が行えなかった地区もあり、また埋蔵文化財の性格上、立木伐開後新たに発見されるもの、あるいは工事中に発見されるものなど不測の事態も考えられるので、文化財保護に関する覚書を締結のうえ、次の事項を遵守し、埋蔵文化財の保護・保存に努められたい。

1. 建設予定地は樹木の繁茂等により詳細な分布調査が行えなかった地区もあり、工事計画にそって、立木伐開後、今後とも分布調査が必要である。
2. 建設予定地内に所在する遺跡については、設計等により保存すること。
3. やむなく建設予定地にかかる遺跡については、事前に十分な記録保存のための発掘調査を実施すること。

調査の経緯と経過

流通センター内所在埋蔵文化財一覧表

遺跡名	所在地	概要
① 塚山古墳	岡山市大内田	径10mの墳丘をもつ開口した横穴式石室墳
② 大内田祭祀遺跡	岡山市大内田	近世の祭祀遺跡と推定される
③ 大内田貝塚	岡山市大内田	進入路部分に所在する縄文時代後期の貝塚
④ 新屋敷古墳	都窪郡早島町	径10mの墳丘をもつ開口した横穴式石室墳

岡山県商工部へ申し入れた結果は、以下のようである。

- (1) 塚山古墳は、公園綠地として保存する。
- (2) 大内田祭祀遺跡についても保存する。
- (3) 新屋敷古墳については、設計上やむなく発掘調査を実施する。
- (4) 大内田貝塚については、岡山県総合流通センターの進入路部分となるため、道路計画の一部変更を行って貝塚を現状で保存する。

昭和56年3月岡山県遺跡保護調査団との連絡会議の席上、当時大規模に造成を進めていた吉備地区が話題となった。

昭和56年4月2日、文化課職員2名と岡山市教育委員会職員が現地調査を行った結果、崖面に袋状土壙や住居址の断面を確認した。奥坂遺跡A地区の発見である。このため、4月9日に改めて数名の調査員が全域を踏査し、天神坂遺跡、奥坂遺跡A・B地区の3遺跡の確認に至った。しかし、遺跡の広がりについては不明な部分があり、4月13日～15日にバックホーを使用して再度確認調査を実施した。この結果、3か所で約17,000m²と推定される遺跡を把握したのである。これは従来の知見からすれば、まさに青天の霹靂といった遺跡の発見であった。

このため、岡山県商工部商政課流通対策室ならびに岡山県土地開発公社と急遽協議を進め、工事中発見であるが一方では岡山県政の重点でもあるので、すでに出発していた受託事業の内、旭川放水路（百間川）改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書作成担当から1名、本州四国連絡橋陸上ルート建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の現場担当から1名の職員計2名をさき、さらに埋蔵文化財係長も現場へ派遣する変則的な調査体制で臨むこととなり、4月23日から発掘調査に入ったのである。

(河本 清)

第2節 調査日誌抄

昭和56年度

- 4月2日 岡山県総合流通センター造成工事現場を踏査し、奥坂遺跡を発見する。
- 4月9日 岡山県総合流通センター吉備地区建設予定地全域の遺跡分布調査を実施する。
- 4月14日 ブルドーザーで敷設された道路崖面に住居址を検出し、天神坂遺跡を発見する。
- 4月15日 天神坂遺跡の遺構確認調査を実施する。
- 4月22日 天神坂遺跡へ発掘調査に必要な器材を搬入する。
天神坂遺跡の表土際去作業を開始して、全面発掘調査に着手する。
- 4月23日 作業員の参加を得て、道具小屋や休憩小屋の設営を行う。
ベルトコンベヤーを使用して、表土除去作業と遺構検出作業を開始する。
- 5月1日 表土除去作業や遺構検出作業に並行して、検出した住居址の調査に着手する。
- 5月13日 奥坂遺跡の遺構確認調査を開始する。
- 5月14日 軒丸瓦や軒平瓦が多量に出土し、寺院跡を検出する。
- 5月15日 奥坂遺跡の遺構確認調査に継続して、表土除去作業を開始する。
- 5月21日 都窪郡早島町議会議員団来跡。
- 5月31日 天神坂遺跡の現地説明会を、午前10時と午後2時に開催する。約300名にもおよぶ見学者が来跡する。
- 6月11日 都窪郡早島町教育委員会団体約30名来跡。
- 6月16日 地形測量だけを残して、天神坂遺跡の発掘調査がほぼ終了する。
- 6月17日 天神坂遺跡から奥坂遺跡へ、発掘調査に必要な器材を運搬する。
- 6月19日 奥坂遺跡A地区の表土除去作業と遺構検出作業を開始する。
- 7月1日 天神坂遺跡の地形測量も完了し、すべての作業員が奥坂遺跡の発掘調査を行う。
- 7月3日 表土除去作業や遺構検出作業に並行して、検出した遺構の調査に着手する。
- 7月21日 遺跡の面積が広くて遺構が密集して存在するから、職員の応援を要請する。
- 7月31日 奥坂遺跡A地区全体の表土除去作業と遺構検出作業が終了し、約150名にもおよぶ多くの遺構を検出する。
都窪郡早島中学校栗尾先生他生徒5名来跡。
- 8月1日 奥坂遺跡A地区の北東に位置する丘陵尾根上の調査を開始する。
- 8月6日 奥坂遺跡A地区の北東に位置する丘陵尾根上の調査が終了する。
- 8月17日 岡山市議会議員団来跡。

調査の経緯と経過

- 8月20日 岡山県文化財保護審議会委員の鎌木義昌氏と水内昌康氏来跡。
- 8月30日 奥坂遺跡A地区の現地説明会を、午前10時と午後2時に開催する。約600名にもおよぶ見学者が来跡する。
- 9月4日 9月末日をもって奥坂遺跡A地区の発掘調査を完了させる予定のもとに、応援体制を強化するとともに、具体的な計画を検討する。
- 9月11日 今後は雨が降って現場作業ができない日を休日にし、日曜日や土曜日の午後は現場作業をすることに決定する。
- 9月16日 奥坂遺跡B地区の表土除去作業を開始する。
- 9月26日 強風で倒壊した写真撮影用タワーが職員を直撃し、救急車に運ばれて入院する。
- 9月28日 岡山県文化財保護審議会委員の鎌木義昌氏と水内昌康氏来跡。
- 9月30日 奥坂遺跡A地区から奥坂遺跡B地区へ、発掘調査に必要な器材を運搬する。
- 10月4日 奥坂遺跡B地区の表土除去作業と遺構検出作業を開始する。
- 10月7日 奥坂遺跡A地区の発掘調査が完了する。
- 10月27日 緑地公園で現状保存した塚山古墳の地形測量と石室の実測を行う。
- 10月28日 奥坂遺跡B地区の発掘調査が完了する。
- 10月30日 発掘調査で使用した器材を搬出して、岡山県総合流通センターの建設に伴って発掘調査を実施した、天神坂遺跡と奥坂遺跡のすべての現場作業を完了する。

昭和57年度

- 4月1日 天神坂遺跡と奥坂遺跡の報告書作成のために、遺物の復元と整理を開始する。
- 6月9日 岡山県総合流通センター早島地区造成工事に伴う埋蔵文化財打合せ会を開催する。
- 8月2日 発掘調査に必要な器材を搬入して、新屋敷古墳の調査を開始する。
- 8月12日 新屋敷古墳の天井石除去作業に継続して、石室内の発掘調査を開始する。
- 8月23日 新屋敷古墳の周溝検出作業を行い、近世土壙墓6基を確認する。
- 8月31日 新屋敷古墳の発掘調査を完了して、散布地A地点の遺構確認調査を開始する。
- 9月20日 散布地A地点の遺構確認調査を終了し、散布地B地点の遺構確認調査を開始する。
- 10月6日 散布地B地点の遺構確認調査を終了する。
- 10月7日 岡山県総合流通センター早島地区建設予定地全域の遺跡確認調査を開始する。
- 10月19日 岡山県文化財保護審議会委員の鎌木義昌氏、近藤義郎氏、水内昌康氏来跡。
- 10月29日 岡山県総合流通センター早島地区建設予定地全域の遺跡確認調査を終了する。
- 10月30日 発掘調査で使用した器材を搬出して、早島地区の遺跡調査を完了する。
- 11月1日 岡山県総合流通センターの建設に伴って発掘調査を実施した、天神坂遺跡、奥坂遺跡、新屋敷古墳の報告書作成作業を開始する。

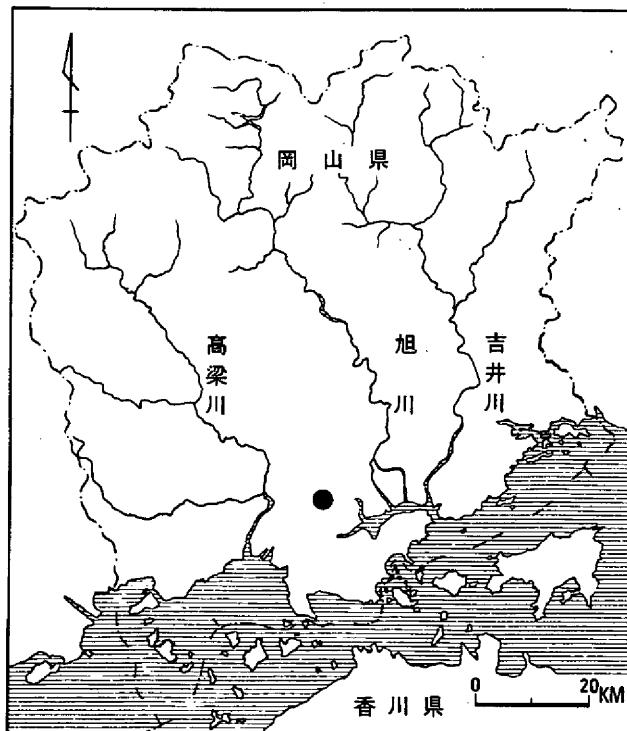
第2章 遺跡の環境

第1節 遺跡の地理的環境

岡山県総合流通センター建設に伴って発掘調査を実施した天神坂遺跡、奥坂遺跡、新屋敷古墳は、岡山と倉敷の市街地のほぼ中間に位置する花崗岩や粘板岩で形成された丘陵上に所在する。この丘陵は、岡山市、倉敷市、早島町が境界を接し、丘陵裾部のいたるところに住宅団地が建設されている。

丘陵の東方には、足守川が蛇行して流れる。北から西方に向かけては、丘陵を囲むように六間川が流れている。丘陵の南方には、江戸時代以降に本格的に形成された干拓地の広大な平野が展開する。

天神坂遺跡や奥坂遺跡で生活を営んでいた弥生時代から古墳時代にかけての時期には、足守



第1図 遺跡位置図

川流域に数条の旧河道や微高地が存在し、河口は現在の庭瀬や撫川の周辺であることが知られている（註1）。また、日本建築学会による「倉敷市の地盤」に掲載された倉敷市中庄松島北口地内の土壤柱状図を検討すると、当地域一帯にはベルト状のクリークが発達していたことが推察されるという（註2）。したがって、当時の海岸汀線は現在の県道岡山倉敷線に沿った部分で、天神坂遺跡、奥坂遺跡、新屋敷古墳の所在する丘陵は、瀬戸内海に面して存在する児島と同様に、島であったことがうかがわれる。

（福田）

第2節 遺跡の歴史的環境

天神坂遺跡や奥坂遺跡の所在する丘陵は、弥生時代から古墳時代にかけての時期には独立した孤島であると推定され、大規模な遺跡が存在する可能性は極めて少ないと考えられていた。この地域で遺跡の分布密度が濃いのは、丘陵の北方に位置する倉敷市矢部から岡山市川入に至る足守川流域で、旧河道の間に形成された微高地に集落遺跡が存在し、周囲の丘陵上に数多くの墳墓が確認されている。

縄文時代の遺跡として注目されるのは、丘陵の緩斜面や当時の海岸線と推定される丘陵裾部に所在する貝塚である。岡山市大内田の大内田貝塚（註3）は、丘陵上に所在する天神坂遺跡や奥坂遺跡の眼下に位置している。昭和23年に発掘調査が実施され、貝殻が層位的に堆積して中期以降の土器が出土している。倉敷市矢部の矢部貝塚（註4）と倉敷市西尾の西尾貝塚（註5）は、泥海性の貝殻が採集されている後期の遺跡である。

弥生時代になると足守川の沖積作用が進み、遺跡の数が急激に増加するとともに遺跡の規模も大きくなっている。奥坂遺跡の東方に位置する小丘陵裾部には、前期の貝塚として著名な高尾貝塚（註6）が所在する。昭和31年に小規模な発掘調査が実施され、前期でも古相を呈する土器が出土している。岡山市大内田関戸の関戸貝塚（註7）は、奥坂遺跡から足守川の右岸に向けて北東に張り出した舌状台地の先端に所在するヤマトシジミを主体にした貝塚である。上層からは中期の土器が出土し、下層からは木葉文を有する前期中葉の土器が発見されている。吉備中山と王墓山の中間に位置する微高地には、高田遺跡（註8）と新邸遺跡（註9）が古くから知られている。前者は昭和32年に発掘調査が実施され、前期末から中期初頭の土器が出土している。後者は昭和25年に発掘調査が実施され、中期中葉の土器が出土している。王墓山の前面に展開する足守川流域の平野には、藤ノ木遺跡、才楽遺跡、岩倉遺跡などが存在するが、主として弥生時代から古墳時代にかけて栄えた大規模な遺跡であるものの、実態は明らかでない。山陽新幹線と都市計画道路の建設に伴って発掘調査が実施された上東遺跡（註10）と川入遺跡（註11）は、岡山県を代表する大規模な複合遺跡である。上東遺跡は弥生時代後期の標識遺跡として考古学史的にも著名であり、川入遺跡では弥生時代以降の古代から中世にかけての遺構や遺物も数多く検出されている。

天神坂遺跡や奥坂遺跡のように、丘陵上や丘陵の緩斜面に所在する集落遺跡はほとんど知られていない。奥坂遺跡に近接した地点に坪井遺跡と坪井北遺跡が確認されているが、どちらも奥坂遺跡と連続したほぼ同時期の遺跡と推定される。倉敷市の矢部や山地周辺では、矢部寺田遺跡（註12）、矢部奥池遺跡、若宮神社東遺跡、山地遺跡、日差遺跡、日差山北遺跡などが確



1. 天神坂遺跡	26. 觀音下古墳群	51. 矢部貝塚	76. 江田山山麓古墳群
2. 奥坂遺跡	27. 妙仙童廃寺	52. 矢部奥池遺跡	77. 勝負山古墳群
3. 新屋敷古墳	28. 飯ノ山古墳群	53. 楊姿遺跡	78. 矢部古墳群
4. 塚山古墳	29. 魚石古墳群	54. 王墓山西の平古墳	79. 矢部大山谷古墳群
5. 塚山古墳群	30. 魚石古墳群	55. 王墓山法伝山古墳	80. 奥の池古墳群
6. 净泉寺裏山古墳群	31. 魚石古墳群	56. 王墓山西山古墳群	81. 琵琶池上古墳
7. 東粟坂古墳群	32. 石舟塚古墳	57. 王墓山向山古墳群	82. 日差庵寺
8. 西粟坂古墳群	33. 八徳庵寺	58. 王墓山半伎古墳群	83. 日差山城跡
9. 矢尾神社遺跡	34. 高麗庵寺	59. 日畠赤井廃寺	84. 日差山北遺跡
10. 大内田貝塚	35. 中山茶臼山古墳	60. 西尾貝塚	85. 日差山古墳群
11. 関戸貝塚	36. 如宝經塔下古墳	61. 王墓山女男岩遺跡	86. 日差遺跡
12. 高尾貝塚	37. 畏竜山神宮廃寺	62. 王墓山辻山田遺跡	87. 勝負ヶ池古墳
13. 坪井遺跡	38. 佐賀賀陽氏館跡	63. 王墓山赤井西古墳群	88. 二子堂屋敷遺跡
14. 坪井北遺跡	39. 高田遺跡	64. 王墓山赤井南古墳群	89. 二子古墳群
15. 塚口古墳群	40. 矢部南遺跡	65. 王墓山大池上古墳群	90. 砂原南北遺跡
16. 竹端古墳	41. 惣爪廃寺	66. 王墓山真宮古墳群	91. 砂原南遺跡
17. 三ツ塚古墳	42. 藤原ノ木遺跡	67. 王墓山東谷古墳群	92. 岩部奥池東遺跡
18. 天神溺遺跡	43. 新邸遺跡	68. 上東遺跡	93. 御堂奥遺跡
19. 尾上車山古墳	44. 柿梨堂遺跡	69. 荒神古墳	94. 二子御堂奥古窯址群
20. 矢藤治山古墳	45. 川入遺跡	70. 矢部能軒遺跡	95. 二子高鳥居居山古墳群
21. 八幡神社貝塚	46. 才美遺跡	71. 若宮神社東遺跡	96. 中袋遺跡
22. 向山山頂古墳群	47. 岩倉遺跡	72. 山地遺跡	97. ノートルダム清心学園北遺跡
23. 向山山麓古墳群	48. 離喰神社遺跡	73. 黒住古墳群	98. 才公山古墳群
24. 山神東古墳	49. 矢部廃寺	74. 高坪古墳	99. 東光庵寺
25. 觀音古墳	50. 矢部寺田遺跡	75. 江田古墳群	100. 三田庵寺

第2図 周辺の遺跡分布図(1/50000)

遺跡の環境

認されているが、市道の建設に伴って発掘調査が実施された矢部寺田遺跡で遺構が検出されているだけで、ほかの遺跡は土器片が採集された散布地で実態は不明である。

この足守川流域で特に注目すべき遺跡は、弥生時代後期末から古墳時代初頭の時期に属する墳墓群である。丘陵上に所在する楯築遺跡（註13）、女男岩遺跡（註14）、辻山田遺跡（註15）、鯉喰神社遺跡（註16）、甫崎墳墓群などで、特殊器台形土器や特殊壺形土器が採集されている。楯築遺跡は昭和51年から3次にわたって発掘調査が実施され、昭和57年に国指定の史跡となった。女男岩遺跡と辻山田遺跡は、昭和46年と昭和47年に宅地造成に伴って4次の発掘調査が実施され、弥生時代から古墳時代に移る過渡期の30基以上におよぶ土壙墓が検出された。なお、これらの墳墓群に近接した矢部南向遺跡（註17）では、集落跡から特殊器台形土器が廃棄された状態で出土している。

古墳時代の集落遺跡は弥生時代から継続して踏襲しているものが多く、丘陵上には多数の古墳が築造されている。それらの古墳のうちほとんどが横穴式石室を有する後期古墳で、王墓山一帯には約100基が確認され、東谷古墳群、真宮古墳群、大池上古墳群、赤井西古墳群、赤井南古墳群、半俵古墳群、向山古墳群、西山古墳群に分類されている（註18）。王墓山の後期古墳で代表的なものは、岡山県指定の史跡になっている王墓山古墳（赤井西古墳群1号）（註19）である。貝殻石灰岩製の組合せ家形石棺を有し、四仏四獸鏡や馬具とともに多量の須恵器が出土している（註20）。王墓山に所在する古墳群以外で倉敷市矢部周辺から倉敷市二子に至る丘陵上に確認されているものには、高坪古墳（註21）、江田古墳群、江田山山麓古墳群、勝負山古墳群、矢部古墳群、矢部大山谷古墳群、奥の池古墳群、琵琶池上古墳（註22）、日差山古墳群、二子古墳群、二子高鳥居山古墳群、才公山古墳群などがある。吉備中山の後期に属すると推定される古墳群には、塚口古墳群、三ツ塹古墳群、向山山頂古墳群、向山山麓古墳群、山神古墳群、東山古墳群などがあるが、保存状態が良好で大規模な横穴式石室を有する古墳は、吉備津神社境内に所在する大納言供養塔下古墳である（註23）。

ところで、岡山県総合流通センターの建設に伴って発掘調査を実施した新屋敷古墳の周辺には、王墓山や吉備中山の地域とは対照的に確認されている古墳が少ない。すなわち、倉敷市栗坂の丘陵尾根上に所在する3基、緑地公園内に現状保存した塚山古墳（註24）、すでに消滅して所在が不明である塚山古墳群（註25）、淨泉寺裏山古墳群の2基が知られているだけである。なお、これらの古墳はいずれも横穴式石室を有する後期古墳で、前半期に属するものは丹念に遺跡分布調査が行われたにもかかわらず存在しないのである。

天神坂遺跡、奥坂遺跡、新屋敷古墳の所在する岡山県総合流通センター建設予定地から見渡せる範囲内で、前半期に属する古墳が存在するのは吉備中山と王墓山周辺である。吉備中山には中山茶臼山古墳（註26）、尾上車山古墳（註27）、矢藤治山古墳（註28）が確認されている。

中山茶臼山古墳は吉備中山の丘陵頂部に位置する全長約150mの前方後円墳で、前方部を南に向けて構築されている。現在は宮内庁の管轄となっているが、吉備津神社には古墳の実測図と古墳から採集された埴輪片がおさめられている。尾上車山古墳は、岡山市尾上と東花尻の境の東西に張り出した丘陵上に位置する全長約140mの前方後円墳である。墳丘全体が畑になって耕作されているため、埴輪片が散在している。矢藤治山古墳は、岡山市東花尻と西花尻の境に位置する。矢藤治山山頂の尾根を利用して構築された全長約30mの前方後方墳で、前方部は南に向いている。この吉備中山に所在する3基の前方後円墳や前方後方墳は、水上交通に関与する集団の首長墓と考えられている（註29）。王墓山の周辺では法伝山古墳（註30）、西の平古墳（註31）、ひょうたん塚古墳（矢部古墳群17号）、黒住1号墳などが知られている。法伝山古墳は1辺が約40mの方墳で、円筒埴輪や形象埴輪が確認され、古式の須恵器が出土している。西の平古墳は墳丘全体の破壊が著しくて墳形が不明であるが、円筒埴輪や形象埴輪がまとまって採集されている。ひょうたん塚古墳は、全長約40mの小規模な前方後円墳である。黒住1号墳は、足守川の右岸に舌状に張り出した丘陵上に所在する小規模な前方後方墳である。

備前と備中の国境に接した足守川流域には、寺院跡と考えられている場所が比較的多く知られている。倉敷市の指定史跡である日畠赤井廃寺（註32）は、礎石列が確認されている白鳳時代の寺院跡である。奈良時代の寺院跡は、惣爪廃寺（註33）、矢部廃寺（註34）、柿梨堂遺跡（註35）、三田廃寺（註36）などのほかに、現在の吉備津彦神社の境内に近接して、神宮廃寺（註37）や神力廃寺（註38）も知られている。特に惣爪廃寺と矢部廃寺は、東西方向に通じる旧山陽道に面して所在するのである。平安時代になると天神坂遺跡で検出したNo.13寺院跡のように、山上に位置する寺院跡が存在する。その代表的なものとして、吉備中山に所在する高麗廃寺（註39）、倉敷市山地の日差廃寺（註40）、倉敷市二子の二子堂屋敷遺跡、倉敷市三田の東光廃寺などが知られている。高麗廃寺は吉備中山の頂部に僧房を有する県指定の史跡で、旧山陽道に面した谷部には山門が確認されている。日差廃寺から出土した古式瓦の文様については、白鳳期説と平安時代説がある。二子堂屋敷遺跡には礎石が確認されているが、遺跡の実態は不明である。これらの寺院跡以外に、吉備中山周辺には徳寿廃寺、昇竜山神宮廃寺、真如院妙仙童廃寺、八徳廃寺などが知られている（註41）が、創建時期や寺院跡の規模は不明である。なお、昭和46年に山陽新幹線の建設に伴って発掘調査が実施された二子御堂奥古窯址群（註42）で生産された瓦は、日畠赤井廃寺、総社市秦廃寺、矢部廃寺、日差廃寺などへ供給されたことが知られている。

鎌倉時代になると、俊乗房重源が東大寺を再建するために、備前國に派遣されて國務を司ったと推定されている常行堂（註43）が、岡山市一宮の吉備中山山麓に創建されている。この常行堂が存在した地点からは、「吉備津宮常行堂」の陽印を有する軒丸瓦や、「東大寺」の刻印

遺跡の環境

を押した平瓦が出土している。岡山市川入の吉備中山西方には、備中一宮吉備津神社の神官を務めた有力土豪の館跡と推定されている伝賀陽氏館跡（註44）が知られている。現在でも平坦な水田面に、土壙跡と堀跡を認めることができる。吉備中山の南東山麓には、土地区画整理事業に伴って発掘調査が実施された天神瀬遺跡（註45）が存在する。出土遺物のほとんどが土師質の日常雑器で、備前焼や亀山焼は極めて少ないという。山陽新幹線の建設に伴って発掘調査が実施された御堂奥遺跡（註46）では、土師質の碗や小皿が伴う中世の建物が検出されている。また、大規模な発掘調査が行われた上東遺跡（註47）や川入遺跡（註48）でも、中世の井戸や土壙が検出され、多量の日常雑器が放棄された状態で出土している。このほかに若宮神社東遺跡、山地遺跡、砂原北遺跡、中袋遺跡などの中世の遺跡が知られているが、散布地として把握されているだけで遺跡の実態は不明である。

このように、足守川流域に所在する縄文時代から中世までの遺跡を尋ねながら歴史的環境を概観したのであるが、吉備中山から王墓山に至る地域にはそれぞれの時代に特徴のある重要な遺跡が数多く存在し、吉井川、旭川、高梁川などの下流地域とともに「吉備の国」の中核的な位置を占めていたと考えられる。一方、岡山県総合流通センター建設に伴って発掘調査を実施した天神坂遺跡、奥坂遺跡、新屋敷古墳の所在する丘陵地は、遺跡の分布密度が薄い対照的な状況を呈しているのである。

（福田）

註

- 註1 正岡睦夫「川入周辺の古地形」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書』第2集 岡山県教育委員会 1974年
- 註2 柳瀬昭彦「周辺の地理・歴史的環境」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』16 岡山県教育委員会 1977年
- 註3 鎌木義昌「岡山県都窪郡大内田貝塚」『日本考古学年報』2 日本考古学協会 1954年
- 註4 間壁忠彦・間壁葭子「矢部貝塚」『倉敷の古代』倉敷考古館 1972年
- 註5 清野謙次『日本原人の研究』岡書院 1925年
- 藤田憲司「西尾貝塚」『王墓山遺跡群』倉敷市教育委員会 1974年
- 註6 鎌木義昌・高橋謹「岡山県高尾遺跡」『日本農耕文化の生成』東京堂出版 1961年
- 註7 鎌木義昌「関戸貝塚」『岡山県大百科辞典』上 山陽新聞社 1980年
- 註8 謙木義昌・近藤義郎「岡山県高田遺跡」『日本農耕文化の生成』東京堂出版 1961年
- 註9 近藤義郎「備中新邸貝塚」『古代学研究』8号 古代学研究会 1953年
- 註10 伊藤晃・柳瀬昭彦・池畠耕一・藤田憲司「上東遺跡の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書』第2集 岡山県教育委員会 1974年
- 柳瀬昭彦・江見正己・中野雅美「上東遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』16 岡山県教育委員

第2章 第2節 遺跡の歴史的環境

会 1977年

- 註11 正岡睦夫・大谷猛・枝川陽「川入遺跡の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書』第2集 岡山県教育委員会 1974年
- 柳瀬昭彦・江見正己・中野雅美「川入遺跡」『岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告』16 岡山県教育委員会 1977年
- 註12 昭和56年に倉敷市教育委員会が市道矢部東西線の建設に伴って発掘調査を実施した。
- 註13 近藤義郎「古墳以前の墳丘墓一橋築遺跡をめぐってー」『岡山大学 法文学部学術紀要』第37号 岡山大学法文学部 1977年
- 註14 間壁忠彦・間壁葭子「女男岩遺跡」『王墓山遺跡群』倉敷市教育委員会 1974年
- 註15 間壁忠彦・間壁葭子「辻山田遺跡」『王墓山遺跡群』倉敷市教育委員会 1974年
- 註16 近藤義郎「矢喰・鯉喰・楯築」『鬼ノ城』鬼ノ城学術調査委員会 1980年
- 註17 松本和男「矢部南向遺跡の発掘調査概要」『岡山県埋蔵文化財報告』11 岡山県教育委員会 1981年
- 註18 武田俊宏・葛原克人・間壁忠彦「宅地造成にともなう遺跡対策と調査の経過」『王墓山遺跡群』倉敷市教育委員会 1974年
- 註19 山本雅靖・間壁忠彦「王墓山古墳（赤井西古墳群1号）」『王墓山遺跡群』倉敷市教育委員会 1974年
- 註20 三木文雄「王墓山古墳の遺物」『王墓山遺跡群』倉敷市教育委員会 1974年
- 註21 平井勝「高坪古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』50 岡山県教育委員会 1982年
- 註22 昭和56年11月16日から昭和57年1月20日まで倉敷市教育委員会が圃場整備事業に伴って発掘調査を実施し、多数の人骨が出土した。
- 註23 出宮徳尚・根本修他『吉備中山総合調査報告』岡山市教育委員会・吉備中山総合調査委員会 1975年
- 註24 本報告書に付載として収録している。
- 註25 岡山県総合流通センターの造成工事が始まる直前まで、塚山で生活をしていた作業員の人の御教示による。
- 註26 註23に同じ。
- 註27 註23に同じ。
- 註28 註23に同じ。
- 註29 西川宏「海にのぞむ首長墓」『吉備の国』学生社 1975年
- 註30 藤田憲司・間壁忠彦「法伝山古墳」『王墓山遺跡群』倉敷市教育委員会 1974年
- 註31 新東晃一・伊藤晃・間壁葭子「西の平古墳」『王墓山遺跡群』倉敷市教育委員会 1974年
- 註32 間壁葭子「日畠赤井廃寺」『王墓山遺跡群』倉敷市教育委員会 1974年
- 註33 柳瀬昭彦・江見正己・中野雅美「川入遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』16 岡山県教育委員会 1977年
- 註34 葛原克人「矢部廃寺」『岡山県大百科辞典』下 山陽新聞社 1980年
- 註35 註33に同じ。

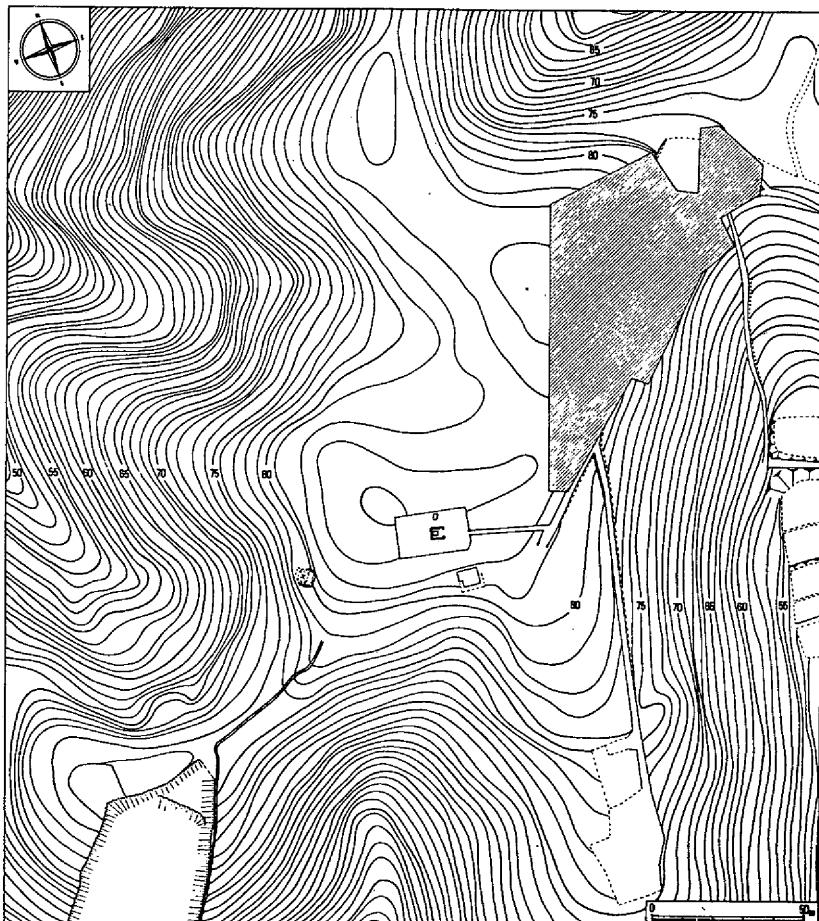
遺跡の環境

- 註36 間壁葭子「官寺と私寺」『古代の日本』4 角川書店 1970年
- 註37 註23と同じ。
- 註38 註23と同じ。
- 註39 註23と同じ。
- 註40 大本琢壽「日差寺の瓦」『吉備文化』第57号 吉備考古学会 1943年
- 註41 註23と同じ。
- 註42 葛原克人・池畠耕一「二子御堂奥古窯址群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書』第2集 岡山県教育委員会 1974年
- 註43 註23と同じ。
- 註44 神野力「伝賀陽氏館跡」『岡山県大百科辞典』下 山陽新聞社 1980年
- 註45 出宮徳尚・根木修他「天神瀬遺跡発掘調査概要」『岡山市文化財保護年報』（昭和48年度～昭和52年度）岡山市教育委員会文化課 1978年
- 註46 葛原克人・池畠耕一「御堂奥遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書』第2集 岡山県教育委員会 1974年
- 註47 註10と同じ。
- 註48 註11と同じ。

第3章 調査の方法と概要

第1節 調査の方法と概要

天神坂遺跡の発掘調査は、遺跡分布調査の時に都窪郡早島町矢尾の集落に面した丘陵頂部で、工事用道路の崖面に断面を露呈した住居址から着手した。弥生式土器片や瓦片を採集した丘陵を中心に、バックホー2台を使用してトレンチによる遺構の確認調査を行った。トレンチ幅は約2mで、平坦な尾根上ののみならず鞍部にも密に設定した。その結果、奥坂遺跡に面した東斜面で数軒の住居址を検出し、寺院跡が存在する可能性も推定されたため、約4,000m²の範囲について全面発掘調査を実施することにした。平坦な尾根上や西斜面には、精査したにもかかわらず遺構が存在しなかった。調査中に尾根上に立つと、西斜面を吹き抜ける風がひときわ



第3図 天神坂遺跡発掘調査地点 (1/3000)

調査の方法と概要

強かったから、住居などを構えるには不適当な場所であったと推定される。

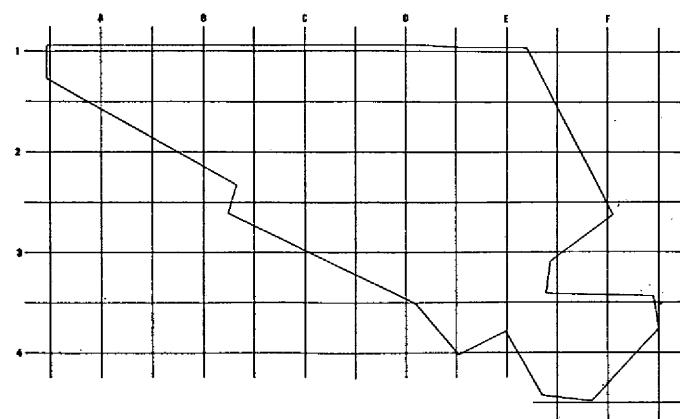
天神坂遺跡の調査区全体のグリッドは、造成工事の基礎となる基準点（D-1）を基本原点として設定した。

天神坂遺跡の全面発掘調査では、表土除去作業に2台のバックホーと1台の小型ブルドーザーを使用した。その後は10台のベルトコンベヤーと、作業員で南西のA-1区から北東のF-1区やF-2区に向けて遺構検出作業を行った。天神坂遺跡の遺構番号は、遺構を検出した順番に付したものである。D-1とE-1の境に位置するNo.4住居址を検出した段階で、D-3で検出したNo.13寺院跡の調査に移行した。遺構上面に堆積した表土が著しく厚かったので、作業員の人力だけでは長時間を要すると考えられたため、造成工事を進めていたバックホーで再び表土を除去した。

天神坂遺跡の発掘調査が順調に進行するようになった段階で、今後の発掘調査日程を検討する目的もあって、奥坂遺跡の遺構確認調査と遺跡範囲把握調査を実施した。その結果、4月初旬に袋状土壌や住居址の断面を検出した地点から東方向に連なる約10,000m²の丘陵全体に、土壌や住居址が密集して存在することを確認し、大規模な集落跡であることが判明した。このため、天神坂遺跡の発掘調査もしばらくして完了する見通しだったので、奥坂遺跡の範囲でも調査を急ぐ部分（A地区）について引き続き表土除去作業を行った。東端に位置するC-10からA-4やD-4に向けて、改めて遺構検出作業を行った結果、約40軒の住居址と約80基にもおよぶ土壌が検出され、遺構の残存状況も極めて良好であることが判明した。奥坂遺跡A地区のグリッドは、調査範囲西方に寄った地点に設置されていた造成工事の基礎となる基準点（D-5）を基本原点に、奥坂遺跡の北東方向に所在する八幡神社境内の基準点を結ぶ直線を一方向に決定し、20m×20mの正方形を調査区の単位にした。7月になると、天神坂遺跡の発掘調査を終了させた職員が、奥坂遺跡A

地区的調査に合流し、東端で検出したNo.1住居址から順番に各遺構の調査に着手した。遺構番号は、天神坂遺跡と同様に遺構を検出した順番に付したものである。

例年なく天候に恵まれたにもかかわらず、住居址そのものの残存状態が極め



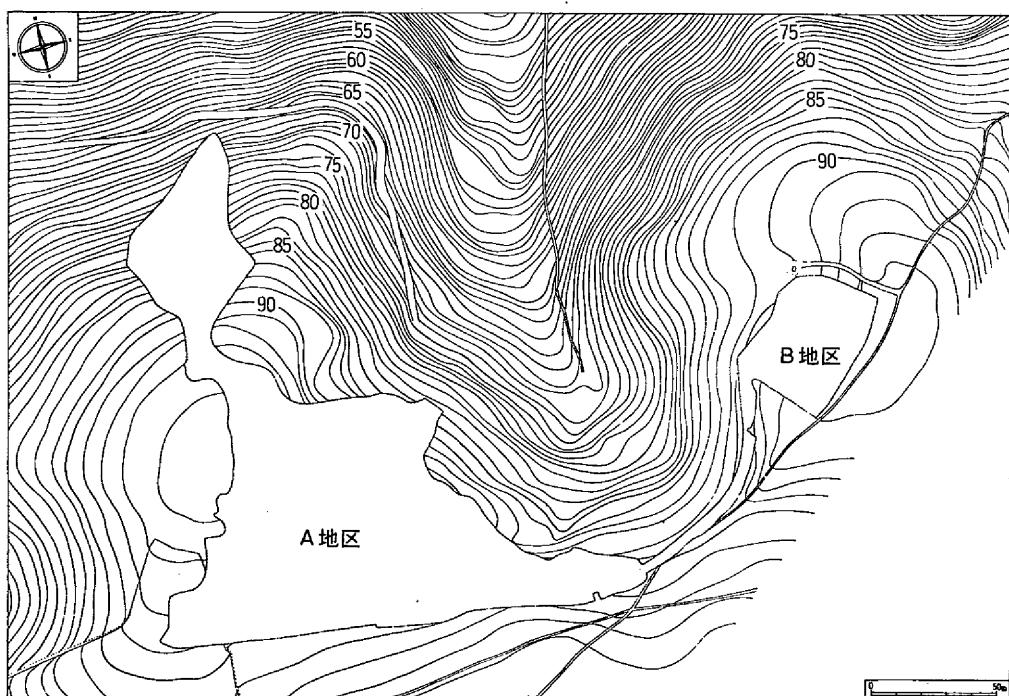
第4図 天神坂遺跡グリッド図 (1/1500)

第3章 第1節 調査の方法と概要

て良好で、数度の建て替えが行われていたため、調査に多大な時間が必要となった。したがって、この状態で現場作業を進めるならば、いつになっても奥坂遺跡の発掘調査は終了しないので、職員の応援体制を要請した。各遺構の検出作業が終ると、以前より進めていた東端からの遺構調査に加えて、北東方向に張り出した尾根上で検出したNo.93建物とNo.94～97住居址の調査を行った。この地点は、発掘調査に着手する以前から造成工事が進められ、断崖絶壁の危険な状態になっていたため、建物1棟と住居址4軒の発掘調査と地形測量を終了させ、工事関係者に尾根全体を明け渡した。

奥坂遺跡A地区の発掘調査が完了すると、岡山県総合流通センター全体の上水道をまかなう給水塔を建設する予定地と、進入道路部分（B地区）の発掘調査を行った。すでに遺構確認調査が行われて、幅が約2mのトレンチが約20mの間隔で掘開していたので、A地区の発掘調査が完了する見通しがついた段階に、バックホーを導入して表土除去作業を行った。このB地区で検出した遺構は、A地区と尾根続きの地点に所在するから、遺構番号は先に調査したA地区的番号に連続して付した。

奥坂遺跡B地区全体のグリッドは、調査範囲のほぼ中央に位置する造成工事の基礎となる基準点（X-29）を基本原点に、調査区の地形に沿って任意に設定したものである。



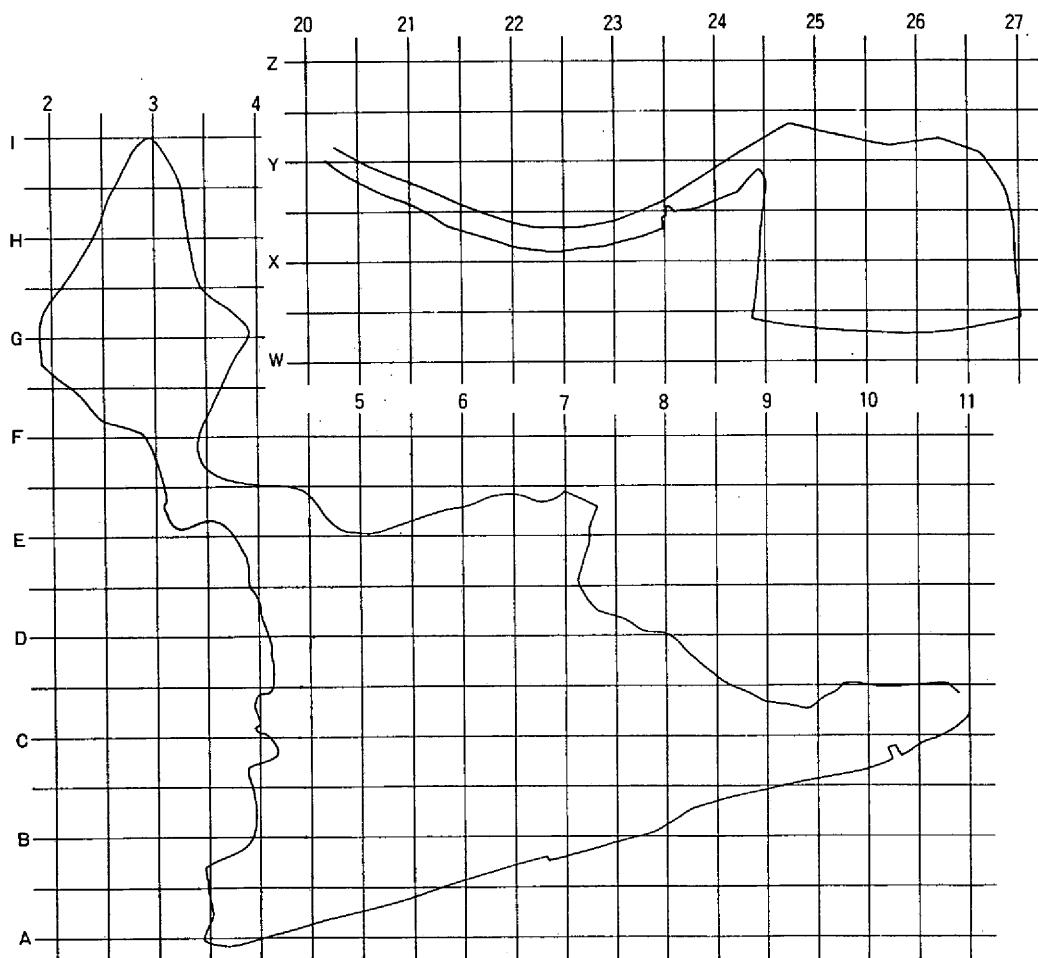
第5図 奥坂遺跡発掘調査地点 (1/3000)

調査の方法と概要

岡山市大内田に位置する吉備地区の造成工事が終了し、昭和57年度の後半には都窪郡早島町矢尾の早島地区の造成工事に着手することになった。岡山県教育委員会文化課は、昭和57年2月25日に岡山県総合流通センター早島地区建設予定地全域の遺跡分布調査を実施した。その結果、従来から周知の遺跡として知られていた新屋敷古墳以外に、中世の土器片を採集した散布地（散布地A地点）と弥生式土器片を採集した散布地（散布地B地点）を確認した。

昭和57年4月になると、岡山県総合流通センター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査は職員1名が担当することになり、現場で調査を実施しない時は、昭和56年度に発掘調査を行った天神坂遺跡と奥坂遺跡の報告書作成に従事することになった。

昭和57年6月9日に開催された岡山県総合流通センター早島地区造成事業に伴う埋蔵文化財打合せ会で、新屋敷古墳と2か所の散布地の取り扱いについて協議された。その結果、新屋敷



第6図 奥坂遺跡 グリッド図 (1/1500)

第3章 第1節 調査の方法と概要

古墳は記録保存の措置をとり、2か所の散布地については確認調査を実施して遺跡の規模や性格を把握することになった。

8月2日から都窪郡早島町矢尾地区の人達の参加を得て、新屋敷古墳の発掘調査に着手した。天井石の除去作業では、文化課埋蔵文化財係職員の協力を得た。発掘調査は約1か月で完了したのであるが、石室内から須恵器の台付長頸壺2点、土師器の杯1点、鉄釘12点が出土し、周溝内で寛永通寶や土師質の小碗を伴う近世土塙墓6基を検出した。

中世の土器片を採集した散布地A地点は、丘陵尾根上に2本のトレンチを人力で掘開して遺構確認調査を行ったが、遺構や遺物は存在しなかった。弥生式土器片を採集した散布地B地点にも、トレンチを設定して遺構確認調査を実施したが、遺構や遺物は検出できなかった。

昭和56年度の天神坂遺跡と奥坂遺跡の発掘調査では、大内田町内会長光畠三郎氏と元岡山市吉備支所長森安六郎氏に、昭和57年度の新屋敷古墳や2か所の散布地の調査では早島町議会議員小郷茂夫氏に、それぞれ多大なるご協力、ご支援をいただいた。記して感謝の意を表したい。なお、昭和56年度と昭和57年度の調査に参加した人は次のとおりである。 (福田)

昭和56年度

(吉備地区)

安藤 満孝	犬飼 虎雄	植田 明	江国 好夫	小野 豊子	小野田千鶴子
亀山しげ子	熊代 政一	公森 知得	公森 春子	武田 恭彰	竹原 末治
坪井 清子	坪井 強獅	坪井 光迪	坪井 秀恵	坪井 英子	坪井 正志
坪井 光正	坪井八千代	中桐久仁江	中野猪之太	中野 嘉一	西田 嘉一
西田 熊野	西田 静彌	西田 政子	則武 春清	光畠 勝男	光畠 幸夫
光畠 三郎	光畠 淳子	光畠 妙子	光畠 豪	光畠 正恵	光畠美枝子
三好 武雄	森安 克己	森安 金一	森安 春光	森安 義治	山下 聰
吉田磨佐夫	流王 天				

昭和57年度

(早島地区)

青葉 賴二	岩崎 仁司	池下 節子	太田 孝治	大橋八重子	小郷カメ子
小郷 貴久	佐藤精次郎	林 幸子	林 純次	林 納	林 晴子
林 正義	林 百江	溝手 堅			

第2節 調査および報告書作成にあたって

岡山県総合流通センターの建設に伴って発掘調査を実施した天神坂遺跡と奥坂遺跡は、工事中に発見された遺跡であることもあって、造成工事と並行して調査を進めなければならなかった。しかも奥坂遺跡の調査面積は極めて広く、検出した遺構が密集して複雑に重複するものが多くあったため、応援体制を編成しなければ発掘調査を終了させることができなかった。この異常とも思われる緊急事態での発掘調査であったから、今後に残された問題点や反省しなければならないことが数多く存在する。

天神坂遺跡や奥坂遺跡のように、遺跡が工事中に突発的に発見されるという緊急事態が生じると、すでに年次計画が確立して事業が進められている段階では、発見された遺跡への対応ができないことがある。たとえ対応することが可能であっても、工事に並行して危険な状況で発掘調査が進められる場合が多く、調査担当者は精神的にも肉体的にも著しく疲労することが考えられる。したがって、開発計画が立案された段階に実施される遺跡の分布調査および遺構確認調査は、極めて重要な作業であると考えられる。

奥坂遺跡で検出した住居址は、ほとんどのものが数回の建て替えを行っていることが判明したが、調査期間が限定された発掘作業であったことから、それぞれの建て替えに伴う柱穴や壁体溝などを調査現場で最大限把握するよう努力したにもかかわらず、作成した実測図によって再検討せざるを得ないものもあった。

奥坂遺跡で検出した袋状土壙には、検出面からの深さが著しく深く、完形の土器が多量に出土したものが多い。ところが、発掘作業を継続している時に、周囲の壁面が崩壊して危険な状態になったため、かろうじて土壙内全体を掘り下げて遺物を採集することができたものの、土層断面を確認することができなかつたものも存在する。

奥坂遺跡の発掘調査では、柱穴と思われる小規模なピットを数多く検出している。そのピット内から遺物が出土したものについては、建物の柱穴として規模的にまとまるかどうかを丹念に検討したが、遺物が出土しなかったピットで、建物の柱穴になるものも何棟かは存在するであろう。

発掘調査が忙しくとも、作業の安全には十分に注意しなければならない。奥坂遺跡の調査現場で、写真撮影用タワーが突風で倒壊して職員が負傷した事故は、状況の把握に不備があったことを率直に認め、今後の発掘調査では二度とこのような事故が生じないように、特に注意しなければならないと考える。

天神坂遺跡と奥坂遺跡の出土遺物や実測図の整理作業は、昭和57年4月から実施した。とこ

第3章 第2節 調査および報告書作成にあたって

ろが出土遺物の量は、天神坂遺跡の寺院跡から出土した約200箱にもおよぶ瓦をはじめ、現場から搬入したままの状態の遺物が約800箱にも達する状況であった。まず出土遺物全部の洗浄作業を行い、土器、石器、鉄器に分類して復元作業に着手した。出土遺物の実測を本格的に行ったのは、早島地区の新屋敷古墳や散布地の調査を終了してからである。膨大な出土遺物の洗浄、復元、実測等のために長時間を費やした。

さらに、奥坂遺跡の発掘調査は、応援体制を組織して多くの職員で行ったため、報告書の作成作業も編集責任者を中心に共同で進めたことを記しておく。

(福田)

第3節 時期区分について

岡山県総合流通センターの建設に伴って発掘調査を実施した天神坂遺跡と奥坂遺跡からは、弥生時代中期から古墳時代前期にかけての土器が多量に出土している。特に奥坂遺跡には大規模な袋状土壙が多く検出され、完形品を含む土器が放棄された状態で確認された。

近年になって発掘調査が実施される機会が多くなり、岡山県南部地方から出土した弥生時代から古墳時代初期にかけての土器の編年試案（註1）が提示され、時代区分が細分化されるとともに従来の編年が修正されつつある。このような状況のなかで、旭川放水路（百間川）の改修工事に伴って発掘調査が実施されている百間川遺跡群の報告書作成段階に、文化課埋蔵文化財係の職員で土器編年に関する共通の理解が得られるよう討議を行った。その結果、弥生時代前期をI～III、弥生時代中期をI～III、弥生時代後期をI～IV、古墳時代前期をI～IIIに大別することにした（註2）。そこで今回報告する天神坂遺跡や奥坂遺跡の時期区分に関しては、百間川遺跡群の成果に準拠して、弥生時代中期から古墳時代初期までを9期に分割して表現することにした。なお表では、天神坂遺跡や奥坂遺跡に近接して所在する上東遺跡の編年案（註3）と、弥生時代前期から古墳時代初期にわたる土器の変遷を10期29型式に細分された高橋護氏の編年案（註4）を対比した。文中では奥坂中期Ⅲは奥・中・Ⅲ、奥坂古墳時代Ⅱは奥・古・Ⅱとし、現段階でもより細分できる遺構や遺物については、古相、中相、新相などを加えて標記した。

天神坂遺跡や奥坂遺跡で検出した遺構は、奥・中・Ⅲから奥・古・Ⅱの時期に属するものである。

奥・中・Ⅲは、壺形土器の頸部凸帯文の凹線化がさらに進行し、新相では沈線化した個体も確認される。甕形土器の口縁端部は折り返しによって拡張され、外面に凹線文を施しているものが多い。古相の高杯形土器には外面に凹線文を施した器形が多く、新相になると凹線文が消滅している。奥・後・Ⅰは、前述した奥・中・Ⅲの薄手で硬質の土器に比して、全体に厚手の作りになっている。壺形土器や甕形形土器の内面に施されたヘラケズリは、胴部の上位にまでおよんでいる。奥・後・Ⅱは、上東式土器の典型的な器形である「長頸壺」が存在する時期である。高杯形土器の製作手法では、杯部と脚部を連続して作り、底に小円盤を貼り付けて仕上げていたものから、杯部と脚部を別々に作って、それらを接合して仕上げる手法に変化している。奥・後・Ⅲは、「長頸壺」が存在する最終段階で、甕形土器の口縁部に施された凹線文が認められなくなるとともに、口縁端部が上方に立ち上がる新しい器形が出現する。また、高杯形土器の脚は短くなり、胎土に水漉粘土を使用したものが認められる。奥・後・Ⅳは、甕形土

第3章 第3節 時期区分について

器の口縁部に施された凹線文が、退化して幅の狭くなった細い凹線に変化している。高杯形土器の脚の短脚化は極限に達し、杯部の深さがさらに増している。奥・古・Ⅰは、甕形土器の口縁部に櫛描の平行沈線が出現し、胴部が球形化している。高杯形土器の脚部は、短脚のものから完成した土師器の形態に変化しつつある。奥・古・Ⅱは、甕形土器の口縁部に存在する櫛描平行沈線が退化し壺形土器や甕形土器の底部が丸底化している。

この時期区分にも意見の一一致をみない問題が多く、混乱が生じることは避けられない。弥生時代や古墳時代以外の時代も含めて、周辺地域の遺跡で検出された遺構や遺物と比較検討を行い、改めて細分する予定である。

(福田)

註

- 註1 (ア) 正岡睦夫「備前西南部弥生・土師器編年表」『岡山県埋蔵文化財調査報告書』第1集 岡山県教育委員会 1972年
(イ) 伊藤晃・柳瀬昭彦「土器編年について」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書』第2集 岡山県教育委員会 1974年
(ウ) 間壁忠彦・間壁茂子「女男岩・辻山田遺跡の問題点」『王墓山遺跡群』倉敷市教育委員会 1974年
(エ) 根木修「寺院以前の土器試論」『幡多廃寺発掘調査報告』岡山市教育委員会 1975年
(オ) 柳瀬昭彦「川入・上東遺跡の弥生式土器及び古式土師器について」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』16 岡山県教育委員会 1977年
(カ) 伊藤晃・山崎康平「中部瀬戸内北岸における弥生時代中期の土器編年」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』19 岡山県教育委員会 1977年
(キ) 藤田憲司「山陰「鍵尾式」の再検討とその併行関係」『考古学雑誌』第64巻 第4号 日本考古学会 1979年
(ク) 高橋護「弥生土器——山陽1・2・3——」『考古学ジャーナル』No.173・175・179 ニュース サイエンス社 1980年
(ケ) 出宮徳尚「弥生式土器(前期～中期)編年対比表」『南方(国立病院)遺跡発掘調査報告書』岡山市教育委員会・岡山市遺跡調査団 1981年
(コ) 柳瀬昭彦「出土土器編年図」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』40 岡山県教育委員会 1981年
註2 江見正己「時期区分について」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』39 岡山県教育委員会 1980年
註3 註1(オ)と同じ。
註4 註1(ク)と同じ。

調査の方法と概要

表-1 編年対比表

	型式名	奥坂	上東	高橋編年案
弥生時代	南方	奥坂中期I		III期 a b
	菰池	奥坂中期II		IV期 a b c
	前山II	奥坂中期III		V期 a b
	仁伍		上東・鬼川市0	VI期 a b
		奥坂後期I		a b c
			上東・鬼川市I	d
			上東・鬼川市II	a
	上東	奥坂後期II	上東・鬼川市III	b c
				d
		奥坂後期III		
古墳時代	酒津	奥坂後期IV	才の町I	IX期 a b c
			才の町II	
			下田所	a b c
	王泊六層	奥坂古墳時代I		
		奥坂古墳時代II	龜川上層	

天神坂遺跡については、奥坂遺跡に準拠する。

第4章 天神坂遺跡

第1節 天神坂遺跡の概要

1. 天神坂遺跡の概要

遺跡の所在した大内田天神坂は、昭和46年3月に吉備町より市町村合併にて岡山市となった地区である。

遺跡は妹尾より倉敷市街地の東にかけ、東北東～西南西方向に続く海拔100m以下の丘陵群（早島丘陵）中に存在し、その独立丘陵上に位置する。長軸約7km、短軸約3kmを測る独立丘陵上の北方眼下には、川入・上東遺跡等をのせる足守川低地、東方に旭川低地等の氾濫平野を展望することができる。

山頂は海拔約84mを測り、平坦面をもたないが定高性が認められる。そして、2か所の高所が存在し、北西部に地場大師八十八か所の番札所（註1）、天神宮等が所在した。また周辺は調査前に民家および果樹園として広範囲に利用されていた。

遺構は東部高所の南側緩斜面海拔84～75m間に中心に分布し、935-1、935-20、935-23番地にあたる。約200m南西部、1282-10番地にも一部遺構が存在する。あくまでも発掘調査の中心対象となったのは前者であり、総面積約4,150m²を測る。

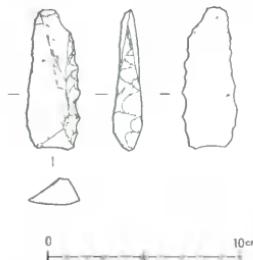
遺構の概略を記すと、弥生時代後期堅穴式住居址5軒、段状遺構1、土壙2基、古墳時代堅穴式住居址6軒、古代末～中世の寺跡1、土壙墓1基、土壙1基、近世土壙1基の計18の遺構

が存在し、弥生時代後期の集落址の住居配置の状況、および、古代末～中世の山岳仏教の一端を表出させている。

遺物では後期旧石器時代と考えられるサヌカイト製のナイフ形石器、縄文時代と考えられる石斧が各1点、古代末～中世の瓦が200箱も出土している。

しかし、岡山県総合流通センター建設の第1期・第2期工事間に発見された状況等から、徹底万全な対処が実施できなかった現実に、遺跡の多くが消滅したことは残念である。

（高畠知功）



第7図 No. 2 住居址出土遺物
(1/2.5)

天神坂遺跡



- | | | | |
|----------------|-------------|------------|--------------|
| 923 左きびつおかやまみち | 946 大内田貝塚 | 1256 西栗坂古墳 | 1264' 塚山古墳群跡 |
| 934 庄城跡 | 947 関戸貝塚 | 1261 奥坂遺跡 | 1265 金場祭祀跡 |
| 935 東栗坂土塁跡 | 948 天神坂遺跡 | 1262 坪井遺跡 | 1266 高尾貝塚 |
| 936 東栗坂1号墳 | 1254 矢尾神社遺跡 | 1263 坪井北遺跡 | A 淨泉寺裏山1号墳 |
| 937 東栗坂2号墳 | 1255 新屋敷古墳 | 1264 塚山古墳 | B 淨泉寺裏山2号墳 |

第8図 天神坂遺跡周辺地形図

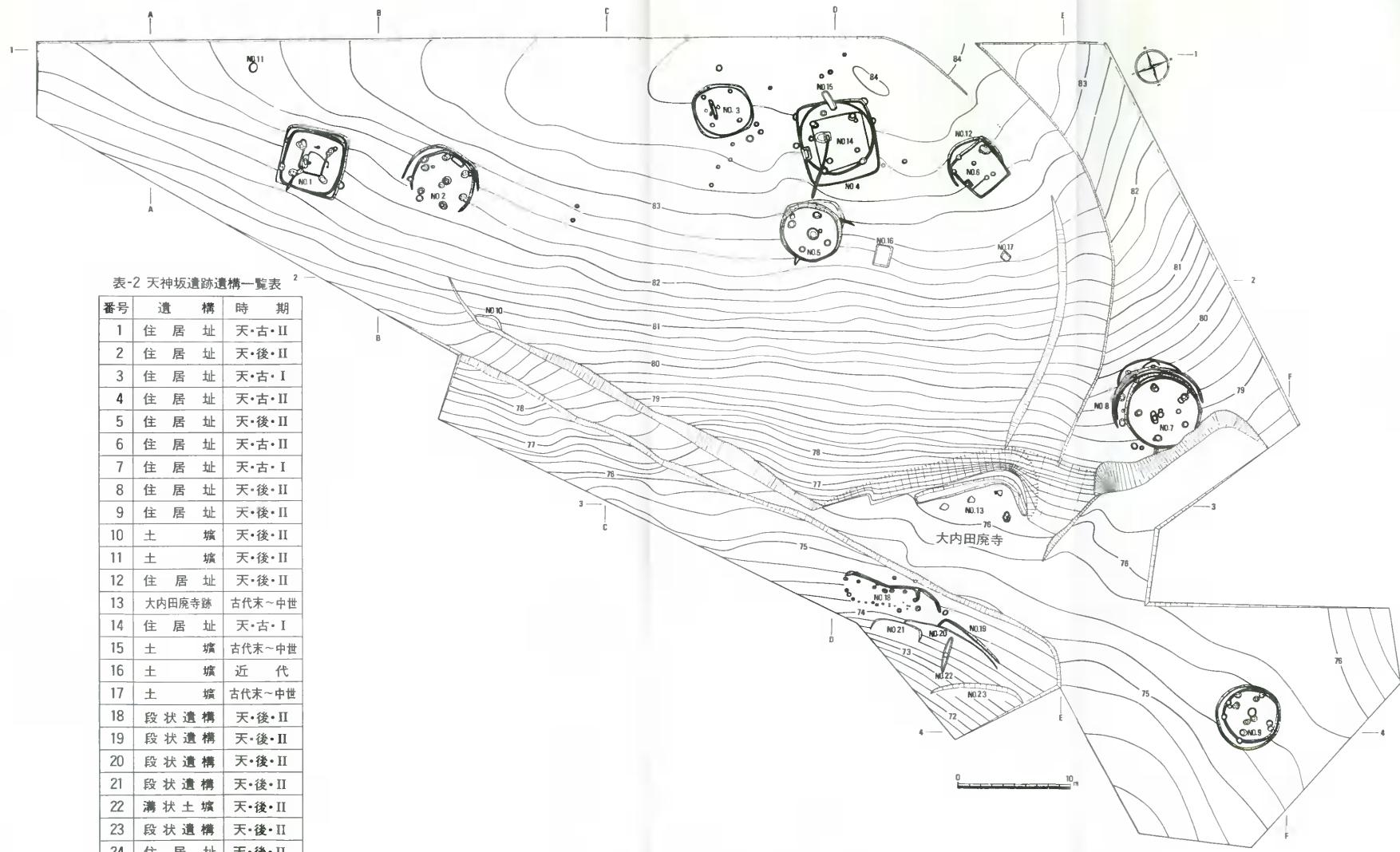
2. 弥生時代後期の遺構・遺物

(1) 住居址

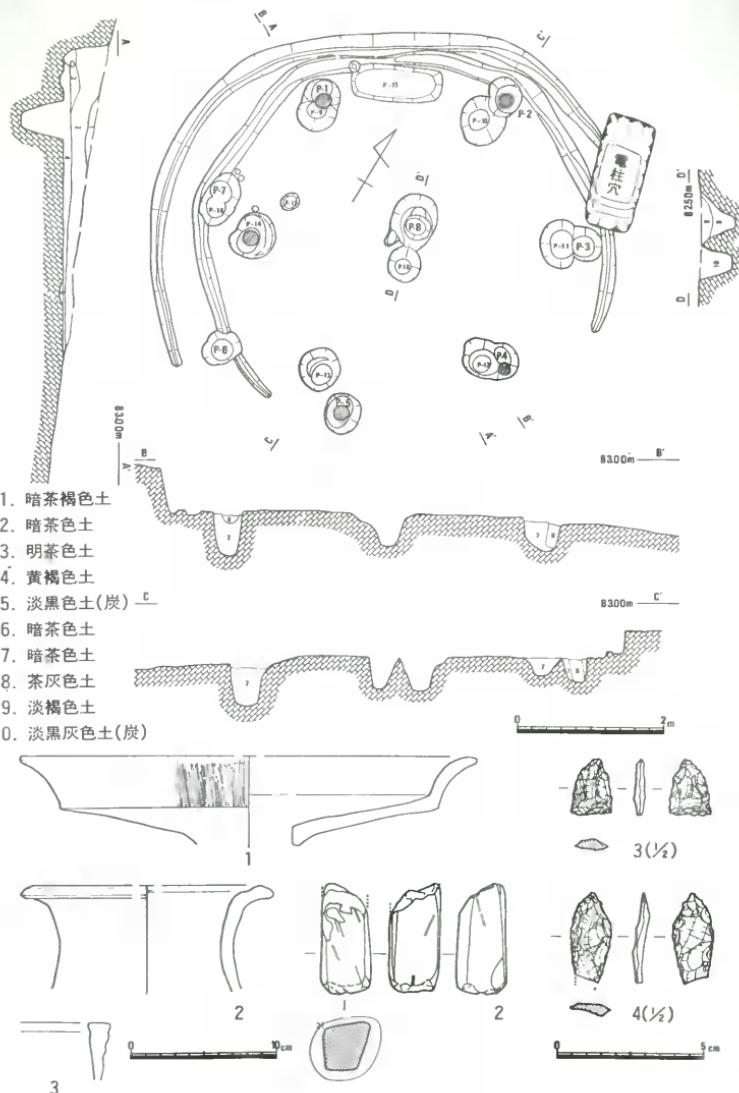
No. 2 住居址 (第10図、図版420)

B-1 の海拔 82.00~82.75m 間に位置し、棟方向を等高線に沿わせた竪穴式住居址である。長軸 667cm、短軸 (570) cm、床面積約34.81m²を測り、平面 6 角形を呈する。床面海拔高82.35 mを測る。

屋内は主柱穴・中央穴・壁体溝・土壙からなり、P-1~P-7がNo. 2 A 住居址の主柱穴を構成し、中央穴P-8が伴う。P-9~P-14がNo. 2 B 住居址の主柱穴を構成し、中央穴P-18、土壙P-15が伴う。No. 2 A 住居址床面より高杯・甕・鉢形土器、砥石・石鎌が出土している。



第9図 天神坂遺跡全体図 (1/400)



第10図 No. 2 住居址 (1/80)・出土遺物 (1/2, 1/4)

天神坂遺跡

厚さ4～5cmの黄褐色地山ブロックを使用した貼り床面を除去すると、さらに下位の住居床面があらわれる。長軸553cm、短軸(520)cm、床面積約26.22m²を測り、平面6角形を呈する。

遺物はこれら検出できなかつたが、No.2 A住居址を小型にした類似形態をとること等より、拡張前の住居址と考えられる。

No.2 A住居址内覆土中より旧石器時代に属するサスカイト製のナイフ形石器が出土している。土器には完形品がなく、小片が多い。図化できる3点を記せば、赤褐色、暗赤褐色を基調とし、胎土中に多くの長石粒が目立つ。酸性土壤による影響にて器壁の剥落が全体に著しく目立ち、内外面の調整は観察が困難である。

1は直径約31.5cmをはかる大型の丹塗り高杯形土器である。円板充填による成形が認められる。2は中央穴P-18よりの出土である。2は流紋岩製の砥石であり、4面ともに使用された痕跡をとどめる。3・4はサスカイト製の石鏃であり、4は簡素な造りである。

時期は天・後・Ⅱの古相に比定できる。

No.5 住居址（第11図、図版8-1・20）

C-1北東部の海拔82.30～83.20m間、No.2住居址より約27m東方に位置する堅穴式住居址である。長軸536cm、短軸520cm、床面積約22.72m²を測り、平面円形を呈する。床面海拔高82.50mを測る。

火災を受けており、床面に炭化材がほぼ全面に散布し、それらを覆う焼土が広範囲に分布する。炭化材状況は住居周縁より中心部に向かう格好で傾倒しており、茅状の細い炭化物が各所に認められた。これは完全燃焼に近い形状を呈すると考えられる。屋内は主柱穴・中央穴・壁体溝・杭穴からなり、P-1・2間270cm、P-2・3間が225cm、P-3・4間237cm、P-4・5間230cmを測る。北辺にあたるP-1・2間が他の柱間より約40cm広く、同時期のNo.9 B・12住居址の間取りと類似をみせている。

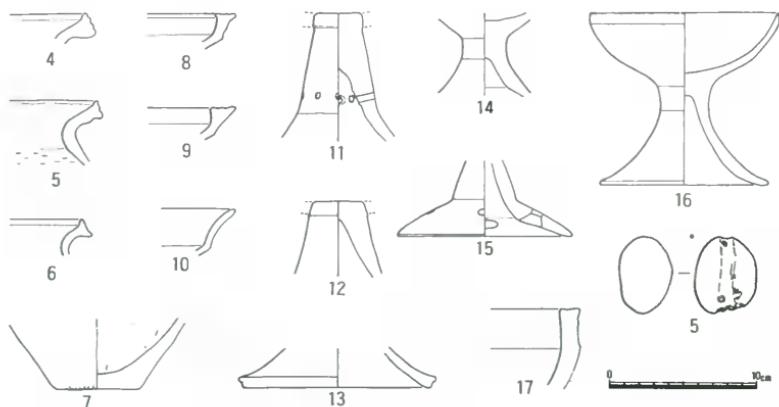
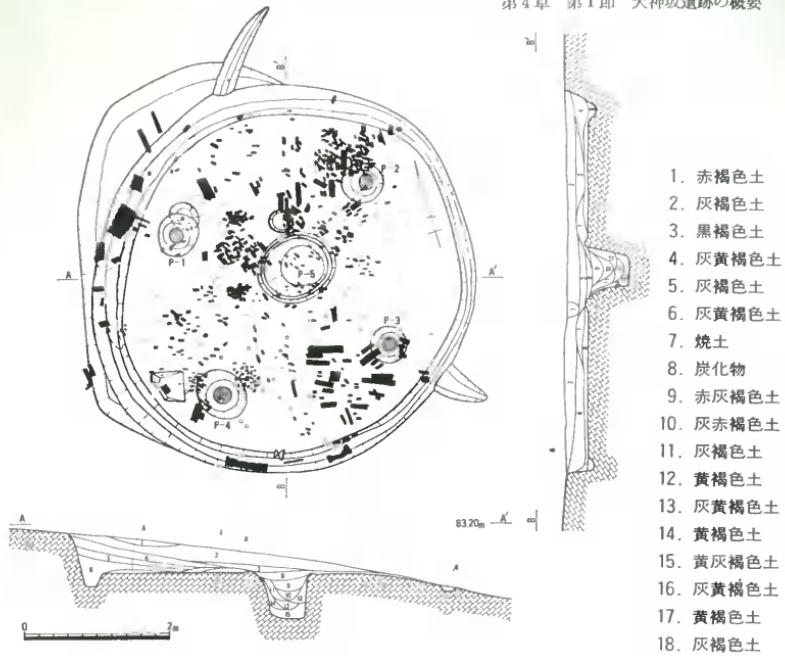
中央穴は住居中央より若干北側に外れて位置しており、内部に多くの炭化物、焼土を含んでいる。底部は平坦になっており、緩やかな傾きをもって広がり、上端で95×108cm、深さ60cmを測る。中央穴周縁は幅5cmの高まり部分を形成している。

遺物は覆土中、および床面から出土しており、16が火災の同時性を示す高杯形土器である。15を除いて、4～14、17の遺物は火災時、および若干渦る様相を呈する。石器では細粒花崗岩を利用した有溝の石錘が覆土中より出土している。

時期は天・後・Ⅱの古相に比定できる。また、北東部に半月状に切られた溝は古い段階の住居址周溝と考えられるが、詳細は不明である。

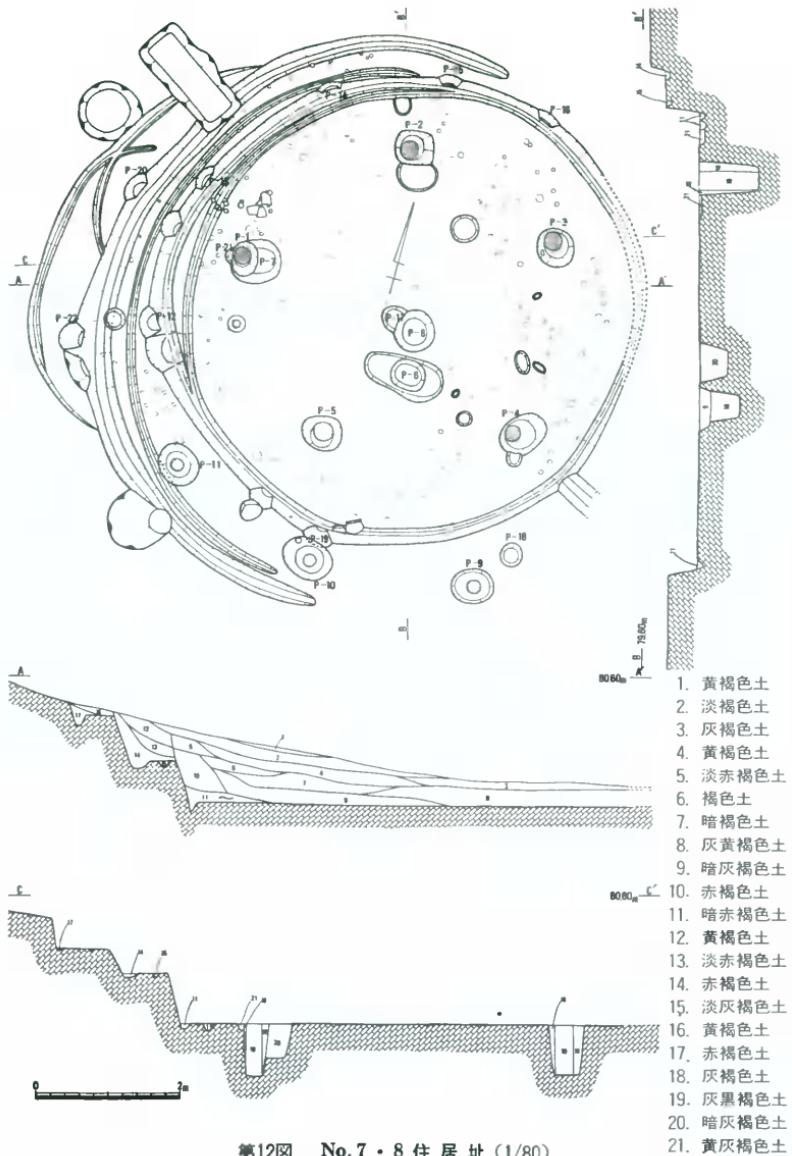
No.12 住居址（第26図、図版8-2）

D-1の海拔83.20～83.50m間に位置する堅穴式住居址である。古墳時代のNo.6住居址によ

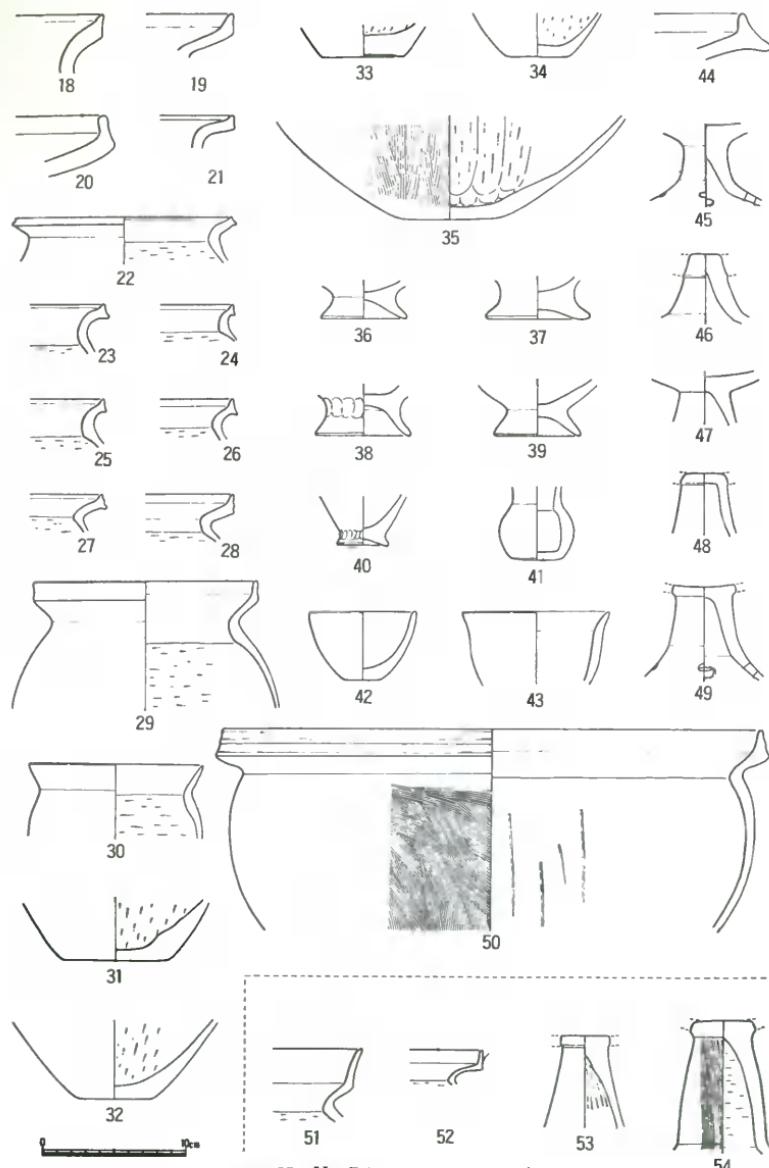


第11図 No. 5 住居址 (1/80)・出土遺物 (1/4)

天神坂遺跡

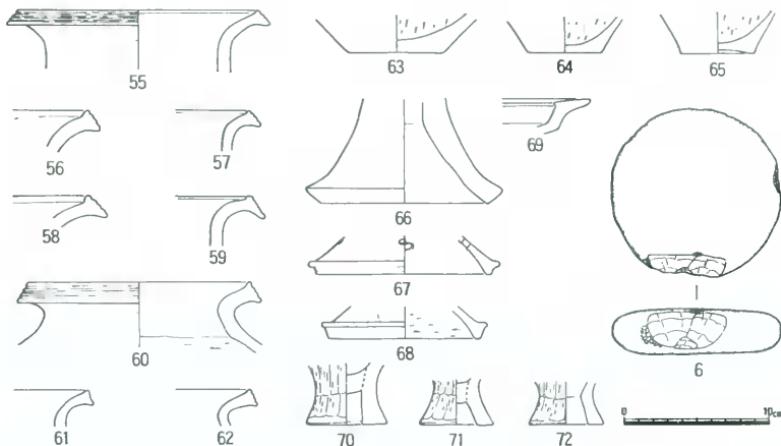


第12図 No.7・8 住居址 (1/80)



第13図 No. 7 住居址出土遺物 (1/4)

天神坂遺跡



第14図 No. 8 住居址出土遺物 (1/4)

り8割強を破壊されており、かろうじて検出した状態である。推定復元を試みると、長軸488cm、短軸488cm、床面積約18.84m²を測り、平面は若干6角をもつ円形を呈する。床面海拔高は83.33mを測る。現存したP-1・2間225cm、P-2・3間240cm、P-3・4間238cm、P-4・5間198cmを測り、前述のNo.5住居址同様、東辺の柱間が広口形態をとる。中央穴は確認不可能であったが、主柱穴底レベルに近いかあるいは深いものが多いなかにあって、いくらか異りをみせている。

遺物は床面より検出できなかったが、No.6住居址掘り下げの際に覆土中より小片ではあるが参考になる3点の土器が出土している。甕形土器より天・後・IIの古相に比定できる。

No.8 住居址 (第12・14図、図版6-2・20)

E-2中央の海拔78.80~80.00m間に位置する比較的大型の竪穴式住居址である。No.7住居址に8割強を破壊されており、No.8A住居址は斜面高所部に壁体溝、柱穴7か所のをとどめる。長軸800cm、短軸800cm、推定床面積は約50.99m²を測る。

屋内は主柱穴9か所から構成されるものと考えられ、柱間距離は約250cmを前後する。

遺物は覆土中より小片10数点が出土しており、壺・甕・高杯形土器、製塩土器等が含まれる。石器では円形偏平の花崗岩製叩き石が1点出土している。

時期は天・後・IIの古相に比定できる。

また、No.8住居址が切る小型住居址、およびNo.8住居址の床面にも古い段階の住居址が確認

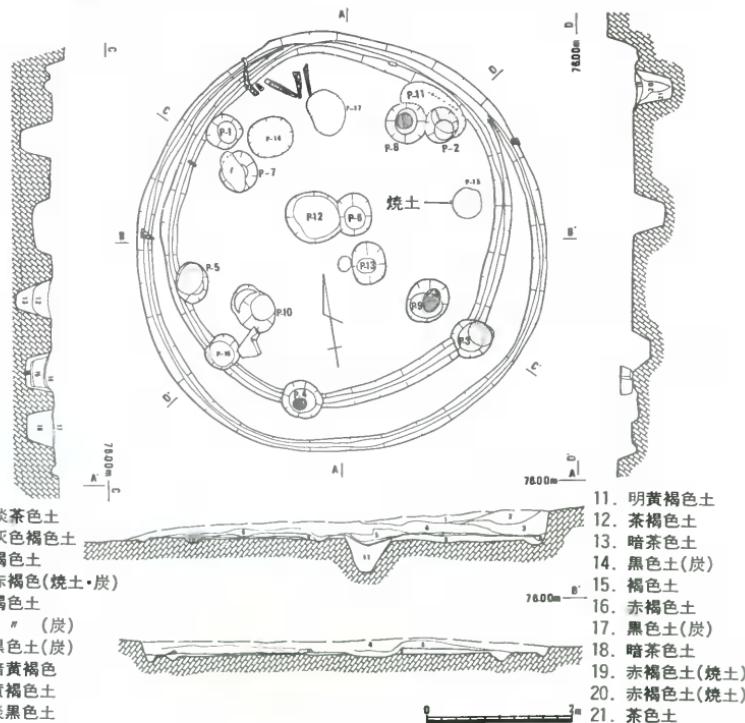
されているが、詳細については不明な点が多い。

No.7 住居址（第12・13図、図版6-2）

E-2中央の海拔78.80～79.60mに位置する竪穴式住居址である。長軸690cm、短軸650cm、床面積約33.26m²を測り、平面は円形を呈する。床面海拔高78.82mを測る。

屋内は主柱穴・中央穴・壁体溝・杭穴からなり、P-1～P-5がNo.7 A住居址の主柱穴を構成し、中央穴P-6が伴う。P-1～P-5はほぼ同位置に重複する格好で建て替えられており、古段階のNo.7 B住居址にP-8が伴う。両中央穴とも住居址中央から外れており、若干南に寄った所に位置し、新段階の住居址中央穴が古段階の中央穴をはずして造られる傾向にある。

遺物は覆土中に多く含まれており、最終床面直上の出土遺物は少ない状況を呈する。大半の土器類は器内外面の剝落が著しく、調整については不明瞭な点が多くある。色調は橙色を基調にする傾向が認められる。50の大型鉢形土器は南端壁体溝上面に伏せた状態で出土している。



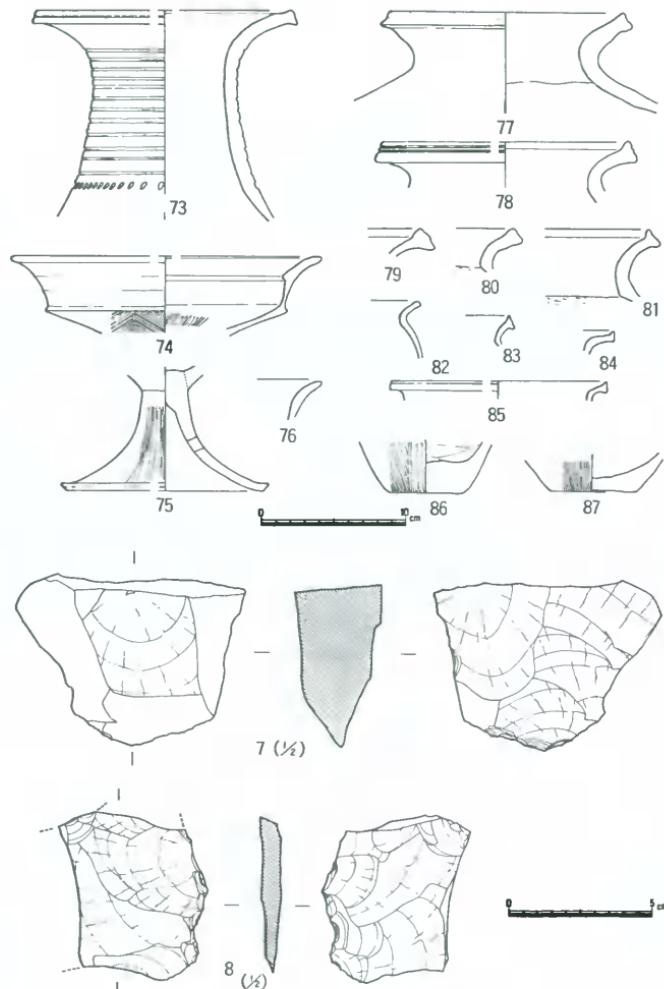
第15図 No.9 住居址 (1/80)

天神坂遺跡

時期は天・後・IVの古相に比定できる。

No.9 住居址 (第15~17図, 図版5・6-1・20)

E-3 北東端の海拔 75.20~75.50m間に位置する堅穴式住居址である。長軸 580cm, 短軸 573



第16図 No.9 住居址出土遺物 (1) (1/2, 1/4)

cm, 床面積約26.22m²を測り, 平面は円形を呈する。床面海拔高76.25mを測る。

No.5住居址と同様に火災後に放棄された状況を呈しており, 屋内全体に炭化材・炭化物が認められる。住居址壁体周縁より垂木材痕跡が中央に向かい倒壊しており, 特に南半分に多量に分布する。炭化材を除去後の床面には, 柱穴上面に5か所の焼土痕跡が認められるが, 長期間の使用のものではなく, 火災時の現象と考えられる。屋内は主柱穴・中央穴・壁体溝・土壌からなり, P-1~P-5の5か所がNo.9A住居址の主柱穴を構成し, 中央穴P-6が伴う。柱間距離は210~300cmとバラツキが認められるが, 柱穴の配置プランは若干新しいと考えられるNo.14・7住居址と同傾向を示している。

厚さ5~10cmの黄褐色地山ブロックを使用した貼り床面を除去すると, さらに火災痕跡をとどめる小型の住居址を検出できた。炭化材が明瞭に現れ, 火災後の住居址に大規模な整理を行わず, 貼り床を施したことが判明した。

長軸500cm, 短軸520cm, 床面積約18.84m²を測り, 床面海拔高75.25mを測る。P-7~P-10の4か所がNo.9B住居址の主柱穴を構成し, 中央穴P-12が伴う。P-1・2間241cm, P-2・3間255cm, P-3・4間237cm, P-4・5間194cmを測り, No.5・12住居址同様に広口の東辺を有する。

遺物はNo.9A住居址に伴うものが大半であるが長頸壺・甕・高杯形土器等の小片に限られ, 色調は赤褐色を基調としたものが多く, 胎土中に白色小粒砂を含む。74は精製粘土を使用した

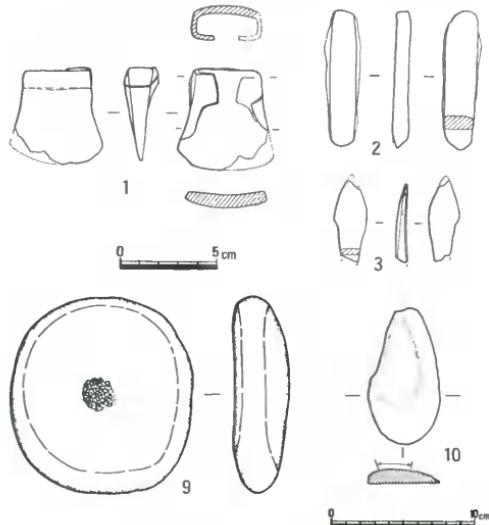
高杯である。鉄製品では手斧・ノミ状工具・鉄鎌が認められ, 1は最大長5.14cm, 幅4.25cm, 重量40.84gを測る。石器ではNo.8住居址等にみられるのと同様の9の叩き石があり, P-11の浅い土壌内(55×105cm)ではサヌカイトの大型剝片石核・小型剝片約20点が出土しており, 鉄器とのほぼ同時存在を示している。

時期は天・後・IIの古相に比定できる。

(2) 土 壤

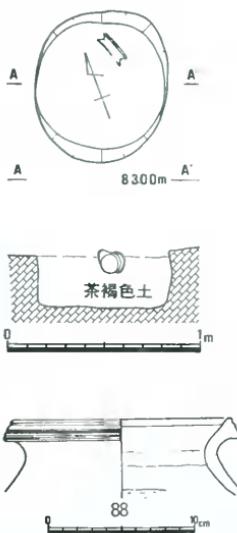
No.11 土 壤 (第18図)

A-1北の低い尾根筋上, 海抜



第17図 No.9住居址出土遺物(2)(1/3, 1/4)

天神坂遺跡



第18図 No.11 土 塚 (1/30)・
出土遺物 (1/4)

82.65m付近に位置する。長軸80cm、短軸58cm、深さ28cmを測る。若干袋状を呈するが、ほぼ垂直に掘り込まれた円形の土壤で、床面積約1.32m²を測る。土壤内部には茶褐色土が詰っており、上部軟質土中より一巡する甕形土器の口縁部が横位の状況で出土している。

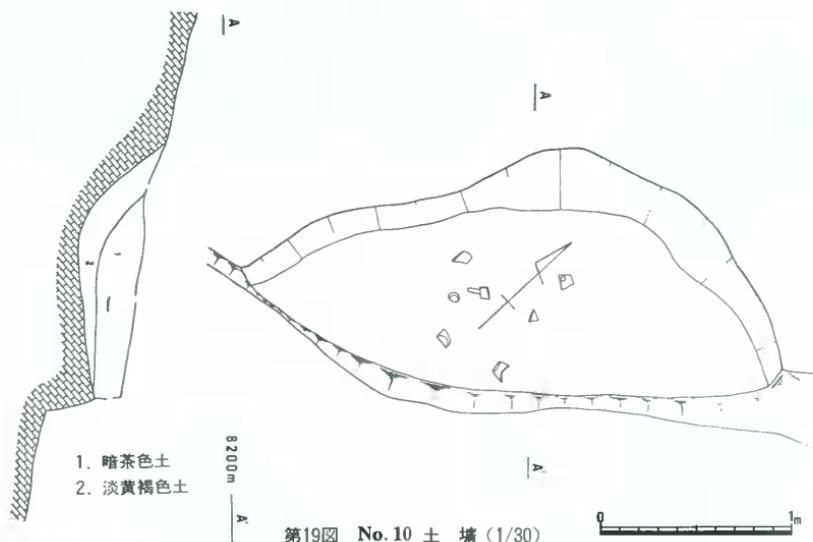
本土壤より北東約16mに同時期と考えられるNo.2住居址が位置している。土壤周縁には小ピットも検出できず、単独で存在したものと考えられる。

時期は天・後・Ⅱの古相に比定できる。

No. 10 土 塚 (第19・20・21図、図版20)

B-2北側の海拔80.30~80.50m間に位置し、南側半分が私道により削平を受けている。長軸290cm、短軸(130)cm、深さ40cmを測る大型土壤である。

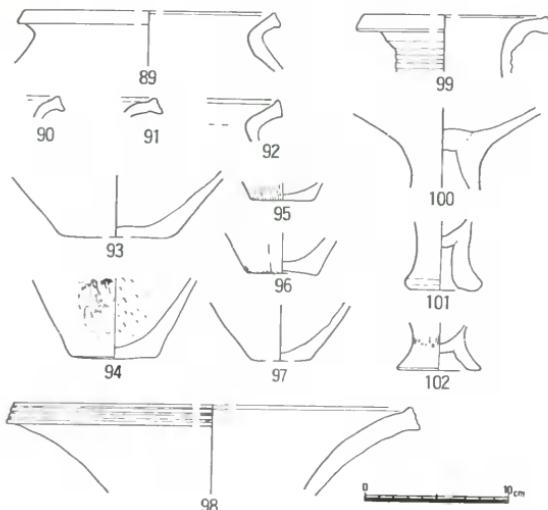
遺物は1層より集中して出土しており、壺・甕・高杯形土器、製塙土器等がある。すべて、器内外面の剝落が著しく、調整の観察は困難であるが、全体に明褐色を基調として、胎



第19図 No. 10 土 塚 (1/30)

土中に石英・長石粒を多く含む。

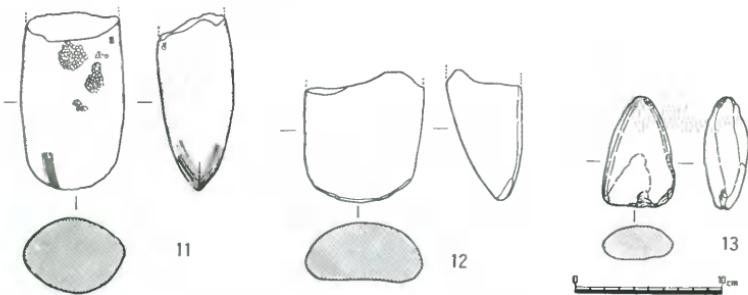
13は砂岩製の磨製石斧であり、本土墳覆土より出土しているが、形態的には縄文時代に属するものではなかろうか。12は玢岩の大型蛤刃石斧であり、破損後に叩き石として再利用され



第20図 No. 10 土壌出土遺物 (1/4)

た痕跡をとどめており、表掲の状況から本土墳に伴うと考えられる。11も大型蛤刃石斧であり、石材は玢岩を利用しており、破損後に放棄されたものと考えられる。計測値は石器一覧表を参照して下さい。

時期は天・後・IIの古相に比定できる。



第21図 N0. 10 土壌周辺出土遺物 (1/4)

(3) 段状遺構

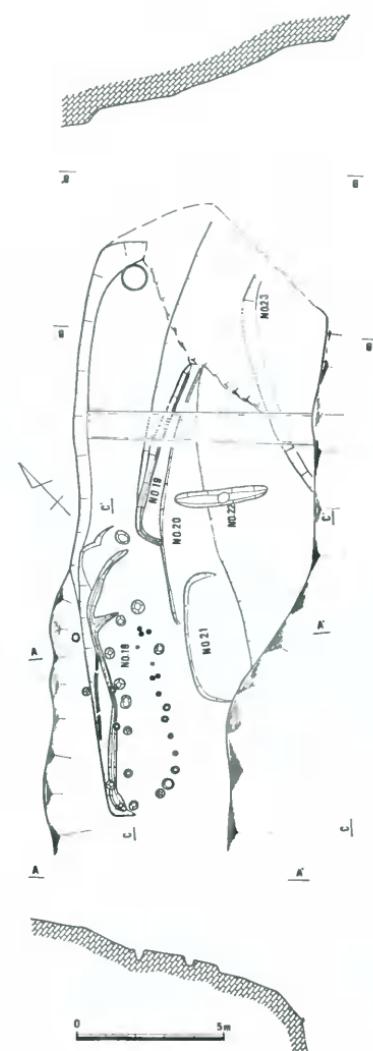
No. 18 段状遺構 (第22図、図版7・20)

D-3西側の海拔74.25~74.75m間に位置し、棟方向を等高線に沿わせた段状遺構である。谷

天神坂遺跡

頭を形成する等高線高所に位置し、東面を谷内に向か、長軸約10m、短軸約3mを測る。

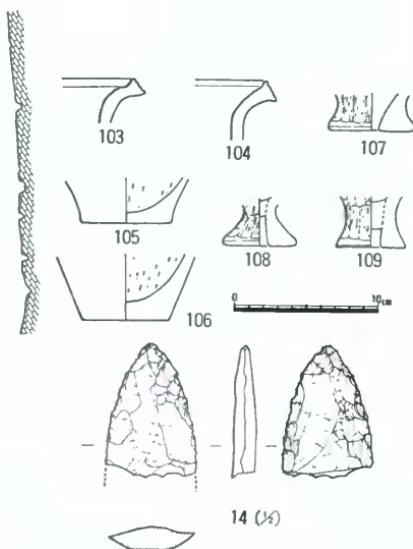
段と柱穴列の相互の関係は把握しがたいが、段に平行する2列の柱穴列が認められ、斜面部



上位柱穴列の柱穴径は25~30cmと大きく、下位柱穴列は20cm未満のものが中心となる。斜面部は消失しているが、この2列の柱穴列が機能して、長方形の小屋的なものが建っていたと考えられる。

時期決定は困難であるが、周辺出土土器および、No.8・9住居址からの距離関係等より、No.8・9住居址に近接する天・後・IIの古相に比定しておきたい。

No.19~23遺構についてもNo.18段状遺構に近い性格と考えられるが、大半が斜面部にて消滅してしまっており、いまひとつ具体性に欠ける。



第22図 No.18~23 遺構 (1/200)・出土遺物 (1/2, 1/4)

しかし、集落の中における目的をもった占地場所であったことは充分に考えられる。

14はNo.18段状遺構周辺にて出土した石槍の尖頭部である。石材はサヌカイトを利用して製作されており、最大長4.51cm、最大幅2.97cm、最大厚0.81cm、重量11.10gを測る。（高畠）

3. 古墳時代前期の遺構・遺物

(1) 住居址

No.3 住居址（第23図、図版9・20）

C-1西方の海拔83.60～83.80m間の平坦部近くに位置する堅穴式住居址である。長軸483cm、短軸433cm、床面積約20.90m²を測り、平面は不整円形を呈する。床面海拔高83.45mを測る。屋内には、主柱穴・中央穴・壁体溝からなり、P-1～P-4が主柱穴を構成し、186×30×36cmの長楕円形の中央穴が伴う。主柱穴P-1・2間258cm、P-2・3間238cm、P-3・4間256cm、P-4・5間240cmを測り、中央穴底より若干深いようである。底面には作業台石と考えられる広口面を有する板状の角礫3石が中央穴を囲むように存在する。

遺物は、床面より110～115の甕形土器と高杯形土器が出土しており、他の住居址出土土器とかわらず剥落が著しいものばかりである。東辺では花崗岩製の球状を呈する叩き石が出土しており、8.83×6.95×6.3cm、重量550gを測る。

No.14 住居址（第24・25図、図版10）

C・D-1中央の海拔83.50～83.80m間に位置し、No.4住居址と重複する堅穴式住居址である。長軸640cm、短軸630cm、床面積33.16m²を測り、平面円形を呈する。No.4住居址と東辺を除く一部壁体を共有しており、使用者の共通意識の跡をうかがわせる。

屋内は、主柱穴・壁体溝からなり、P-6～P-10が主柱穴を構成し、中央穴は確認できなかったが、2か所の焼土面が存在する。住居址中央の焼土面がNo.14住居址に伴う可能性がある。北東部約30m下位の、近似する遺物を出土するNo.7住居址とはほぼ同面積にて、主柱穴5角形プランの柱間および配列位置は類似点が多く、同規模の堅穴式住居址と考えられる。

遺物は、No.4住居址の覆土中の土器片が中心になり、小片ではあるが時期決定に使用せざるを得ない状況である。

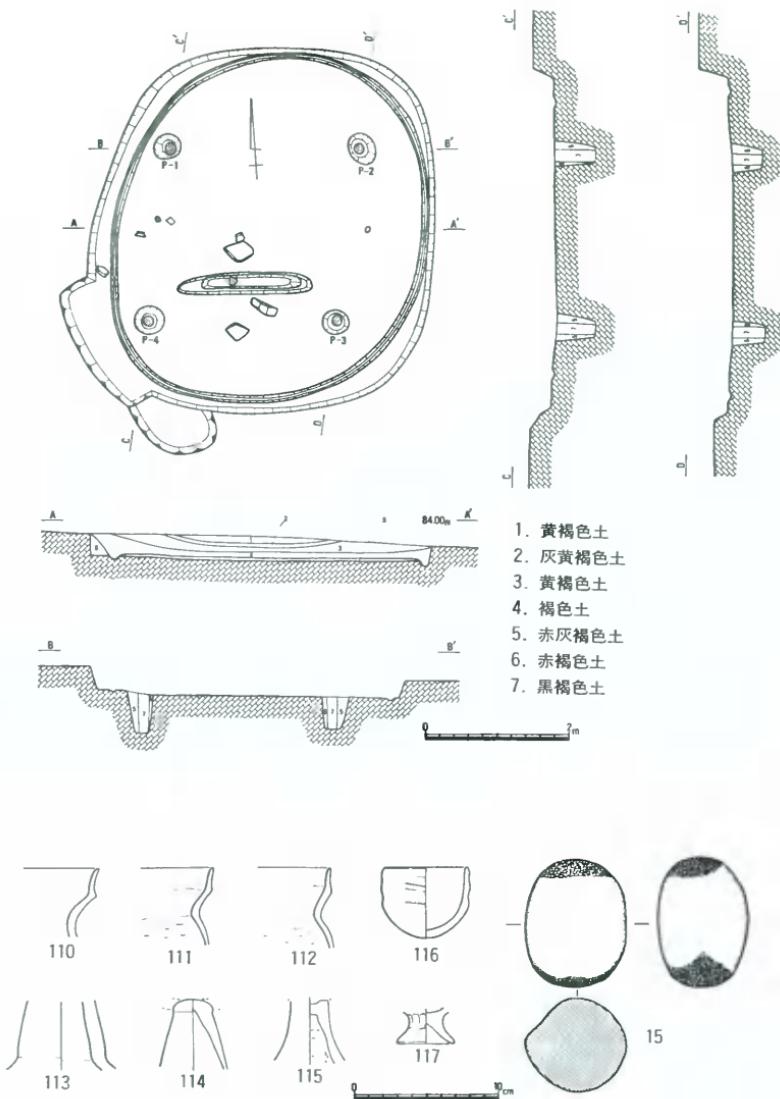
時期は、天・後・IIの古相に比定できる。

No.4 住居址（第24・25図、図版10）

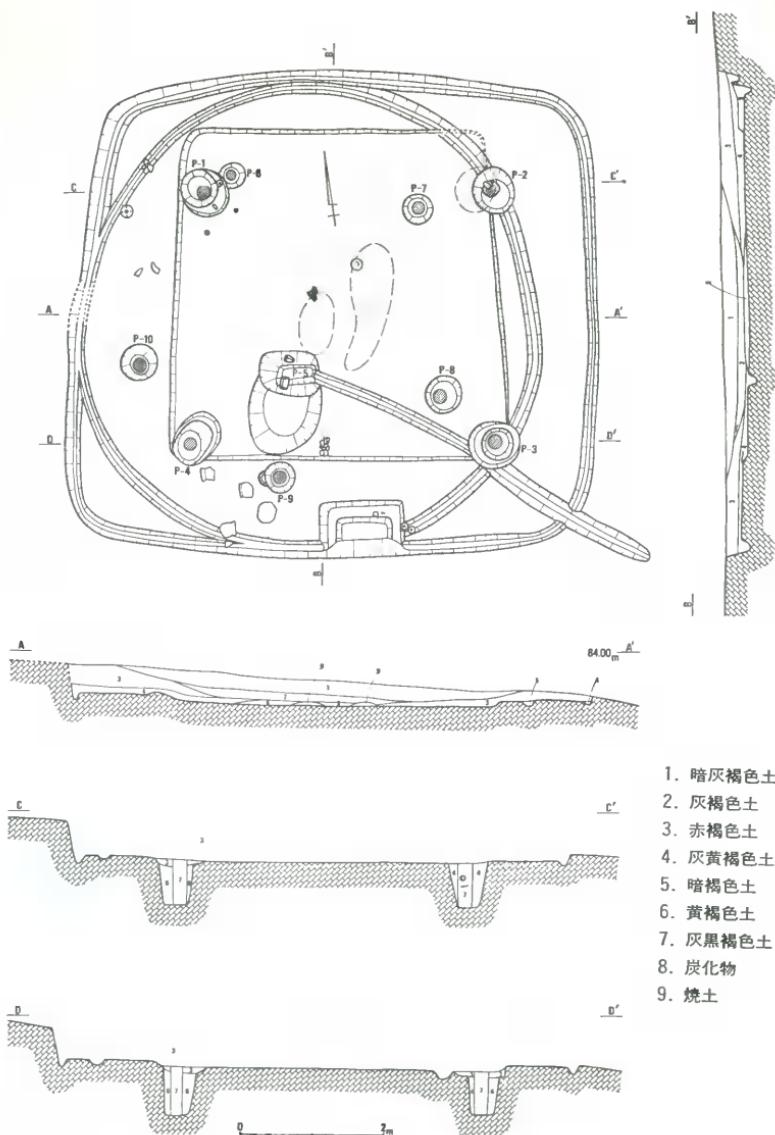
C・D-1中央の海拔83.50～83.80m間に位置し、No.14住居址をカットして造られた堅穴式住居址である。長軸723cm、短軸666cm、床面積約48.15m²を測り、平面は南側に広く台形を呈する。

屋内は、主柱穴・壁体溝・ベッド状遺構・方形土壙・中央穴からなり、P-1～P-4が主柱穴

天神坂遺跡

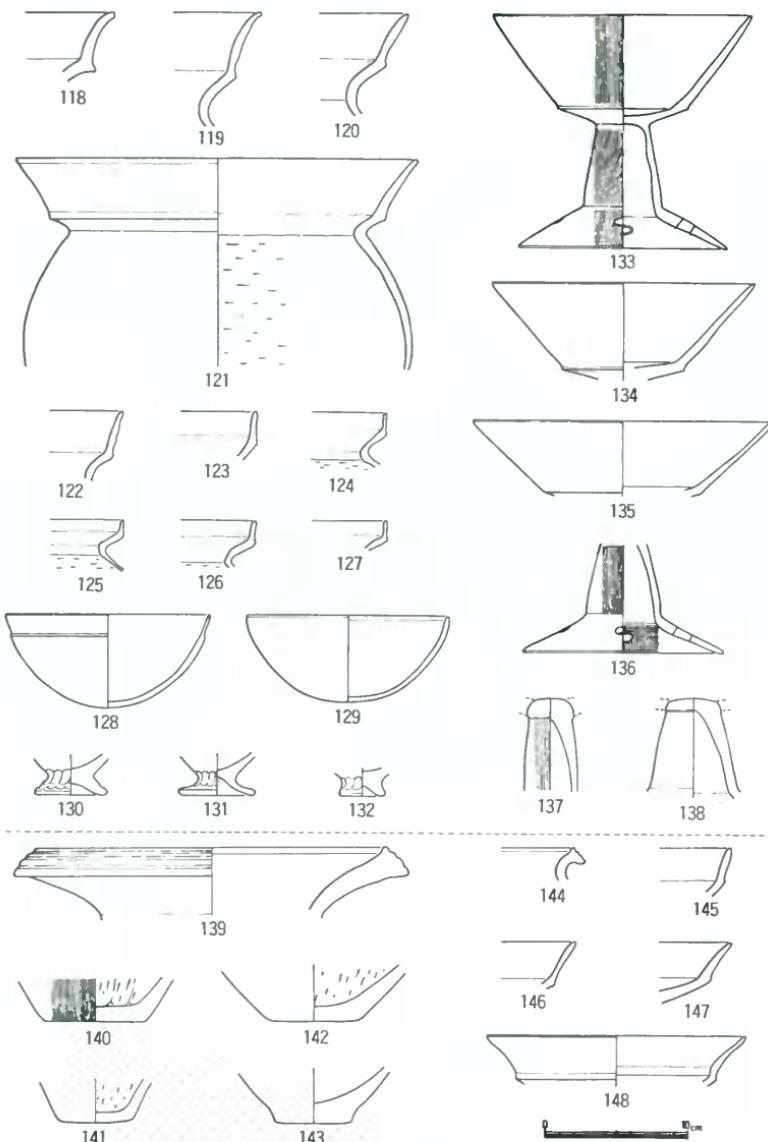


第23図 No. 3 住居址 (1/80)・出土遺物 (1/4)



第24図 No. 4・14 住居址 (1/80)

天神坂遺跡



第25図 No. 4・14 住居址出土遺物 (1/4)

を構成し、P-5が中央穴にあたる。そこより、住居の南東隅に向かい、さらに斜面下へと外溝となって延長約520cmを測る。この類の溝は同時期と考えられるNo.1住居址にも認められた。P-1・2間396cm、P-2・3間345cm、P-3・4間419cm、P-4・5間349cmを測り、住居プラン同様に南辺が広口を呈する。南辺中央の東側に設けられた116×65×30cmの長方形土壙の類はNo.1・6住居址にもほぼ同一場所に付設されている。

遺物は、覆土中・床面から出土しており、土器類は床面に密着するものより、大型品にもかかわらず、覆土中層より出土するものが多く、121・133等がそれにあたる。129は床面より出土の楕形土器である。他の住居址出土遺物と同様に、器内外面の剥落が著しく、調整観察等は困難であるところは共通している。しかし、総じて器壁は薄く、壺・甕形土器の口縁部の拡張、高杯形土器の杯部の立ち上がりの直線、および内湾化等の特長をあげることができる。

時期は、天・古・Ⅱの古相に比定できる。

No.6 住居址（第26図、図版8-2）

D-1中央東の海拔83.15~83.60mに位置し、弥生時代後期のNo.12住居址に重複した格好でカットを行っている竪穴式住居址である。長軸425cm、短軸403cm、床面積約17.12m²を測り、平面形は東辺が広がる台形を呈する。床面海拔高83.01mを測る。

屋内は主柱穴・壁体溝・貯蔵穴からなり、P-1・2の2本で主柱穴を構成し、南辺中央部に方形土壙を付設している。この時期のものに普遍的に認められる付属施設である。

遺物は床面、および方形土壙内より出土しており、精製粘土による土器片が認められる。すべて器内外面の剥落が著しく、調整観察は不可能である。

No.1 住居址（第27・28図、図版11・20）

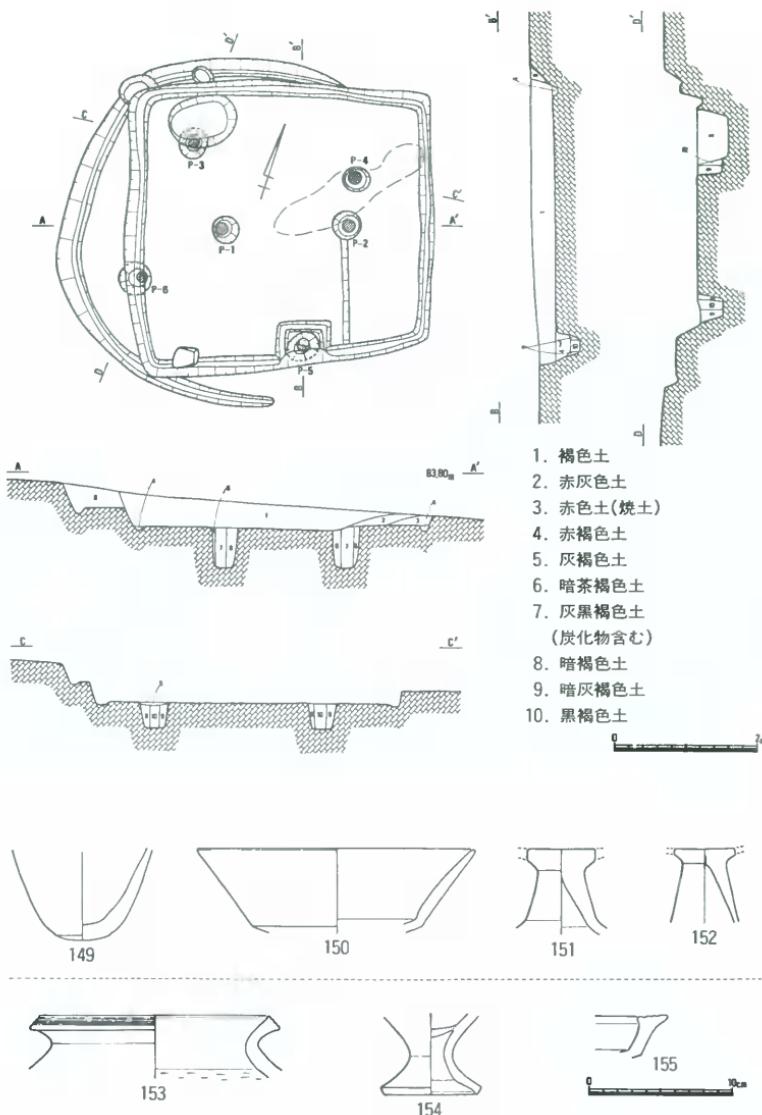
A-1東の海拔81.60~82.30m間に位置する竪穴式住居址である。長軸570cm、短軸565cm、床面積約32.20m²を測り、平面正方形を呈する。床面海拔高81.70mを測る。

屋内は主柱穴・中央穴・壁体溝・土壙・溝からなり、P-1~P-4がNo.1A住居址の主柱穴を構成し、中央穴P-5が伴う。P-1・2間242cm、P-2・3間228cm、P-3・4間252cm、P-4・5間258cmを測り、各柱穴とも柱痕が認められる。南壁に付設されたP-10内より製塩土器の脚部が出土している。

前述の4柱穴周辺には2回以上の建て替えを行ったと考えられる柱穴の切り合いが存在し、床面に巡る周溝数とも符合する。P-7・8等もNo.1A住居址に伴う柱穴と考えられるが、用途は明らかにできなかった。

遺物は覆土中のものが多数を占め、床面から出土したものは160の手焙り形土器1点のみである。覆土中には弥生時代中期後半より古墳時代前半期までの各小片が混在しており、石器にいたってはサヌカイト製のスクレイバー、および石鎌、粘板岩・凝灰岩製の砥石が出土してい

天神坂遺跡

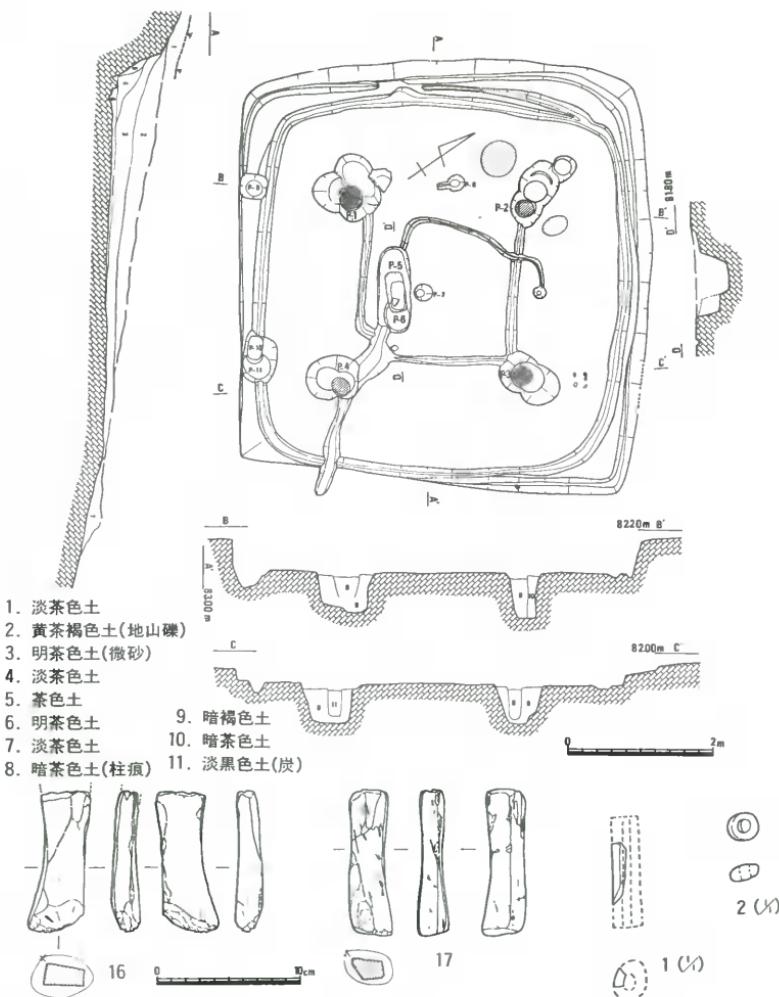


第26図 No. 6・12 住居址 (1/80)・出土遺物 (1/4)

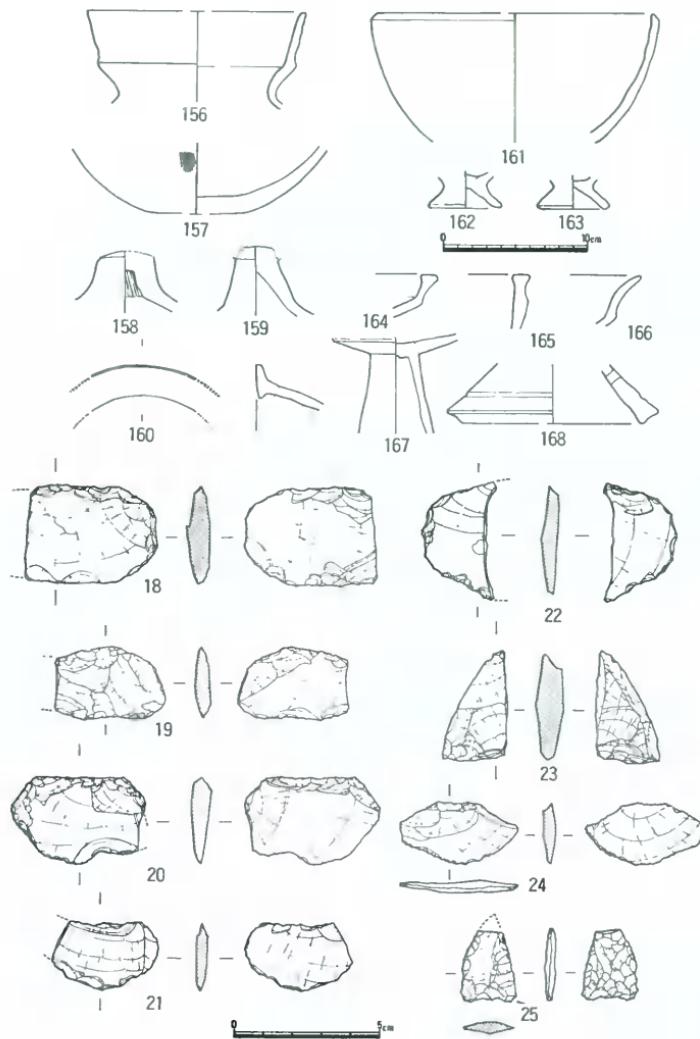
る。

他に色調淡青色のガラス製小玉、碧玉製の管玉小片等も見られる。

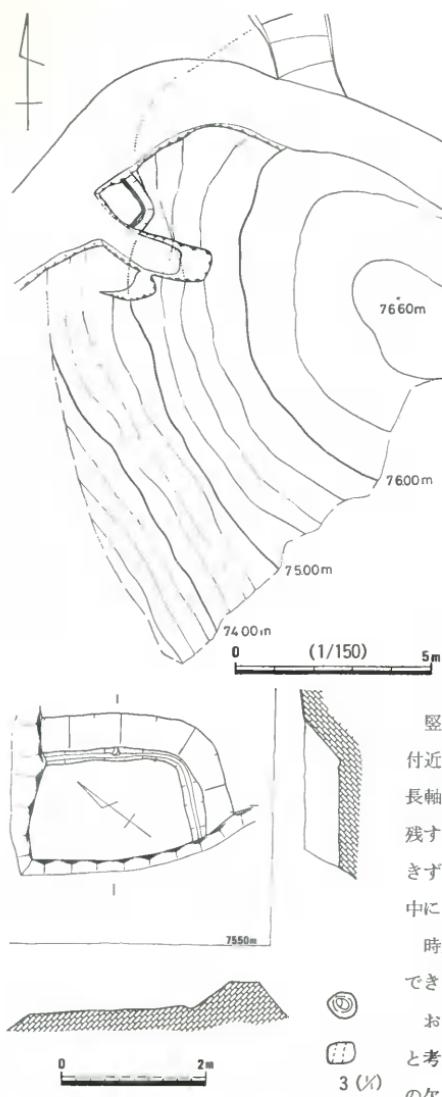
時期は天・古・Ⅱの古相に比定できる。



第27図 No. 1 住居址 (1/80)・出土遺物 (1) (1/1, 1/4)



第28図 No. 1 住居址出土遺物(2) (1/2, 1/4)



第29図 No. 24 住居址(1/80)・出土遺物(1/1)

No. 2 住居址, No. 4 住居址, No. 6 住居址の3軒が同時存在をしていたと考えられ、竪穴式住居址の円形プランより方形プランに移行する変換期にあたると考えられる。円形より方形への変化は、奥坂遺跡にもほぼ同時期に認められる。

住居規模は個々に異なるが、住居内南辺に併設された長方形土壙等に共通点をみいだすことができる。

No. 24 住居址 (第29図、図版20)

1981年4月の分布調査によって、ブルドーザー走行後の盛土中よりガラス製小玉を表面採集したことに端を発し、調査の運びとなつた遺構である。天神坂遺跡 東緩斜面より南西に約200m、天神坂1282-10番地にかろうじて残存した面積140m²、海拔73.10~76.60m間の丘陵部である。

竪穴式住居は丘陵西緩斜面の海拔75.00m付近に位置し、床面海拔高74.60mを測る。長軸(280)cm、短軸(200)cm、深さ50cmを残すのみであり、柱穴等は検出することができず、壁体構造および明褐色を基調とする覆土中に、土器小片がみられるにとどまった。

時期は天・後・IIの古相に比定することができる。

おそらく、周辺部にも遺構が存在していたと考えられるが、閑知する認識、および実動の欠如による結果であろうか。(高畠)

天神坂遺跡

表-3 天神坂遺跡堅穴式住居址一覧表

細別 住居址	形 形	規 模	床面積 (m ²)	主柱穴	柱間距離(北辺より)							中央穴 (cm)			地土	付属施設	時期	備考
					P-1 3	P-2 3	P-3 4	P-4 3	P-5 3	P-6 3	P-7 1	形	幅	深さ				
2A	隅丸 6角形	667 (570)	34.81	7	253	250	200	230	185	217	190	円形	49×47	53	—	—	—	○ 天・後・II 半壌 小型→大型
2B	隅丸 6角形	553 (520)	26.22	6	250	222	207	253	200	215	—	円形	75×63	54	—	—	—	— 天・後・II
5	円形	536	520	22.72	4	270	225	237	230	—	—	円形	108×95	60	—	—	—	— 天・後・II 火災
8A	円形	800 (800)	(50.99)	10	230	225	200	210	210	295	—	—	—	—	—	—	○ 天・後・II	No7A住居址 により削除
8B	円形	(720) (720)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	天・後・II
12	不整 円形	488 (400)	18.84	4	225	240	238	198	—	—	—	—	—	—	—	—	—	天・後・II No6住居址 により削除
9A	不整 円形	580	573	26.22	5	300	284	253	223	210	—	円形	56×46	48	○	—	—	○ 42×30 ×15 天・後・II 火災 小型→大型
9B	不整 円形	500	490	18.84	6	241	255	232	194	—	—	円形	75×72	30	—	—	—	— 天・後・II 火災
3	不整 円形	483	433	20.9	4	258	238	256	240	—	—	長脚円形	186×30	36	—	—	—	— 天・古・I
7A	円形	690	650	33.26	5	270	236	270	263	266	—	上括円	113×55	10	—	—	—	— 天・古・I と風致
7B	円形	650	635	—	5	—	—	—	—	—	—	下円形	49×40	45	—	—	—	— 天・古・I
14	円形	640	630	33.16	5	262	261	247	247	290	—	—	—	—	—	—	—	— 天・古・I
6	方形 (台形)	425	403	17.12	2	175	—	—	—	—	—	—	—	—	○ ○	○ 35×27 ×13	○ 75×50 天・古・II	
4	方形 (台形)	723	666	48.15	4	396	345	419	345	—	—	—	長方形	86×63	—	○ ○	116×65 ×30	— 天・古・II
1A	方形 (台形)	570	565	32.2	4	242	228	252	258	—	—	—	長方形	55×26	48	○	—	— ○ 32×28 ×17 天・古・II 中央穴より 住居址外に のびる溝あり
1B	方形	523	523	27.35	4	270	258	286	258	—	—	円形	45×38	33	—	—	—	— 主柱穴を結ぶ溝あり
24	隅丸 方形	(224) (150)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	— ブルドーザーによる削除	

4. 古代末から中世の遺構・遺物

(1) 土 墓

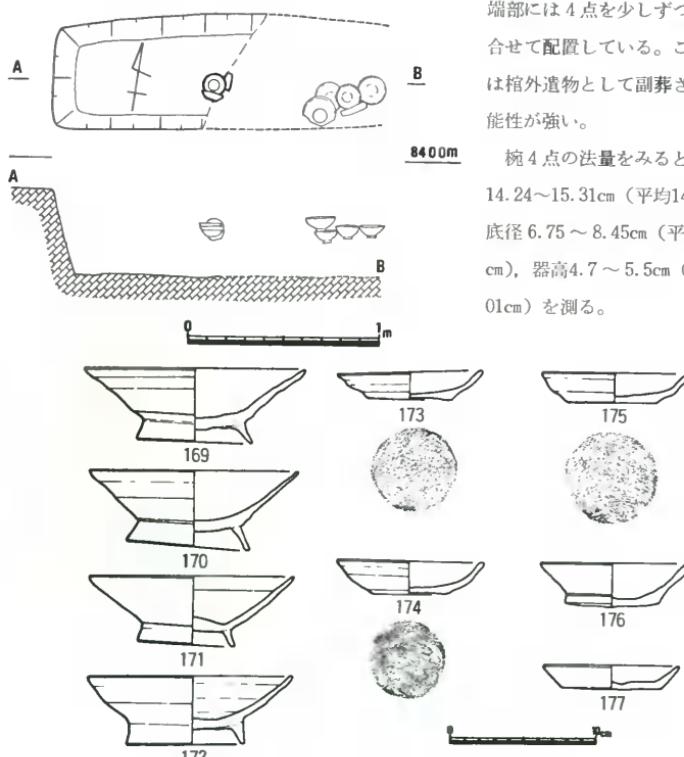
No.15 土 墓 (第30図、図版13-1・22)

C-1北側の海拔83.80～83.90m付近の平坦部に造られた土壙墓である。

No.4住居址北辺をカットして東西に主軸方向をとり、平面長方形を呈する。しかし、住居址の掘り上げを先に実施してしまい、遺物の出土により土壙を確認する結果に至った。その遺物分布より規模を推定すると、長軸約180cm、短軸約60cm、深さ約45cm、床面海拔高83.40mを測る。遺物は椀4点、小型の皿4点が完形状態で出土している。その出土状況を記すと、計8点ともに床面より約17cm浮いた状態で存在し、中央部に小皿を4枚重ね、脚部と考えられる北東

端部には4点を少しづつ重なり合せて配置している。この状況は棺外遺物として副葬された可能性が強い。

椀4点の法量をみると、口径14.24～15.31cm（平均14.74cm）、底径6.75～8.45cm（平均7.88cm）、器高4.7～5.5cm（平均5.01cm）を測る。



第30図 No. 15 土壙 (1/30)・出土遺物 (1/4)

天神坂遺跡

形態は「早島式土器」とは異り、色調は褐色系統を基調としており、手法では杯体部に水挽きの著しい痕跡をとどめる。若干高めの付高台である。

小皿の法量は、口径9.3~10.75cm（平均10.06）、底径5~7.2cm（平均6.14cm）、器高1.65~2.35（2.09cm）を測る。173~175は糸切り痕跡が認められる。土器の回転は右回りである。

時期は平安時代と考えられる。

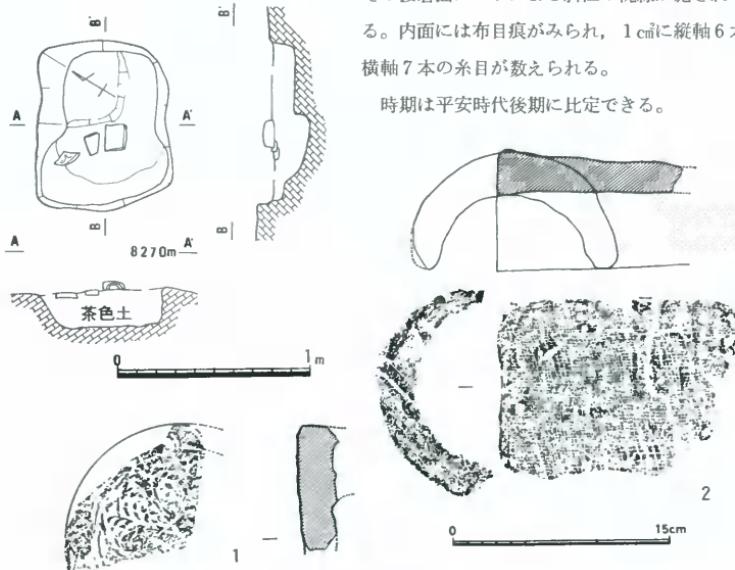
No.17 土 壤 (第31図)

D-1北東の海拔82.60m付近に位置する土壤であり、近代の肥料穴により北東部を破壊されている。長軸88cm、短軸68cmを測り、底面は凹凸が目立ち、平面隅丸長方形を呈する。土壤内部には淡茶褐色土が充満し、その上層に軒丸瓦の瓦当部、および丸瓦部分の破片が出土しており、それぞれ焼成が異なる。1は須恵質であり、1/4ほどの破片である。暗黒青色を呈し、胎土中に約2mm前後の長石、石英、黒色砂粒を多く含む。

軒丸瓦は直径約16.6cm、厚さ2.55cmを測り、宝相華文が施されているが、押圧する際に「範」のズレが認められ、二重写しの不鮮明な仕上がりとなっている。東側斜面約15m下位の、Na13寺跡と同范の軒丸瓦は認められない。

2は土師質にて黄褐色を呈し、胎土中に4mm前後の石英粒を多く含む。軒丸部分が剥落し、その接着面にヘラによる斜位の沈線が施されている。内面には布目痕がみられ、1cmに縦軸6本、横軸7本の糸目が数えられる。

時期は平安時代後期に比定できる。



第31図 No.17 土 壤 (1/30)・出土遺物 (1/4)

(2) 寺 跡

No.13 大内田庵寺跡 (第32~59図、図版14~19・21~43)

分布調査時に整理箱1杯分の瓦を表採したことと端を発し、幾本かの試掘溝により瓦溜りを確認した。それに基づいて瓦の検出を行い、南北方向に約20m東西方向に約5mの範囲で瓦が分布することが判明し、礎石3個(2×1間)、北端部の土器溜り等から、火災に遭遇して放棄された小規模な寺跡であることが理解できた。しかし、宅地・私道・果樹園等による破壊が随所に認められ、寺域の規模はつかみがたい。東側斜面部は特に激しく削平されている。

丘陵頂部より東緩斜面に向かい約20m下降した、D-3中央の海拔76~78m間に位置する。その占地は緩斜面より平坦部に移る海拔76m付近の地形変換部を利用している。しかし、等高線に平行する掘り方ではなく南北の方位を基調とし、等高線を斜位に切る格好での断面「L」字形の掘開を実施している。平面形は北端が東部に屈曲する「L」字形を呈し、南北20m、東西5mのテラスを形成しており、約100m²を測る。

平面「L」字形の掘り方プラン内に、一回り小型の「L」字形の溝が掘られており、長さ900cm、幅50cmを測る。それは雨落ち溝の機能を有していたものと考えられ、この上部を覆うように多量の瓦が集中して出土している。そして溝の長軸幅内に溝と平行して3個の礎石が一直線に並び、心心距離は約250cmを測る。

板状の安山岩系の石材を利用しておらず、最大で79×54×16cm、最小で48×45×18cmを測る。配石には礎石より一回り大きい深い穴を掘り、安定をはかるために栗石・埋土を行い、その上に設置している。北端の礎石が他の石より約5cm高いレベルに設置されている。

若干前述したものと重複するが、火災後にしばらくあら屋として建っていた形跡が土層断面より認められ、ある時期に自然の作用等により一挙に倒壊したものと考えられる。崩れた屋根が掘り方傾斜面に当たり、再び東に傾斜した格好で埋没している。すなわち、寺の西・北面の屋根がついに当る西・北斜面壁に向かって崩れ、その傾斜に沿って滑り落ちた形状をとどめる。正常での角度の屋根が崩れ落ち、斜面壁に沿って角度が逆転したわけである。

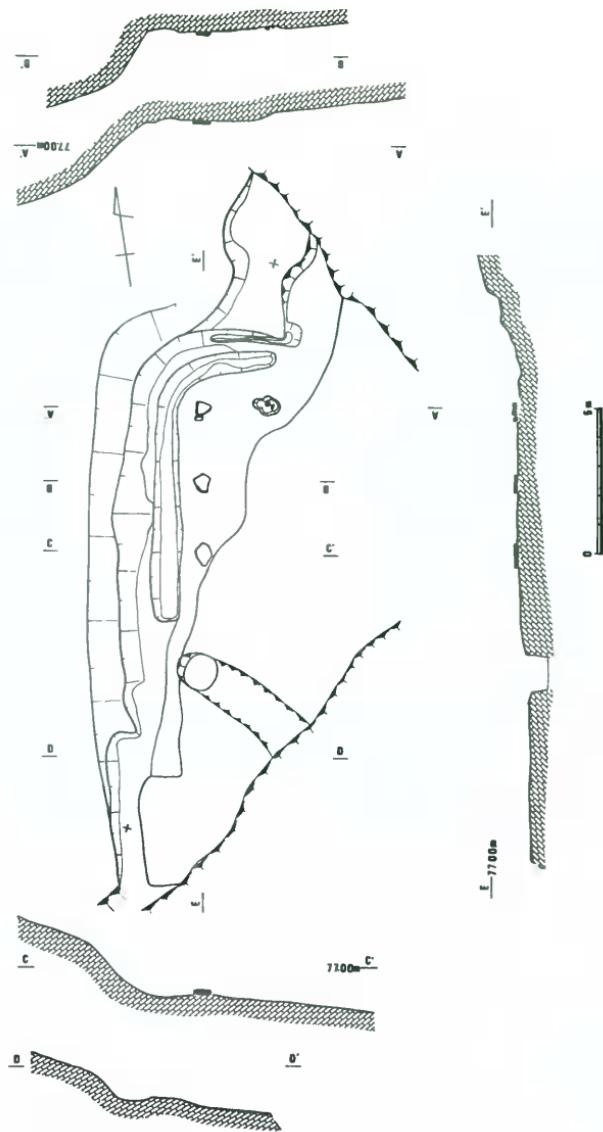
瓦

出土した瓦の量は整理コンテナに約189箱を数える。内訳は平瓦117箱、丸瓦62箱、軒平瓦9箱、軒丸瓦1箱である。平瓦・丸瓦の類は数多く、軒平瓦20点、軒丸瓦5点と少ない。

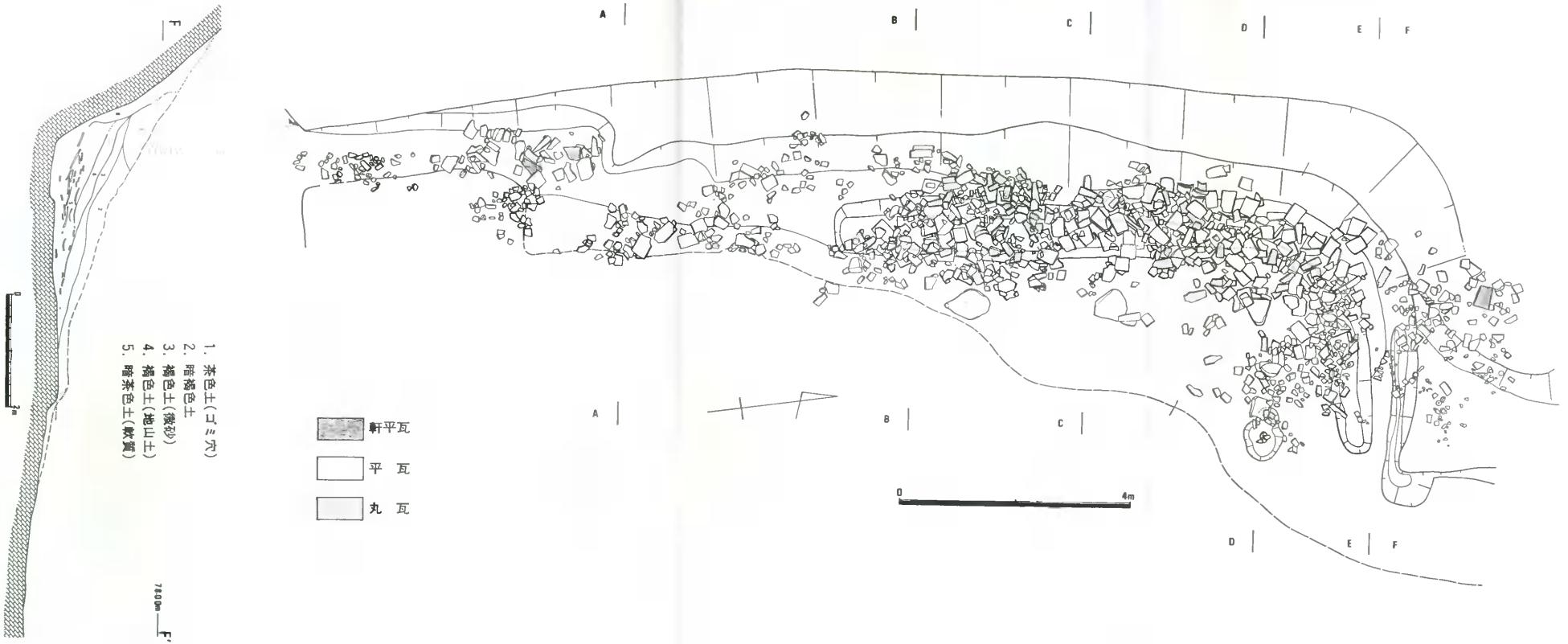
ここでは完形品をリストアップして図表化し、若干の気付いた点を述べておきたい。まず、**軒丸瓦**は宝相華文2点、複弁蓮花文3点(この内2点同范)の4類計5点が出土している。須恵質の1点、土師質の4点と小規模な遺構に多様な軒丸瓦が存在する。

次に**軒平瓦**は20点出土しており、瓦当は均整唐草文の同范と思われるが、顎に直線類、Aa・Ab、曲線類B、段顎Cの4種類が認められる。凹凸両面に縄叩き目が施されたものが多く、

天神坂遺跡



第32図 No.13 大内田廐寺跡 (1/200)



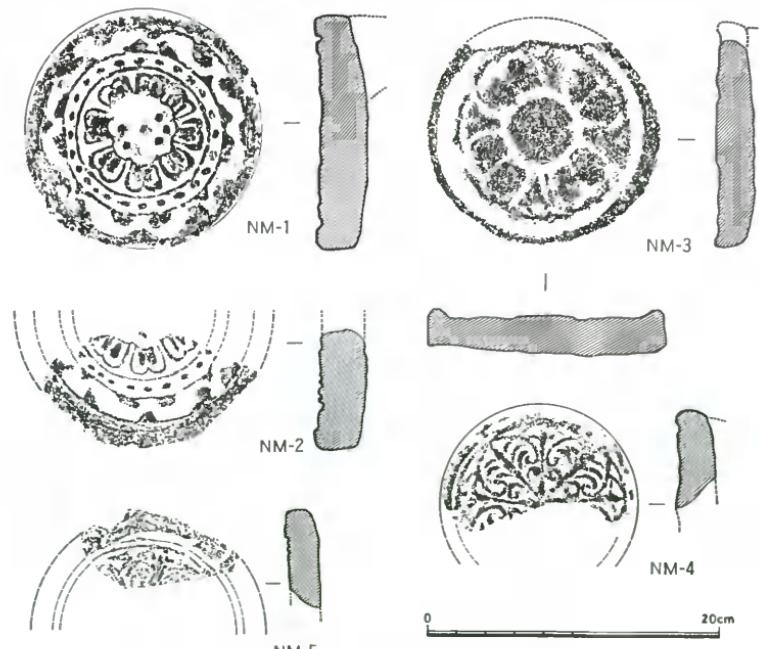
第33図 No.13 大内田廃寺跡 (1/80)

凹面布目の横12×縦14本を前後するものが中心を占め、大幅に異なる布目は存在しない。このことは、瓦当の同范を裏付ける有力な手掛りとなりうる。しかし、焼成・色調では各種・各様相を呈示している。長さでは35~39cm、広口幅24.0~27.5cm、重量4.95~6.00kgと若干の差が認められる。長軸に対して横位の粘土紐6本の接合部分が観察できるものもある。製作方法は一枚造りである。

平瓦は約140点の観察を行った。凸面の縁叩き目は大半の瓦にみられ、凹面の縁叩き目はほとんどみあたらない。凹面布目は大半の瓦にみられ、逆に凸面の布目はほとんどみあたらない傾向がうかがえる。凹面に施された布目は1cm²内に横2×縦3本、横3×縦3本、横4×縦5本、横5×縦5本、横6×縦6本、横7×縦8本、横8×縦8本、横9×縦9本、横10×縦10本、横11×縦11本、横12×縦13本と各種が認められる。

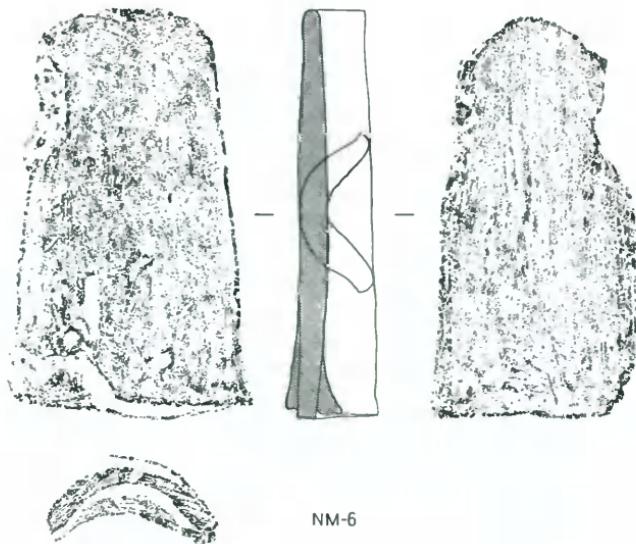
またその異りは、瓦の長さの上でも29.7~37.9cmと7cm以上との差が存在し、底の幅は22.3~27.0cmとやはり同様のことがいえる。重量では、2.13~4.94kgまでの個体差が存在する。

丸瓦は約140点の観察を行った。そして形態には行基葺式と玉縁つきの2種類が認められ、

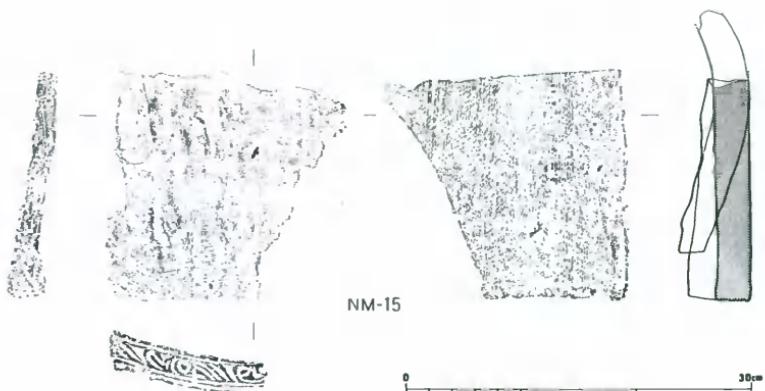


第34図 出土遺物(1)軒丸瓦(1/4)

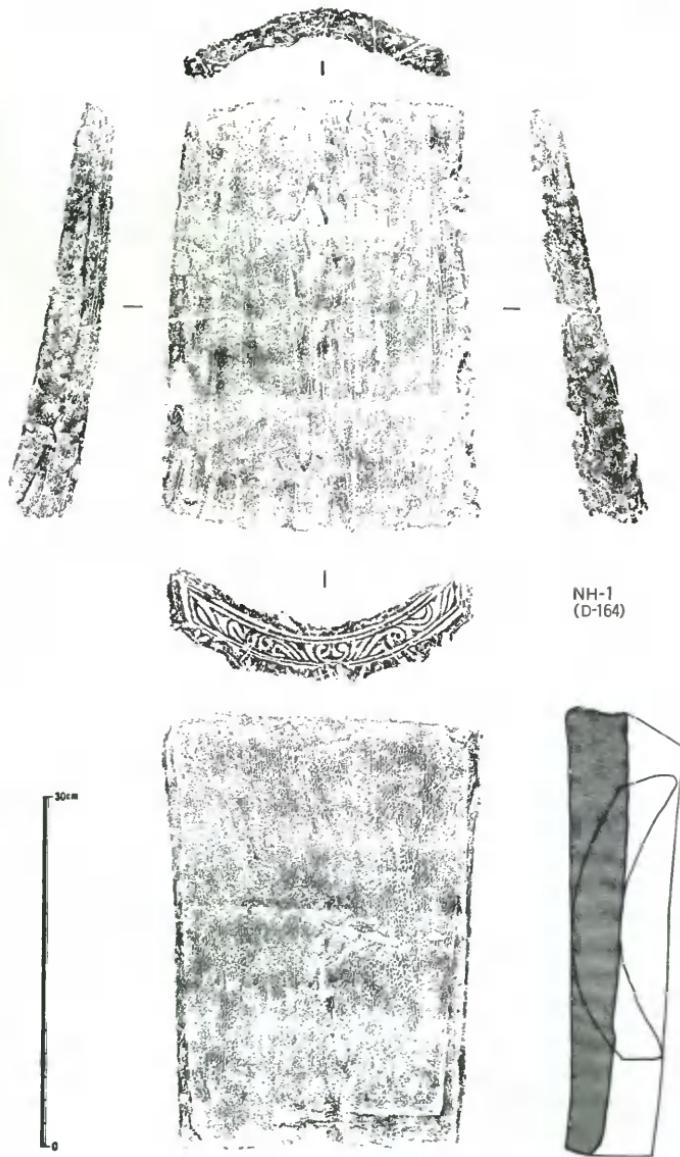
天神坂遺跡



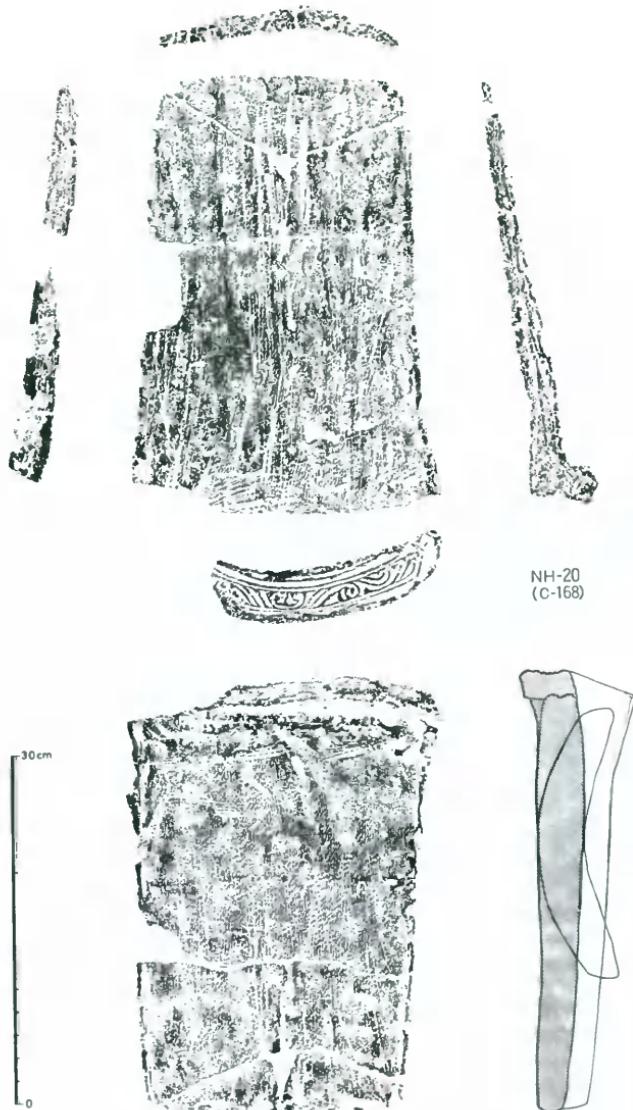
第35図 出土遺物(2)軒丸瓦(1/5)



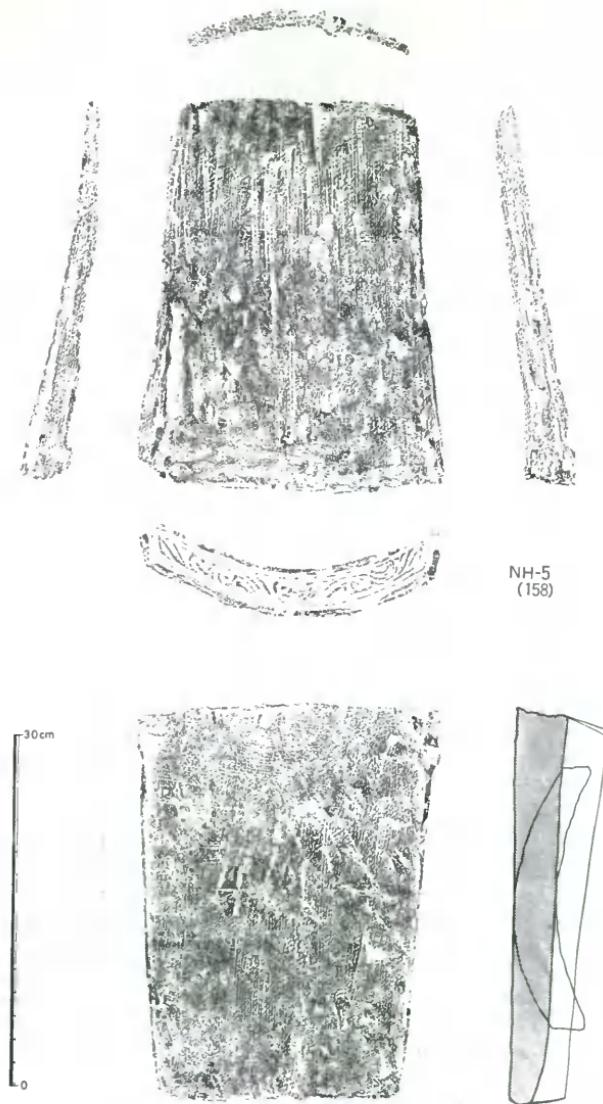
第36図 出土遺物(3)軒平瓦(1/5)



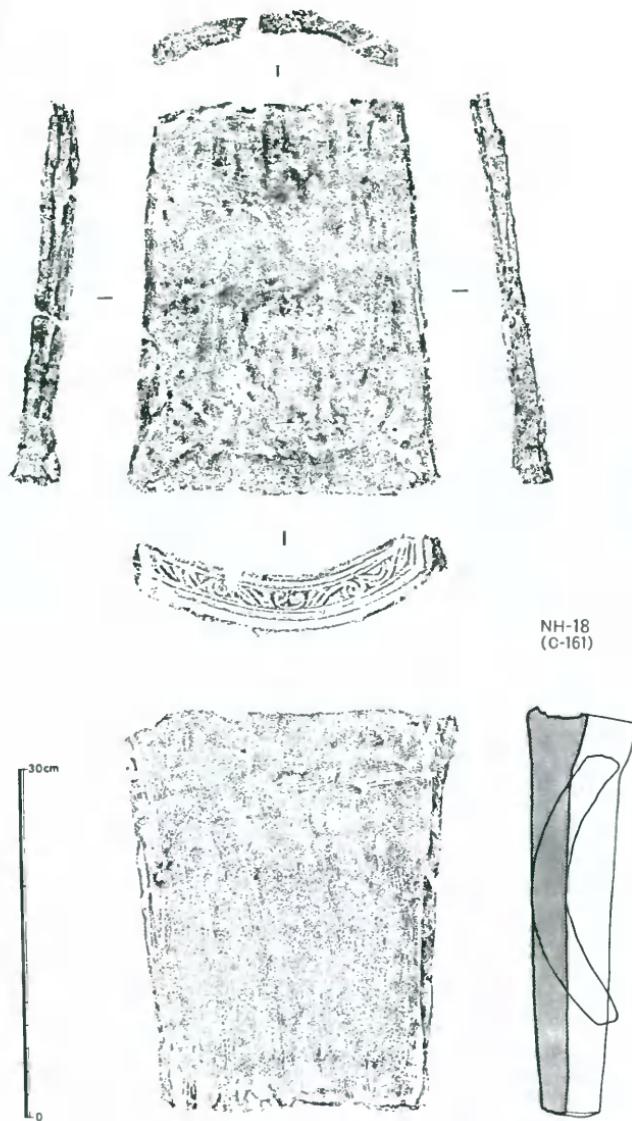
第37図 出土遺物(4)軒平瓦(1/5)



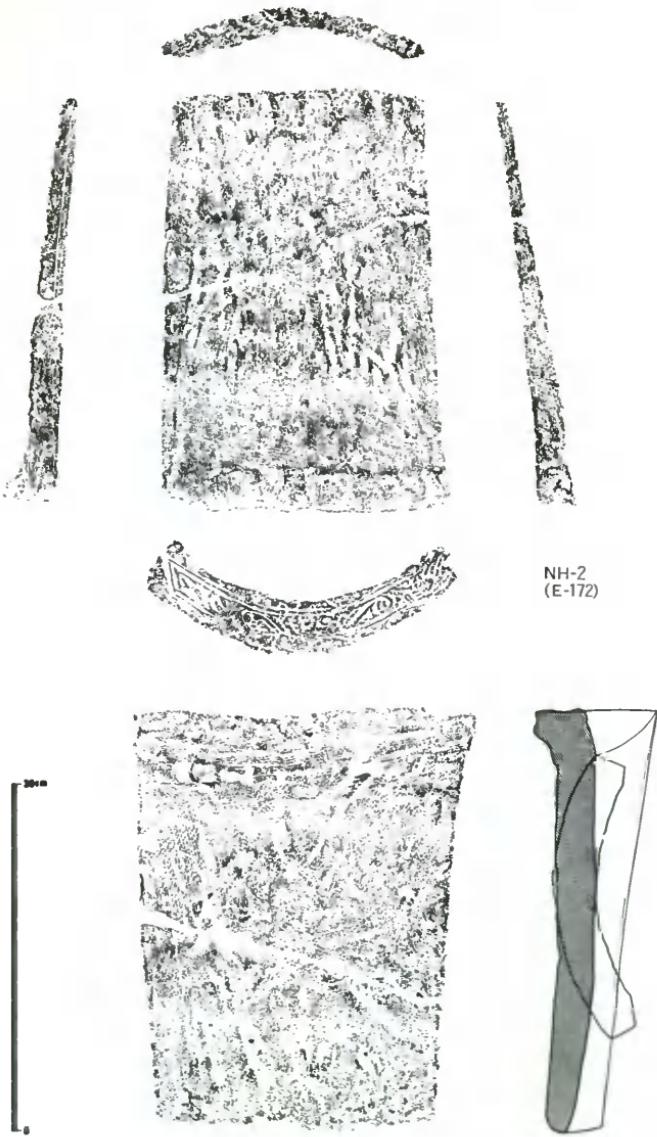
第38図 出土遺物(5)軒平瓦(1/5)



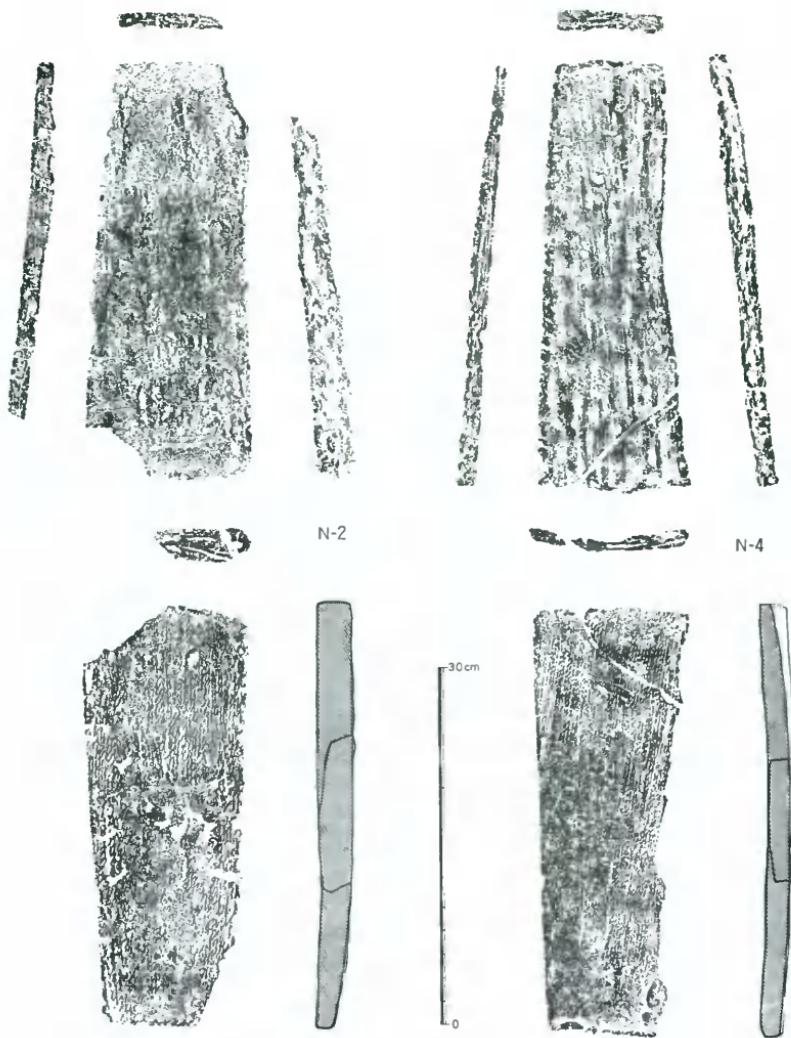
第39図 出土遺物(6)軒平瓦(1/5)



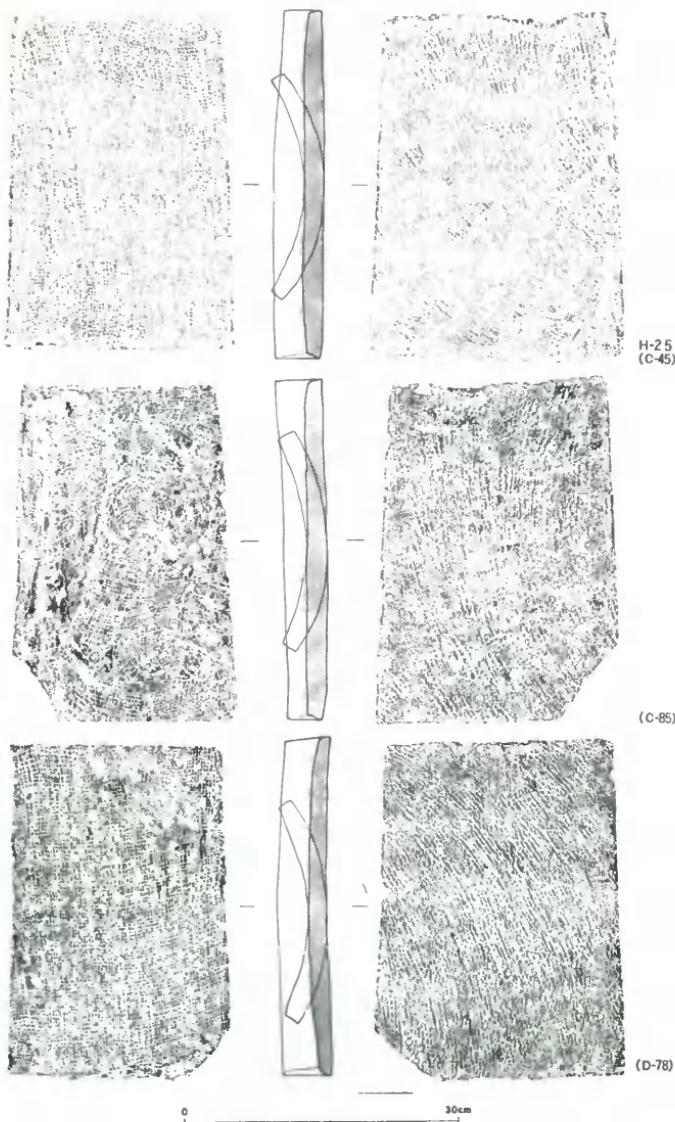
第40図 出土遺物(7)軒平瓦(1/5)



第41図 出土遺物(8) 軒平瓦(1/5)

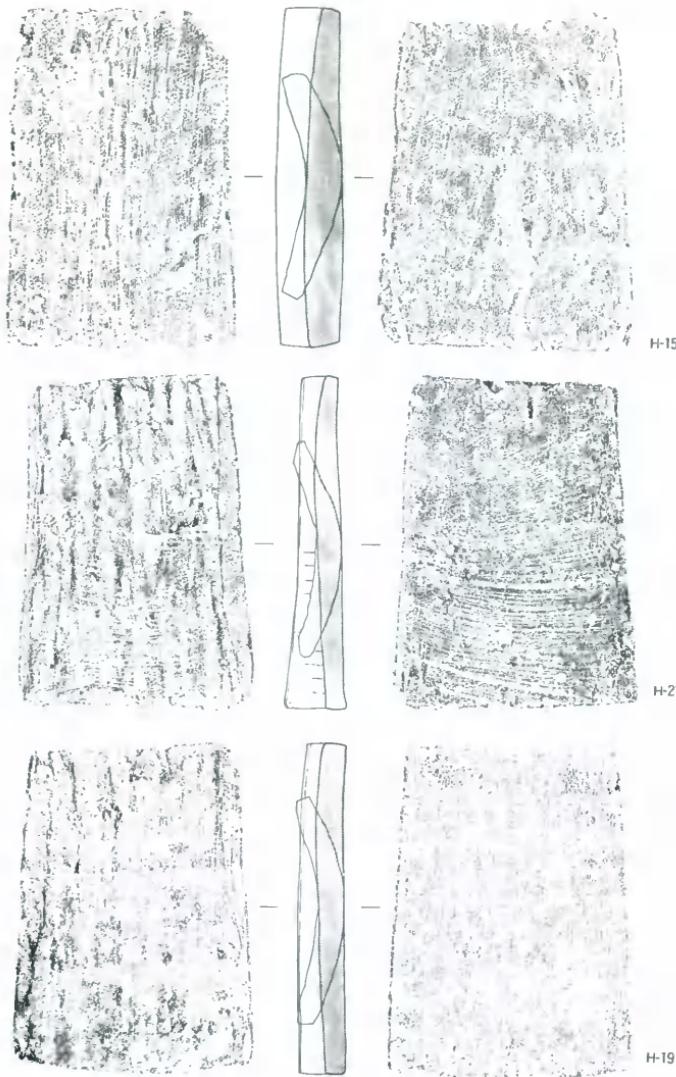


第42図 出土遺物(9) 紋斗瓦(1/5)

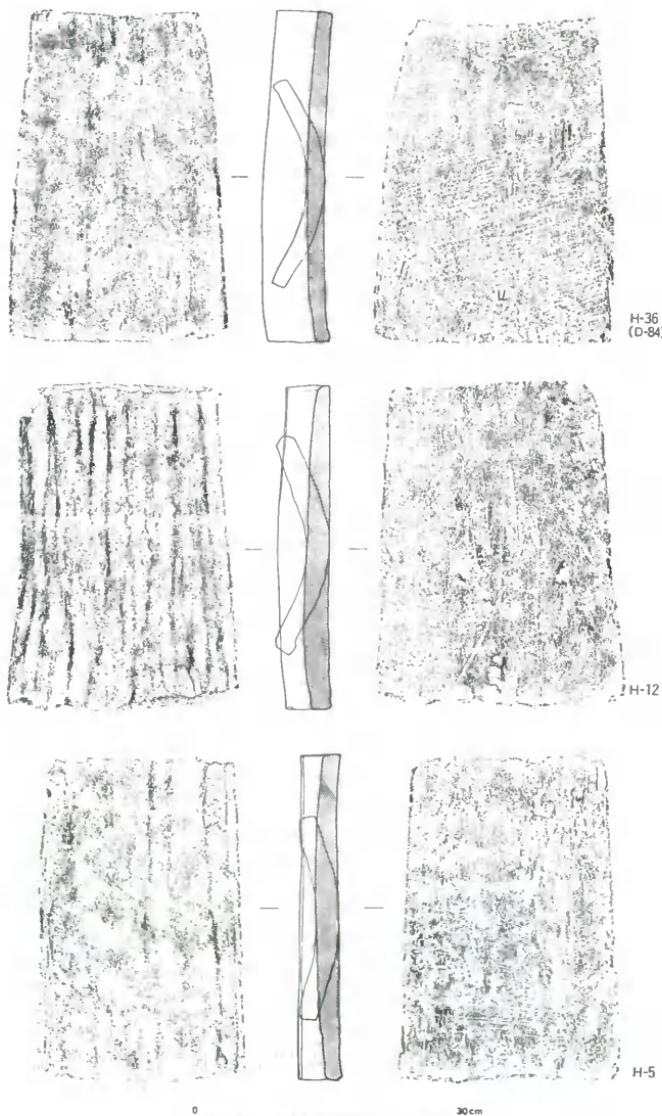


第43図 出土遺物 (10) 平瓦

天神坂遺跡

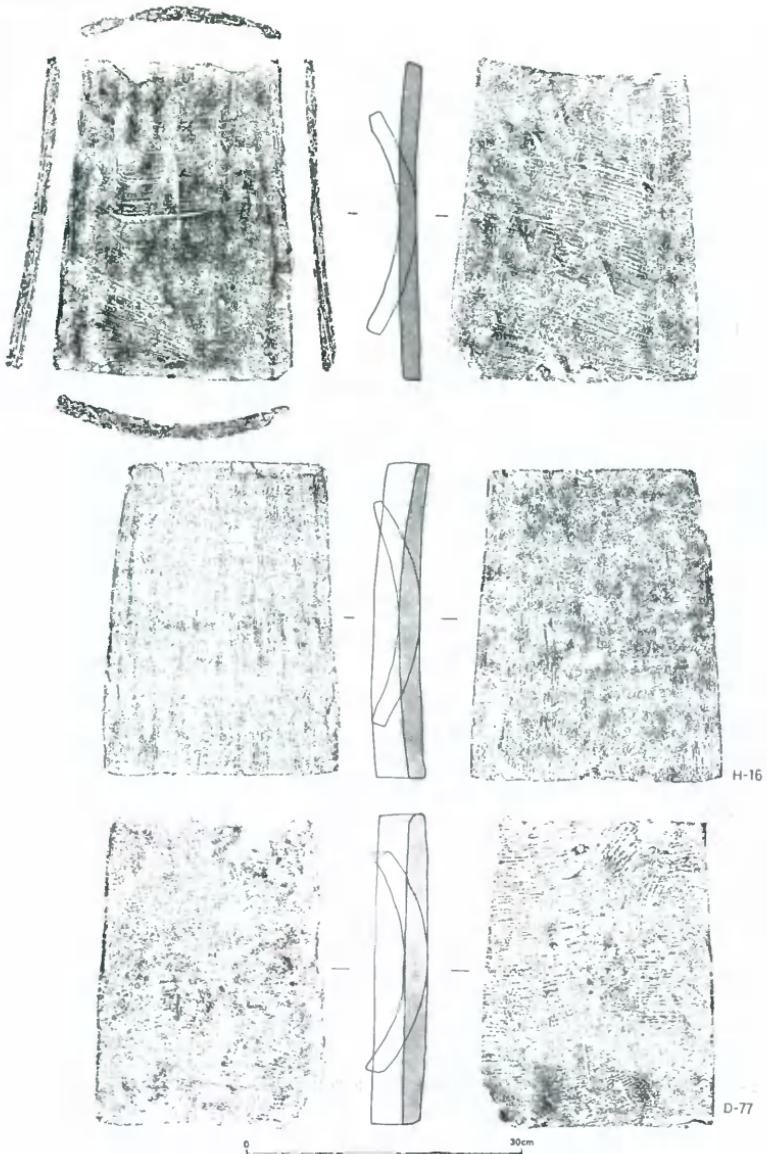


第44図 出土遺物 (11) 平瓦



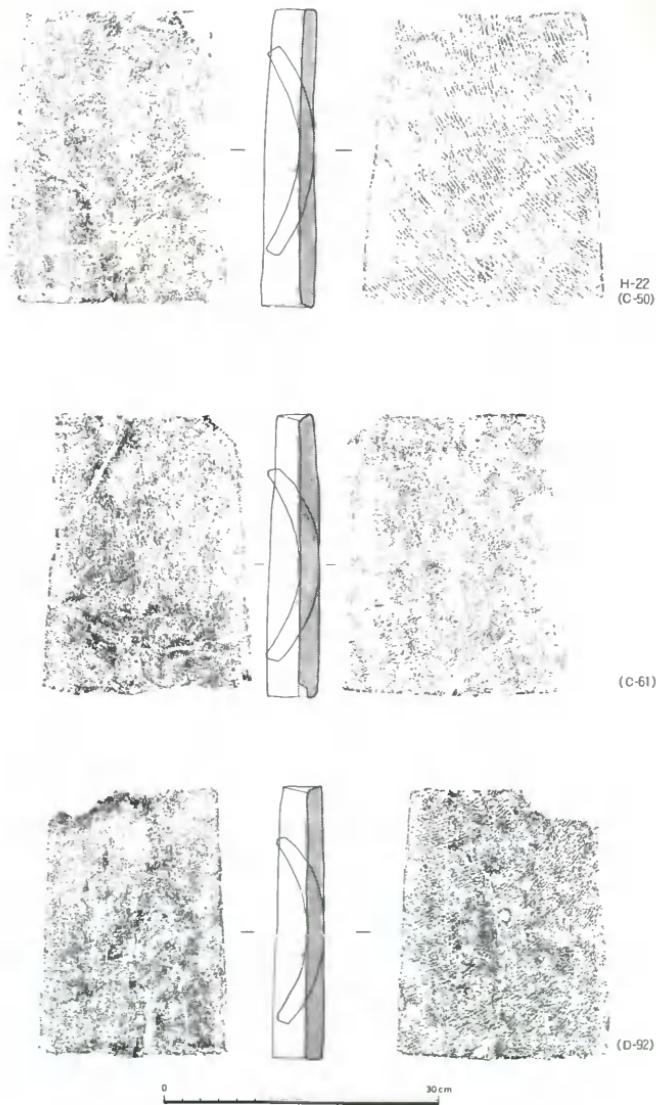
第45図 出土遺物 (12) 平瓦

天神坂遺跡



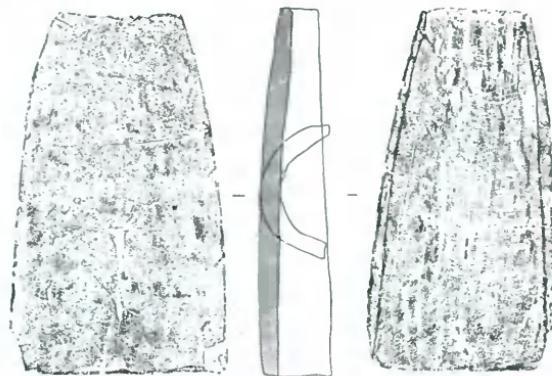
第46図 出土遺物 (13) 平瓦

第4章 第1節 天神坂遺跡の概要

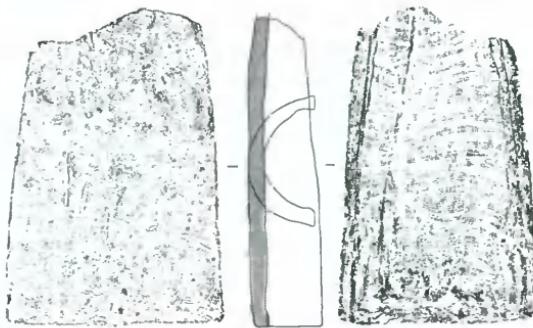


第47図 出土遺物 (14) 平瓦

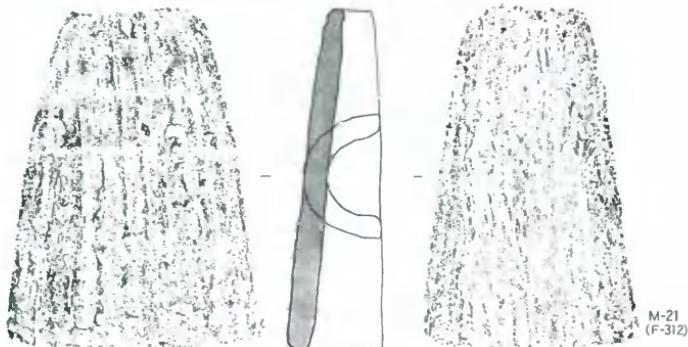
天神坂遺跡



(D-242)



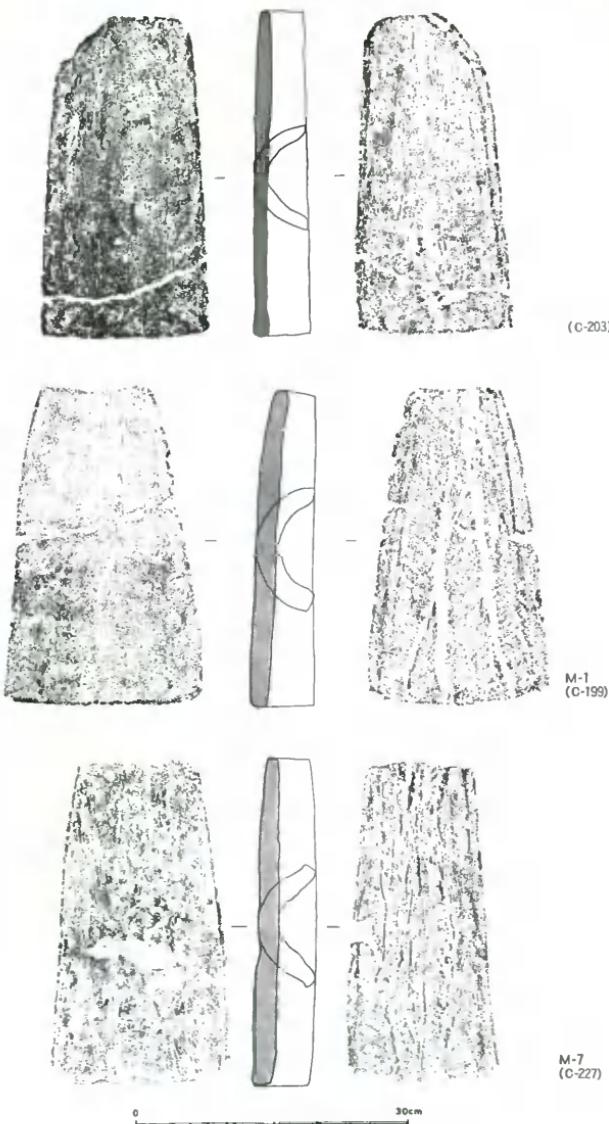
(D-245)



M-21
(F-312)

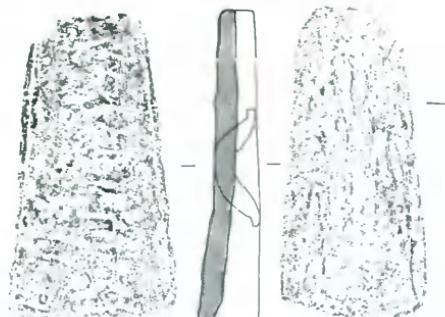
第48図 出土遺物 (15) 丸瓦

第4章 第1節 天神坂遺跡の概要

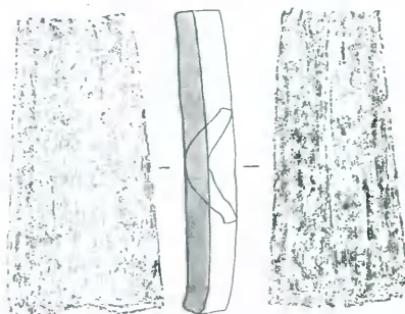


第49図 出土遺物 (16) 丸瓦

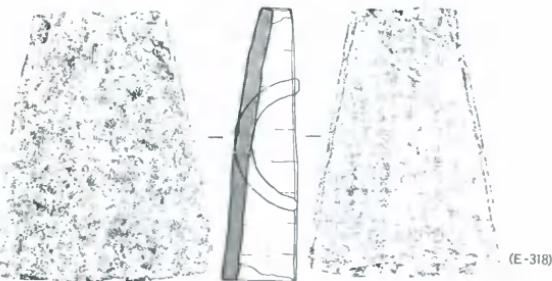
天神坂遺跡



(C-234)



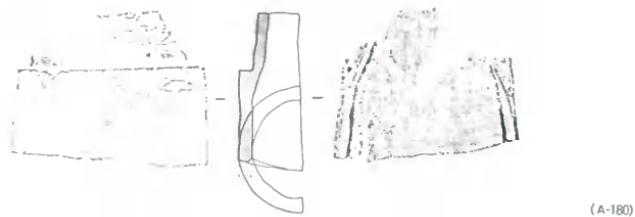
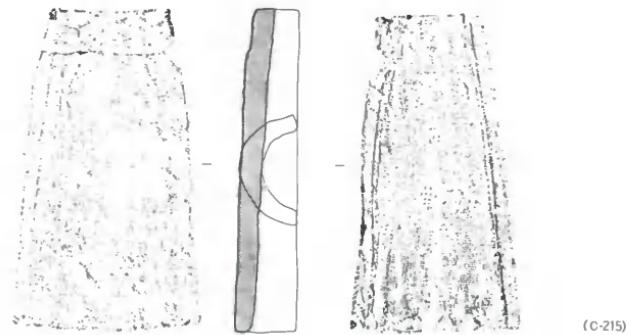
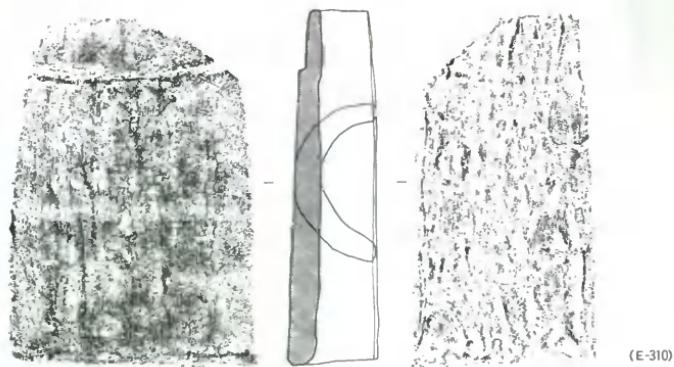
M-8
(C-223)



(E-318)

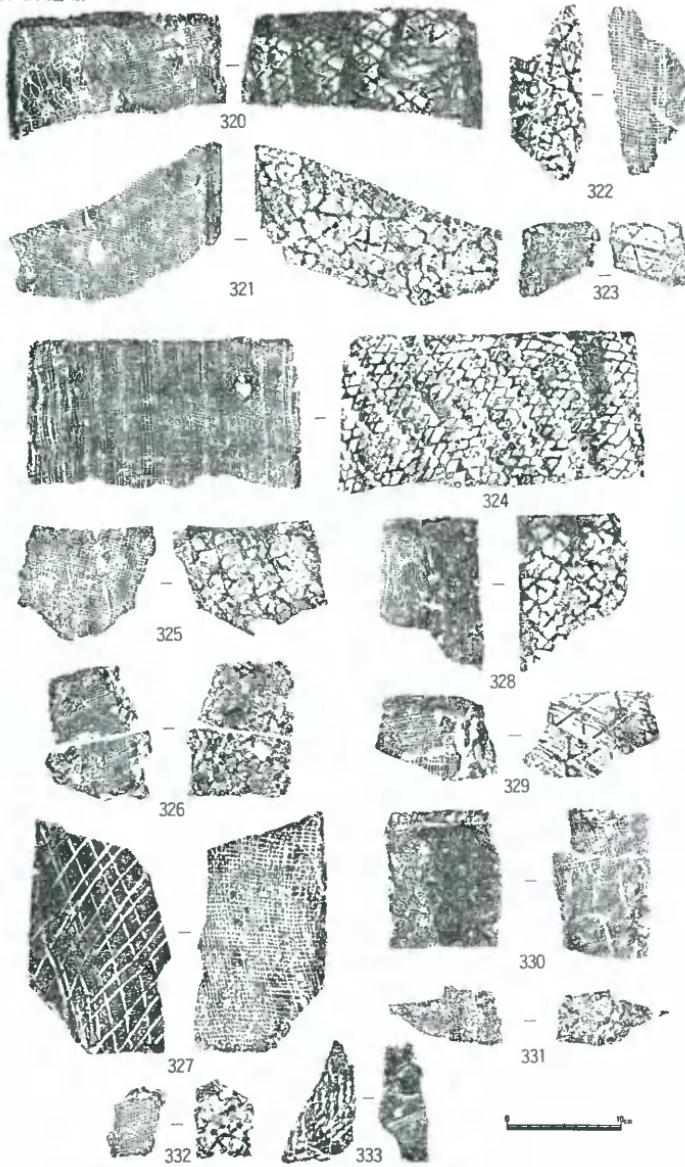
0 30 cm

第50図 出土遺物 (17) 丸瓦



第51図 出土遺物 (18) 九瓦

天神坂遺跡

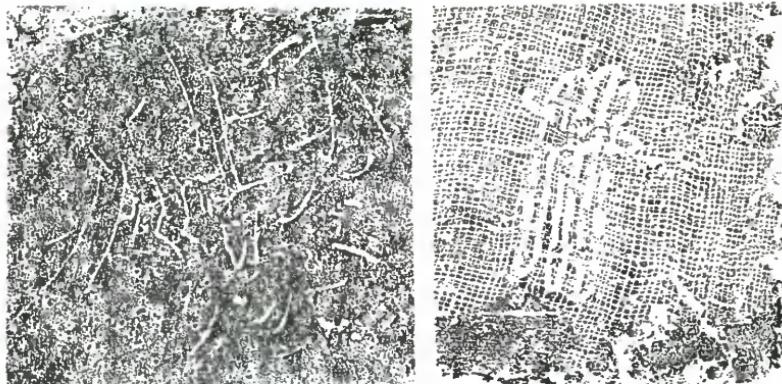


第52図 出土遺物(19) 平瓦(1/5)

行基葺式のものが大半を占め、玉縁つきは数点を数えるのみである。また行基葺きの狭口両端を打ち欠いて玉縁つき風にしたもののがいくらか混在している。長さ30.3~39.9cm、広口幅12.0~18.1cm、重さ1.37~2.53kgを測り、平瓦との重量差は共有する。

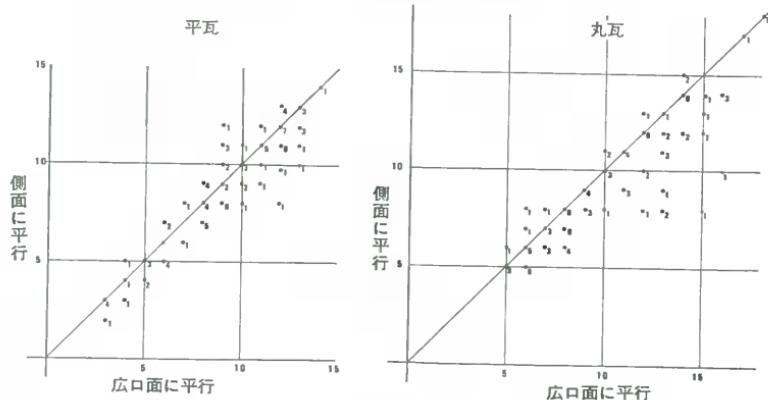
熨斗瓦は、数枚のみ確認したが、小片の検討までにはおよばなかった。第42図に掲載したもので半截の状態はあまり整然とは行われていない。

瓦の概観を述べてきたが、第52図の平瓦拓本は前述の瓦と叩き目において異りをみせるものである。出土瓦中の量は少なく、コンテナ1箱分であり、繩叩き目瓦の補助的な利用を想定させる。



第53図 出土遺物(20) 平瓦線刻(1/2)

表4 平・丸瓦凹面布目密度表



天神坂遺跡

凸面は斜格子叩き目を施し、凹面は布目が認められ、横4本×縦5本～横8本×縦9本までが存在する。327は凸面にヘラガキによる斜格子が描かれており、凹面布目は横4本×縦5本の糸目を数える。

他では第53図の平瓦凹面に描かれた線刻が認められ、想像をたくましくすれば人物の顔を考えることができるが、明確ではない。また、右図はスタンプが押されているがやはりはっきりしない。

瓦以外の出土遺物に土師器皿・椀・鉢、須恵器壺・甕等がある。F区画の北辺溝北側に集中分布し、小片も含めて80点以上の土師器椀・皿片と、須恵器は4点のみがみられた。

小皿より観察してゆくと、口径9cm前後、器高1.5cmを測り、底部にヘラオコシ痕跡をとどめるものが多く、色調は灰白色および明褐色系統が中心を占める。178～200までがこれにあたる。また、丸底にて指ナデによるものが数点混在する。他に色調赤褐色を呈し、口径12.9cm、器高2.7cmを測る中皿類が同じく数点混在する。

ついで、從来より呼称されている早島式土器（註2）の椀がみられ、205は口径13.98cm、底径6.7cm、器高4.8cmを測り、色調灰黄白色を呈する。底径においてはほぼ共通した数値を得ることができる。205～218がこれらにあたる。205は屋根瓦を除去し、最下位より出土した椀であり、寺の火災を受けた時期を如実に表わすものと考える。椀類では早島式土器と比較して、若干付高台が高く、器壁の厚い219～224等がみられ、ロクロは左回り、底部には板目が残る。

219は口径14.8cm、底径8.1cm、器高5.4cmを測り、色調灰白色を呈する。小皿類中には内面見込みに煤が付着しているものがある。

須恵器片では231が器内外面に水挽きの凹凸が著しく目立ち、色調暗茶褐色を呈する。

178～228が土師器であり、229～232が須恵器である。

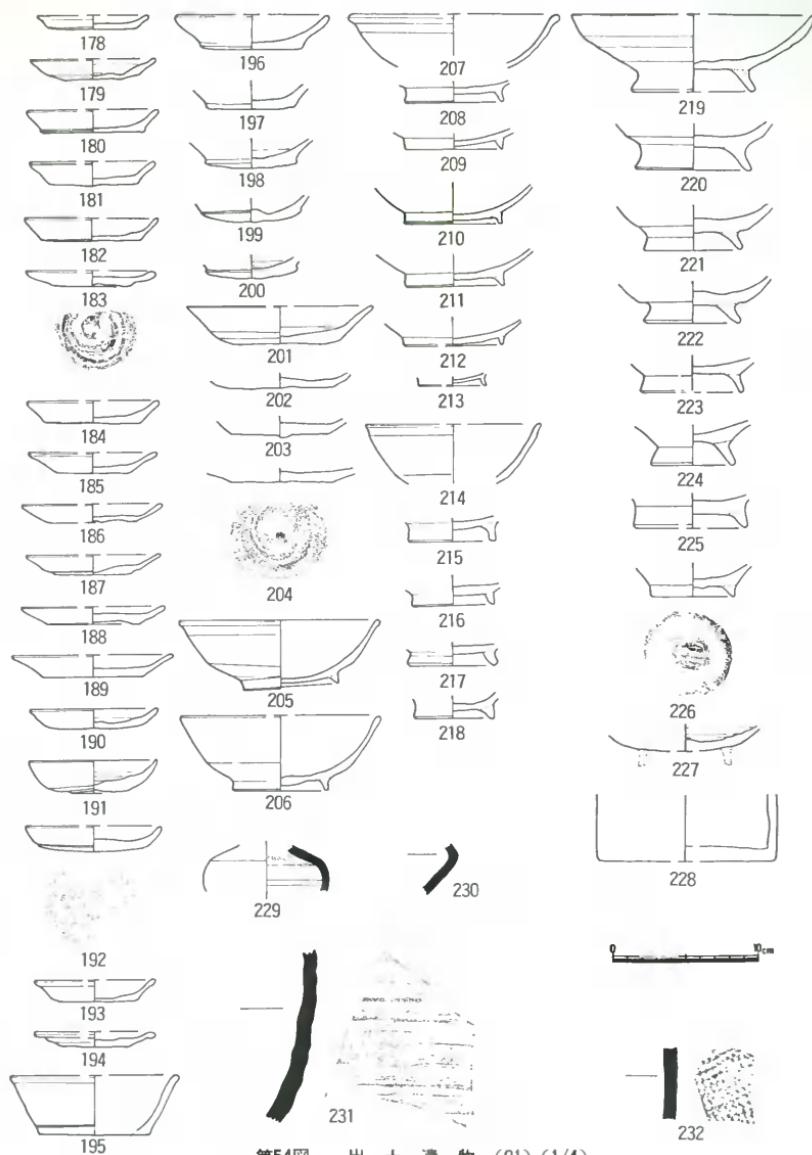
雨落ち溝上に倒壊した屋根瓦に混在して、多くの鉄器が出土している。釘・鈴・刀の3種類が認められ、なかでも釘の量がもっとも多く約60本を数える。鈴・刀は各1個であり、F区画に集中して出土をみている。

釘は屋根瓦の倒壊した南西方向の瓦列に平行する状態で、約32～36cm間隔に出土しており、柾行の横木に釘を打ちつけたことが想像できるが、他の箇所では確認できていない。

釘はすべて角釘が使用されており、長さ・太さにおいて、I～V種類に分類することができる。

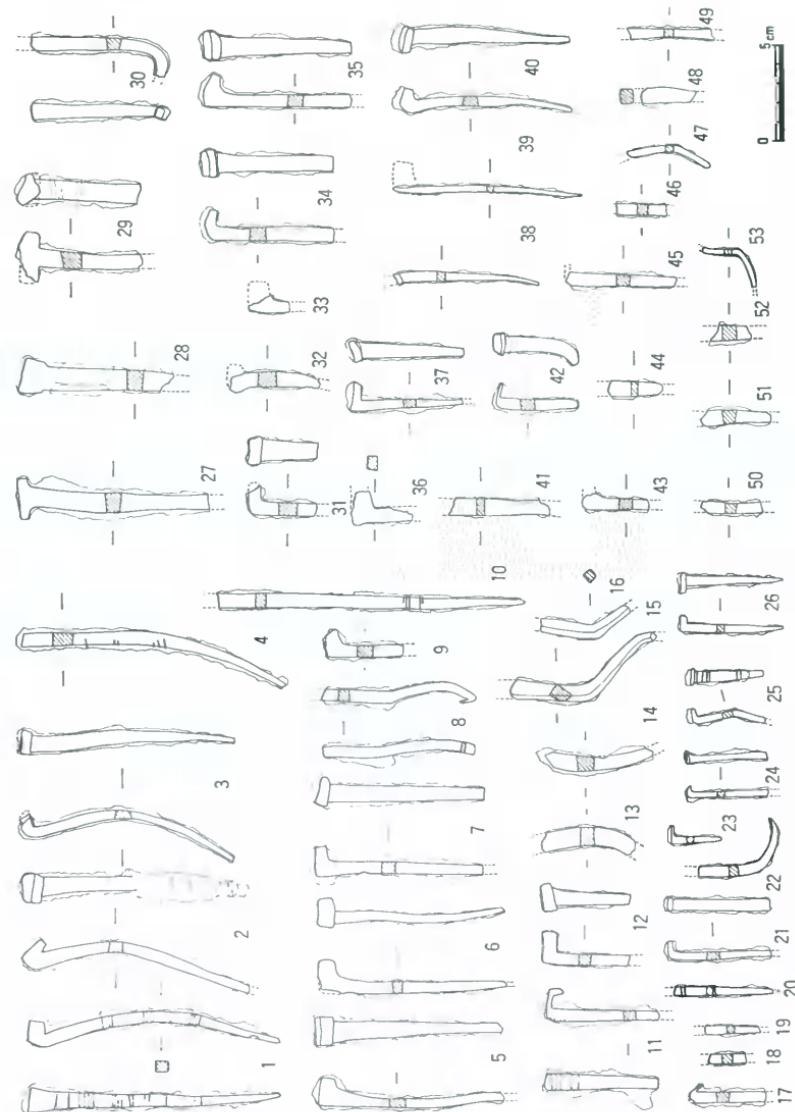
I類は長さ14.5cm以上、重さ38.08g以上を測る。II類は長さ13.05cm・重さ24.0g、III類は8.90～9.75cmを測り、太さが若干異なるものがあり、太い物をIIIa、細い物をIIIbに分類する。IV類は5.35cm・重さ4.53g、V類は2.65cm・1.63gを測る。

形態は頭部「T」・「L」形、断面四角形を呈し、先端を鋭くおさめる。

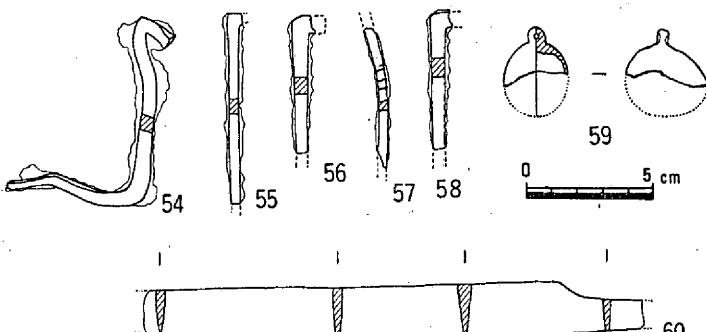


第54図 出土遺物 (21) (1/4)

天神坂遺跡



第55図 出土遺物 (22) (1/3)

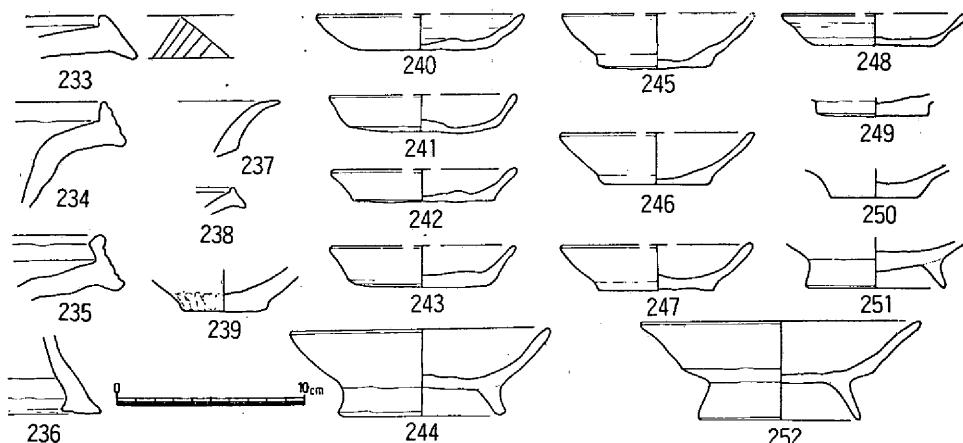


第56図 出土遺物 (23) (1/3)

鉄鉤は火を受けて変形し、胴部下半を失っている。現存幅2.6~3.2cm、高さ2.3cmを測る。頭頂部に紐掛けの穴が貫通しており、断面は四角形を呈する。

直刀は切先部、および茎部分が欠損しており、現存長20cm、背・刃部間2cmを測る。刃部・茎部の明確な平造りの刀である。

No.13大内田廃寺東斜面出土の土器には、No.18~23段状遺構、No.13大内田廃寺の両者の遺物が



第57図 No. 13 大内田廃寺東斜面出土遺物 (1/4)

混入して出土している。弥生時代後期の土器が233~239であり、240~252がNo.13遺構関連遺物と考えられる。これらの土器は、No.13遺構である寺跡整地面が後世に私道、畠地掘削時に段状の削平を受けて、両者の土器が混在したものと考えられる。

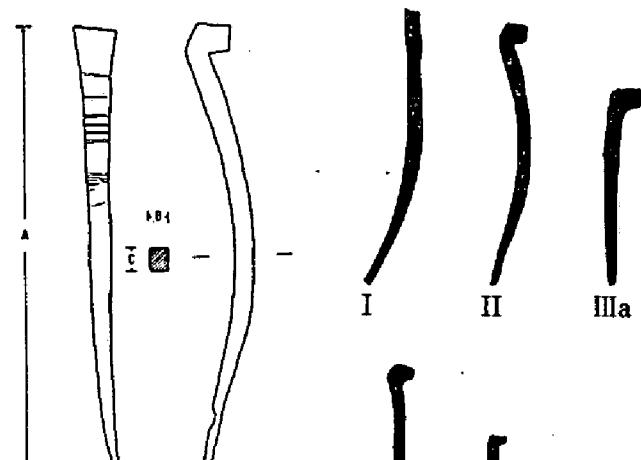
斜面下には南に向かって開口する谷が入っており、瓦等の遺物は谷底に近い付近までおよんでいる。

天神坂遺跡

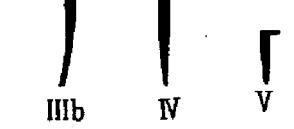
表—5 鉄釘計測値一覧表

単位(cm)

番号	頭	A	B	C	重量	番号	頭	A	B	C	重量
1	「	13.05	0.55	0.65	24.00	36	「	3.15	0.70	0.55	3.84
2	「	11.75	0.55	0.75	33.06	37	「	6.00	0.40	0.65	8.90
3	「	11.10	0.45	0.90	18.80	38	—	7.60	0.55	0.45	4.10
4	—	14.05	0.70	1.05	38.08	39	「	9.90	0.35	0.35	5.64
5	「	9.75	0.45	0.80	23.91	40	「	8.90	0.50	0.90	13.73
6	「	9.75	0.65	0.45	14.03	41	—	5.30	0.90	0.45	5.67
7	「	8.80	0.65	0.75	20.76	42	「	4.70	0.60	0.70	7.21
8	—	7.90	0.60	0.60	10.98	43	「	3.50	0.60	0.75	5.40
9	「	4.05	0.60	0.80	8.77	44	—	2.85	0.80	0.40	4.10
10	—	15.95	0.75	0.50		45	「	5.80	0.65	0.70	10.12
11	□	5.95	0.50	0.65	12.23	46	—	2.60	0.60	0.60	3.10
12	「	4.70	0.55	0.60	10.91	47	—	4.55	0.35	0.40	2.11
13	—	4.95	0.95	0.75	12.41	48	—	2.80	0.80	0.65	3.11
14	—	5.70	0.85	0.75	13.00	49	—	4.55	0.45	0.50	3.96
15	—	8.50	0.65	0.80	15.96	50	—	3.25	0.60	0.55	2.64
16	—	4.90	0.50	0.55	5.40	51	—	3.70	0.80	0.55	6.33
17	「	4.00	0.55	0.60	2.15	52	—	2.15	0.85	0.75	3.80
18	—	2.00	0.55	0.55	1.14	53	—	3.90	0.30	0.45	1.60
19	—	2.95	0.40	0.40	1.85	54	「	13.55	0.55	0.65	21.35
20	—	5.20	0.45	0.35	3.00	55	「	7.55	0.40	0.55	4.20
21	「	5.45	0.45	0.75	6.83	56	「	5.45	0.55	0.60	7.00
22	—	6.00	0.60	0.50	11.00	57	—	5.55	0.35	0.30	3.41
23	「	2.65	0.40	0.35	1.63	58	「	5.40	0.55	0.75	7.10
24	「	4.35	0.30	0.45	2.14						
25	「	4.10	0.35	0.55	2.83						
26	「	5.35	0.45	0.45	4.53						
27	T	9.85	1.05	0.65	34.90						
28	T	8.00	1.05	0.80	30.82						
29	T	6.35	0.95	0.90	19.82						
30	—	7.15	0.65	0.60	12.84						
31	「	3.60	0.70	0.90	9.72						
32	「	4.65	0.75	1.00	10.17						
33	「	2.10	0.70	—	2.80						
34	「	6.80	0.70	0.85	18.20						
35	「	7.60	0.65	0.80	17.80						



第58図 計測点模式図



第59図 釘分類図

第4章 第1節 天神坂遺跡の概要

表-6 軒平瓦計測値一覧表

単位(cm)

	上弦弧	弧深	下弦弧	厚さ	内文区様	上外区文様	上外区厚	下外区文様	下外区厚	全長
1	26.0	4.80	26.5	5.3	均整唐草文	圈線	0.8	圈線	1.7	39.0
2	25.0	4.20	27.2	5.4	"	"	0.6	"	1.0	36.5
3	25.0	4.15	26.5	6.0	"	"	0.6	"	1.2	35.5
4	24.0	4.50	24.5	5.0	"	"	0.7	"	0.6	35.5
5	25.0	3.40	25.2	4.6	"	"	1.1	"	0.6	35.0
6	26.0	4.10	24.7	5.0	"	"	0.8	"	1.0	35.0
7	27.5	4.25	26.2	5.0	"	"	0.7	"	1.0	36.5
8	26.0	—	26.0	5.0	"	"	0.7	"	0.5	35.0
9	25.0	4.50	25.0	4.7	"	"	1.2	"	0.8	35.5
10	26.5	(3.00)	25.0	6.0	"	"	0.9	"	2.0	(30.5)
11	26.5	3.35	27.5	5.0	"	"	0.6	"	1.3	(31.0)
12	(23.5)	(4.40)	(24.5)	4.7	"	"	0.8	"	0.7	(23.4)
13	26.5	3.90	25.3	4.1	"	"	0.7	"	1.0	(20.5)
14	—	—	—	4.3	"	"	0.7	"	0.8	35.0
15	—	—	—	3.0	"	"	—	"	—	(20.0)
16	—	—	—	3.5	"	"	—	"	—	(19.0)
17	—	—	—	(4.0)	"	"	(0.7)	"	—	(14.0)
18	24.0	5.00	26.8	4.4	"	"	0.6	"	0.9	37.0
19	25.5	4.70	26.5	4.5	"	"	0.7	"	0.6	(33.0)
20	—	—	—	4.4	"	"	1.1	"	—	39.5

表-7 軒平瓦一覧表

単位(cm)

類	番号	長さ	幅		厚	凸面	凹面 布目(1cm ²)	焼成 胎土 色調(cm)	備考 (kg)
			狭	広					
直 線 類	1	39.0	23.0	26.5	a  b 2.40 5.30	繩叩き目(タテ) 一部ナデ 側面叩き目	布目(ヨコ12×タテ13本) 繩叩き目(タテ) 一部ナデ	良好 白色小砂粒(0.5) 灰色	完形 直線類 6~7cm幅の 粘土板を6枚 輪積み 叩き目後布目
	2	36.5	21.5	25.0	2.17 5.40	繩叩き目(ヨコ・タテ) 側面ヘラキリ→ナデ	布目(ヨコ13×タテ15本) ナデ(タテ・ヨコ)	良好 (0.7~0.8) 白色小砂粒 暗灰色 多量	完形 4.95
	3	35.5	21.0	26.5	2.04 6.00	繩叩き目(ナナメ・タテ) ハケナデ(タテ) 側面ヘラキリ→ナデ	布目(ヨコ12×タテ14本) 一部指ナデ(タテ) 広端部ナデ(搔き取り)	良好 (0.7~0.8) 白色小砂粒 暗灰色	完形 4.74
	4	35.5	20.0	24.5	2.49 5.00	繩叩き目(タテ) 側面叩き目→ナデ	布目(ヨコ12×タテ14本) 繩叩き目(タテ) ナデ(すりけし状)	良好 白色小砂粒(0.5) 淡青灰色	完形 繩叩き目工具幅(2.7) 5.19
Aa	5	35.0	20.2	25.2	1.93 4.60	繩叩き目(ヨコ・タテ) 側面叩き目→ナデ	繩叩き目 ナデ	良好 白色砂粒(0.8) 灰色	完形 凹面叩き目→瓦当 接合→凸面叩き目 →ナデ 5.05
	6	35.0	21.5	26.0	2.30 5.00	繩叩き目(ナナメ) ナデ 側面叩き目→ナデ	繩叩き目(タテ) ナデ(タテ)	良好 白色小砂粒(0.6) 淡青灰色	完形 叩き目 5.32
	7	36.5	(20.0)	27.5	3.13 5.00	繩叩き目(タテ) 側面叩き目→ヘラキリ	布目(ヨコ12×タテ14本) 繩叩き目 ナデ	良 白色砂粒(0.7) 灰黄色	破片 (一部欠損) 凹面叩き目→布目 (6.00)
	8	35.0	(14.0)	26.0	1.94 5.00	繩叩き目(ナナメ) ナデ 側面ヘラキリ→ナデ	布目 指ナデ	良好 白色小砂粒(0.5) 青灰色	破片 (5.43)

()破片

天神坂遺跡

類	番号	長さ	幅		厚	凸面	凹面 布目(1cm)	焼成 胎土(cm) 色調	備考 (kg)
			狭	広					
直線 頭	9	35.5	(9.5)	25.0	2.9 4.7	縄叩き目(タテ) ナデ 側面叩き目→ナデ	布目 縄叩き目(タテ) ナデ(ヨコ)	良好 白色小砂粒(0.5) 黒灰色	破片 (5.0)
	10	(30.5)	—	26.5	— 6.0	縄叩き目(タテ・ヨコ) 側面叩き目→ヘラキリ	縄叩き目 ナデ(搔き取り) ヘラキリ	良好 白色砂粒(0.5) 淡灰色	破片 (4.06)
	11	(31.0)	—	27.5	5.0	縄叩き目(ナナメ) 側面ヘラキリ	布目 ナデ	不良 白色砂粒(0.6) 灰黄色	破片 (4.08)
Aa	12	(23.4)	—	(24.5)	□ — 4.7	縄叩き目(タテ) ナデ 側面叩き目	布目(ヨコ12×タテ14本) 縄叩き目(タテ) ナデ(ヨコ)	良 白色小砂粒(0.5) 淡灰色	破片 接合部補修 瓦当部に布目 (4.47)
	13	(20.5)	—	26.0	— 4.1	縄叩き目(タテ) ナデ 側面叩き目	布目 縄叩き目(タテ) ナデ	良 白色小砂粒() 暗暗灰色	破片 瓦当接合面あり (2.86)
Ab	14	35.0	20.7	(14)	2.42 4.3	縄叩き目(タテ) 側面ヘラキリ・ナデ	縄叩き目(タテ) 凹凸が著しい	良好 白色小砂粒(0.8) 灰色	破片 2枚合せ (4.76)
	15	(20.0)	—	—	3.0	縄叩き目(タテ) ナデ	布目(ヨコ13×タテ14本) ナデ	良好 白色小砂粒(0.6) 青灰色	破片 (1.75)
	16	(19.0)	—	—	3.5	—	縄叩き目(タテ) ナデ	良 白色小砂粒(0.6) 黄灰色	破片 剥落 (0.98)
B	17	(14.0)	—	—	(4.0)	縄叩き目(タテ) 布目	ナデ	良好 白色小砂粒(0.5) 淡暗灰色	破片 (0.6)
	18	37.0	22.0	24	4.4	縄叩き目(タテ・ヨコ) 側面ヘラキリ	布目 ナデ ヘラケズリ(面取り)	不良 白色小砂粒(0.6) 灰黄色	完形 5.03
C	19	(33.0)	—	26.5	4.5	縄叩き目(ヨコ) 側面ヘラキリ	布目 ナデ(指圧痕が目立つ) ヘラケズリ(面取り)	不良 白色小砂粒(0.9) 灰黄色	破片 剥脱 (5.26)
	20	39.5	21.5	(20.0)	4.4	縄叩き目(タテ・ヨコ) ナデ 側面叩き目ナデ	布目 縄叩き目(タテ) ナデ	不良 白色小砂粒(0.7) 灰色	破片 (5.58)

()破片

表一8 髦斗瓦(堤瓦)一覧表

単位(cm)

番号	長さ	幅		厚	凸面	凹面	焼成 胎土(cm) 色調	備考 (kg)
		狭	広					
1	37.0	11.8	13.5	□ 2.10 1.80	縄叩き目(タテ) 側面ヘラキリ	布目 ナデ	良 白色小砂粒(0.6) 黄灰色	完形(左) 焼成後半截 1.61側面上ヘラキリ
2	37.6	9.7	14.0	2.00 1.44	縄叩き目(タテ) 側面ヘラキリ	布目(タテ12×ヨコ13本) ナデ(スリケシ)	良好 白色小砂粒(0.6) 淡灰色	完形(左) 焼成後半截 1.26
3	37.5	(3.0)	10.5	1.58 1.78	縄叩き目(タテ) 側面ヘラキリ	布目 ナデ(スリケシ)	良 白色小砂粒(0.5) 黄灰色	破片 焼成後半截 凹面側ヘラキリ (1.4)
4	37.0	(10.0)	(9.0)	1.55 2.83	縄叩き目(タテ) ナデ 側面ヘラキリ(上→下)	布目 ナデ(円滑)	良好 白色小砂粒(0.6) 灰色	破片(左) 焼成後半截 (2.09)
5	37.0	12.0	(8.0)	1.99 2.50	縄叩き目(タテ) ナデ 側面ヘラキリ	布目 ナデ	良 白色小砂粒(0.6) 黄灰色	破片(右) 剥落 焼成後半截 (1.68)
6	39.3	11.8	14.8	2.55 3.13	縄叩き目(タテ) 側面ヘラキリ	布目 ナデ	良 白色小砂粒(0.6) 黄灰色	完形(左) 焼成後半截 2.50

()破片

第4章 第1節 天神坂遺跡の概要

表-9 平瓦一覧表

単位(cm)

番号	長さ	幅		厚	凸面			凹面			焼成 胎土(cm) 色調	四面 1(布目多)a(布目大)2(四面ヘラキリ) 2(空身)b(布目中)3(四面ヘラキリ無) 3(ナフ)c(布目小) 4(縄叩き目)d(布目無) (重量kg)	
		狭	広		縄叩き目	ナデ	布目	布目	縄叩き目	ナデ	ヘラキリ		
H-1	36.0	20.8	25.0	1.82 3.28	□	○			○	○	○	良好 白色小砂粒(0.60) 淡灰色	2c2 3.935
H-2	37.0	22.2	26.0	2.42 2.83	○			○ 11×9 (1cm)				不良 白色小砂粒(0.81) 黄灰色	1c3 4.200
H-3	34.4	20.2	22.6	1.41 2.40		○	広口部 ヘラキリ	○ 7×6			○	良好 白色小砂粒 黄褐色	1a3 3.210
H-4	36.6	20.0	23.6	2.38 2.18	○	○		○		○	○	良 白色小砂粒(0.51) 淡赤灰色	3-2 3.375
H-5	35.0	20.3	22.7	2.20 1.95		○		○ 12×12		○	○	良好 白色小砂粒(0.48) 淡赤灰色	2c2 3.015
H-6	36.5	21.8	24.6	2.25 2.69	○			○ 11×9		○		不良 白色小砂粒(0.45) 淡灰色	側面ナデ 1b3 4.088
H-7	33.7	21.4	25.1	1.95 1.96	○	○		○ 7×8				良 白色小砂粒(0.21) 淡白灰色	6と同質 1b3 2.764
H-8	35.3	20.9	24.6	2.45 1.79	○	○		○		○		良 白色小砂粒(0.68) 淡白灰色	2c2 3.865
H-9	36.7	23.3	24.0	1.58 1.61	○	○		○ 5×6		○		良好 白色小砂粒(0.31) 黄赤灰色	1a3 3.175
H-10	35.0	21.5	23.6	2.05 2.51	○	○		○ 5×6		○		良 白色小砂粒(0.58) 淡褐灰色	1a3 3.495
H-11	35.5	20.7	23.4	2.12 2.48	○	○		○ 6×6		○		不良 白色小砂粒 淡灰色	1a3 3.762
H-12	35.0	22.3	25.7	1.69 1.90	○	○		○		○		良 白色小砂粒(0.30) 淡灰色	2b2 3.465
H-13	35.2	21.4	24.8	2.27 2.35	□	○	○			○	○	良 白色小砂粒(0.65) 灰色	4-2 3.340
H-14	34.8	20.5	25.3	2.21 2.05	○	○		○ 8×12		○		良好 白色小砂粒(0.38) 黒灰色	2c2 3.715
H-15	37.0	20.7	25.1	2.15 3.31	○	○			○	○		良好 白色小砂粒(0.34) 灰色	4-3 5.645
H-16	34.2	21.6	25.8	1.41 1.84		○	○ 10×9	○		○	○	良好 白色小砂粒(0.40) 明灰色	3-2 3.050
H-17	37.9	20.5	25.3	1.35 2.22	○	○		○		○	○	良 白色小砂粒(0.46) 白褐灰色	2c2 2.995
H-18	37.6	26.3	22.0	1.25 1.25	○	○		○ 12×12		○	○	良好 白色小砂粒(0.49)	凸面撚ぎ目 四面広、狭部 ヘラキリ 1c2 3.070
H-19	35.8	22.0	25.4	2.78 2.41	○	○				○	○	不良 白色小砂粒(0.42) 灰褐色	3-2 3.880
H-20	35.5	22.0	26.0	2.55 1.41	○	○		○ 8×10				良好 白色小砂粒(0.60) 淡青灰色	広口部に臺状の圧痕文 2b2 3.650

天神坂遺跡

単位(cm)

番号	長さ	幅		厚	凸 面			凹 面			焼成 胎土(cm) 色調	四面 1(右目多) a(右目大) 2(四面ヘラキリ) 2(左目少)b(右目中) 3(四面ヘラキリ無) 3(左目少)c(右目小) 4(縫合目)d(右目無) (重量kg)	
		狭	広		縫合目	ナ デ	布 目	布 目	縫合目	ナ デ	ヘラキリ		
H-21	36.0	21.5	25.5	1.60 2.20						○		良好 白色小砂粒(0.50) 灰黄色	凹凸面ケズリ 4-2 3.330
H-22	36.5	21.8	25.4	1.72 2.41 (斜)	○	○		○ 11×11				不良 白色小砂粒(0.22) 赤褐灰色	1c3 3.560
H-23	36.0	22.2	26.6	2.20 2.20	○	○				○	○	不良 白色砂粒(0.55) 淡黄灰色	3.070
H-24	37.1	21.3	26.1	1.90 2.55	○	○				○	○	良 白色砂粒(0.71) 淡黄灰色	4-2 3.640
H-25	37.3	23.3	24.8	1.59 1.74 (斜)	○			○ 3×4				良好 白色砂粒(0.56) 灰色	1a3 3.120
H-26	32.2	20.8	23.8	1.55 1.50 (斜)	○			○ 7×6				良 白色小砂粒(0.53) 白灰色	小型 1a3 2.260
H-27	38.7	22.2	27.3	2.18 2.37	○			○ 10×11		○	○	不良 白色砂粒(0.74) 白黄灰色	剥脱 1c2 4.370
H-28	35.8	20.8	25.8	2.65 2.65	○			○		○	○	不良 白色砂粒(0.46) 白黄灰色	3c2 4.010
H-29	37.4	21.5	25.5	1.55 2.66	○	○				○	○	不良 白色砂粒(0.50) 暗黄灰色	4-2 2.860
H-30	37.3	21.7	27.0	2.70 2.16	○			○ 7×8				良 白色小砂粒(0.39) 灰白色	2b3 4.710
H-31	35.8	18.7	25.5	1.79 1.60 (斜)	○			○ 4×4			○	不良 白色小砂粒(0.59) 白黄灰色	2a2 3.175
H-32	36.0	20.7	25.8	1.64 2.49	○	○		○ 11×12		○	○	良好 白色砂粒(0.95) 淡灰色	2c2 3.590
H-33	36.5	21.8	25.6	2.11 2.22	○	○		○ 7×8		○	○	良 白色砂粒(0.61) 灰白色	3b2 4.020
H-34	35.8	20.6	24.7	2.54 3.16	○			○ 9×9		○		良好 白色小砂粒(0.33) 青灰色	2b3 4.940
H-35	35.7	20.8	25.4	1.48 2.05						○	○	良好 白色小砂粒 青灰色	凹凸面横位のヘラカキ 4-2 3.065
H-36	35.6	18.2	23.5	1.71 1.55				○ 8×8		○		良好 白色小砂粒(0.37) 青灰色	4-3 2.710
H-37	34.6	20.8	24.5	1.79 2.20 (斜)	○	○		○ 10×13		○	○	良好 白色小砂粒 青灰色	2c2 3.710
H-38	36.0	21.0	24.5	2.13 3.50	○	○		○ 11×12	○			良好 白色小砂粒(0.71) 青灰色	2c3 5.250
H-39	36.5	19.2	26.5	1.74 2.18	○			○ 11×11		○	○	良 白色砂粒(0.79) 灰白色	2c2 3.030
H-40	36.7	21.2	25.7	2.03 2.13		○				○	○	良 白色砂粒 淡黄灰色	4-2 3.130

第4章 第1節 天神坂遺跡の概要

単位(cm)

番号	長さ	幅		厚	凸面			凹面				焼成 胎土(cm) 色調	凹面 1(布目多)a(布目大)2(四面ヘラキリ) 2(半厚)b(布目中)3(四面ヘラキリ無) 3(ナメ)c(布目小) 4(繩叩き目)d(布目無) (重量kg)
		狭	広		繩叩き目	ナメ	布目	布目	繩叩き目	ナメ	ヘラキリ		
H-41	37.4	21.2	24.4	3.0 2.49	○	○		○ 8×9		○	○	良好 白色小砂粒(0.34) 淡灰色	凹面広口部ヘラキリ 2b2 5.210
H-42	36.7	21.3	25.2	2.27 2.06	○	○		○ 12×12		○	○	不良 白色小砂粒(0.57) 灰白色	凹面広口部ヘラキリ 2c2 3.100
H-43	36.7	21.5	26.4	2.61 2.71	○					○	○	不良 白色小砂粒(0.65) 黄褐色灰色	4-2 3.655
H-44	36.8	21.7	25.5	2.14 3.46	○	○		○ 13×12		○	○	良好 白色小砂粒(0.48) 青灰色	2c2 4.720
H-45	37.0	20.0	24.5	2.51 1.47	○	○		○ 11×13		○	○	良好 白色小砂粒(0.96) 青灰色	凹面継ぎ目 2c2 4.090
H-46	35.2	20.4	23.1	2.02 2.54	○ (斜)	○		○ 5×5				良好 白色小砂粒(0.47) 灰白色	1a3 3.720
H-47	36.8	21.2	27.0	2.48 2.02	○					○	○	良 白色小砂粒(0.50) 黄灰色	剥脱 4-2 3.050
1	33.5	(11.0)	27.0	1.91 4.55				○				不良 黄白粒(0.60) 黄灰色	剥脱 3b3 3.69
2	35.7	(15.0)	24.5	1.5 3.0	○			○	○	○	○	良好 白色小砂粒(0.60) 灰色	2c2 3.930
2'	37.5	22.5	(15.0)	2.85 2.85	○			○		○		良 白色小砂粒 灰色	3b2 4.640
3	36.5	21.0	(11.0)	3.1 1.7		○				○		良 白色小砂粒 黄灰色	4-3 4.280
4	(32.5)	(-)	(18.5)	(-) 2.18	○					○		不良 白色小砂粒 黄灰色	4-3 2.35
5	(37.5)	(6.0)	(9.0)	1.0 3.5				○ (5×6)				不良 白色小砂粒 淡灰色	剥脱 1a2 3.400
6	(32.8)	20.5	(-)	3.23 (-)	○	○		○ (9×10)		○		良好 白色小砂粒 黑灰色	2c3 3.652
7	38.0	12.6	(14.8)	1.95 1.80	○	○				○		良 白色小砂粒(0.58) 淡黄灰色	4-- 3.200
8	37.3	(15.8)	25.5	2.25 3.7		○				○		良 白色小砂粒(0.35) 黄灰色	4-- 4.840
10	37.5	10.3	14.0	1.74 2.85	○					○		不良 白色小砂粒(10.65) 黄灰色	4-3 3.000
11	35.7	(21.5)	(18.3)	1.74 2.77	○			○ (11×9)				不良 白色小砂粒(0.44) 黒灰色	1c3 3.460
12	34.4	(14.5)	25.5	?	○			○ (9×9)				不良 小砂粒有り 白灰色	2c3 3.680
24	35.5	(16.5)	24.0	2.10 2.80	○	○		○		○		良 白色小砂粒 白黃灰色	3c3 4.190

天神坂遺跡

単位(cm)

番号	長さ	幅		厚	凸 面			凹 面			焼成 胎土(cm) 色調	凹面 1(布目多)a(布目大)2(百面ヘラキリ) 2(布目)b(布目中)3(百面ヘラキリ無) 3(ナラ)c(布目小) 4(縄叩き目)d(布目無) (重量kg)	
		狭	広		純叩き目	ナ デ	布 目	布 目	純叩き目	ナ デ	ヘラキリ		
31	36.0	25.2	(5.3)	2.41 2.40	○	○		○		○		白 白良小砂粒(0.45) 黄灰色	2b2 4.01
34	32.5	32.3	(20.0)	1.36 1.58	○			○				良好 白色小砂粒(0.60) 青灰色	釉が付着 1b3 2.02
35	36.5	21.3	25.5	1.40 1.43	○			○ (9×11)		○		良好 白色小砂粒(0.50) 白黄青灰色	釉が付着 2c2 3.75
36	36.5	(14.0)	22.3	1.25 2.85	○			○ (14×14)			○	良好? 白色小砂粒(0.60) 灰黄色	広口面肥厚 2c2 3.42
37	37.2	20.6	(14.2)	2.47 2.51	○			○ (4×5)		○	○	良 小砂粒(0.48) 黄褐色	2a2 3.330
43	36.9	23.0	25.8	1.63 1.63	○			○ (12×12)				良 小砂粒(0.38) 白黄灰色	1c3 3.660
40	37.8	(20.3)	(17.3)	2.34 2.12	○			○ (12×13)		○	○	不良 白色小砂粒(0.46) 白黄灰色	2c2 2.550
42	35.3	21.8	24.2		○	○		○		○		不良 白色小砂粒(0.62) 灰褐色	狭口面に布目 1c3 3.990
46	37.5	21.3	25.2	1.90 1.74	○			○ (7×8)				不良 白色小砂粒(0.57) 白灰色	1b3 3.130
48	37.3	(15.2)	25.2	1.77 2.88	○	○				○	○	不良 白色砂粒(0.71) 黄褐色	4-2 3.700
49	38.3	(17.8)	24.3	2.27 2.13	○	○		○ 12×13		○		不良 白色砂粒(0.52) 淡灰色	剥脱 2c2 4.560
51	35.7	(21.0)	25.0	1.78 2.41	○			○ 5×4				不良 白色砂粒(0.14) 白褐灰色	1a3 3.460
54	37.3	(16.2)	(20.8)	1.23 3.18	○	○		○		○	○	良 白色砂粒(0.50) 淡黄灰色	3b3 4.370
56	37.0	(5.3)	(13.7)	(-) 2.08	○					○		良 白色砂粒(0.53) 白黄灰色	4-3 3.580
57	36.8	(19.0)	25.8	2.10 2.88	○	○				○	○	良 白色砂粒(0.47) 白黄灰色	4-2 3.800
58	37.3	20.31	(20.4)	2.17 1.79	○	○				○	○	不良 白色小砂粒(0.62) 白灰色	4-2 2.850
59	36.8	(17.3)	25.8	2.19 2.59	○	○				○	○	良 白色小砂粒(0.52) 黄褐色	4-2 3.860
61	31.2	(10.0)	22.3	1.84 2.07	○	○		○				良 砂粒(0.91) 明淡灰色	小型品 1b3 2.130
62	37.2	(17.6)	(19.8)	2.72 1.64	○					○	○	良 白色小砂粒(0.53) 白黄灰色	4-2 4.340
63	35.7	(17.0)	24.8	2.40 2.87	○	○		○ 10×9				良 白色小砂粒(0.68) 白黄灰色	1c3 4.140

第4章 第1節 天神坂遺跡の概要

単位(cm)

番号	長さ	幅		厚	凸 面			凹 面			焼成 胎土(cm) 色調	四面 1(布目多)a(布目大)2(四面ヘラキリ) 2(半厚)b(布目中)3(四面ヘラキリ無) 3(ナ)c(布目小) 4(擦き目)d(布目無) (重量kg)	
		狭	広		櫛叩き目	ナ テ	布 目	布 目	櫛叩き目	ナ テ			
64	35.8	20.8	(19.0)	1.45 1.98		○		○ 5×6			○	不良 白色小砂粒(0.54) 白灰色	1a3 3.060
65	35.7	(20.8)	27.8	3.63 2.66	○					○		良 白色砂粒(0.60) 明白灰色	粘土補修痕 4-? 4.050
66	36.4	(19.4)	(21.8)	1.57 1.8	○					○	○	良好 白色小砂粒(0.42) 明白灰色	4-2 3.000
67	33.2	20.5	(18.3)	1.96 2.03	○			○ 11×12		○	○	不良 白色砂粒(0.50) 黄灰色	2c2 2.940
68	34.4	(18.8)	(16.2)	1.24 1.73	○	○		○ 8×8		○		良 砂粒(0.53) 青灰色	3b3 2.135
70	32.4	19.8	(21.0)	1.41 1.8	○		○	○ 6×6		○		不良 白色砂粒(0.44) 白黄灰色	-a3 2.140
71	(30.3)	-	25.4	2.44		○		○		○	○	良 白色小砂粒(0.64) 黄灰色	--2 2.980
72	-	(7.5)	(24.2)	- 2.0	○	○		○ 8×8		○		良好 白色砂粒(0.52) 黄灰色	3b3 2.650
73	36.5	21.3	16.2	1.41 1.78	○	○	○ 8×8	○ 11×12		○	○	不良 白色小砂粒(0.45) 白黄灰色	2c2 2.570
77	33.7	21.5	(22.2)	1.81 2.00	○			○ 9×8	○			良好 小砂粒(0.21) 白灰色	狭口目に布目 2b3 2.975
78	36.4	23.1	(17.9)	1.64 1.38	○			○ 3×3				良好 白色小砂粒(0.64) 里灰色	粗い布目 1a3 3.265
79	34.5	(18.5)	24.8	1.70 3.76	○			○		○	○	良好 白色小砂粒(0.7) 青灰色	2c2 3.450
80	36.3	21.2	(14.3)	1.86 1.41	○	○		○		○	○	良好 白色小砂粒 白黄灰色	2c2 2.090
82	36.3	(16.5)	25.4	2.35 1.84	○	○		○		○	○	良好 白色小砂粒 青灰色	布目の接合痕 2b2 4.510
83	37.2	(15.7)	(24.5)	2.35 2.38	○	○		○ 8×9		○	○	良好 白色砂粒(0.43) 青灰色	2b2 4.460
85	36.8	21.5	(19.7)	1.65 1.75	○			○ 3×3		○		良好 白色小砂粒(0.49) 黒灰色	布目の乱れ 1a3 3.275
86	36.2	21.8	(13.7)	3.77 3.18	○					○		良好 白色小砂粒(0.61) 青灰色+黄灰色	4-3 4.880
88	36.8	(17.7)	(23.3)	1.45 2.29				○ 8×9		○		良好 白色小砂粒 淡黒灰色	粘土塊痕 1b3 3.640
89	36.0	(11.7)	(15.8)	1.52 2.43	○			○ 12×12		○	○	良好 白色小砂粒(0.61) 淡褐灰色	隅切り瓦 3c2 2.905
90	34.8	19.8	23.7	2.23 --	○	○		○		○	○	良好 白色小砂粒 灰色	4-2 3.390

天神坂遺跡

単位(cm)

番号	長さ	幅		厚	凸 面			凹 面			焼成 胎土(cm) 色調	四面 1(目多) a(布目大) 2(白面ヘラキリ) 2(少) b(布目中) 3(四面ヘラキリ無) 3(少) c(布目小) 4(縫合目) d(布目無) (重量kg)	
		狭	広		縫合目	ナ デ	布 目	布 目	縫合目	ナ デ	ヘラキリ		
91	36.4	(20.2)	(17.0)	2.05 2.58	○			○ 13×13		○	○	良好 白色小砂粒(0.50)	軸が付着 2c2 3.990
92	29.7	21.8	(11.8)	1.74 1.99	○			○ 7×8		○	○	良好 小砂粒 青灰色	狭口面に布目 1b2 2.021
93	35.3	25.3	(16.3)	2.42 2.69	○			○ 10×10		○	○	良好 小砂粒(0.38) 黒灰色	1c3 4.135
94	37.7	23.0	(21.7)	2.06 1.69	○			○ 3×3				良好 小砂粒(0.67) 淡灰色	粗い布目 1a3 3.640
95	36.0	(15.3)	(25.0)	2.05 2.21	○	○		○		○	○	良好 小砂粒(0.44) 青灰色	3c2 3.640
96	35.6	(12.4)	24.5	1.25 2.08	○			○ 10×12		○	○	良好 白色小砂粒(0.46) 青灰色(褐灰色灰色)	2c2 3.060
97	35.2	18.5	(14.4)	2.43 1.93	○					○	○	良好 白色小砂粒(0.57) 黒青灰色	4-2 2.710
98	36.0	22.0	—	2.6	○	○		○ 11×12	○	○	○	良好 白色小砂粒 青灰色	2c2 4.375
101	34.8	14.81	(14.6)	1.33 1.78						○		良好 白色砂粒(0.56) 淡灰色	4-3 2.100
102	36.5	20.6	(17.2)	1.88 2.45	○			○ 13×12		○	○	良 白色小砂粒(0.51) 白黄灰色	3c2 3.015
103	35.8	(14.2)	24.9	1.51 3.08	○			○ 8×8		○		不良 白色砂粒(0.65) 黄褐色	3b3 5.550
104	37.3	(18.7)	(14.8)	2.23 1.61	○	○		○ 13×13	○	○	○	良好 白色小砂粒(0.72) 白黄灰色	2c2 3.210
105	(—)	(8.2)	(25.0)	(—) 1.61	○					○	○	良 白色小砂粒(0.80) 黄灰色	剥脱 4-2 2.310
106	36.8	(13.2)	25.2	1.86 2.98	○			○ 5×5		○	○	良好 白色小砂粒(0.56) 白灰色	2a2 3.540
107	(—)	22.3	(9.7)	1.59 (—)	○	○				○	○	良 白色小砂粒(1.00) 淡黄灰色	剥脱 4-2 2.750
108	(—)	(—)	23.2	(—) 2.15	○			○ 6×6				不良 白色小砂粒(0.58) 灰色	1a3 2.770
109	(—)	(6.8)	25.6	(—) 2.86	○			○ 11×11		○		不良 白色砂粒(0.55) 灰黄灰色	2c3 3.330
110	(—)	(—)	24.6	(—) 2.28						○	○	良好 白色小砂粒(0.61) 黄灰色	4-2 2.960
111	38.3	(11.2)	26.8	1.73 2.95	○			○ 9×10		○	○	良 白色小砂粒(0.49) 白灰色	隅切り瓦 2b2 4.680
112	37.0	(10.3)	(16.7)	1.65 1.65	○	○		○		○	○	良好 白色小砂粒(0.70) 白灰色	2c2 2.520

第4章 第1節 天神坂遺跡の概要

単位(cm)

番号	長さ	幅		厚	凸 面			凹 面			焼成 胎土(cm) 色調	凹面 1(布目多)a(布目大)2(四面ヘラキリ) 2(中見)b(布目中)3(四面ヘラキリ無) 3(ナデ)c(布目小) 4(縫合き目)d(布目無) (重量kg)
		狭	広		縫合き目	ナ デ	布 目	布 目	縫合き目	ナ デ		
113	37.7	21.2	(20.7)	1.48 1.97		○		○ 5×5		○		良好 白色砂粒(0.46) 白灰色
114	37.3	(12.8)	24.3	2.30 2.85		○				○	○	良 白色小砂粒(0.69) 淡黄灰色
115	38.5	(14.8)	25.7	1.76 3.17	○	○						不良 白色小砂粒(0.59) 黄灰色
116	37.6	19.5	(23.4)	2.13 1.93	○			○ 13×12		○	○	不良 白色小砂粒(0.65) 白灰色
118	37.5	(20.6)	(25.3)	27.3 23.5	○	○		○ 10×10		○	○	良好 白色小砂粒(0.49) 淡白色
120	37.3	(18.2)	25.3	2.56 2.70	○			○ 8×8		○	○	良 白色小砂粒 白灰色
121	34.7	(18.7)	(18.8)	1.88 2.64	○			○ 11×11			○	良好 白色小砂粒 白黄灰色
122	31.6	18.2	22.7	2.86 2.27	○			○ 8×7		○	○	不良 白色小砂粒(0.59) 黄褐色
123	36.2	(12.7)	(25.2)	0.99 2.08	○			○ 12×12		○	○	良 白色小砂粒(0.46) 黄灰色
125	(-)	19.7	(8.8)	2.17 (-)	○			○ 8×9		○		良 白色小砂粒(0.36) 淡青灰色
126	36.6	21.7	(11.3)	1.91 2.59	○			○ 2×3				胎土が他と異なる 1b3 2.990
127	36.5	(17.7)	(11.5)	1.81 3.15	○					○	○	良 白色小砂粒(0.60) 淡黄白色
128	38.2	(14.0)	27.0	1.44 2.13	○		○ 9×10			○		良 白色小砂粒(0.45) 白灰色
129	37.4	(16.0)	(17.2)	2.08 1.48	○					○	○	良 白色砂粒(0.68) 白灰色
131	36.2	24.0	(10.7)	2.58 2.81	○			○ 4×5				不良 白色小砂粒(0.69) 白灰色
132	37.7	22.9	(21.0)	1.49 1.88	○			○ 3×3				良 白色小砂粒(0.5) 黒灰色
133	36.2	(13.0)	(20.7)	2.37 2.45	○	○				○		粗い布目 1a3 3.510
134	35.0	23.11	(22.2)	1.27 2.62	○			○		○	○	良 白色小砂粒(0.65) 白黄灰色
135	36.3	(15.6)	(23.7)	1.97 2.47		○		○ 10×10		○		良 白色砂粒(0.53) 白黄灰色
101	35.4	19.6	(22.4)	2.0 2.9	○	○				○	○	良好 白色小砂粒(0.57) 青灰色
												4-2 3.650

天神坂遺跡

単位(cm)

番号	長さ	幅		厚	凸面			凹面			焼成 胎土(cm) 色調	四面 1(右目) a(右目大) 2(四面ヘラキリ) 2(左目) b(右目中) 3(四面ヘラキリ無) 3(左ア) c(右目小) 4(縦叩き目) d(右目無) (重量kg)	
		狭	広		縦叩き目	ナ テ	布 目	布 目	縦叩き目	ナ テ	ヘラキリ		
107	—	—	(18.0)	1.87	○					○		良 白色小砂粒(0.54) 淡黄灰色	4-3 1.920
103	36.8	(10.9)	(20.4)	1.83 2.48	○			○ 11×11				不良 白色小砂粒(0.65) 黄褐灰色	1c3 3.035
104	37.0	(14.7)	(22.6)	1.59 1.66	○	○		○ 9×8		○		良好 白色小砂粒(0.3) 青灰色	2b3 3.510
136	36.6	16.5	24.6	1.82 2.88	○			○ 11×12			○	良 白色小砂粒(0.61) 淡青灰色	2c2 3.070
137	34.3	8.8	25.0	(—) 2.40	○	○		○ 12×13		○	○	良好 白色小砂粒(0.54) 青灰色	2c2 3.030
138	—	—	23.2	(—) 28.7	○	○	○ 10×10	○ 9×8				良好 白色小砂粒(0.83) 青灰色	1b3 2.880
139	37.3	(16.0)	25.1	2.94 2.51	○	○				○		良好 白色小砂粒(0.20) 淡灰色	4-3 4.330
140	37.2	(12.4)	(21.8)	2.03 2.57	○			○ 11×12		○	○	良好 白色砂粒(0.60) 青灰色	2c2 4.100
143	36.2	(13.8)	(20.6)	1.81 2.26	○	○		○ 10×10		○	○	良 白色砂粒(0.55) 白灰色	3b2 2.620
144	(—)	19.4	(—)	2.47 (—)	○			○ 8×9		○	○	良 白色小砂粒(0.49) 白灰色	3b2 3.400
145	33.8	20.6	14.6	2.63 2.70	○	○		○ 10×9		○		不良 砂粒はほとんどなし 黄灰色	3b3 2.430
146	37.0	(13.7)	(20.8)	1.69 2.34	○					○	○	不良 白色砂粒(0.65) 淡黄灰色	4-2 2.980
147	36.3	(9.1)	24.7	2.02 2.96	○	○				○	○	不良 白色砂粒(0.85) 黄灰色	4-2 3.000
148	38.8	(20.5)	(22.0)	1.62 2.87	○	○				○		良 白色砂粒(0.78) 黄灰色	4-3 3.705
149	36.7	(19.4)	26.1	1.77 2.35	○					○	○	良 白色砂粒(0.70) 黄灰色	4-2 3.400
151	36.5	(16.8)	(15.3)	1.99 2.50	○					○	○	良 白色小砂粒(0.55) 黄灰色	剥脱 4-2 2.720
152	37.2	22.8	(24.7)	1.92 1.76						○	○	良 白色小砂粒(0.55) 黄灰色	4-2 3.030
154	36.9	(19.3)	(20.0)	1.98 2.64	○	○		○ 12×11		○	○	良好 白色砂粒(0.42) 淡灰色	2c2 3.680

第4章 第1節 天神坂遺跡の概要

表-10 丸瓦一覧表

単位(cm)

番号	長	幅		高	凸面	凹面	焼成 胎土(cm) 色調	備考 (kg)
		狭	広					
181	34.6	(6.7)	14.0	1.10 □ 1.50	ナデ 側面ヘラキリ	ヘラカキ, ナデ	良好 白色小砂粒(0.60) 白灰色	1.340
182	—	—	17.1	(—) 2.40	ナデ 側面ヘラキリ	布目(タテ 9×ヨコ11)	良好 白色砂粒(0.50) 黄灰褐色	1.630
183	—	—	(11.7)	(—) 1.80	ナデ 側面ヘラキリ	布目(タテ 6×ヨコ 6)	不良 白色砂粒(0.60) 黄灰色	剥落 1.760
184	32.0	—	(10.7)	(—) 2.50	ナデ 側面ヘラキリ	布目(タテ 5×ヨコ 6) ナデ	良好 白色小砂粒(0.50) 淡黄灰色	9.40
185	36.0	(4.4)	(10.1)	0.70 2.50	ナデ 側面ヘラキリ	布目(タテ 7×ヨコ 6) ナデ	不良 白色小砂粒 淡黄灰色	剥落 1.410
186	35.6	10.5	14.6	1.50 1.40	ナデ ヘラカキ 側面ヘラキリ	布目(タテ 8×ヨコ15) ナデ	良好 白色小砂粒(0.50) 青灰色	1.950
187	—	—	(10.3)	(—) 2.47	縄叩き目(タテ, 少々?) ナデ	布目(タテ 7×ヨコ 8) ヘラカキ	不良 白色砂粒(0.56) 灰褐色	2.000
188	36.0	(15.0)	(2.8)	1.28 1.99	ナデ 側面ヘラキリ	布目(タテ 7×ヨコ 8)	不良 白色小砂粒(0.58) 淡黄灰色	粗い布目 2.000
189	34.8	10.2	(10.0)	1.19 1.63	ナデ 側面ヘラキリ	布目(タテ12×ヨコ13)	良 白色小砂粒(0.46) 黄灰色	1.190
190	36.6	(8.8)	(12.6)	1.31 2.50	ナデ 側面ヘラキリ	ナデ ヘラカキ(タテ)	不良 砂粒(0.50) 黄灰色	剥落 1.760
191	37.5	(6.6)	(15.7)	1.68 1.95	ナデ	布目(タテ 5×ヨコ 5)	不良 白色砂粒(0.75) 黄灰色	粗い布目 2.170
192	35.4	10.7	(13.2)	1.20 □ 1.63	ナデ 側面ヘラキリ	布目(タテ 6×ヨコ 6 ?) しわ ナデ	良 小砂粒(0.53) 淡黄灰色	1.870
193	35.8	8.9	15.7	1.68 1.95	ナデ	ナデ	不良 白色砂粒(0.64) 淡黄灰色	剥落 2.310
194	36.5	(4.0)	(10.6)	2.29 1.35	ナデ 側面ヘラキリ	布目(タテ 8×ヨコ 8) ナデ	不良 小砂粒(0.61) 淡黄灰色	1.910
195	37.8	(5.8)	14.9	1.33 1.85	ナデ 側面ヘラキリ	布目(タテ 5×ヨコ 5) ナデ	不色 砂粒(0.54) 黄灰色	粗い布目 1.700
196	36.1	9.8	(8.5)	1.74 3.57	ナデ	布目(タテ 8×ヨコ 7) ナデ ヘラカキ(タテ)	良 小砂粒(0.75) 白灰色	剥落 1.770
197	37.0	(3.7)	15.0	1.99 2.02	ナデ	布目(タテ 5×ヨコ 5) ナデ ヘラカキ(タテ)	良 白色砂粒(0.58) 白灰色	粗い布目 2.040
198	37.8	9.0	(15.0)	2.03 2.07	ナデ 側面ヘラキリ	布目(タテ 5×ヨコ 6)	不良 砂粒(0.58) 黄灰色	剥落 2.650

()は破片を表わす。

天神坂遺跡

単位(cm)

番号	長	幅		高	凸面	凹面	焼成 胎土(cm) 色調	備考 (kg)
		狭	広					
199	34.3	8.0	14.5	1.78 1.63	ナデ ヘラカキ	布目(タテ6×ヨコ6) ヘラカキ	不良 白色小砂粒(0.40) 白灰色	1.990
200	34.3	(5.7)	13.8	0.76 1.42	ナデ ヘラカキ	布目(タテ6×ヨコ6) 全面	良 小砂粒(0.61) 淡黄灰色	1.380
201	36.4	(9.0)	13.9	1.44 1.82	ナデ 側面ヘラキリ	ナデ シワ	良 小砂粒(0.70) 白黃灰色	1.740
202	—	—	14.9	(—) 2.42)	ナデ 側面ヘラキリ	布目(タテ6×ヨコ6) ↑ これより目の大きい所が多い	良 小砂粒(0.68) 淡黄灰色	1.850
203	35.3	(6.5)	13.1	1.24 □ 1.66		布目(タテ7×ヨコ8)	良好 小砂粒(0.57) 黃灰色	剥落 1.180
204	34.1	(4.4)	15.0	(—) 2.00	ナデ 側面ヘラキリ	布目(タテ12×ヨコ12?) ヘラカキ ナデ しわ	不良 小砂粒(0.30) 黃灰褐色	剥落 1.810
205	35.2	(9.6)	15.7	0.95 2.50	ナデ 縄叩き目? しわ	布目(タテ8×ヨコ8) ナデ しわ	良好 白色小砂粒(0.47) 白黃灰色	2.320
206	36.2	(8.6)	14.5	1.57 2.02	ナデ 側面ヘラキリ	布目(タテ14×ヨコ15) しわ	良 白色小砂粒(0.54) 黃灰色	剥落 2.440
207	36.7	(9.4)	12.0	1.74 1.23	ナデ 側面ヘラキリ	ナデ しわ	良 白色小砂粒(0.52) 黃灰色	剥落 1.740
208	—	—	13.4	(—) 0.98	ヘラアト(?) ナデ 側面ヘラキリ	ナデ	不良 白色砂粒(0.53) 黃褐灰色	1.300
209	37.6	10.2	14.8	2.20 1.88	ナデ	ナデ しわ	良好 白色砂粒(0.71) 黃灰色	剥落 1.720
210	34.8	(9.2)	14.1	1.70 2.13	ナデ ヘラカキ 側面ヘラキリ	布目(タテ6×ヨコ5)	良 小砂粒(0.55) 白灰色	2.120
211	35.6	(7.7)	14.9	1.20 1.49	ナデ 側面ヘラキリ	ナデ ヘラカキ(タテ)	良好 白色小砂粒(0.46) 黃灰色	凹面広口部 ヘラキリ 1.840
212	37.2	9.0	15.6	1.27 2.34	ナデ	ナデ	不良 白色砂粒(0.58) 黃灰褐色	剥落 2.250
213	33.4	(8.9)	13.9	1.68 1.80	ナデ ヘラカキ(タテ)	ナデ	不良 白色小砂粒(0.57) 淡黄灰色	1.490
214	35.2	10.3	14.3	1.76 □ 2.36	ナデ	布目(?) ナデ	良 白色砂粒(0.54) 淡黄灰色	2.180
215	35.4	10.3	13.7	2.41 1.97	ナデ	布目(タテ5×ヨコ6)	良 小砂粒(0.55) 白灰色	2.120
216	36.9	10.9	15.0	2.06 1.92	ナデ 側面ヘラキリ	ナデ ヘラカキ	不良 白色砂粒(0.47) 淡黄色	1.870

第4章 第1節 天神坂遺跡の概要

単位(cm)

番号	長	幅		高	凸 面	凹 面	焼成 胎土(cm) 色調	備 考
		狭	広					
217	35.5	10.3	14.3	1.40 2.48	ナデ	布目(タテ10×ヨコ12) ナデ	不良 白色砂粒(0.58) 白灰色	1.740
218	35.8	9.2	14.1	2.09 2.80	ナデ	ナデ	不良 白色小砂粒(0.70) 黄灰色	2.120
219	35.0	(8.4)	(10.7)	1.36 2.30	縄叩き目(タテ?) ナデ	布目(タテ?×ヨコ7) ナデ しわ	良 白色砂粒(0.79) 黄灰色	2.240
220	35.4	(11.7)	(8.9)	1.66 1.80	ナデ ヘラカキ(タテ・ヨコ) 側面ヘラキリ	ナデ (シワ)	良好 白色小砂粒(0.48) 白黄灰色	1.490
221	35.3	(10.1)	17.2	1.06 1.47	ナデ 側面ヘラキリ	ナデ ヘラカキ しわ	良 白色小砂粒(0.44) 黄灰色	2.270
222	37.9	(7.6)	17.7	1.36 1.91	ナデ	布目(タテ5×ヨコ6) ナデ(布目の上に粘土をなす りついている感じ)	良 白色小砂粒(0.42) 白黄灰色	1.940
223	—	—	16.3	(—) 1.84	ナデ 側面ヘラキリ	布目(タテ9×ヨコ11) ナデ	良好(須恵) 白色小砂粒(0.47) 淡青灰色	1.730
224	34.8	11.0	(10.4)	1.14 2.25	ナデ 側面ヘラキリ	布目(タテ9×ヨコ11) ナデ	良好(須恵) 白色小砂粒(0.52) 灰色	粗い布目 1.760
225	33.3	9.2	13.5	1.12 1.53	ナデ ヘラカキ(タテ) 側面ヘラキリ	布目(タテ11×ヨコ13~) ナデ ↑ 中央部になるに従 ヘラカキ て縦目の間隔が 狭くなっている	良好 小砂粒(0.58) 青灰色	1.420
226	35.7	9.8	15.5	1.21 1.29	ナデ ヘラカキ(タテ) 側面ヘラキリ	布目(タテ11×ヨコ10) ナデ	良好(須恵) 白色小砂粒(0.57) 黒灰色	ほぼ完形 1.840
227	35.7	9.8	14.8	1.51 2.04	ナデ 側面ヘラキリ	布目(タテ8×ヨコ20) ナデ ヘラカキ	良好 白色小砂粒(0.51) 淡青灰色	2.170
228	33.2	9.8	14.7	1.82 2.33	ナデ ヘラカキ(タテ) 側面ヘラキリ	布目(タテ8×ヨコ10) ナデ	良好 砂粒(0.65) 青灰色	1.650
229	34.3	10.8	13.5	1.24 1.48	ナデ ヘラカキ(タテ) 側面ヘラキリ	布目(タテ12×ヨコ12) ヘラカキ(タテ)	良好 白色砂粒 淡灰色	1.370
230	34.4	10.3	15.8	1.41 2.35	ナデ (しわ)	布目(タテ11×ヨコ10) ナデ 1部 ヘラカキ	良好(須恵) 白色小砂粒(0.45) 黒灰色	1.860
231	34.1	(7.7)	14.8	1.00 1.43	ナデ 側面ヘラキリ	布目(タテ11×ヨコ13) ナデ ヘラカキ(タテ)	良好(須恵) 白色小砂粒 淡黒灰色	1.390
232	34.3	(8.8)	14.6	1.23 1.67	ナデ ヘラカキ(タテ)	布目(タテ12×ヨコ14) ヘラカキ	良好(須恵) 白色小砂粒(0.49) 淡灰色	1.700
233	36.2	(7.8)	(14.9)	0.98 2.22	ナデ ヘラカキ(タテ) 側面ヘラキリ	布目(タテ11×ヨコ13) ヘラカキ	良好(須恵) 白色小砂粒(0.71) 褐灰色	長い瓦 2.020
234	34.3	(7.3)	14.4	1.27 1.81	ナデ(ヨコナデ) 側面ヘラキリ	布目(タテ11×ヨコ11) ナデ しわ	良好(須恵) 白色小砂粒(0.51) 青灰色	1.660

天神坂遺跡

単位(cm)

番号	長	幅		高	凸 面	凹 面	焼成 胎土(cm) 色調	備 考 (kg)
		狭	広					
235	34.6	(9.7)	(13.4)	1.55 1.74	ナデ ヘラカキ 側面ヘラキリ	布目(タテ13×ヨコ13) ナデ ヘラカキ	良好(須恵) 白色小砂粒(0.46) 黒灰色	凹面両側ヘラキリ 2.070
236	31.9	(8.3)	(14.8)	1.42 1.48	ナデ 側面ヘラキリ	布目(タテ11×ヨコ11) (タテ7×ヨコ8)	色好(須恵) 白色小砂粒(0.50) 灰色	1.690
237	33.7	10.2	(13.0)	1.26 2.61	ナデ ヘラカキ 側面ヘラキリ	ナデ	良好 白色小砂粒(0.44) 黒灰色	1.690
238	38.1	(5.6)	13.0	1.25 14.9	ナデ 側面ヘラキリ	布目(タテ14×ヨコ14) 中央部指圧 ナデ しわ	良 白色砂粒(0.76) 黒褐色	2.190
239	39.7	8.9	16.5	1.10 1.77	ナデ ヘラカキ 側面ヘラキリ	布目(タテ8×ヨコ8) 不定	良 白色小砂粒(0.43) 淡灰色	2.020
240	35.5	11.1	14.4	1.49 2.10	ナデ ヘラカキ 側面ヘラキリ	ナデ しわ	良 白色小砂粒(0.45) 灰色	2.100
241	35.1	(9.8)	(4.4)	0.98 1.09	ナデ 側面ヘラキリ	布目(タテ8×ヨコ13) ナデ しわ	良 白色小砂粒(0.53) 淡黄色	1.030
242	39.9	8.8	(15.6)	0.96 1.78	ナデ ヘラカキ(ヨコ) 側面ヘラキリ	布目(タテ5×ヨコ5) ヘラカキ(ヨコ)	良好 白色小砂粒(0.49) 灰色	粗い布目 2.530
243	31.0	(9.2)	(15.0)	1.20 1.59	ナデ 側面ヘラキリ	布目(タテ7×ヨコ8) 全面	良 小砂粒(0.62) 灰色	小型 1.390
244	30.3	10.3	18.1	1.06 1.96	ナデ 側面ヘラキリ	布目(タテ7×ヨコ7) しわ全面	良好 白色小砂粒(0.90) 青灰色	小型 1.620
245	—	—	16.4	(—) 1.63	ナデ ヘラカキ	布目(タテ9×ヨコ9) (ヨコじまの変な布目) ナデ	良好 白色小砂粒(0.43) 灰褐色	1.970
246	37.5	(7.0)	18.1	1.20 2.53	ナデ 側面ヘラキリ	布目(タテ6×ヨコ8) しわ	良好 白色砂粒(0.94) 淡青灰色	凹部広口部ヘラキリ 2.750
247	34.9	11.3	(13.4)	1.13 1.36	ナデ ヘラカキ(タテ) 側面ヘラキリ	布目(タテ12×ヨコ12) ナデ	良好 白色小砂粒(0.39) 淡青色	1.720
248	—	—	(12.6)	(—) 2.22	ナデ 側面ヘラキリ	布目(タテ14×ヨコ16) ナデ しわ	良好 白色小砂粒(0.33) 灰色	鉄付着 2.010
249	34.8	(8.8)	(9.3)	1.03 1.76	ナデ 縦叩き目様のへこみ 側面ヘラキリ	布目(タテ10×ヨコ10) ナデ (しわ)	良好 白色小砂粒(0.38) 淡灰色	1.360
250	34.0	(5.7)	(7.5)	1.15 1.26	ナデ	布目(タテ8×ヨコ12) ナデ	良好 白色小砂粒(0.55) 青灰色	1.270
251	35.0	(8.1)	(12.1)	1.19 1.59	ナデ 側面ヘラキリ	布目(タテ14×ヨコ14) ナデ しわ	良 白色砂粒(0.56) 白灰色	1.420
252	34.5	10.0	13.0	1.79 2.06	ナデ(タテ・ナナメ) 側面ヘラキリ	布目(タテ14×ヨコ16) ナデ しわ	良好 白色小砂粒(0.42) 灰色	2.100

第4章 第1節 天神坂遺跡の概要

単位(cm)

番号	長	幅		高	凸 面	凹 面	焼成 胎土(cm) 色調	備 考
		狭	広					
253	38.4	(7.7)	15.0	1.30 (一)	ナデ 側面ヘラキリ	布目(タテ10×ヨコ10) 全面	良好 白色小砂粒(0.55) 黒灰色	1.810
254	34.3	(10.2)	(14.5)	1.61 1.48	ナデ 側面ヘラキリ	布目(タテ10×ヨコ10) ナデ	良好 白色小砂粒(0.43) 灰色	2.030
255	33.6	10.0	13.0	0.95 1.86	ナデ 側面ヘラキリ	布目(タテ11×ヨコ11) ナデ しわ 指圧	良好 白色小砂粒(0.48) 黒灰色	1.380
256	35.5	(9.1)	15.3	1.32 1.82	ナデ ヘラカキ(ヨコ) 側面ヘラキリ	布目(タテ14×ヨコ14) ナデ ヘラカキ(タテ)	良好 白色小砂粒(0.39) 青灰色	1.900
257	34.3	(7.2)	(13.6)	1.90 2.14	ナデ ヘラカキ(タテ) 側面ヘラキリ	布目(タテ12×ヨコ14) ヘラカキ(タテ)	良好 白色小砂粒(0.41) 淡黄灰色	2.030
258	35.1	9.7	12.8	1.53 □ 1.89	ナデ 側面ヘラキリ	布目(タテ12×ヨコ12) ナデ しわ	良好 白色小砂粒(0.45) 淡黄灰色	1.340
259	35.5	(9.5)	(9.9)	1.60 1.80	ナデ ヘラカキ 側面ヘラキリ	布目(タテ10×ヨコ12) ナデ(布目の上に粘土をこすりつけている)	良好 白色小砂粒(0.63) 青灰色	1.950
260	35.2	10.2	14.1	1.33 1.72	ナデ 側面ヘラキリ	布目(タテ10×ヨコ16) ナデ しわ	良好 白色小砂粒(0.43) 淡灰色	2.050
261	33.8	(7.3)	14.1	0.84 1.42	ナデ 縄叩き目? 側面ヘラキリ	ナデ しわ 布目(?)	良好 白色小砂粒(0.37) 黒灰色	1.730
262	41.4	8.4	(14.2)	1.03 1.52	ナデ 側面ヘラキリ	布目(タテ9×ヨコ9) ナデ しわ	良好 白色砂粒(0.51) 濃青灰色	2.500
263	36.1	(8.2)	14.8	1.11 1.48	縄叩き目(タテ)? ナデ 側面ヘラキリ	布目(タテ12×ヨコ12)	良好 白色砂粒(0.49) 青灰色	2.020
264	33.2	(7.7)	(15.5)	2.36 1.25	ナデ ヘラカキ 側面ヘラキリ	布目(タテ18×ヨコ18) ナデ ヘラカキ	良好 白色砂粒(0.40) 淡青灰色	1.370
265	33.1	9.9	(12.5)	2.10 1.69	ナデ ヘラカキ(タテ) 側面ヘラキリ	布目(9×9?) ナデ	良好 白色小砂粒(0.38) 黒褐灰色	1.690
266	34.3	10.0	14.4	1.42 2.34	ナデ ヘラカキ(ナナメ) 大きな窪み 側面ヘラキリ	布目(タテ8×ヨコ8) ナデ ヘラカキ	良好 白色小砂粒(0.54) 黒青灰色	1.640
267	39.5	8.1	(16.5)	1.10 1.76	ナデ 側面ヘラキリ	布目(タテ9×ヨコ9) ヘラカキ(ヨコ)	良好 白色小砂粒(0.41) 白灰色	2.390
268	33.7	8.8	(11.4)	1.65 2.16	ナデ 粘土塊 側面ヘラキリ	布目(タテ8×ヨコ8) ナデ	良好 白色小砂粒(0.46) 黒灰色	1.460
269	35.5	(8.4)	(12.1)	1.46 2.19	ナデ 側面ヘラキリ	布目(タテ14×ヨコ14) ナデ しわ	良好 白色小砂粒(0.35) 青灰色	2.130
270	35.4	(10.6)	(13.3)	1.56 2.28	ナデ 側面ヘラキリ	布目(タテ14×ヨコ16) ナデ	良好 白色小砂粒(0.53) 淡青灰色	凹面両側狭口部 ヘラキリ 2.070

天神坂遺跡

単位(cm)

番号	長	幅		高	凸面	凹面	焼成 胎土(cm) 色調	備考 (kg)
		狭	広					
271	34.9	9.8	15.5	1.20 1.32	ナデ 側面ヘラキリ	布目(タテ15×ヨコ14) ナデ しわ 粘土塊	良好 白色小砂粒(0.67) 青灰色	1.370
272	38.1	9.5	15.9	2.01 2.17	ナデ 側面ヘラキリ	布目(タテ5×ヨコ6)	不良 白色砂粒(0.76) 淡黄灰色	剥落 2.560
273	38.5	(8.5)	(8.4)	1.27 1.88	ナデ	布目(タテ6×ヨコ8) ナデ	不良 白色砂粒(0.67) 白質灰色	剥落 1.960
274	31.2	10.5	(15.7)	1.27 1.35	ナデ 側面ヘラキリ	布目(タテ8×ヨコ8) ナデ しわ	良好 小砂粒(0.54) 淡灰色	剥落 1.460
275	36.3	(7.2)	(12.1)	1.75 1.73	ナデ 側面ヘラキリ	布目(タテ6×ヨコ7) しわ	良 白色砂粒(0.79) 黄灰色	2.620
276	(41.0)	(3.0)	17.6	(—) 1.63	ナデ 側面ヘラキリ	布目(タテ8×ヨコ8) ナデ ヘラカキ	良 白色砂粒(0.56) 黒灰色	2.440
277	33.8	(4.0)	(14.8)	0.94 2.29	ナデ ヘラカキ 側面ヘラキリ	布目(タテ6×ヨコ7) ナデ ヘラカキ しわ	良好 白色小砂粒(0.28) 淡灰色	粗い布目 2.000
278	36.4	(8.2)	16.8	1.02 2.66	ナデ ヘラカキ 側面ヘラキリ	布目(タテ7×ヨコ8)	良 白色砂粒(0.63) 白灰色	剥落 2.180
279	37.3	(7.1)	(14.7)	1.70 1.89	ナデ 側面ヘラキリ	布目(タテ5×ヨコ6) ヘラカキ	不良 白色砂粒(0.65) 白灰色	2.260
280	36.2	11.4	15.8	1.36 0.95	剥落 側面ヘラキリ	布目(タテ8×ヨコ9) ナデ しわ	良 白色小砂粒(0.68) 淡黄灰色	1.390
281	35.8	(6.4)	14.4	1.18 1.92	ナデ 側面ヘラキリ	布目(タテ11×ヨコ11) ナデ	良 白色小砂粒(0.49) 淡黄灰色	剥落 1.200
282	36.8	(7.3)	(11.4)	1.31 1.26	ナデ ヘラカキ 側面ヘラキリ	布目(タテ5×ヨコ5)	良 白色小砂粒(0.70) 淡黄灰色	粗い布目 1.740
283	36.7	(6.2)	(11.7)	1.10 1.54	ナデ	しわ	良 砂粒(0.58) 白質灰色	剥落 1.810
284	36.6	(5.3)	16.4	1.50 3.08	剥落 側面ヘラカキ	布目(タテ13×ヨコ12) しわ	良 白色小砂粒(0.53) 白灰色(黄)	2.320
285	34.2	9.9	14.1	1.38 1.89	ナデ 側面ヘラキリ	ナデ	良 白色砂粒(0.50) 黄灰色	1.730
286	34.4	(5.3)	16.4	1.50 3.08	ナデ ヘラカキ 側面ヘラキリ	布目(タテ6×ヨコ8) ナデ しわ	良 白色小砂粒(0.59) 白質灰色	2.420
287	36.4	(6.4)	15.2	1.28 1.78	ナデ 側面ヘラキリ	布目(タテ14×ヨコ14) ヘラカキ ナデ	良好 白色小砂粒(0.54) 白灰色	剥落 2.010
288	36.2	(8.2)	(11.2)	0.96 1.56	ナデ ヘラカキ 側面ヘラキリ	全面布目(タテ6×ヨコ7) ナデ 不定	良 白色小砂粒(0.33) 白灰色	粗い布目 1.590

第4章 第1節 天神坂遺跡の概要

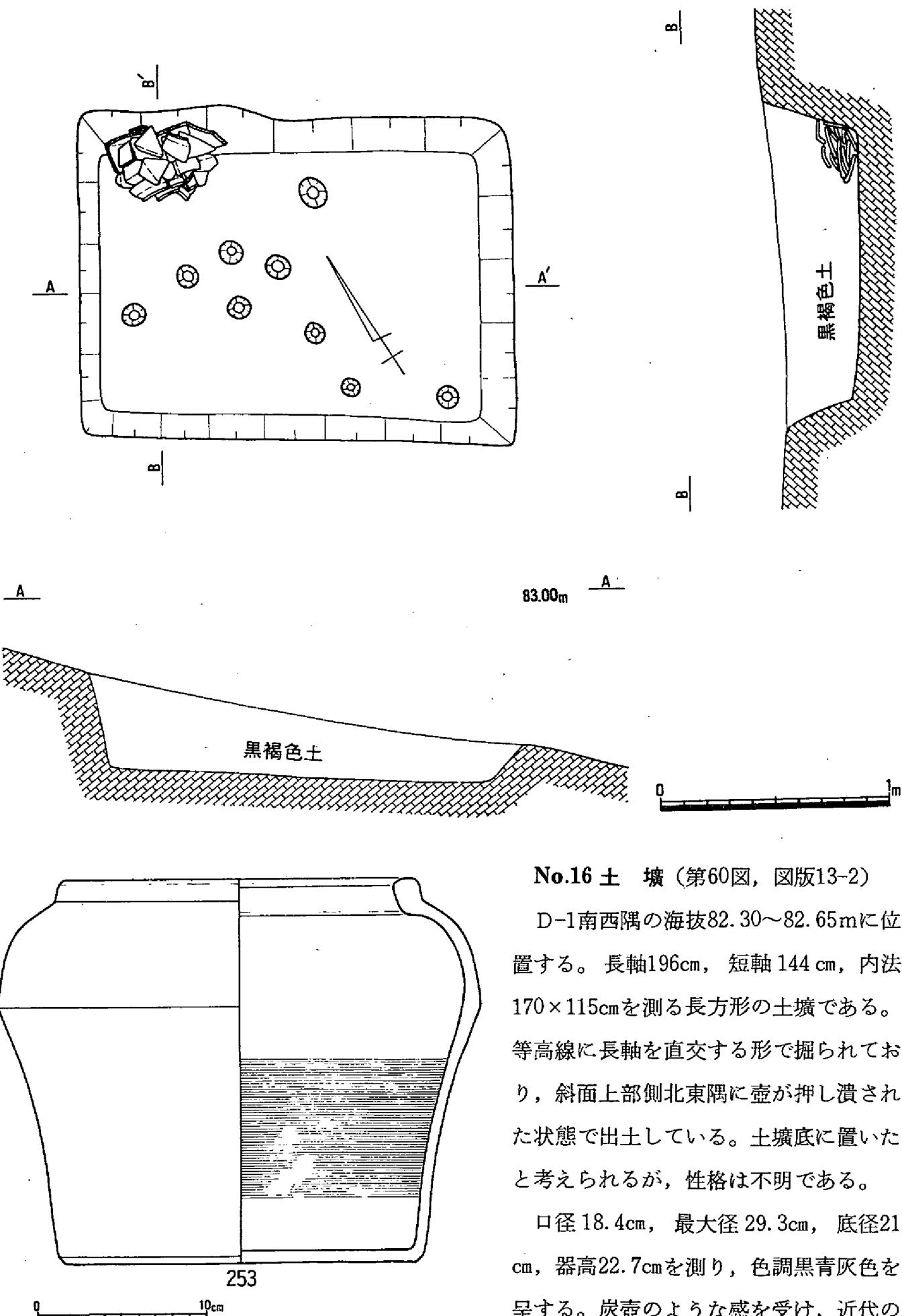
単位(cm)

番号	長	幅		高	凸 面	凹 面	焼成 胎土(cm) 色調	備 考 (kg)
		狭	広					
289	35.9	(9.6)	(15.0)	0.88 2.00	ナデ 側面ヘラキリ	布目(タテ8×ヨコ9) ナデ?	良 白色小砂粒(0.71) 灰色	2.100
290	—	—	14.6	(—) 1.72	ナデ 側面ヘラキリ	布目(タテ12×ヨコ?) ナデ	良 白色小砂粒(0.37) 白灰色	凹面広口部ヘラカキ 1.090
291	—	—	14.0	(—) □ 1.76	ナデ 側面ヘラキリ		良 白色小砂粒(0.49) 淡黄灰色	1.190
292	—	—	(11.3)	1.78	ナデ 側面ヘラキリ	布目(タテ5×ヨコ5)	不良 灰褐色(0.67) 白色砂粒	粗い布目 1.130
293	35.0	(9.2)	(12.8)	1.11 1.54	ナデ ヘラカキ 側面ヘラキリ	布目(タテ17×ヨコ17) ナデ	良好 白色小砂粒(0.49) (白)灰色	1.580
294	33.9	11.1	(12.6)	1.69 1.70	ナデ ヘラカキ(タテ)	布目(タテ5×ヨコ5)	良 砂粒(0.56) 淡黄灰色	1.910
295	34.6	(7.7)	15.4	1.26 1.78	ナデ 側面ヘラキリ	ナデ ヘラカキ (中央部粘土塊を加えている)	良好 白色小砂粒(0.54) 淡灰色	1.680
296	33.5	9.5	14.7	1.49 1.48	ナデ 側面ヘラキリ	布目(タテ14×ヨコ14) ナデ しわ	良好 白色小砂粒(0.59) 白灰色	1.380
297	—	—	13.8	(—) 1.73	ナデ	ナデ	良 白色小砂粒(0.65) 淡白黃灰色	剥落 1.160
298	32.1	(9.2)	14.9	1.34 1.53	ナデ ヘラカキ(ヨコ) 側面ヘラキリ	布目(タテ6×ヨコ7) (タテ7×ヨコ7)	良 白色小砂粒(0.32) 白灰色	短い 1.530
299	37.0	(1.8)	13.5	0.80 2.13	ナデ 側面ヘラキリ	布目(タテ8×ヨコ13) しわ ナデ	良 小砂粒(0.68) 黄灰色	1.870
300	35.3	(8.9)	15.2	2.12 1.96	ナデ 側面ヘラキリ	布目(タテ12×ヨコ12) ナデ ヘラカキ(タテ)	良好 白色小砂粒(0.53) 淡灰色	剥落 1.990
301	35.3	9.9	15.5	1.18 1.45	ナデ 側面ヘラキリ	ナデ しわ	不良 白色砂粒(0.60) 黄灰色	1.610
302	35.5	(5.8)	15.2	1.24 1.50	ナデ ヘラカキ(タテ) 側面ヘラキリ	布目(タテ12×ヨコ12) ナデ しわ	良 白色小砂粒(0.53) 淡黄灰色	1.500
303	—	—	13.6	(—) 1.27	ナデ 側面ヘラキリ	布目(タテ6×ヨコ8) しわ	不良 白色砂粒(0.56) 黄褐色	剥落 1.720
304	37.8	10.5	(10.6)	1.29 2.15	ナデ ヘラカキ(ナナメ) 側面ヘラキリ	布目(タテ7×ヨコ7)	良 白色砂粒(0.70) 淡黄灰色	2.240
305	29.2	(10.2)	(14.7)	1.31 1.65	ナデ 側面ヘラキリ	布目(タテ5×ヨコ5) しわ	良 白色小砂粒(0.50) 白黃灰色	剥落 粗い布目 1.300
306	—	11.5	—	1.26 (—)	ナデ	ナデ しわ	良 白色砂粒(0.52) 黄灰色	剥落 1.070

天神坂遺跡

単位(cm)

番号	長	幅		高	凸 面	凹 面	焼成 胎土(cm) 色調	備 考 (kg)
		狭	広					
307	37.4	(9.6)	(13.4)	1.16 1.66	ナデ		不良 白色砂粒(0.56) 淡黄色	剥落 2.020
308	35.6	9.6	(7.2)	1.38 1.76	ナデ 側面ヘラキリ	ナデ しわ	良 白色小砂粒(0.58) 白灰色	剥落 1.130
309	34.8	(7.2)	(12.3)	1.80 1.07	ナデ 側面ヘラキリ	ナデ	良 白色小砂粒(0.46) 白黄灰色	剥落 1.370
310	39.0	(8.6)	17.4	1.13 3.73	ナデ 側面ヘラキリ	布目{大(タテ5×ヨコ5) 小(タテ9×ヨコ13)} ナデ	不良 白色砂粒(0.57) 淡灰色	3.700
311	35.1	(4.4)	(14.6)	1.32 4.80	ナデ 側面ヘラキリ	布目(タテ?×ヨコ12) ナデ	良 白色小砂粒(0.51) 白黄灰色	剥落 2.010
312	37.5	9.4	16.2	1.50 2.40	ナデ(荒い) ヘラカキ(ヨコ) 側面ヘラキリ	布目(タテ8×ヨコ8)	良 白色砂粒(0.61) 淡黄灰色	2.890
313	—	(9.0)	(12.0)	(—) 1.31	ナデ ヘラカキ 側面ヘラキリ □↑	ヘラカキ(タテ) ケズリ	良好 白色小砂粒(0.64) 淡灰色	1.680
314	35.9	(7.8)	(12.4)	1.68 1.61	ナデ 側面ヘラキリ	布目(タテ12×ヨコ13) ナデ しわ	良 白色砂粒(0.56) 灰褐色	1.770
315	35.5	11.8	15.9	(—) 5.07	ナデ 狭口部ヨコナデ 側面ヘラキリ	布目(タテ12×ヨコ12) ナデ しわ	良好 白色小砂粒(0.47) 黒灰色	2.180
316	35.6	(9.1)	(11.2)	1.37 2.66	ナデ 側面ヘラキリ	布目(タテ12×ヨコ15) ナデ	良好 白色小砂粒(0.76) 青灰色	1.970
317	34.6	(9.8)	(11.3)	1.39 1.57	ナデ 側面ヘラキリ △(布目(タテ13×ヨコ15) しわ ナデ	良好 白色小砂粒(0.57) 黒灰色	1.280
318	29.9	10.5	18.2	1.15 1.56	ナデ ヘラカキ 側面ヘラキリ U↑	布目(タテ6×ヨコ8) 全面 しわ	良好 小砂粒(0.98) 青灰色	1.620
319	34.1	(7.7)	(11.9)	1.60 1.65	ナデ ヘラカキ(タテ) 側面ヘラキリ □↓	布目(タテ15×ヨコ14) ヘラカキ(ヨコ) ナデ	良好 白色小砂粒(0.43) 淡黑灰色	1.870



No.16 土 墳 (第60図, 図版13-2)

D-1南西隅の海拔82.30~82.65mに位置する。長軸196cm, 短軸144cm, 内法170×115cmを測る長方形の土壙である。等高線に長軸を直交する形で掘られており, 斜面上部側北東隅に壺が押し潰された状態で出土している。土壙底に置いたと考えられるが, 性格は不明である。

口径18.4cm, 最大径29.3cm, 底径21cm, 器高22.7cmを測り, 色調黒青灰色を呈する。炭壺のような感を受け, 近代の土器と考えられる。

第60図 No. 16 土壙 (1/30)・出土遺物 (1/4)

5. 小 結

(1) 天神坂遺跡の集落

天神坂遺跡の弥生～古墳時代の集落址は、丘陵東側緩斜面を利用し、自然の条件を克服した占地を示している。

工事工程により発掘調査区が限定されたゆえ、推定の域を出ないが、立地から調査区北東部平坦地には同一に機能した集落地が存在した可能性が考えられる。

ここでは調査区内に限定して説明を加えると、竪穴式住居址は40×100m間に8か所に分散して占地し、そのうち重複関係にあるNo.1, 2, 4, 7, 8, 9の住居址の6軒が存在する。これら6軒とも小規模（面積）なものからほぼ同心円状に一回り大きい住居址に拡張されており、同プランを踏襲されている中にあって、No.14・4住居址のように円形から方形に変化する例が認められる。小規模な拡張で4.85m²、大規模な拡張で8.59m²を測る。この傾向は時期の近似するものに多く、住人の共通意識によるものと考えられ、住居址の中心位置はあまり変化せず、中央穴が若干どちらかに外れる程度である。

切り合い関係にあるものは両住居間に時期差を持ち、それにはNo.5, No.12・6, No.8・7住居址があたり、古段階のものが新段階のものによって大きく削除を受け、斜面上部のみをとどめ、切り合いの床面レベルが大きく異なるケースが多いようである。それらは同じくらいの面積か、あるいは一回り大きい住居址内の堆積土の凹部、および埋没後に掘り込んで造られたと考えられる形状を呈する。

前述の2形態と異り、住居址の切り合い、重複が認められない単独出土のものにNo.3, 12, 6住居址があげられる。これらは主柱穴における切り合い、壁体溝における重複痕跡を認めることができない住居址である。

これら3形態の住居面積を参考にあげると、大きくは40～50m², 30～40m², 20～30m², 10～20m²の4つに分れ、順にB・C・D・Eの規模表示名を付しておく。

次に住居址の占地形態を天・後・II, 天・古・I, IIの各時期別に観察し、説明を加える。

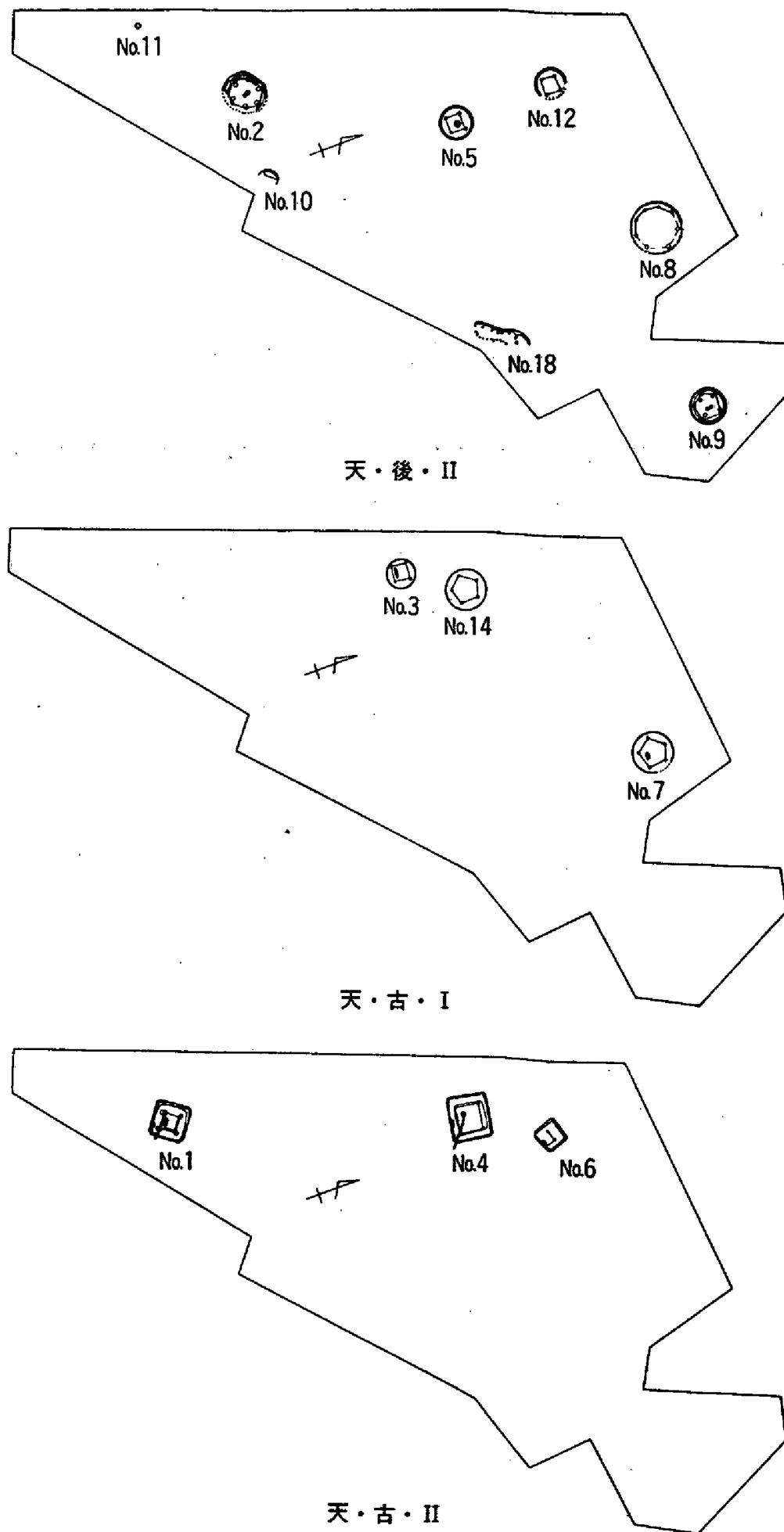
天・後・II期

この時期は、No.2, 5, 12, 8, 9住居址とNo.18段状遺構、そして、No.10, 11土壙の8遺構から成り立っている。南端にNo.11土壙、約110m離れて北東端にNo.9住居址が存在し、そのうちNo.5, 9A, 9B住居址が火災を受けて放棄された状態で出土している。

各住居址間の距離間隔も充分考慮されており、配置は比較的規則性を持つものと思われる。

その上で配置をみると、No.5住居址中央穴を基点に半径約33mの円を描くと、その弧線上にNo.2住居址・No.18段状遺構・No.8住居址中央部がのる。また、No.8住居址中央穴を基点に半径

第4章 第1節 天神坂遺跡の概要



第61図 時期別住居址分布図

天神坂遺跡

27.5mの円を描くと、その弧線上にNo.12・9住居址、No.18段状遺構中央部がのり、住居配置のルールが考えられる。

個々の住居址周縁間の距離は少なくとも10.50m以上、大きくは33mの間隔をもっている。

その上で配置をながめると、No.2～5住居址間が約27m、No.5～12住居址間が約10.50m、No.12～8住居址間、No.8住居址～No.18段状遺構間、No.8～9住居址間が約21m、No.9住居址～18段状遺構間が約25.50mを測る。No.5～12住居址間が10.50mと近距離にあるものを除けば、約21mと25.50mの数値を目安に各戸が分散している傾向を見ることができる。この事実は隣同士大声で呼べば聞える範囲にあり、かつ火事になっても延焼しない程度（註3）には離れていたことを裏づけている。

住居構造は壁体溝・主柱穴・中央穴・土壙等からなり、住居址プランは円と六角形の2種類が存在する。

屋内より説明すると、住居址内周縁を一巡する壁体溝、主柱穴は4・5・6・7・10本のバラツキが認められるが、4本が多く、住居面積の拡張に伴い使用本数が増加しているようである。住居面積はCがNo.8住居址、DがNo.2A住居址、EがNo.9A・2B・5住居址、FがNo.9B住居址となる。そして、F→E、E→Dへの拡張が認められ、縮小されたケースは見られなかった。

中央穴は円形（正円ではない）を呈し、大きいもので幅108×95cm、深さ60cm、幅49×47cm、深さ53cmの若干小振りのものが認められる。中央穴規模と住居址面積は、あまり関連を有しないと考えられる。内部には焼土ブロック、炭等がレンズ状に堆積しており、土壙壁が硬質に焼けている箇所は認めがたい。また、柱痕を確認できた例も明らかではない。

天・古・I期

この時期は、No.3・14・7住居址の3軒が存在する。南端にNo.3住居址、約26m離れて北東端にNo.8住居址が位置している。火災を受けた住居址は確認されていない。

天・後・IIと同様に住居址間の距離をみてゆくと、No.3、No.14住居址の4mは非常に近く、No.3住居址の土器が明確な出土に対して、No.14住居址はNo.4住居址によって拡張されており、床面出土遺物は皆無である。しかし、No.14住居址より約31.2m北東部にある天・古・I期のNo.7住居址平面形、および主柱穴の配置規模等がほとんど一致すること、天・古・II期のNo.4住居に重複拡張していること等より、近似する時期と考察した。

次に屋内より説明すると、住居址内周縁をほぼ円形に一巡する壁体溝、主柱穴は4・5本あり、ほぼ同規模の建て替えには柱穴数は変化をしていない。

住居面積はCがNo.7A・7B住居址、DがNo.14住居址、EがNo.3住居址となる。No.7住居址においてはC→Cへのほぼ同規模の建て替えが行われている。これらにも縮小されたケースは

認められなかった。

中央穴は円・橢円を呈し、大きいもので幅30×180cm、深さ36cm、幅55×57cm、深さ38cmを測る。No.14住居址では、中央部に確認できなかった。内部には焼土ブロック、炭等がレンズ状に堆積しており、土壙壁が硬質に焼けている箇所は認めがたい。また、柱痕を確認できた例も明らかではない。

天・古・II期

この時期は、No.1・4・6の3軒の住居址が存在する。南端にNo.1住居址、約53.5m離れて北端にNo.6住居址がNo.4住居址を挟んで位置している。

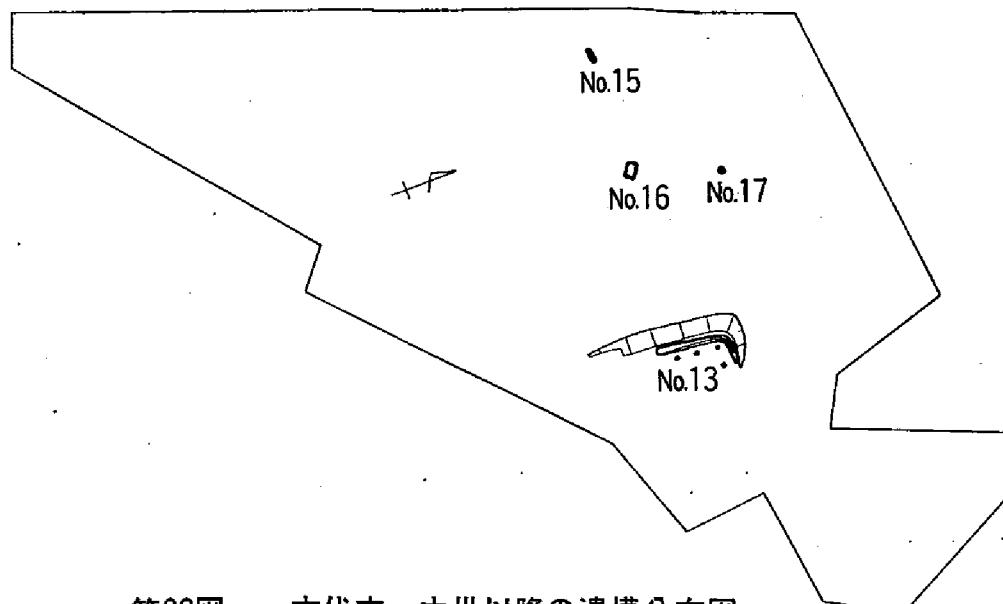
住居址間の距離はNo.1～No.4住居址間が約40m、No.4～No.6住居址間が6.3mと非常に近い。この期に住居プランは円→方形（台形）へと変化し、屋内にはベッド状遺構・方形土壙等が付設される。主柱穴は小型の住居址を除き、大型住居址にも4本柱が使用されている。No.1住居址に2回の拡張が行われており、住居面積はDを呈する。No.4住居址がC、No.6住居址がFに入る。

このように3時期を観察すると、各住居址は一定の距離を確保して占地を行っており、近接したもので同時期を記したものは、今後の調査研究において細分の可能性もでてくる。ここでは概略的なパターンを呈示するにとどめる。

（2）大内田廃寺

寺跡の名称は、現在の岡山市大内田に所在するという事実に基づき「大内田廃寺」と名称を付した。

軒丸・軒平瓦の文様を手がかりに寺の年代を追求するが、県内では同範・同文瓦の報告例は少なく、特に山上・山間高地の寺跡の発掘調査は初めてに近い状況であり、困難を極めた。



第62図 古代末～中世以降の遺構分布図

天神坂遺跡

ここでは、備前・備中を中心に分布が認められる宝相華文（四葉蓮花文）軒丸瓦（註4）について観察を行い、大内田廃寺の軒丸瓦4と対比関連を述べる。

備前では同文の瓦当を出土する寺院に岡山市一宮神宮廃寺（註5）、岡山市吉備津高麗廃寺（註6）、岡山市賞田廃寺（註7）があげられる。備中では吉備郡真備町箭田廃寺（註8）、備中国分尼寺跡（註9）、吉備郡真備町松尾廃寺（註10）、倉敷市浅原安養寺跡（註11）、そして、大内田廃寺と総数8か寺が存在する。

また他地域に目を向けると、京都市上京区千本通出水下ル東入ル十四軒町413の51、平安宮内裏蘭林坊跡の出土例が認められる。

平安京古瓦図録（註12）によれば、平安時代後期Ⅲ期（1157～1192年）に比定されており、またあるいは後期Ⅰ期（1058～1075年）にさかのぼる可能性が記されている。

そして、内裏内郭回廊跡からセッドと考えられる軒平瓦が出土しており、備前国分寺と同範もしくは同文に近いことが指摘されている。

それでは岡山に目を向けると、箭田廃寺（吉備寺）の瓦が重厚な瓦当・丸瓦部を形造っており、四葉蓮花文が厚い盛り上がりをみせる。それに比べて大内田廃寺の瓦は、厚さ3cmを測り、四葉蓮花文の盛り上がりに欠けるものである。これは備中国分尼寺跡出土のものに類似する。次に文様の盛り上がり、レリーフの細線化、器壁の薄さ（2cm）が目立つものに神宮寺跡出土の瓦、平安時代前半～中頃に比定されている賞田廃寺第VI様式瓦があげられる。

大まかに箭田廃寺→備中国分尼寺跡・大内田廃寺→神宮寺跡・賞田廃寺の変化がたどると考える。

軒平瓦の内区主文はすべて均整唐草文様が認められ、いわゆる平城宮6663型式の退化傾向上にとらえられる一連のレリーフであろうか。内区主文の陰陽が逆転しており、陰文様が表出す瓦当を形成している。そのうえに、唐草文様は左右の第2単位部分の主葉、第1支葉、第2支葉が異なる文様を構成し、完全な均整の文様を形造ってはいない。

また、顎の形状より分類すると、直線顎Aa・Ab、曲線顎B、段顎Cの4種類となる。しかし、凹面布目系数、瓦当文様の同文等より同一時期の製作を暗示している。

ここでは、あまり一般的ではない陰文様の出土軒平瓦を抽出してみると、備前では備前国分寺跡（註13）、岡山市津高富原荒神廃寺（註14）、岡山市網浜網浜廃寺（註15）、備中では川入遺跡（註16）、大内田廃寺の5か所がある。

川入遺跡では築地状遺構周辺に集中して出土しており、軒丸瓦が平城宮6225型式、軒平瓦が平城宮6663型式を主体に出土し、土器類は円面硯・杯身蓋・鉄鉢形の須恵器・土師器の皿が共伴している。時期は8世紀中葉に比定できるものである。しかし、築地状遺構の軒平瓦は大内田廃寺軒平瓦ほど省略化が進んでおらず、左右第1・2単位内にみられる主葉・支葉の渦巻の

先端がよく巻き込まれている。文様全体にシャープさと鮮明な彫りが認められる。

備前国分寺跡、岡山市一宮山神廃寺、荒神廃寺、岡山市網浜網浜廃寺等は大内田廃寺より古い様相を持つグループであると考えられる。

平瓦・丸瓦は、一覧表および布目密度表を参考にしていただければ明らかなことであるが、 1 cm^2 内の凹面布目織糸を数え、比較を行ってみた。その糸目は多種におよび、平瓦では横3×縦3本より始まり、横14×縦14本までが確認でき、縦横8・9本、11・12・13本がもっとも多い。丸瓦では横5×縦5本より、横18×縦18本を数え、縦横5・6本、8・9本、12・13・14本がもっとも多い。

平安京の瓦の布目（註17）を参考にすると、奈良後期の織糸数は5本～9本の間で少しずつ粗くなる傾向、平安前期（8世紀末～9世紀初）は5本～8本前後を中心に、平安中期は3本～4本前後、平安後期は7本～10本前後、鎌倉は11本～12本前後という概略を知ることができる。奈良後期より平安中期全般にかけて密度が粗くなり、再び後期より密度が詰ってゆく状況が理解できる。

しかし、大内田廃寺の布目には統一性がなく、均一した織糸の瓦が使用されていないようである。その中でも多く使用されている瓦に、1a3, 2c2, 4d2, 4d3の類が存在する。1a3は凹面全面に粗い糸目がみられ、凹面にヘラ切りがない瓦である。4d2は凹面縄叩き目にて布目が消されており、凹面にヘラ切りが施されている瓦である（平瓦一覧表の備考欄を参照）。

このように糸目でみると限りでは一時期のものにとどまらず、各期の平瓦が使用された可能性が考えられる。糸目がもっとも粗くなる平安時代中期をも、若干含んでいる。このようにみると、新旧混在する瓦を寄せ集めて、体裁を整えた可能性が指摘できる。

土器類では、早島式土器と呼称されている一群が倒壊した尾根瓦下より出土している。この碗は口径13.95cm、器高4.9cm、底径6.66cmを測り、若干稜碗タイプを呈する。器形は体部中位以下にて屈曲し、口縁端部で若干外反する形態をとる。高台は断面三角形を呈し、貼り付けているが、中心を大きく外れている。

13世紀前半と年代が明らかにされている百間川当麻遺跡（註18）の碗との比較を試みると、計測平均値は口径14.6cm、器高4.8cm、底径6.3cmが計測されており、口径において小振りであるが、類似する形態を呈している。さらに、より形態的に類似する碗に鴨方町沖の店遺跡1号窯出土土器（註19）がある。平均計測値は口径15.7cm、器高5.9cm、内高4.7cm、底径6.6cmを測る。口径・器高ともに一回り大型であり、高台は断面四角形にてしっかりした付高台であり、底部に糸切りが認められる。口縁端部が外反する点・底径・形態において近似している。

沖の店1号窯は熱残留磁気の測定により、A・D1190±(60)の推定年代があたえられており、調査担当者により平安時代後半、12世紀後半に比定されている。

天神坂遺跡

大内田廃寺の出土碗は、沖の店1号窯の流れの中でとらえられると考え、12世紀後半～13世紀前半に比定しておきたい。この時期に大内田廃寺は焼失、崩壊したものと考えられ、平野・低地部に存在した寺の子院として存在した可能性がうかがえる。

註

- 註1 『地場大師八十八ヶ所調査報告書』岡山市大内田周辺民俗文化財調査委員会 1981年
- 註2 都窪郡早島町字無津小字小松露で発見された窯址出土品に対して名付けられた名称である。参考文献
：快舟散史（水原岩太郎）「考古行脚」『吉備考古』第32号 吉備考古学会 1937年
- 註3 本多勝一『シリーズ アイヌ民族』18 朝日新聞 1982年5月10日
- 註4 4個の花芯を中心に4弁が配され、その1単位がハート状を呈する。
- 註5 黒住秀雄氏所蔵。
- 註6 岡山市教育委員会文化課編『吉備の古代瓦』岡山市教育委員会・岡山市立オリエント美術館 1980年
- 註7 出宮徳尚・水内昌康・伊藤晃『賞田廃寺発掘調査報告』岡山市教育委員会 1971年
- 註8 永井卯三郎『吉備郡史』上巻 稲垣晋也『飛鳥白鳳の古瓦』奈良国立博物館
- 註9 松本和男氏御教示。
- 註10 森田平三郎『倉敷雑記—資料と学習の記録—』1 1981年
- 註11 玉井伊三郎・藤沢一夫『吉備古瓦図譜』第2輯 1941年
- 註12 平安博物館編『平安京古瓦図録』雄山閣 1977年
- 註13 註11と同じ。
- 註14 巖津政右衛門「第五編奈良時代」『岡山市史』古代編 岡山市役所 1962年
- 註15 註14と同じ。
- 註16 正岡睦夫・枝川陽・大谷猛「川入遺跡の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書』第2集 岡山県教育委員会 1974年
- 註17 植山茂「平安京の瓦の布目」『日本古代学論集』古代学協会 1979年
- 註18 福田正継・松本和男・二宮治夫「百間川当麻遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』46 岡山県教育委員会 1981年
- 註19 浅倉秀昭・伊藤晃「沖の店遺跡の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』42 岡山県教育委員会 1981年

第5章 奥坂遺跡

第1節 奥坂遺跡A地区

1. 奥坂遺跡A地区の概要

遺跡は岡山市大内田奥坂に所在する。

天神坂遺跡の南東方向約1km、海拔約85～95mの丘陵上に位置し、眼下北東部には瀬戸内海を遠望できる。丘陵は南・西・北に向かい高さを減じており、北東裾に谷水田(比高差約60m)、西へは緩斜面を形成している。そして、南東部へ向かって緩やかな平坦地が続いていた。

さて、重機による掘削中の発見ゆえに、本丘陵中心より西半部分はすでに消失しており、残る東半分の緩斜面部と尾根筋を東より北へ回り込む丘陵部の2か所の計11,000m²の調査区を設定した。そして、緩斜面部のA地区、後者をB地区とし、A→Bの順序で発掘調査を実施した。

約11,000m²を測る緩やかな平坦部には総数160遺構が検出され、岡山県南部における丘陵部の集落の概観を表出する良好な資料となったものである。その内容は弥生時代中期後半より集落形態を形づくり、弥生時代後期前・後半期に居住域は拡張され、古墳時代前半期、そして中世へと衰退への一途を辿っている事実が判明している。

とりわけ、弥生時代の集落内における住居址分布の形態は比較的良好にあらわれており、住居址と建物(倉庫)の関係、住居址と貯蔵穴(倉庫)、個々の住居間の距離、住居間の空間(道)等の関係を考える上で重要、かつ貴重なデーターを提供している。

弥生時代中期の堅穴式住居址7軒、掘立柱建物5棟、土壙6基。弥生時代後期前半の堅穴式住居址11軒、建物2棟、土壙6基。弥生時代後期後半の堅穴式住居址16軒、袋状土壙23基。中世では掘立柱建物4棟、溝・段状遺構が尾根筋を外れて分布している。

弥生時代後期後半に集中する袋状土壙は総数23基を数え、内部より多くの動物遺体が検出されている。獣骨、鳥骨、魚骨(フグ・クロダイ・コチ・ハタ・スズキ・ボラ・ウナギ・ダツ・サメ・カレイ・ハモ)、貝類ではマガキ・ハイガイを主体にヘナタリ・アカニシ・オキシジミ・ヤマトシジミ等が検出された。これらの事実は、現在の早島丘陵が当時島に近い状況を呈しており、山麓・山裾部に海水が進入していたことがうかがえ、湾入の激しかった地形を想像させる。

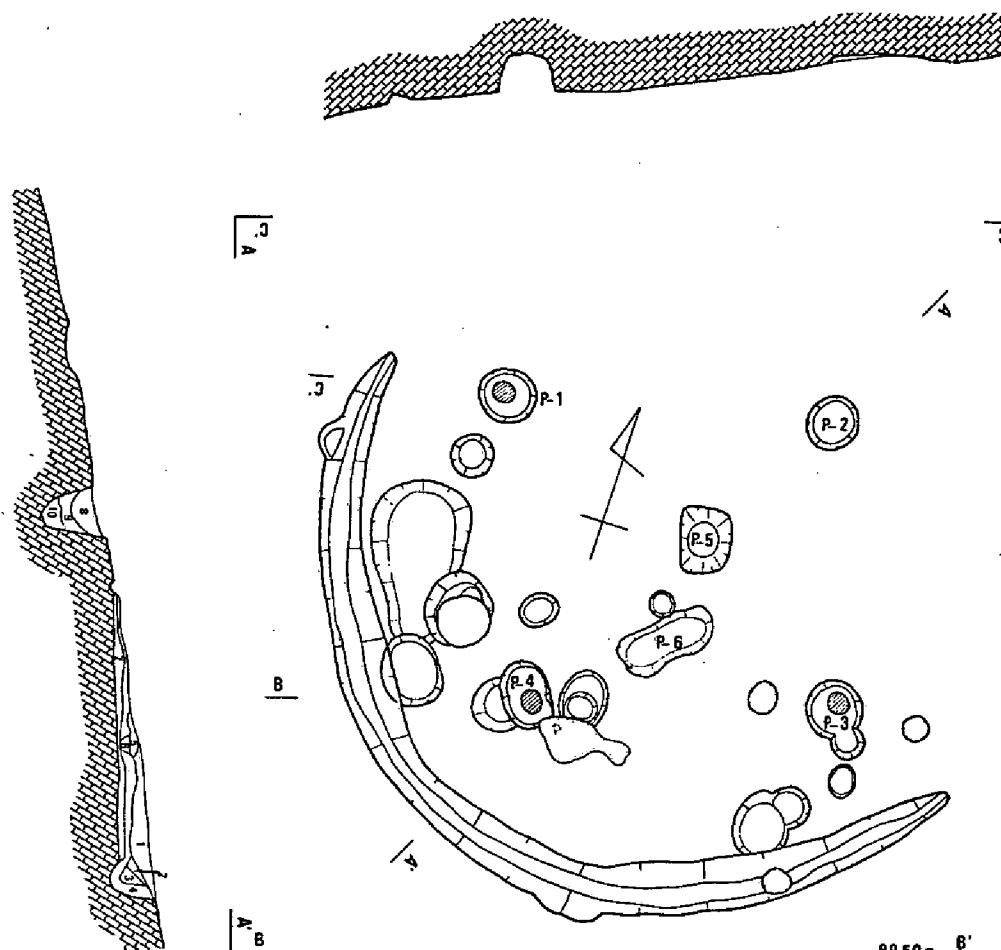
(高畠)

2. 弥生時代中期の遺構・遺物

(1) 住居址

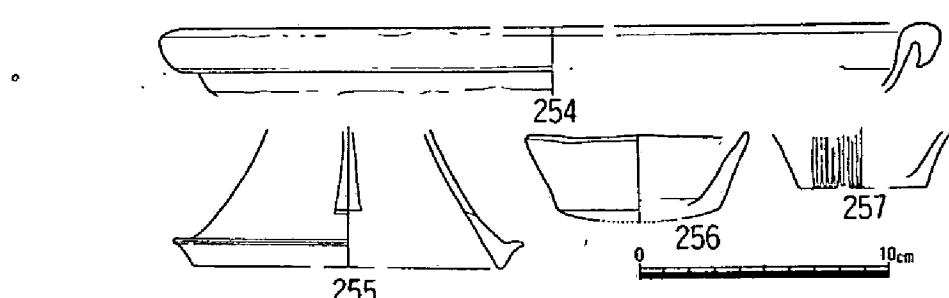
No. 32 住居址(第63図、図版46-1)

E-6の中央部、海拔88.00~88.90m間の斜面に位置し、自然流土により北側が半壊状態の竪穴式住居址である。円形を呈し長軸(500)cm、短軸(460)cm、推定床面積26.8m²、床面海拔高88.66mを測る。



- 1. 淡灰色土
- 2. 淡黒色土
- 3. 暗赤褐色土
- 4. 茶黒色土
- 5. 暗茶褐色土
- 6. 淡茶褐色土
- 7. 暗茶色
- 8. 赤褐色土(焼土)
- 9. 褐色土
- 10. 茶褐色土

89.50m



第63図 No. 32 住居址(1/80)・出土遺物(1/4)

屋内は主柱穴・中央穴・壁体溝・焼土痕からなり、P-1~P-4が主柱穴を構成し、中央穴P-5が伴う。中央穴内は下位に茶褐色土、上位に焼土・炭が多く混在している。

1回の建て替えが行われているが規模は変化をしておらず、老朽化したものと建て替えた可能性がうかがえる。そして、最終的には火災により放棄されたようである。約6~7cmの茶褐色土による貼り床が存在する。同時期に存在したNo.66B住居址と面積・柱間等に

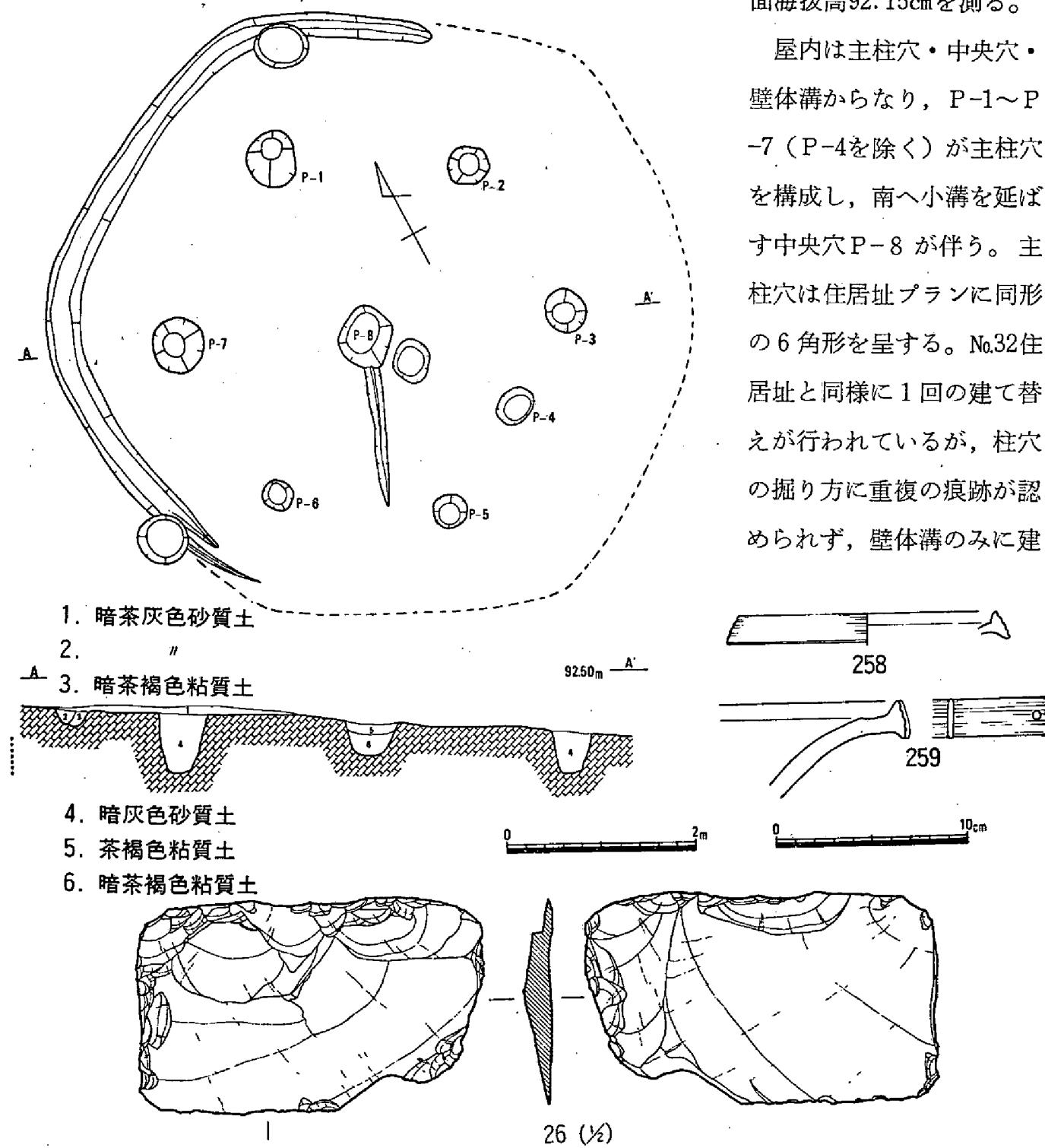
において近似値を示しており、小型の部類では大きい規模を有する。

遺物は小片4点がみられ、254はこの時期に伴出する代表的な口縁部の特徴をもつ鉢である。胎土中に砂粒を多く含まず、色調黄橙色を呈する。256は小砂粒を多く含み、淡い赤褐色を呈する。時期は奥・中・Ⅲの新相に比定できる。

No. 49 住居址（第64図、図版46-2）

D-4・C-4にまたがり、海拔91.85～92.25m間に位置し、自然流土で南西部が半壊した竪穴式住居址である。隅丸6角形を呈し、長軸(670)cm、短軸(600)cm、推定床面積34.6m²、床面海拔高92.15cmを測る。

屋内は主柱穴・中央穴・壁体溝からなり、P-1～P-7（P-4を除く）が主柱穴を構成し、南へ小溝を延ばす中央穴P-8が伴う。主柱穴は住居址プランに同形の6角形を呈する。No.32住居址と同様に1回の建て替えが行われているが、柱穴の掘り方に重複の痕跡が認められず、壁体溝のみに建



第64図 No. 49 住居址 (1/80)・出土遺物 (1/2, 1/4)

奥坂遺跡

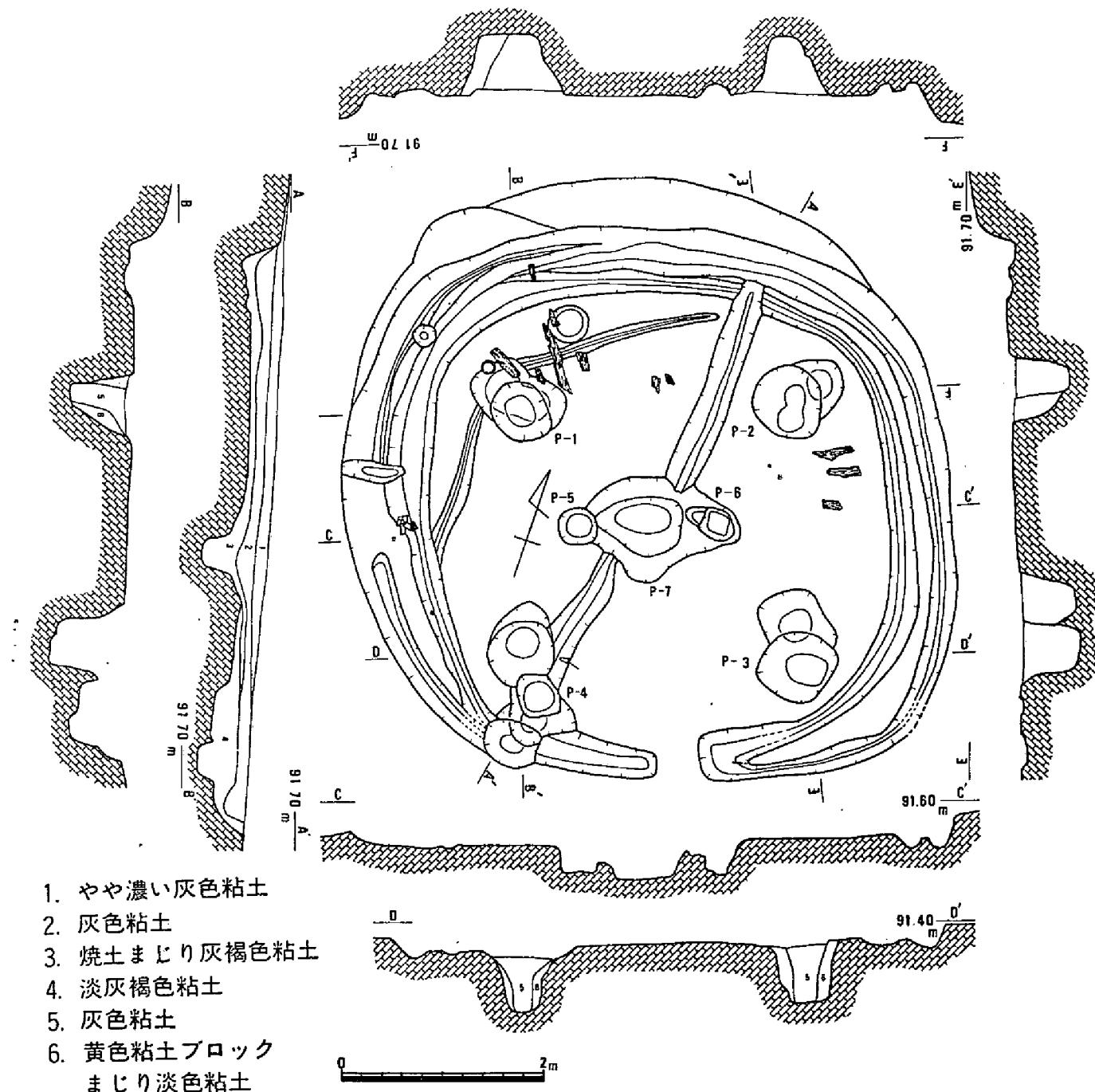
て替え跡を残す状況である。しかし、修復作業が壁体構にのみ実施された可能性もある。

奥・中・Ⅲにあっては最も面積の大きい住居址であるが、全体的には中型の部類に入る。

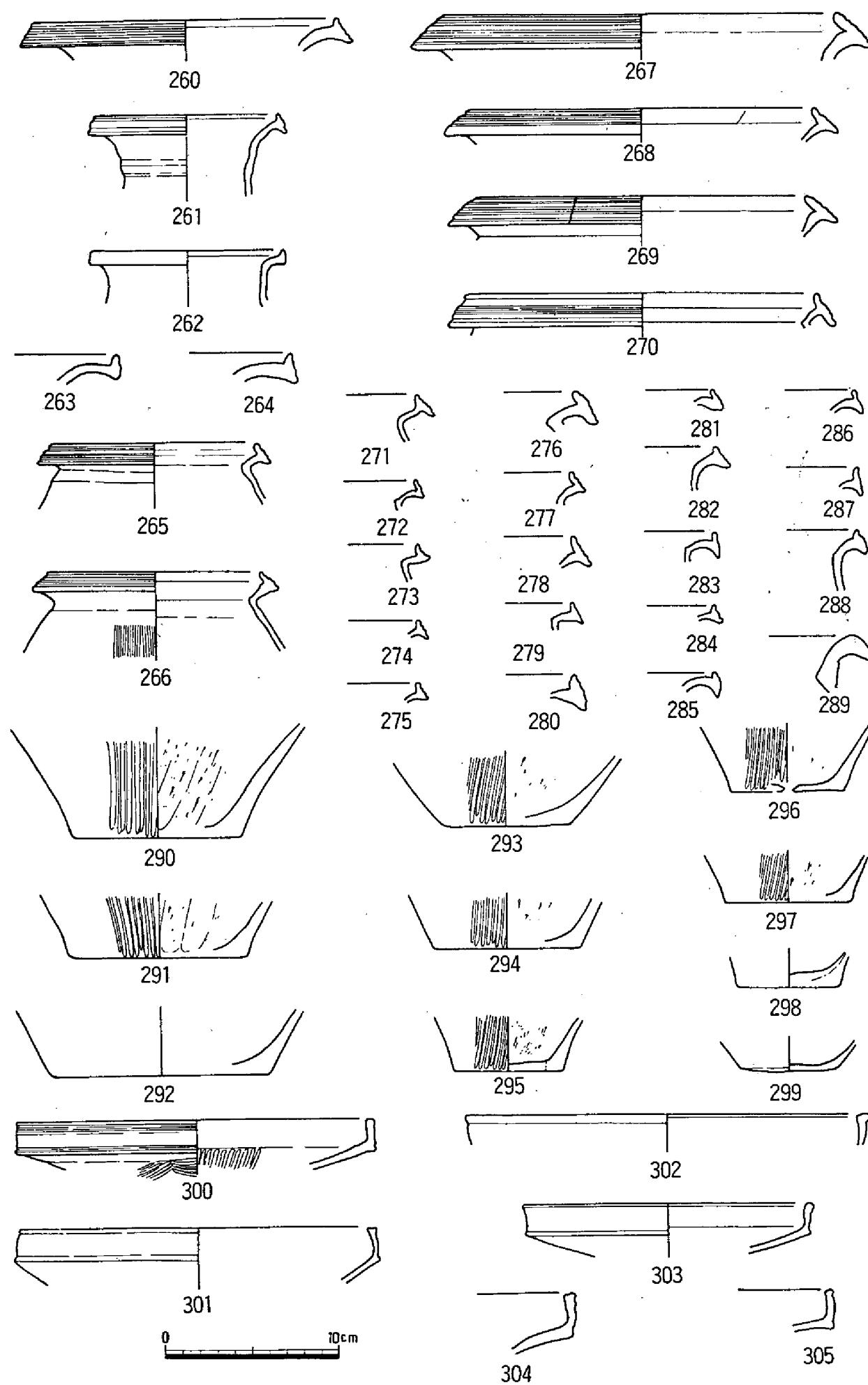
遺物は小片が3点出土しており、壺・甕の口縁部と考えられる。259は胎土中に白色小砂粒を含み、黄橙色を呈する。口縁内面に櫛描き波状文、外面に円形の竹管文・棒状浮文が施文されている。図示できなかった1点に円板充填の痕跡をとどめる高杯の杯部が認められた。(高畠)

N0. 66 住居址 (第65~69図、図版47-1)

C-4で検出された住居址で、北から南へ緩やかに傾斜するところに位置している。平面形は隅丸方形で、北側の壁は上部が崩れている。2回の建て替えがあり、当初から隅丸形である。当初のものは、建て替えのため削られて、十分わからない点もあるが、北西部にわずかに壁体

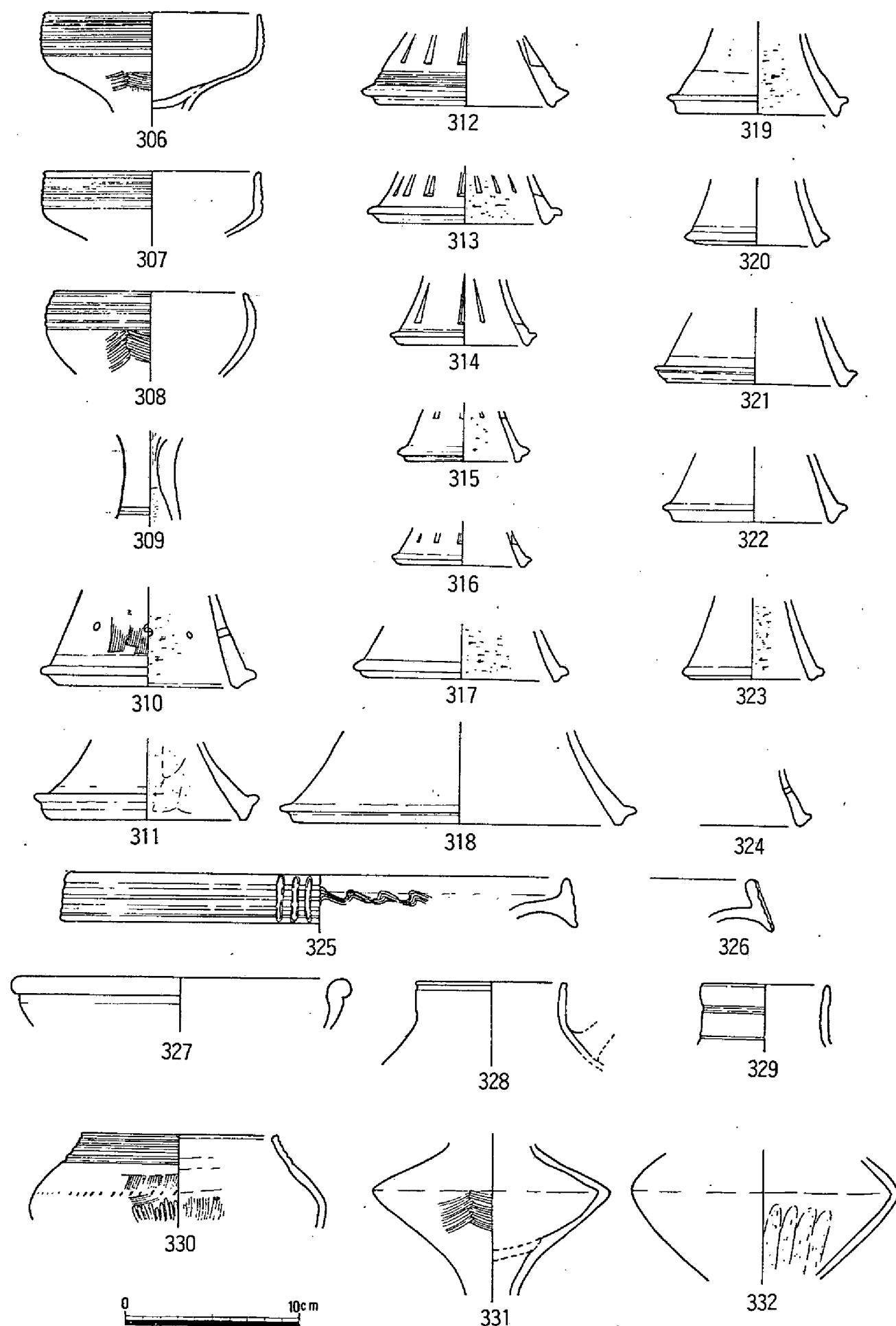


第65図 N0. 66 住居址 (1/80)

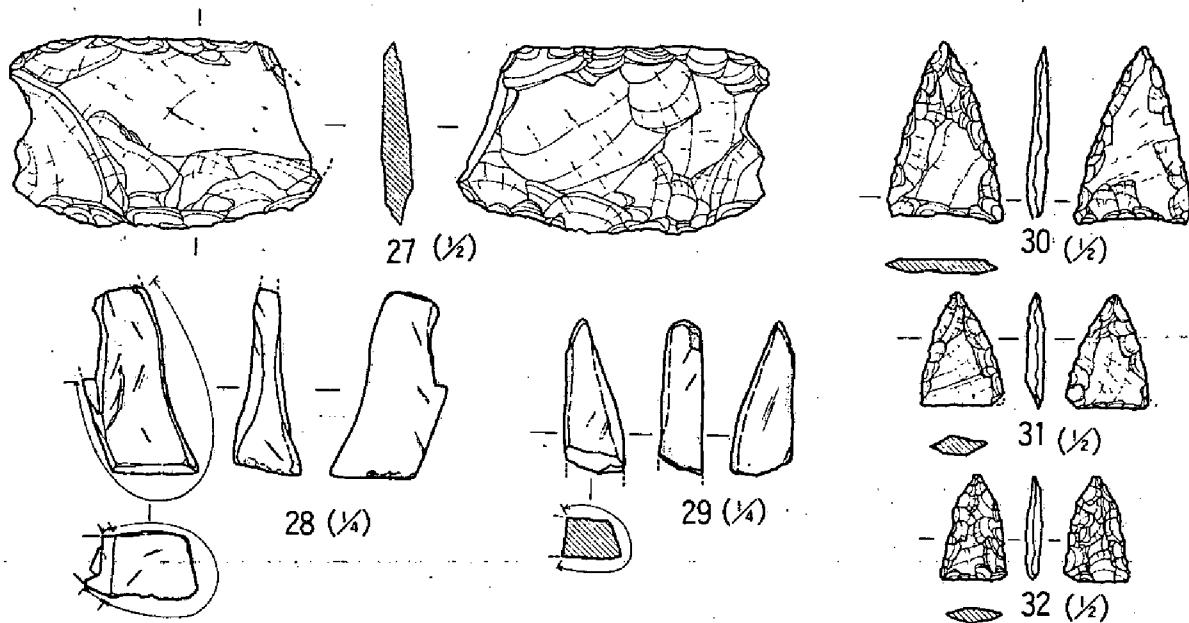


第66図 No. 66 住居址出土遺物(1)(1/4)

奥坂遺跡



第67図 No. 66 住居址出土遺物 (2) (1/4)

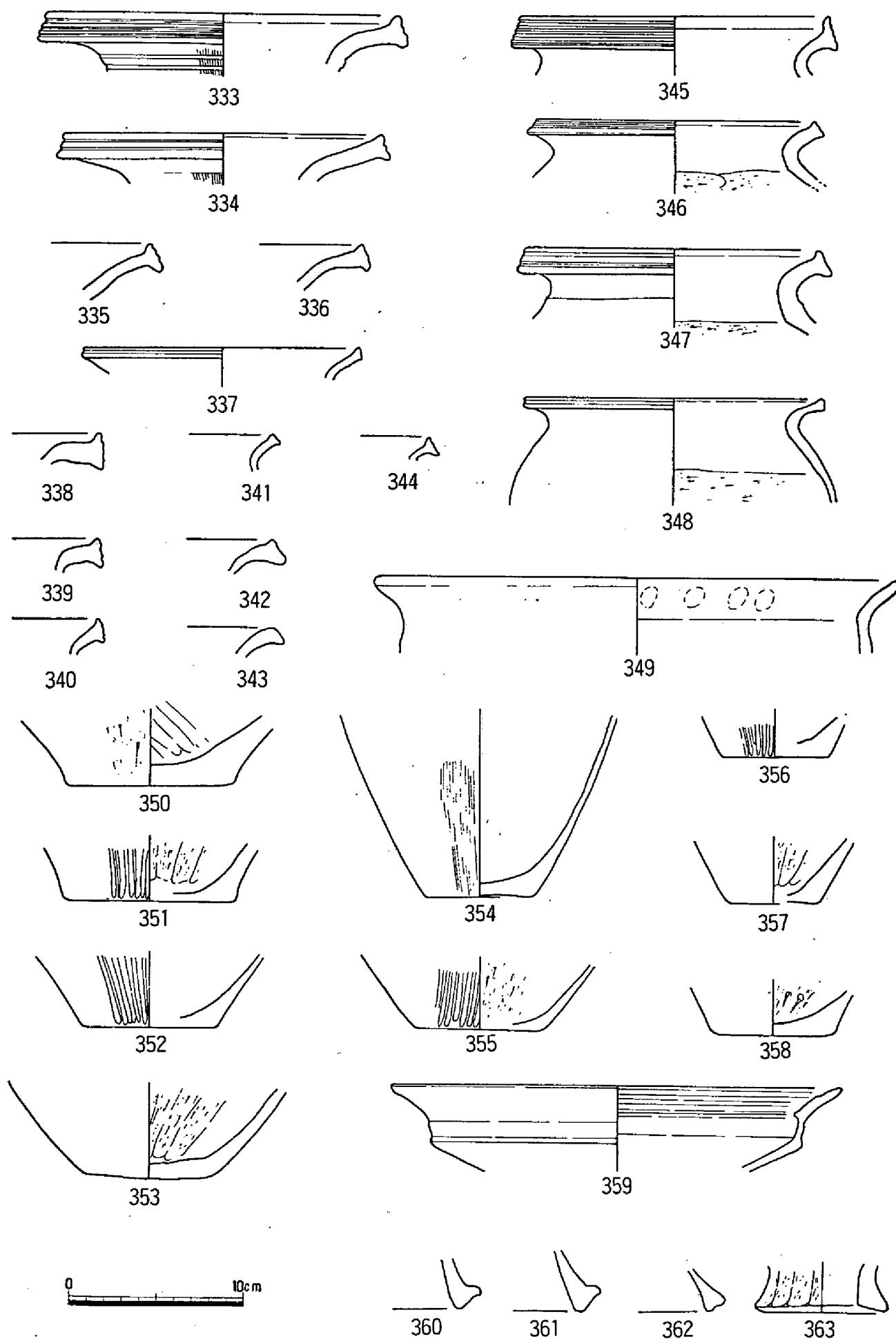


第68図 No. 66 住居址出土遺物（3）(1/2, 1/4)

溝が残っている。これらから復元するとほぼ $430 \times 450\text{cm}$ の規模となる。中央部に東西方向に並ぶ2本の柱穴がある。柱間は 140cm で、中央に土壌がある。最後の住居址に伴うものであるが、当初にも存在したと推定される。1回目の建て替えの住居は西方へ拡張し、床面は最終時期のものと同一になっている。壁体溝はほぼ全体が残っている。壁体溝の外側で測定すると、 $525 \times 510\text{cm}$ の規模である。柱穴は最終時期の柱穴に切られているが、4本柱が残っている。柱穴の掘り方は、 $60 \sim 70\text{cm}$ 、深さ約 60cm のもので、当時のものより大きい。柱間の距離は、 $250 \sim 300\text{cm}$ である。中央の穴は、当初と同様に考えられる。2回目の建て替えでは、ほぼ全体的に拡張している。床面には、炭化材が残存していて、焼失したことがわかる。壁体溝は、ほぼ全体にまわるが、南側に 41cm とぎれている。この部分を入口と考えられる。規模は、 $600 \times 548\text{cm}$ である。中央部に $140 \times 105\text{cm}$ 、深さ 40cm の土壌があり、ここから、それぞれ北と南へ直線的な溝が壁体溝まで伸びる。柱穴は4本で、1回目の建て替えの柱穴に接して掘りなおされている。柱穴の断面によると、直径 $18 \sim 20\text{cm}$ の柱痕跡がみとめられる。床面には、北東部で石鎧、南西部で砥石、北西部で高杯形土器、甕形土器を出土した。北半部には、中央部へ向かって倒れた垂木の炭化材が残っていた。埋土は、上層にやや濃い灰色粘土があり、土器片を多く含んでいたが、この土層中には、弥生後期前半の土器が多い。床面とその上層にある土器は、弥生中期のものである。

弥生中期の土器には、壺形土器、甕形土器、高杯形土器、器台形土器、水差形土器、鉢形土器、台付直口壺などの器種がある。壺形土器は、口縁部が朝顔形に外反し、端部は上下に拡張して、端面には凹線文を施す。頸部には凹線文がある。262の頸部は、ほぼ筒状を呈し、口縁端部は無文である。甕形土器は、いずれも、「く」字状に短く外反し、端部を折り曲げ、外面

奥坂遺跡



第69図 No. 66 住居址出土遺物(4)(1/4)

に凹線文を施している。口縁部を詳細にみると、上方にのみ折り曲げたものと下方にも大きく垂れ下がるものがある。外面の凹線文も全体に施すものと、上端部近くにやや深い沈線を施し、あとはほとんど無文のものもある。大きさは、口径12cm前後のものほか、20~22cmとやや大きいものがある。頸部に突帯を配したもの289が1点みられる。269の口縁部には、細い線で朱彩がある。底部には、穿孔したもの298が1点ある。すべて平底で、内面は、縦位のヘラケズリが施されている。胴部上半には、ヘラケズリはない。

高杯は、杯部が皿状のものと椀状のものがある。皿状のものには、口縁部が上方へ屈曲し、外面は無文化するものである。300はわずかに凹線文の残るものである。口縁部には、沈線が1本めぐる。杯部外面には多角形のヘラミガキがみられる。椀状のものは、口縁部に細い凹線文を施している。杯部外面には、やはり多角形のヘラミガキがある。脚部はいずれも長いもので、円孔を配するもの、細長い三角形の透しを配するもの、まったく透しのないものがある。脚端部は、いずれも肥厚し、外方への張り出しがある。脚部内面はヘラケズリしている。311の脚端部外面は、丹塗りされている。器台形土器は、口縁部を折り曲げ、外面には凹線文を施す。外面には棒状浮文があり、内面に波状文を配している。鉢形土器には、口縁部を折り曲げて、玉縁状にしたもの327がある。口縁部外面に細い凹線文をめぐらし、肩の張るもの330もある。水差形土器は、口縁部付近の破片で、把手が残っている。台付直口壺は、そろばん玉形を呈し、脚部は長い。胎土には、細砂を含み、色調は灰白色~黄橙色を呈する。

石器には、サヌカイト製の石庵丁27、石鎌31・32、流紋岩製の砥石28が埋土中から出土し、床面からは、石鎌30と砥石29が出土した。

埋土上層には、弥生後期前半の土器が出土している。器種には、壺形土器、甕形土器、高杯形土器、台付鉢形土器がある。壺形土器は口縁部が朝顔形にひらき、口縁端部は肥厚し、外面に凹線文を施す。頸部外面には、沈線を配している。甕の口縁部は湾曲しながら外反し、端部が肥厚し、外面に凹線文を施すものが多い。内面は、頸部直下までヘラケズリしている。350は壺の底部で、外面にヘラケズリの痕が残っている。底部のほとんどは平底であるが、354は少しあげ底になる。内面はヘラケズリを施している。高杯は、口縁部が斜め上方へ拡張し、内面に凹線文状の施文がある。脚部は小破片であるが、端部は肥厚し、外への張り出しがみられる。台付鉢形土器は、脚部のみで、外面をヘラケズリしたもの363である。胎土には細砂を含んでいる。333は赤橙色、338・351・358・359・360・362は橙色、339・340・345・346は黄橙色、335・336・354は浅黄橙色、341・343・355はにぶい黄橙色、342・350はにぶい橙色、337・344・349・361・363は灰白色を呈する。

以上の土器は、弥生後期前半のものであるが、住居址の時期は、床面の土器287・306から、奥・中・Ⅲである。

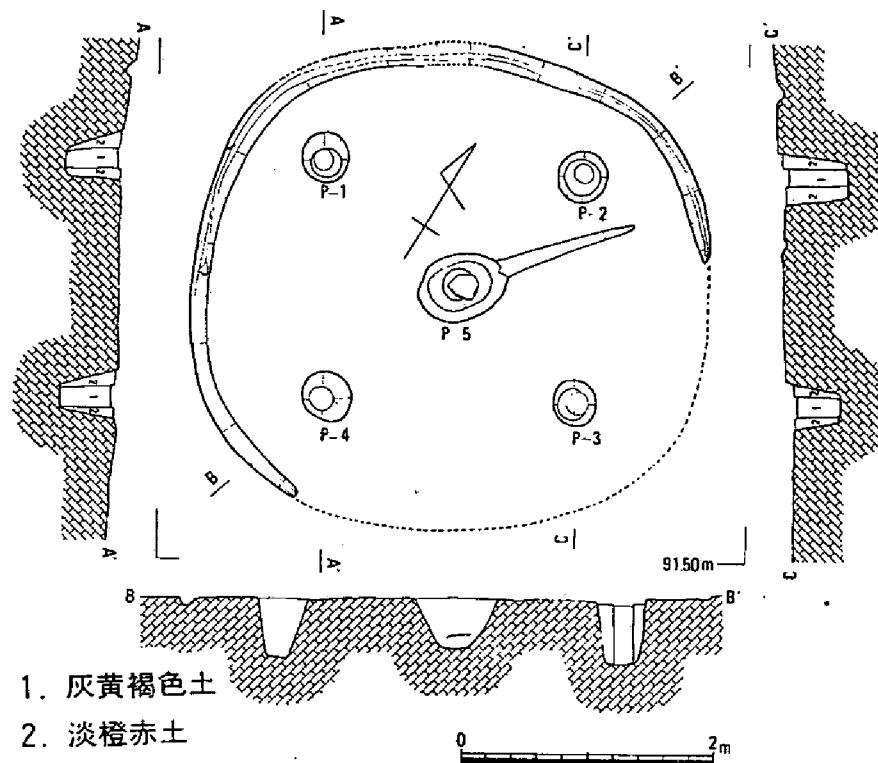
(正岡睦夫)

奥坂遺跡

No. 123 住居址 (第70図、図版47-2)

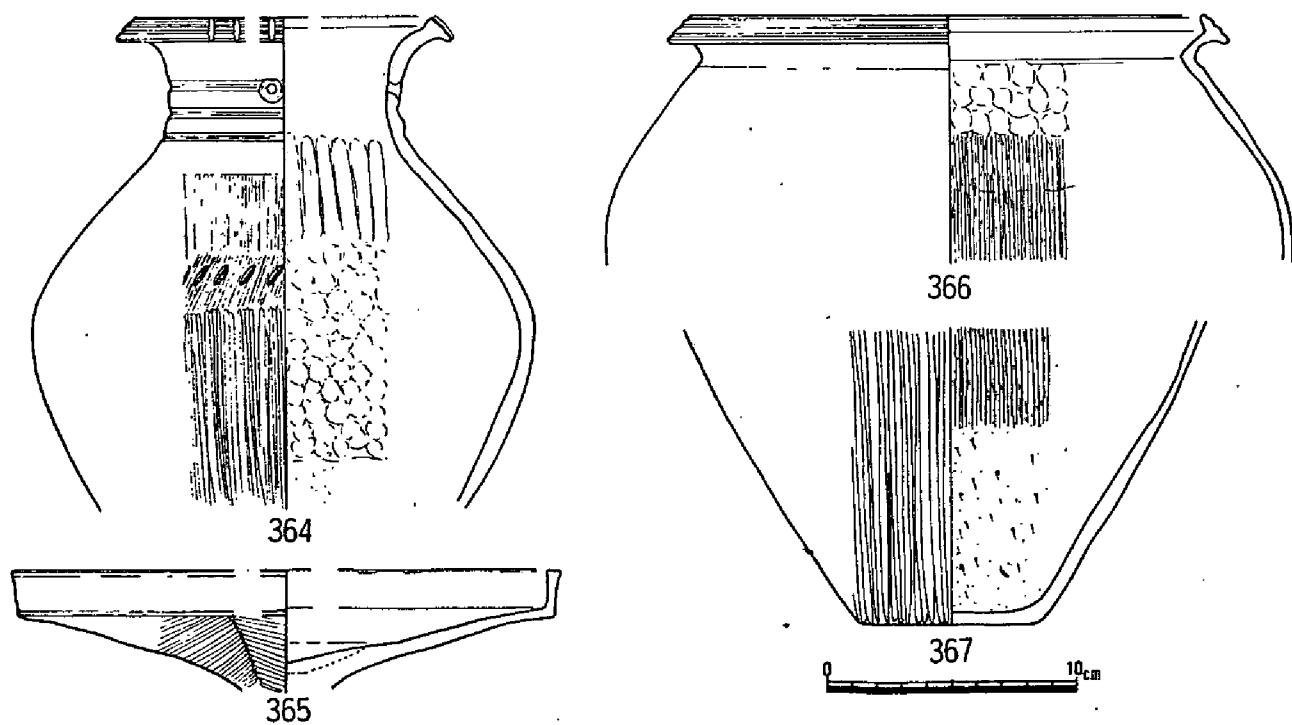
C-5の中央、海拔91.15~91.30m間に位置し、自然流土により東側が半壊状態の竪穴式住居址である。円形を呈し長軸(408)cm、短軸(380)cm、床面積約13.6m²、床面海拔高91.20mを測る。西側部分をNo.62住居址によってカットされている。

屋内は主柱穴・中央穴・壁体溝からなり、P-1~P-4が主柱穴を構成し、北東へ小溝を延ばす中央穴P-5が伴う。本住居址の小溝は斜面下位に延びるのが多い中にあって、同レベルに向かって延びている。中央穴内よりの遺物が中心を占めており、766の1個体分が出土した。住



居址規模は小型の中段階に位置し、No.49住居址の約1/2.5の大きさである。

遺物は壺・甕・高杯がみられ、器壁は全体に薄くつくりられており、胎土中に長石粒が目立つ。壺・甕は器外面上半はハケメ・下半はラミガキ、器内面上半は指ナデ・指頭圧痕、下半はヘラケズリが施されている。時期は奥・中・Ⅲの新相に比定できる。(高畠)



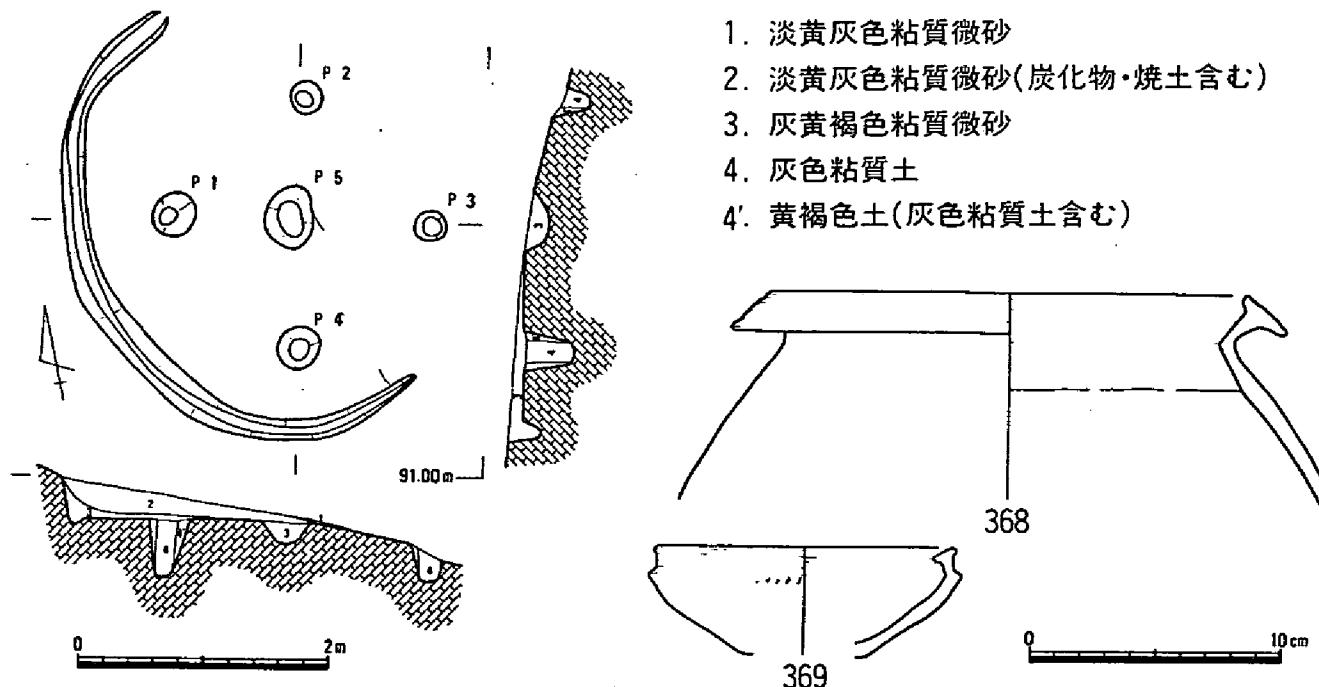
第70図 No. 123 住居址 (1/80)・出土遺物 (1/4)

No. 87 住居址 (第71図、図版48-1)

E-4区南西隅の東斜面において検出された竪穴式住居址で、住居址の床面東半は斜面で削平されている。この住居址の平面形は、残存部分の状況からみて円形あるいは円形に近い多角形が想定される。規模は南北で360cmを測り、ほぼ残存している北から西・南の壁面に沿って幅20~25cm・深さ10~15cm程の壁体溝が巡っている。柱穴は東半の削平を受けている部分にも2本が確認され、西半の床面に確認された2本と合わせ全部で4本ある。検出された柱穴の平面形はいずれも円形で、それぞれの柱の心心距離は、P-1とP-2・P-2とP-3・P-3とP-4がそれぞれ140cm、P-4とP-1が150cmである。また壁体溝から柱穴までの距離はP-1が70cm、P-4が50cmである。各々の柱穴には灰色土の埋没している柱痕跡がみられる。なお住居址の床面から柱穴の底までの深さは概ね50cmでほぼ一致している。住居址の中央部には長径50cm・短径40cmを測る不整橢円形の平面形を呈し、深さ約20cmの窪み状のピット(P-5)が確認されている。ピットの埋土は住居址の覆土とほとんど同じ淡茶褐色粘質微砂で、炭・焼土等はほとんどみられないが、このピットの北側の床面に動いた状態の焼土および炭が僅かにみられる。住居址の覆土は、床面直上に黄灰褐色粘質微砂が数cm堆積し、その上に淡黄褐色粘質微砂が堆積しているが、これは斜面堆積土とも考えられる。

出土遺物としては覆土から土器片がみられたが、細片が多く図示できたものは2点である。368は甕形土器の口縁部片で、器面の剥離が著しく調整は不鮮明であるが、上下に拡張した口縁端面に数条の凹線が巡っている。外面の肩部から下は縦方向に刷毛調整されている。1~2mmの砂粒を含む胎土で淡茶褐色を呈する焼成はふつうである。時期は奥・中・Ⅲの新相と考えられる。

(内藤善史)



第71図 No. 87 住居址 (1/80)・出土遺物 (1/4)

奥坂遺跡

(2) 建物

No. 77 建物 (第72図, 図版49-1)

B-5の西端, 海拔89.80~90.10cm間に位置し, 等高線にほぼ並行する格好で存在する。桁行471cm, 梁間268cm, 面積12.62m²を測る。平面は長方形を呈する2×1間の掘立柱建物である。4隅の柱穴掘り方は直径約60cmを測る大型に, 桁間を形成する柱穴掘り方は直径約36cmと小型であり, 東柱的な役目を有した柱穴と考えられる。

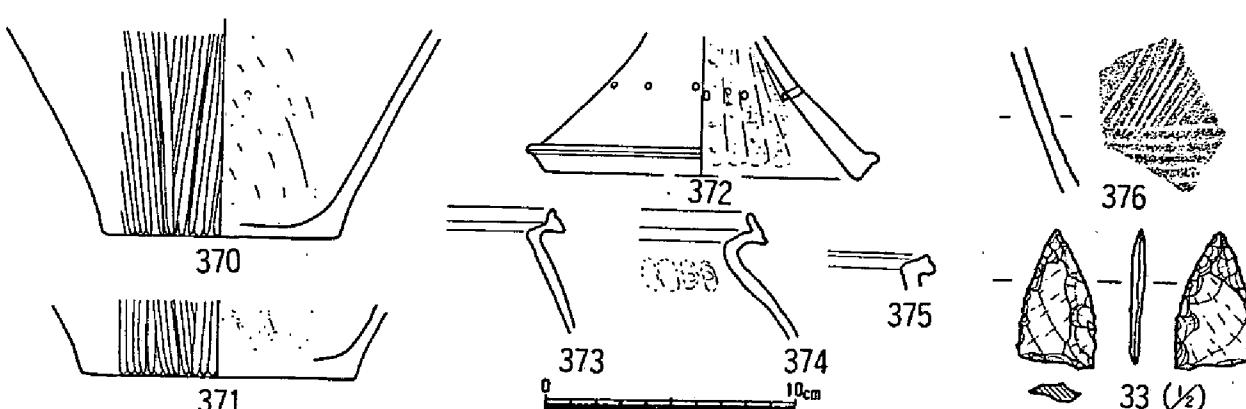
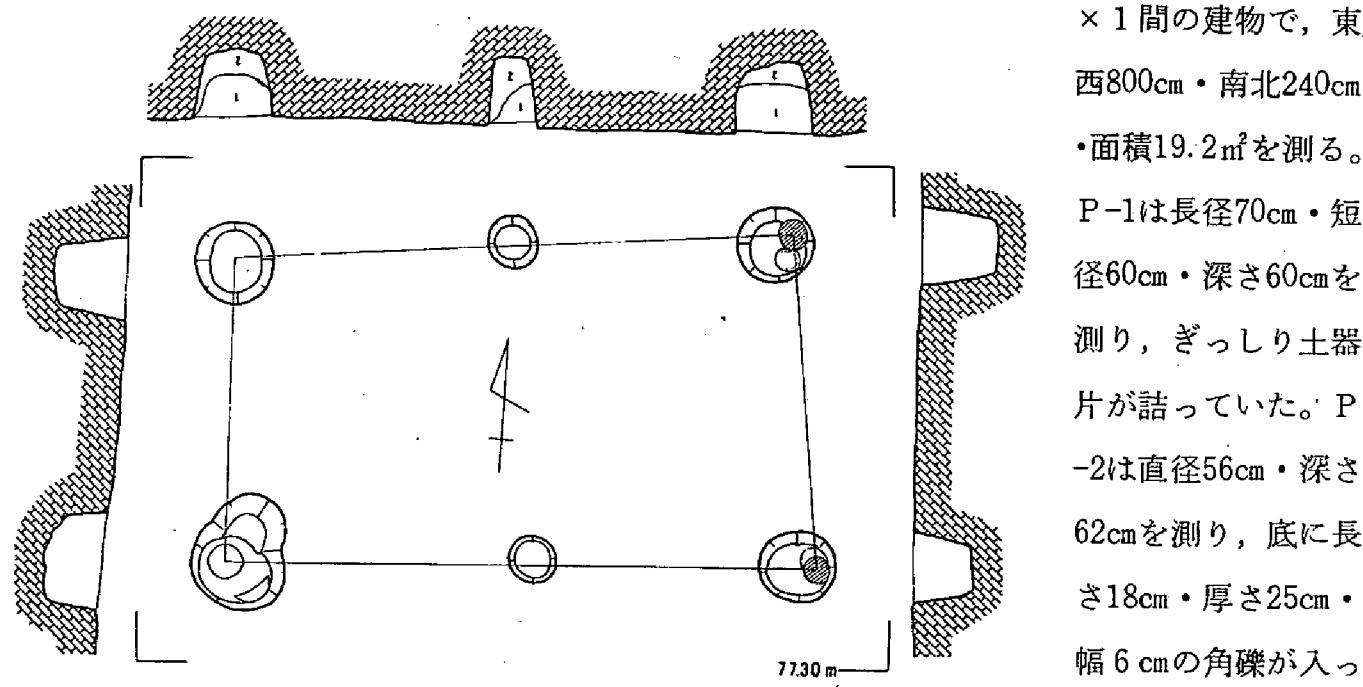
出土遺物はすべて柱穴内からである。小片のみである。甕・高杯・器台形土器, 石鏃1点がみられる。

時期は奥・中・Ⅲの新相に比定できる。

(高畠)

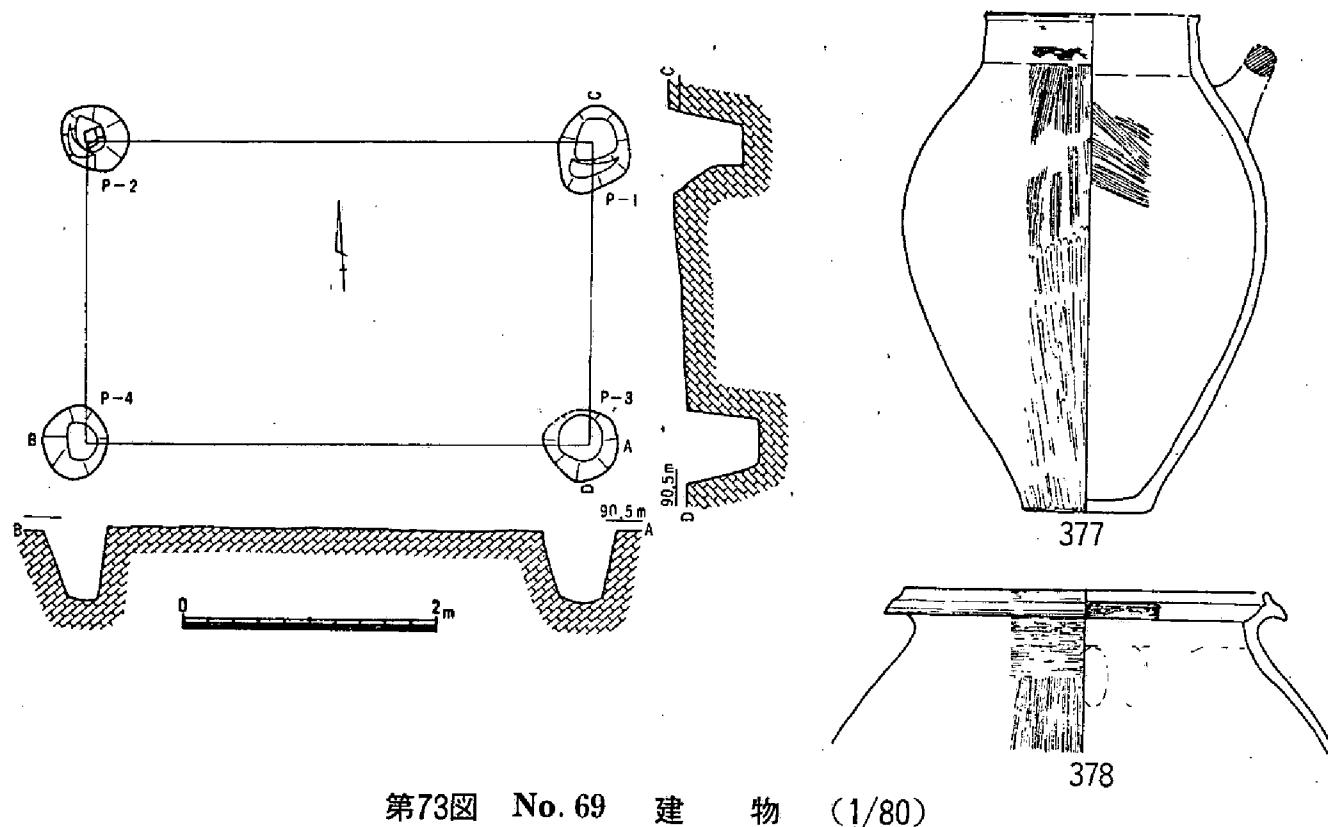
No. 69 建物 (第73・74図, 図版50-1)

B-4の北端に位置し, 段状遺構の東方に重複して存在する建物である。東西に長軸を有す1

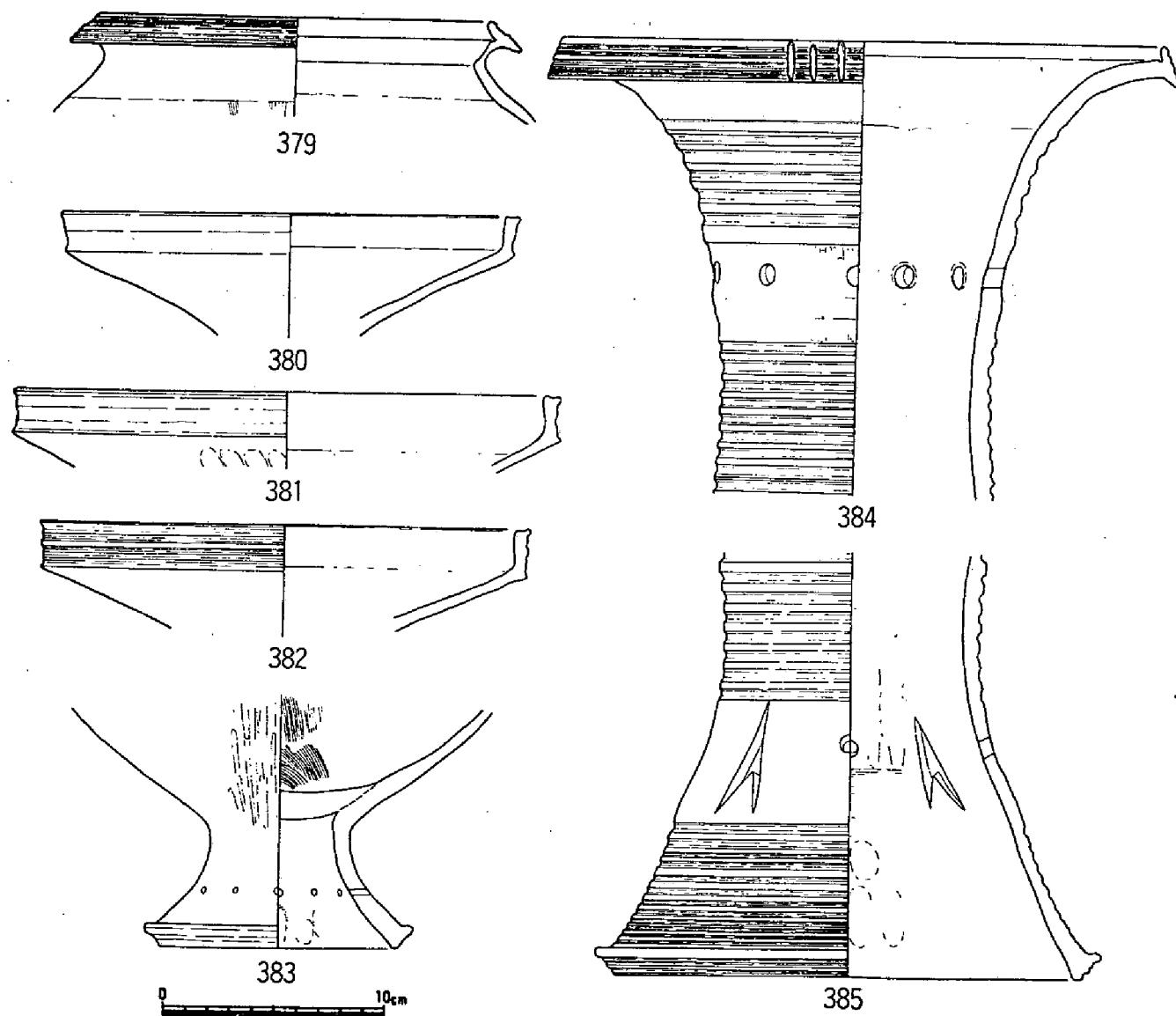


第72図 No. 77 建物 (1/80)・出土遺物 (1/2, 1/4)

第5章 第1節 奥坂遺跡A地区



第73図 No. 69 建物 (1/80)



第74図 No. 69 建物出土遺物 (1/4)

奥坂遺跡

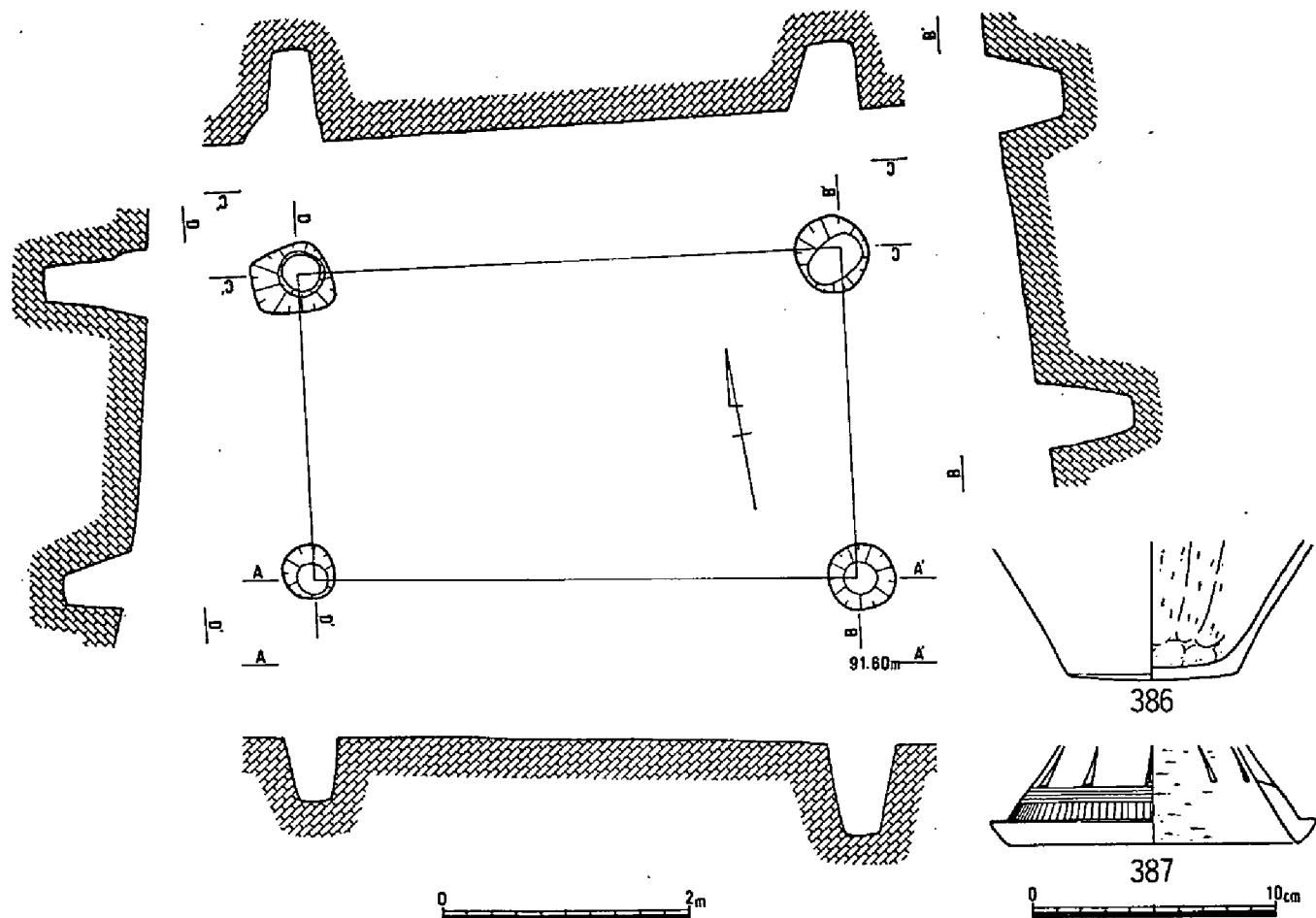
ていた。P-3は長径50cm・短径46cm・深さ58cmを測り、北西部を方形土壙に切られていた。P-4は直径50cm・深さ59cmを測り、器台形土器とその他少量の土器片を出土した。それぞれの柱穴から出土した土器は、柱穴の別なく接合できた。377は把手付直口壺で、内面ハケメ・外面上半ハケメ・同下半ヘラミガキするほぼ完形に近い土器である。378・379は甕の口縁部破片で、口縁端面に凹線文を施すものと、ハケメを施すものがある。180～182は高杯形土器の杯部破片で、直立する口縁端外面に凹線文を施すものとナデるものが見られる。383は台付鉢形土器の台部破片であり、円孔は12個みられる。384・385は器台形土器で、凹線文が顕著であり、体部下半に矢羽の透しがみられる。これらの土器の組合せから、この建物の廃絶時期は奥・中・Ⅲの新相に比定できる。

(浅倉秀昭)

No. 76 建物(第76図、図版49-2)

B-4の南西隅、海拔89.70～90.00m間に位置し、等高線に直交する格好で存在する。桁行450cm、梁間270cm、面積12.15m²を測り、平面は長方形を呈する1×1間の掘立柱建物である。南側梁間が北側と比較して若干狭いが、柱穴規模(約70cm平均)、柱穴底の柱痕跡、深さ等より肯定できる。また、この傾向は同時期のNo.77建物西辺梁、No.143建物西辺梁についても同様のことと言える。

4棟ともに遺跡南西部に集中して配置されており、柱穴規模、平面規模に類似性を多く持つ



第75図 No. 143 建物(1/80)・出土遺物(1/4)

こと等より、奥・中・Ⅲ期に比定できるものと考えられる。

(高畠)

No. 143 建物 (第75図)

建物は、南に向かって僅かに傾斜する丘陵頂部に位置し、調査区で示せばB-5にあたる。

建物は表土を除去し、黄赤褐色土（地山）上面で検出を行ったもので、 1×1 間の規模である。柱間は桁行が440cm、梁間が270cmを測るが、西側は250cmとやや短くなっている。

柱穴内埋土は褐色を呈し、柱痕跡は認められなかった。遺物は柱穴内から若干出土したが、この遺物のみで時期を決定するのは困難であるが、一応弥生時代のものと理解される。

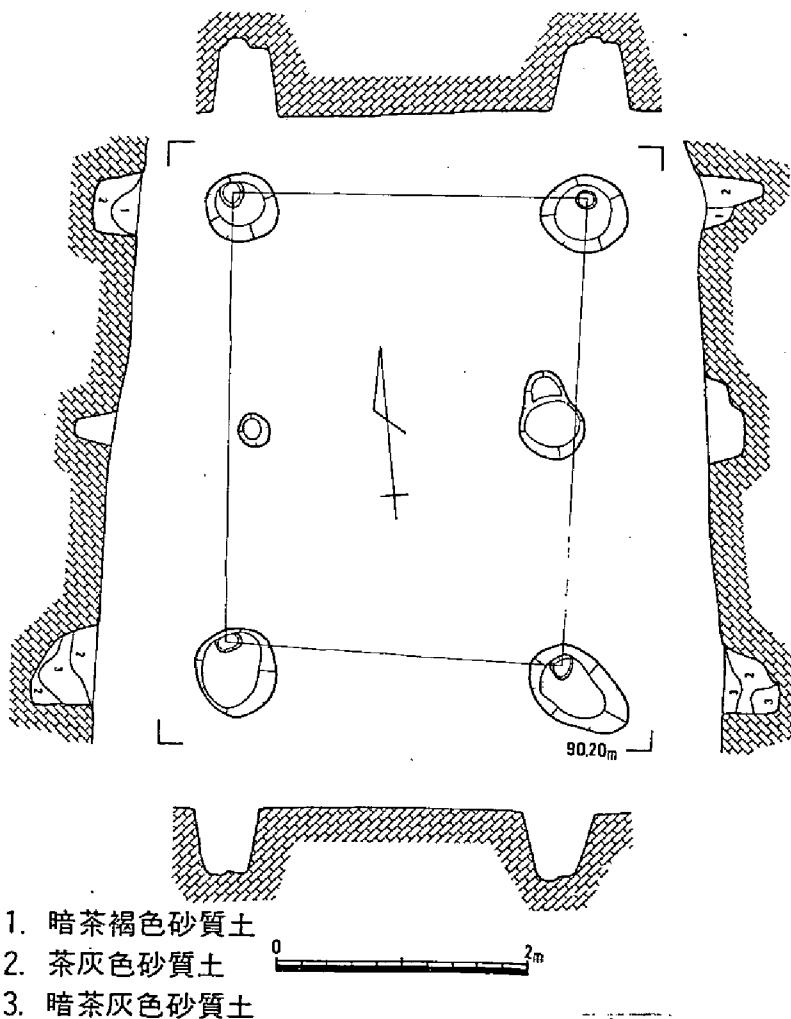
柱穴内より出土した若干の土器片のうち、図示したのは2点である。386は壺形土器か甕形土器の底部で、外面はヘラミガキ、内面は縦方向のヘラケズリが認められる。胎土には白色小砂粒を含み、色調は暗灰色を呈する。387は高杯形土器の脚端部である。長三角形の透じと、沈線文がめぐる。端部は外上方に拡張し、ヨコナデにより仕上げている。内面はヘラケズリが認められる。胎土には白色小砂粒を含み、色調は淡褐色を呈する。

時期は奥・中・Ⅲの新相に比定できる。

(平井勝)

(3) 土 壤

No. 126 溝状土壤 (第77・78図、図版50-2)



第76図 No. 76 建 物 (1/80)

A-4の海拔90.00~90.25mの間に位置する細長い土壤である。この土壤の長軸はほぼ南北方向を示し、検出面で約245cmを測る。南端部分は幅がわずかに広くなり、柱穴状のピットのような形態を呈している。検出面からの深さは約40cmから約50cmを測り、断面は上方に開いた「U」字形を呈している。底部のレベルは北から南方向に傾斜し、南端部分がわずかに深くなっている。土壤内には暗茶灰色土が堆積し、底部から浮いた状態で上位の暗茶褐色土内より土器片とサヌカイト製の石槍が出土した。

388から390は大型壺形土器の頸

奥坂遺跡

部から胴部上位の破片である。外面の頸部には横方向の凹線が存在し、頸部下位の胴部には縦または斜め方向のハケメを施している。内面の頸部から胴部にかけて指頭圧痕が顕著に認められ、その上面に縦または斜め方向のハケメを施している。

391は大型甕形土器の口縁部破片である。頸部より斜め上方へ「く」字状に外反した口縁部は、さらに折り返されて端部へ移行する。外面頸部の屈曲部には、指頭圧痕文の凸帯が貼り付けられている。胴部は縦方向のハケメが存在するが、内面には指頭圧痕も認められる。

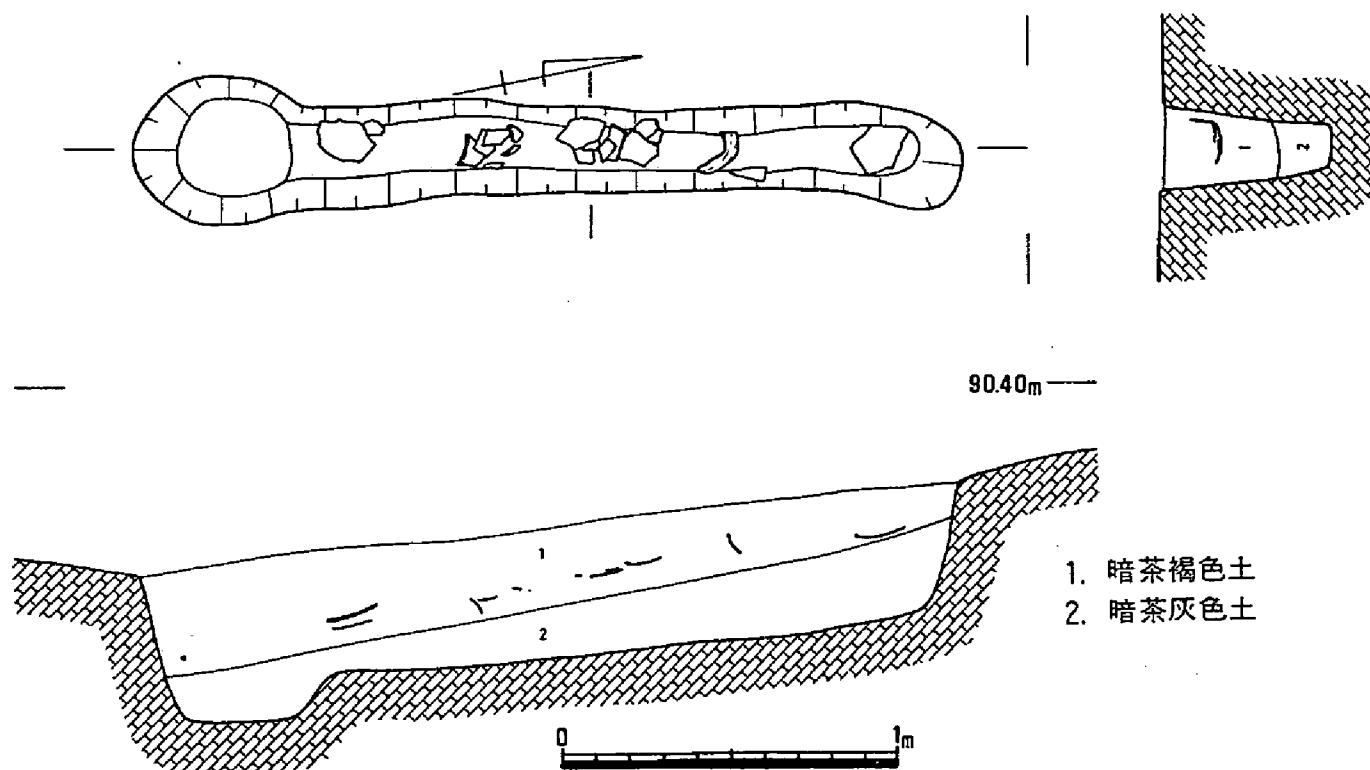
392は完形に復元することが可能であった甕形土器である。外面の頸部から胴部の最大径を有する部分の間は、全体に縦方向のハケメを施しているが、横方向のタタキメが顕著に残存している。外面の胴部下位は、全体に縦方向のヘラミガキを施している。胴部中位から底部にかけては、縦方向のヘラケズリを行っている。

793の壺形土器は、口縁端部が折り返されて斜め上方へ屈曲している。口縁部の外面には4条の凹線が認められ、全体に横なでを施している。外面の頸部には4条の浅い凹線が施され、内面の頸部はヨコナデを行っている。内面の胴部は指頭圧痕の上面に縦または斜め方向のハケメを施し、外面は頸部から連続した縦方向のハケメが認められる。

395の高杯形土器は杯部と脚部を連続して製作し、円板を充填している。外面の杯部は横方向のヘラミガキを施し、外面の脚柱部には横方向の細くて深い沈線が認められる。

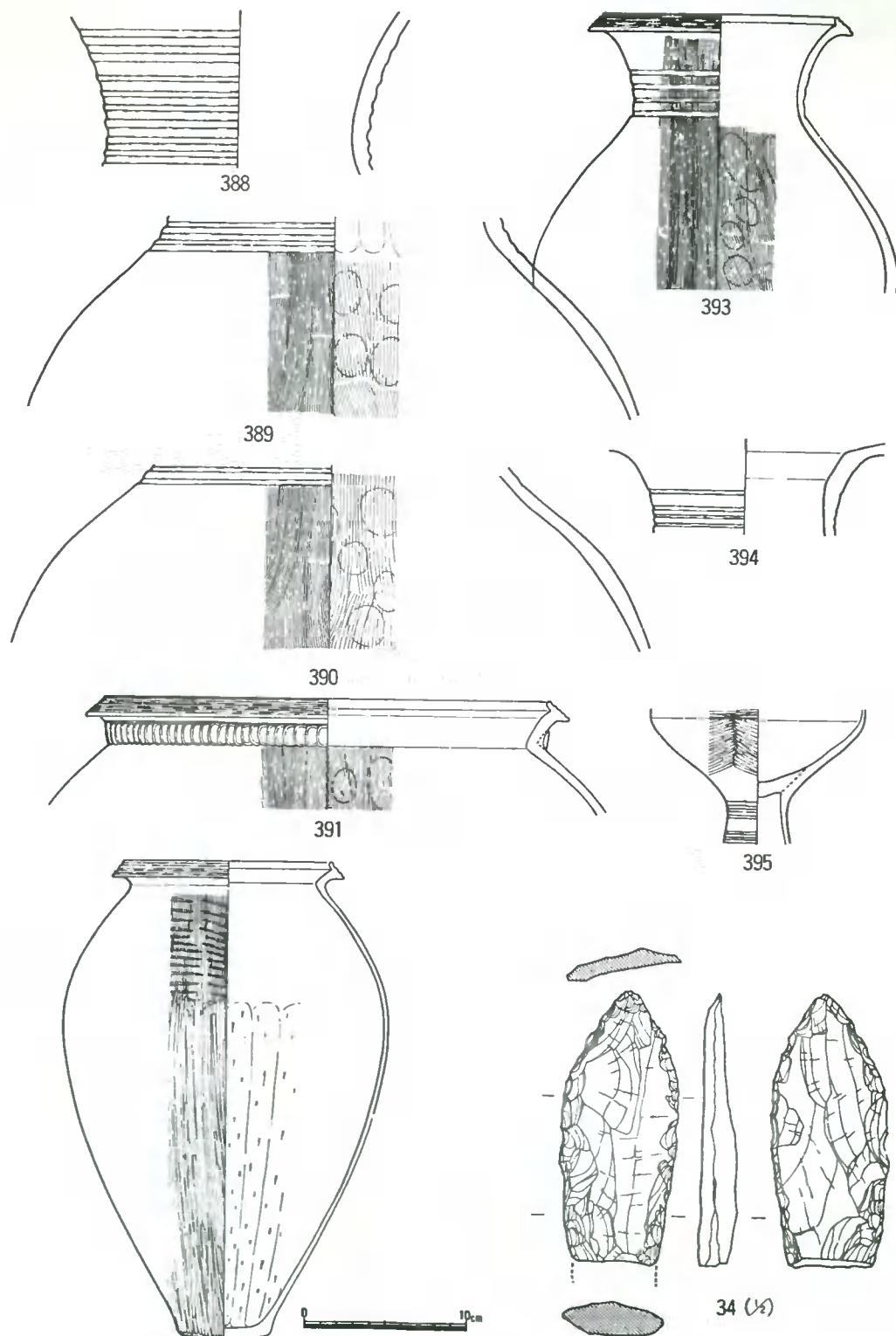
これらの土器は、奥・中・Ⅲの時期に比定できる。

(福田)



第77図 No. 126 溝状土壙 (1/30)

第5章 第1節 奥坂遺跡A地区



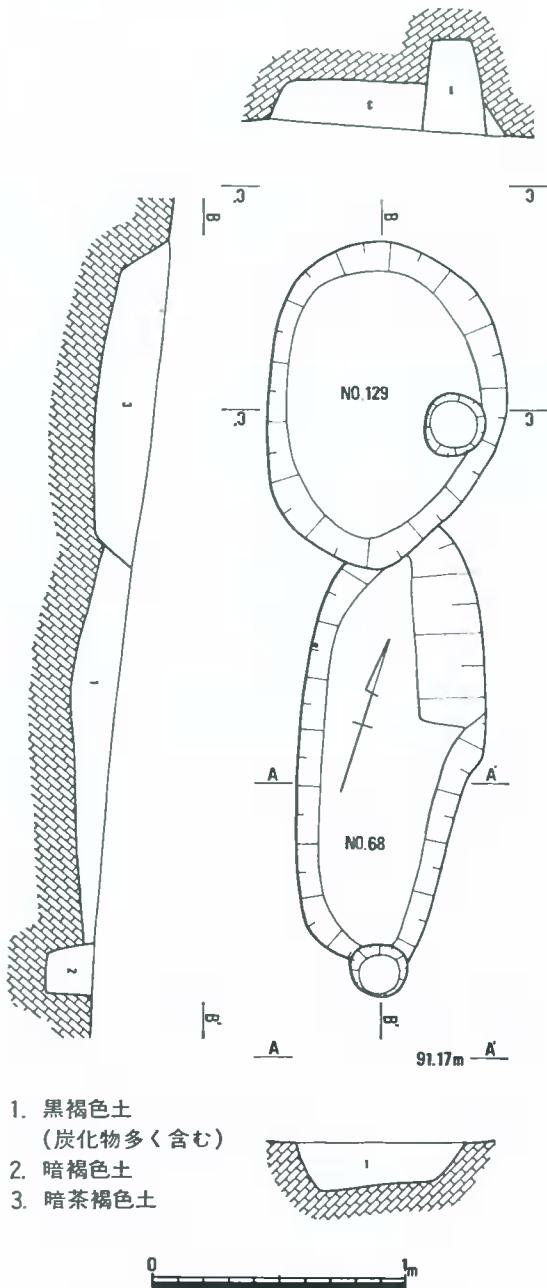
第78図 No. 126 溝状土壤出土遺物 (1/2, 1/4)

奥坂遺跡

No. 68 土 壤 (第79図)

土壤は南に向かって緩やかに傾斜する丘陵頂部に位置する。北端はNo.129土壤に切られ、また、南端もピットに切られているが、平面プランはほぼ長楕円形を呈する。

土壤内からは土器が出土した。いずれも細片であったが、24点を図示し得た。396～399は壺



第79図 No.68・129 土壤 (1/30)

形土器である。このうち396～398は長い頸部に凹線文が数条めぐるもので、口縁部は緩やかに外反し、端部は上下に拡張される。その端面には数条の凹線文がめぐる。調整は、口縁部内外面はヨコナデ、頸部から胴部外面は縦方向のハケメ、内面はナデが認められる。399はやや外反ぎみに立ち上がる短い頸部をもつもので、3条の凹線がめぐっている。胴部はタマネギ形になるものと考えられ、肩部にはハケ状工具による刻目がある。調整は口縁部、頸部の外面はヨコナデ、胴部外面はハケメである。内面は全体に抑えつけによる凹部が認められ、ナデによって仕上げられている。

400～402は甕形土器である。口縁部は胴部から「く」の字状に外反し、端部は上下に拡張が著しい。端面には数条の凹線がめぐっている。調整は口縁部内外面はヨコナデ、胴部外面は400がヘラミガキ、401・402はハケメである。内面は401にハケメが認められる以外はナデによっている。

403～415は壺および甕形土器の口縁部と底部である。口縁部はいずれも端部が上下へ著しく拡張されており、その端面には数条の凹線がめぐって

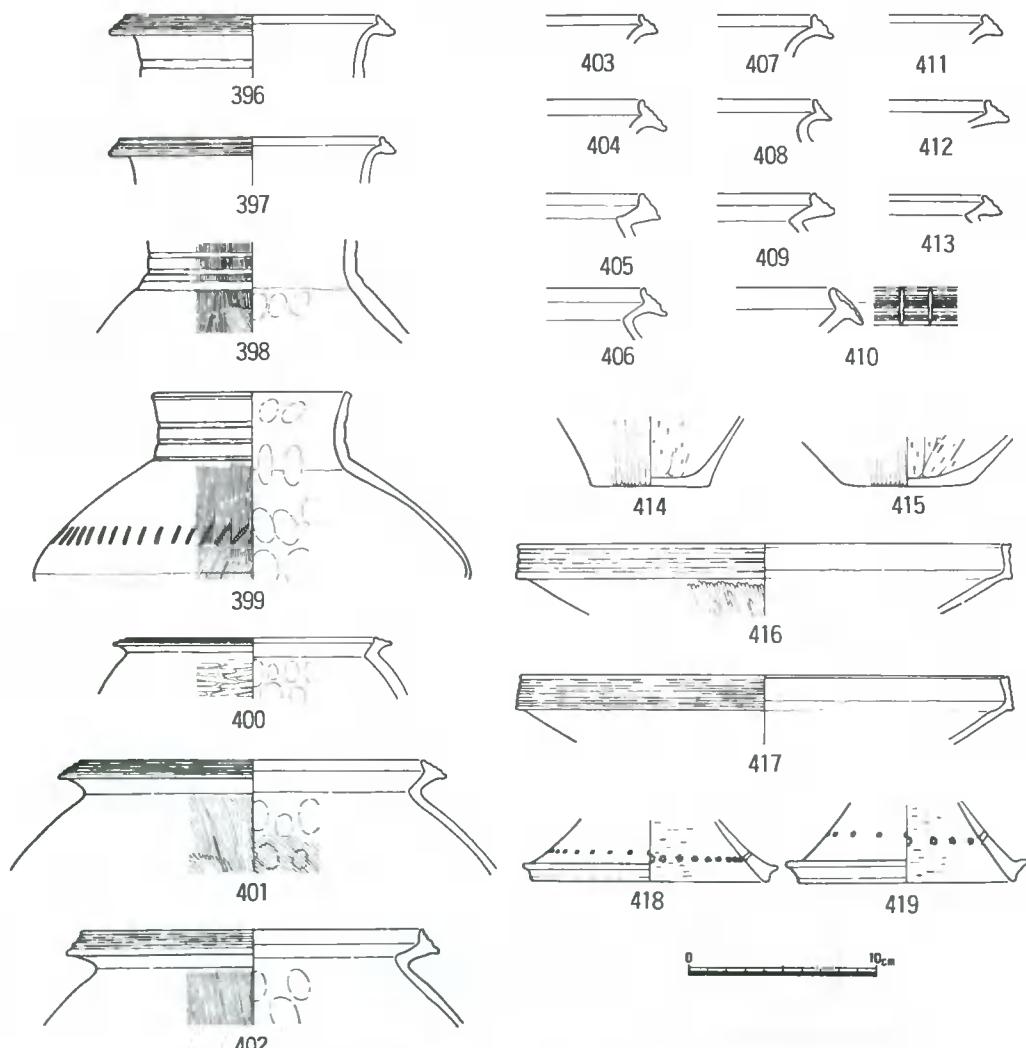
いる。410は棒状浮文が付加されている。

416~419は高杯形土器である。416・417は杯部で、口縁部は垂直か、あるいはやや内傾ぎみに立ち上がり、その外面には数条の凹線文が、また、上端面には1条の凹線がめぐっている。調整は口縁部内外面はヨコナデ、底面はヘラミガキと思われる。418・419は脚部で、円孔がめぐる。端部は外上方に拡張され、端面には強いヨコナデによる凹部がめぐる。内面はヘラケズリが認められる。

以上の土器は奥・中・Ⅲと考えられ、土壤の廃棄された時期を示している。

No. 129 土 壤 (第79図)

No.68土壤の北端を切って掘り込まれているもので、ほぼ橢円形を呈する。底面はほぼ平坦で



第80図 No. 68 土 壤 出 土 遺 物 (1/4)

奥坂遺跡

ある。内部からは遺物が全く出土せず、時期については不明である。

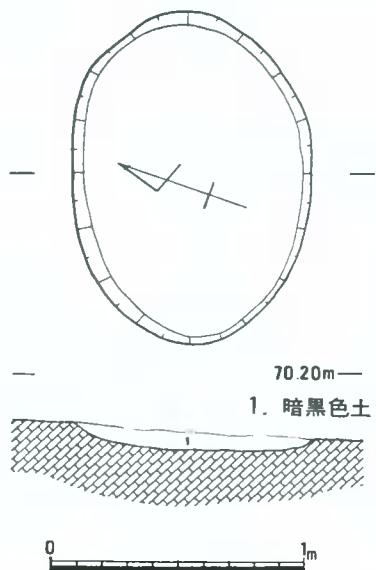
(平井勝)

No. 74 土 塚 (第81図)

B-5西南、海拔89.80m付近に位置する円形の土塚である。直径68×65cm、深さ30cmを測る。掘り方は椀状を呈している。420・421は色調灰白色を呈し、小砂粒を含む。口縁端部には凹線文が巡らされている。

時期は奥・中・Ⅲに比定できる。

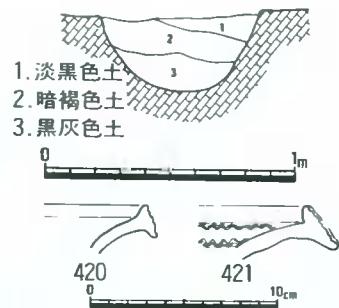
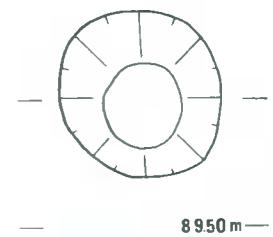
No. 73 土 塚 (第82図)



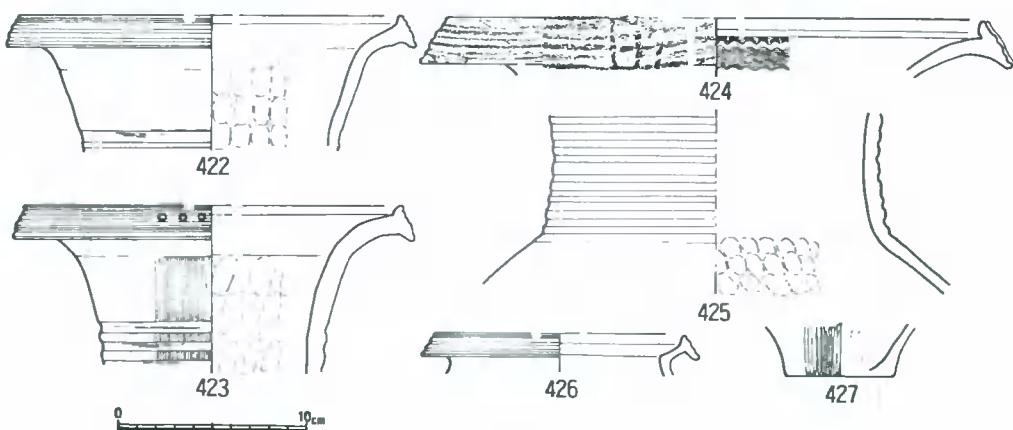
B-5西南、海拔90.25m付近に位置する楕円形の土塚である。No.74土塚の北西にあって約250の距離を有する。両土塚ともにNo.77建物

に近く、何らかの関連を有する遺構と考えることができる。長軸133cm、短軸95cm、深さ7cmを測り、暗黒色土が堆積している。

出土遺物は壺・甕の小片が6点のみである。壺の口縁部は上下に拡張し、折返しの口縁もみられ、円形の竹管文、棒状浮文が施され、総じて薄手に仕上げられて



第81図 No. 74 土塚 (1/30)
・出土遺物 (1/4)



第82図 No. 73 土 塚 (1/30)・出 土 遺 物 (1/4)

る。筒部内面は指頭による圧痕が目立ち、外面は縦ハケ後に幅広の凹線文が施されている。

時期は奥・中・Ⅲに比定できる。

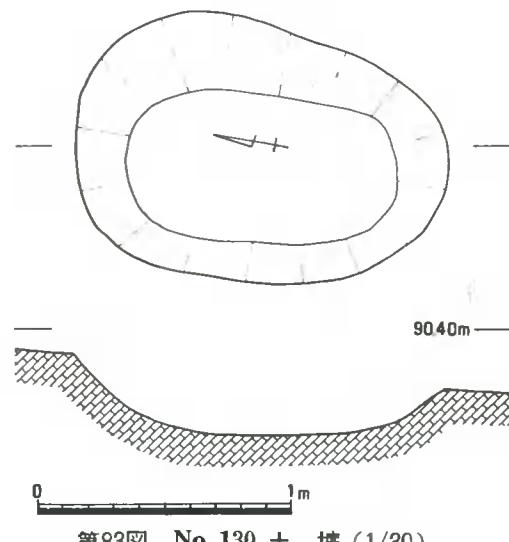
(高畠)

No. 130 土 壇 (第83図)

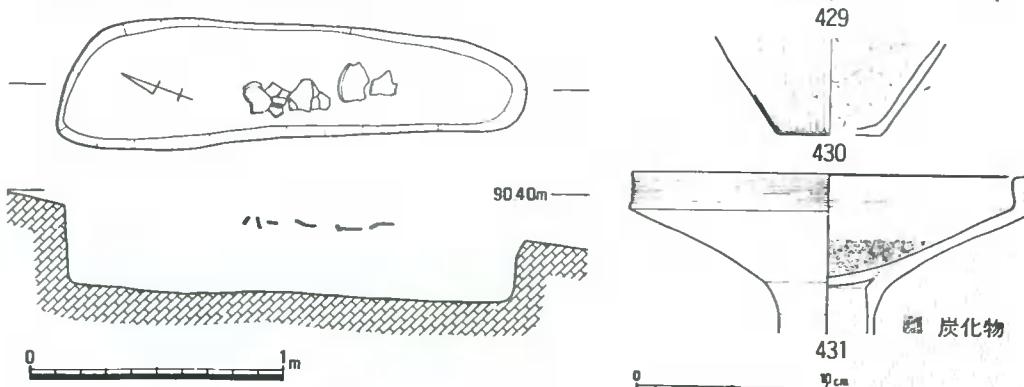
A-4の東辺中央やや北寄りに位置し、No. 71土壇の東にあたる。平面形は橢円形を呈し、長径約150cm、短径約105cm、深さ約30cmを測る。土壇内には軟質の灰褐色土が堆積していた。本遺構の造られた年代については、遺物が出土しておらず、他の遺構との切り合い関係もないため、比定することができない。遺構の性格についても明確にできない。

No. 71 土 壇 (第84図)

A-4の東辺中央やや北寄りに位置し、No. 133・134建物の東にあたる。平面形は長楕円形を呈し、長径約190cm、短径約50cm、深さ最大30cmを測る。壇内には軟質の灰褐色土が堆積していた。遺物は、直口壺形土器428、甕形土器429、底部片430、高杯形土器431等が出土している。第84図に示すように、上層からの出土が主である。431の内面には炭化物が付着しており、煮沸用器の蓋に転用された可能性がある。これら



第83図 No. 130 土 壇 (1/30)



第84図 No. 71 土 壇 (1/30)・出土遺物 (1/4)

奥坂遺跡

の遺物により、本遺構は奥・中・Ⅲに比定できる。

(光永真一)

(4) 段状遺構

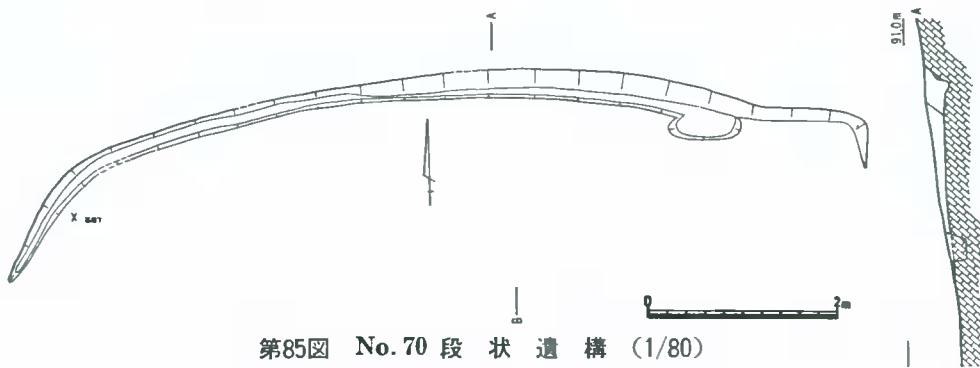
No.70 段状遺構 (第85図)

B-4の北端に位置し、「コ」の字形を呈する段状遺構である。検出時の最大長930cm・最大幅240cm・最大壁高20cmを測る。壁の直下には竪穴式住居に見られる壁体溝と同様の溝が認められる。その溝は最大幅15cm・最大深さ5cmを測り、段状遺構の東端で楕円形の穴となって終る。柱穴は伴わないようで、ただ石庖丁の出土した付近が少し他の場所より窪んでいるようである。堆積土は、2層に分層でき、壁付近の層は黄色土を含む黒褐色粘質土で少量の弥生中期後半の土器片を含み、他は黄色土を含むがやや濃い黒褐色粘質土でこれもわずかに弥生中期後半の土器片を含む。この遺構を古代～中世の柱穴と弥生時代後期の浅い土壌が壊しているため、出土遺物として取り上げたものの中にかなり多くの弥生後期と古代～中世の土器が混入している。そして弥生中期の遺物も実測できるようなものはなく、ただサヌカイト製の打製石庖丁のみが図示できるだけである。この遺構の廃絶の時期は、奥・中・Ⅲに比定できる。(浅倉)

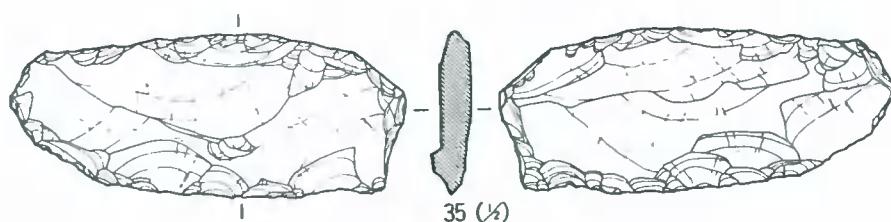
(5) 包含層出土の遺物 (第87図)

36～44の石器が出土しており、叩き石・大型蛤刃石斧・石鎌・石庖丁・スクレイパー・砥石等がある。石材は36が花崗岩、37が玢岩、43が流紋岩であり、他はすべてサヌカイトが利用されている。432～434・45はNo.96住居址とした窪地より出土した一括資料であるが、柱穴、中央穴等が確認し難い状況であった。

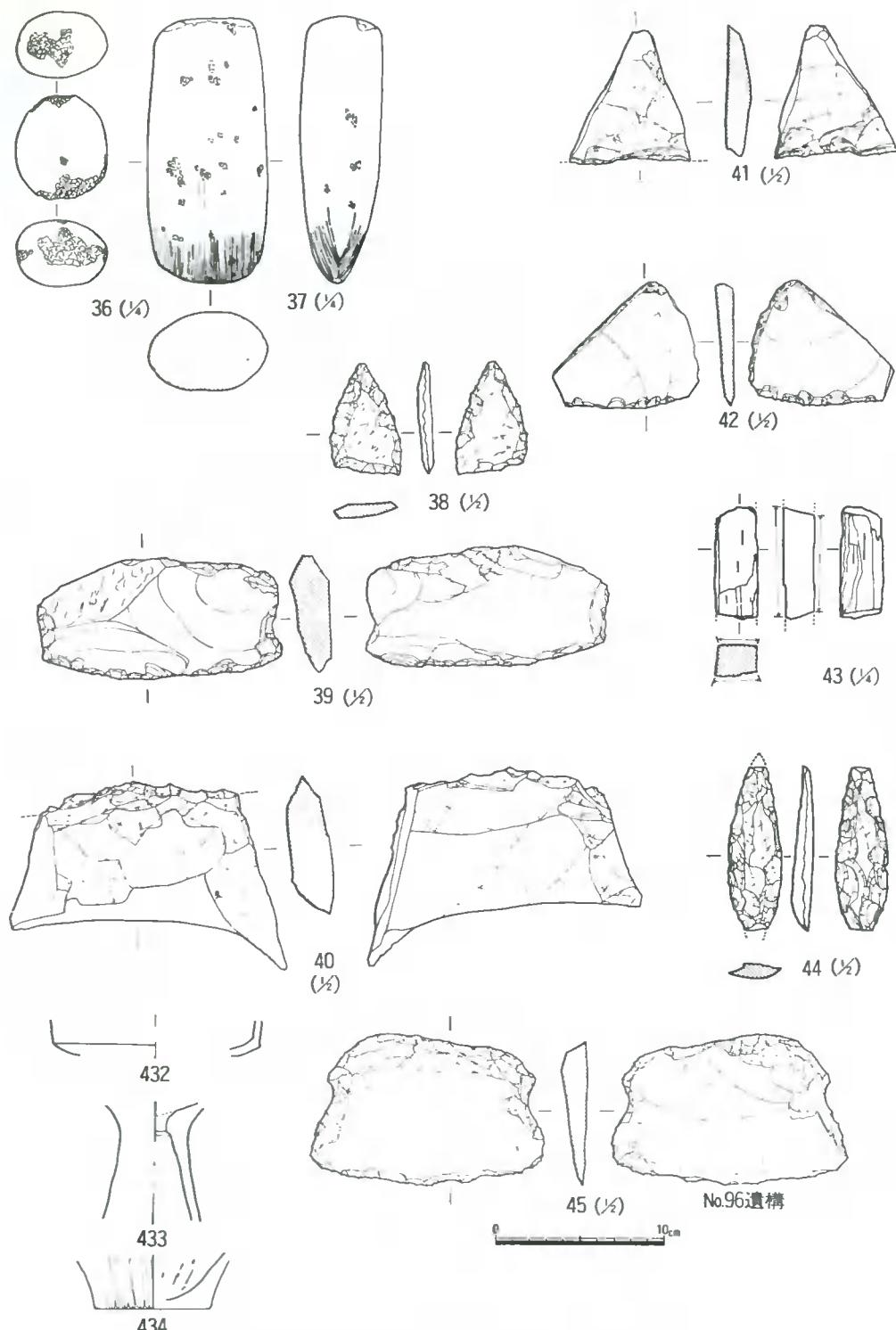
(高畠)



第85図 No.70 段状遺構 (1/80)



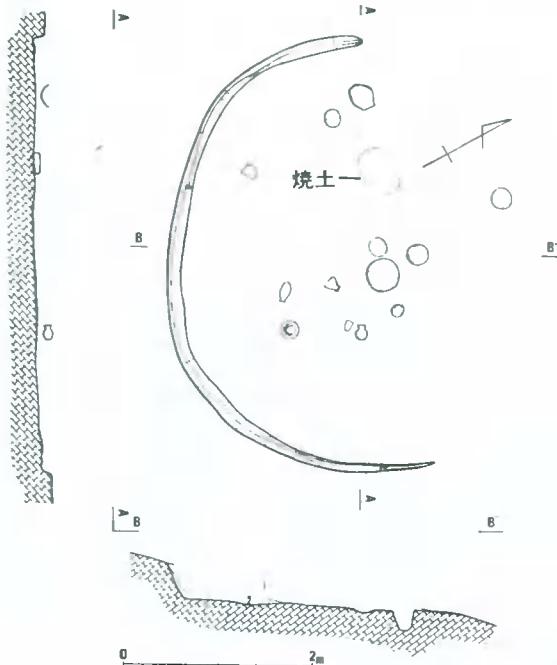
第86図 No.70 段状遺構出土遺物 (1/2)



第87図 表採・柱穴内出土遺物 (1/2, 1/4)

3. 弥生時代後期前半の遺構・遺物

(1) 住居址

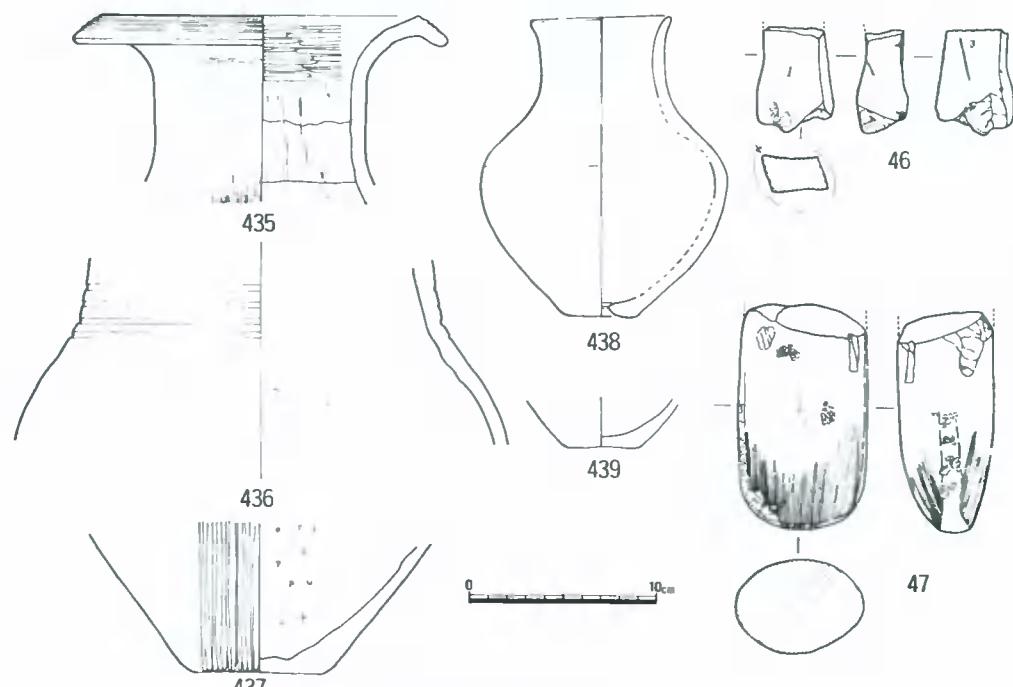


No. 95 住居址(第88図、図版51-2)

H-2, 海拔 87.60~88.10m 間のもっともレベル的に低い所に位置している。北側の斜面下位が自然流土により半壊状態を呈する円形の住居址である。長軸460cm, 短軸(370)cm, 床面積約(16.6)m², 床面海拔高は87.70mを測る。

屋内は中央穴・焼土・壁体溝からなり、精査にかかわらず、主柱穴は確認できなかった。中央穴西側には、53×36cmの範囲の焼土面が認められた。

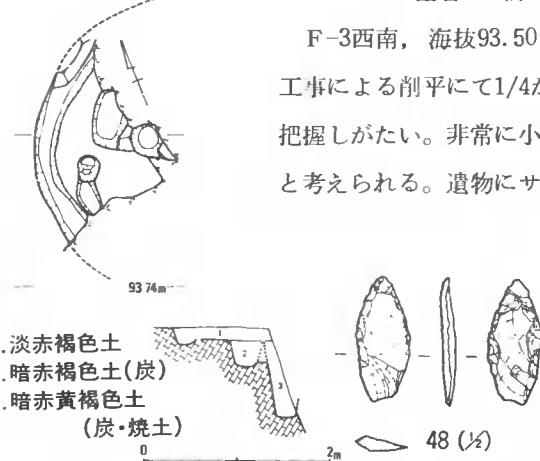
遺物は中央穴周辺に438・439・47, 436は住居内西端に近い出土であり、



第88図 No. 95 住居址(1/80)・出土遺物(1/4)

一様に床面より浮いている。土器類は器内外面の剥落が著しく調整はしがたい。色調は赤褐色系統が目立つ。46は石材に流紋岩が利用されている。

No. 141 住居址（第89図）



第89図 No. 141 住居址 (1/80)・出土遺物 (1/2)

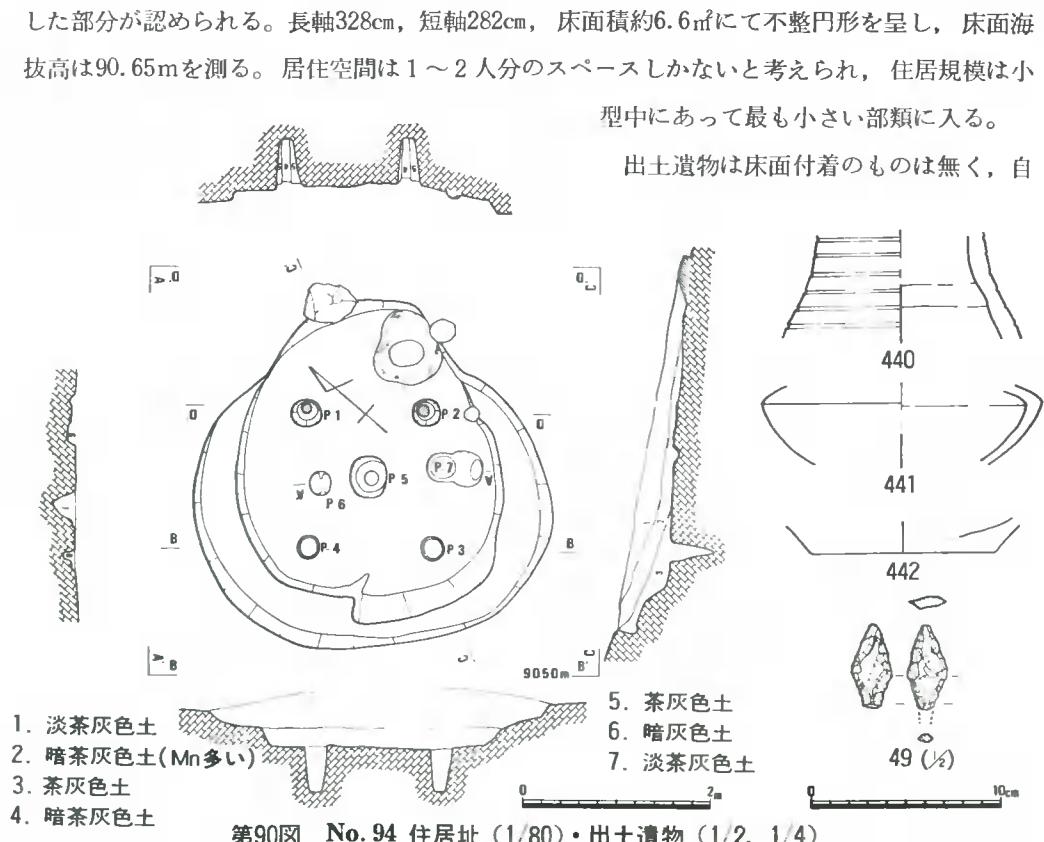
F-3西南、海拔93.50m付近に位置する竪穴式住居址である。工事による削平にて1/4が現存する状況であり、具体的な形状は把握しがたい。非常に小型で、推定直径約3.50cmの円形を呈すると考えられる。遺物にサヌカイト製の石鏃1点が出土している。

No. 94 住居址（第90図、図版

51-1)

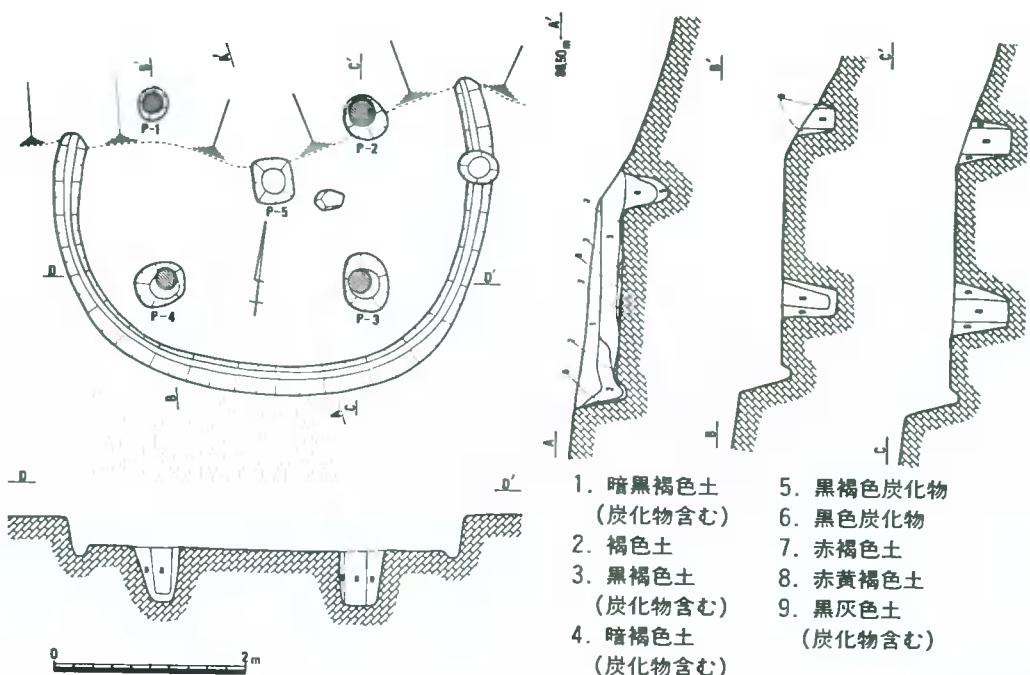
G-2の北東端、海拔89.60～90.30mに位置する竪穴式住居址である。北東部を除き住居周縁に幅約55cmの段状施設が付属しており、北東部辺にはそれが認められず床面を造り出した部分が認められる。長軸328cm、短軸282cm、床面積約6.6m²にて不整円形を呈し、床面海抜高は90.65mを測る。居住空間は1～2人分のスペースしかないと考えられ、住居規模は小型中において最も小さい部類に入る。

出土遺物は床面付着のものは無く、自

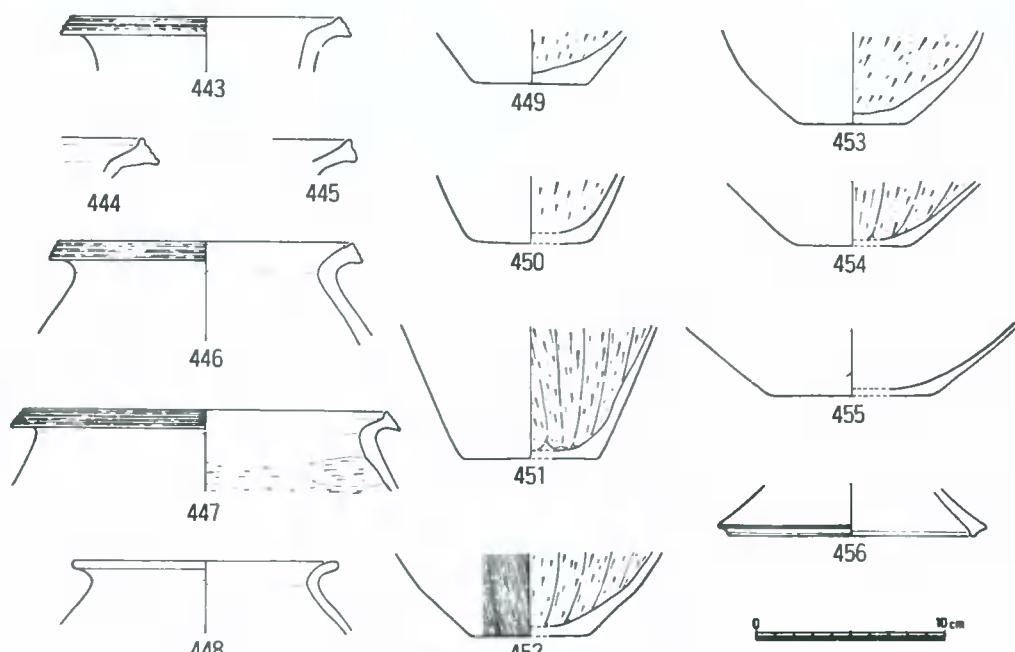


第90図 No. 94 住居址 (1/80)・出土遺物 (1/2, 1/4)

奥坂遺跡



第91図 No. 1 住居址 (1/80)



第92図 No. 1 住居址出土遺物 (1/4)

然堆積の1～3層中よりの出土である。土器小片50点、サヌカイトの石鏃小片等が2点のみである。図示できるものは3点にとどまり、壺・甕・台付形土記壺の類である。440は色調黄褐色を呈し、胎土中に長石・石英粒を含む。器外面は縦ハケ後に沈線が施され、内面は接合部上面に指頭によるナデがみられる。時期は奥・後・Iに比定できる。

(高畠)

No. 1 住居址 (第93・94図、図版52)

奥坂遺跡A地区の東端で検出した堅穴式住居址である。C-9の海拔87.50～88.25mの間に位置し、北側は削平されて壁体溝や床面が不明である。住居址内には暗黒褐色土、褐色土、黒褐色土が堆積し、いずれも炭化物が含まれていた。この住居址の柱穴は4か所に認められ、赤黄褐色を呈する柱痕跡が認められた。柱穴間の距離は、P-1とP-2が217cm、P-2とP-3が180cm、P-3とP-4が201cm、P-4とP-1が185cmで、床面積は約17.19m²を測る。この住居址には建て替えが認められず、奥坂遺跡で検出した住居址のなかでは、むしろ特異な存在である。中央穴の平面形は隅丸長方形を呈し、底部には黒褐色炭化物が堆積していた。

この住居址から出土した遺物は、いずれも土器の小破片である。

443から445は、壺形土器の口縁部である。肥厚しながら斜め上方へ立ち上がった口縁の端部は、斜め上下にわずかに拡張して1条または3条の凹線を有する。これらの口縁部は、いずれも内外面とも全体にヨコナデを施している。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で赤褐色または淡褐色を呈している。443と444の外面には、黒斑が認められる。

446と447は、器壁の比較的厚い甕形土器である。頸部より短く外反した口縁の端部は、斜め上下に拡張して3条または4条の凹線が認められる。口縁部は内外面とも全体にヨコナデを施しているが、胴部の内面は横方向のヘラケズリを行っている。446の胴部内面は、器表面が剝離して調整が不明である。

448も甕形土器である。外反して斜め上方へ張り出した口縁の端部は、拡張せずに丸く仕上げている。口縁部から頸部にかけては、内外面とも全体にヨコナデを施している。胎土中には1.0mm以下の白色砂粒を多く含み、焼成は良好で赤褐色を呈している。

449から455は、壺形土器または甕形土器の底部である。いずれも平底を呈するが、器壁の厚いものと薄いものの違いが認められる。外面の調整は器表面が剝離して不明なものが多いが、452には縦方向のハケメが施されている。内面はいずれも縦方向の粗いヘラケズリを行っているが、455の内面調整は不明である。胎土中にはいずれも細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で淡褐色または赤褐色を呈している。451と455の外面には、黒斑が認められる。

456は高杯形土器の脚部破片である。「ハ」字状に開いた脚端部は、わずかに拡張して立ち上がりが認められる。外面はタテナデを施し、内面と脚端部はヨコナデを行っている。

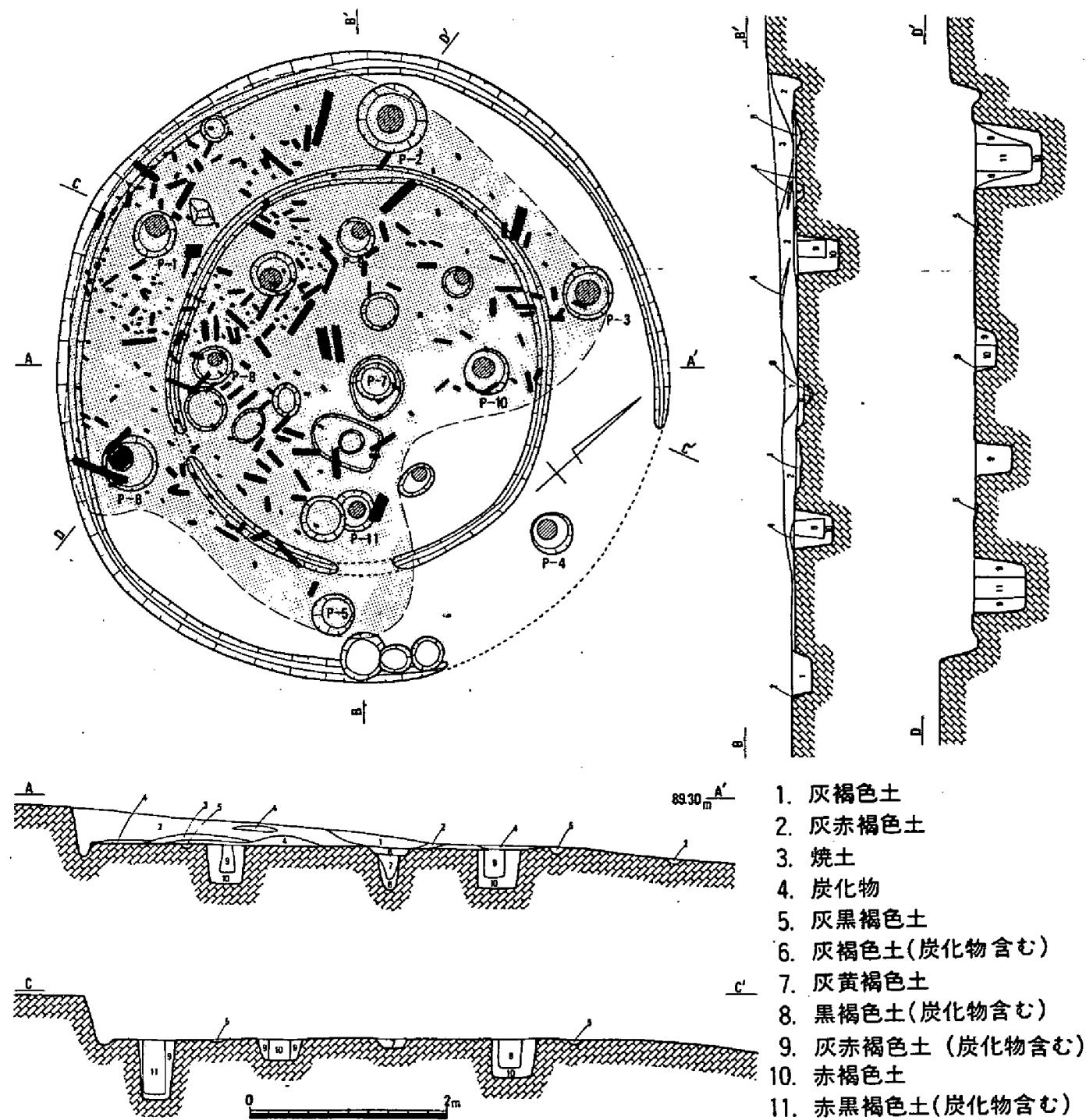
これらの土器は、奥・後・IIの古相に比定できる。

奥坂遺跡

No. 13・120 住居址 (第93・94図, 図版53)

B-7とC-7の境界付近のNo.4住居址とNo.16土壤の中間に存在する、重複した円形を呈する2軒の堅穴式住居址である。海拔88.75~89.25mの間に位置し、壁体溝が削平されて残存しない部分も認められる。この2軒の住居址は、規模の小さいNo.120住居址が古くて規模の大きいNo.13住居址が新しい。

No.13住居址は検出面から床面まで極めて浅く、東側の壁体溝は削平されて存在しない。この住居址は火災を受け、床面には広い範囲にわたって炭化物や焼土が認められた。また柱穴は6か所に検出され、炭化物が混入して赤黒褐色を呈する柱痕跡が認められた。柱穴間の距離は



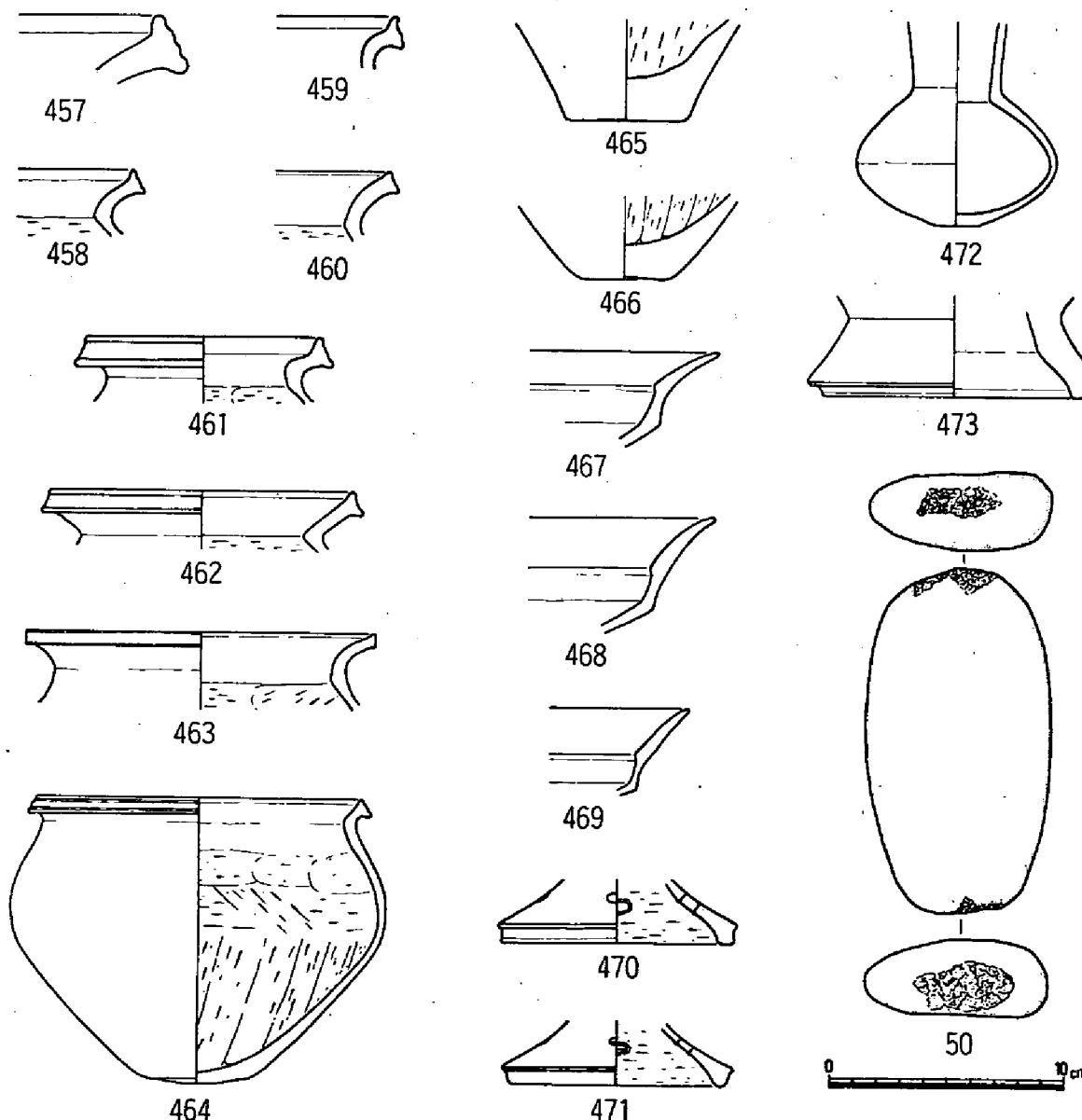
第93図 No. 13・120 住居址 (1/80)

P-1とP-2が266cm, P-2とP-3が247cm, P-3とP-4が228cm, P-4とP-5が268cm, P-5とP-6が238cm, P-6とP-1が257cmで、床面積は約32.15m²を測る。P-7は中央穴と推定され、炭化物を含む黒褐色土の上位に灰黄褐色土が堆積していた。

No.120住居址は、No.13住居址の床面検出作業によって確認した竪穴式住居址である。柱穴は4か所に検出したものの、中央穴は確実に断定できない。柱穴間の距離は、P-8とP-9が186cm, P-9とP-10が193cm, P-10とP-11が208cm, P-11とP-9が197cmで、床面積は約12.31m²を測る。柱穴内にはいずれも底部から浮いた状態で炭化物を含む灰赤褐色を呈する柱痕跡が認められた。

出土遺物の土器には、古い形態を有するものと新しい形態を有するもの 463・464・472が認められる。前者は奥・後・Ⅱの古相を呈し、No.120住居址に伴うであろう。後者は奥・後・Ⅲの新相を呈し、No.13住居址の出土遺物と考える。土器以外には、石英閃緑岩製の叩き石が出土している。両端に使用痕が認められ、重さは640gを測る。

(福田)



第94図 No. 13・120 住居址出土遺物 (1/4)

奥坂遺跡

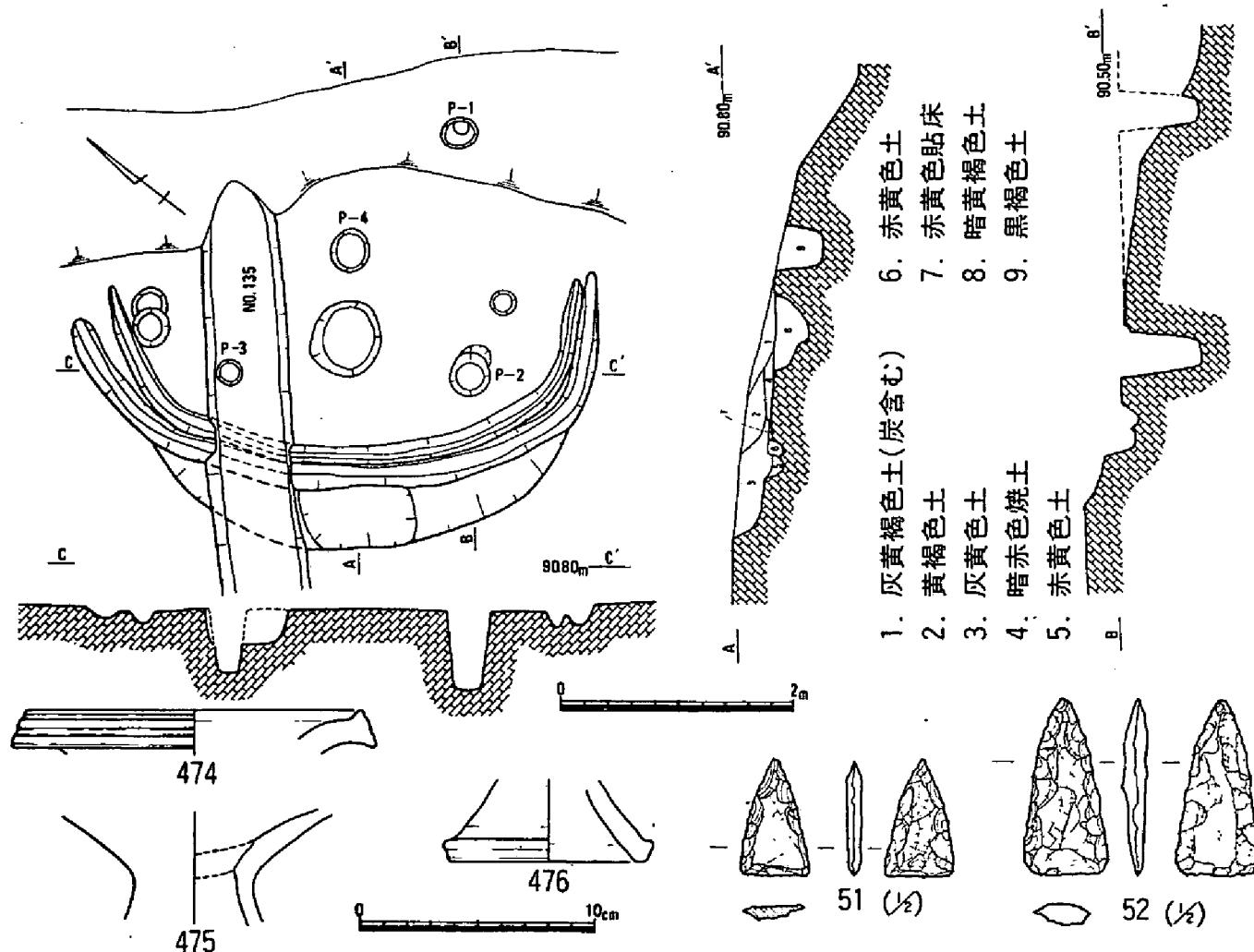
N. 39 住居址 (第95図、図版54)

北東に向いた緩斜面に位置し、住居址の斜面側約半分が床面を含めて、中世の時期と思われる段状遺構などによって切斷され、削平されている。また、No.135溝に一部切られて存在する。現状からは、この住居址の平面形態は胴張りの隅丸方形を呈す。斜面上部には円弧状の段をもち、その中央の約90cm幅の部分はもう一段窪んで床面とほぼ同レベルを示す。斜面上部に段(切断面)をもつ住居址は、特に急斜面に立地する場合に造成の名残として類例も多い。しかし、中央部の窪みについては入口の可能性が強く、No.64住居址やNo.66住居址のように、斜面下部側の壁体溝が途切れる事から、入口の可能性のある形態と比較して興味深い。

基本的には4本柱と思われ、うち3本が検出された。P-4には黒褐色土が埋まっており、位置的には中央ピットと考えてよい。P-4の北西の土壙は、断面土層観察から住居址以前の存在が考えられる。壁体溝は2本検出され、建て替えを示すが、柱穴はP-1～P-3以外には対応できるものはない。

遺物は、床面からサヌカイト製の石鏃が1点のほかは、数片の土器の出土しかない。壺形土器、高杯形土器ともに奥・後・Iに比定できる。

(柳瀬昭彦)



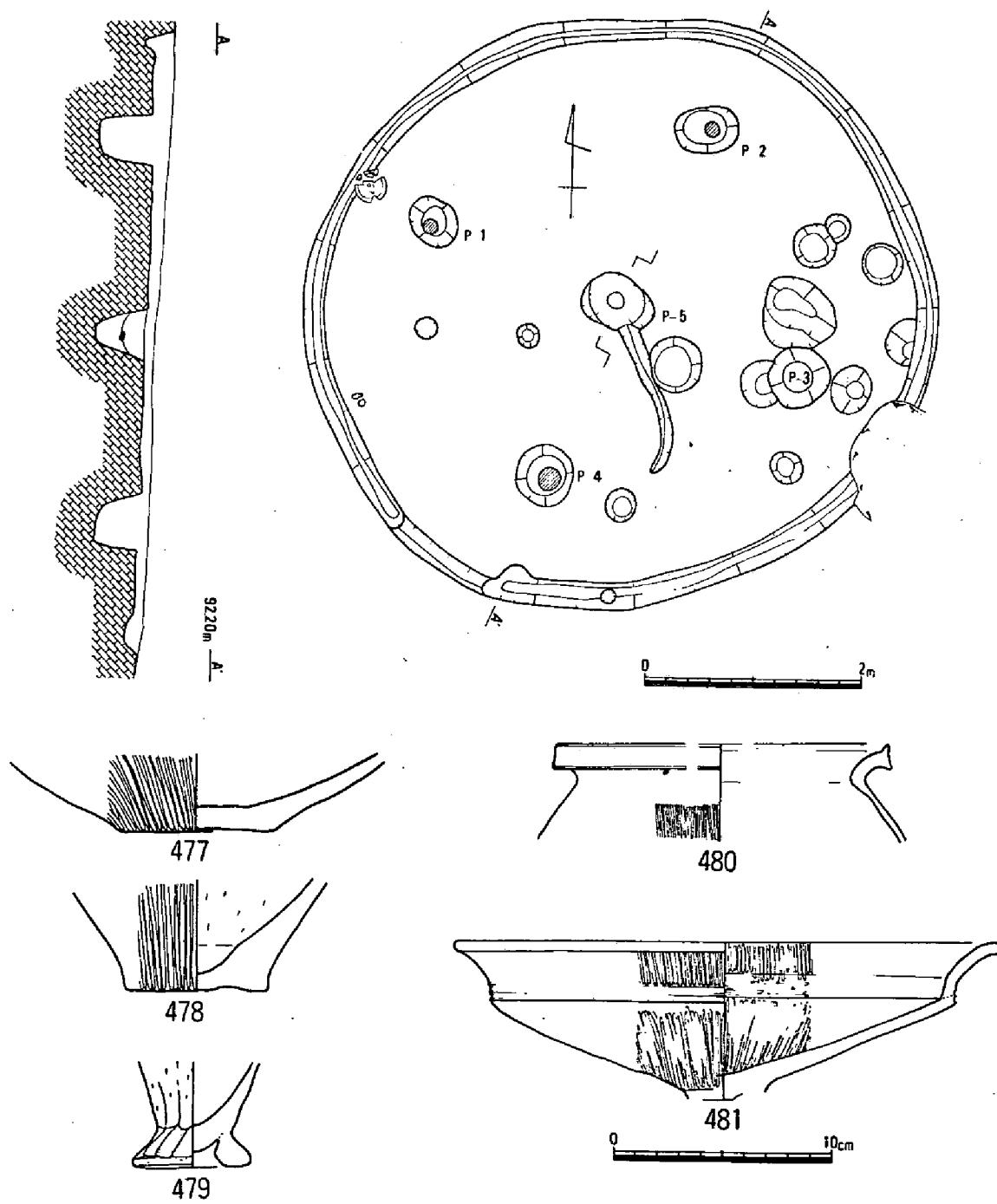
第95図 No. 39 住居址 (1/80)・出土遺物 (1/2, 1/4)

No. 64 住居址 (第96図、図版55)

C-4東側、海拔91.50~91.80m間に位置する円形の住居址である。住居長軸方向が等高線に平行する格好で存在、長軸565cm、短軸538cm、床面積約24.27m²、床面海拔高91.62mを測る。

屋内は主柱穴・中央穴・壁体溝・中央穴より延びる小溝・出入口からなり、P-1~P-4が主柱穴を構成し、中央穴P-5が伴う。中央穴より延びる小溝は、中期のNo.49・66・123住居址等に付設されているが、後期では稀である。また、住居址南西隅には一巡してくる壁体溝が左右で切れ一段高くなる部分(5cm)が存在し、長さ90cm、幅20cmを測る。このように壁体溝が一段高くなるものにNo.66住居址があり、出入口の可能性がうかがえる。

遺物は481が北西隅の壁体溝上に伏せた状態で出土している。



第96図 No. 64 住居址 (1/80)・出土遺物 (1/4)

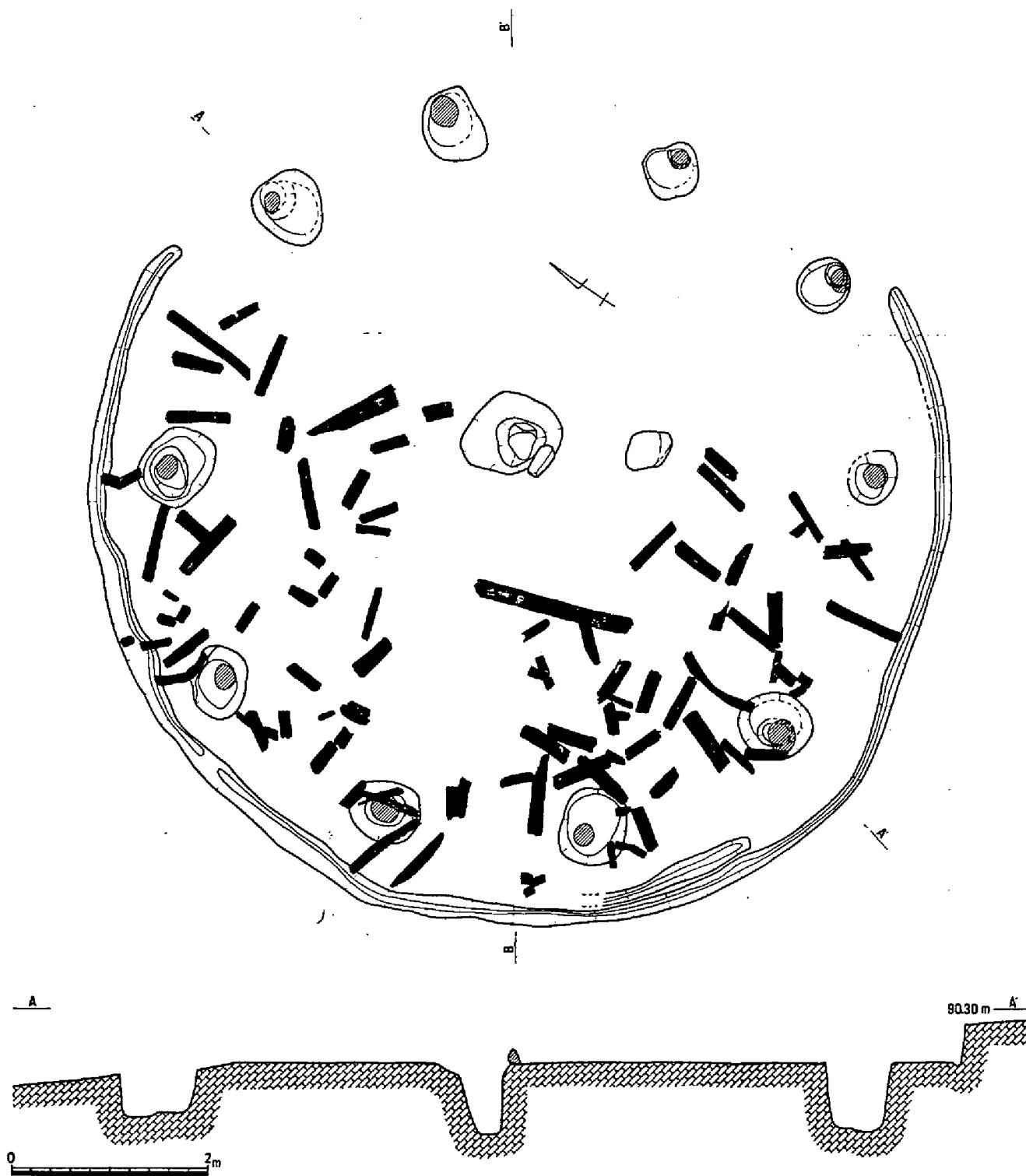
奥坂遺跡

時期は奥・後・IIの新相に比定できよう。

(高畠)

No. 24 住居址 (第97~100図、図版56-1・2)

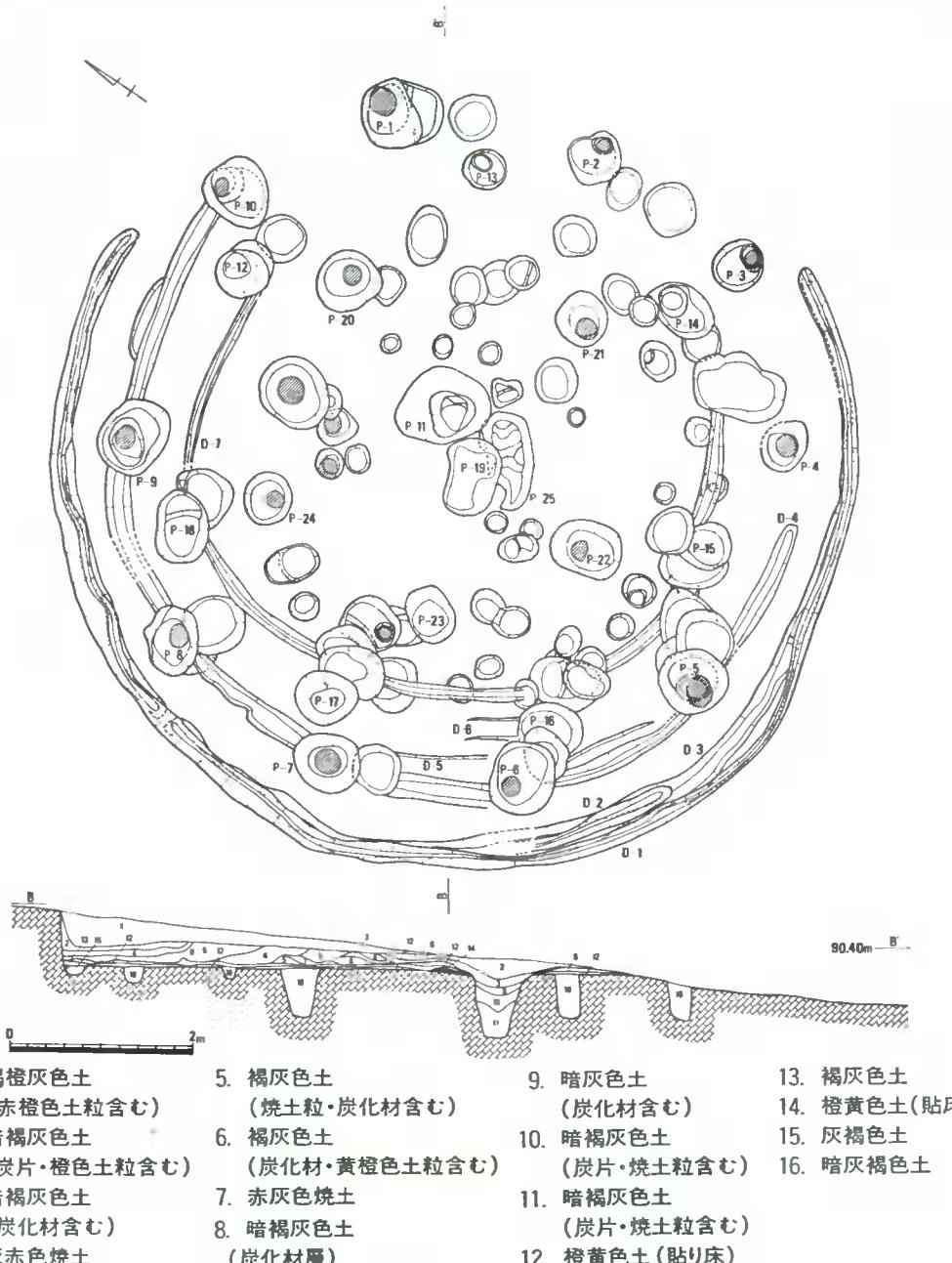
C-6の北東部にあり、No.104溝に切られている。後世の削平・流失等により、谷側にあたる北東部の壁体溝および床面の一部を欠くが、柱穴は確認できた。検出面での最大径約880cm、山側での深さ約70cmを測る。D-1からD-7の7本の壁体溝を確認しており、少なくとも6回の建て替えが行われたものと考えられる。建て替えについては、住居址内での壁体溝・柱穴等の切り合い関係からみて、D-7を伴う住居からD-1を伴う最終段階の住居へ順次拡張していった



第97図 No. 24 住居址 最終床面 (1/80)

ものと考えられる。

最終段階の住居は、平面形円形を呈し、最大径約880cm、床面までの深さは山側で最大約55cmを測る。壁体溝はD-1がこれに伴うものであるが、同時にD-2を検出した。柱は、P-1～10の10本で構成され、P-11が中央穴となる。柱間の距離は210cmから290cmとばらつきがある



第98図 No. 24 住居址 (1/80)

奥坂遺跡

が、P-4・5間、P-9・10間が他に比べて長い。これら4本の柱は対応する位置関係にあり、なんらかの主柱穴の役割を果したものと考えられる。柱と壁との距離は約90cmを測るのみである。床面には作業台として使用されたと考えられる石が遺存する。第97図に示すごとく、覆土中に多量の焼土塊・炭化材等を含んでおり、ことに第4・7層に焼土塊が、第8層に炭化材がそれぞれ集中している。これにより、この住居が火災に遇って廃絶したことが考えられる。D-3はD-1下に重複して検出されており、規模はD-1期の住居と同じものと考えられるが、これに伴う柱の構成は確認できなかった。

これら2時期の住居に先行するものとして、D-4・5の2時期の住居がある。これらの壁体溝が壁の裾を廻るものとすれば、平面形円形で最大径約750cmを測る。いずれの壁体溝に伴うかは不明であるが、P-12~18の7本による柱構成が考えられ、P-19がその中央穴となる。柱間の距離は約260~300cmとばらつきがあるが、壁までの距離は60cm前後とD-1~3期と同様に比較的短い。

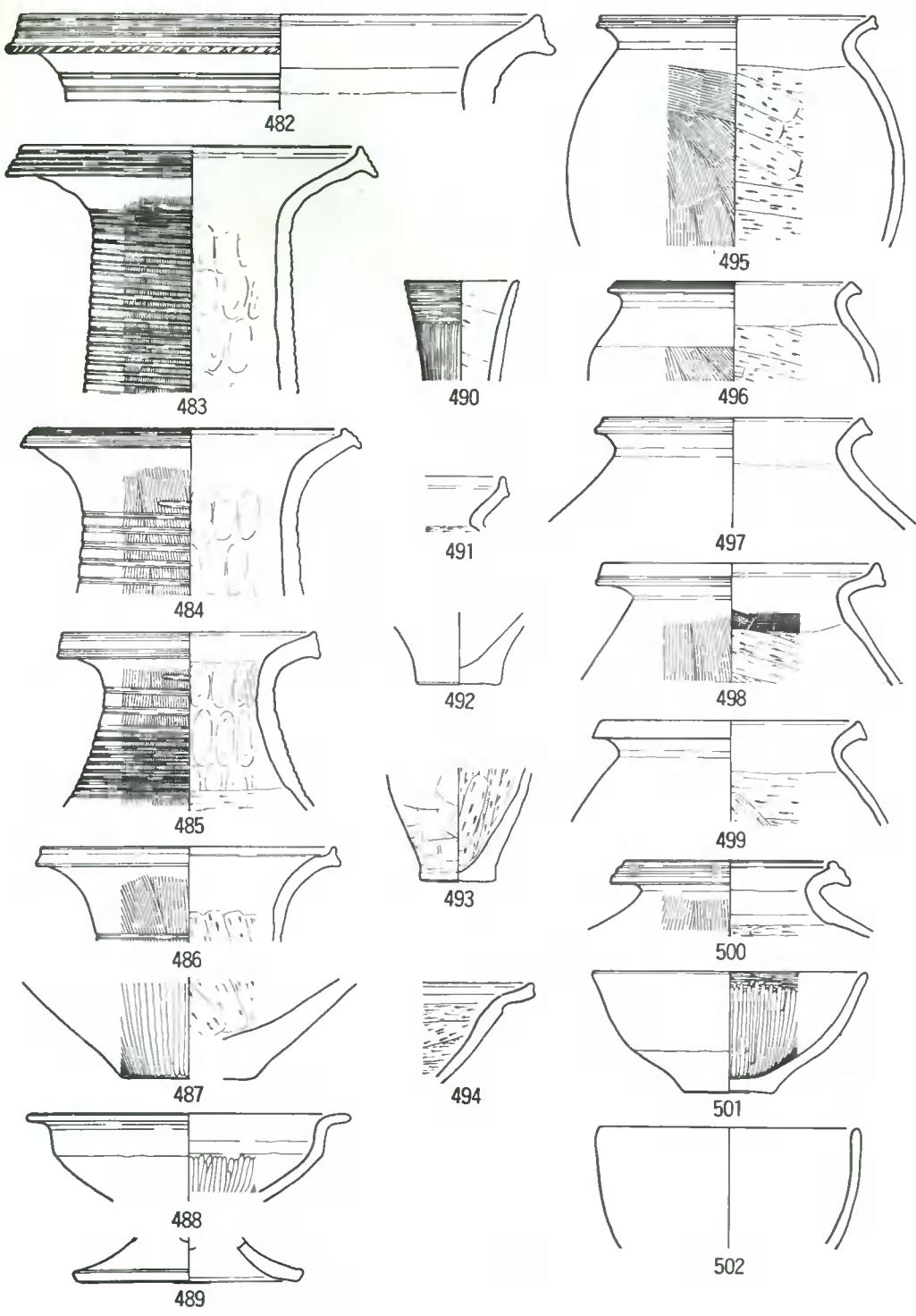
D-6期の住居については、その柱構成等の確認ができなかった。

D-7期の住居が、この住居址での最古の段階のものと考えられ、壁体溝が壁の裾を廻るものとすれば、平面形は円形あるいは胴張りの方形を呈し、最大径約590cmを測る。柱はP-20~24の5本で構成され、P-25が中央穴と考えられる。柱間の距離は約180~260cmとばらつきが大きいが、壁までの距離は100cm前後と考えられる。中央穴は他の時期に比べて住居中央から南東方向へずれている。

この住居址では、D-7期、D-4・5期、D-1~3期の三つの段階の住居が考えられ、規模は最大径約590cm→約750cm→約880cmと拡張し、それに伴う柱も5本→7本→10本と増えている。いずれの時期も柱は比較的壁に近い位置にあったと言えよう。

遺物は、壺形土器482~490、甕形土器491~500・503・504、鉢形土器494~502、高杯形土器488・489・506~509、底部片492~493・506、石斧53、石庖丁54、スクレイバー55、石鎌56・57、水晶58等が出土している。このうち、床面出土のものは496・492・488および石斧、石鎌57であり、P-11からは484・498・499・489・494が出土している。また、505はP-19、506はP-23、509はP-14、503・504・508・509は構成を確認できない柱穴からの出土である。他は覆土中の遺物である。

壺形土器のうち、490を除く長頸壺については483において、口縁部から頸部への屈曲が最も強くみられる。頸部には縦方向のハケメ調整のうちに螺旋状の凹線が施されている。482~484の口縁外面には3~4条の凹線がみられる。内面のヘラケズリは、485では肩部までであるが、486では頸部上半にまでおよんでいる。487は台付直口壺形土器の口縁部と考えられ、内面は斜方向のヘラケズリのうちにナデている。



第99図 No. 24 住居址出土遺物(1) (1/4)

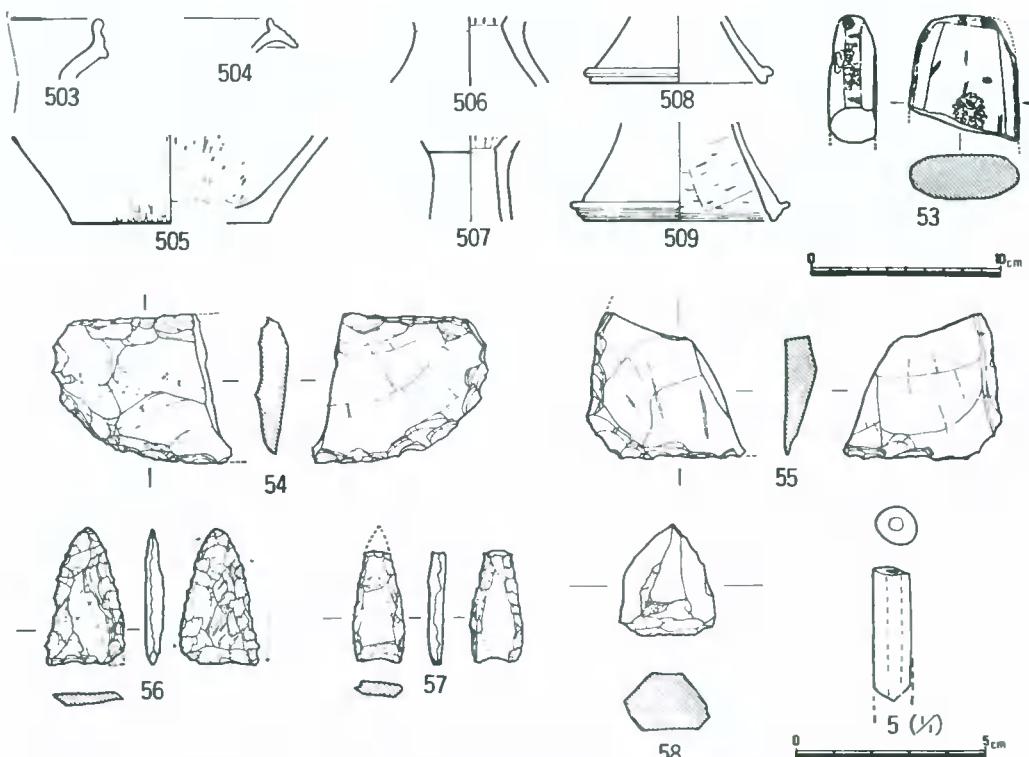
奥坂遺跡

壺形土器のうち、491, 495は他に比べて新しい様相を呈している。491は径不明であるが、口縁部はやや内傾しながら立ち上がり、内面のヘラケズリは胴部上端におよんでいる。495も口縁端部は上方へつまみあげられ、内面のヘラケズリは491よりはやや下がる。496~499の口縁端部は前二者より内傾し、500では外面に2条の凹線が施される。内面のヘラケズリは、495にちかく、498では胴部上端にハケメが残る。495・496・498は、他に比べ肩はあまりはらず、496では口縁部の横位のナデが、肩にまでおよんでいる。

高杯形土器のうち、488の口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、屈曲して大きく外傾して終っている。また、489の脚端部は面をなし、透孔は4孔である。鉢形土器のうち、502は器表剥落のため調整不明であるが、501の内面はヘラミガキによって仕上げられ、大型品と考えられる494の内面は横方向にヘラケズリされている。

最終床面およびそれに伴う中央穴（P-11）から出土する遺物は、奥・後・I～IIに属するものであり、床面下の構成を確認できない柱穴からは506～509等の古い様相を示す土器も出土している。しかし、床面下の柱穴から出土した503や覆土内の遺物のうちの499は、奥・後・IIIに比定しうるものである。したがって、この住居の営まれた時期は、奥・後・IIIの範囲にもとめられよう。

（光永）



第100図 No. 24 住居址出土遺物(2) (1/1, 1/2, 1/4)

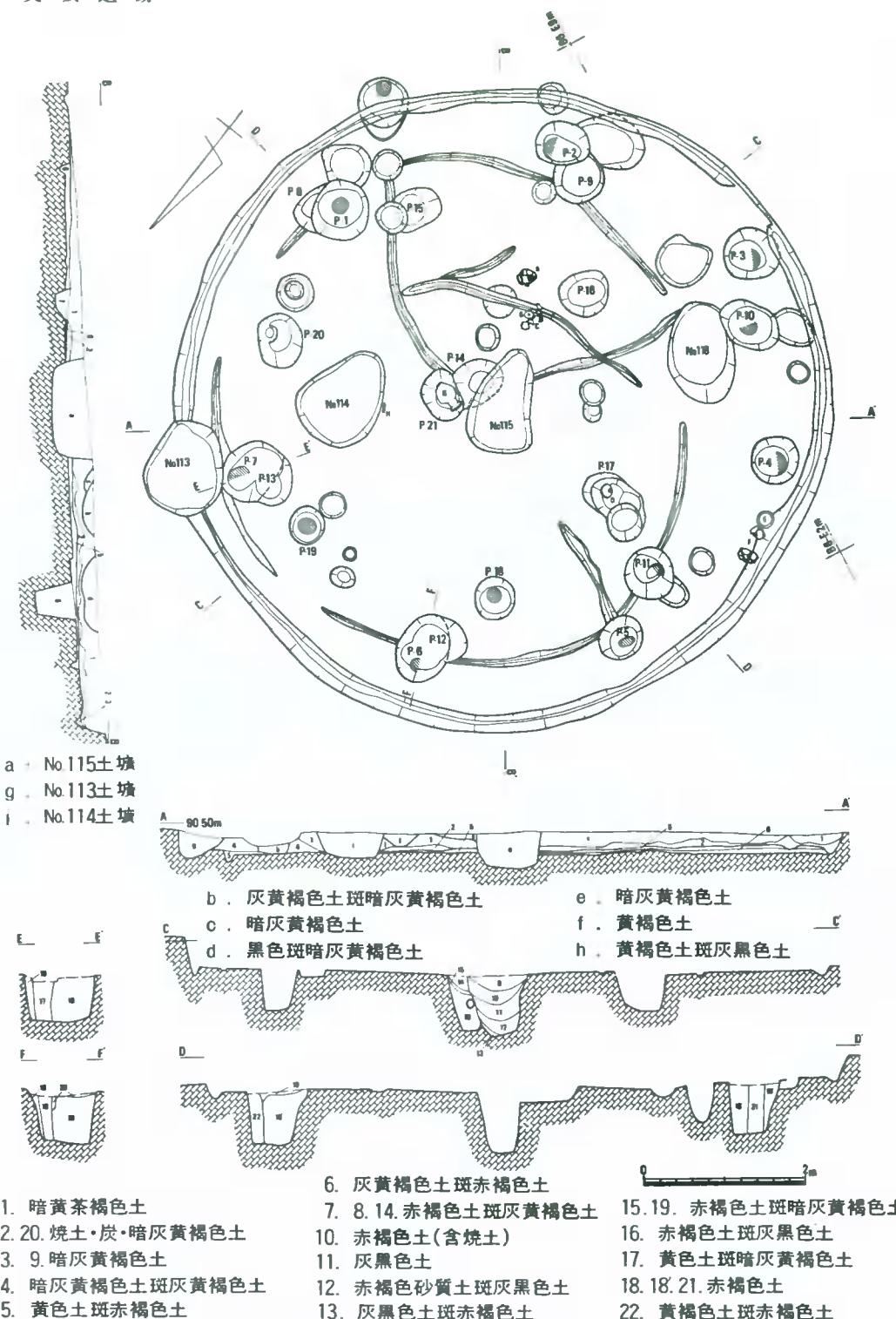
No.25 住居址（第101～105図、図版58～60）

B-6の南西隅で検出された竪穴住居址である。調査の結果、一度の拡張と二度の建て替えの行われたことが判明していて、拡張前の住居址をNo.25B、拡張後のそれをNo.25Aと呼称する。

No.25A住居址は直径810×780cmのほぼ円形を呈する住居址である。一度建て替えがなされていて、最初6本柱（P-8～P-13）であったものが、7本柱（P-1～P-7）に上屋構造を変化させている。しかし、壁体溝ならびに中央ピット（P-14）は共用されている。柱穴は円形あるいは橢円形をなし、径70～90cm・深さ60cm内外を測る。ほとんどの柱穴で径25cm前後の柱痕が確認されていることから、柱は埋設部分を切断して建て替えられたものとみられる。隣する柱穴の距離は6本柱で280～340cm、7本柱で250～350cmを測る。やや不均等な感じを受けるが、これは東の柱間（P-1とP-7、P-8とP-13）が他のそれよりいくらか長いためで、これを除くと、6本柱で40cm、7本柱で60cmの誤差に納まる。のことから、この住居の入口を東に推定できるかもしれない。柱穴と壁面との距離を測ると、6本柱は平均88cm、7本柱は平均56cmとなり、建て替えは住居内の生活空間を拡大するためと考えられるが、労働力の関係があるいは必要上の問題か、新たに掘削して拡大するまでには至らなかったようである。柱の数が1本増加したことは、考えようによつては平面積の拡大によって上屋構造が弱体化することを防止する意図によつたとも解釈できる。なお、6本柱の場合、対面する柱穴間の距離は600～620cmである。中央ピットは長径72cm・短径53cm・深さ74cmの橢円形をなし、壙内には焼土層が認められた。また焼上層の下の層からは大型の土器片がかなり出土した。壁体溝は幅10～20cm・深さ5～10cmで全周し、柱穴P-3を切っている。この事実からすれば、この壁体溝は建て替え後に掘りなおされたと考えられる。No.25A住居址は貼り床（第101図5・6層）をもつてゐる。図A-A'の地山上面の線がNo.25B住居址外まで水平に伸びていることから、25Aの拡張にあたっては、床面を一度掘り下げ、その後に床を貼つたとみられる。5層の底には炭層が所々に認められたため、25Aの建て替えでは床面に新たに土（5層）を入れて整えたことも考えうる。No.25A住居址は最終的には火災によって崩壊したようで、埋土の下層（第101図2層）には焼土と炭が多量に包含されていた。

No.25B住居址は拡張前のもので、直径630×590cmのほぼ円形で、No.25A住居址との比率は径で1:1.3となる。前述したように、拡張によって床面を削平されているため、柱穴と壁体溝を検出したに留まる。6本柱（P-15～P-20）の上屋構造である。柱穴は径48～67cm・深さ50cm前後を測り、3基で柱痕を検出していることから、No.25A住居址の建て替えと同じく、埋設部分を切断したものと考えられる。柱痕径は18cmと22cmである。隣接する柱穴の距離は、230cm程度であるが、西のP-17・P-18間のみ190cmと狭い。対向する柱穴の距離は440～480cmである。壁体溝は幅10cm前後・深さ2～5cmときわめて浅く、本来全周していたものが、とくに浅

奥坂遺跡

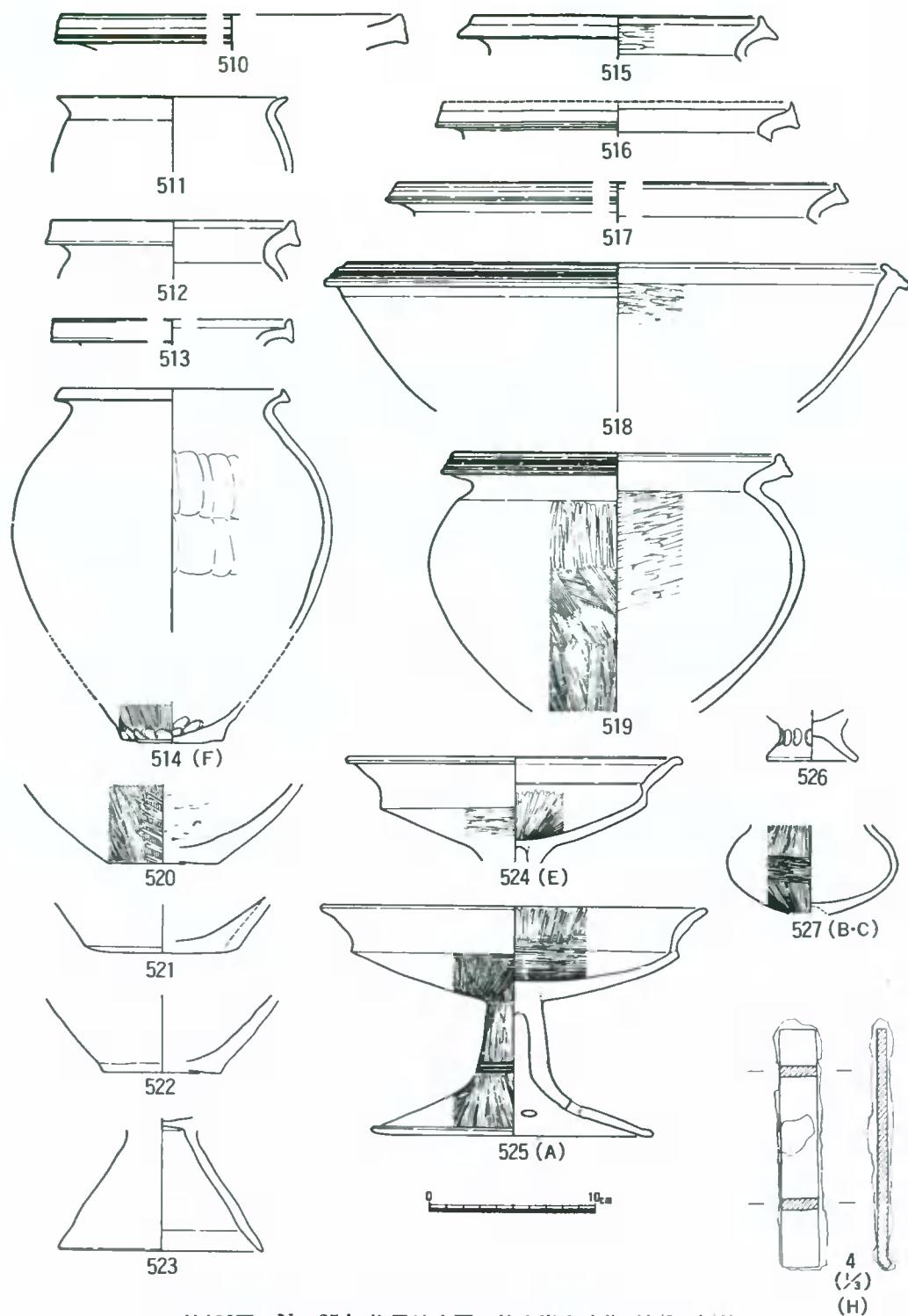


第101図 No. 25 住居址 (1/80)

い部分については削平によって消滅したとみられる。中央ピット（P-21）を伴っていた。長径64cm・短径46cm・深さ67cmを測る。壇内の下半を充填する土（第101図16層）には炭粒が多く含まれ、その層の上面近くには一部を欠損しただけの長頸壺が横倒しにされて埋没していて、また彩文土器も破碎された状態で出土した。これらの土器の埋没は明らかに人為的なものとみなされ、地鎮的祭祀の臭いがする。住居の拡張に伴うものであろうか。この中央ピットは25Aの中央ピットに切られている。No.25B住居址で注意されるものは中央ピットから壁体溝へ延びる幅10～15cm・深さ3～9cmの小溝である。壁体溝外へは延びず、排水溝とは考えられない。ほぼ住居を4分の1に分割していく、さらに、P-5付近から中央ピットへ向かう短い溝も存在することから、間仕切りの可能性がある。ただそうした場合、これらの小溝と交叉して壁体溝と平行するようなもう1本の小溝の存在をどう解釈するかという問題が残る。

次に出土遺物について述べることとする。まず住居址の時期に直接関係する床面あるいは柱穴出土のものを記す。第102図はNo.25A住居址出土のものである。出土位置を記すと、床面出土は514（第102図F）・524（同図E）・525（同図A）・527（同図B）、中央ピット（P-14）出土は511～513・515・518・519・522で、510はP-1、517・526はP-6、523はP-10、520は壁体溝中、521は貼り床層からそれぞれ出土している。516は主柱穴以外の柱穴出土であり、住居址に伴う遺物かどうか多少疑問がある。510は壺形土器の口縁部とみられる。口縁端部を上下に少し拡張し、端面に3条の凹線を施す。ヨコナデ調整で、胎土には砂粒が多量に含まれ、白色砂粒が目立つ。511～516は甕形土器である。口縁端部を尖り気味に丸くおさめるものが1点あるが、他はいずれも口縁端部を拡張する。拡張の仕方は各個体で微妙に異なるが、大きくみれば、上下両方へ拡張するもの512・515・516と、上方への拡張がより強いもの513・514に分れる。口縁端面には凹線を認めない。いずれの胎土も砂粒を多く含む。511と514では白色砂粒が目立つ。口縁部の調整はヨコナデで、515は内面をヘラミガキする。515の胴部内面には、指頭で強くナデ上げた痕跡を残す。底部内面には指頭圧痕を残し、底部の外面にも指頭圧痕がめぐる。底面はナデて整えている。517～519は鉢形土器とみられる。いずれの口縁端部も拡張され、端面に3条の凹線が施されている。拡張の度合いは異なるが、上方への拡張がより強いことは共通する。口縁部はヨコナデ調整である。いずれの体部内面もヘラケズリされるが、518と519はその後をヘラミガキで整えられる。518の体部外面はナデ調整である。3個体とも胎土には多量の砂粒を含むが、517・518には径3mm前後の石粒、519には白色砂粒が散見する。520～522は壺ないしは甕形土器の底部とみられ、520・522はわずかに凹面、521は凸面の底面をなす。521の外面はヘラミガキ、522の外面はナデ調整とみられる。内面はいずれもナデて平滑にされるが、520では先行するヘラケズリ痕を残す。胎土は砂粒が多く、520・522に白色砂粒が多い。523～525は高杯形土器である。523はやや異形であるが、高杯形土器の脚部と考えてい

奥坂遺跡



第102図 No. 25A 住居址床面・柱穴出土遺物 (1/3, 1/4)

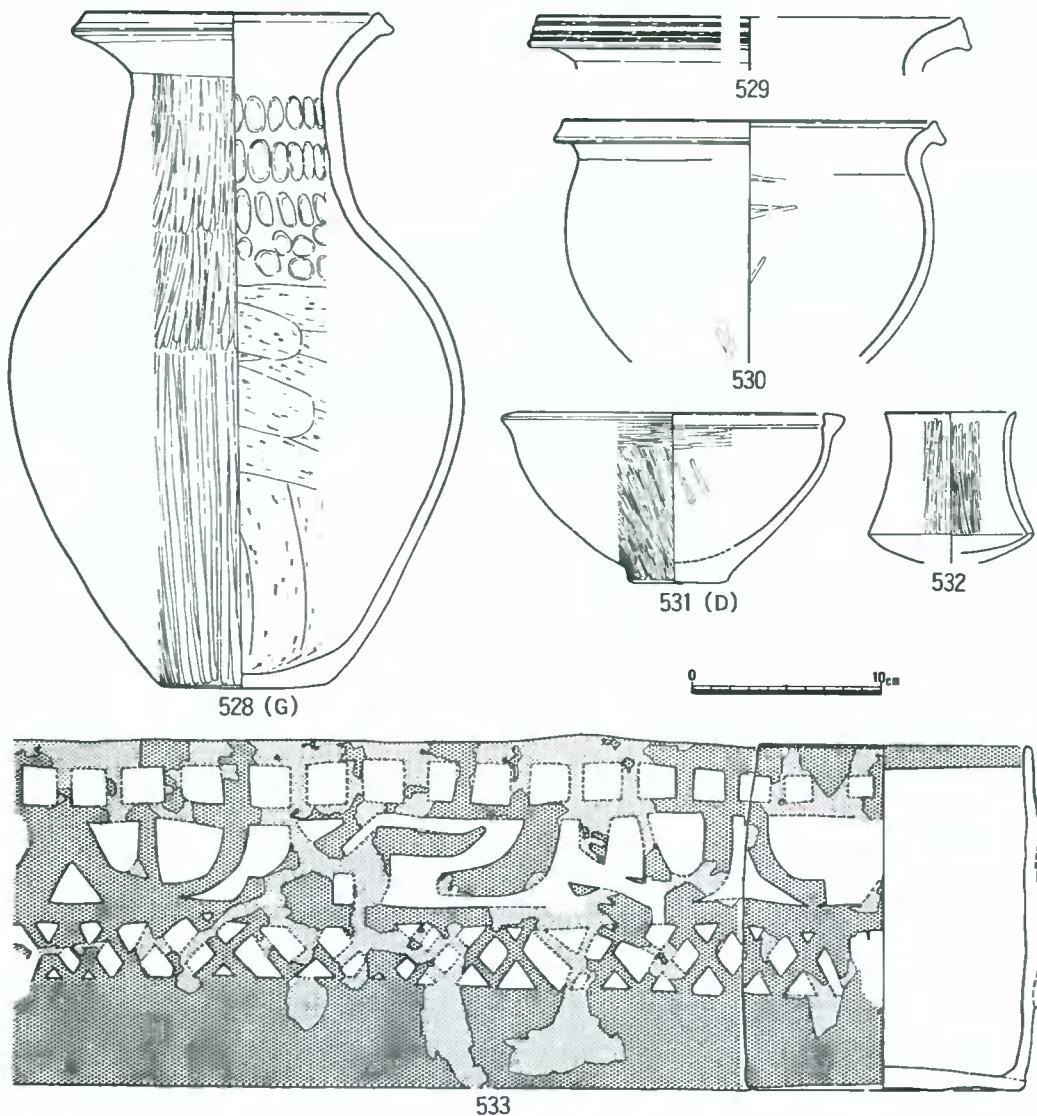
る。円板充填の技法によるとみられる。脚部はヨコナデで調整し、内面に平坦面をもつが、他の部分の調整は不明瞭である。524・525は杯部に脚部を刺し込んで接合する技法によっている。口縁部はヨコナデ調整されるが、525はその後内面をヘラミガキする。杯部のヘラミガキの方向は524と525ではまったく逆になっている。525の脚端部はヨコナデ、内面はナデで調整される。どの胎土にも砂粒が多く含まれ、523と525では白色砂粒が目立つ。526は鉢形土器に接合するとみられる。内面はナデで丁寧に整えられるが、外面くびれ部には指頭圧による凹凸をかすかに留める。胎土には砂粒多く、白色砂粒を含む。527は脚のつく小型の壺形土器である。外面のヘラミガキは丁寧である。内面はナデで調整される。胎土には砂粒が含まれる。床面から鉄器が1点出土している（第102図H）。厚さ5mmの板状をなし、片端をわずかに屈曲させる。用途は不明である。

第103図はNo25B住居址出土と考えられる土器である。出土位置は、中央ピット（P-21）出土のものが528（第101図G）・529・532、P-17出土のものが530と531（同図D）である。528・529は壺形土器である。528は中央ピットからほぼ完形のまま横倒しの状態で出土したものである。口縁端部は少し拡張され、窪み気味の端面は無文である。口縁部はヨコナデ調整である。頸部内面には指頭圧痕が順序よく並ぶ。頸部の成形に伴う痕跡であるが、最終的にはナデで調整する。胴部から底部内面はヘラケズリで、ケズリばなしである。胎土は多量に砂粒を含み、径5mm前後の石粒があり、白色砂粒も目立つ。529も口縁端部を少し拡張させ、端面には3条の凹線を施す。胎土は砂粒を含み、径3mm前後の石粒を多量に含む。ヨコナデ調整で、内面はナデで平滑にしたようにみられる。530～533は鉢形土器である。532は脚台が付き、533はショッキ形がいずれも特異な形態をしていて、用途の特殊性が推察される。530は口縁部ヨコナデ調整、体部はヘラミガキとナデを併用している。531は口縁部内面に凹線をめぐらせていく。体部内面はかなり剝落しているが、ヘラミガキである。530・531とも胎土には多量の砂粒を含み、径4mmの石粒も散見する。531では白色砂粒も顯著である。532は脚台がつくと想われる。体部外面は成形の際の小凹凸を残し、ナデ調整である。胎土には細砂を多く含み、白色砂粒も認められる。赤褐色を呈する。533は縦位の把手をつけたショッキ形の土器である。外面と口縁部内面を丹彩で装飾する。外面装飾は複雑な文様となっている。文様はかなり剝落しているため、破線で復元したが、残存部分もかすかなため、完全とは言いきれない。文様構成は横帯によって上下を4区画に分割し、各帯ごとに異なる施文を行っている。最下段の帯区は丹で塗りつぶし、2段目は斜格子文、最上段は方形の枠を連接させる。問題は上から2段目の帯区である。厳密な規則性を見い出すのは困難であるが、まったく無意味な文様とも思われない。弧文や三角窓の存在は注意される。今後の検討を待ちたい。土器の調整は丁寧なナデによっている。底部の円盤に円筒形の体部を載せるという接合方法によって成形している。

奥坂遺跡

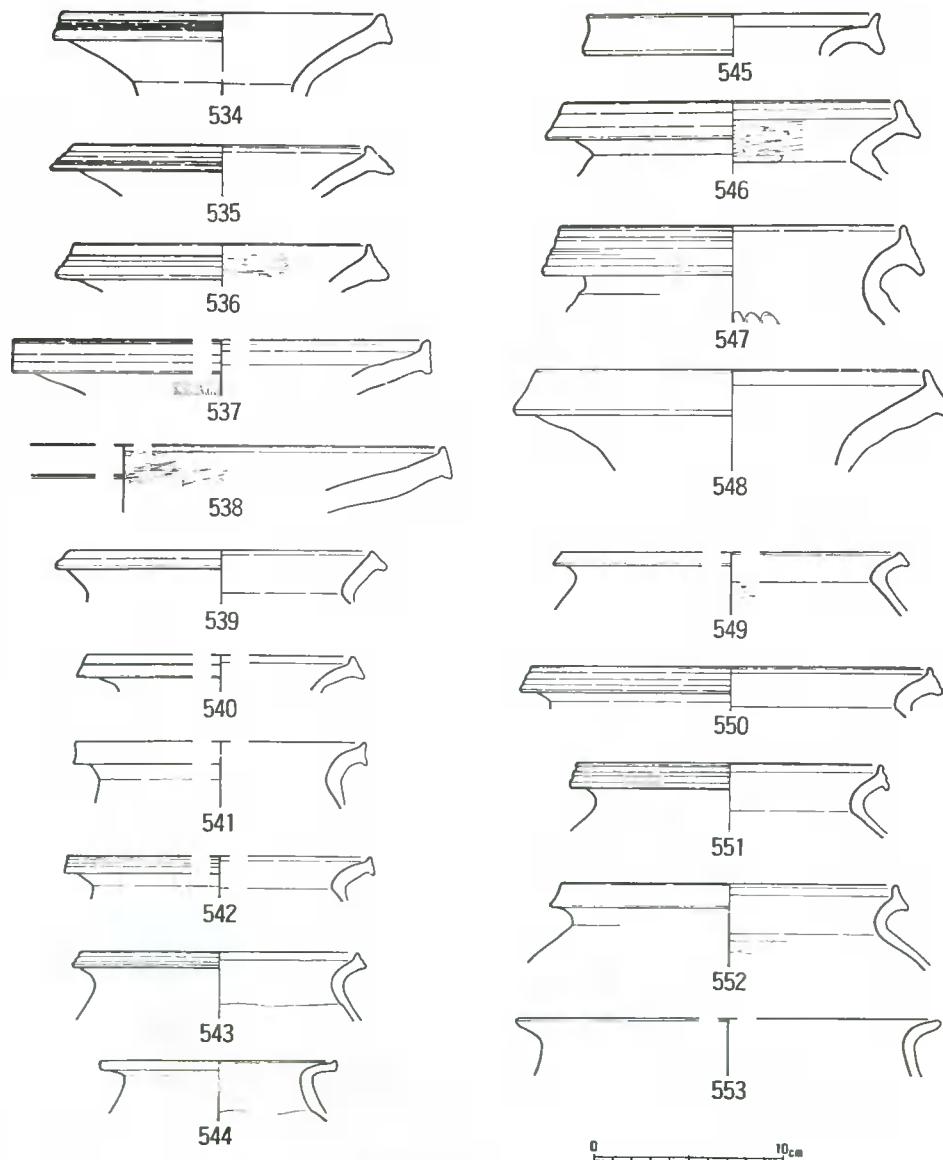
これらの土器の示す年代であるが、No.25Aについては奥・後・IIの後半、No.25Bについても若干古い要素はみられるが、それに近接した時期で、やはり奥・後・IIの範疇に含まれると考へる。したがって、No.25住居址は奥・後・IIを通じて存在したものとみてよい。

最後に埋土出土土器について簡単に述べておく。No.25住居址はNo.113・114・115・118土壤によって切られているが、土壤と住居址の埋土が酷似していたため、住居址と土壤を当初明確に区別できずに掘り下げた。このため、住居址出土土器の中に土壤に含まれていた土器が混入している。図示するにあたって、選別すべきかと考えたが、住居址と土壤の時期に大差がなくて



第103図 No. 25B 住居址出土遺物 (1/4)

峻別が困難であり、かなり主観的になるため断念した。534～538・545～548は壺形土器である。口縁部の形態は変化に富むが、端部の拡張の度合いによって2分される。大きく拡張されるものは後出とみられ、奥・後・Ⅲに属する。口縁部の調整はヨコナデのものがほとんどであるが、内面をヨコナデの後にヘラミガキするもの534・531・538・546がある。538・548は端部のみヨコナデし、外面の大部分はナデている。胎土はいずれも多量の砂粒を含み、534・546・548では白色砂粒が目立つ。539～553は甕形土器である。調整手法をみると、口縁部はいずれ

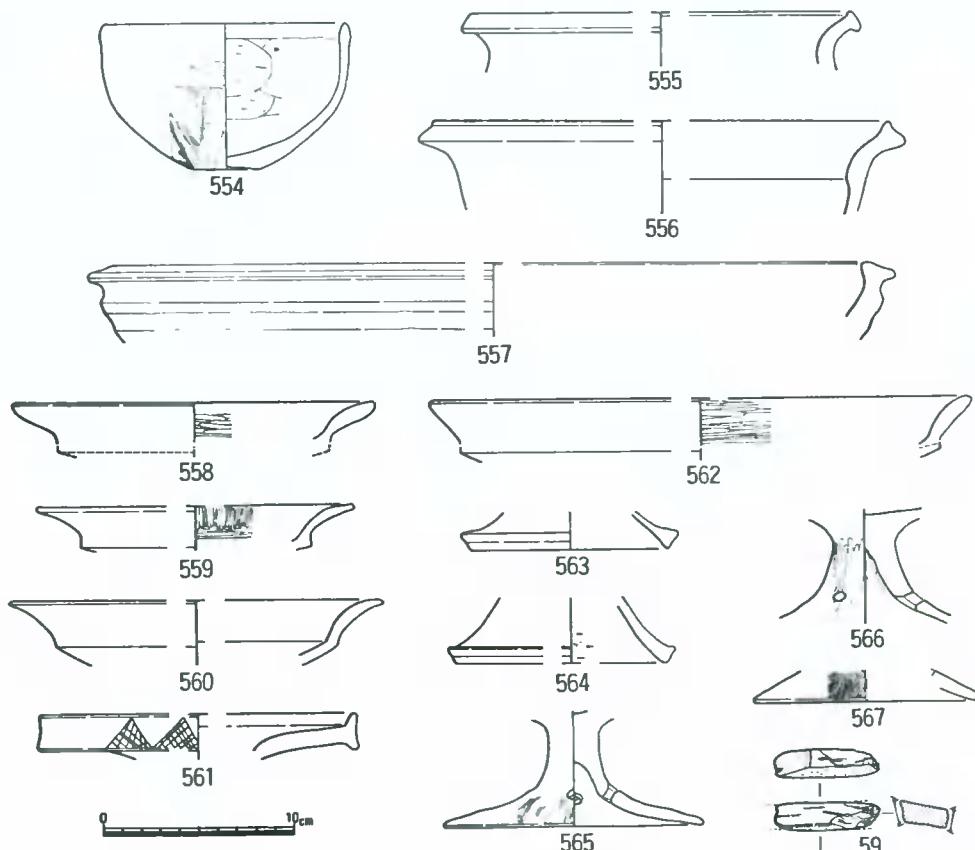


第104図 No. 25 住居址埋土出土遺物 (1) (1/4)

奥坂遺跡

もヨコナデであり、544の内面のみナデで調整している。胴部内面はほとんど頸部上端までヘラケズリされるが、551・552はヘラケズリの後にナデで整えられている。この2点は口縁端部の上方への拡張がとくに大きく、図示したものの中では後出する。胎土はいずれも砂粒・細砂を多量に含み、543・552では白色砂粒を認める。554～557は鉢形土器である。口縁部はいずれもヨコナデ調整される。554・556の体部内面はヘラケズリの後にナデ調整を行っている。いずれの胎土も砂粒・細砂を含み、554・557では特に多い。558～567は高杯形土器である。558・559・562は口縁部外面はヨコナデのままであるが、内面はヘラミガキされる。胎土はいずれも砂粒が多く、560・562・565は白色砂粒を含む。561は器台形土器か。口縁端部はヨコナデ、内面はその後ヘラミガキされる。胎土には砂粒が多く、白色砂粒も目立つ。59は砥石である。

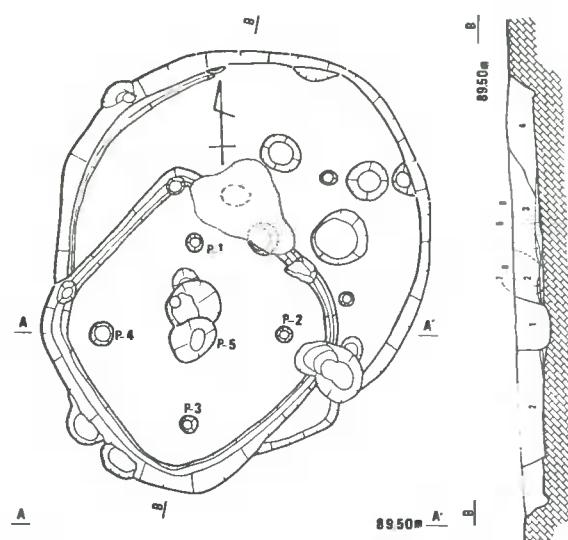
(岡本寛久)



第105図 No. 25 住居址埋土出土遺物 (2) (1/4)

No. 101 住居址 (第106図、図版61-1)

C-7の南東、海拔89.00~89.25m間に位置し、No.150住居址を切って造られた堅穴式住居址である。長軸392cm、短軸(392)cm、床面積12.05m²を測り、円形を呈する。床面海拔高は約88.90mを測る。当初1軒と考え掘り下げを行っていたが、No.101住居址焼土下面よりNo.150住居址の壁体溝が現れたことにより、2軒を確認した。



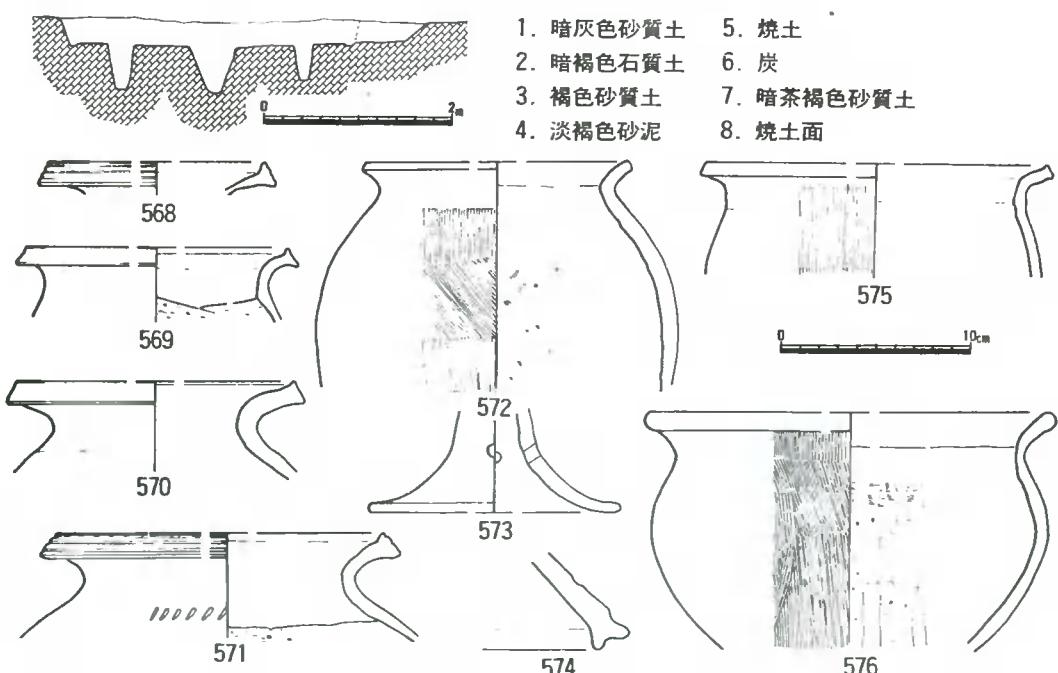
屋内は、一部壁体溝・焼土よりもなり、主柱穴は確認できなかった。

遺物は覆土中が中心であり、甕・壺・鉢・高杯・器台形土器等が出土している。

時期は奥・後・II・古相に比定できる。

No.150 住居址 (第106図、図版61-1)

No.101住居址と同位置にあり、主柱穴4本からなる方形の住居址である。面積は6.56m²と非常に小型の部



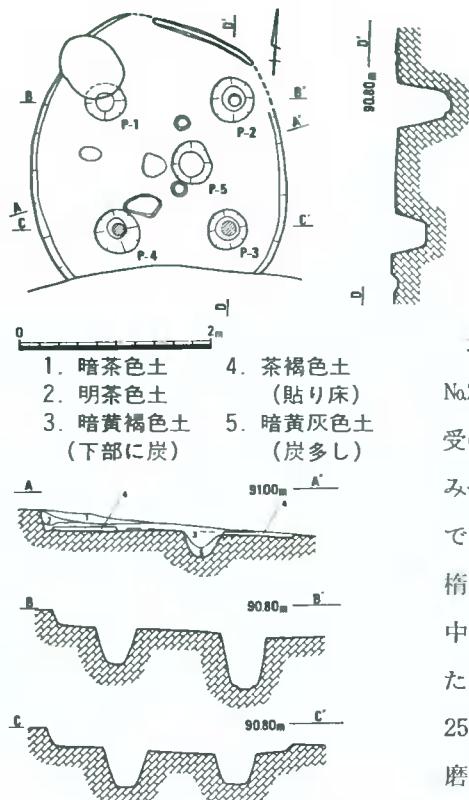
第106図 No. 101・150 住居址 (1/80)・出土遺物 (1/4)

奥坂遺跡

類に属し、No101住居址に切られる。時期は奥・中・Ⅲに比定できる。

(高畠)

No. 34 住居址 (第107図、図版61-2)



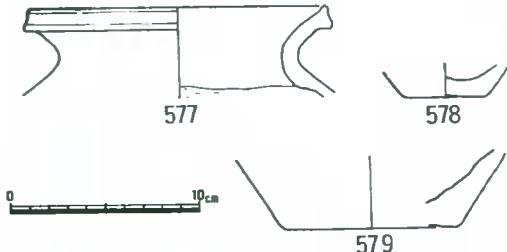
第107図 No. 34 住居址 (1/80)

P-2～4には柱痕跡が認められた。P-5はA-A'断面の土層観察では住居址に伴うものであり、底部の第5層には炭が多く含まれていた。この土壤は、住居址の中央よりも、多少東に寄って存在するが、一般に中央ピットと称されている土壤と類似点が多い。P-5の南および北側に検出された小ピットは、いずれも深さ13cmほどのもので、P-5と何らかの関係を持つ可能性もある。遺構的には住居址の拡張等の痕跡は示さない。

遺物はP-5上部の第3層中に、図示した577の甕形土器1個体分近くが、細片で出土している他は少なく、また図示できるものもない。577は口縁端部をわずかに肥厚させ、端面にヨコナデを加えて、窪みがつけられている。また頸部をわずかに形成し、内面のヘラケズリは頸部下位に施されている。

以上の特徴から、これらの土器は弥生後期中葉に位置づけられ、出土が住居址床面に近いレベルであることから、住居址の時期もほぼ、奥・後・Ⅱに比定できよう。

(柳瀬)



第108図 No. 34 住居址出土遺物 (1/4)

北東に面した緩斜面に位置し、No.38建物P-3およびNo.29住居址に切られて存在する。遺構は著しい削平を受け、斜面上部では床面までの深さが約20cmの残存をみせるが、下部ではかろうじて平面形態がわかる程度であった。平面形態は、長軸推定330cm、短軸265cmの橢円形を呈す。床面には約5cmの貼り床が認められ、中央および中央寄りの2か所に焼土面が存在する。また、P-4近くの床面に接して、最大長40cm、最大幅25cm、厚さ20cmの石が検出された。石の表面には特に磨いたような痕跡は残さないが、何かの作業台として使用されたものであろう。床面には7個のピットを検出したが、そのうちの4個(P-1～4)は柱穴であり、

— 170 —

(2) 建物

No. 28 建物(第109図)

D・C-6中央、海拔90.60~90.80m間に位置し等高線に斜位の方向に立地する。この場所には、No.43・28・61・27建物が南北一列に並び検出されている。他の1×1間に比較して、No.28建物が2×1間と大型の規模を有している。

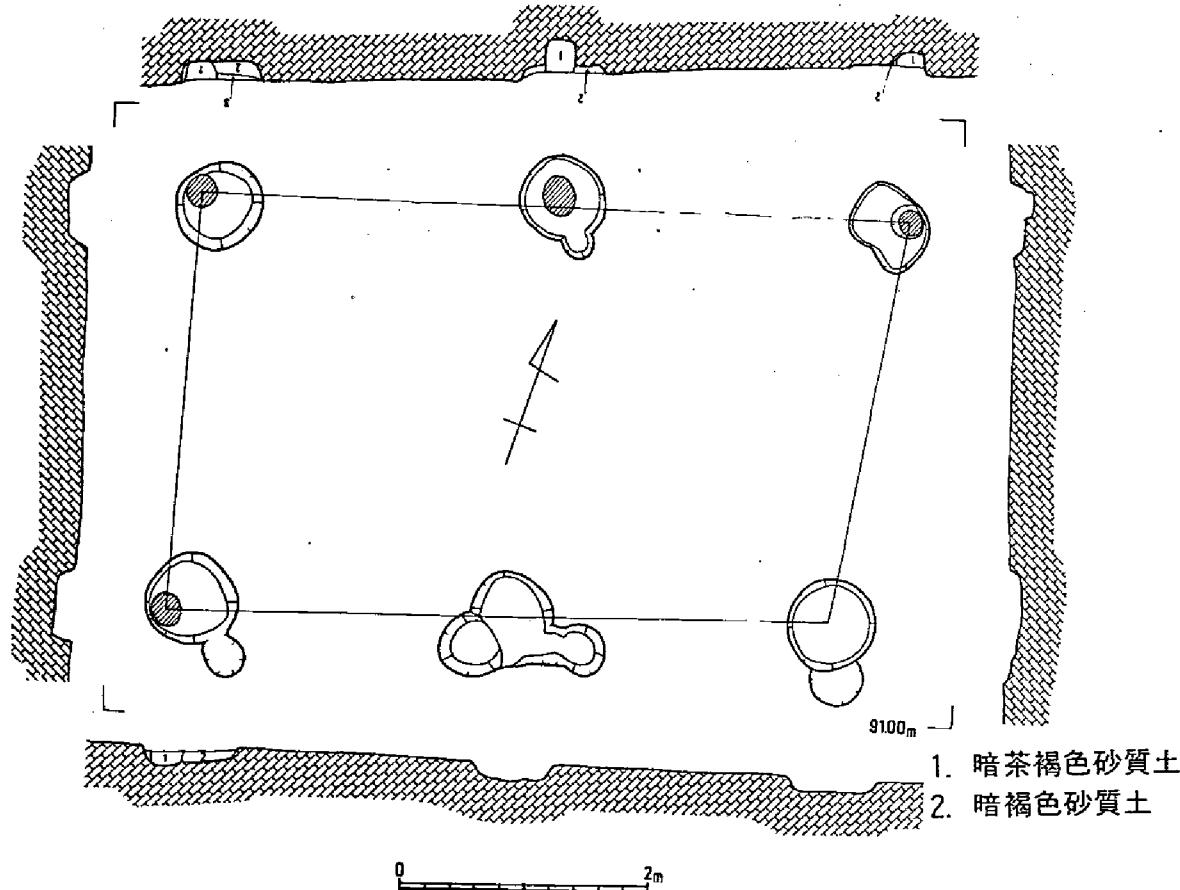
建物の平面形は東に移動し、平行四辺形を呈示している。桁行564cm、梁間332cm、平面積18.72m²を測る。

柱穴6本のうち4本に約20cm前後の柱痕が残り、掘り方底には柱の直径分が掘り込まれている。掘り方直径は約70cm前後を中心に掘られており、深さにおいては後世の削平を受け比較的浅く、15cm前後の柱穴になっている。

埋土は弥生時代のものと考えられるが、柱穴内よりの出土遺物がなく、時期決定は困難である。しかし、距離的にはNo.23・20住居址とは近接しない時期を考えておきたい。たとえば奥・後・IIなどである。

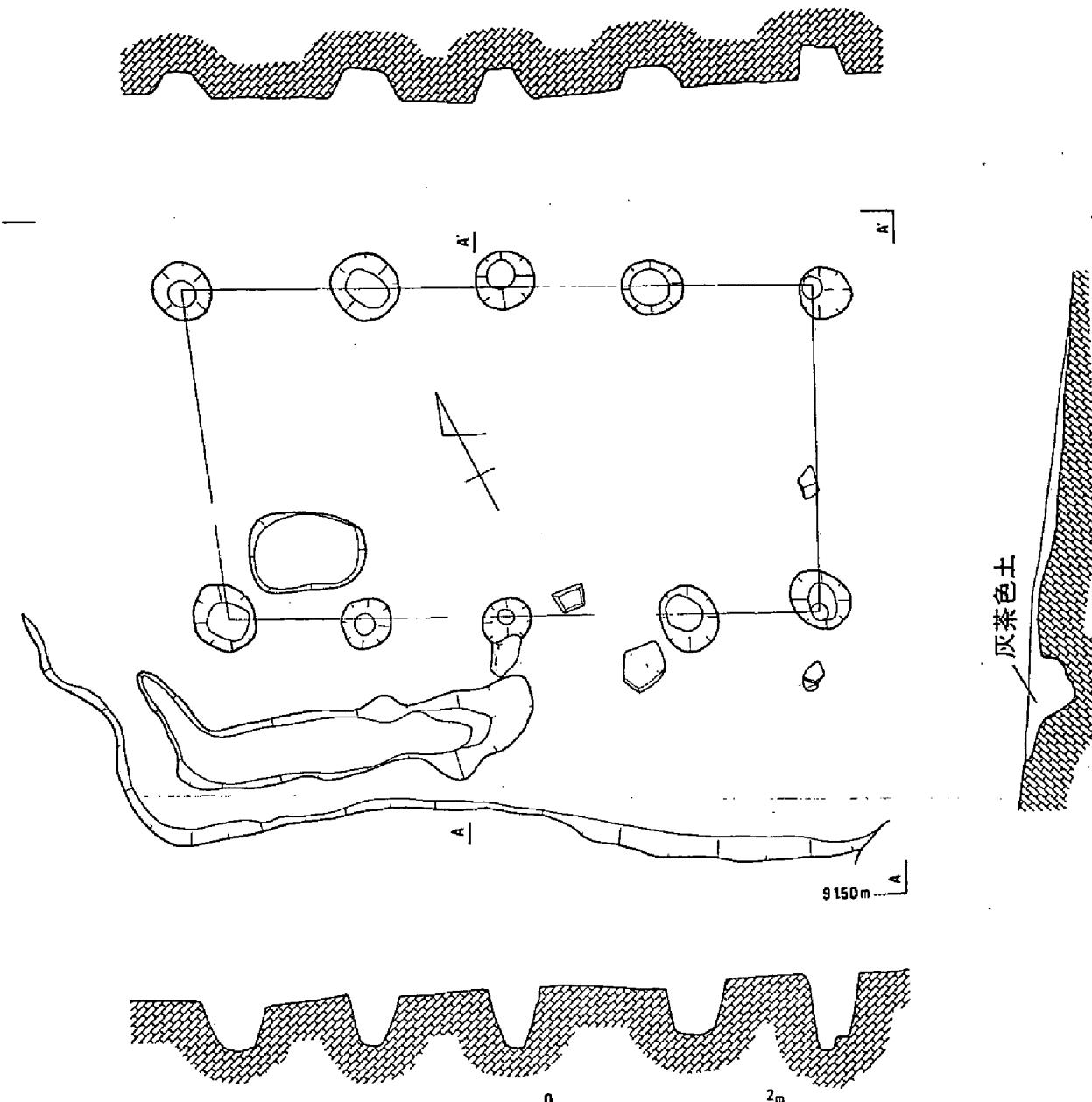
No. 93 建物(第110・111図・図版48-2)

G-2の北東、海拔91.00~91.50m間に位置し、等高線に平行して立地している。基本的には建物と山側の溝により構成されており、両遺構で8×6mの範囲を占有している。「L」字形



第109図 No. 28 建物 (1/80)

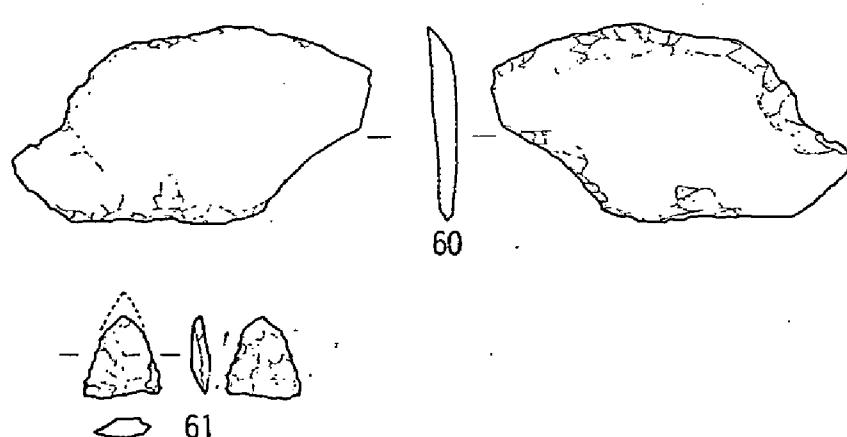
奥坂遺跡



第110図 No. 93 建物 (1/80)

の区画構を設定し、その内側に 4×2 間の掘立柱建物が東西方向に存在するわけである。

桁行 566cm、梁間 300cm、面積約 17m^2 を測り、比較的安定した柱の間隔を有し、120~170cm を測る。柱穴直径は 50cm を前後するものが多く、深さは斜面上位が約 30cm 前後、斜面下位では 40cm を前後するものが多い。また、南西端に $105 \times 70\text{cm}$ 、深さ 22cm の長方形土壙が存在する。方向、位置等より付設土壙の可能性が考えられる。



第111図 No. 93 建物出土遺物 (1/2)

第5章 第1節 奥坂遺跡A地区

梁部の1間は弥生時代建物に共通点をみい出せるが、桁行間の狭い距離が若干気にかかり、あわせて柱穴内の出土遺物が皆無でもあり、時期決定にはいたらない。 (高畠)

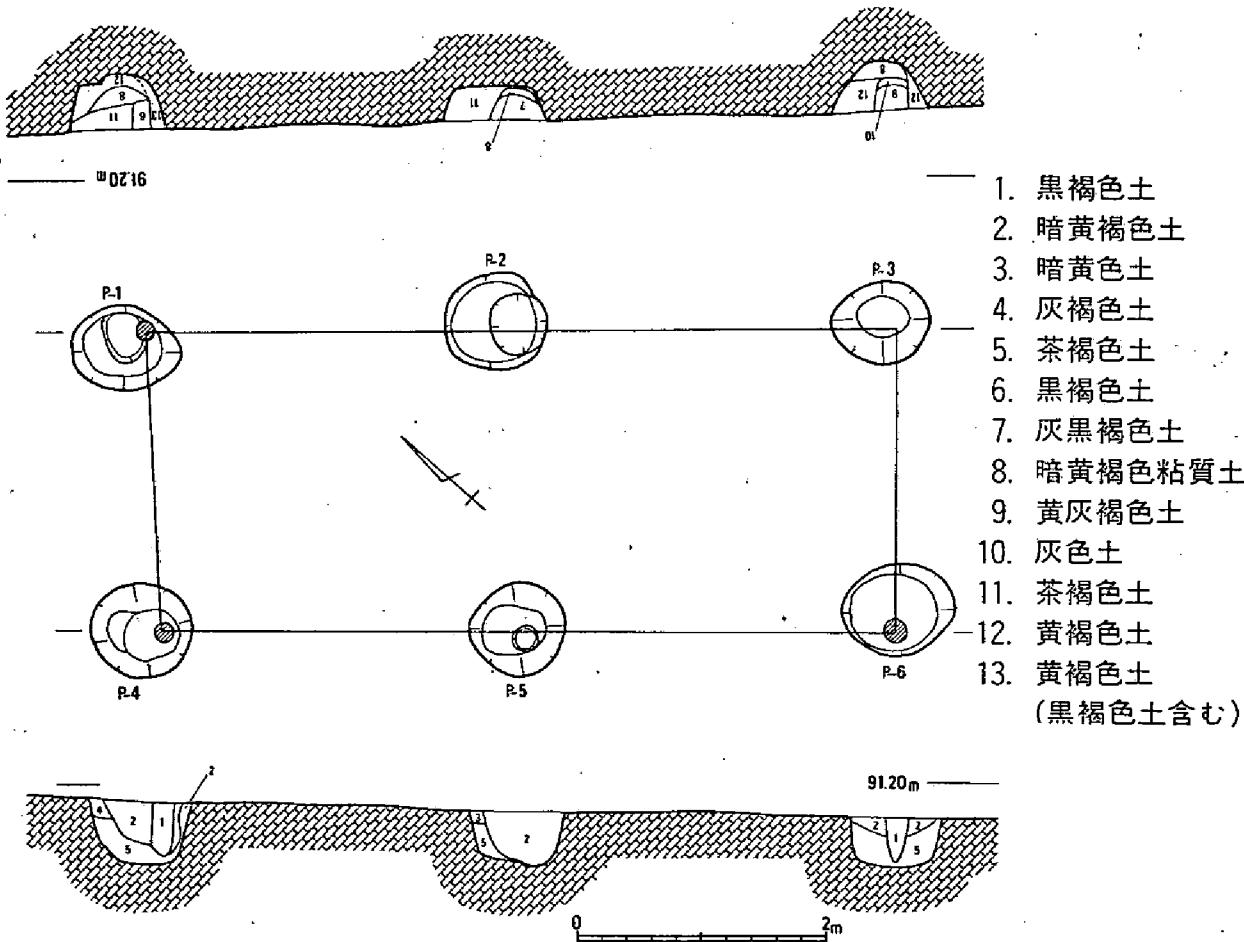
No. 38 建 物 (第112図、図版83-1)

北東～東向きの緩斜面に位置する梁行1間、桁行2間の建物である。

各柱穴の掘り方は、そのほとんどが桁行方向（等高線に平行方向）に長い橢円形を呈している。P-1は長軸約90cm、短軸約75cm、底部標高90.36m、P-2は同様に75×75cm・90.47m、P-3は80×65cm・90.30m、P-4は83×75cm・90.58m、P-5は80×75cm・90.56m、P-6は90×75cm・90.53mを測る。深さは現況で30～50cmを測る。

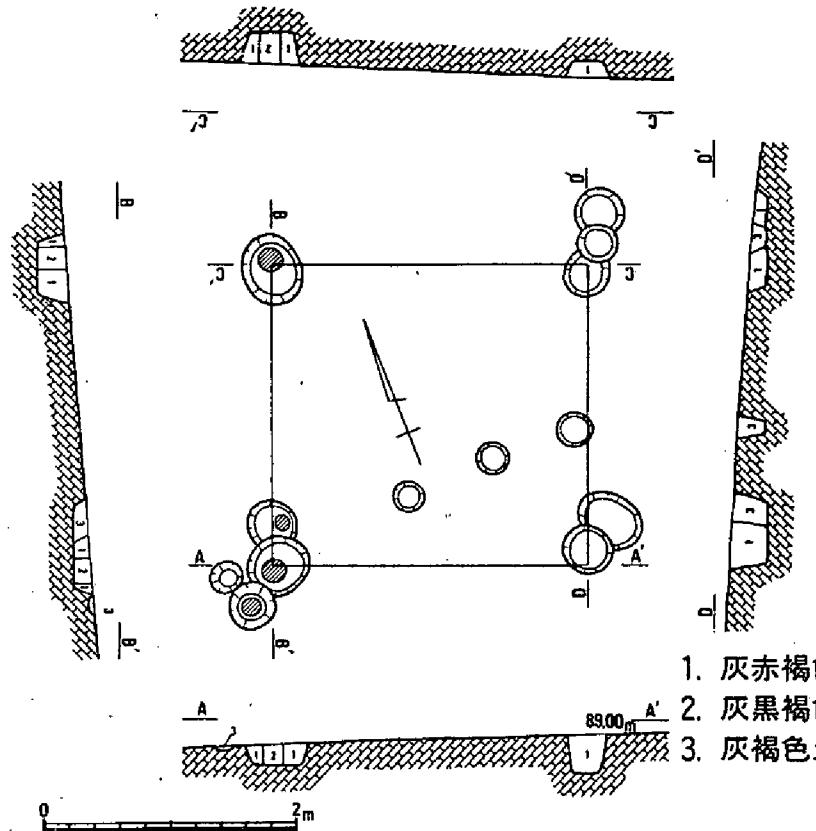
P-1・4・6には径16～18cmの柱痕跡（黒褐色土）を、またP-5は掘り方底に同様の窪みを残す。P-2には平・断面ともに掘り方が観察され、P-5も断面にはその痕跡がある。P-3は柱の位置と思われるところの約30cm間に、灰色土または灰褐色土の堆積がみられ、柱を抜かれた可能性を示す。柱痕跡の残る梁間のP-1・4間は240cm、桁行のP-4・5間とP-5・6間はどちらも290cmを測る。

遺物はP-3から土器が数片出土しているだけである。図示できるほどの良好な土器はないが、形状や胎土からは弥生後期前半の可能性が強い。遺構の切り合い関係でいえば、P-3が



第112図 No. 38 建 物 (1/80)

奥坂遺跡



第113図 No. 53 建物 (1/80)

No.34住居址を切り込んで存在するため、No.34住居址よりも新しく、奥・後・II～IIIぐらいに存在したと思われる。（柳瀬）

No. 53 建物 (第113図)

奥坂遺跡A地区の東端で検出した建物である。B-9の海拔約88.75mを中心とした地点に位置し、柱穴の検出面からの深さは極めて浅い。この建物は1間×1間の小規模なもので、北西に位置する柱穴から時計回りに250cm, 243cm, 250cm, 247cmの柱穴間の距離を測る。西側で検出した2か所の柱穴には、灰黒

褐色を呈する柱痕跡が認められた。柱穴の検出面からの深さは、約15cmから約30cmと揃っていないが、底部のレベルは北西に位置する柱穴が海拔約88.35mと深くなっているものの、残る3か所の柱穴は海拔約88.60mとなっている。出土遺物には土器片を検出したが、極めて小破片で実測することができなかった。内外面の調整と胎土や色調から、この土器片は奥・後・IIまたは奥・後・IIIに比定されるであろう。

（福田）

(3) 土 壤

No. 119 土 壤 (第114～119図)

A-4のほぼ中央部で検出した土壙である。海拔約88.75～89.00mの間に位置し、西端部分のNo.124建物の柱穴によって新しく切られている。平面形は橢円形に近い形態を呈し、長径322cm、短径225cmを測り、検出面からの深さは70cmになっている。土壙内には暗茶褐色土と暗茶灰色土が堆積しており、床面から浮いた状態で多量の土器片が出土している。

580から584は、上東式土器の典型的な形態を呈する「長頸壺」と呼ばれる壺形土器の口縁部から頸部に至る破片である。緩やかに外湾して斜め上方へ立ち上がった口縁の端部は、斜め上方へわずかに拡張して、外面に3条から7条にもおよぶ凹線を施した後に、ハケ状工具またはヘラ状工具の先端で刺突した文様を描いている。外面の頸部には、縦方向にハケメを施した後に螺旋を描く凹線をめぐらせており、内面は全体にヨコナデを施しているが、指頭圧痕や頸部の下位に横方向のヘラケズリが認められるものも存在する。

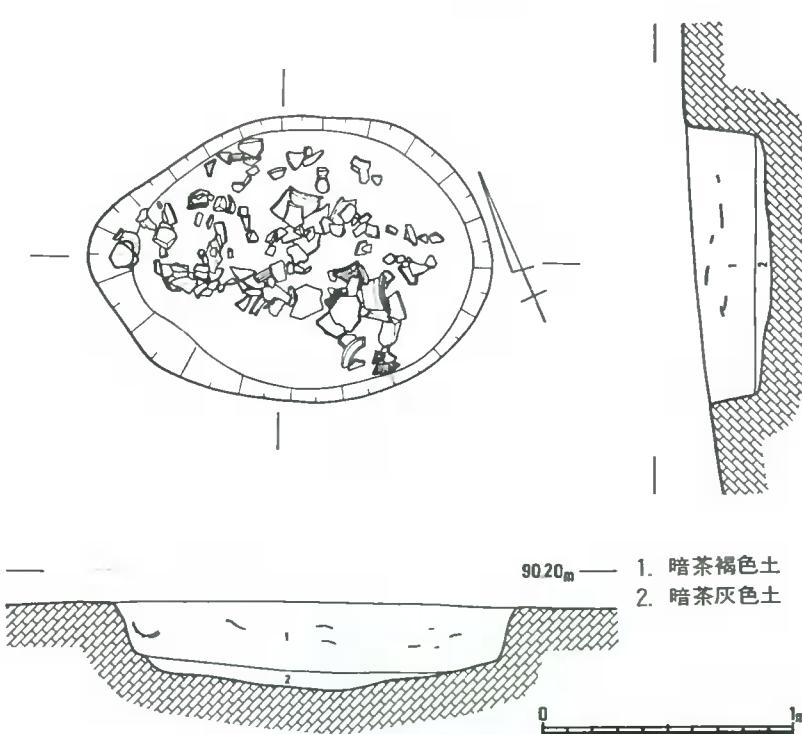
585は大型壺形土器の平底を呈する底部である。外面は縦方向のヘラミガキを施し、内面は縦または斜め方向のヘラケズリを行っている。内面の底部には、指頭圧痕も認められる。

586と587は、小型壺形土器の頸部から底部の破片である。587の外面の胴部上位には縦または斜め方向のハケメを施し、下位には縦方向のヘラミガキが認められる。586の内面の胴部にはヘラケズリが施され、上位は横方向を示すが下位は縦方向になっている。587の内面の胴部上位には指頭圧痕が顕著に認められ、下位には横方向のヘラケズリを施している。

588から594は、壺形土器の口縁部破片である。外湾して斜め上方へ立ち上がった口縁の端部は、わずかに拡張して外面の中央分部が浅く窪んでいるものが多い。口縁部から頸部にかけては、内外面とも全体にヨコナデを施している。外面の頸部下位には、縦方向のナデを施しているものと縦方向のハケメが認められるものが存在する。

595から615は、甕形土器の口縁部から胴部の破片である。口縁部はいずれも全体にヨコナデを施しているが、外面の胴部にはヘラミガキやハケメが認められるものも存在する。内面の頸部直下には指頭圧痕が残存しているものも認められるが、内面の胴部はいずれも横方向のヘラケズリを行っている。

620から629は、いずれも平底を呈する壺形土器の底部である。外面は縦方向のナデまたは縦

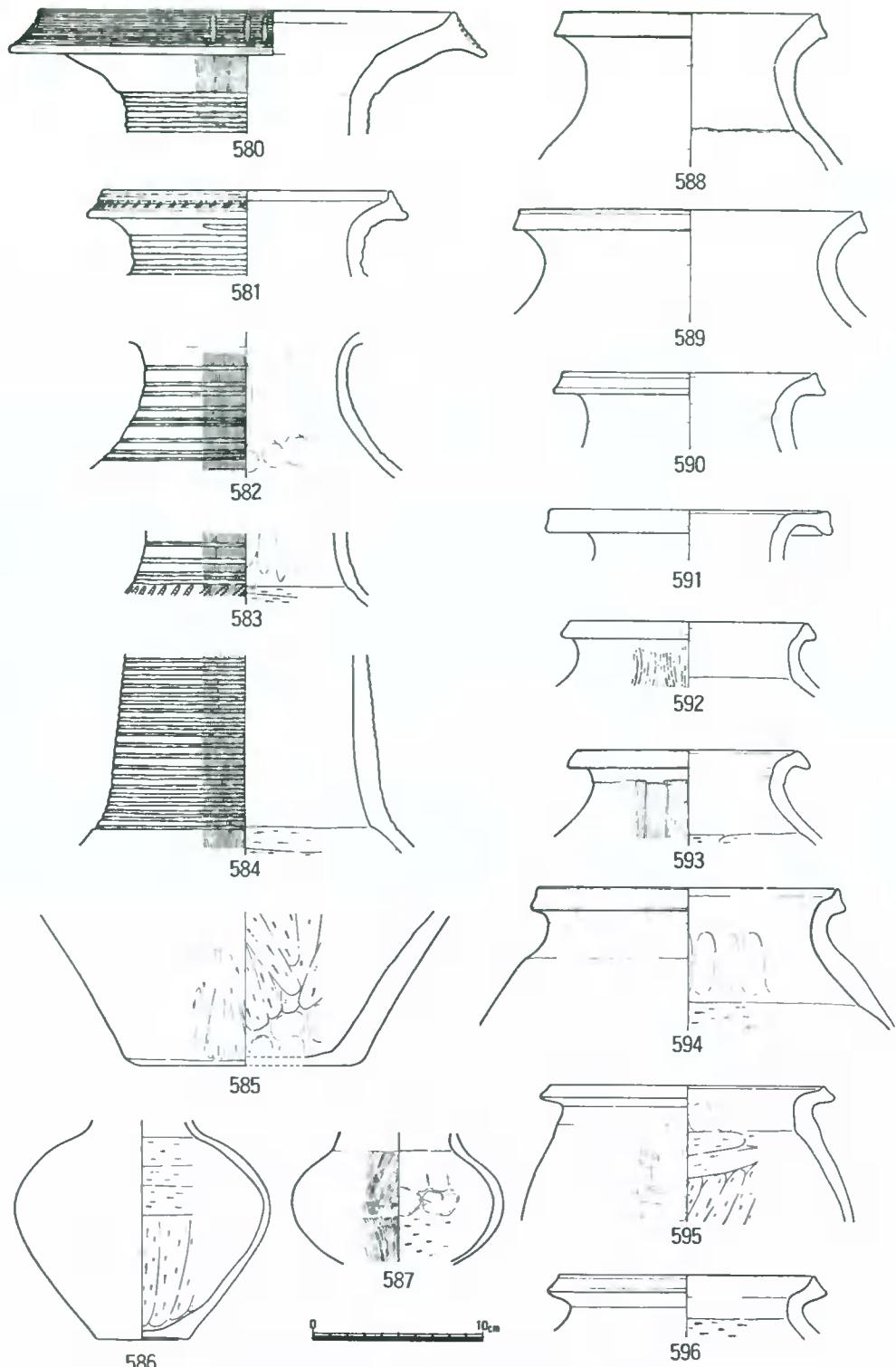


第114図 No. 119 土 壤 (1/30)

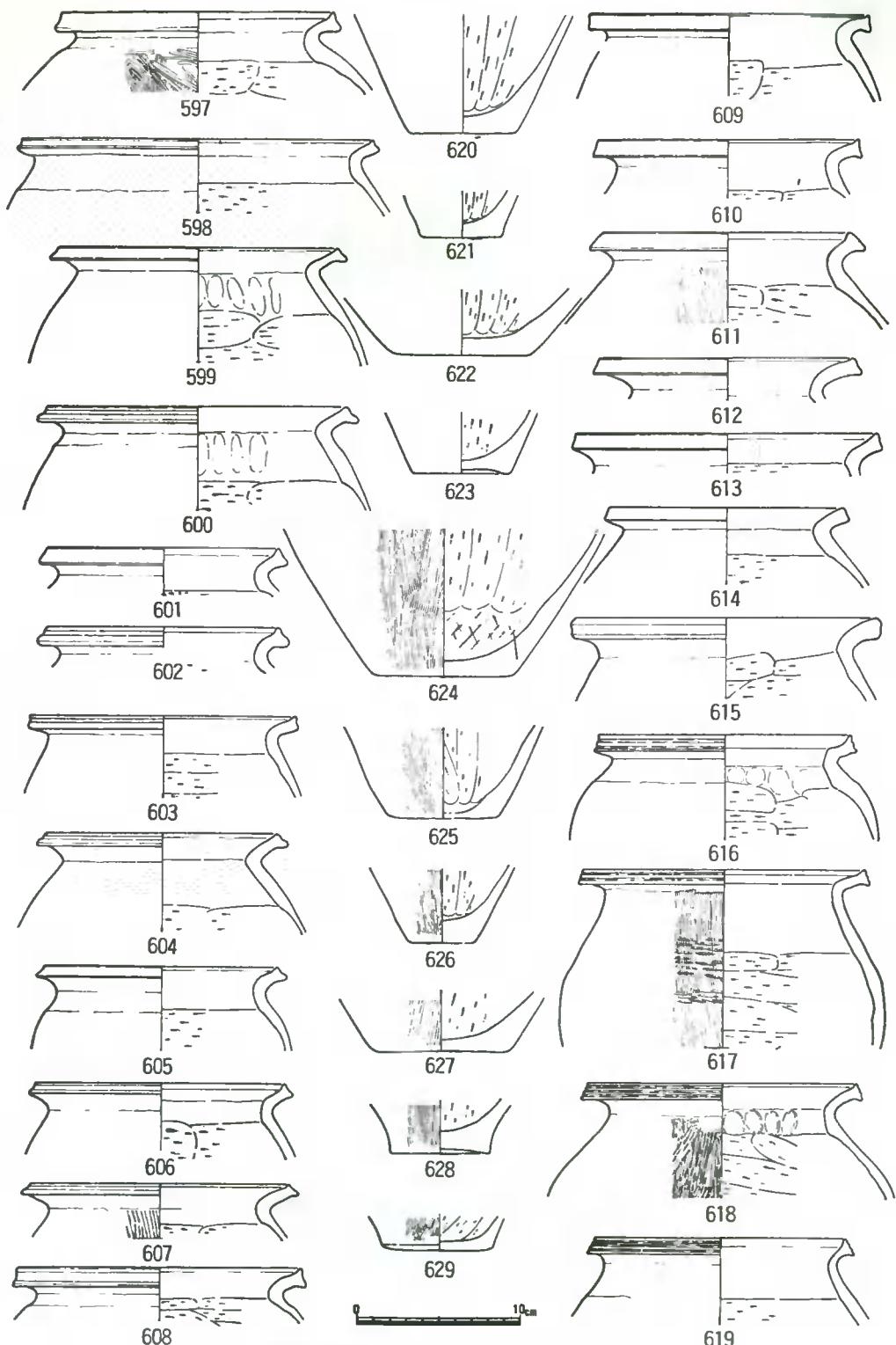
方向のハケメを施しているが、内面はいずれも縦方向の粗いヘラケズリを行っている。これらの底部には、外面に黒斑を有するものが多いた。

616から619は、口縁部の外面に凹線が存在する比較的器壁の薄い甕形土器であ

奥坂遺跡

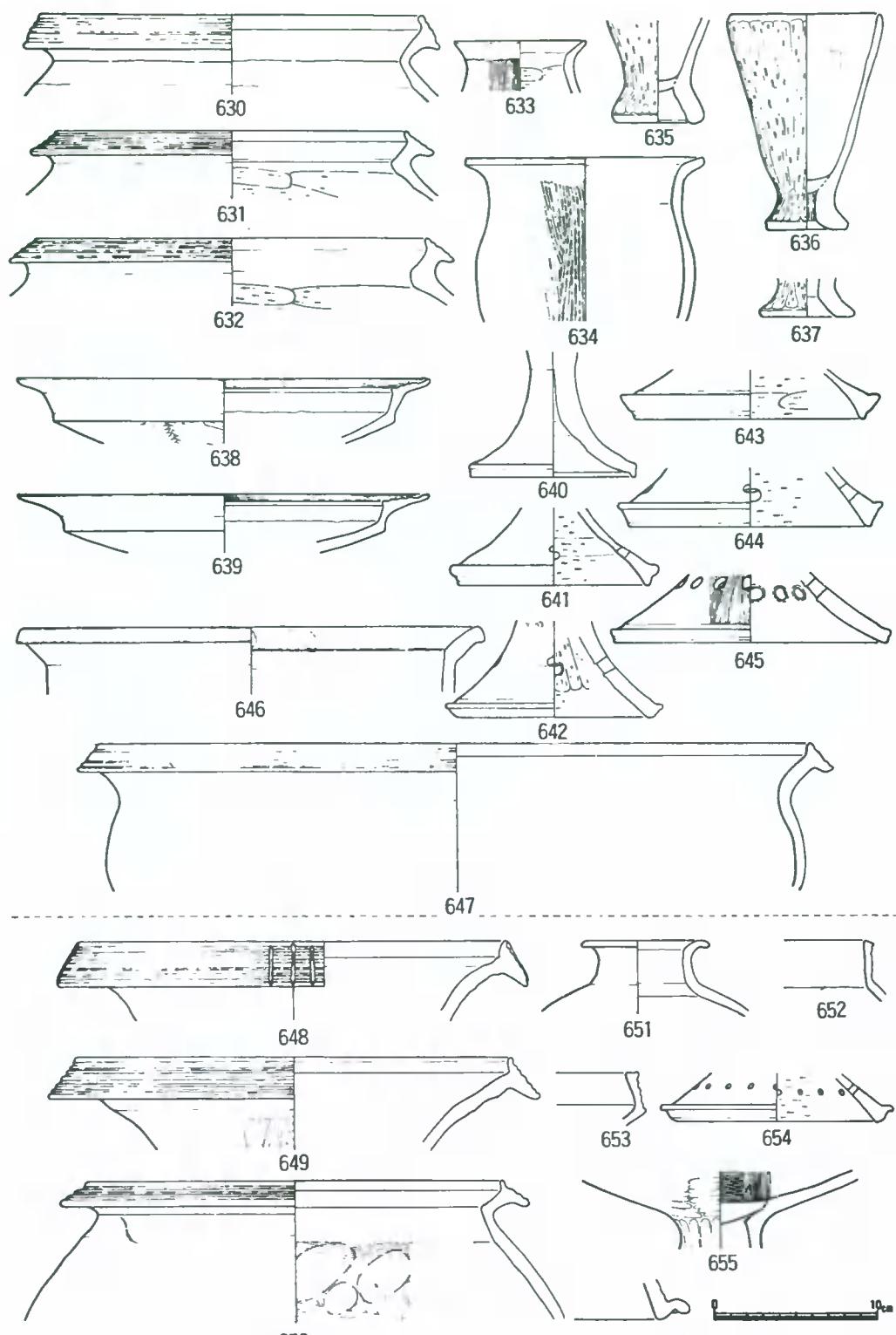


第115図 No. 119 土壌出土遺物(1)(1/4)



第116図 No. 119 土壌出土遺物 (2) (1/4)

奥坂遺跡



第117図 No. 119 土壌出土遺物 (3) (1/4)

る。口縁部から頸部にかけては、内外面とも全体にヨコナデを施しているが、内面の頸部に指頭圧痕が残存するものも認められる。外面の胴部には縦または斜め方向の粗いハケメを施しているものが存在するが、617には横方向のタタキメがかすかに確認できる。内面の胴部は、いずれも横方向のヘラケズリを施している。

630から632は、大型甕形土器の口縁部である。斜め上方へ短く屈曲した端部は、さらに折り返されて外面に4条または5条の凹線を有する。口縁部は、内外面とも全体にヨコナデを施し、内面の頸部直下には横方向のヘラケズリが認められる。

633と634は、口縁部が緩やかに外湾して端部を丸く仕上げている甕形土器である。口縁部はどちらもヨコナデを施しているが、外面の頸部下位には縦方向の粗いハケメが認められる。

635から637は、一般に「製塩土器」と呼ばれている台付深鉢形土器である。口縁部から胴部まで連続して製作し、内面の底部に円板を充填している。口縁部は直線的に斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。外面には縦方向の粗いヘラケズリを施し、内面には指頭によるナデを行っている。636の計測値は、口径9.1cm、器高13.0cm、高台径4.8cmである。

638と639は、高杯形土器の杯部破片である。肥厚しながら斜め上方へ短く張り出した口縁の端部は、大きく拡張して上面に4条の凹線が認められる。口縁部はどちらも全体にヨコナデを施しているが、638の杯部外面には蜘蛛の巣状に描いたヘラミガキが存在する。

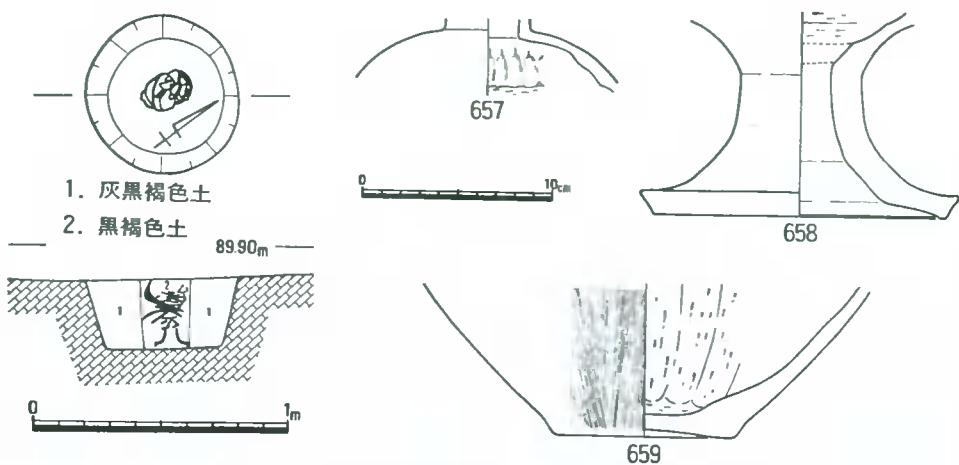
640から645は、高杯形土器の脚部破片である。「ハ」字状に開いた脚端部は、いずれも拡張して立ち上がりが認められる。円孔は4か所に存在するのが一般的であるが、645のように数多く認められるものも存在する。脚端部はいずれもヨコナデを施し、内面は横または縦方向のナデや縦方向のハケメを施しているもの以外に、縦方向のヘラミガキを行っているものも存在する。

646と647は、鉢形土器の破片である。646の内面の口縁部には指頭圧痕が認められ、内面の体部には横方向のハケメが存在する。647の口縁端部は、斜め上下に大きく拡張して外面に3条の凹線を有する。器表面の調整は、内外面とも全体にヨコナデを施している。

以上に説明した土器は、奥・後・Iの古相のものから奥・後・Iの新相のものまで混在した状況を呈している。

なお648から656の壺形土器、甕形土器、高杯形土器、器台形土器の破片は、奥・中・IIIの新相に比定されるものである。調整が観察できる大型の壺形土器や甕形土器の口縁端部は、折り返されて外面に3条から6条の凹線を有し、648には3本の棒状浮文も存在する。650の内面の胴部は、指頭圧痕の上面に横または斜め方向のハケメを施している。653の高杯形土器の口縁部外面には、5条の凹線が認められる。654の「ハ」字状に開いた高杯形土器の脚端部は肥厚して立ち上がり、中位に外から内方向に刺突した多数の円孔が存在する。

奥坂遺跡



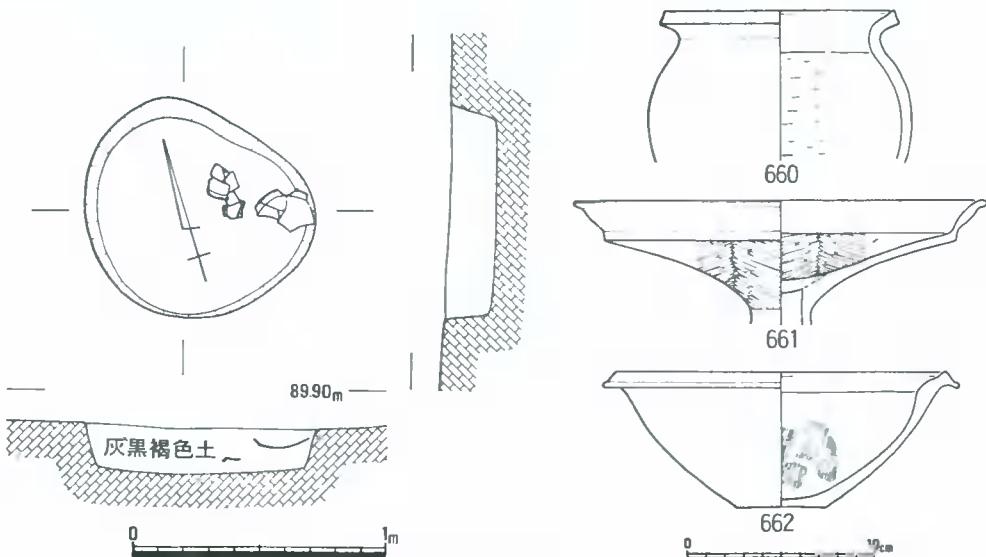
第118図 No. 112 土壙 (1/30)・出土遺物 (1/4)

No. 112 土 壙 (第118図)

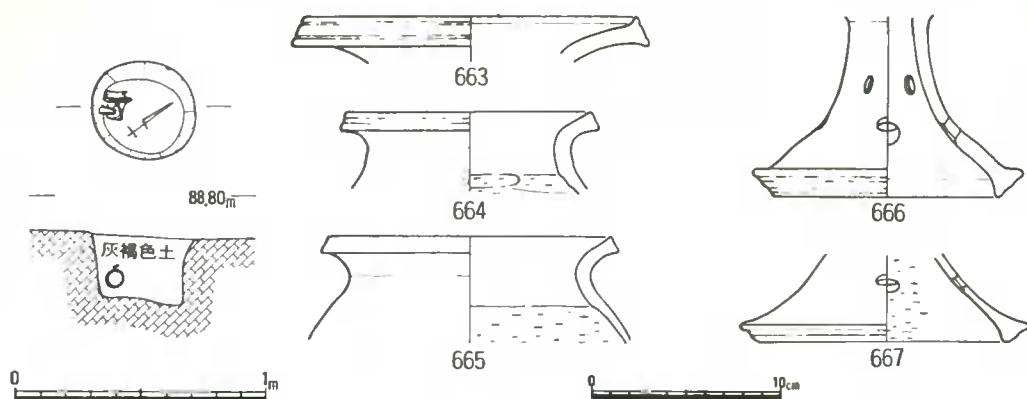
B-8で検出した柱穴と推定される小規模な土壙である。検出面からの深さは約28cmを測り、柱痕と思われる黒褐色土内から奥・後・IIの新相に比定される土器片が出土している。

No. 8 土 壙 (第119図)

B-8で検出した小規模な土壙で、海拔88.75mの等高線上に位置する。検出面での最大径は約92cmを測り、検出面からの深さは約18cmである。土壙内には灰黒褐色土が堆積し、奥・後・IIの古相に比定できる甕形土器、高杯形土器、鉢形土器が出土している。



第119図 No. 8 土壙 (1/30)・出土遺物 (1/4)



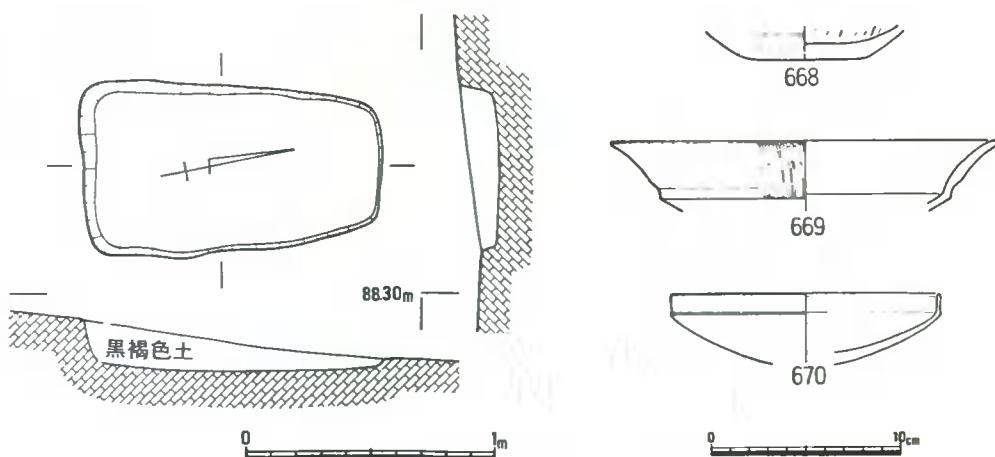
第120図 No. 98 土壙 (1/30)・出土遺物 (1/4)

No. 98 土 壙 (第120図)

B-9の西端で検出した柱穴と推定される小規模な土壙である。平面形は円形に近い形態を呈し、検出面での最大径は約44cmを測る。検出面からの深さは約24cmを測り、土壙内には灰褐色土が堆積していた。出土遺物としては、底部から浮いた状態で甕形土器と高杯形土器が検出され、奥・後・Ⅱの古相に比定されるであろう。

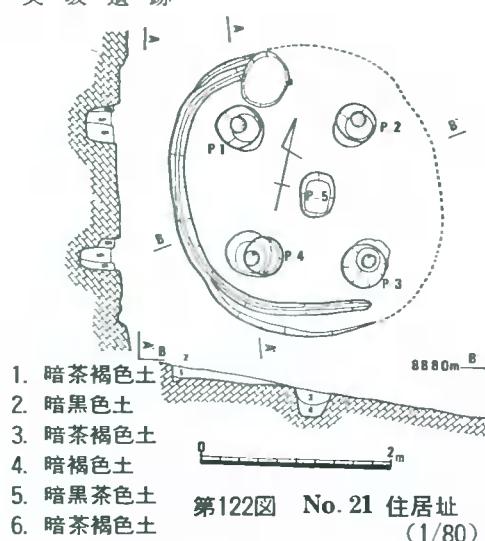
No. 9 土 壙 (第121図)

C-8のNo. 4住居址とNo. 10袋状土壙の中間で検出した土壙である。平面形は隅丸長方形を呈し、長径約120cm、短径約70cmを測る。この土壙は斜面に位置するために検出面からの深さは揃っていないが、底部はほぼ水平で黒褐色土が堆積していた。出土遺物としては、奥・後・Ⅲの古相に比定される土器片を確認している。
(福田)



第121図 No. 9 土壙 (1/30)・出土遺物 (1/4)

奥坂遺跡



No. 21 住居址 (第122図、図版67-2)

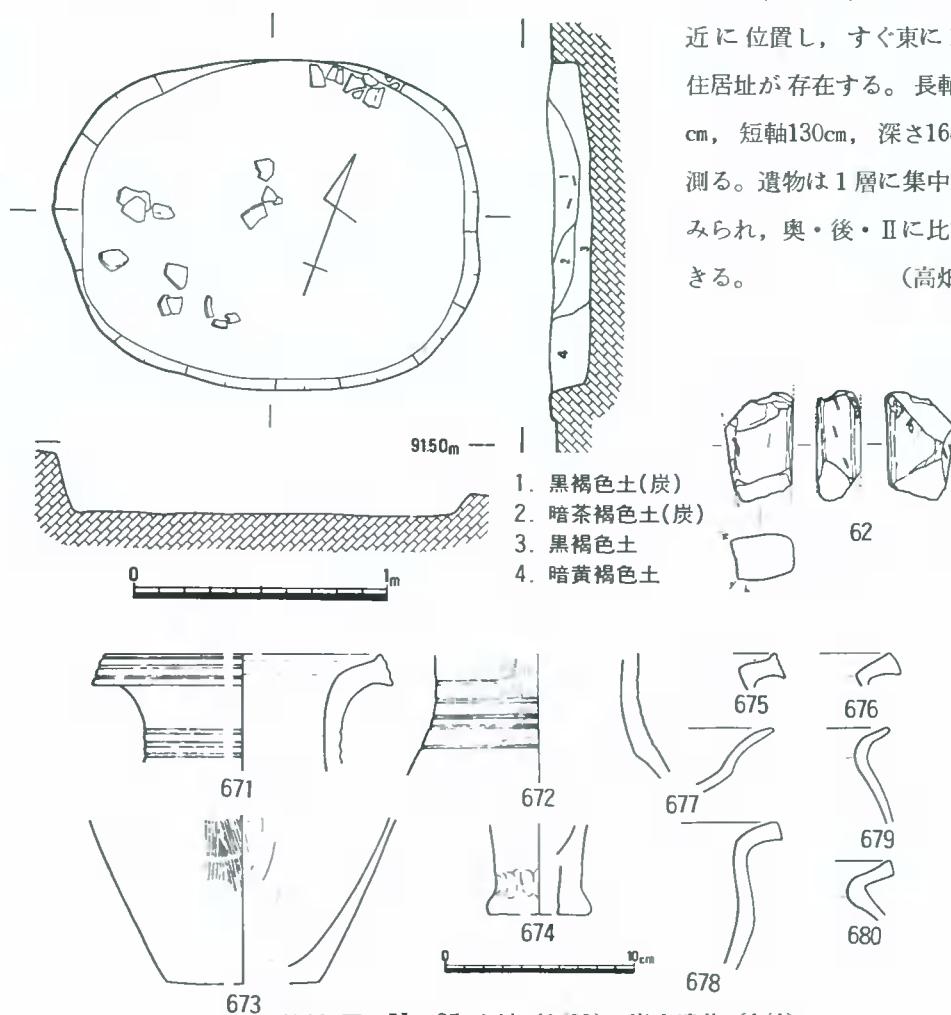
D-7の北側、海拔88.50~88.89mに位置し、斜面下位が自然流土により半壊した竪穴式住居址である。長軸305cm、短軸283cm、床面積約6.78m²、床面海拔高は88.62mを測る。

屋内は壁体溝・主柱穴・中央穴からなり、P-1~P-4が主柱穴を構成し、P-5が中央穴となる。建て替えが行われているが、拡張の傾向は示さない。時期は不明である。

No. 35 土 壤 (第123図)

D-5北東、海拔91.20m付近に位置し、すぐ東にNo.29住居址が存在する。長軸168cm、短軸130cm、深さ16cmを測る。遺物は1層に集中してみられ、奥・後・Ⅱに比定できる。

(高畠)

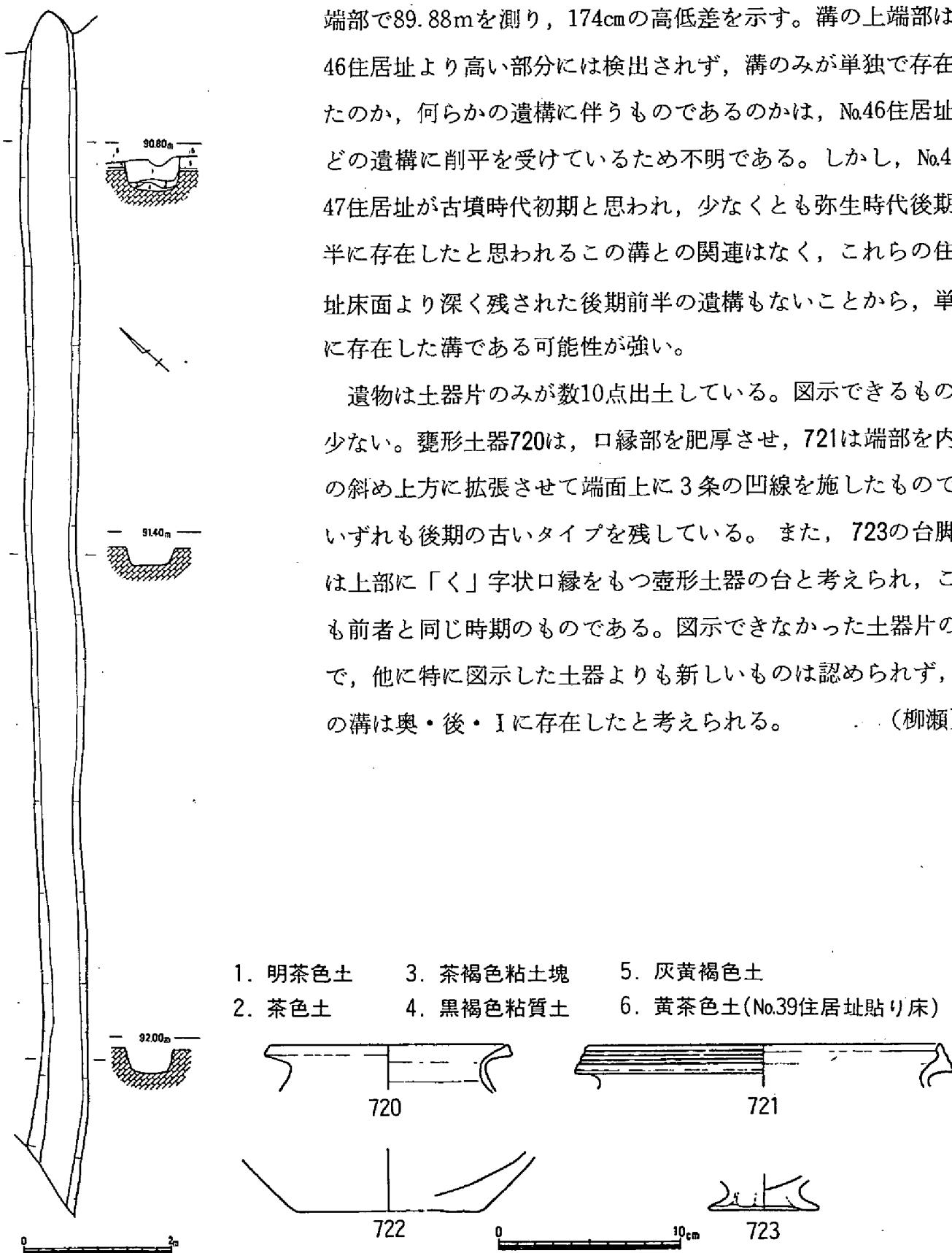


奥坂遺跡

No. 135 溝（第132図）

北東向きの緩斜面の等高線にはほぼ直交して、約820cmにわたって検出された。幅約70cm、深さ約20cmの直線的な溝である。上端部をNo.46、47住居址で、下端部をNo.39住居址および中世の段状遺構で切断されている。底の標高は上端部で91.62m、下端部で89.88mを測り、174cmの高低差を示す。溝の上端部はNo.46住居址より高い部分には検出されず、溝のみが単独で存在したのか、何らかの遺構に伴うものであるのかは、No.46住居址などの遺構に削平を受けているため不明である。しかし、No.46、47住居址が古墳時代初期と思われ、少なくとも弥生時代後期前半に存在したと思われるこの溝との関連はなく、これらの住居址床面より深く残された後期前半の遺構もないことから、単独に存在した溝である可能性が強い。

遺物は土器片のみが数10点出土している。図示できるものは少ない。甕形土器720は、口縁部を肥厚させ、721は端部を内側の斜め上方に拡張させて端面上に3条の凹線を施したもので、いずれも後期の古いタイプを残している。また、723の台脚部は上部に「く」字状口縁をもつ壺形土器の台と考えられ、これも前者と同じ時期のものである。図示できなかった土器片の中で、他に特に図示した土器よりも新しいものは認められず、この溝は奥・後・Iに存在したと考えられる。（柳瀬）



第132図 No. 135溝 (1/100)・出土遺物 (1/4)

No. 15 溝 (第130図)

B-7の北東隅で検出した幅の狭い溝である。海拔89.00~89.50mの間に位置し、ほぼ東西方を示していた。残存する長さは約600cmを測り、検出面での最大幅は約26cmと極めて狭い。この溝の検出面からの深さは、もっとも深い地点で約12cmである。断面形は上に開いた浅い「U」字形を呈し、内部には黒褐色土が堆積していた。底部は西から東方向に傾斜し、痕跡を留める範囲内で約25cmの高低差が認められた。

このNo.15溝は、東端部分でNo.13住居址と重複していた。遺構検出作業の段階で精査した結果、No.15溝がNo.13住居址を新しく切っていた。ところが、溝内から出土した遺物は、逆にNo.13住居址よりも古い時期の奥・後・Ⅱの新相に比定される土器ばかりであった。

713と714は、同一個体の壺形土器の破片である。口縁端部は拡張して、外面に3条の凹線を有する。外面の頸部には、縦方向のハケメの上面に凹線を施している。715は、甕形土器の口縁部破片である。口縁端部の外面には2条の凹線を有し、全体にヨコナデを施している。胴部の外面には縦方向のハケメを施し、内面には横方向の粗いヘラケズリを行っている。716は、内外面ともヨコナデを施している高杯形土器の杯部の小破片である。717は、鉢形土器または甕形土器の脚部破片である。外面の貼り付け部分には、指頭圧痕が認められる。(福田)

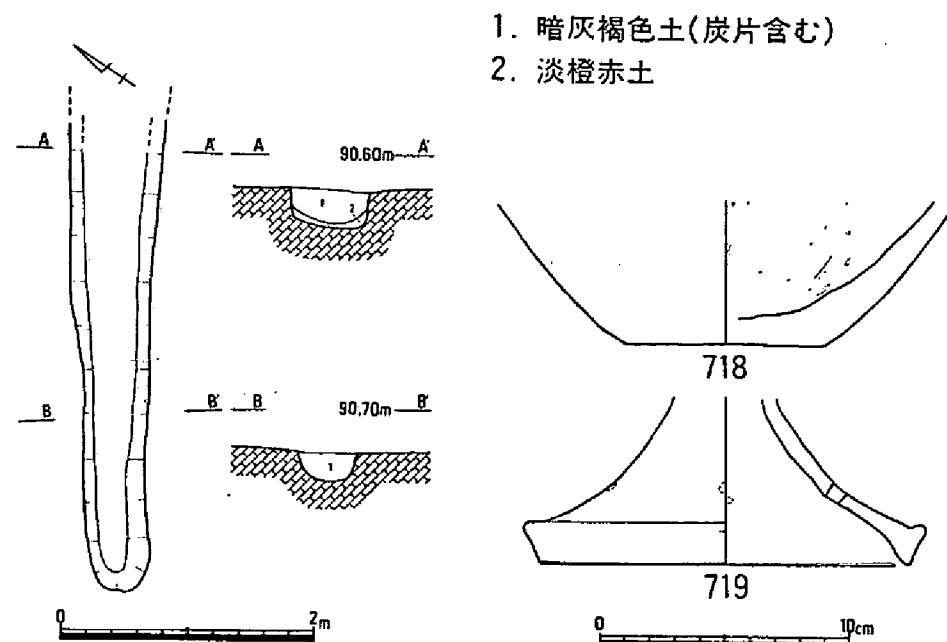
No. 104 溝 (第131図)

C-6の北東部にあり、No.24住居址を切っている。第131図に示したのはNo.24住居址と重ならない部分であり、これ以北については明確にしえなかつたが、第98図のNo.24住居址土層断面図のうち第1層が本遺構の堆積土であり、これによって、本遺構はNo.24住居址の中央付近まで延びていたことがうかがえる。最大幅約60cm、深さ30cmを測る。底面は北東方向へ下がっている。南西端は、検出面と溝

底との比高約13cmを測り、立ち上がって終っている。

出土遺物には底部片718、高杯形土器719等がある。718の内面を除いていずれも器表の剥落が著しく、調整は不明であるが、これらによれば本遺構の時期は奥・後・Ⅲに比定しうる。

(光永)



第131図 No. 104 溝 (1/80)・出土遺物 (1/4)

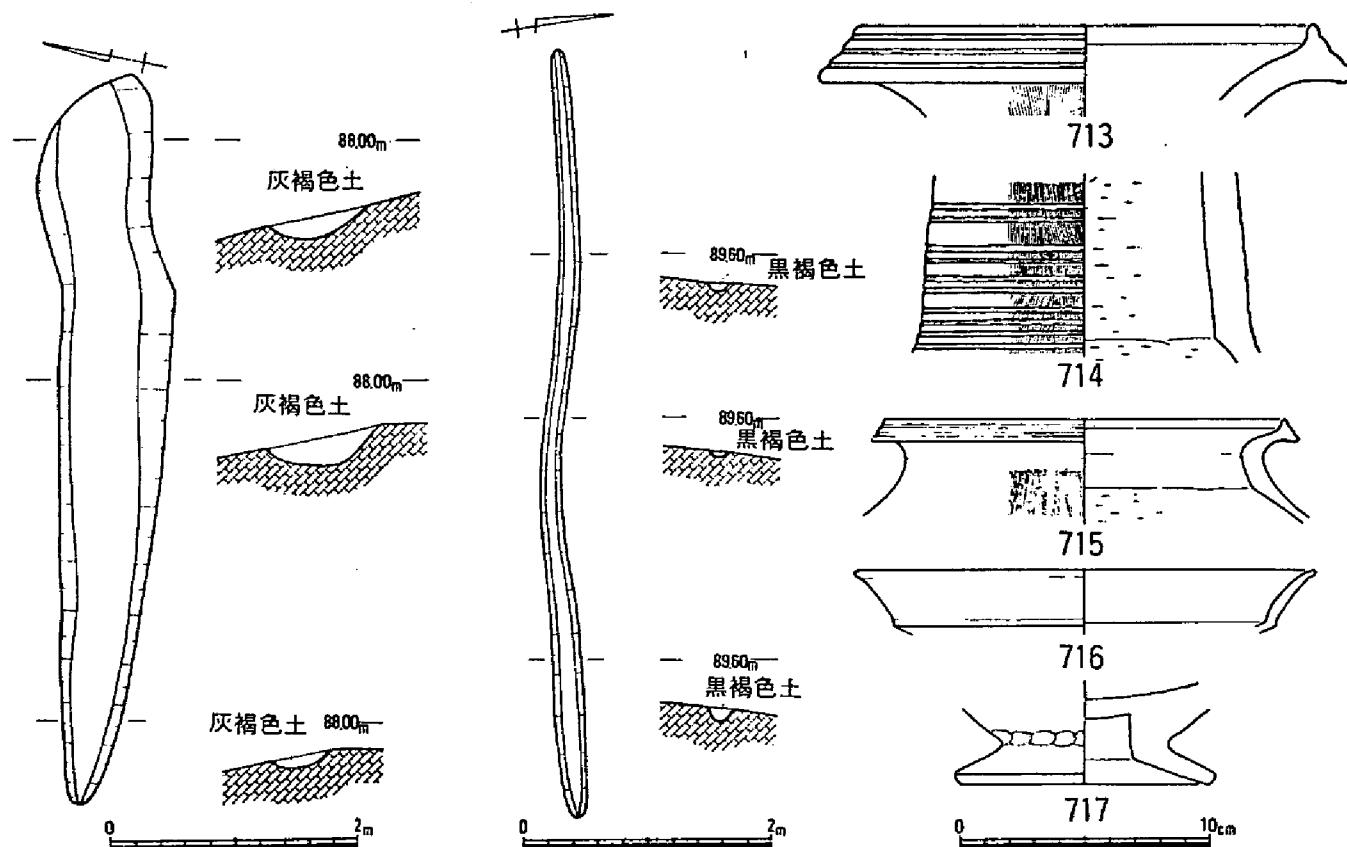
奥坂遺跡

(4) 溝

No. 12 溝 (第129図)

C-8とC-9の境界で検出した溝で、海拔87.25~87.75mの間に位置する。No.3住居址の北側に接して存在し、No.11土壌やNo.44袋状土壌と重複していた。これらの遺構との切り合い関係は、No.44袋状土壌がNo.12溝を新しく切り、さらにNo.12溝がNo.11土壌を後に削平していた。このような結果から、もっとも古い遺構はNo.11土壌で、中間の時期にNo.12溝が存在し、もっとも新しくなってNo.44袋状土壌が構築されたことになる。なおNo.3住居址が属するのは、No.11土壌よりも新しくNo.12溝やNo.44袋状土壌よりも古い時期である。

このNo.12溝の中間部分は、No.44袋状土壌によって新しく切られていた。東端部分は急激に下降する斜面に位置するため、削平されて痕跡を留めない。残存する溝の長さは約575cmを測り、検出面での最大幅は約90cmである。この土壌の断面形は上に開いた「U」字形を呈し、内部には灰褐色土が堆積していた。底部は西から東方向に傾斜し、痕跡を留める範囲内で約35cmの高低差が認められた。この土壌は、住居址や土壌が比較的密集して検出された地点の縁辺部に位置するが、機能や性格は不明である。溝内を精査したが、遺物は検出できなかった。ところが遺物が出土した遺構との切り合い関係から、この溝は奥・後・Ⅱまたは奥・後・Ⅲの時期に属すると推定される。



第129図 No. 12 溝 (1/80)

第130図 No. 15溝 (1/80)・出土遺物 (1/4)

No.11 土 壤 (第128図)

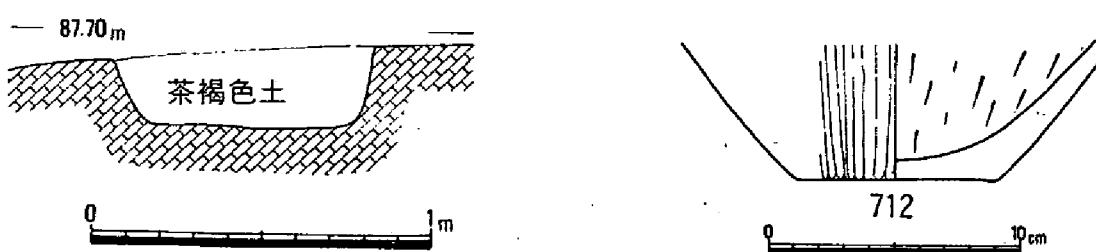
C-8とC-9の境界部分に検出した土壤である。海拔87.50~87.75mの間に位置し、No.3住居址、No.12溝、No.44袋状土壤と接していた。これらの遺構との切り合い関係は、このNo.11土壤がNo.3住居址とNo.12溝によって後に新しく切られていた。したがってNo.11土壤は、No.3住居址やNo.12溝よりも古い時期の遺構である。

この土壤の北東部分はNo.12溝によって削平されていたが、検出面での残存長は約194cmを測り、本来はまだ北東方向に張り出していた可能性が強い。検出面での幅はNo.3住居址の壁体溝に近接した南西部分が広くなり、約80cmの計測値になっていた。この土壤は斜面に存在したため、検出面からの深さは北東のNo.12溝と接する部分から南西のNo.3住居址と切り合う部分に移行するにしたがって深くなるが、底部はほぼ水平で海拔約87.40mの高さになっていた。底部の幅はNo.3住居址の壁体溝直下の部分がもっとも広く、約60cmの計測値になっていた。土壤内には茶褐色土が堆積していただけで、精査したにもかかわらず別の色調を呈する土砂との相互堆積状況は認められなかった。

この遺構は、検出した平面の形態から溝になる可能性も指摘されたが、南西端の部分に遺構の長径に対して直交する方向を示す斜めに立ち上がる壁面を検出したため、北東部分がNo.12溝に削平されて不明であるものの、土壤になると判断したのである。

この土壤から出土した遺物は、いずれも小破片の土器である。実測するのが可能であったのは、712の壺形土器または甕形土器の底部だけである。器壁は比較的厚く、安定した平底を呈している。外面は縦方向のヘラミガキを施し、内面は縦方向の粗いヘラケズリを行っている。外面の底部から胴部にかけては、黒斑が認められる。この土器片は、形態や調整と遺構の切り合い関係から推察して、奥・後・Ⅱに比定されるであろう。

(福田)



第128図 No.11 土壤 (1/30)・出土遺物 (1/4)

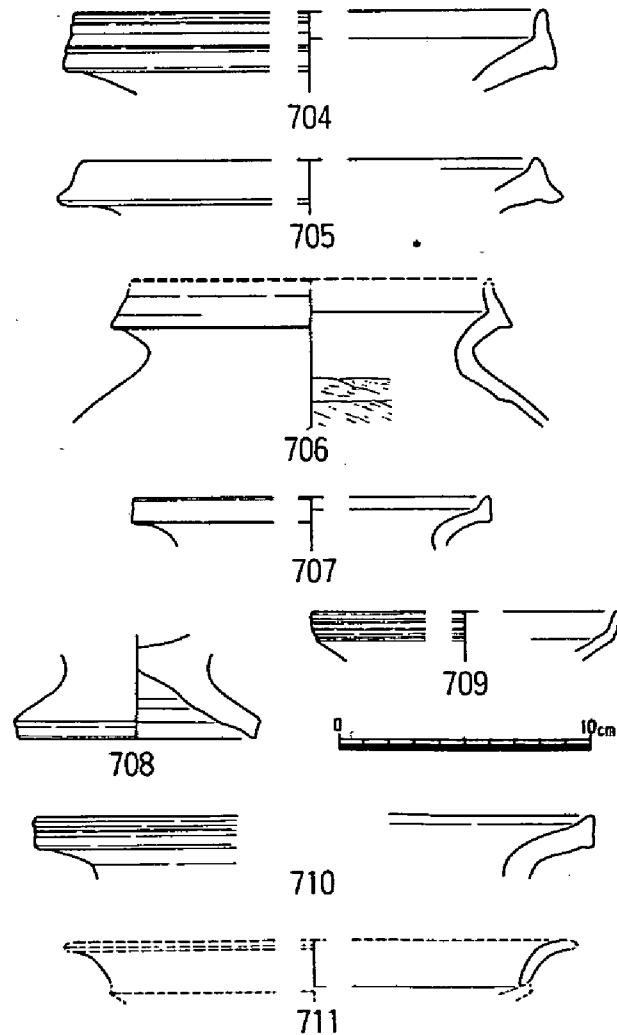
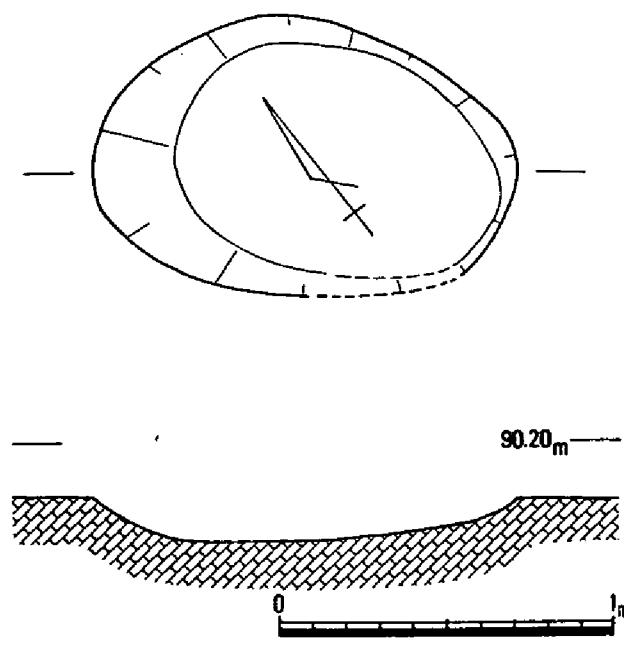
奥坂遺跡

No. 118 土 墓 (第127図)

やはりNo.25住居址と重複する橢円形の土墳である。住居址を切っていて、発掘状況はNo.113土墳等と同様で、掲載図も住居址床面での実測である。長径126cm、短径84cm、深さ14cmを測る。以下、出土土器について述べる。

704・705は壺形土器の口縁部である。704は端部を上方へ拡張して4条の凹線をめぐらせる。胎土には砂粒を含むが、全体に均質。705は砂粒を多く含む。706・707は甕形土器で、いずれも口縁端部を上方へ拡張するが、706は拡張部が発達し、屈折して内傾する。どちらも胎土には砂粒を多く含む。708は脚台で鉢形土器と接合するが、内面中心部には螺旋状にナデ回した痕跡が残り、他はヨコナデで調整する。胎土には砂粒を多く含む。709は小破片のため器形は明確でない。胎土は精良・緻密である。高杯形土器かと推測される。ヨコナデ調整で、口縁部にかすかな3条の凹線が認められる。710は大型鉢形土器の口縁部とみられ、推定口径35cm、胎土には砂粒多く、石粒も目立つ。口縁端面には2条の凹線を施す。711は高杯形土器。胎土は砂粒を多く含み、砂粒が目につく。

この土墳の時期だが、No.25住居址より新しいことは確実である。出土した土器には、弥生時代後期のなかでも新しいと考えられる口縁端部を上方へ大きく拡張させる特徴をもつ土器が704・706・707にみられ、この特徴がかなり一般化した時期と考えられる。したがって土墳の時期は奥・後・Ⅲとしたい。
(岡本)



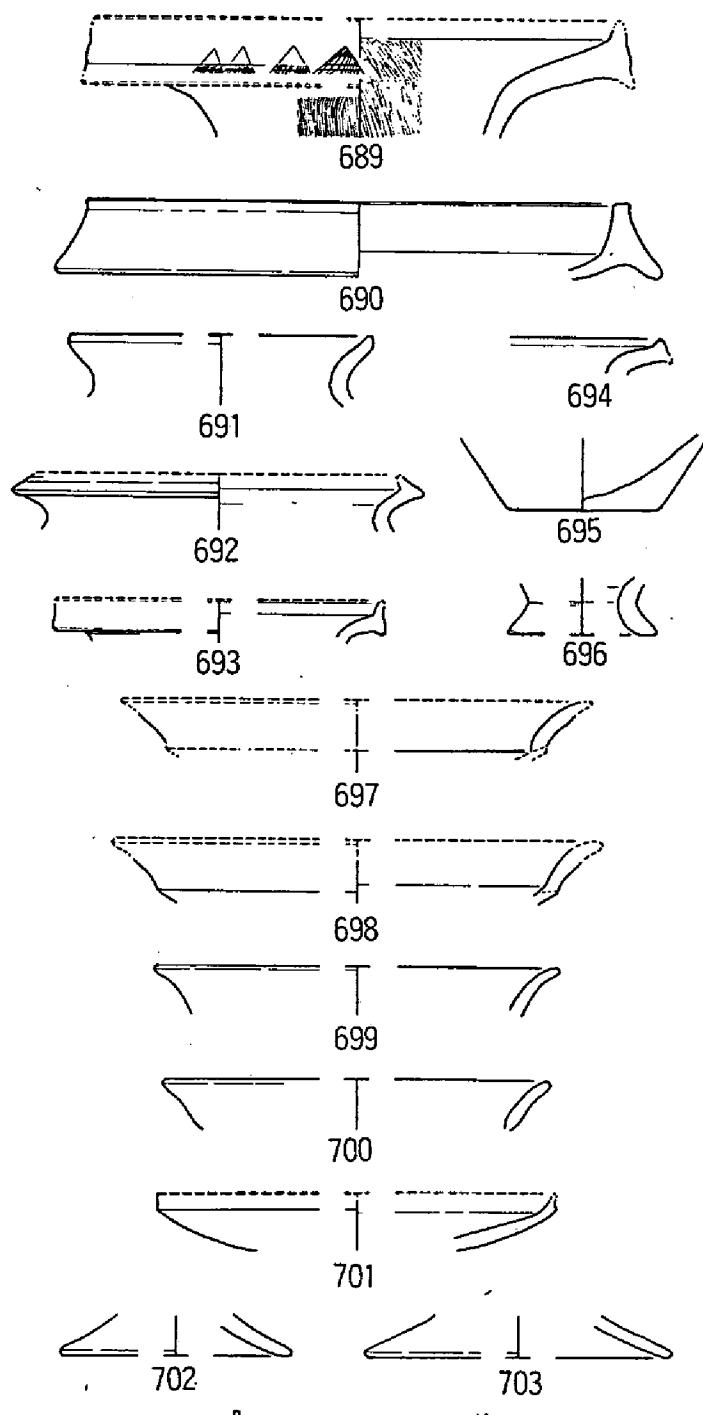
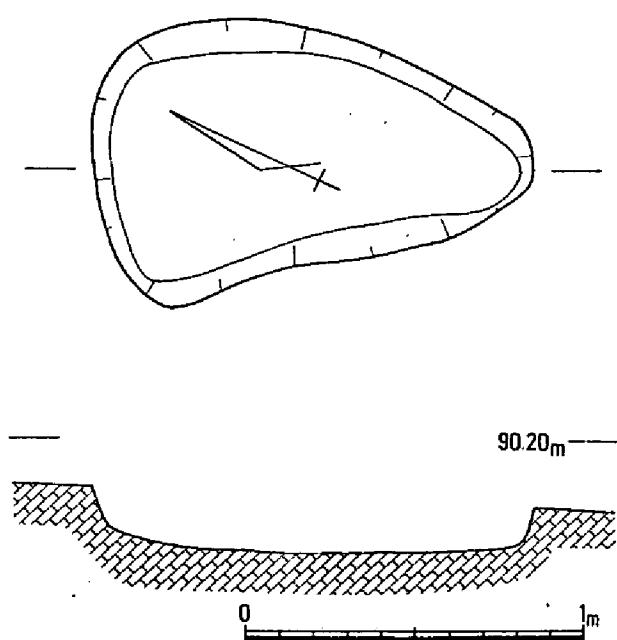
第127図 No. 118 土墳 (1/30)・出土遺物 (1/4)

第5章 第1節 奥坂遺跡A地区

直に近くなる。ヨコナデ調整で、胎土には砂粒を多く含む。694は口径が30cm前後と推定され、かなり大型のため、鉢形土器の可能性もある。やはり口縁端部を拡張するが、その度合いは692・693に比べると小さい。ヨコナデ調整で、胎土は細砂を含み、石粒が若干認められる。695はしっかりした平底で、底面はナデ、外面ヘラミガキ、内面ナデの調整である。胎土には砂粒が多い。696は小型の脚台か、内面はヘラミガキのようにもみられるが不明瞭である。胎土には砂粒を含む。697～703は高杯形土器である。697～700は同形で内面はいずれもヘラミガキ。外面は700はヘラミガキらしいが、他は不明である。701は短くつまみ上げたような口縁部をもつ。内外面ともヘラミガキらしい。

胎土については、699は細砂を含みながらも精良で緻密だが、他はすべて砂粒を多く含む。702・703の脚はいずれも端部を丸くおさめ、外面はヘラミガキ調整とみられる。いずれも胎土には細砂を含む。

土壤の時期であるが、出土土器は690がやや新しいかと考えられる他は、いずれも奥・後・IIと考えられるため、No.25住居址を切っていることを考慮に入れ、奥・後・IIの新相と推定される。

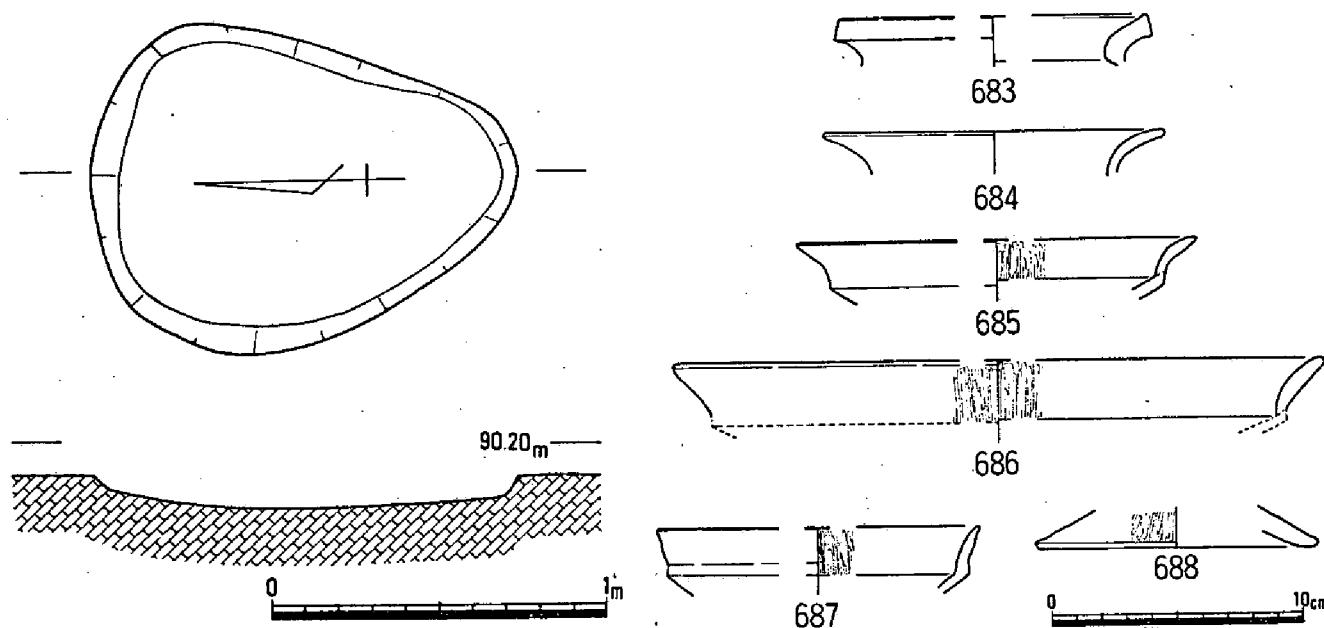


第126図 No. 115 土壙 (1/30)・出土遺物 (1/4)

奥坂遺跡

683・685・686・687は小破片のため口径は推定である。

図示した土器の時期は、いずれも奥・後・IIに含まれると考えるが、この土壙はNo.25住居址を切っているため、土壙の時期については、奥・後・IIの新相あるいはIIIの古相の可能性がある。



第125図 No. 114 土壙 (1/30)・出土遺物 (1/4)

No. 115 土 壕 (第126図)

No.25住居址の中央付近で検出された不整形な土壙である。住居址との重複関係は前述の2土壙と同様であり、住居址を切っていることが確認された。しかし、この土壙の埋土も暗灰黄褐色土斑黒褐色土で住居址埋土とよく類似していたため、やはり住居址との重複関係についての認識は住居址内掘り下げ後の土層観察用畦の壁面精査によっている。掲載図は土壙の平面形が明瞭となった住居址床面での実測による。図上で長径131cm、短径84cm、深さ20cmを測るが、住居址土層図によって復元すれば、長径155cm、深さ50cm程度あったと推定される。断面形は逆台形に近く、壙壁の傾斜度はかなりきつい。

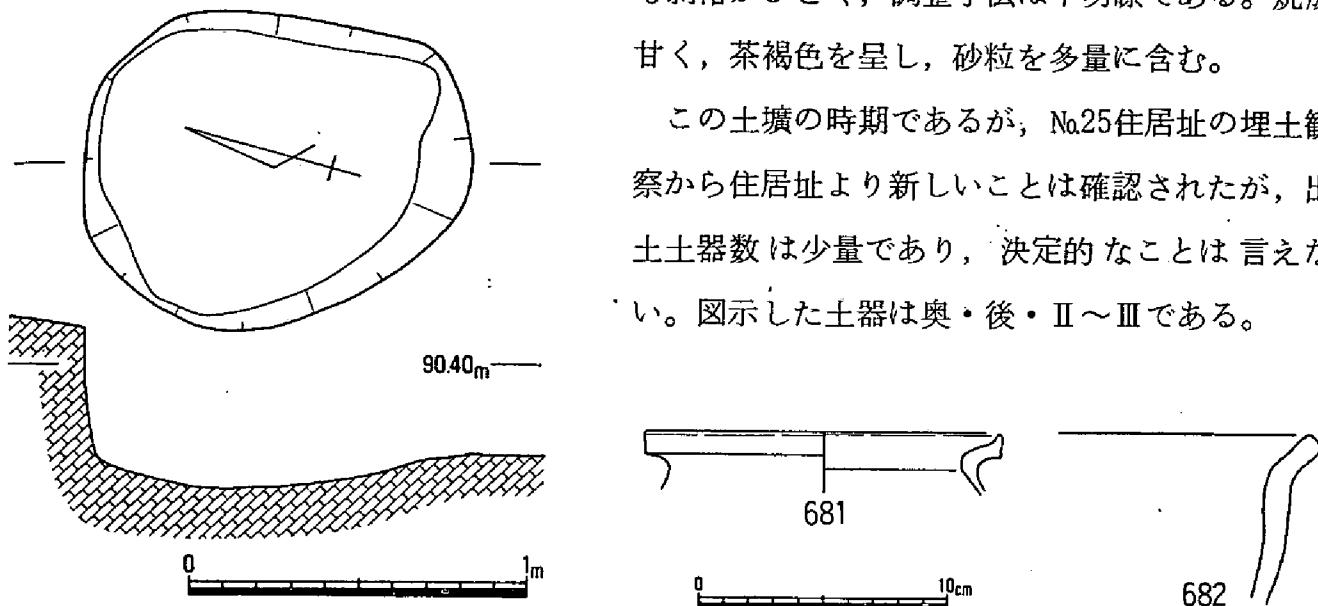
図示した土器は15点にすぎない。689と690は壺形土器である。689は長頸壺の口縁部で、口縁端部を上下に拡張し、端面に篦によって格子目で埋めた鋸歯文を描く、鋸歯文は2個が対になってめぐるようである。口縁部外面はヨコナデ、内面はヨコナデ、内面はヘラミガキである。胎土には砂粒が多く、白色砂粒を含む。690は器台の可能性もある。ヨコナデ調整であるが、内面の屈曲部以下はヘラミガキとみられる。胎土は689と同じ。691～694は甕形土器で、すべて口縁部の形態を異にしている。691は口縁端部を丸くおさめる。ヨコナデ調整らしく、胎土には細砂を多く含む。692は口縁端を上方へ拡張し、端面には凹線の名残がある。ヨコナデ調整で、胎土は細砂を含むが、精良で緻密。693も口縁端部を上方へ拡張するが、端面が垂

No.113 土 壩 (第124図)

B-6の南西隅に位置するNo.25住居址の北東縁で検出された。埋土は黄褐色土の小塊を斑点状に含む灰黒色土であったが、住居址埋土との区別は困難であり、掲載図は住居址の床面でのものである。図上では長径118cm、短径98cm、深さ48cmを測り、不整橢円形を呈する。壙壁は垂直に近く立ち上がり、壙底は平坦に近いが、中心がわずかに窪み、断面で緩かな曲線をなす。推定長径は125cm前後であろう。

発掘にあたっては住居址埋土との峻別が難しく、確実に No.113土壙出土とされるものののみ図示した。681は甕形土器の小破片である。口縁部はヨコナデ調整、内面は頸部までヘラケズリがなされている。胎土には砂粒を多く含み、白色砂粒が目立つ。焼成は良好だが、わずかに甘い。色調は灰赤褐色を呈する。286は口径40cm前後と推定される大型鉢形土器片で、内外面とも剥落がひどく、調整手法は不明瞭である。焼成甘く、茶褐色を呈し、砂粒を多量に含む。

この土壙の時期であるが、No.25住居址の埋土観察から住居址より新しいことは確認されたが、出土土器数は少量であり、決定的なことは言えない。図示した土器は奥・後・II～IIIである。



第124図 No. 113 土壙 (1/30)・出土遺物 (1/4)

No. 114 土 壩 (第125図)

前記のNo.113土壙と同様に No.25住居址と重複して検出された。住居址を切っていることが住居址の埋土観察から確認されたが、発掘時には住居址との分離が明確でなかった。実測図はやはり住居址床面でのものである。図上で長径108cm、短径100cm、深さ10cmを測る。No.25住居址の土層図によって復元すれば、長径150cm前後、深さ35cm前後とみられ、壙壁は急傾斜をもっている。埋土は暗灰黄色土斑灰黒色土である。

出土が確実で図示した土器は 6 点である。683は甕形土器で内面は頸部までヘラケズリされる。胎土は砂粒を多量に含む。684～688は高杯形土器である。焼成はいずれも良好であり、胎土は精良な688を除き、砂粒・細砂が含まれる。口縁部の調整はヘラミガキであるが、異形の687は外面 ヨコナデのままである。687は外面ヘラミガキ、内面はナデとみられる。なお、

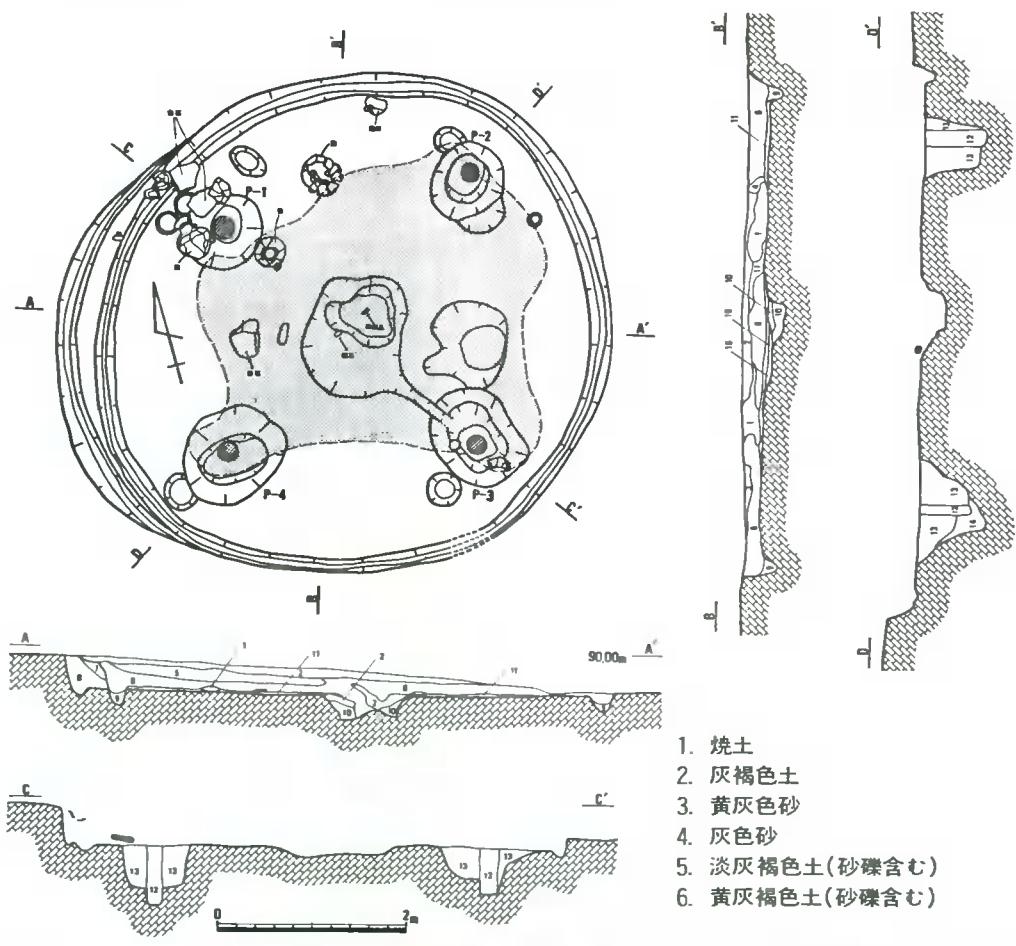
4. 弥生時代後期後半の遺構・遺物

(1) 住居址

No. 17 住居址 (第133図、図版62-2)

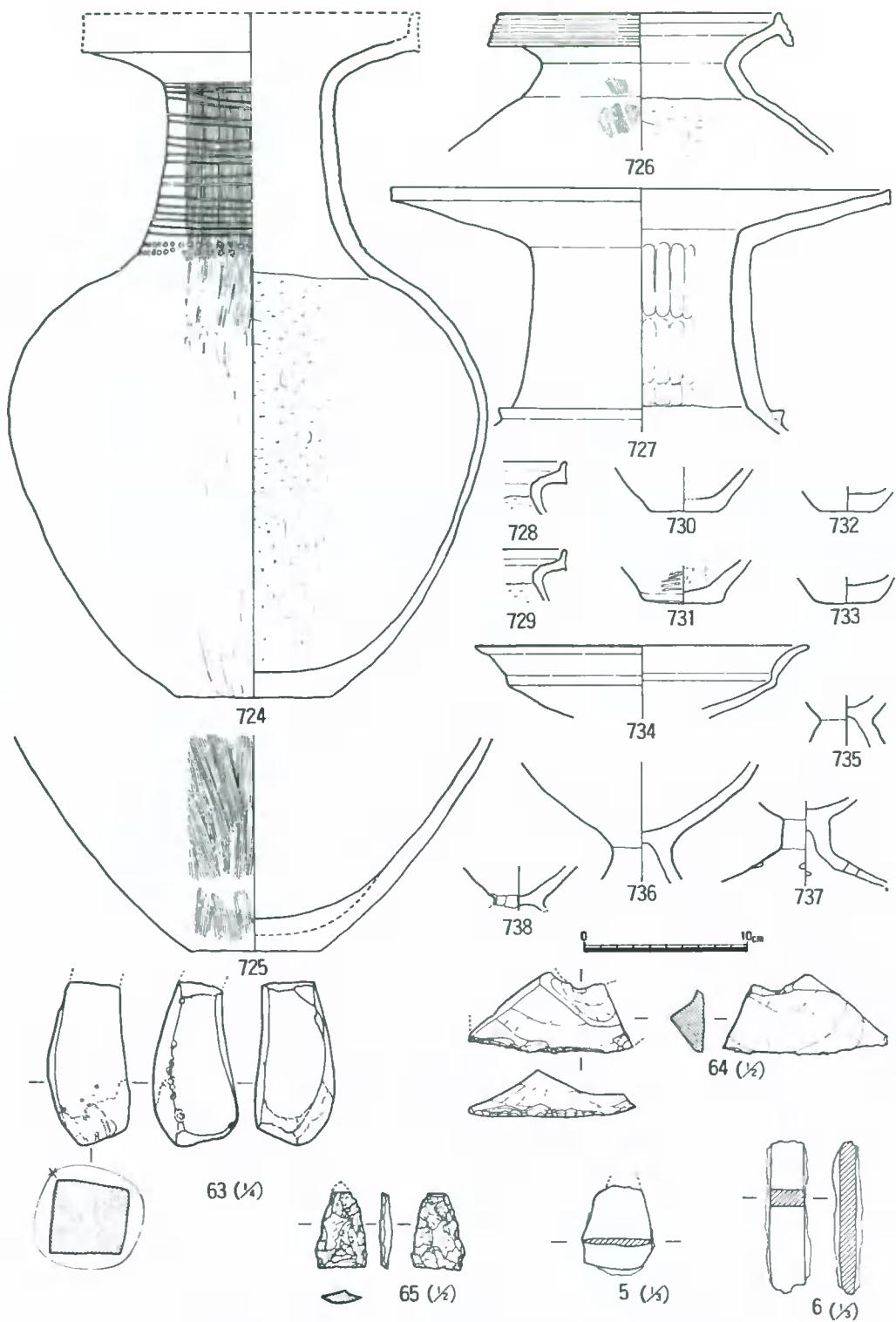
B-7の北西において検出された住居址である。平面図およびA-A断面図にみられるように2時期のものが重複しており、一度建て替えが行われたものと考えられる。最終の住居址は火災のために廃棄されたものようで、平面図の破線内には特に多量の焼土、炭化物が認められた。また、各柱穴内には柱痕跡が明瞭に観察でき、それによると直径約20cmの柱が想定できる。

この住居址内には、床面に密着した状態で壺形土器724・726・727、甕形土器728・729、高



第133図 NO.17 住居址 (1/80)
7. 黄灰褐色土 9. 暗灰色土 11. 暗灰褐色土(炭化物含む) 13. 暗赤褐色土(黑色土含む)
8. 赤黄褐色土 10. 炭化物・灰 12. 黑色砂質土(炭化物含む) 14. 赤褐色砂質土(黑色土含む)

奥坂遺跡



第134図 No. 17 住居址出土遺物 (1/2, 1/3, 1/4)

杯形土器734・736、鉢形土器738および作業台と考えられる3個の石が検出された。これらのうち727は、口縁部が床面に密着しており器台として用いられていたものと考えられる。図示した土器のうちこれら以外の土器については、735がP-2内より出土しており、他はすべて埋土中から出土したものである。724は、P-1の近くで出土したものではほぼ完形品である。頸部のヘラ描沈線は、2本単位で螺旋状にめぐらされている。

土器以外の出土遺物としては石器3(63は半花崗岩製の砥石、65はサスカイト製の石鎌、64はサスカイト製のスクレイバー)、鉄器2(6は「ノミ」状鉄器)がある。これらのうち石器63、鉄器6は、中央穴の埋土中より出土したものである。

これらの遺物の時期については、ほぼ奥・後・Ⅲであると考えられる。(平井泰男)

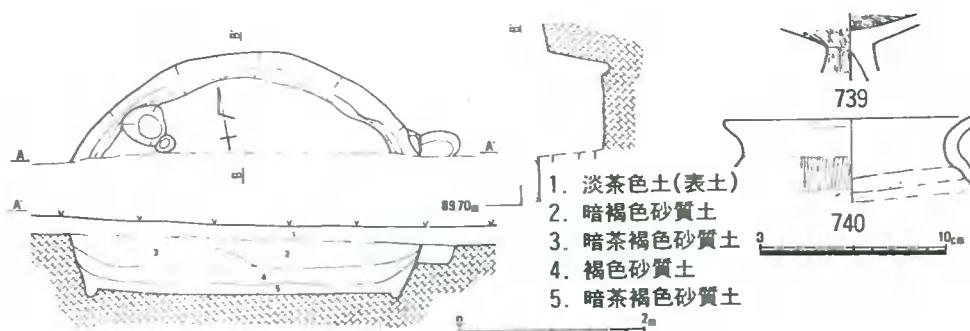
No. 18 住居址(第135図)

B-7の北部、海拔89.30~89.50m間に位置し、同地内約1/5を調査した竪穴式住居址である。弧の部分より推定復元を行うと、長軸約370cm、床面積約14.79m²を測る。床面海拔高は88.88mを測り、比較的残りの良好な住居址である。

壁体高は約58cmを測り、堆積土はレンズ状に認められる。

屋内は壁体溝のみが確認でき、主柱穴はさらに用地外に延びているものと考えられる。壁体溝は住居址平面形を掘り下げ、底面を整地して壁体に沿って一巡しているが、屋内の使用時には完全に埋土されており、堆積土と若干異なる土質が確認できる。この事実は火災を受け、放棄された住居地の壁体溝をみればよく理解できることである。すなわち、壁面上位より中央に向かって焼け落ちた垂木が壁体溝内に入らず、壁体溝上面で壁体に対して直角に曲っていることにより判明する。

遺物は甕形土器、高杯の小片2点が堆積土中より出土している。739は高杯接合部にあたり、脚部を杯部にソケット状に刺し込んだ後に器外面に縦位のヘラミガキ、杯部内部にハケメが施



第135図 No. 18 住居址(1/80)・出土遺物(1/4)

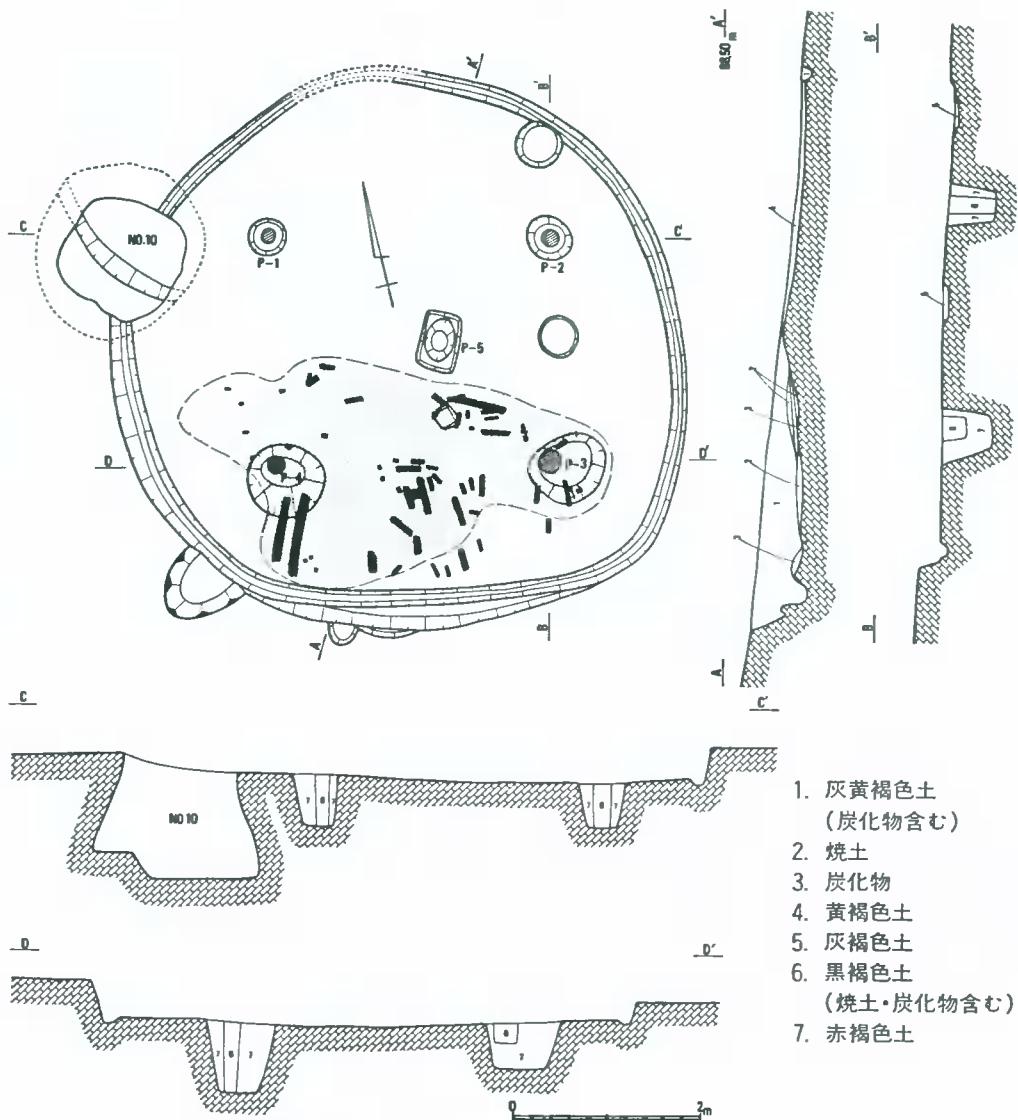
奥坂遺跡

されている。740は甕形土器の口縁部であり、肩部より口縁部に向って「く」字状に外反し、端部を丸くおさめている。口縁部内外面はヨコナデ、器外面縦位のハケメ、器内面は抉り取るような横位のヘラケズリが施されている。

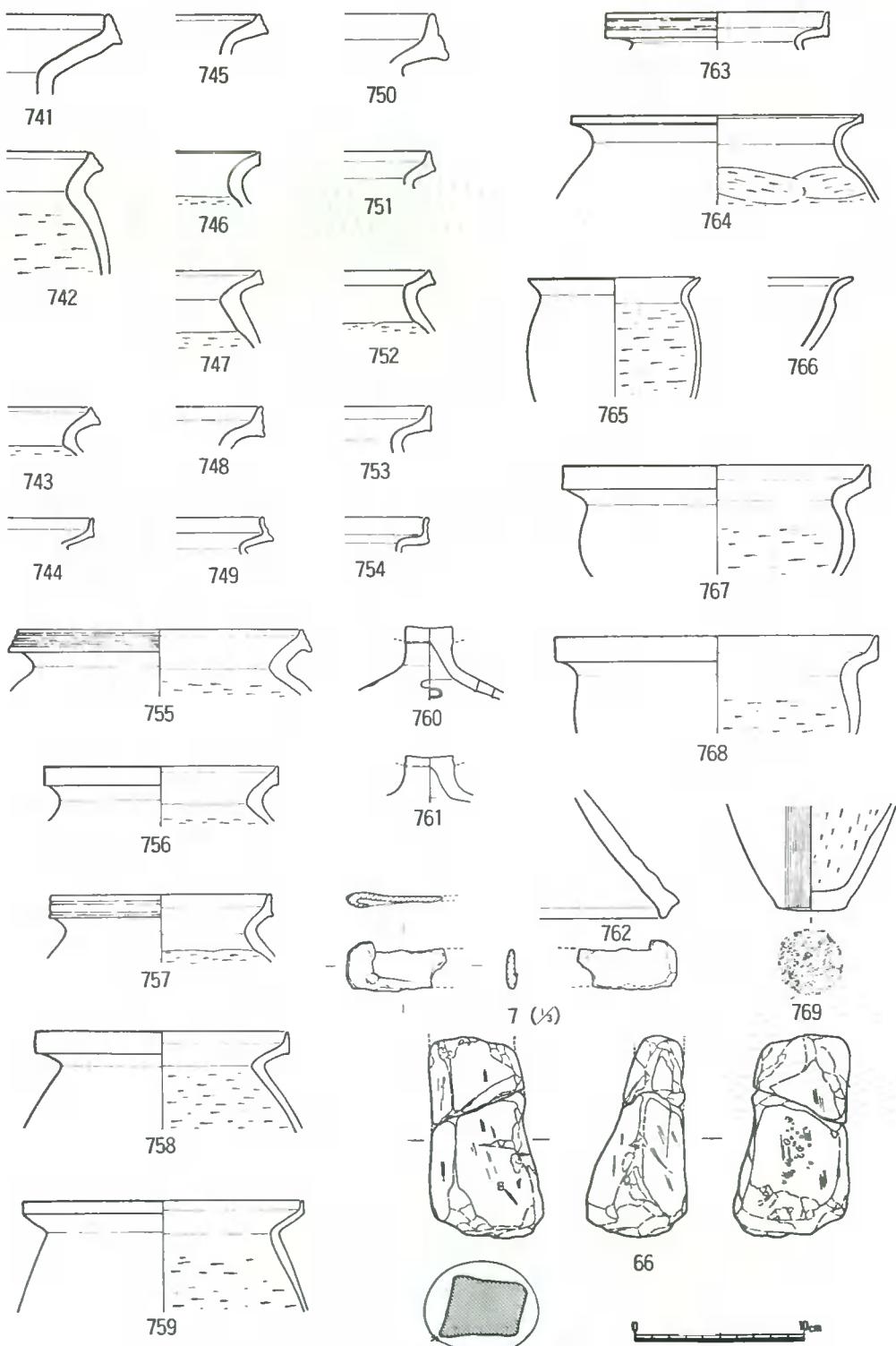
(高畠)

No. 3 住居址 (第136・137図、図版63)

C-8とC-9の境界に存在する不整円形を呈する堅穴式住居址である。海拔87.50~88.25mの間に位置し、No.10袋状土壌やNo.91袋状土壌などと重複していた。柱穴は4か所に存在し、底面には火災を受けたと推定される炭化物や焼土が散在していた。柱穴間の距離は、P-1とP-2が



第136図 No. 3 住居址 (1/80)



第137図 No. 3 住居址出土遺物 (1/3, 1/4)

奥坂遺跡

288cm, P-2とP-3が240cm, P-3とP-4が296cm, P-4とP-1が234cmを測り, 底面積は約34.78m²である。柱穴内には炭化物や焼土を含む黒褐色を呈する柱痕跡が認められ, P-3の柱穴では底部から浮いた状態になっていた。中央穴は2段に掘り窪められ, 平面形が隅丸長方形と橢円形の形態となっていた。

この住居址から出土した遺物は, 奥・後・Ⅲの新相から奥・後・Ⅳの古相に属する土器以外に, 7の鉄製収穫具(摘鎌)と66の流紋岩製砥石を検出している。

No. 2・50・78 住居址(第138・139図, 図版64)

No.1住居址とNo.3住居址の中間に存在する複雑な住居址である。海拔87.75~88.25mの間に位置し, 斜面になった北側の壁体は削平されていた。

No.50住居址の遺構は, 平面形が歪んだ隅丸長方形を呈するが, 精査したにもかかわらず壁体溝や柱穴は検出できなかった。平坦面の面積は約14.67m²を測り, 遺構内の北東部に傾斜した状態で黒褐色土や赤褐色土が堆積し, 炭化物が散布した状況も認められたが, 壁体溝や柱穴が伴わないので, 住居址と断定するにはためらいが感じられた。底面の造成が行われた後に不都合が生じて計画が放棄された可能性もあるが, 土壇として機能していたとも考えられる。

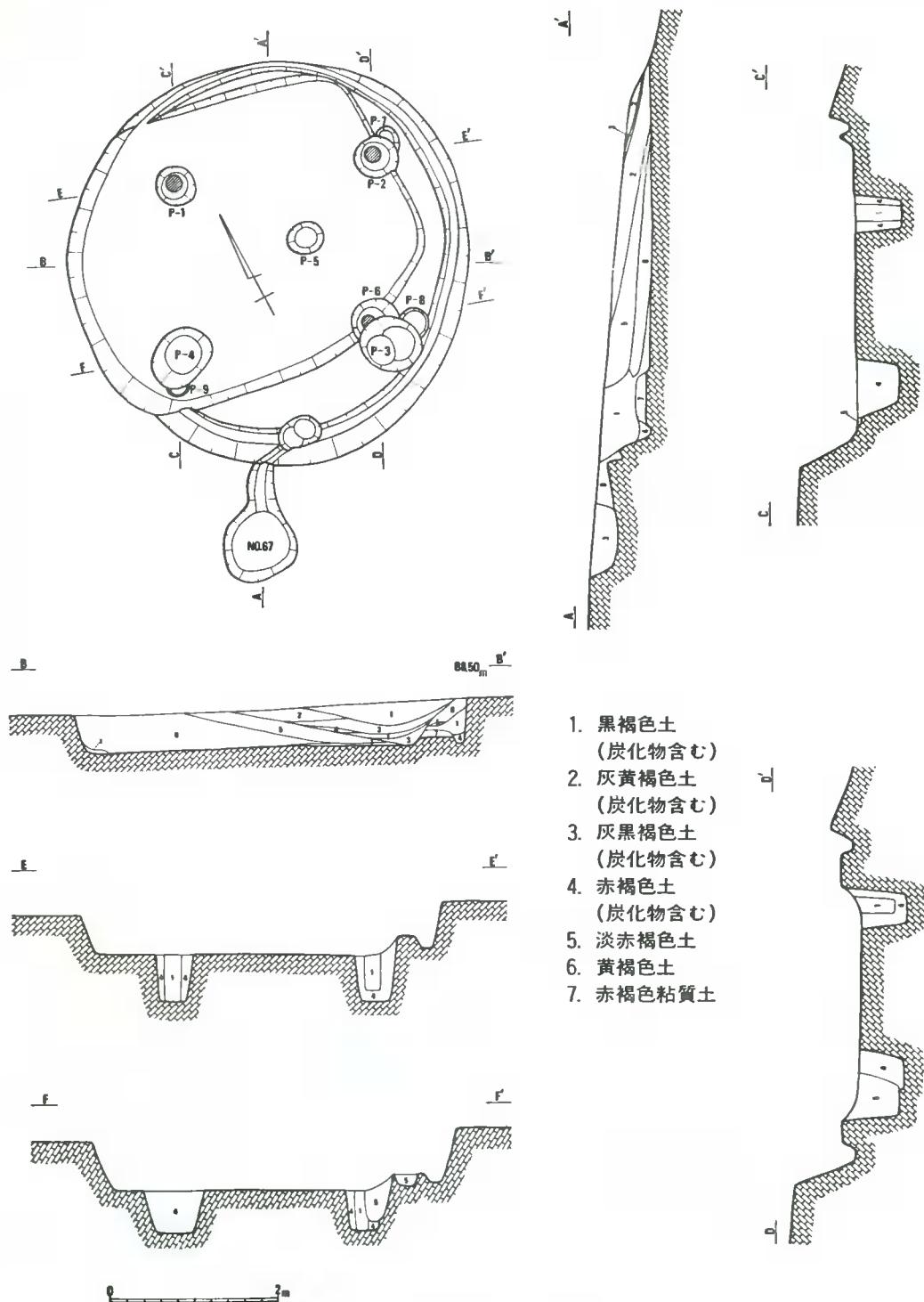
No.2住居址は, 東側に寄った部分をNo.50住居址と呼んだ遺構に新しく切られていた。柱穴は4か所に存在し, 中央穴も確認された。柱穴間の距離は, P-1とP-2が237cm, P-2とP-3が235cm, P-3とP-4が235cm, P-4とP-1が200cmを測り, 床面積は約18.39m²である。P-1とP-2の柱穴内には, 炭化物を含む黒褐色を呈する柱痕跡が認められた。P-3の柱穴は, P-6の柱穴に立てられていた柱の建て替えによると推定される。P-5の中央穴は, 長径44cm, 短径39cmを測る歪んだ円形に近い形態を呈し, 検出面からの深さは約30cmで炭化物を含む黒褐色土が堆積していた。

No.78住居址は, 残存する小規模な柱穴のP-7, P-8, P-9で構成されるであろうと推定した竪穴式住居址である。壁体溝や中央穴は検出できなかったが, No.2住居址によって削平されたと判断した。柱穴間の距離は, P-7とP-8が225cm, P-8とP-9が290cmを測り, 底面積はNo.2住居址とほぼ同じ値になるであろう。北側に位置する柱穴は, No.50住居址の遺構に削平されて存在しないが, 本来は4本柱であったと考える。残存する3か所の柱穴は, 底部のレベルが約86.50mに揃っていた。

調査によって確認した遺物は, ほとんどがNo.50住居址と呼んだ遺構の覆土内から出土した。土器は比較的多量に認められたが, どの個体も小破片ばかりである。これらの土器は, 奥・後・Ⅳの古相に比定されるであろう。

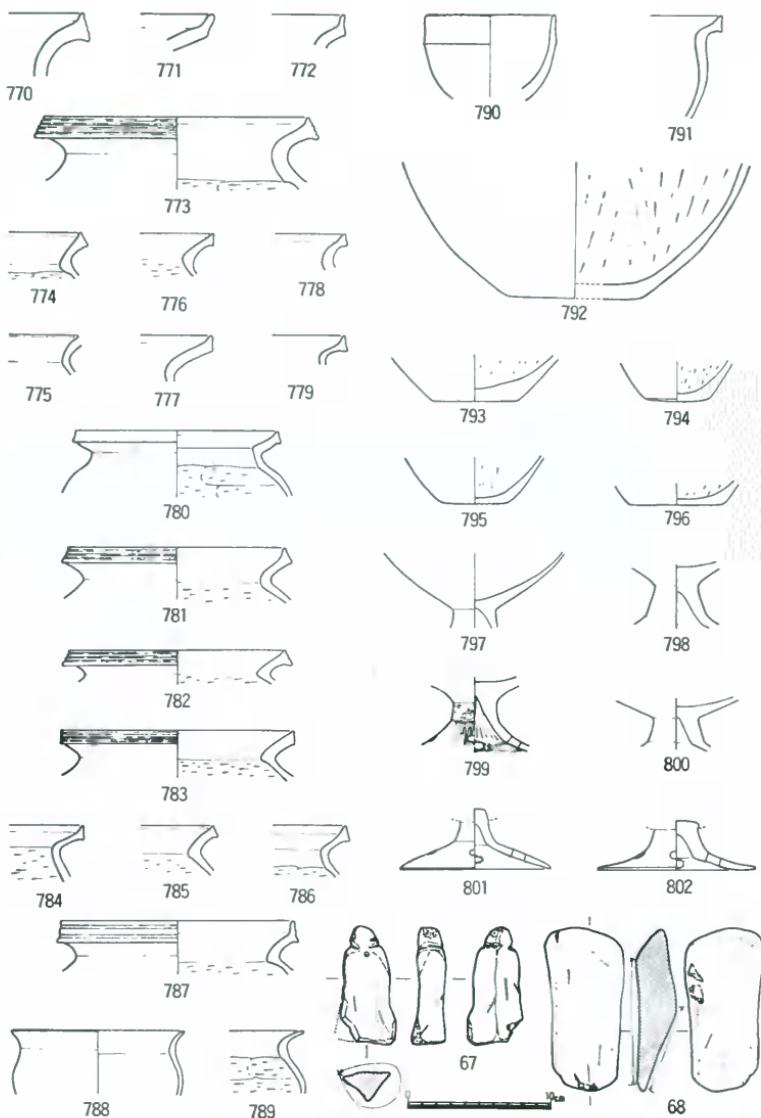
土器以外の遺物として, 2個の流紋岩製砥石が出土している。特に67は携帯用の特殊な砥石で, 紐を掛けて使用したと推定される痕跡が認められる。

(福田)



第138図 No. 2・50・78 住居址, No.67土壤 (1/80)

奥坂遺跡

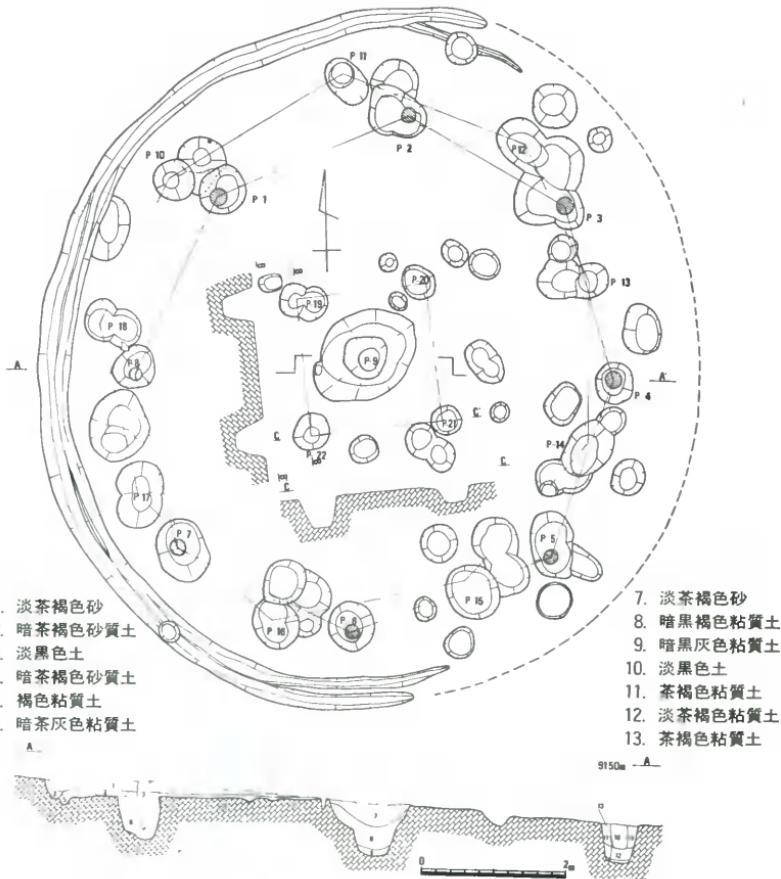


第139図 No. 2・50・78 住居址出土遺物 (1/4)

No. 23 住居址 (第140・141図, 図版65)

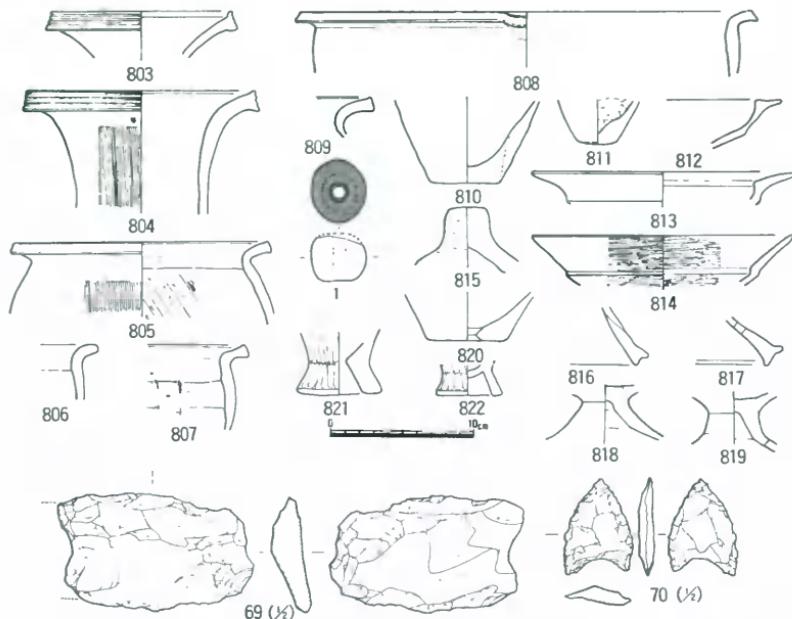
D-6南西部, 海拔90.70~91.15cm間に位置し, №46・36・37・20・17住居址等と同様に緩斜面尾根筋に近い部分を占地している。東側斜面部が自然流土により半壊しており, 壁体溝を失った円形の竪穴式住居址である。長軸930cm, 短軸(840)cm, 底面積約69.65m², 底面海拔高91.00mを測る。

屋内は主柱穴・棟持ち柱穴・中央穴・壁体溝からなり, P-1~P-8が№23A住居址の主柱穴

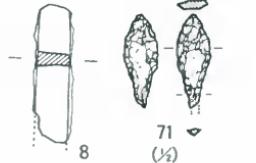


第140図 No. 23 住居址 (1/80)

奥坂遺跡



第141図 No. 23 住居址出土遺物 (1/2, 1/4)



を構成し、中央穴P-9と外溝の壁体溝が伴う。

P-10～P-18がNo23Bの主柱穴を構成し、同位置のP-9前の中央穴が存在した可能性が強い。P-19～22は棟上げの柱穴と考えられ、このように中央穴をとりまく形態はNo36A住居址においても認められた。そして、柱間も近似値を示している。P-19～22はNo23A・B両住居址に使用されたと考えられるが、他の部分でみられる約10cm前後の貼り床が除去されており、共存関係がつかめない。

遺物は小片が多く、底面着の土器ではなく、時期決定が困難である。奥・後・I, II, IIIに比定できる遺物も多くみられ、柱穴出土の818・819等は奥・後・IVに比定できると考えられる。しかし、818・819はNo23A・Bの両住居址の主柱穴に伴わず、若干疑問が残るが、P-16北側に存在すること等より、No23B住居址に近い時期を考えておきたい。

他に石器、鉄器類が4点出土しており、69・70・71はサスカイトを利用した石庖丁、石鎌である。鉄器8は奥・後・IIIのNo17住居址中央穴出土、天・後・IIのNo.9住居址から同形態のものが出土している。最大長7.02cm、最大幅1.76cm、最大厚0.79cm、重量45.5gを測り、他の2

点も近似値を示しており、ノミ状の工具を考えている。

石器、鉄器等の遺物からは奥・後・Ⅱの新相より奥・後・Ⅲの新相の幅が比定できるのではなかろうか。

No. 37 住居址（第142～144図、図版66）

調査区ほぼ中央から検出された大型の住居址で、まわりにもNo.23、51、46等同様規模の住居址群が検出された一帯にあたる。当住居址は後述するNo.36住居址を切っており、さらに最低7回以上の建て替えが行われていた。このため最終に建てられた37A住居址についてほぼ全容を把握することが出来たものの、B～Eについては住居址の形態及び土層断面、出土遺物等の検討から想定したものである。

37A住居址直径約950cmの円形を呈し、南西部が一部張り出す状態で検出された。また、遺構の残存状況は地形が南西から北東にかけて傾斜していたため、前者には覆土が比較的厚かったものの、後者は壁体溝すらも既に削平されていた。住居址は火災を受けており、覆土中には炭及び焼土が混入していた。また、住居址西部分の床面から壁にかけては赤褐色に変色し、特に高熱を受けたことが確認され、この付近が出火場所であったものと思われる。

主柱穴は8本で、柱穴間は245～310cmを測る。さらに当住居址検出時には確認出来なかつたものの、後述する37E住居址の主柱穴P-31～34は棟上柱の柱穴であった可能性も考えられる。中央穴は住居址中央よりやや東寄りに掘られており、径82×65cm、深さ65cmを測る。床面には住居址壁にそって幅約180cm、高さ約10cmのベッドが巡っていた。壁体溝は住居址南西部で一部広がり、南に張り出しが、この部分が出入口ではないかと考えている。

遺物は住居址南西隅の床面からほぼ完形の鉢形土器827が出土している。

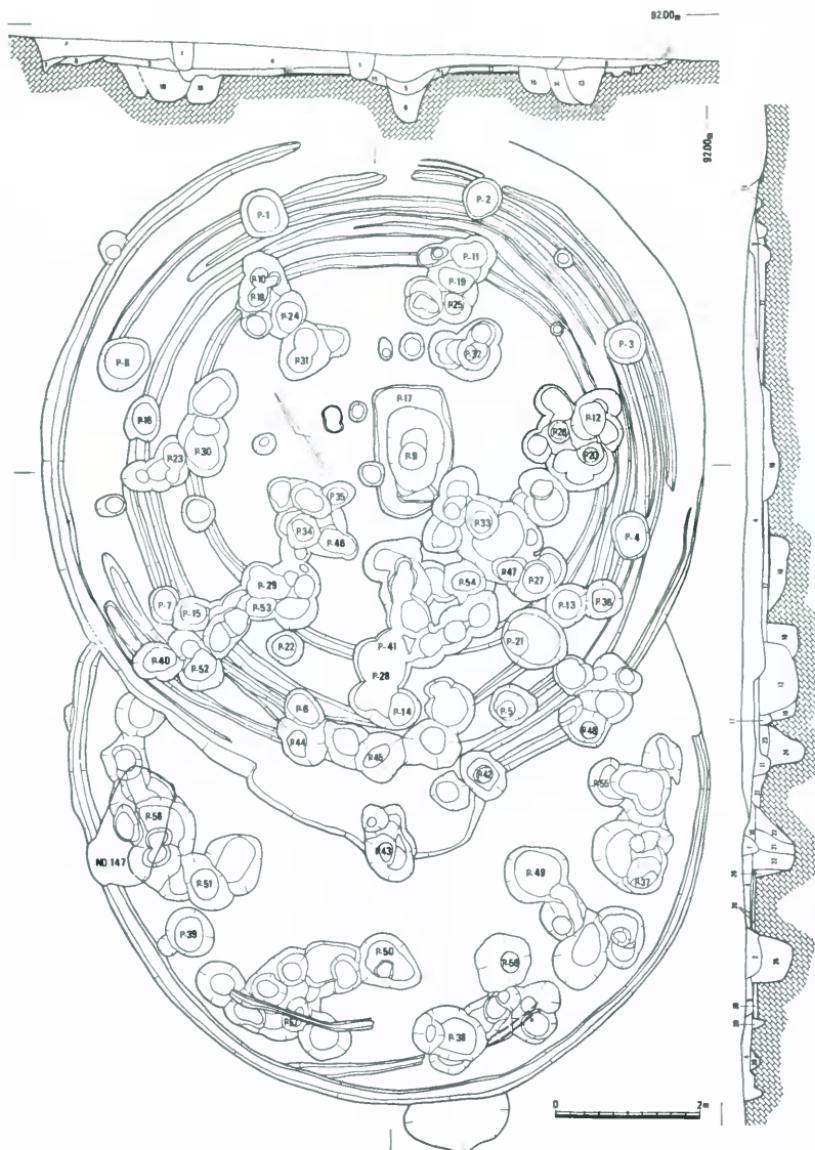
37B住居址直径約800cmの円形を呈し、主柱穴はP-10～16の7本と想定された。中央穴は、110×185cmの不整形に一段掘り下げられ、さらに中央部を直径約80cm、深さ約60cm掘り下げている。なお、当住居址は図示した如く、2本の壁体溝がほぼ重なるように検出されており、最低2回は建て替えが行われたと考えられるが、北側を巡る壁体溝に対応する主柱穴を抽出するにとどまった。

37C住居址直径約730cmの円形を呈し、主柱穴はP-18～23の6本が想定された。中央穴はP-17と重複するものと考えられる。

37D住居址直径約680cmの円形を呈し、主柱穴はP-24～30の6本が想定されたが、当住居址においても前記37Bと同様、壁体溝の検出状況から2回以上の建て替えがなされたものと考えられる。

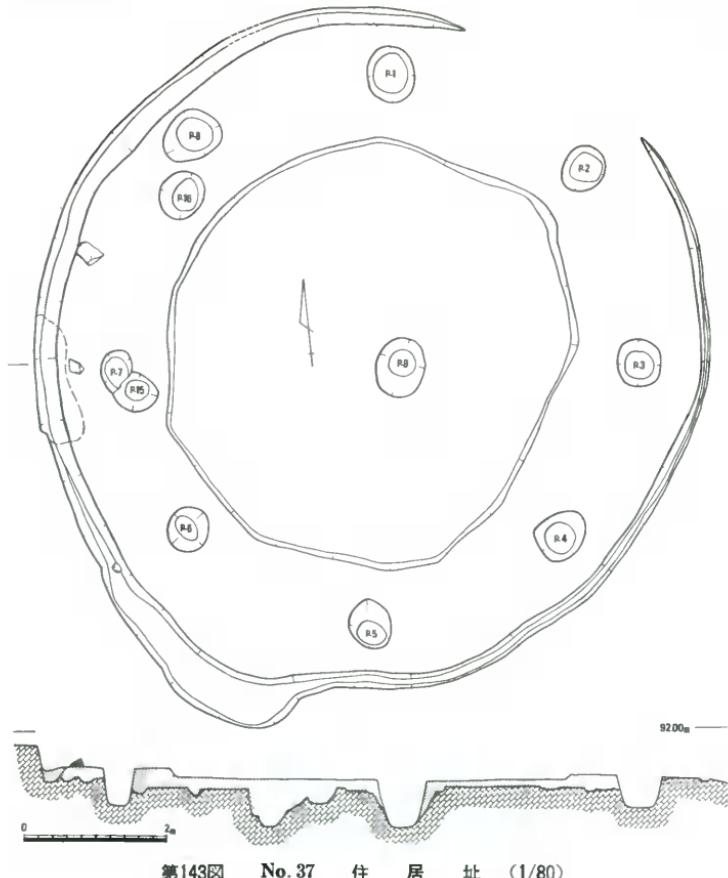
37E住居址直径約570cmの円形を呈し、主柱穴はP-31～35の4本が想定され、中央穴はP-17と重複するものと考えられる。なお、主柱穴については前述の如く、37A住居址の柱穴とも

奥坂遺跡

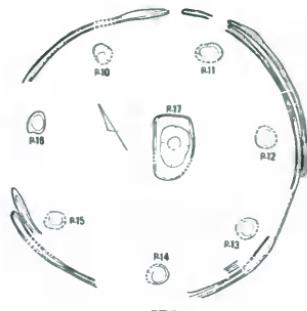


第142図 No. 36・37 住居址 (1/80)

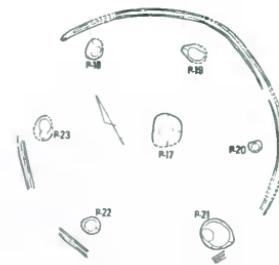
- | | | |
|---------------------|-------------------|-----------------|
| 1. 暗茶褐色砂質土 | 2. 暗褐色砂質土(焼土混) | 3. 褐色燒土 |
| 4. 暗褐色砂質土(焼土、炭、焼土混) | 5. 灰黑色粘質土(褐色粘質土混) | 6. 灰黑色粘質土 |
| 7. 暗茶褐色粘質土 | 8. 暗茶褐色粘質土(砂混) | 9. 明茶褐色砂質土 |
| 10. 暗褐色砂質土 | 11. 暗茶褐色粘質土 | 12. 茶褐色粘質土 |
| 13. 暗茶褐色粘質土 | 14. 茶褐色粘質土 | 15. 暗茶褐色粘質土 |
| 16. 灰黑色粘質土 | 17. 暗茶褐色粘質土(炭混) | 18. 暗茶褐色粘質土 |
| 19. 茶褐色粘質土 | 20. 暗茶褐色粘質土 | 21. 黑灰色粘質土 |
| 22. 暗茶褐色粘質土 | 23. 灰黑色粘質土(炭混) | 24. 灰黑色粘質土(炭混) |
| 25. 茶褐色粘質土 | 26. 暗茶褐色粘質土 | 27. 暗茶褐色粘質土(炭混) |
| 28. 茶褐色粘質土 | | |



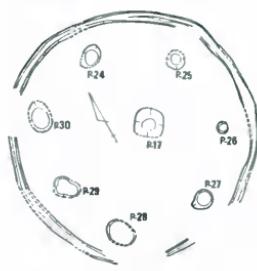
奥坂遺跡



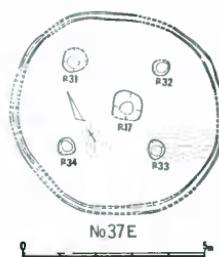
No.37B



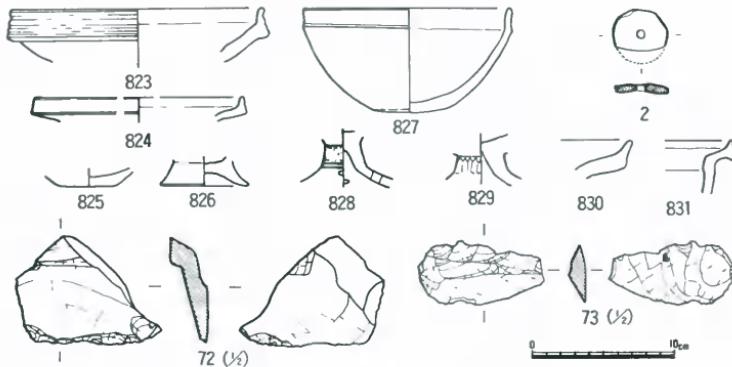
No.37C



No.37D



No.37E



第144図 No.37 住居址 (1/160)・出土遺物 (1/2, 1/4)

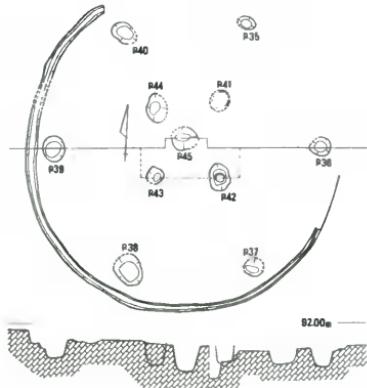
考えられるもので、各主柱穴はいずれも数本の柱穴が重複しており、37Eの壁体溝との平面的な位置関係から、37Aの柱穴だけでなく、37A、Eのいずれの住居址にも重複するものと理解している。

第144図に示す遺物は37A～E全体から出土したもので、827を除きいずれも小破片であったため時期決定が困難だが、奥・後・Ⅲの828から奥・後・Ⅳの827までの遺物が出土している。

以上、当住居址は最低7回の拡張がなされ、その時期は奥・後・Ⅲ～Ⅳにかけてのものと考えられる。

No. 36 住居址（第142・145・146図、図版66）

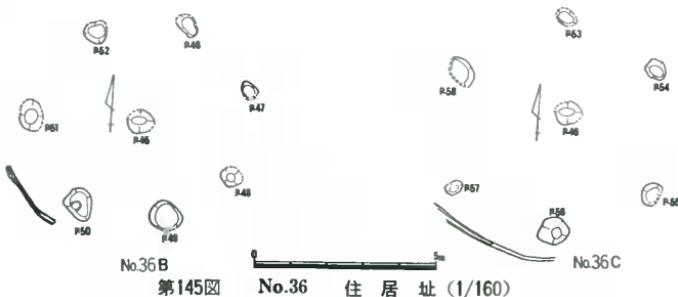
住居址北側約3分の1はNo.37住居址によって、西部分はNo.147土壤によって切られており、さらに住居址検出時において、東側約半分は既に地山が露出した状態であった。また当住居址においても最低3回の建て替えが行われており調査に困難をきたした。



No.36 A

36A住居址直徑約850cmの円形を呈し、主柱穴はP-35～40の6本で、中央穴のまわりからは、P-41～44の4本の棟上柱の柱穴が検出された。なお、当住居址は壁体溝と柱穴群との平面的な検出状況から、数度の建て替えが行われたものと考えられる。遺物は床面から832・836の上器及び、76・77の石器が出土地している。

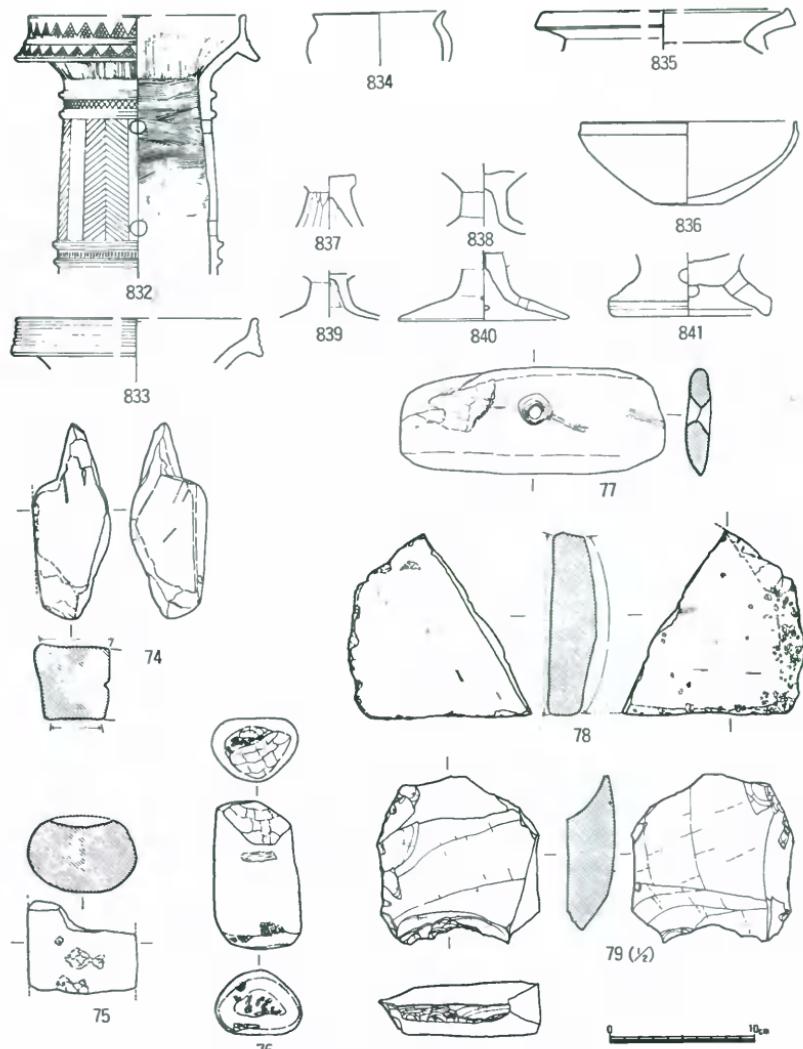
36B住居址僅かに残存した壁体溝から想定されたもので推定径約750cmの円形を呈し、主柱穴は7本抽出出来た。

No.36 B
No.145図

No.36 住居址 (1/160)

奥坂遺跡

36C住居址上記同様、壁体溝から想定されたもので推定長軸約800cmのやや楕円形を呈すもので、主柱穴は6本を抽出することが出来た。



第146図 No. 36 住居址出土遺物 (1/2, 1/4)

遺物は36住居址全体から第146図に示すものが出土しており、その時期幅は奥・後・IIの特徴をもつ835・841から奥・後・IVの837～840までのものが含まれていた。しかしながら36A床面出土の遺物832・836等は奥・後・IIIの範疇のものと考えられ、前述のNo.37住居址との切り合い

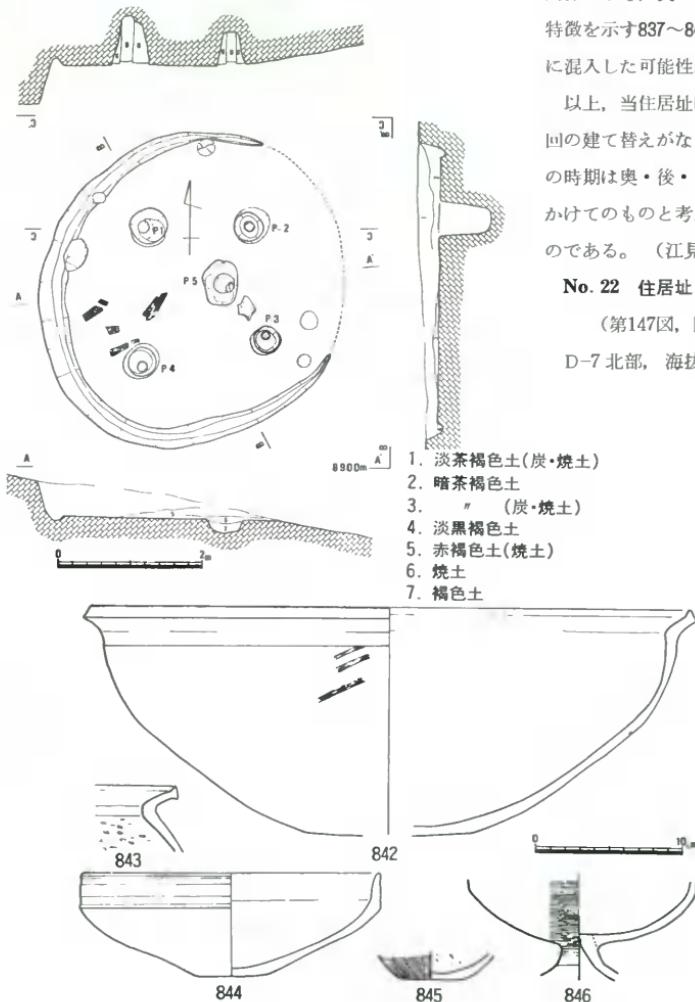
関係からも、奥・後・IIIの特徴を示す837～840は後世に混入した可能性が強い。

以上、当住居址は最低3回の建て替えがなされ、その時期は奥・後・II～IIIにかけてのものと考えられるのである。（江見正己）

No. 22 住居址

(第147図、図版67)

D-7 北部、海拔88.15～



第147図 No. 22 住居址 (1/80)・出土遺物 (1/4)

奥坂遺跡

88.75m間に位置し、No.21住居址と平列する堅穴式住居址である。東側斜面部が自然流土により消失しており、壁体溝は一巡しない。長軸(425)cm、短軸413cm、床面積13.78m²、床面海拔高は88.30mを測り、住居平面形は不整円形を呈し、柱穴にもバラツキが認められる。建て替えが1回行われており、その後火災を受け放棄された形状を留める。

屋内は壁体溝・主柱穴・中央穴からなり、P-1～P-4が主柱穴を構成し、中央穴P-5が伴う。壁体溝・主柱穴・中央穴に重複痕跡が認められ、拡張ではない建て替えが行われている。

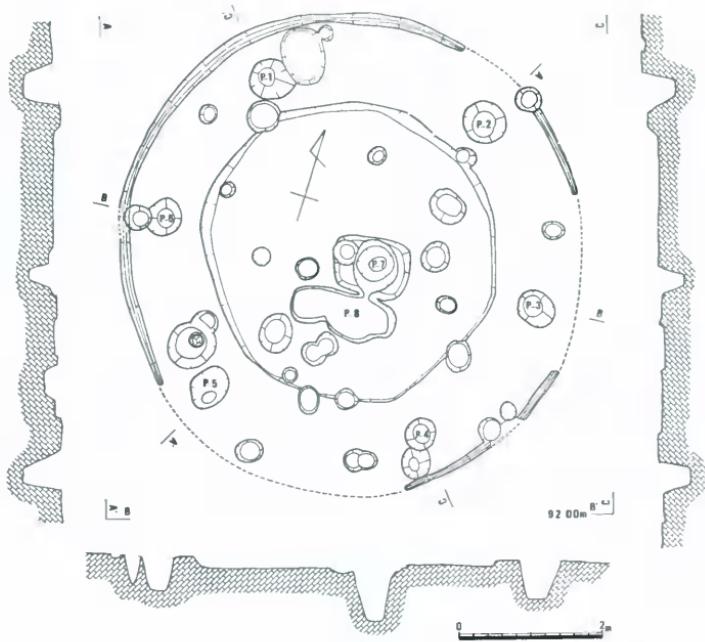
遺物は、火災を受け同時使用を示す生活用具が検出された。中央穴東西に作業台石、主柱穴より外側壁体溝に沿って土器が認められる。

遺物は大小の鉢形土器が2点、高杯形土器1点がかろうじて原形をとどめるものである。

時期は奥・後・Ⅲに比定できる。

No. 62 住居址 (第148・149図、図版54-2)

C-5ほぼ中央北部、海拔91.30～91.50m間に位置し、奥・中・ⅢのNo.123住居址を切つづくられた堅穴式住居址である。長軸(655)cm、短軸650cm、床面積約33.16m²、床面海拔高は



第148図 No. 62 住居址 (1/80)

91.30mを測る。

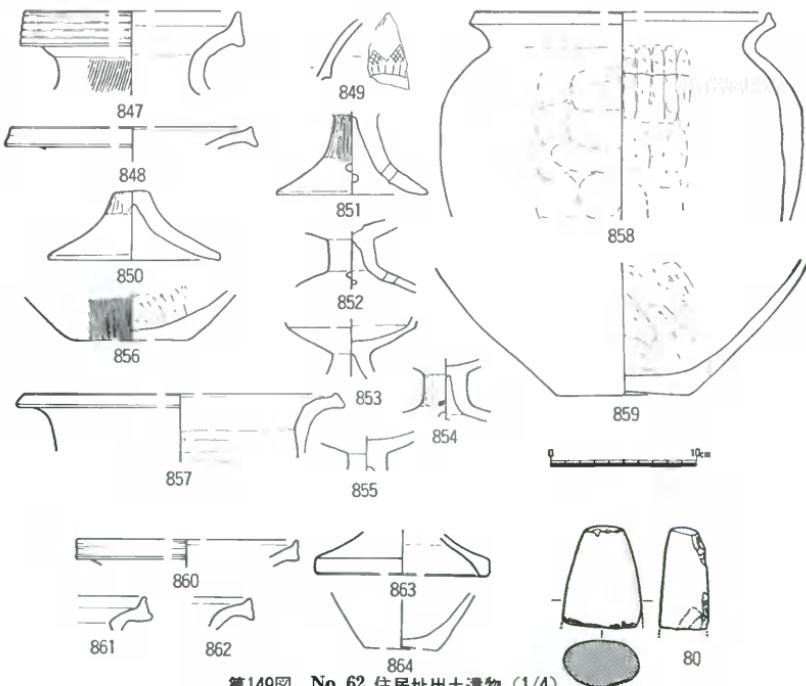
屋内は壁体溝・主柱穴・中央穴・土壇・ベッド状遺構からなり、P-1～P-6が主柱穴を構成し、中央穴P-7、浅い土壇P-8が伴う。前述した規模の円形プラン内に長軸約400cmの6角形を呈する一段低い床面が存在し、主柱穴はその6角形の角部にあたる外側部分に配置されている。柱間は同数値を示すことなく、235cmより310cmの幅が認められる。中央穴は上縁隅丸方形で浅く、円形の深い中央穴がその内に掘り込まれている。そして、南側に145×60cmで深さ4cmの浅い土壇が併設されており、炭化物が全面に分布していた。壁体溝・柱穴の重複は認められない。

848・858・859が床面出土であり、849～852・854・855・862が主柱穴より出土している。他は主柱穴以外の住居址内柱穴よりの出土である。

時期は奥・後・Ⅲ・新相～奥・後・Ⅳ・古相に比定できる。

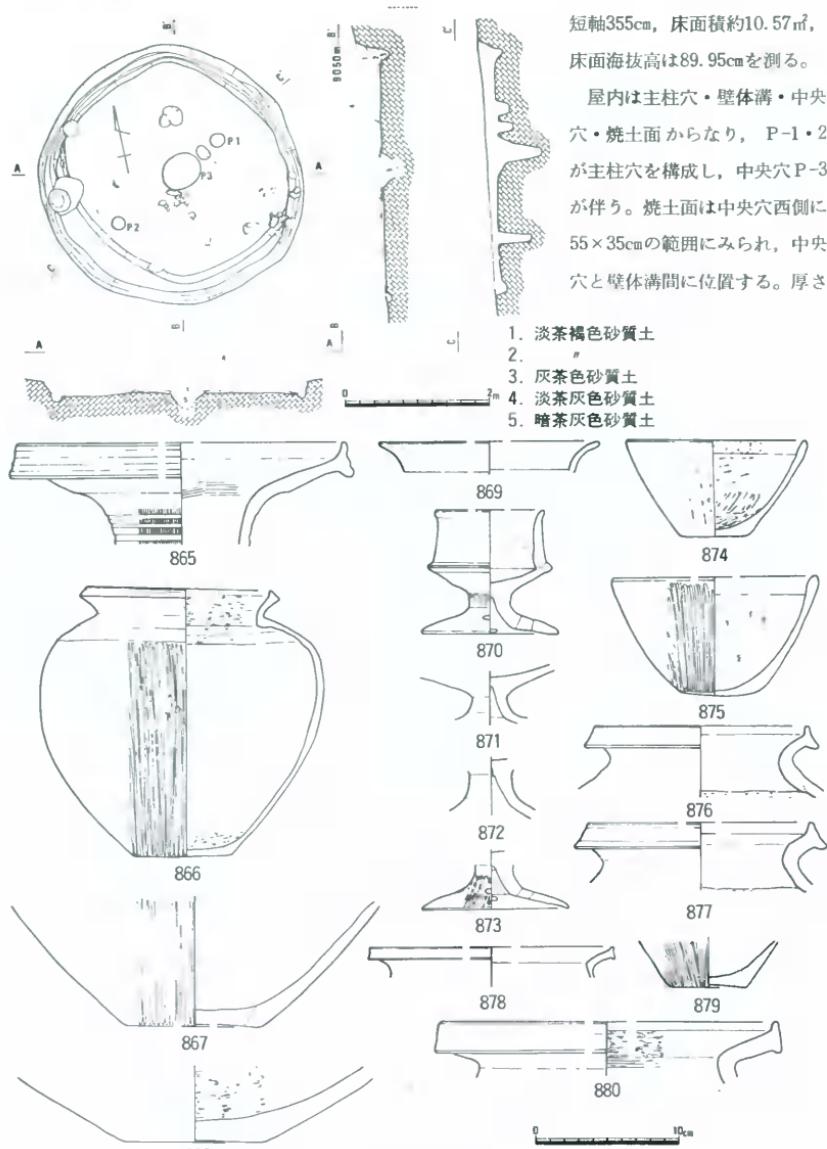
No. 80 住居址（第150図、図版68）

B-3東側、海拔89.90～90.30m間に位置し、比較的小型の壁穴式住居址である。長軸360cm、



第149図 No. 62 住居址出土遺物 (1/4)

奥坂遺跡



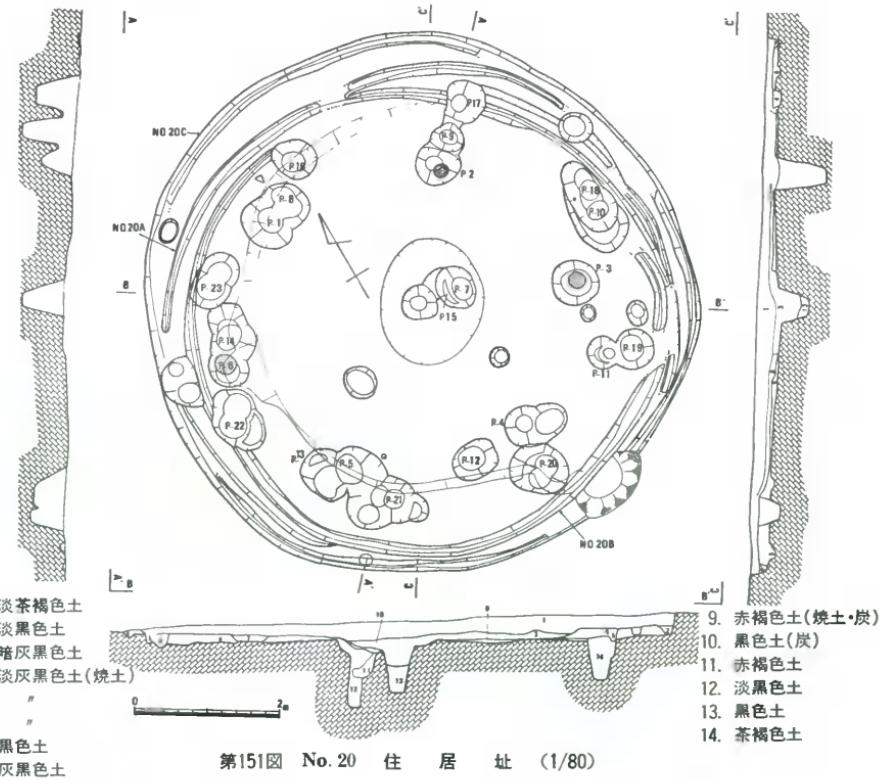
第150図 №. 80 住居址 (1/80)・出土遺物 (1/4)

約5cmの貼り床が認められ、それを除去すると、直径約300cmの円形住居址の壁体溝が検出され、床面積約7.07m²を測る。No.80A住居址に比べて約3.50m²ほど狭い平面形を呈し、人間1人のスペースと考えることができる。

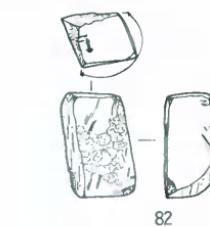
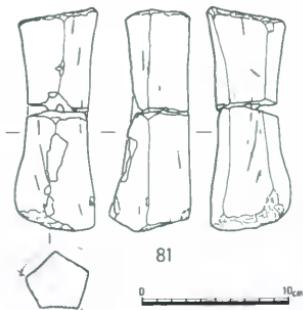
遺物はNo.80A住居址に伴うもので、住居址東側と中央穴南側に集中して出土している。866は西側壁体溝上よりの出土である。880も866のすぐ南側で壁体溝近くより出土している。住居址東側出土の土器に870・874～877がみられ、867・868は中央穴南側よりの出土である。869・872・878等が堆積土中よりの出土である。上下に拡張する甕形土器の口縁部、上束式の要素をとどめる長頸壺の存在等よりして、時期は奥・後・Ⅲの新相に比定できる。

No. 20 住居址 (第151・152図、図版69)

C-6北東端、海拔89.60～90.30m間に位置し、No.46・36・37・23・17住居址等と共に尾根筋



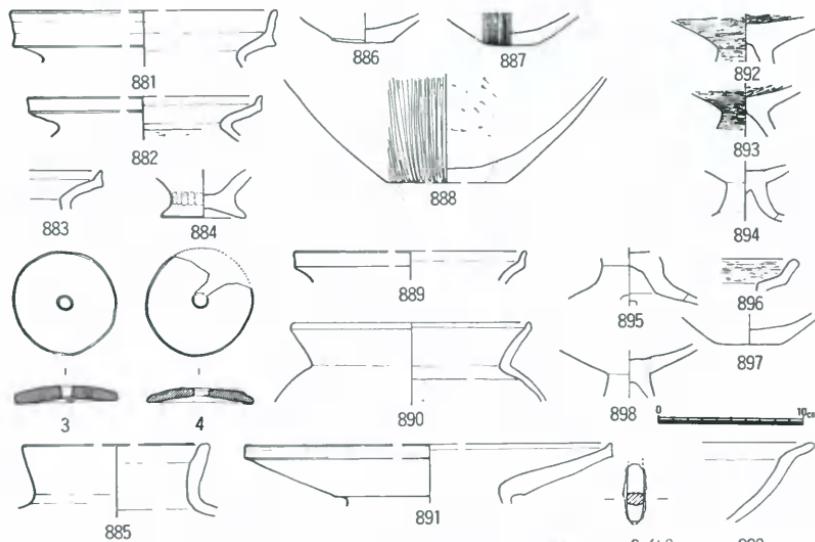
奥坂遺跡



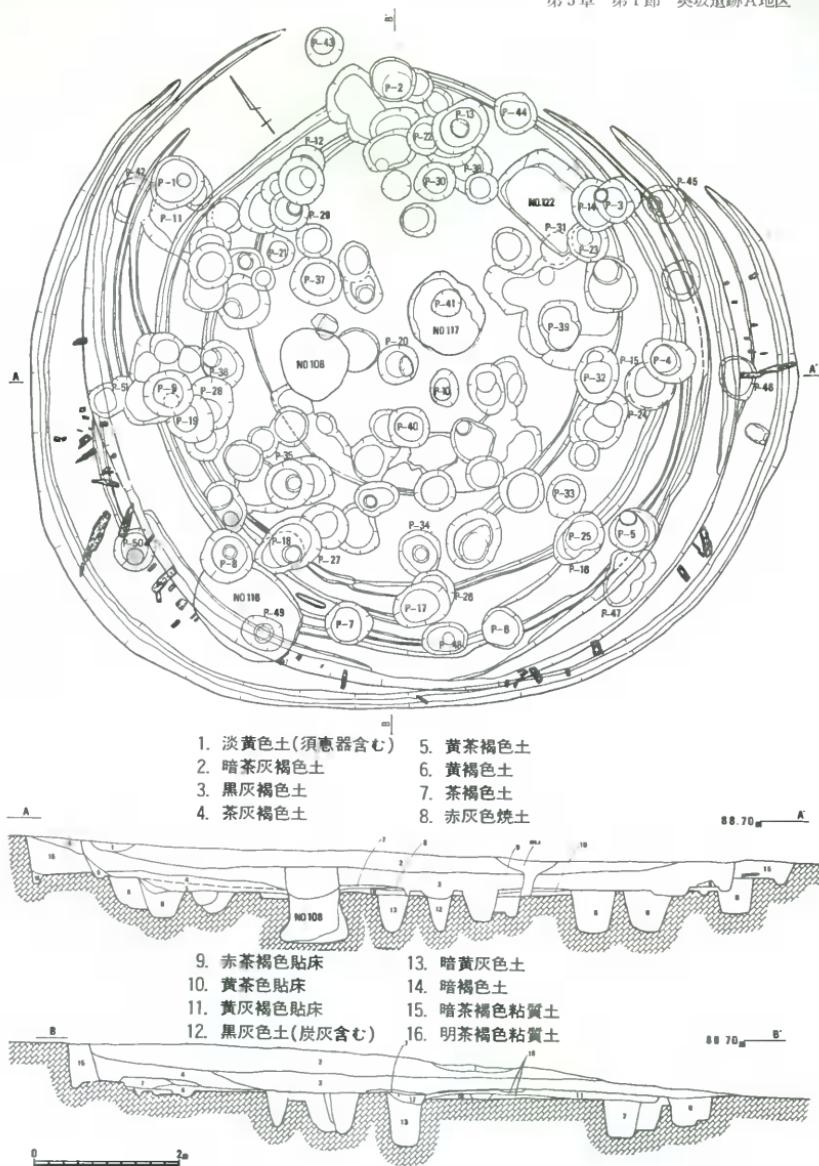
に直線的に並ぶ竪穴式住居址である。3軒以上の切り合ひ、重複が認められ、建て替えが1回、縮少の1回を推定することができる。

No.20Aは最も新しく、長軸660cm、短軸660cm、床面積34.19m²、床面海拔高89.80mを測る。P-1～P-6が主柱穴となり、中央穴P-7が伴う。P-2・3・6には柱痕をとどめる。No.20B住居址は、No.20A住居址に建て替えられた形であり、P-8～P-14が、主柱穴を構成している。No.20Cは最も古く、長軸755cm、短軸750cm、床面積44.39m²、床面海拔高90.05mを測る。P-16～P-23が主柱穴を構成し、P-15西側ピットが中央穴となる。両中央穴の周辺は170×150cmの範囲で若干凹部を形成しており、上位ではその範囲を上まわる円形の炭分布範囲が認められた。

遺物は土器小片、紡錘車2点、鉄製品1点、砥石2点と比較的バランスよく出土している。大半が堆積土中からの遺物であり、3がNo.20A住居址、890がNo.20C住居址から



第152図 No. 20 住居址出土遺物 (1/3, 1/4)



第153図 No.4 住居址 (1/80)

奥 坂 遺 跡

の出土である。3・4は直径約7cm、円孔約1cmを測り平面的には非常に類似するが、器壁・重量において異りをみせ、3が29.95g、4が47.42gを測る。両者とも土器片等でなく、紡錘車として製品化されたものである。

81・82はほぼ全面を使用された砥石であり、81は流紋岩を利用して作られており、最大長151.85mm、最大幅53.45mm、最大厚32.20mm、重さ440gを測る。

9は不明鉄器であるが、最大長29.80mm、最大幅9.8mm、最大厚6.5mm、重さ3.76gを測る。

時期は奥・後・Ⅲ～奥・後・Ⅳにかかると考えられる。

(高畠)

No. 4 住居址（第153図、図版10-1・2）

東向きの緩斜面を利用した住居址である。検出された壁体溝、柱穴の位置や切り合い関係から、少なくとも10回以上の建て替えを想像できる。検出した各住居址の概略を以下に示す。

検出された住居址の中で一番新しい時期のA住居址の覆土は、大別して4層にわかれる。そのうちの2層及び3層上部には、土器溜りを形成する状態ではないが、多量の土器片（整理箱で12箱分）が出土している。床面の中央部分には黄灰褐色土の貼り床をもち、炭混りの黒褐色土が詰ったP-10（深さ56cm）を中心ピットとし、P-1～9の9本柱で構成される住居址である。長軸約960cm、短軸890cmの楕円形を呈し、斜面下部では床面の一部及び壁体溝が削平されている。床面積は約73.86m²、P-1・5・8などに柱痕跡（径約10cm）を認めた。柱穴は床面からの深さが40～60cmと多少のばらつきがある。

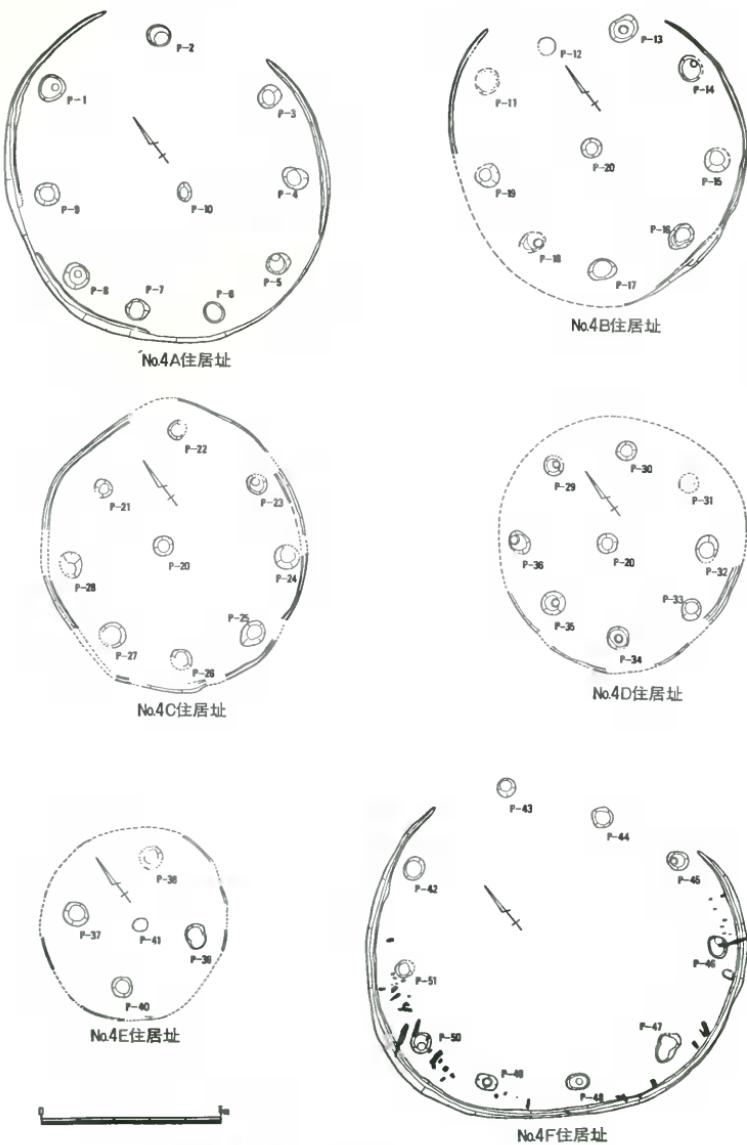
B住居址は、A住居址の貼り床下に検出したP-20を中心ピットとし、P-11～19の9本柱である。柱穴は、A住居址のそれと近接して検出され、P-14・15・19などが切り合い関係をみせた。長軸約880cm、短軸推定約780cmの不整楕円形プランをもち、床面積は推定73.86m²を測る。

C住居址はP-21～28の8本柱である。8本のうちP-24・25・27の3本は、B住居址と競合すると思われる。また、位置的にもB住居址と同様にP-20が中央ピットの可能性が強い。プランは径約752cmの不整円形を呈し、床面積は約60.79m²を測る。

D住居址はP-29～36の8本柱で、P-29・34～36の4本の柱穴底には径12～13cmの落ち込みをもつ。P-31はNal22土壤と競合していると思われ、推定である。また、壁体溝はA～C住居址に伴う柱穴等でほとんど削平されている。床面積推定37.59m²。

E住居址はP-41を中心ピットとし、P-37～40の4本柱である。平面形態は推定ながらほぼ円形を示し、径約528cm、床面積は21.88m²を測る。P-41はNal17土壤を切って存在する。柱穴の深さはいずれも床面から50cm前後とそろっている。

F住居址はこの地点の複合した住居址の中で最大であり、長軸約1,080cm、短軸約900cmの不整円形を呈する。柱穴はP-42～51の10本柱を検出した。柱穴内の埋土は、他の住居址のそれが比較的茶褐色に近い色をしているのに対し、地山に良く似た黄色に近く区別される。床面のは



第154図 No. 4 住居址変遷図 (1/160)

奥坂遺跡

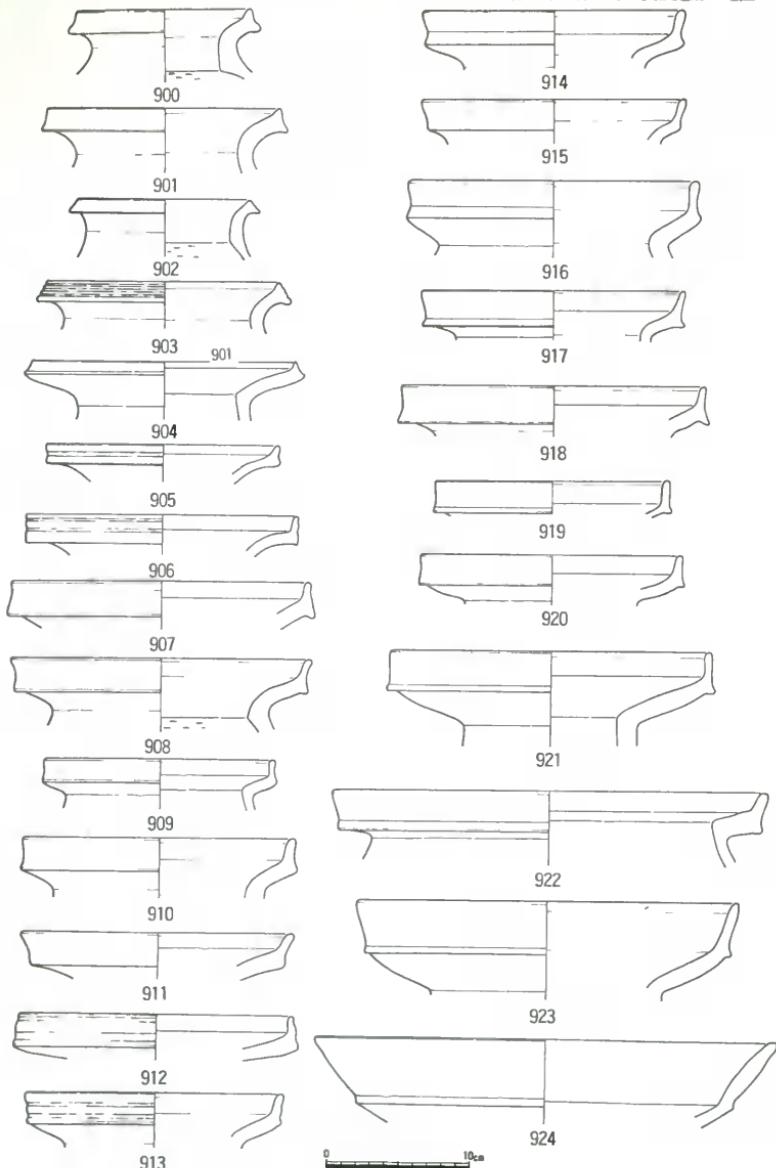
とんどはA住居址などによって削平されているが、残った部分の床面密着の炭化材の存在から、火災に会ったことが知れる。また、床面には1、2の壁体溝が部分的に残り、A-Eと同様の変遷を推測させる。

以上の状況をもとにNo.4住居址全体について、いまいちど詳しくみてみたい。同心円状に広がりを見せる壁体溝が、住居址の拡張建て替えの結果とみるならば、この地点における占地には少なくともⅡ期以上の変遷が考えられる。その1つは、A住居址に切斷され、底面の壁体に近い部分が一部しか残存しないF住居址で廃絶されるⅠ期目である。いま1つは、P-37~40の4本柱をもつE住居に始まり、D、C、Bを経て(P-1~P-9の9本柱をもつ)A住居で廃絶されるⅡ期目である。しかし、A-A'断面図でわかるように、F住居の底面は廃絶後E~A住居によってかなりの削平を受け、F住居に至る拡張があったとしても過程は不明である。ただ、第153図に示した住居址の各柱穴以外の柱穴も多く、Ⅱ期目の住居址以上の数の拡張があった可能性も強い。

次に出土遺物からみると、前述のようにA住居址覆土のものが大半である。各住居址に伴う柱穴出土の土器を検討したが、量も少なく時期を決定できる資料に乏しい。ただ、No.4住居址と競合して検出されたNo.108・116・117・122土壤との切り合い関係及び出土遺物から考えると、次のようなことがわかる。No.108土壤は、A住居址の覆土である第3層上面から切り込まれている。No.116土壤はE住居址を切り込み、A住居址に切られている。No.122土壤はD住居址P-31、C住居址P-23、B住居址P-14などに次々切り込まれており、その位置がE住居の壁体に接して内側にあたるため、この住居に伴う可能性もある。またNo.117土壤は、E住居址P-41に切られている。住居址の新旧関係であるF→E→D→C→B→Aと土壤を組み合わせると、No.117→F→No.116→No.112・E→D→C→B→A→No.108となる。個々の土壤の詳細については後述するが、Ⅱ期目のEからAまでの住居址が、No.122とNo.108土壤の間に展開されたとすれば、弥生時代後期中葉から後葉にかけての比較的短期間に少なくとも4回以上の建て替えがなされたことになる。また、F住居址の覆土がNo.116土壤に切られているため、弥生時代後期中葉にはⅠ期目の住居址の終焉をむかえたことが知れる。参考までに示した、おもにA住居址覆土中の土器第155~161図では、壺形土器900~904、甕形土器の口縁端部があまり肥厚しない950・952・956など、また鉢形土器1059・1060・1063・1068など、高杯形土器1073が弥生時代後期前半の時期に位置づけられ、Ⅰ期目の最初の住居占地が後期初めにまで遡る可能性もある。また、壺形土器、高杯形土器の中では比較的後期後半のものが多く、Ⅱ期目の各住居の存続期間を示唆する。

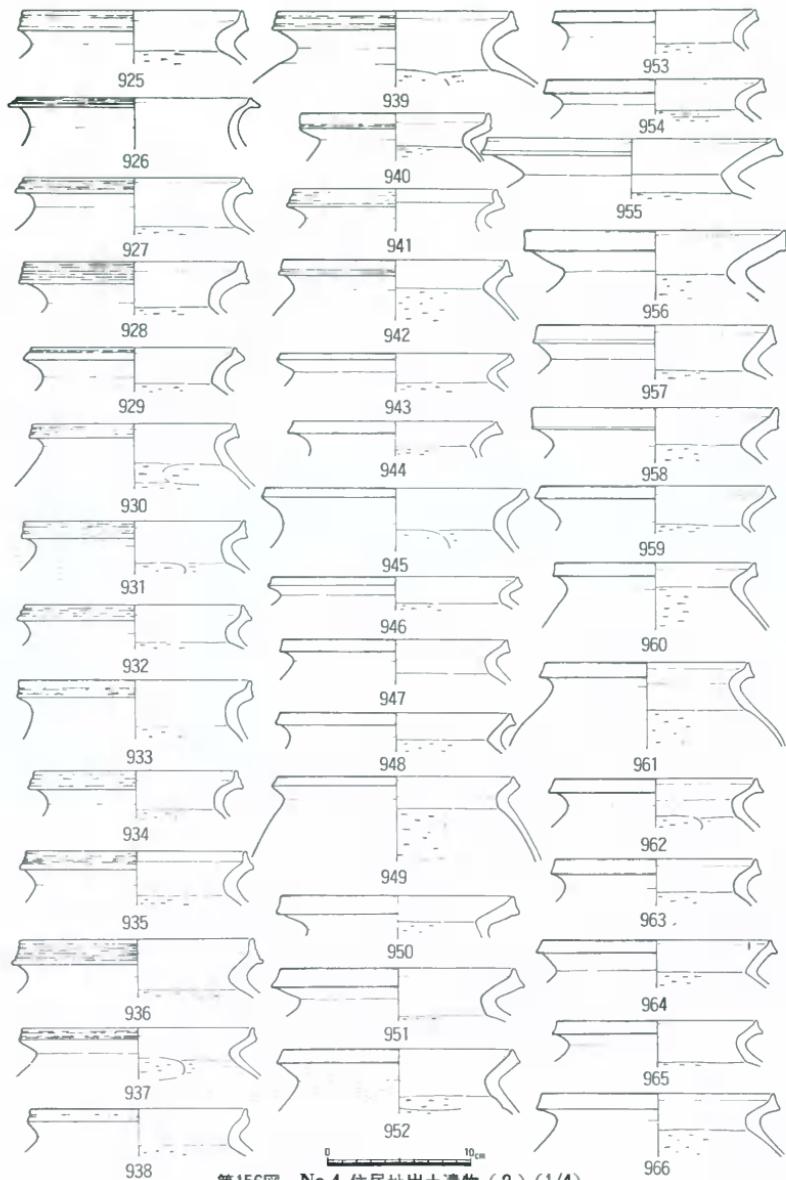
土器以外の遺物としては、石鏃、砥石、石斧、石錘、玉、鉄器などが出土している。これらのうち、砥石85がD住居址P-30西隣りの柱穴、石錘90がA住居址床面から出土したほかは、

第5章 第1節 奥坂遺跡A地区



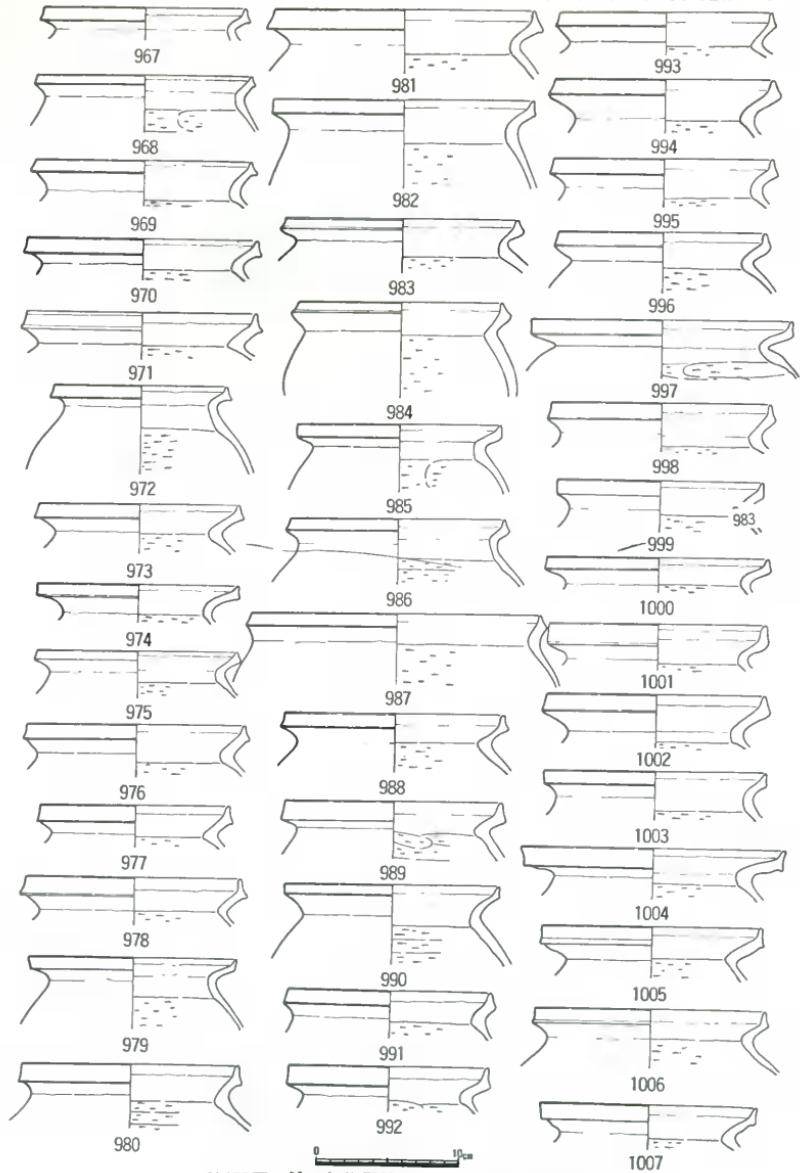
第155図 No. 4 住居址出土遺物 (1) (1/4)

奥坂遺跡



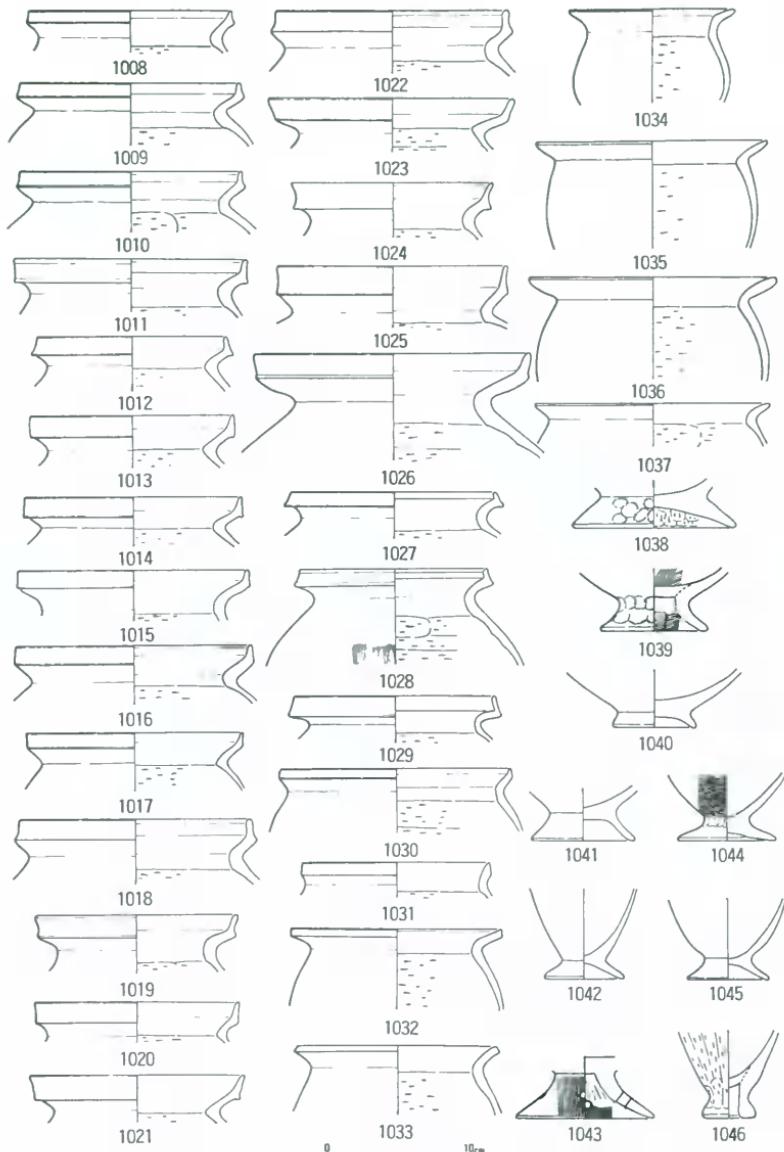
第156図 No.4 住居址出土遺物(2)(1/4)

第5章 第1節 奥坂遺跡A地区



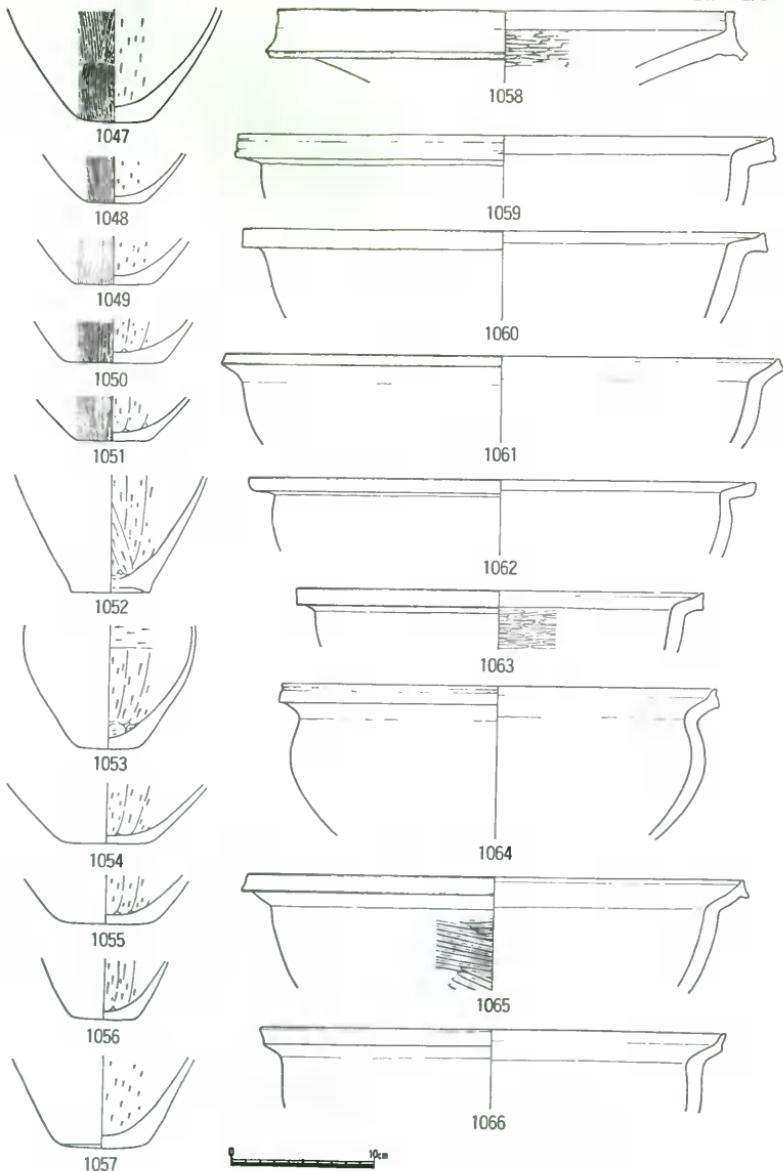
第157図 No.4 住居址出土遺物(3) (1/4)

奥坂遺跡



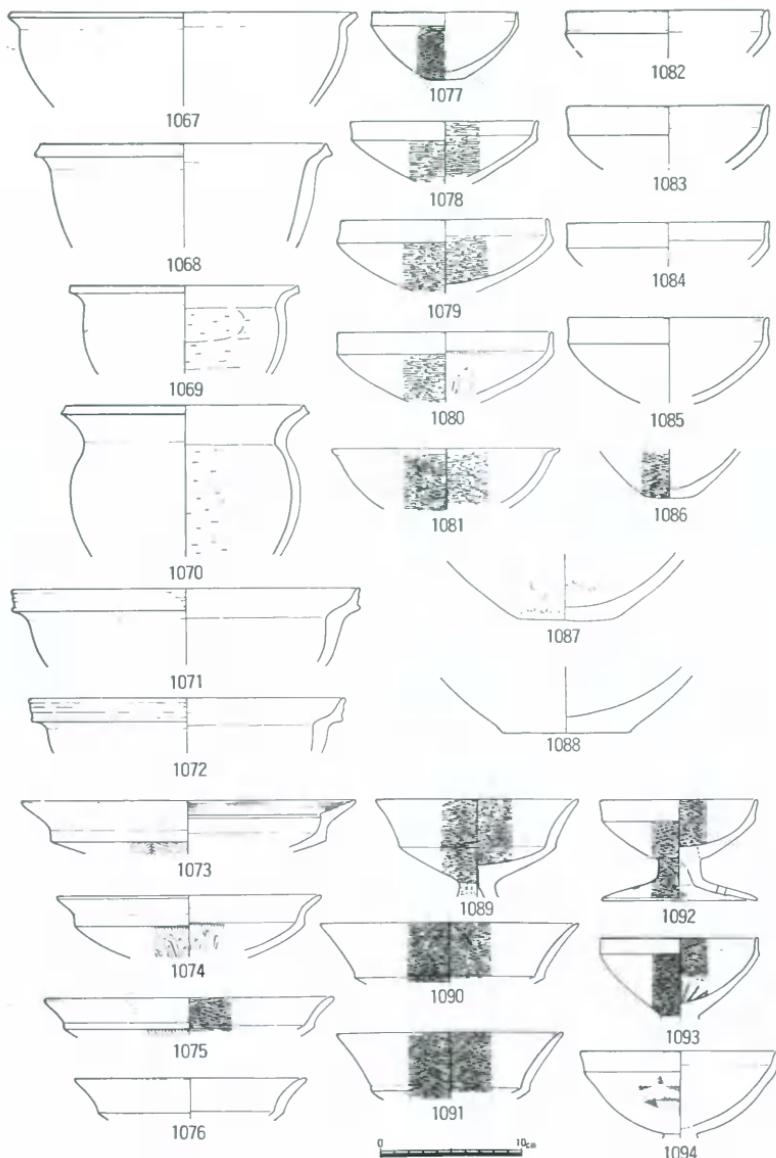
第158図 No.4 住居址出土遺物(4) (1/4)

第5章 第1節 奥坂遺跡A地区

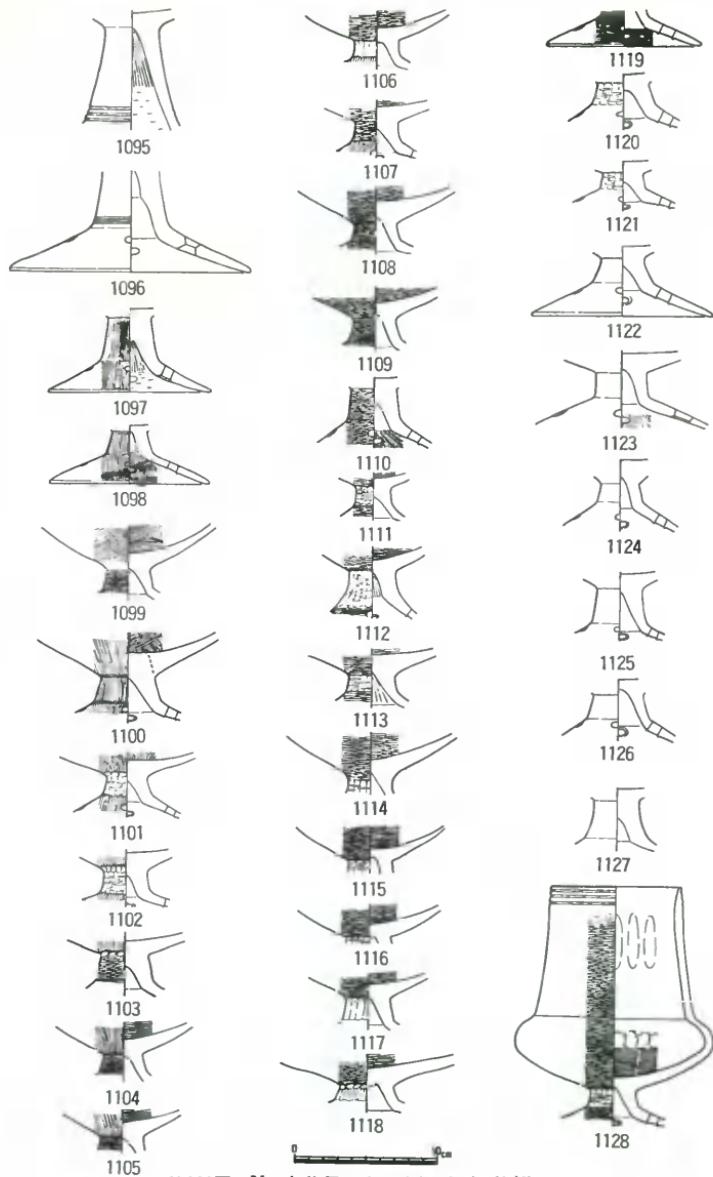


第159図 No.4 住居址出土遺物(5)(1/4)

奥坂遺跡

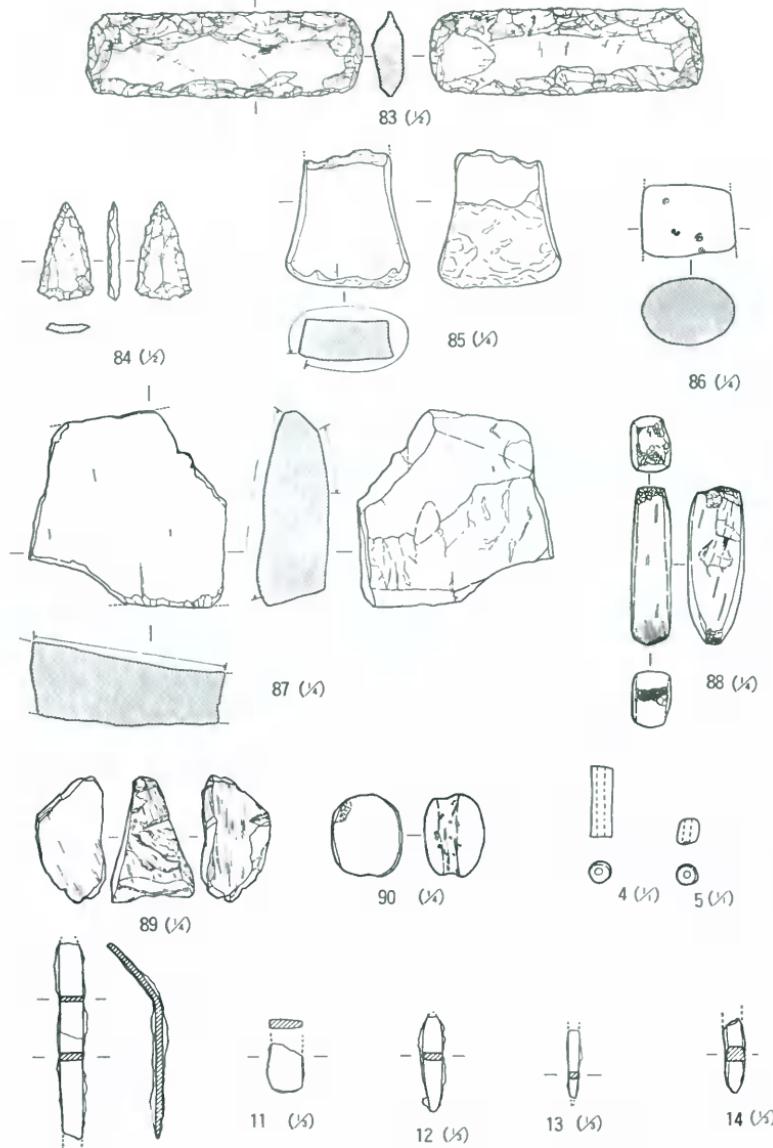


第160図 Ne. 4 住居址出土遺物 (6) (1/4)



第161図 No. 4 住居址出土遺物 (7) (1/4)

奥坂遺跡



第162図 No.4 住居址出土遺物 (8) (1/1, 1/2, 1/3, 1/4)

A住居址の覆土に伴っての出土である。

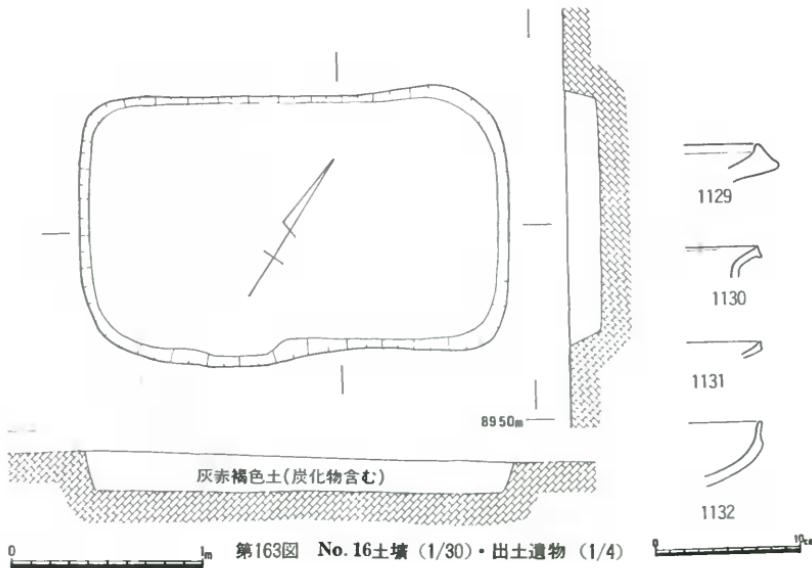
83は石槍を転用した工具と思われる。表裏ともに局部的に研磨痕が残る。刃部は短辺の一方のみで、他の3辺は刃潰しの跡がうかがえるため、石庖丁といよりはスクレーバーのような用途が考えられる。83・84とともにサスカイト製。86は刃部と基部が欠損した玢岩製の蛤刃石斧である。85・87・89はいずれも流紋岩である。88は柱状石斧から転用された叩き石(結晶変岩)である。90は花崗斑岩製で約205gを測る。管玉は碧玉製、小玉は青色のガラス製である。鉄器は折れ曲った10がヤリガンナの可能性があるほかは、断片ばかりで不明である。(柳瀬)

(2) 土 壤

No. 16 土 壤 (第163図)

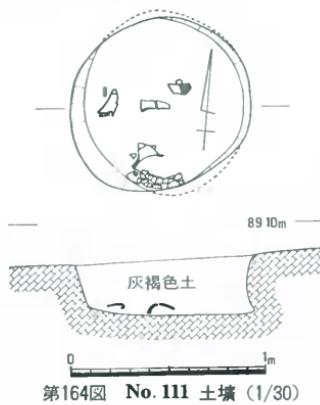
B-7で検出した隅丸長方形を呈する土壤で、No15溝とNo60建物の中間に存在していた。海拔89.25~89.50mの間に位置し、やや大規模な形態になっていた。検出面での長径は約223cm、短径は130~138cmを測り、深さは17~20cmと極めて浅い。土壤内には炭化物を含む灰赤褐色土が堆積し、土器片が出土した。

この土壤から出土した土器は、いずれも小破片である。1129と1130は器壁の厚さが相違するが、どちらも壺形土器の口縁部である。口縁端部は拡張して、全体にヨコナデを施している。1131は甕形土器、1132は鉢形土器の破片と推定される。どちらも全体にヨコナデを施し、褐色



第163図 No. 16 土壤 (1/30)・出土遺物 (1/4)

奥坂遺跡



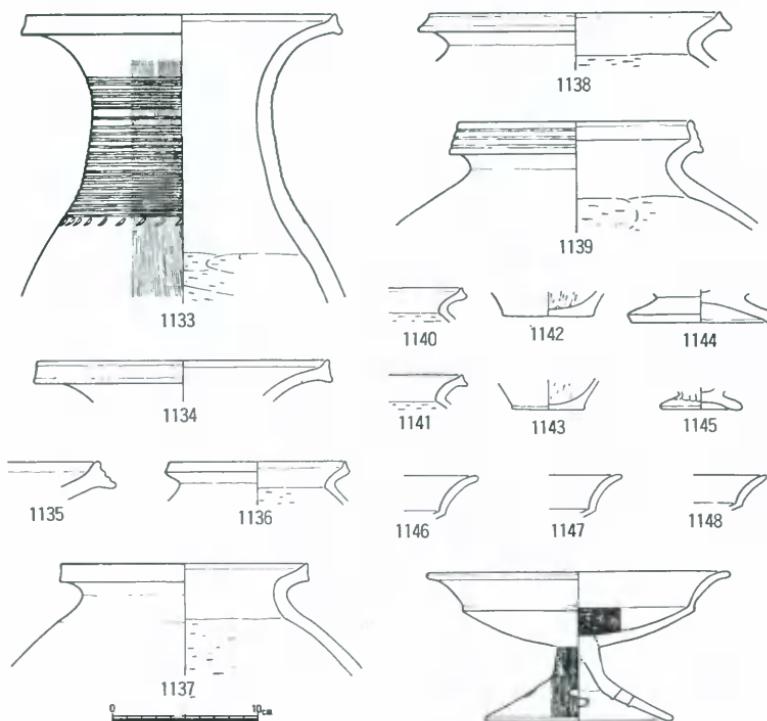
第164図 No. 111 土壙 (1/30)

を呈している。このNo.16土壤から出土した土器は、奥・後・Ⅲの新相に比定される。

No. 111 土 壙 (第164・165図)

B-8の調査範囲境界部分で検出した土壤である。海拔88.75~89.00mの間に位置し、平面形は円形を呈していた。検出面での径は約92cmを測り、深さは約30cmであった。この土壤の壁面は部分的に袋状を呈し、土壤内には灰褐色土が堆積して比較的多くの土器が出土した。

1133から1135は、「長頸壺」と呼ばれる壺形土器の破片である。大きな破片の1133は、外面の頸



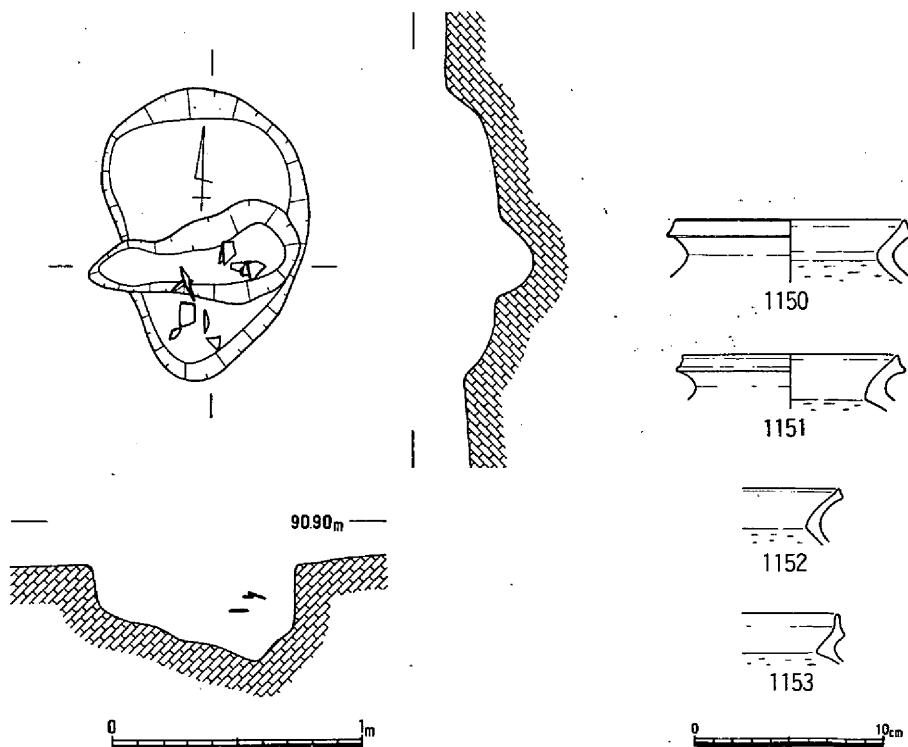
第165図 No. 111 土壙出土遺物 (1/4)

部に縦方向のハケメ上面に螺旋を描く凹線を施している。頸部と胴部の境に位置する凹線直下には、ヘラ状工具による刺突文がめぐらされている。外面の胴部上位には縦方向のハケメを施し、内面の胴部上位には横方向の粗いヘラケズリを行っている。1136から1139は、比較的器壁の厚い甕形土器である。口縁端部の形態には、わずかに拡張して外面に浅い窪みが認められるものと、斜め上方へ大きく張り出して外面に3条の凹線を有するものがある。口縁部はヨコナデを施し、内面の胴部は横方向のヘラケズリを行っている。1146から1149は、1149の器形に代表される高杯形土器である。杯部と脚部は、別々に製作して刺し込んでいる。杯部の口径は大きいが、脚部には短脚化の傾向が認められる。口縁部と脚端部はヨコナデを施し、ハケメが認められているのは杯部の内面と脚部の外面である。胎土には水漉粘土を使用し、全体に丹塗りを施している。

これらの土器は、奥・後・Ⅲの新相に比定される。

No. 127 土 壤 (第127図)

A-4の北西隅で検出した不整形な土壙である。海拔90.75～91.00mの間に位置し、長径はほぼ南北方向になっていた。この土壙は、長径の方向が異なる2個の土壙が重複していた。つまり、長径約125cm、最大短径約90cmを測る橿円形に近い形態の大きな土壙を切って、長径85cm、



第166図 No. 127 土壙 (1/30)・出土遺物 (1/4)

奥坂遺跡

最大短径40cmの細長い土壙が存在していた。土壙内には黒褐色土が堆積し、底部から浮いた状態で土器が出土したが、いずれも小破片である。

図化するのが可能であったのは、甕形土器の口縁部ばかりである。斜め上方へ張り出した口

縁の端部は、拡張して外面に浅い窪みが認められる。口縁部は全体にヨコナデを施し、内面の胴部は横方向のヘラケズリを行っている。これらの土器は、奥・後・Ⅲの新相に比定される。

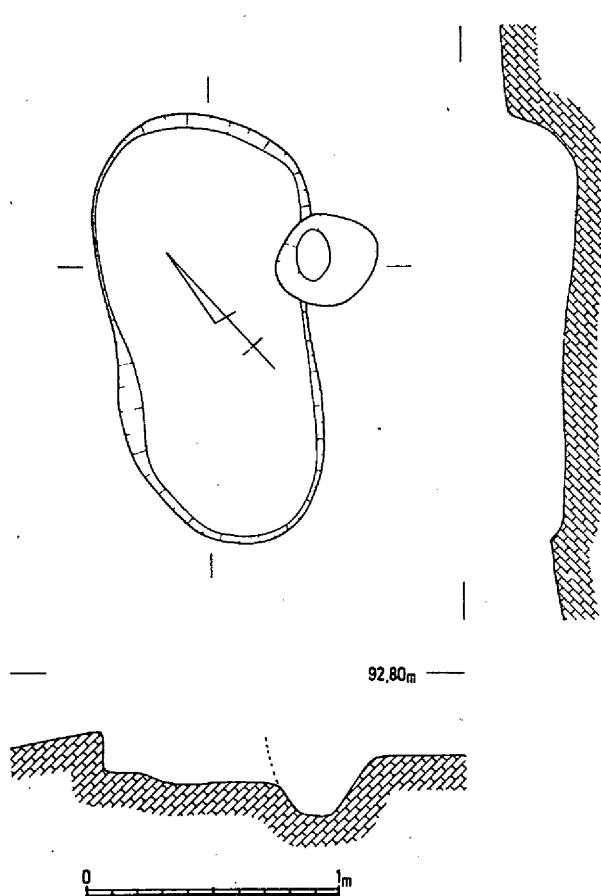
No. 56 土壙 (第167・168図)

B-4の北西隅で検出した不整形な形態を呈する土壙である。東側に位置する壁面は、柱穴と推定される小規模な土壙に新しく切られていた。この土壙の周辺には、No.57 土壙や No.136 土壙が近接して存在していた。土壙の規模は、長径約 170 cm、最大短径約 86 cm を測り、検出面からの深さは約 20 cm であった。この土壙の底部は平坦ではなく、中央部がわずかに盛り上がって高くなっていた。この土壙から出土した遺物は、少量の土器破片である。図化することができたのは、1154 の鉢形土器と 1155 の甕形土器である。これらは、奥・後・Ⅳ の新相に比定される。

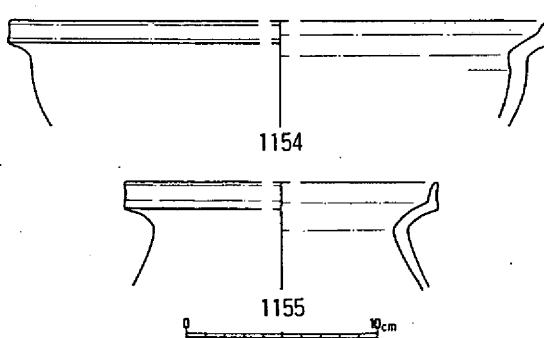
(福田)

No. 59 土壙 (第169図)

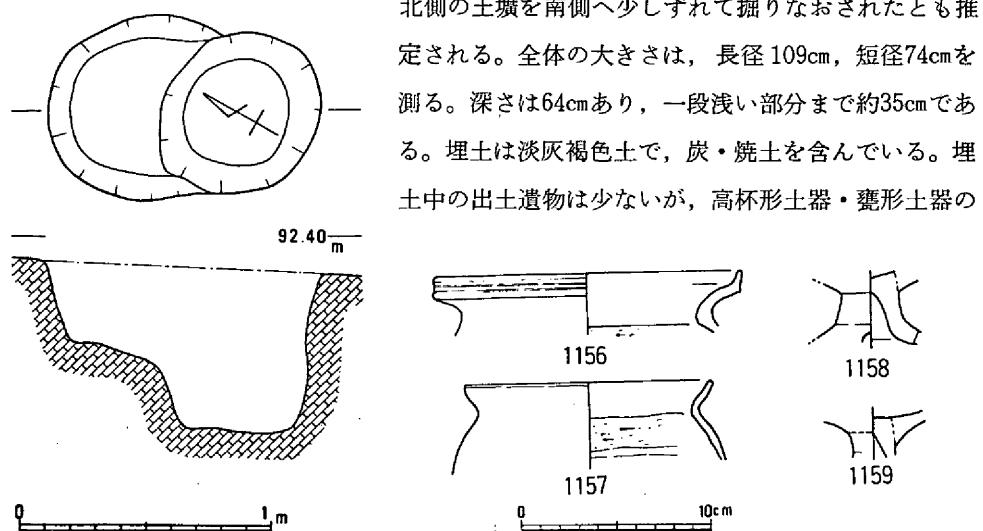
C-4 に位置し、円形の土壙が二つ重なった形になっている。



第167図 No. 56 土壙 (1/30)

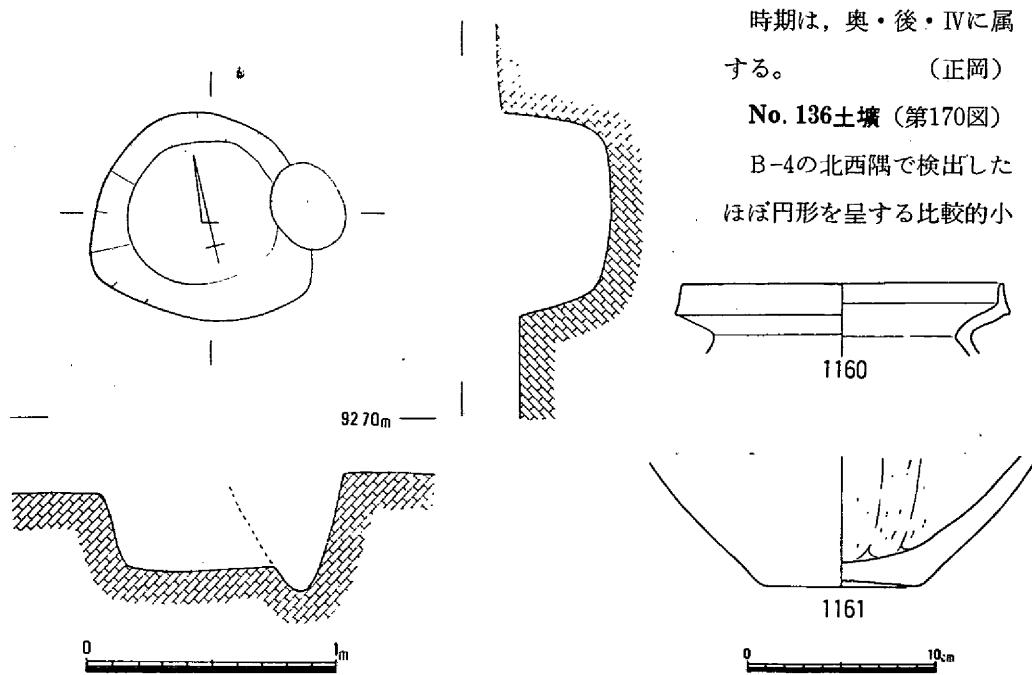


第168図 No. 56 土壙出土遺物 (1/4)



第169図 No. 59 土壙 (1/30)・出土遺物 (1/4)

破片がある。甕形土器の口縁部は、「く」字状に外反するだけのもの1157と上方に湾曲しながら外反し、口縁端部を拡張するもの1156がある。胎土には細砂を含む。高杯形土器は2点とも短脚のもので、1158には細かい砂粒を少し含むが、1159は精製粘土である。色調は、甕形土器が黄橙色、高杯形土器が橙色を呈する。



第170図 No. 136 土壙 (1/30)・出土遺物 (1/4)

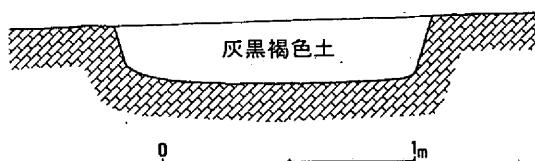
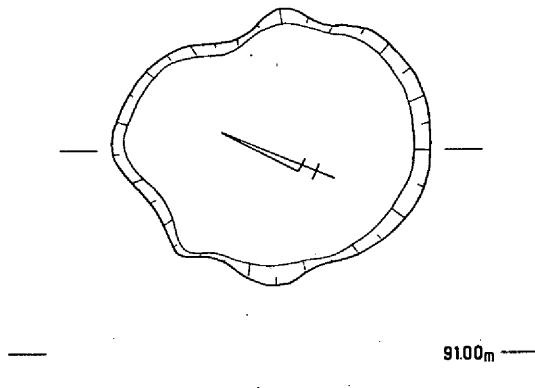
時期は、奥・後・IVに属する。(正岡)

No. 136 土壙 (第170図)
B-4の北西隅で検出した
ほぼ円形を呈する比較的小

奥坂遺跡

さな土壙である。東側の壁面は、柱穴と推定される小規模な土壙に切られていた。検出面での最大径は約85cmを測り、深さは約40cmになっていた。

この土壙からは1160の甕形土器と1161の底部の破片が出土している。時期は、奥・後・IVの新相に比定される。



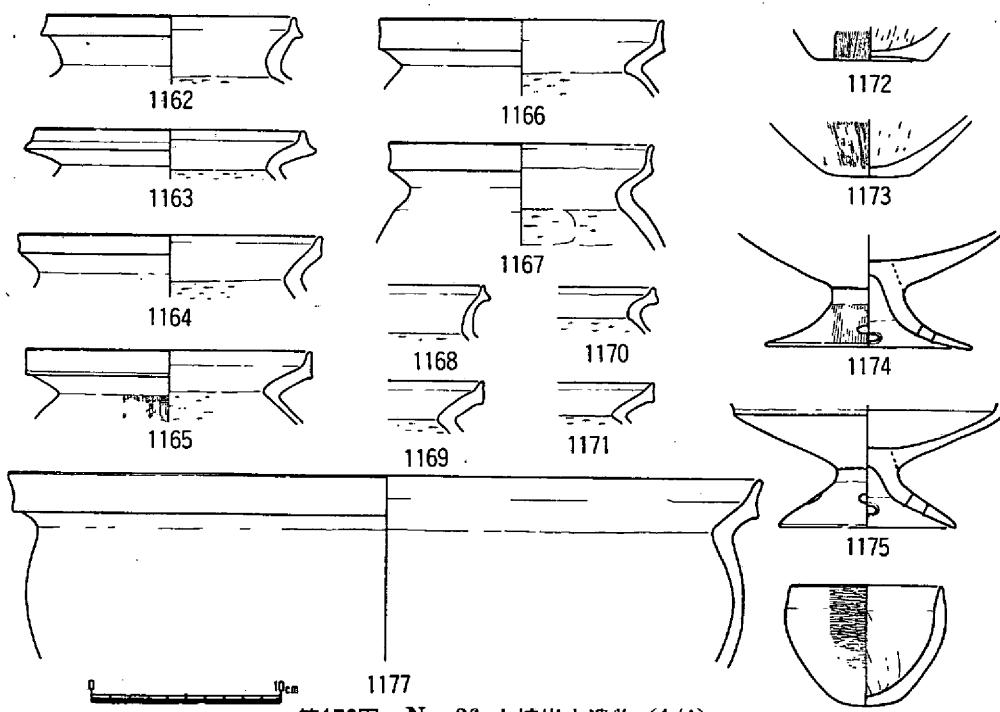
第171図 No. 26 土壙 (1/30)

No. 26 土 壙 (第172図)

B-6で検出した不整形な形態を呈する土壙である。海拔90.25~90.50mの間に位置し、No.20住居址に近接していた。検出面での長径は約121cm、最大短径は約110cmを測り、深さは約25cmであった。

この土壙の断面形は上に開いた「U」字形を呈し、灰黒褐色土が堆積していた。

土壙から出土した遺物は、いずれも土器片である。1162から1171は、甕形土器の口縁部である。斜め上方へ張り出した



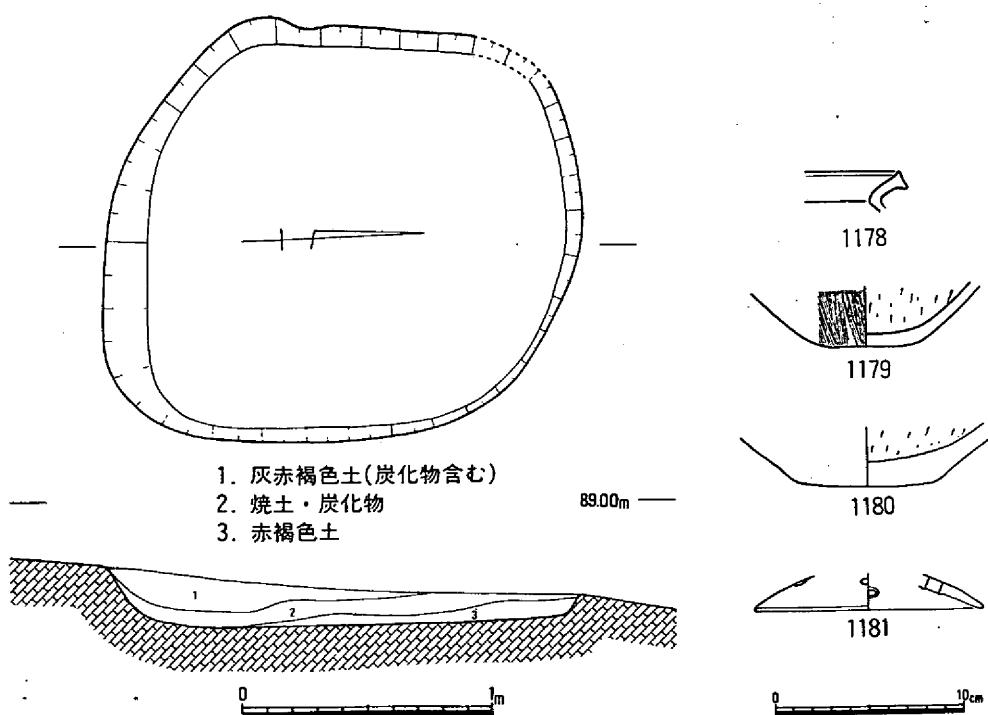
第172図 No. 26 土壙出土遺物 (1/4)

口縁の端部は、短く拡張するものと大きく立ち上がるものが認められ、外面には浅い窪みが存在する。口縁部はヨコナデを施し、内面の胴部は横方向のヘラケズリを行っている。1172と1173は、平底を呈する壺形土器または甕形土器の底部である。外面には縦方向のハケメを施し、内面には縦方向のヘラケズリを行っている。1174と1175は、高杯形土器の杯部下半から脚部の破片である。胎土には水漉粘土を使用し、短脚を呈している。1176は口径18.2cm、器高5.3cmを測る、水漉粘土を使用した小型の鉢形土器である。外面には横方向の短い単位のヘラミガキが頗著に認められ、内面は指頭によってナデている。1177は大型の鉢形土器である。口縁部は全体にヨコナデを施しているが、体部は磨滅が著しくて調整が不明である。

このNo.26土壙から出土した土器は、奥・後・IVの古相に比定される。

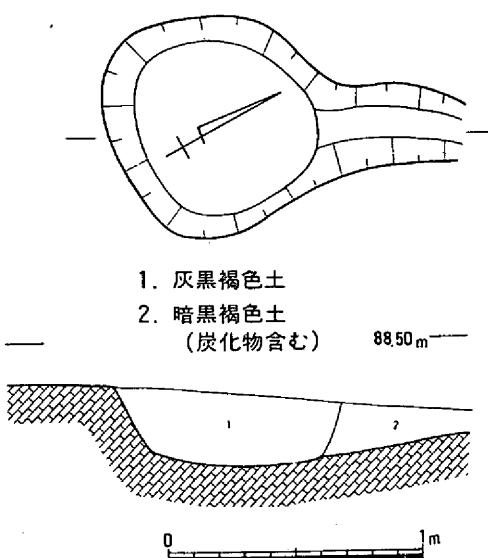
No. 100 土 壙 (第173図)

B-8で検出した比較的大きな土壙である。北側の近接した位置には、大規模で数回の建て替えが行われているNo.4住居址が検出されている。この土壙の長径は南北方向に存在し、検出面で約188cmを測る。短径は約164cmを測り、検出面からの深さは約20cmと極めて浅くなっていた。土壙内には焼土や炭化物の層を挟んだ状態で、上層に炭化物を含む灰褐色土、下層に赤褐色土が堆積していた。

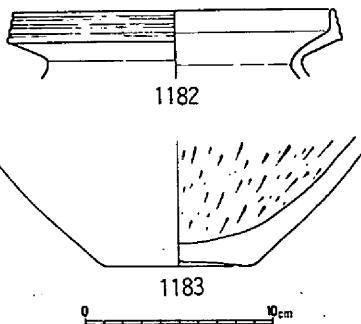


第173図 No. 100 土壙 (1/30)・出土遺物 (1/4)

奥坂遺跡



この土壤から出土した遺物は、いずれも奥・後・Ⅲの新相に比定される土器の小破片である。1178は甕形土器の口縁である。1179と1180は、平底を呈する壺形土器または甕形土器の底部である。外面はハケメま



第174図 No. 67 土壌 (1/30)・出土遺物 (1/4)

たはナデを施しているが、内面はヘラケズリを行っている。1181は水漉粘土を使用した高杯形土器の脚端部である。

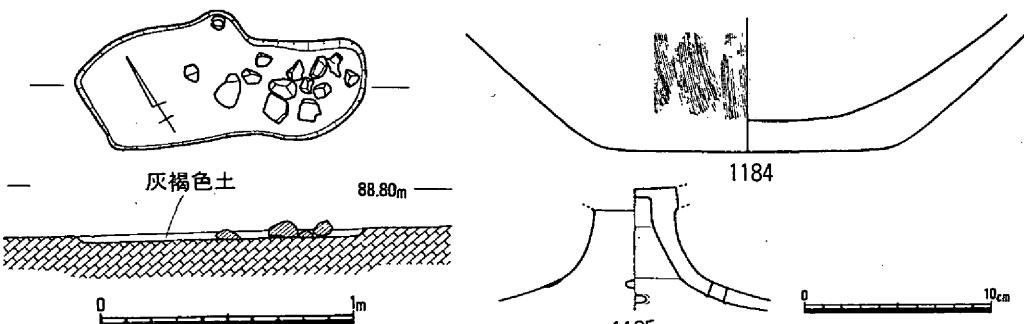
No. 67 土 壤 (第174図)

B-9のNo. 2住居址やNo. 50住居址とした遺構の南側で検出した小規模の土壤である。平面形は円形に近い形態を呈し、No. 2住居址に向かって溝状に張り出していた。検出面での最大径は約88cmを測り、深さは約30cmで灰黒褐色土が堆積していた。また溝状を呈する部分には、炭化物を含む暗黒褐色土が認められた。

この土壤からは、奥・後・Ⅲの新相または奥・後・Ⅳの古相に属する土器が出土している。

No. 6 土 壤 (第175図)

B-8のNo. 98土壤とNo. 102袋状土壤の中間で検出した土壤である。平面形は不整形な形態を呈



第175図 No. 6 土壌 (1/30)・出土遺物 (1/4)

し、検出面での長径は約114cmであった。検出面からの深さは極めて浅く、灰褐色土内に拳大の珪岩製の礫と土器片を散在した状態で検出した。

1184は平底を呈する壺形土器の底部である。外面にはハケメが認められるが、内面は不明である。1185は高杯形土器の脚部である。時期は奥・後・IVに比定されるであろう。（福田）

No. 147 土 壤（第176図）

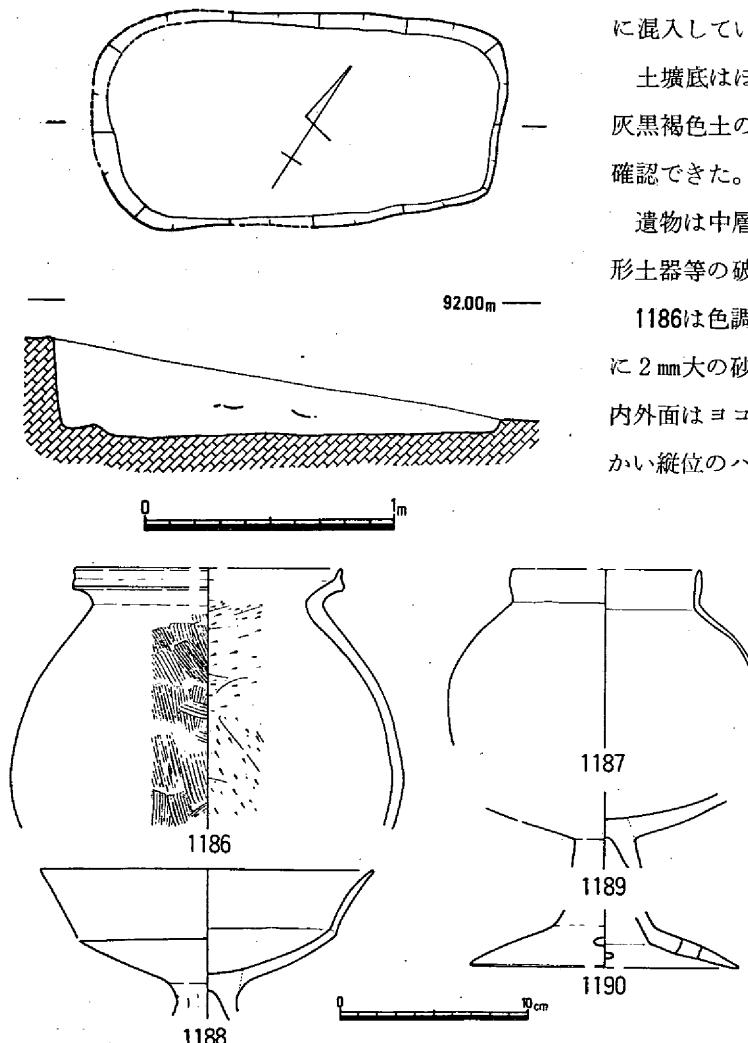
D-5中央、海拔91.90m付近に位置し、奥・後・II～IIIのNo.36住居址を切って作られている長方形土壙である。

長軸162.5cm、短軸中央約170cm、深さ40cm、床面積は1.13m²を測る。堆積土は灰褐色、黄橙色等のブロック土を含み、炭粒が多量に混入している。

土壙底はほぼ平滑で、地山土面では灰黒褐色土の詰ったNo.36住居址柱穴を確認できた。

遺物は中層を中心に、甕・壺・高杯形土器等の破片が出土している。

1186は色調淡黄褐色を呈し、胎土中に2mm大の砂粒を多量に含む。口縁部内外面はヨコナデにより、器外面は細かい縦位のハケメ、器内面は下位は斜位、上位は横位のヘラケズリが施されている。1187は内外面ともに風化が激しく、剥落が進んでおり、観察は困難である。色調は淡黄茶色を呈する。1187～1190は高杯形土器であり、色調赤褐色を呈し、胎土は精製粘土が利用されて



第176図 No. 147 土壙 (1/30)・出土遺物 (1/4)

奥坂遺跡

おり砂粒を含まない。

時期は奥・後・IVに比定できる。

(高畠)

No. 128 土 壤 (第177図)

平面プランは橢円形を呈し、長径97cm、短径83cmを測る。底面はほぼ平坦で、壁の立ち上がりは急斜である。土壇内にあるピットについては、黒褐色の埋土を除去した段階で検出したもので、その先後関係は不明である。

土壇内からは弥生式土器の細片が少量出土したことから、概ねその時期のものと考えられる。

No. 131 土 壤 (第179図)

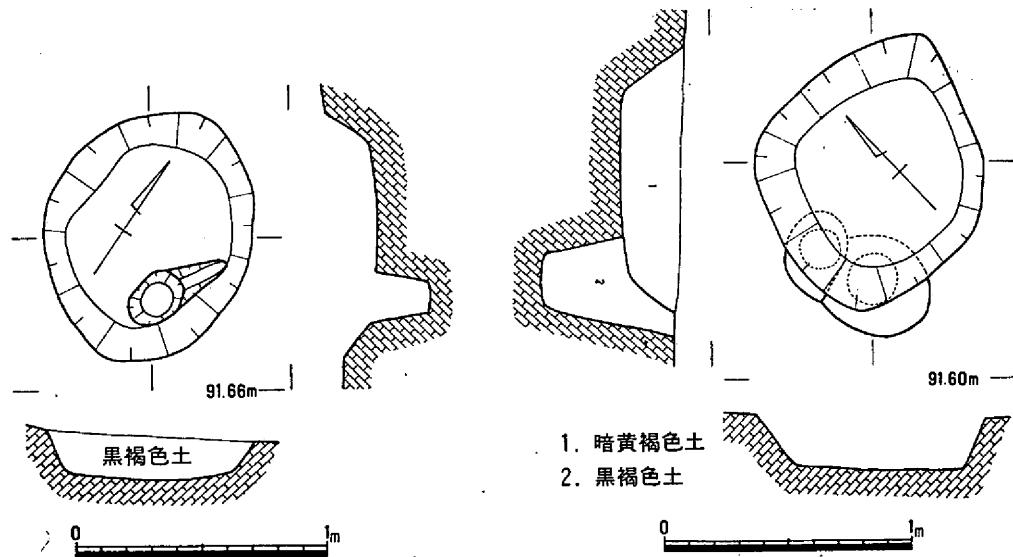
平面プランは隅丸方形を呈し、1辺約90cmを測る。底面はほぼ平坦で、壁の立ち上がりは急斜である。埋土は炭を多く含む暗黄褐色土で、少量の弥生式土器片を含んでいた。

時期については、出土した土器が細片のため厳密さを欠くが、弥生中期後半～末と推定される。

(平井勝)

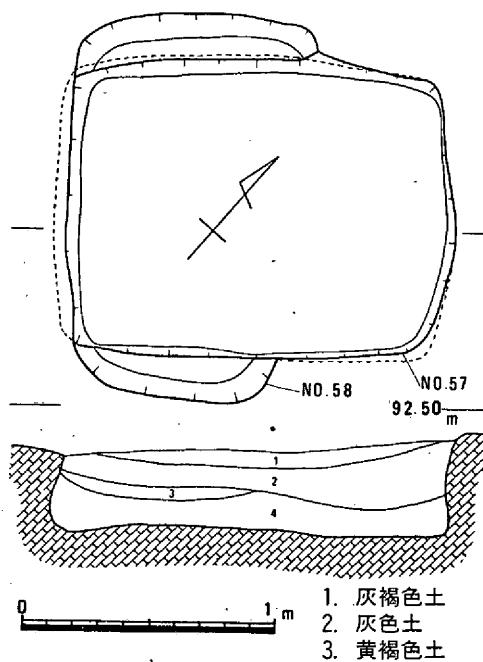
No. 57 土 壤 (第179図)

C-4に位置している。No.57とNo.58の土壇は重なっている。No.58の土壇をNo.57の土壇が切っている。平面形は、長方形を呈していて、154×120cmの大きさである。長軸の方向は、N-49°-Wである。下部は、5～6cm広くなっていて、袋状を呈する。床面は、周辺部が少し低くなるが、ほぼ平坦である。埋土は4層に分離され、上部には焼土を含み、2層には土器片を多く含んでいる。下半部には、土器片や焼土は少ない。



第177図 No. 128 土壇 (1/30)

第178図 No. 131 土壇 (1/30)

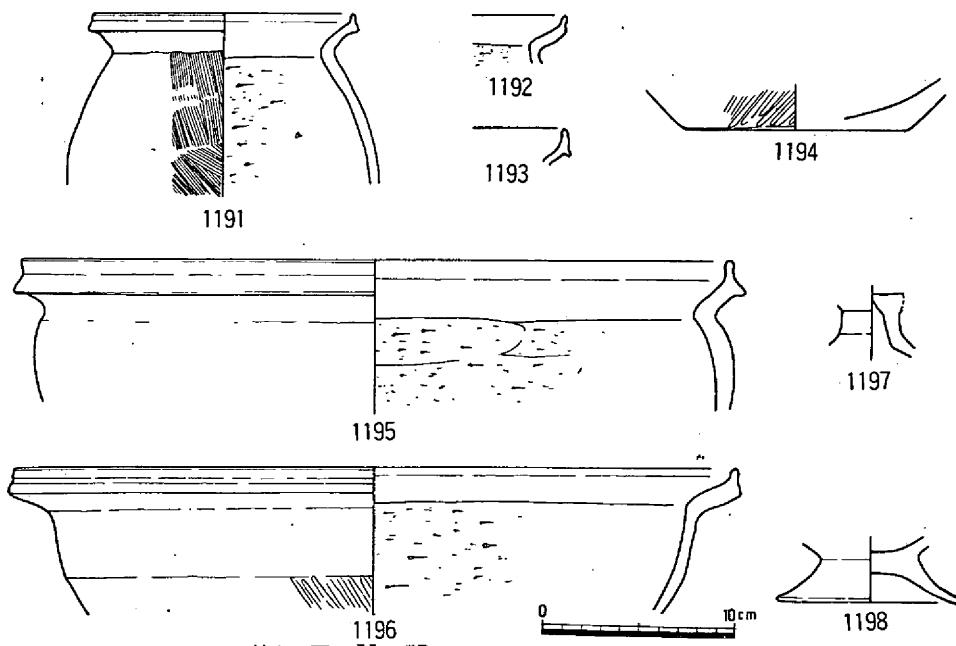


第179図 No. 57・58 土壙 (1/30)

埋土中で検出された土器には、甕形土器、鉢形土器、高杯形土器がある。甕形土器の口縁部は3個あり、上方へ短く屈曲するもの1191・1192と上下に拡張するもの1193がある。鉢形土器は2個あり、口径はいずれも37cm前後で、口縁部は上方へ短く屈曲するもの1196と上下に拡張するもの1195がある。甕形土器・鉢形土器は、内面ヘラケズリを施している。1198は脚台部で、上部は甕か鉢になるものであろう。高杯形土器には、短脚のもの1197がある。底部1194は鉢形土器の下部になるものであろう。底面にはヘラケズリの痕跡が残っている。色調は、ほとんど黄橙色を呈し、1191は灰白色である。胎土は、高杯形土器が精製粘土で、脚台部が細かい胎土であるが、他のものは細砂粒を含む。

時期は、奥・後・IVに属する。

No. 58 土 壙 (第179図)



第180図 No. 57 土 壙 出 土 遺 物 (1/4)

奥坂遺跡

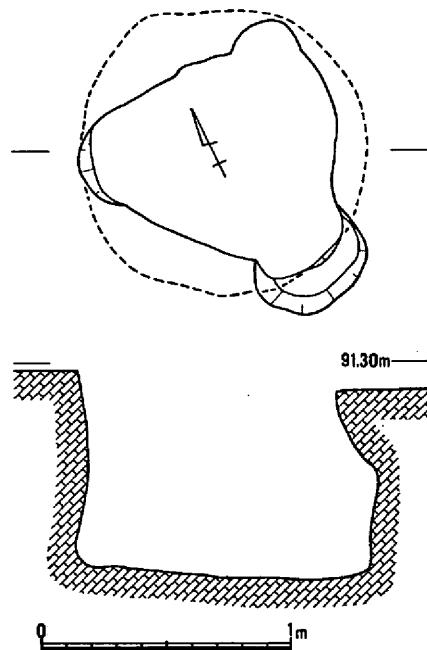
C-4に位置し、No.57土壙によって、ほとんど切られているため、わずかに両端を残すだけである。現状から推定される規模は、 $155 \times$ 約 100cm を測る。深さは、両端でみると浅いが、中央部が残っていないため判明しない。出土遺物もない。(正岡)

(3) 袋状土壙

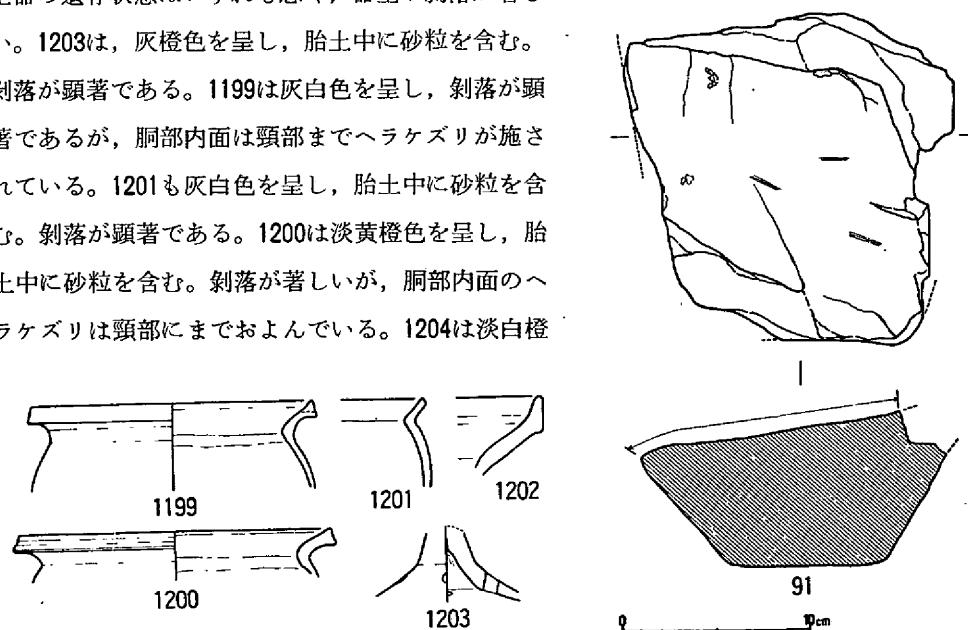
No. 146 袋状土壙 (第181図、図版75)

D-5の南辺中央よりあり、No.145袋状土壙の西に位置する。北西辺・南辺は後世の柱穴に切られている。検出時の平面形は不整円形、底面形は円形、断面形は不整台形をそれぞれ呈している。側壁に段を有し、検出面へ向かって内傾して立ち上がっている。検出面での最大径約 95cm 、底面径約 120cm 、深さ 80cm をそれぞれ測る。堆積土は、主に灰褐色であり、黄灰色土ブロック等の混入が認められる。

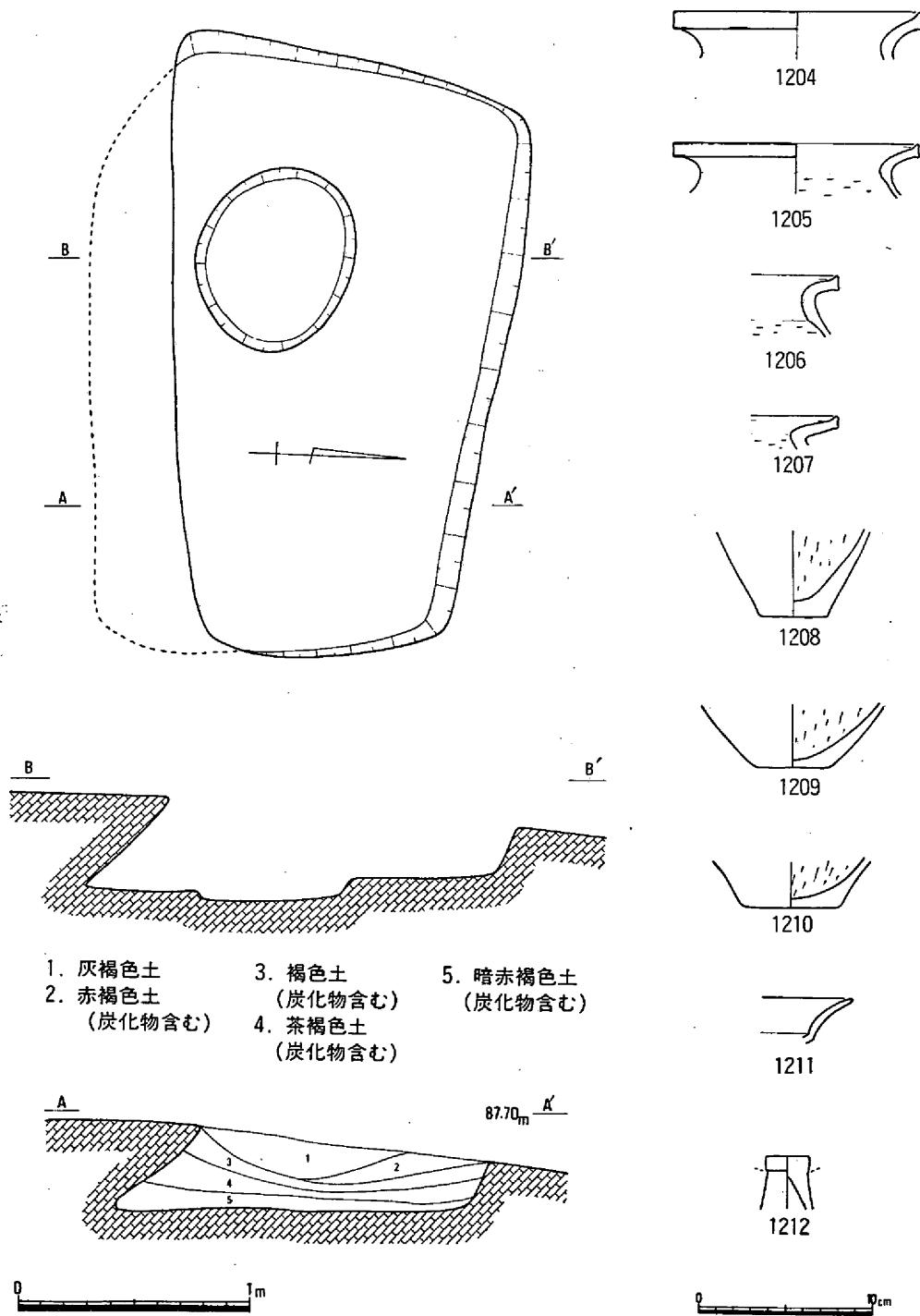
遺物は、壺形土器1202、甕形土器1199・1200・1201、高杯形土器1203、砾石91が出土している。土器の遺存状態はいずれも悪く、器壁の剥落が著しい。1203は、灰橙色を呈し、胎土中に砂粒を含む。剥落が顕著である。1199は灰白色を呈し、剥落が顕著であるが、胴部内面は頸部までヘラケズリが施されている。1201も灰白色を呈し、胎土中に砂粒を含む。剥落が顕著である。1200は淡黄橙色を呈し、胎土中に砂粒を含む。剥落が著しいが、胴部内面のヘラケズリは頸部にまでおよんでいる。1204は淡白橙



第181図 No. 146 袋状土壙 (1/30)



第182図 No. 146 袋状土壙出土遺物 (1/4)



第183図 No. 44 袋状土壙 (1/30)・出土遺物 (1/4)

奥坂遺跡

色を呈し、胎土中には微砂が若干認められるのみである。砥石91は、使用面は1面のみであるが、現存長17.4cm、現存最大幅17.4cm、最大厚7.8cm、重量30.4gを測る。石材は流紋岩である。

これらの遺物のうち、甕形土器に若干古い様相が認められるが、壺形土器1203によれば、本遺構の時期は、奥・後・Ⅲに求められよう。

(光永)

No. 44 袋状土壙（第183図）

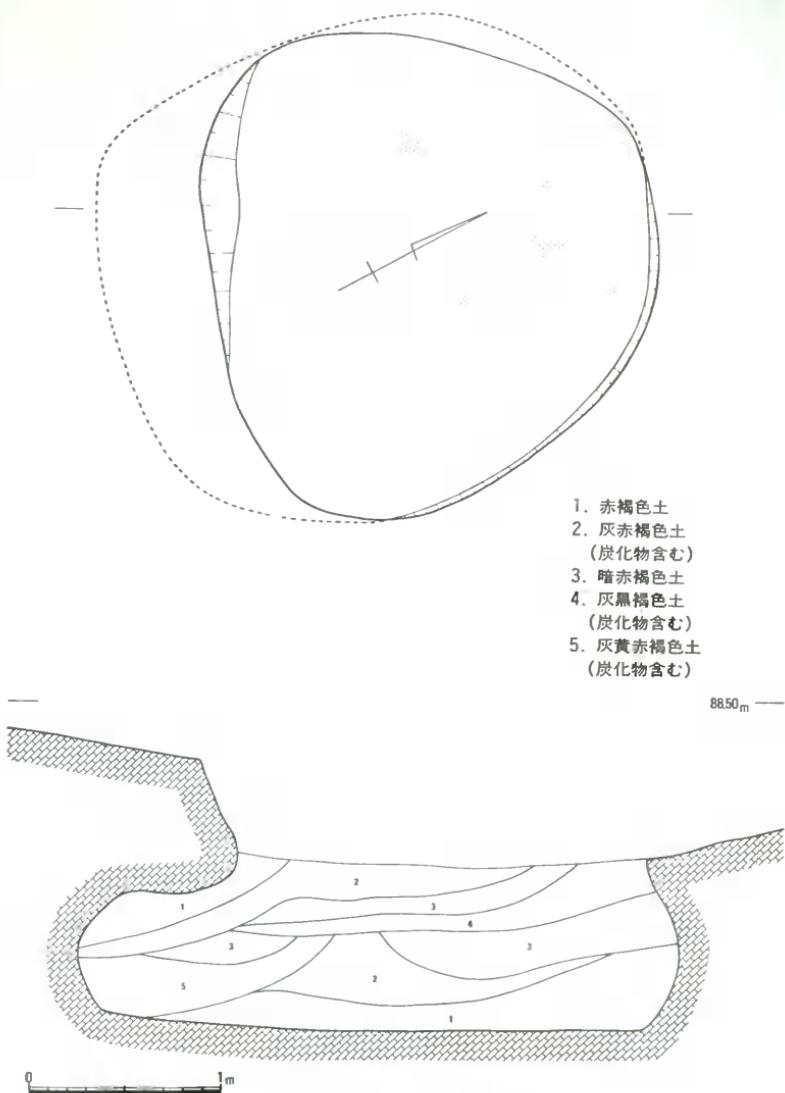
C-8の南東隅で検出した袋状土壙である。No.3住居址やNo.12壙と重複して存在したが、このNo.44袋状土壙がもっとも新しく構築された遺構である。海拔87.50～87.75mの間に位置し、平面形は隅丸長方形に近い形態を呈していた。検出面での長径は、東西方向を示して約260cmを測り、最大短径は155cmになっていた。この袋状土壙は南側の壁面が大きく抉れ込み、No.3住居址の床面やNo.11土壙の底部下位まで達していた。内部には赤褐色土、褐色土、茶褐色土、暗赤褐色土が堆積し、全体に炭化物が混在しているのが認められた。この袋状土壙の底部は、ほぼ水平で海拔約87.30mのレベルになっていた。底部の平坦面の形態は隅丸長方形を呈し、長径約245cm、短径約175cmであった。中央よりやや西側に寄った底部には、最大径約76cmを測る円形に近い形態の窪みを検出したが、深さは約10cmと極めて浅くなっていた。

この袋状土壙から出土した遺物は、いずれも土器の小破片である。1204から1207は、甕形土器の口縁部破片である。斜め上方へ張り出した口縁の端部は、わずかに拡張して外面に浅い窪みを有する。口縁部はヨコナデを施しているが、内面の胴部は横方向のヘラケズリを行っている。1208から1210は、壺形土器または甕形土器の底部である。外面は縦方向のナデを施し、内面は縦方向のヘラケズリを行っている。1211と1212は、高杯形土器の口縁部と脚部である。どちらも水漉粘土を使用し、赤褐色を呈している。

これらの土器は、奥・後・Ⅲの新相に比定される。

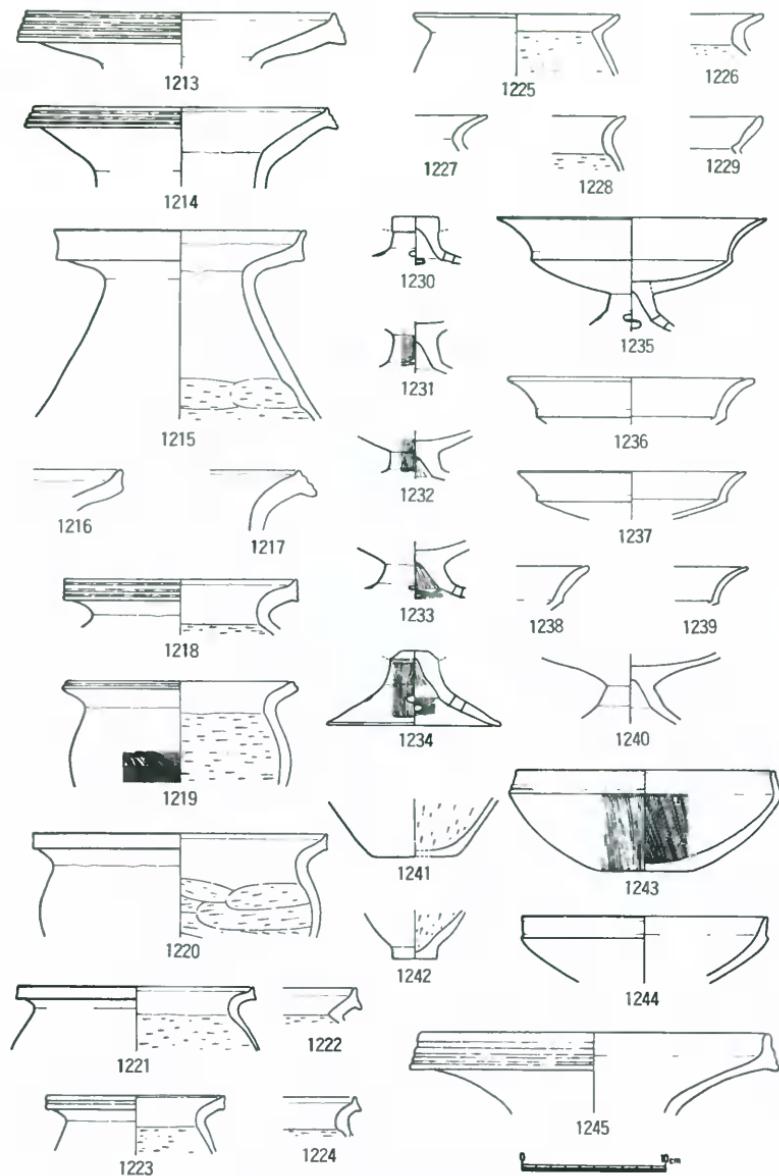
No. 91 袋状土壙（第184・185図、図版73-1）

B-8の北東隅に存在した袋状土壙である。No.3住居址の床面を精査して検出した遺構で、平面形の規模は奥坂遺跡で確認した袋状土壙のなかでも最大のものであった。その平面形は不整形な形態を呈し、長径約250cm、短径228cmを測り、検出面であるNo.3住居址の床面からの深さは約90cmであった。この袋状土壙の西側に位置する壁面は、No.3住居址の柱穴によって削平されていた。南側の壁面は著しく抉れて、No.3住居址の壁体溝の下部よりもさらに外側に張り出していた。この袋状土壙の底部は、地山面を丹念に削り出して仕上げ、海拔約87.00mの平坦な面になっていた。底部の平坦面は不整形な形態を呈し、長径約285cm、最大短径約248cmであった。袋状土壙内の層序は複雑な様相を呈し、炭化物の混在した土砂が厚く堆積していた。北側の底部と南側の上位には、この遺構の壁面が崩壊して堆積したと推定される赤褐色土が認められ、炭化物は存在しなかった。

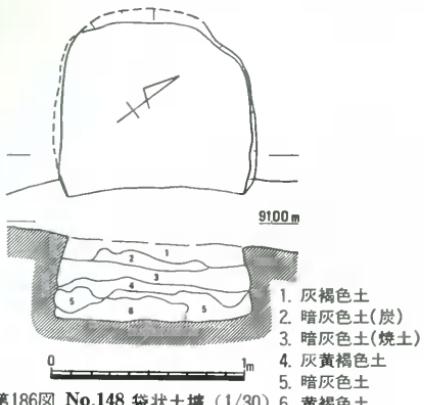


第184図 No. 91 袋状土墻 (1/30)

奥坂遺跡



第185図 No. 91 袋状土壤出土遺物 (1/4)

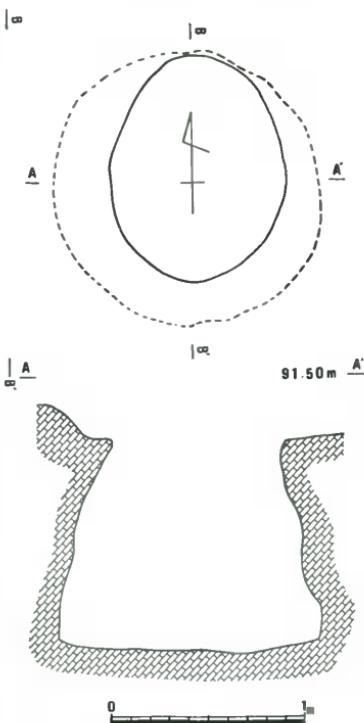


第186図 No.148 袋状土壙 (1/30)

この袋状土壙からは、底部から浮いた状態で奥・後・Ⅲの新相に比定される土器が多量に出土した。遺構の切り合い関係では、No.91袋状土壙が古くてNo.3住居址が新しいことを確認し、No.3住居址の床面には火災を受けて炭化物や焼土が散布していたから、袋状土壙の土器と住居址に伴う土器は確実に分離できたのであるが、相互の時期差は認められなかつた。

(福田)

No. 148 袋状土壙 (第186図)



第187図 No. 48 袋状土壙 (1/30)

No.30住居址に約2/3程切られた状況で検出された。平面は、やや隅丸方形を呈する。断面は上部削平されていたが、袋状土壙が推測できる。出土遺物をまったく伴わないと時期は不明である。ただし、No.30住居址との切り合いかからは、奥・古・Ⅱより古く位置づけが可能である。

(島崎)

No.48 袋状土壙 (第187~188図、図版72-2)

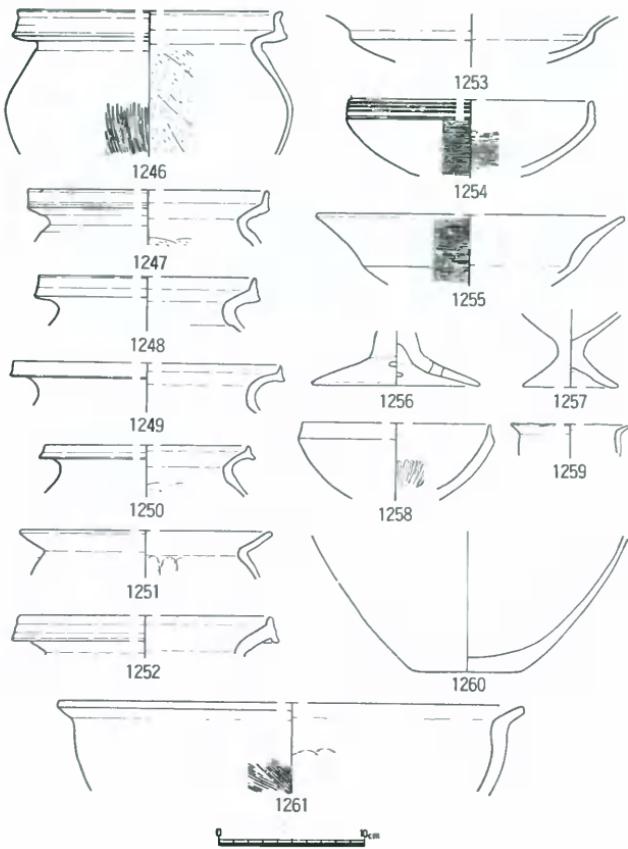
E-5南西、海拔91.25m付近に位置する袋状土壙である。口部直径115×90cm、下底直径約

奥坂遺跡

140cm、底面積約 1.54m^2 を測る。底部は中央が若干低く、周縁が少し高くなっており、底部より口部にかけて約80度の角度で立ち上がり、深さ約100cmを測る。

遺物出土状況は口部より約50cm下位の黒色土（焼土・炭が多量混入）中に土器が多くみられ、下層にいくにしたがい遺物が少なく小片化していた。また、底面より10cmの高さで炭化物が多く認められた。全体的な層序は黒色土と粘性が地山土より強い赤褐色土がブロック状に交互に重なっていたと思われる。

遺物は甕・高杯・鉢等が破片で出土している。1246～1252は変形土器であり、1246は口縁部



第188図 No. 48 袋状土壙出土遺物 (1/4)

の拡張が垂直に2cmのび内外面ヨコナデが施され、胸部外面縦位のヘラミガキ、内面ヘラケズリがみられ器壁を薄く仕上げている。1247等も口縁部の拡張が垂直に行われている。1248～1249は口縁部端を上方に引き出し、鋭い口縁でおさめている。体部から「く」字形に屈曲し、口縁部を丸くおさめた1251があり、口縁部上下を拡張した1250・1252等もある。1253～1256が高杯であり、1254・1255等は非常に細目の横位ヘラミガキが施されている。1254～1259は砂粒を含まず、精製粘土が利用されている。

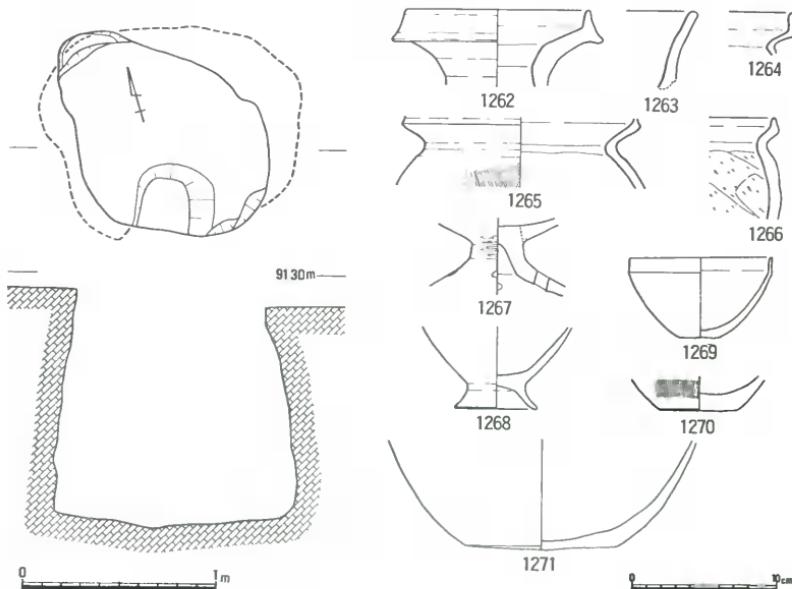
1261は鉢形土器であり、口縁部内外面はヨコナデが施され、器外面に斜位のハケメ、器内面に指頭ナデが施されている。

時期は奥・後・IVに比定できる。

(高畠)

No. 145 袋状土壙 (第189図、図版75-2)

D-5の南辺中央部にあり、No.146袋状土壙の東に位置する。平面形および底面形は不整橢円形を呈し、断面形は台形を呈する。検出面での長径約97cm、短径約92cm、底面での長径約120cm、短径約114cm、深さ123cmを測る。底面の南辺に高まりがあるが、これは基盤層の岩盤を掘り残したものである。堆積土は基本的に灰褐色土であり、黄灰色土ブロック等の混入もみられる。

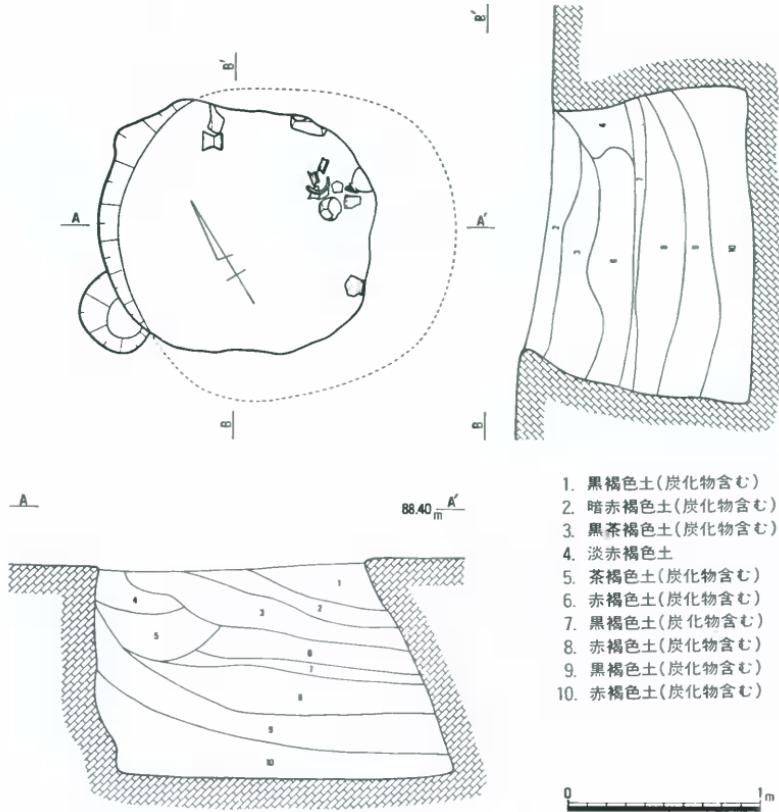


第189図 No. 145 袋状土壙 (1/30)・出土遺物 (1/4)

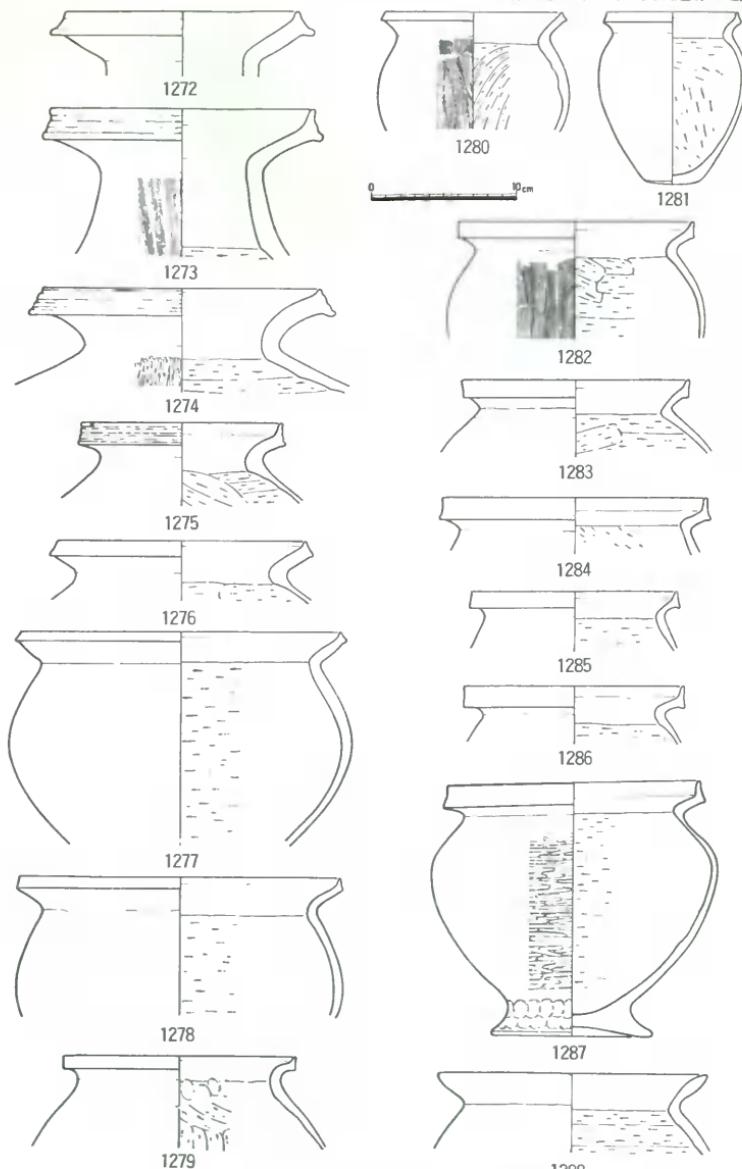
奥坂遺跡

遺物は、壺形土器1262・1263、甕形土器1264～1266、高杯形土器1267、鉢形土器1269、台付鉢形土器1268等が出土している。いずれも遺存状態は悪く、器壁調整の不明瞭なものが多い。1262は淡黄橙色を呈し、頸部外面は横位のナデで仕上げている。1263は灰白色を呈し、内外面とも器表は剥落している。1264・1265は褐橙色を呈し、胎土中に砂粒を含む。口縁外面に3条の凹線を施し、口縁部～頸部は横位のナデ、胴部の外面は縦方向ハケメ、内面はヘラケズリがそれぞれ施されている。1266は淡灰褐色を呈し、体部外面は縦方向のハケメが施されている。1267の内面は剥落が顕著であるが、外面は横方向ヘラミガキによる仕上げである。1269・1270は、いずれも剥落が著しい。これらの観察により、時期は奥・後・IVに比定しうる。（光永）

No. 5 袋状土壤 (第190～192図、図版73-2)

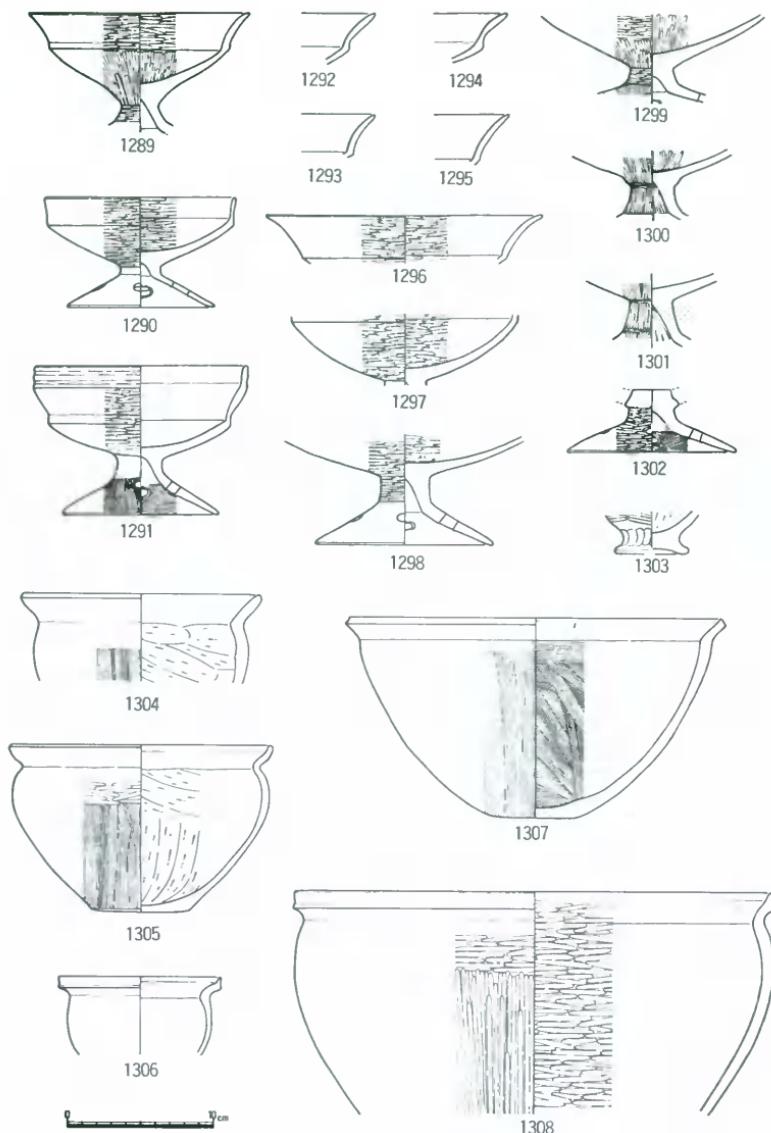


第190図 No. 5 袋状土壤 (1/30)



第191図 No. 5 袋状土壤出土遺物 (1) (1/4)

奥坂遺跡



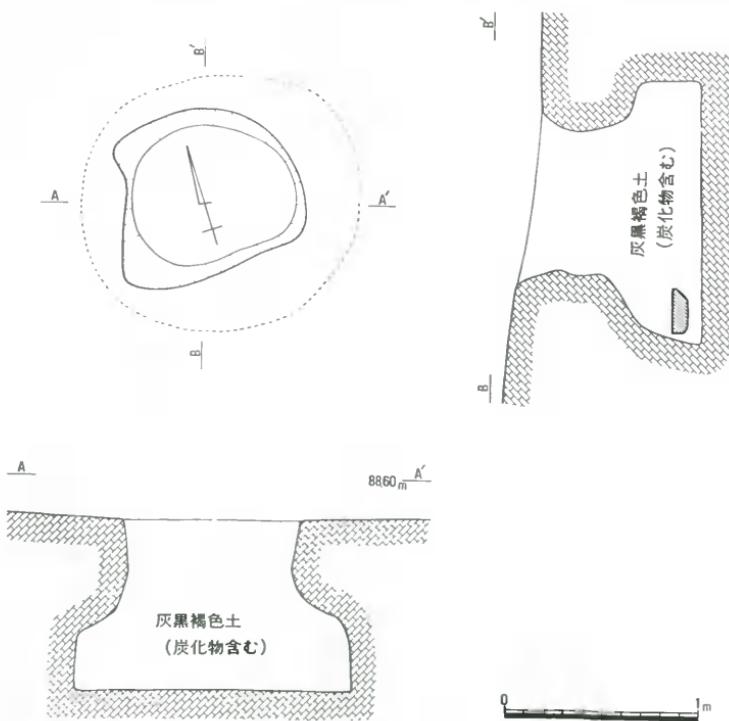
第192図 No. 5 袋状土壤出土遺物 (2) (1/4)

B-9の北西隅で検出した袋状土壌である。海拔88.00~88.25mの間に位置し、No.3住居址やNo.91袋状土壌に近接していた。検出面や底部の平面形は円形または楕円形を呈し、南から東にかけての壁面は約70度の角度に内傾して立ち上がっていた。この袋状土壌の検出面での最大径は約140cmを測り、底部の最大径は約170cmであった。また検出面からの深さは約110cmを測り、底部のレベルは海拔約87.00mであった。

この袋状土壌内には炭化物が多量に混在した土砂がほぼ水平に堆積し、完形品を含む多くの土器が出土した。これらの土器は、奥・後・IVの古相に比定される。

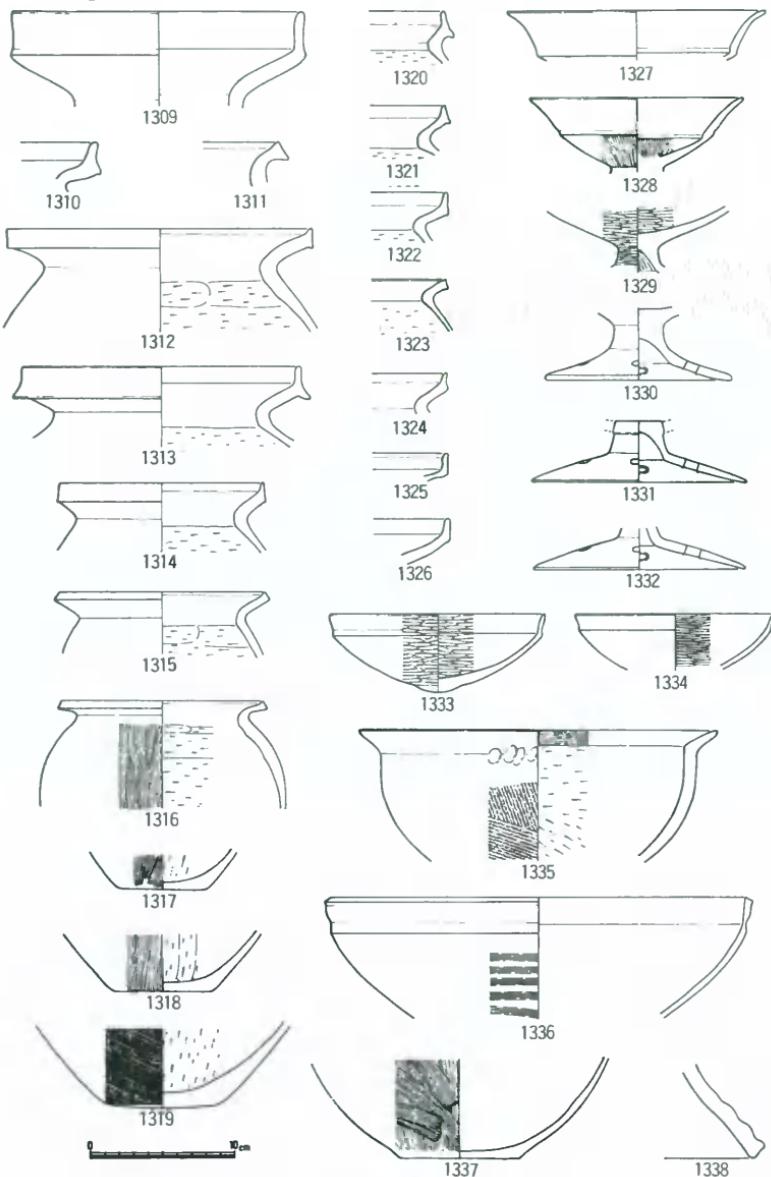
No.102 袋状土壌（第193・194図）

B-8の北東に寄った地点で検出した、比較的小規模な袋状土壌である。海拔88.25~88.50mの間に位置し、No.3住居址とNo.4住居址の中間の南側に存在していた。検出面の形態は不整形で、長径約96cm、最大短径約90cmを測る。検出面からの深さは82~95cmを測り、底部は平坦で



第193図 No.102 袋状土壌 (1/30)

奥坂遺跡



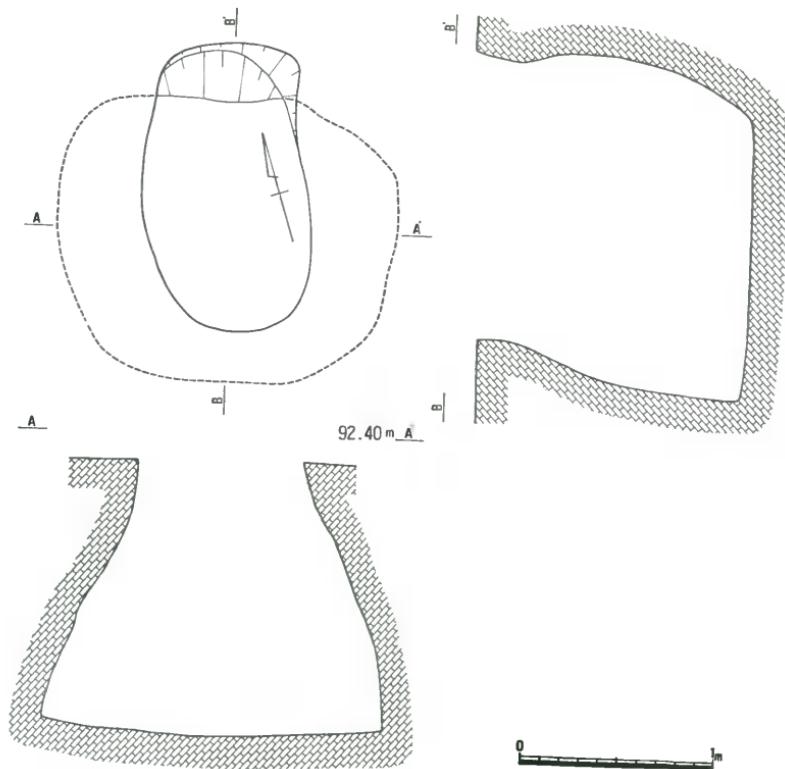
第194図 No.102 袋状土壤出土遺物 (1/4)

海拔約87.50mのレベルになっていた。底部の平坦面は橢円形を呈し、長径約145cm、短径約130cmになっていた。この袋状土壙内は狭くて発掘作業が困難であったため、上面から徐々に覆土を除去して遺物の検出に努めた。その結果、遺物が出土したのは中位に帯状を呈して存在した炭化物層よりも上位の部分で、底部にはほとんど確認できなかった。南側に寄った地点の底部より約8cm上位には、厚さ約8cmを測る板石が存在した。

No.102袋状土壙から出土した遺物は、いずれも土器の小破片である。これらの土器のなかには古い形態を有するものも認められるが、大多数は奥・後・IVの古相に比定される。(福田)

No.138 袋状土壙（第195図）

袋状土壙は、ほぼ平坦な丘陵頂部に位置する。平面プランは隅丸長方形状を呈するが、底部の平面は隅丸方形に近い形状を呈している。このため東・西・南は底に向かって広がってゆく



第195図 No.138 袋状土壙 (1/30)

奥坂遺跡

のに対し、北側はやや中央部が広がるもの、底部に向かって内傾している。しかし、この形状が当初のものとは考えられず、土壤内埋土の堆積から推定すれば、北側上端面はもっと南側に張り出していたものと考えられた。

土壤内埋土の状態は、下層・中層では心もち中央部が高いか、ほぼ水平に近い状態で堆積しており、下層では土器を含む黒褐色土、中層では黒褐色土中に赤褐色土（地山）が混在したものが認められた。上層は黒褐色土が厚く堆積し、遺物が多く、特に南壁に接して多量に出土した。なお北側の下層・中層には落下したような状態で赤褐色土が認められ、その上に上層の黒褐色土が堆積していることから、遺物の廃棄前に北側上端部が剝離落下したことを示している。

土壤内からは土器のほか、砥石・石錐・鎧が出土した。

土器は完形に復元し得るものを含め、多量に出土した。以下土器について説明を加える。

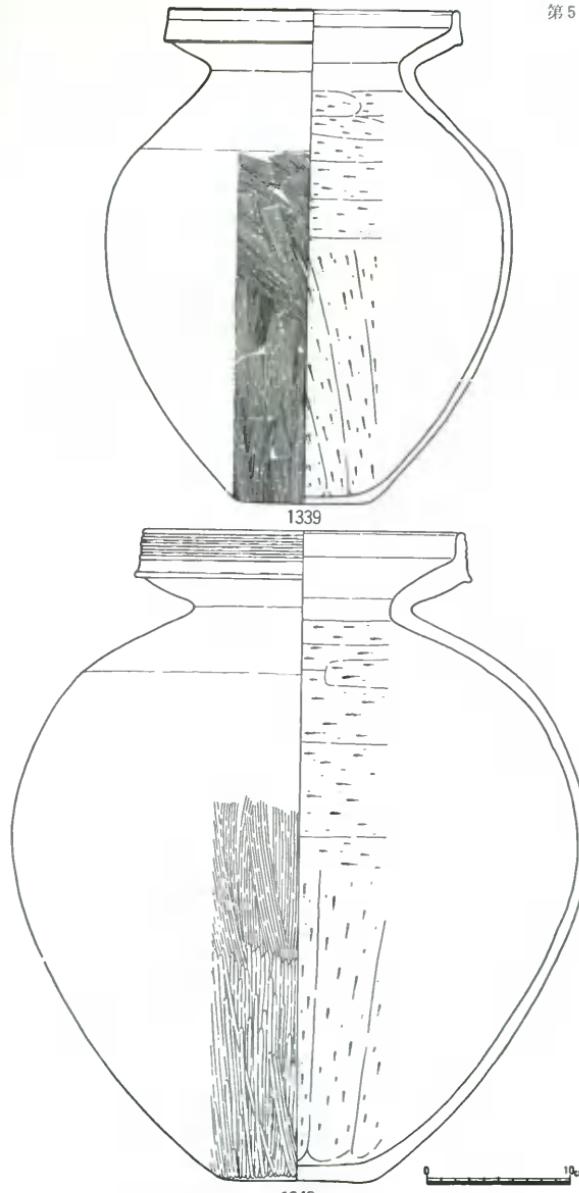
1339・1340は壺形土器である。胴部はあまり肩の張らない、中央よりやや上位に最大径を有する丸みをもつものである。口縁部は胴部から「く」字状に強く外反し、さらに上方へ立ち上がり、上端面は丸くおさめる。1340はその外端面にヘラによる沈線が数条めぐっている。調整は口縁部内外面がヨコナデ、胴部外面上半はナデ、下半はハケメであるが、1340はヘラミガキも認められる。内面は下半が縦方向、上半が横方向のヘラケズリである。

1341～1373は甕形土器である。このうち1341から1347は完形および、それに近いまでに復元し得るものである。胴部はあまり肩が張らず、最大径は比較的上位にあり、概して倒卵形を呈しているが、1341は少し丸みが強く、また、1342・1344も器高が低いため、全体に丸みをもっている。口縁部はいずれも胴部から「く」字状に外反するもので、端部はほぼ垂直に近い状態で上方へ拡張されている。この端面には強いヨコナデによる凹部がめぐっている。調整は口縁部内外面がヨコナデ、胴部外面上半はハケメ、内面は下半が横方向、下半が縦方向のヘラケズリである。1348～1373は主に口縁部である。いずれも胴部から「く」字状に強く外反するものであるが、端部を上方に拡張するもの1348～1371と、そのまま丸くおさめてしまうもの1372・1373とがある。前者のものにも拡張のしかたには多少のバラツキが認められ、上下にほぼ同じく拡張するもの1348・1349、上方への拡張が著しいが下方へも若干拡張するもの1352・1353、上方にのみ拡張するもの（その他土器）などがある。1349～1370は口縁外端面には強いヨコナデによる凹部がめぐっているが、1348はこれらとは異り、ヘラによる沈線が数条めぐっている。調整は口縁部がヨコナデ、胴部外面上半はハケメ、内面はヘラケズリである。

1374～1376・1388・1389は壺および甕形土器の胴部から底部である。調整は1374の外面にヘラミガキが認められる以外は、外面はハケメ、内面はヘラケズリである。

1377～1387は高杯形土器であるが、杯部の形態は2種類認められる。1つは杯底部から外反

第5章 第1節 奥坂遺跡A地区



第196図 No. 138 袋状土壙出土遺物(1) (1/4)

— 251 —

しながら斜めに長く立ち上がる口縁部をもつもので、他の1つは杯底部から短く立ち上がるるもので、前者に比べれば小型である。脚部はいずれも短く、2対の円孔が穿たれている。調整は杯部内外面がヘラミガキ、脚部の外面はヘラミガキ、内面はハケメである。胎土はすべて精製粘土を使用し、色調は明赤褐色を呈する。

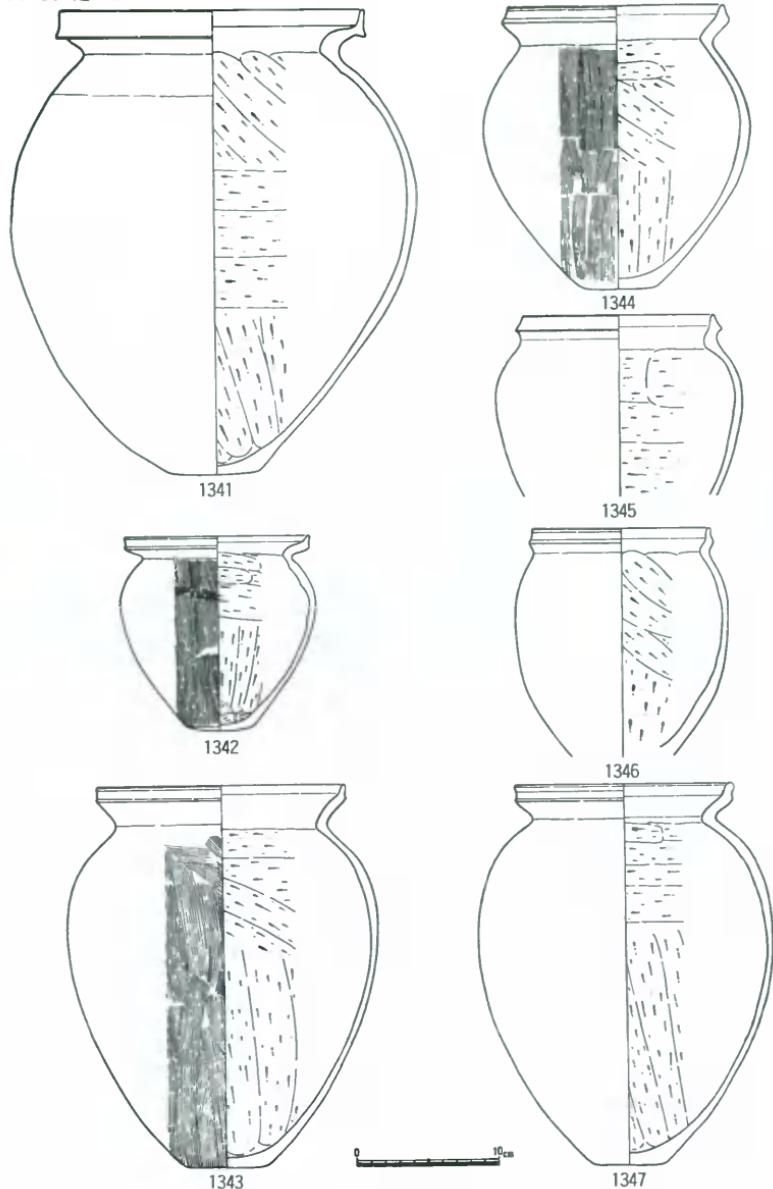
1390～1395は鉢形土器である。1393・1394は精製粘土を使用し、内外面をヘラミガキ調整した丁寧な作りである。

1397は椀形土器で、底部には木葉の圧痕が認められる。

1396は小型の甕形土器であるが、手捏ねとは異りやや丁寧な作りである。

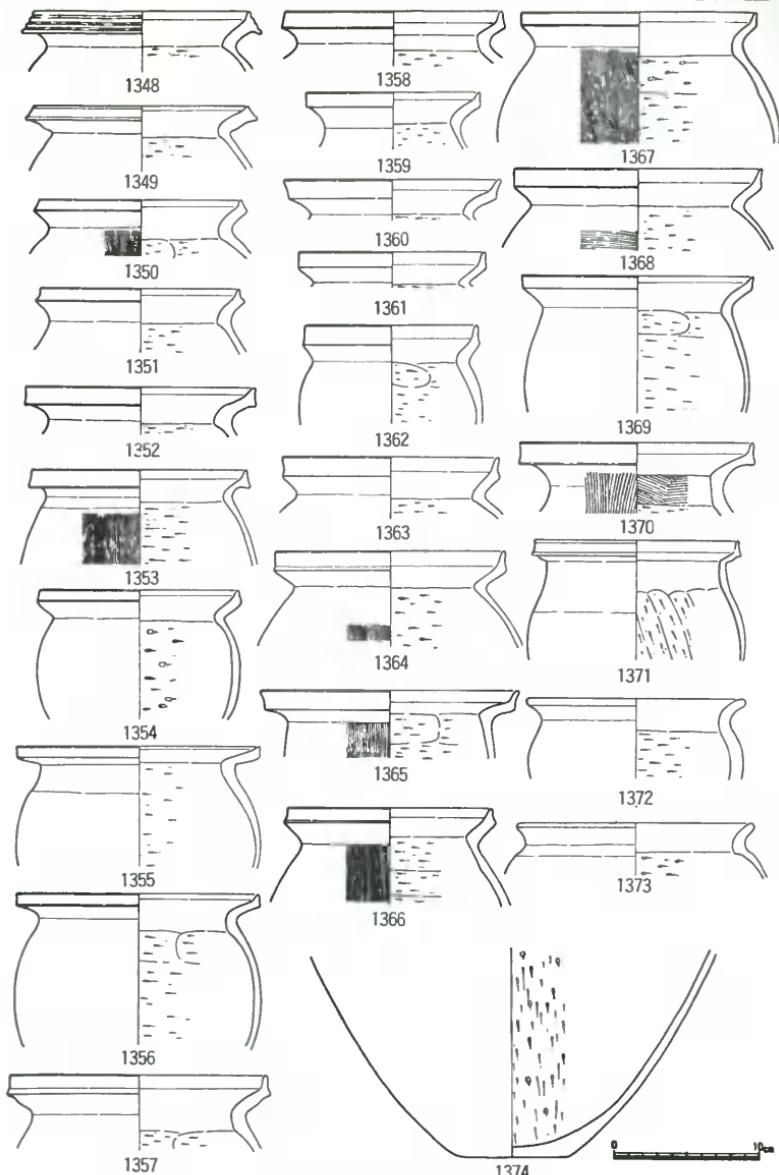
さて以上説明を加えた土器は弥生時代後期後半のものであるが、本遺跡の北方に位置す

奥坂遺跡



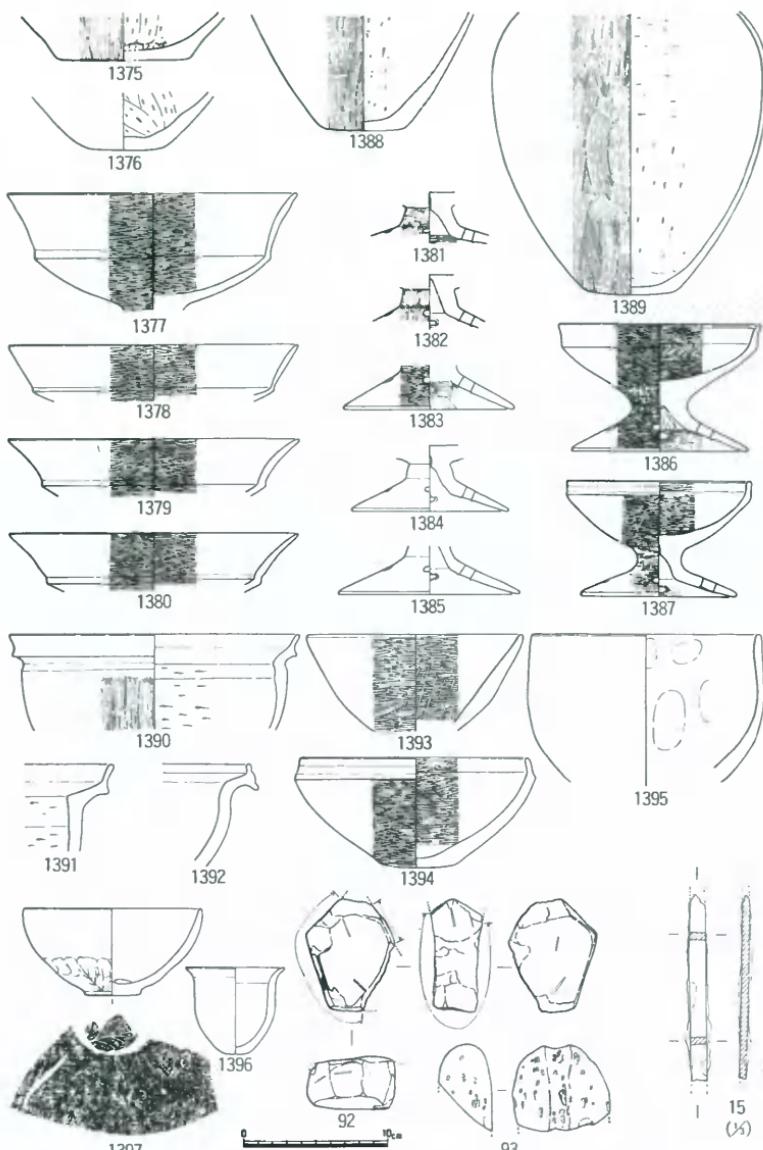
第197図 No.138 袋状土壙出土遺物(2)(1/4)

第5章 第1節 奥坂遺跡A地区



第198図 No. 138 袋状土壙出土遺物 (3) (1/4)

奥坂遺跡

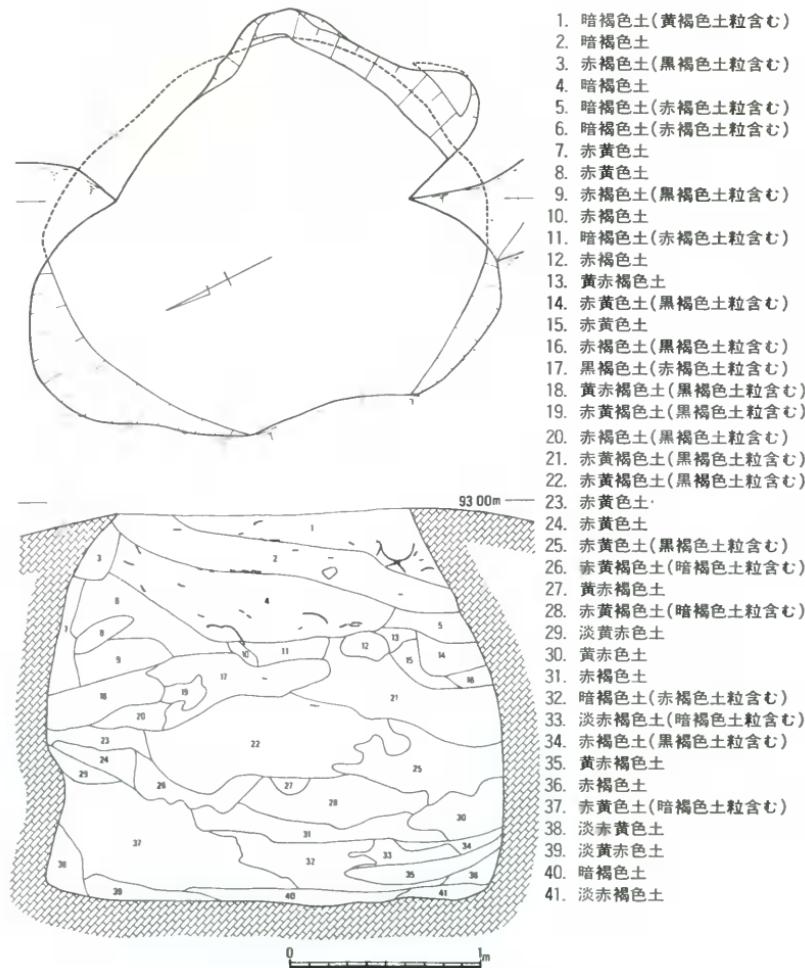


第199図 No. 138 袋状土塊出土遺物 (4) (1/3, 1/4)

る上東遺跡の編年で示せば概ね上東オノ町Ⅰに相当すると思われる。

土器以外の遺物としては石器と鉄器がある。石器は流紋岩製の砥石と、自然礫の中央部に浅い溝をめぐらした石錘が1点ずつ出土した。鉄器は両端が欠損しているが、おそらく鉗と考えられる。

No. 81 袋状土壙 (第200図, 卷頭図版2)



第200図 No. 81 袋状土壙 (1/30)

奥坂遺跡

遺跡の所在する丘陵は、西側が頂部まですでに削平されており、その端部に本遺構が約半分残存していた。このため平面プランは明らかでないが、概ね円形に近いものと考えられる。底部はほぼ残存しており、不整な円形を呈している。

断面を見ると、土壙内の埋土は中層までは、地山と同じ赤褐色土が塊状に堆積していた。これはおそらく中に張り出した上部が剝離落下したものと推定される。その上の層は北西から流れ込んだ状態で暗褐色土が堆積しており、多量の土器を含んでいた。特に2層には炭とともに製塩土器の細片が多く認められた。

土壙内から出土した遺物はすべて土器であり、そのほとんどは上層の1・2・4層から出土したものである。しかし調査上の制約があり、層位別に土器を取り上げることができなかつたため、ここでは一括して説明を加える。

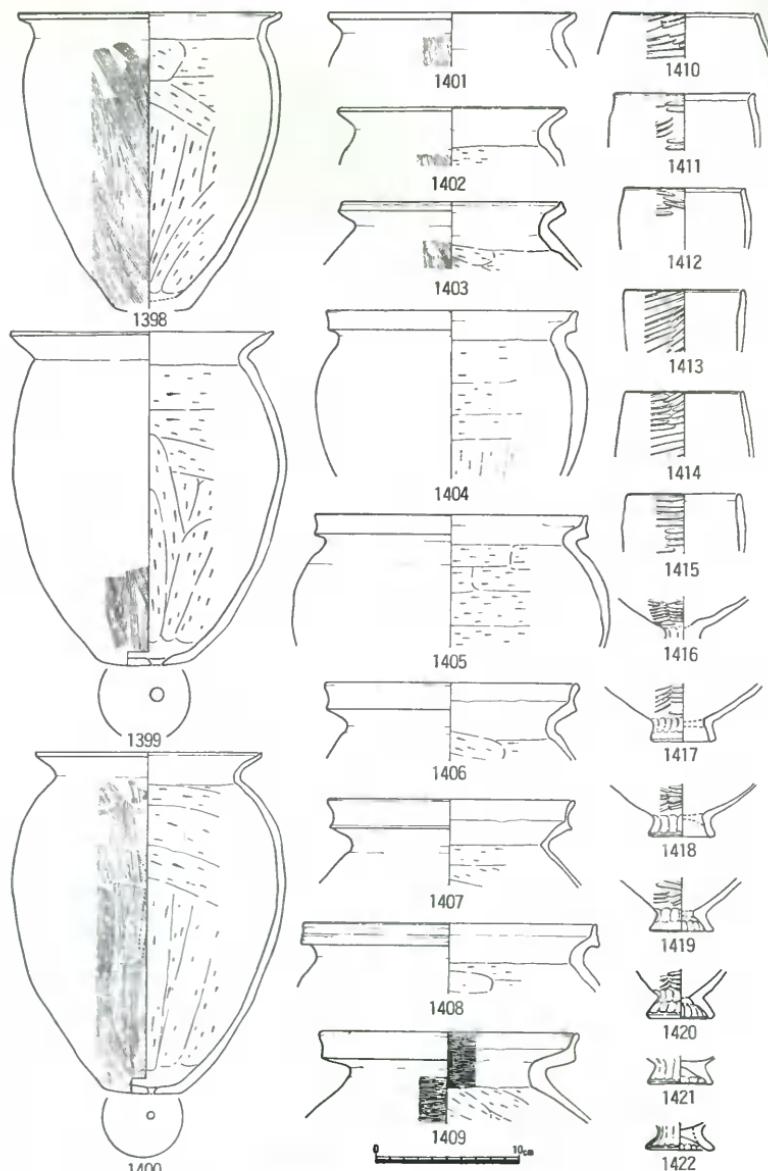
1398～1408は壺形土器である。胴部はほぼ倒卵形を呈している。口縁部はいずれも胴部から「く」字状に外反するものであるが、端部の形状にはバラエティがある。「く」字状に外反してそのまま丸くおさめるもの1398・1399、ヨコナデにより面をもつか、わずかに上方へつまみあげたもの1400～1403、上方への拡張が著しいもの1404～1408とがある。なお口縁端部を拡張するものは、端面に強いヨコナデによる凹部がめぐる。調整は口縁部外面はヨコナデ、胴部外面はハケメ、内面はヘラケズリである。

1409は壺形土器である。口縁部は胴部から「く」字状に外反の後、端部を上方へ拡張している。調整は口縁部外面はヘラミガキ、胴部外面ヘラミガキ、内面はヘラケズリを行っている。

1410～1422は製塩土器である。1410～1415は口縁部で、端部は丸くおさめるものと、内傾する面をもつものとが認められる。1416～1422は底部である。調整は口縁端部がヨコナデ、胴部外面は平行タタキ、内面はナデを行っている。底部には内外面に指頭圧痕が残る。

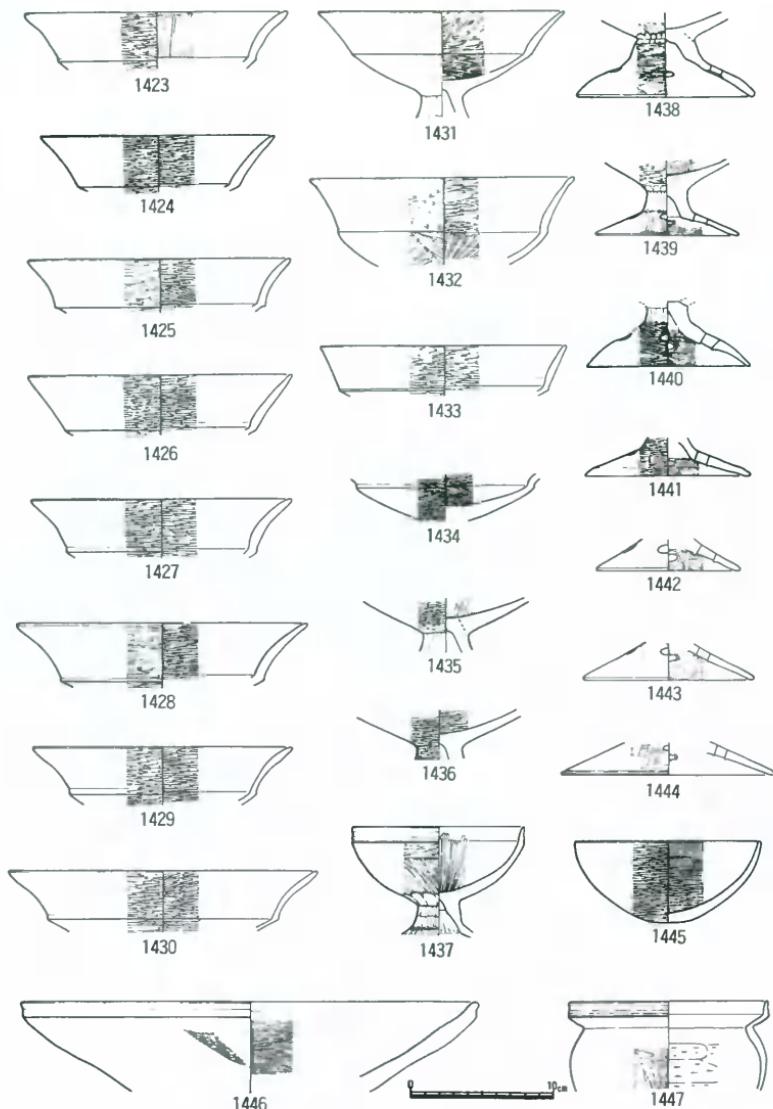
1423～1444は高杯形土器で、2種類が認められる。1つは杯底部から口縁部が外反しながら立ち上がる、皿状の杯部をもつもの、他の1つはボール状の杯部をもつものである。大きさも前者の方が大きい。脚部は、短い脚柱部から強く「ハ」字状に開くもので、端部は丸くおさめる。すべてに2対の円孔が穿たれる。調整は杯部外面が丁寧なヘラミガキを行っているが、1432の杯底部内面にはミガキ残した部分にハケメが認められる。脚部外面も基本的にはヘラミガキであるが、部分的にハケメの残るところが認められる。内面はハケメを残している。胎土は精製された粘土を用いており、色調は赤褐色を呈する。なお杯部と脚部の接合は、杯部に脚部を差し込んで仕上げている。

1445～1447は鉢形土器である。1445はボール状を呈するもので、口縁端部は丸くおさめている。調整は外面ともヘラミガキであるが、口縁部内面はハケメである。1446は鉢形土器としたが、他の器種の可能性もある。逆「ハ」の字状に開く口縁部で、端部はやや斜め上方へ拡張



第201図 No. 81 袋状土壙出土遺物(1)(1/4)

奥坂遺跡



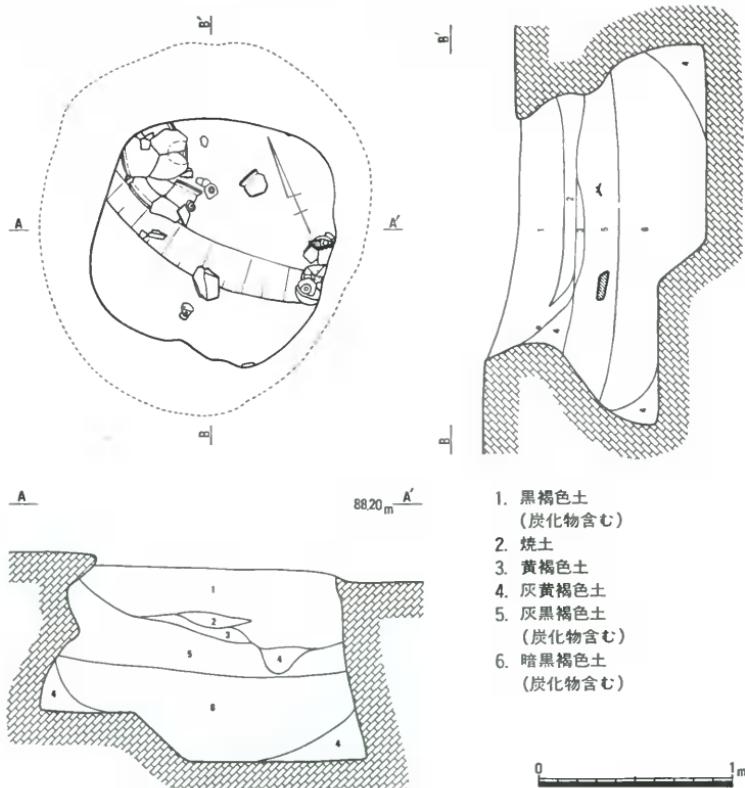
第202図 No. 81 袋状土壤出土遺物(2)(1/4)

される。その端部にはヨコナデによる凹部がめぐる。調整は内外にハケメが認められる。1447
も鉢形土器としたが、甕形土器とも考えられる。胴部の最大径は上位にあり、そこから急にす
ばまつてゆく器高の低いものと考えられる。

以上の土器は概ね弥生時代後期後半、奥・後・IVにあたるものと考えられる。（平井勝）

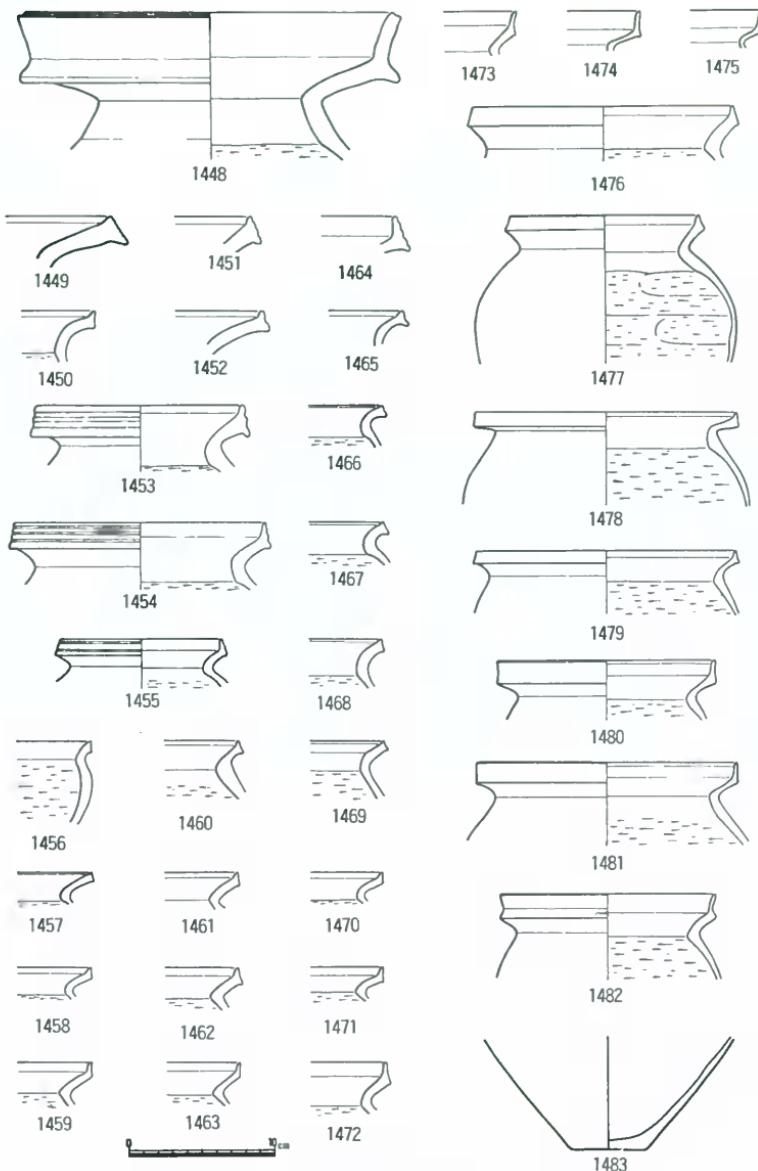
No. 10 袋状土壙（第203～205図、図版74-1）

C-8の南東寄りに検出した袋状土壙である。海拔88.00mの等高線上に位置し、No.3住居址と重複していた。切り合ひ関係を精査した結果、No.3住居址を切って新しくNo.10袋状土壙を構築していた。検出面での平面形は隅丸方形に近い形態を呈し、径は約120cmになっていた。この土壙の底部には約25cmの段が認められ、南西部分が高くて北東部分が低くなっていた。検出



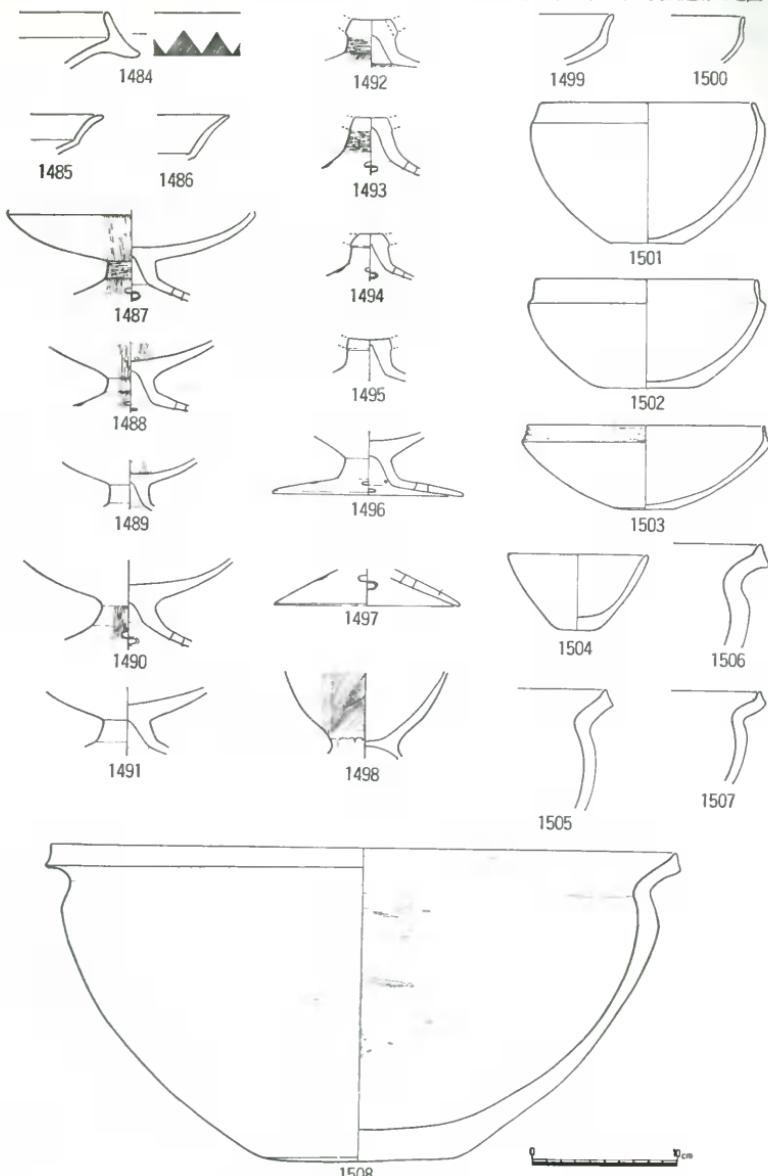
第203図 No. 10 袋 状 土 壙 (1/30)

奥坂遺跡



第204図 No. 10 袋状土壙出土遺物(1)(1/4)

第5章 第1節 奥坂遺跡A地区



第205図 No. 10 袋状土壙出土遺物 (2) (1/4)

奥坂遺跡

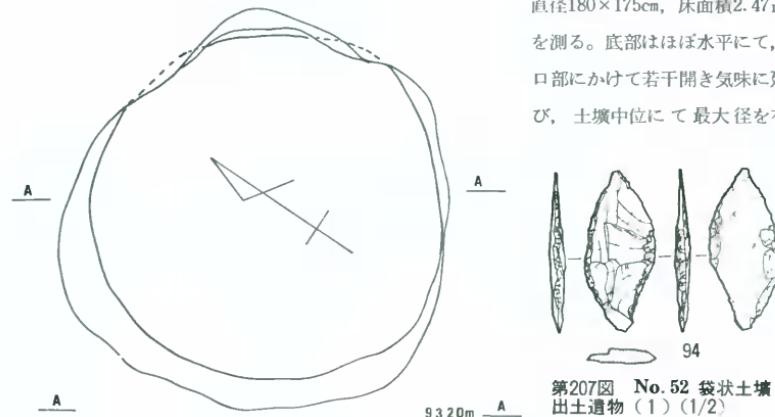
面から北東部分の低くなった底部までの深さは約100cmを測り、周囲の壁面は70~80度に内傾して立ち上がっていた。袋状土壌内には焼土や黄褐色土とともに炭化物を含む土砂が複雑に堆積し、底部には1508の鉢形土器が押し潰された状態で出土した。中位の炭化物を含む灰黒褐色内からは、多量の土器片とともに板石も認められた。

この袋状土壌から出土した遺物は、いずれも土器である。これらの土器は、奥・後・IVの古相に比定されるであろう。
(福田)

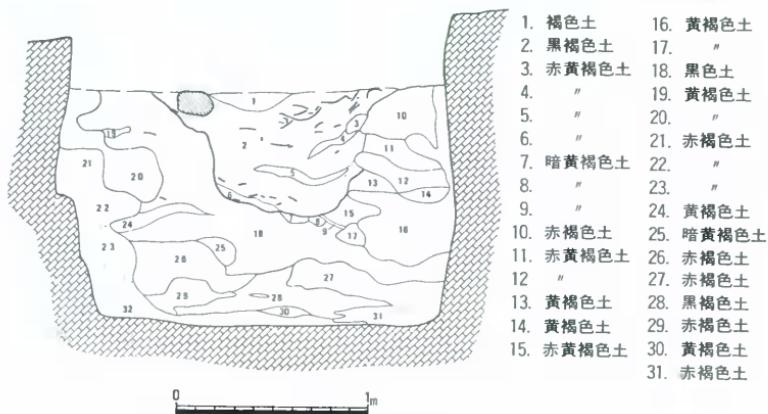
No. 52 袋状土壌 (第206・207図、図版74-2)

D-4中央東側、海拔93.00m付近に位置する袋状土壌である。口部直径213×200cm、下底

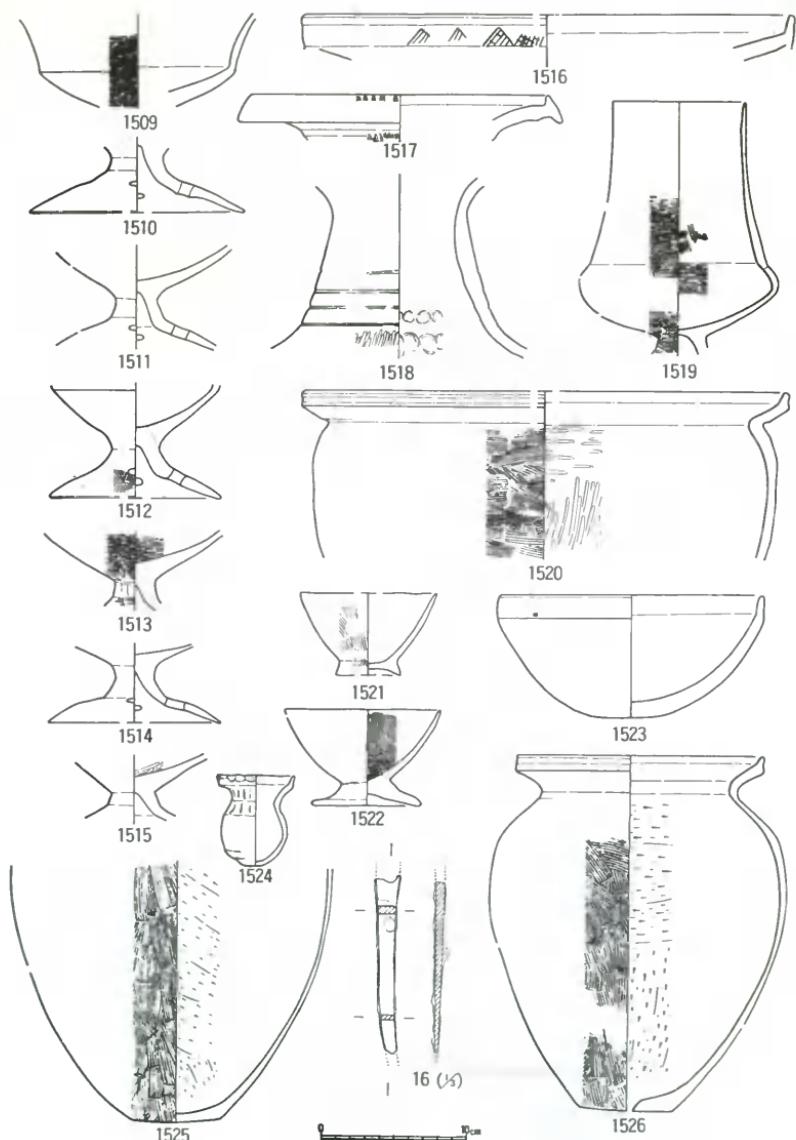
直径180×175cm、床面積2.47m²を測る。底部はほぼ水平にて、口部にかけて若干開き気味に延び、土壌中位にて最大径を有



第207図 No. 52 袋状土壌
出土遺物 (1) (1/2)



第206図 No. 52 袋状土壌 (1/30)



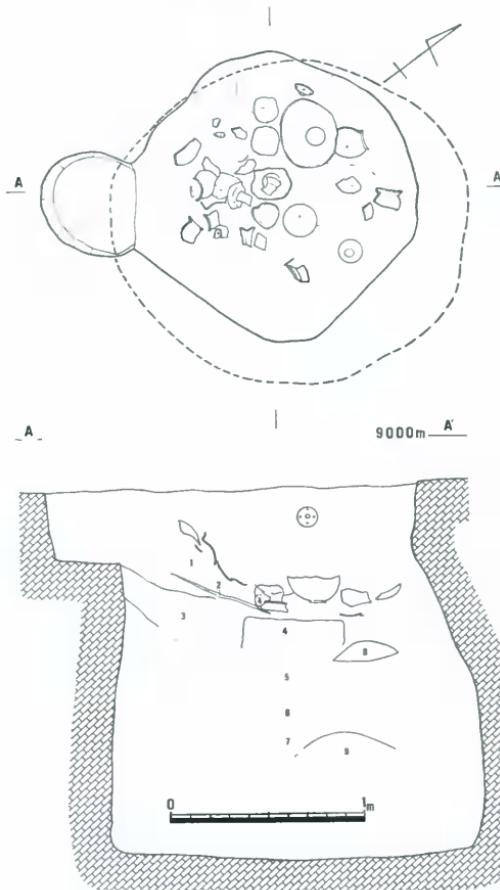
第208図 No. 52 袋状土壞出土遺物 (2) (1/3, 1/4)

奥坂遺跡

し、再びすぼまる形態をとっている。

遺物出土状況はNo.81袋状土壙等に類似し、上層に多く、下層にゆくにしたがって少なく、小片化している傾向にある。1～6層の堆積はレンズ状を呈し、下層にみられた凸状の堆積はない。埋没後、あらためて幅約120cm、深さ約60cmの穴が掘られ、土器片が放棄された状況を呈する。1509～1515は精製粘土が使用されている。変形土器1526の特徴からは、奥・後・IVに比定できる。

No. 109 袋状土壙 (第209～214図、図版76)

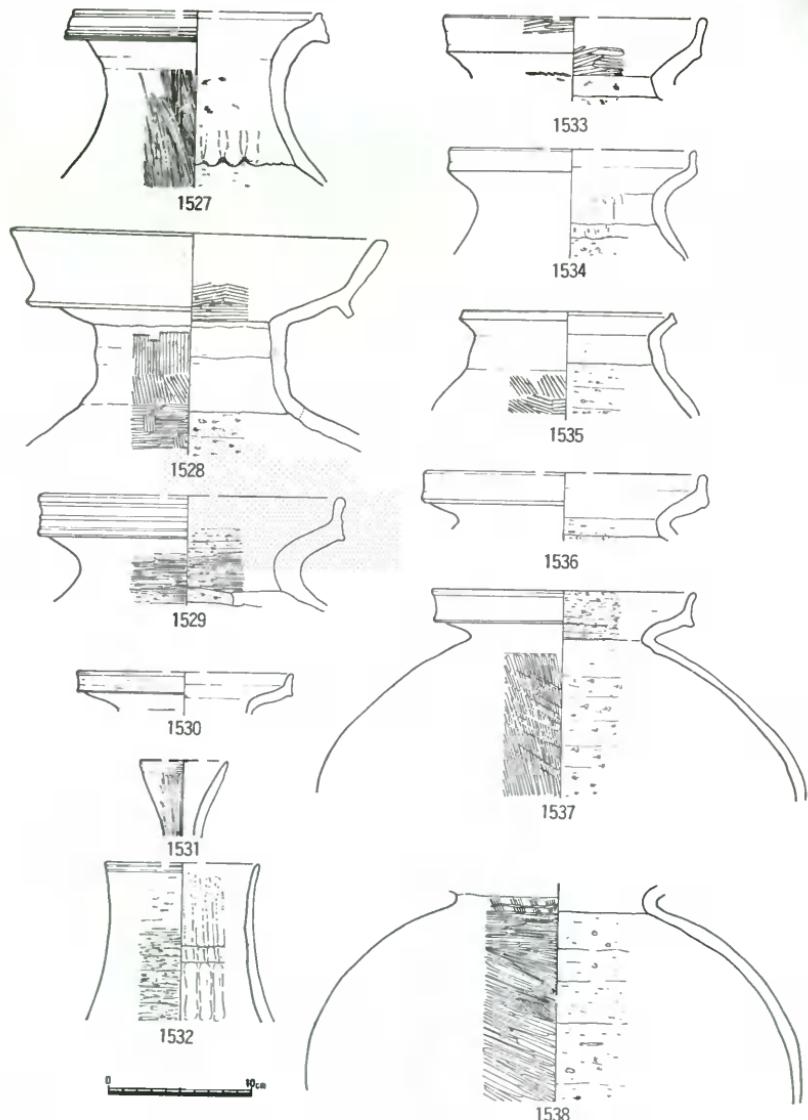


第209図 No. 109 袋 状 土 壙 (1/30)

D-6北東端、海拔 89.70m付近に位置する袋状土壙である。口部直徑138×130cm、底部直徑184×167cm、床面積約2.4m²を測る。底部は中央が若干低く周縁が高くなつており、そこより口部に向かって傾斜を増してゆき、口部30cm下位で変換して垂直に立ち上がつてある。

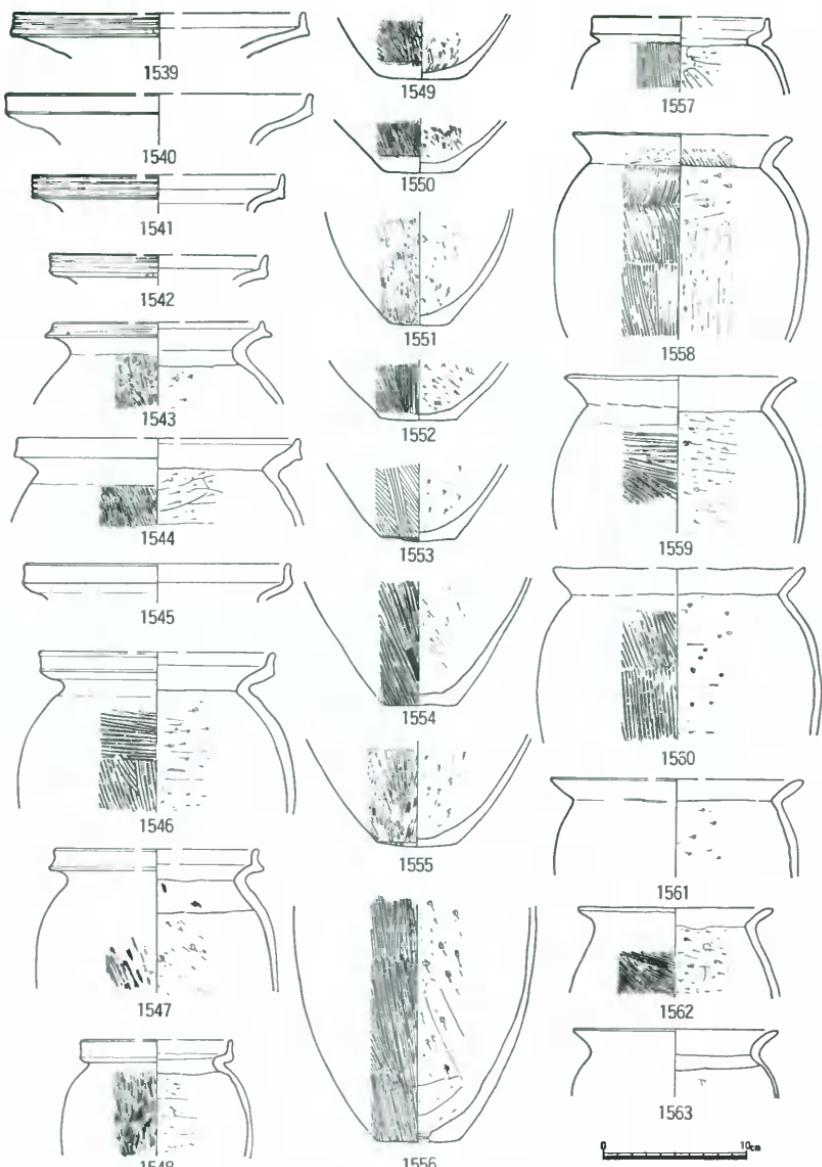
遺物は口部より約70cmの深さまでに多く、南南西の方向より遺物が放棄された状況を呈していた。その下位には約50×50×25cmの粘土塊があり、比較的精選されたもので、四角形を呈していた。さらに下層には2か所の貝層が認められた。とくに下層ではハイガイ・マガキを中心

- 1. 淡黒色土
- 2. 赤褐色土
- 3. "
- 4. 粘土塊
- 5. 黒色土
- 6. 茶褐色土
- 7. 淡黒色土
- 8. 貝
- 9. "



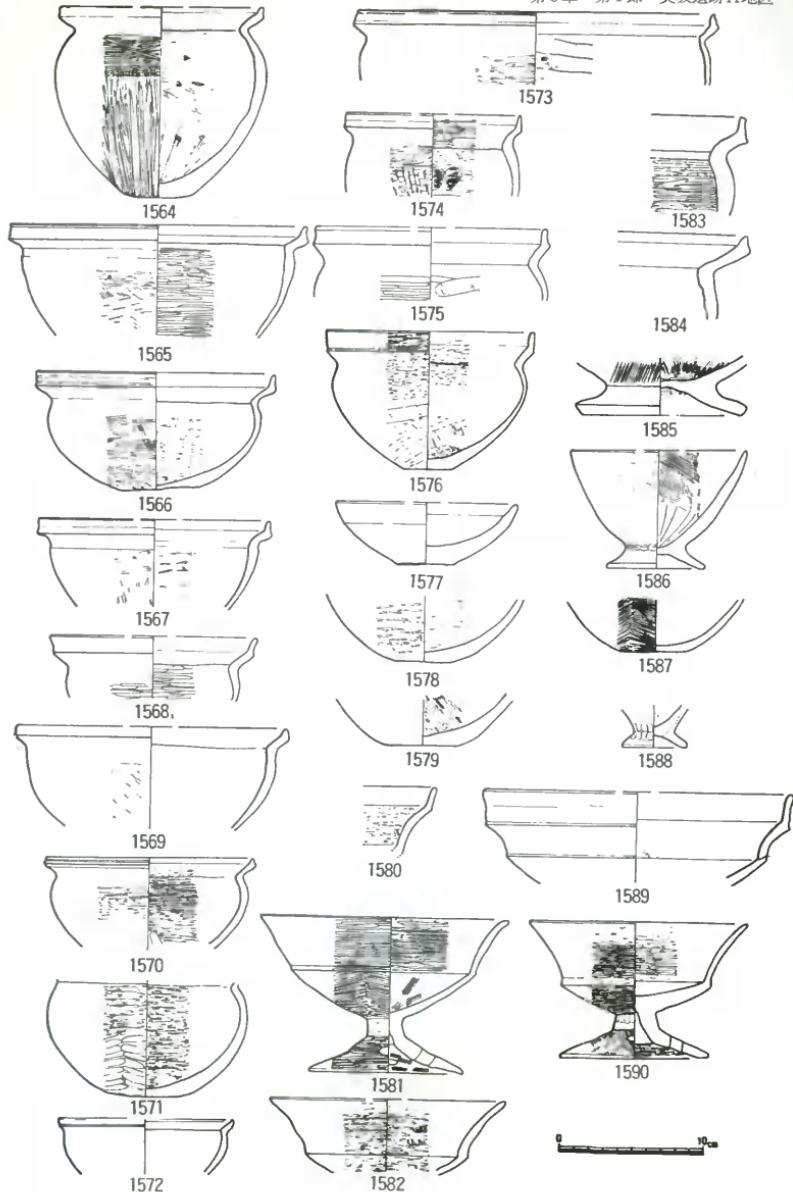
第210図 No. 109 袋状土壙出土遺物 (1) (1/4)

奥坂遺跡

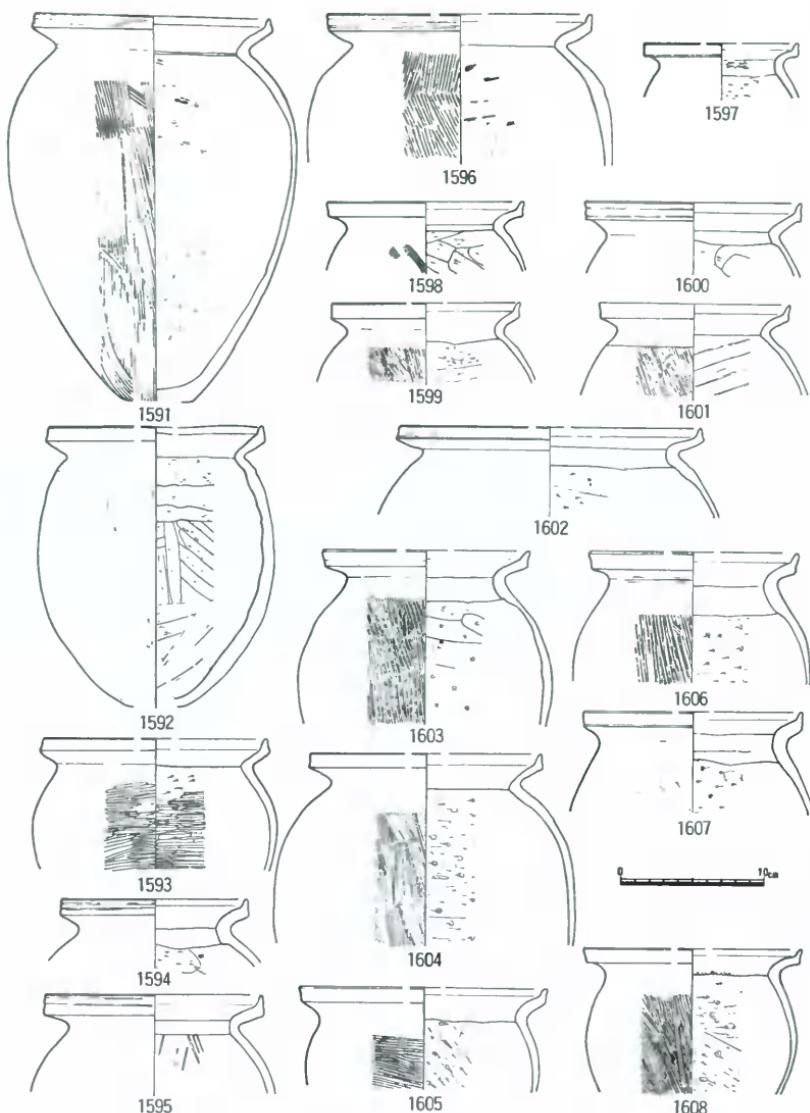


第211図 No.109 袋状土壤出土遺物(2)(1/4)

第5章 第1節 奥坂遺跡A地区



第212図 No 109 袋状土壤出土遺物（3）(1/4)



第213図 No. 109 袋状土壤出土物 (4) (1/4)

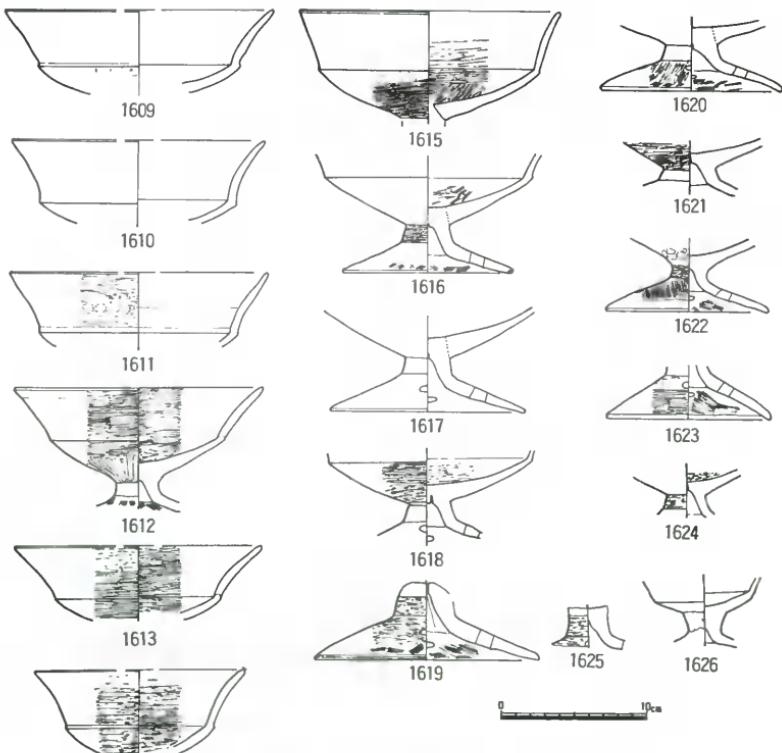
に、魚骨等が混土貝層に近い状態で投げ込まれていた。

遺物は破損品等の使用不可能な土器片を中心に壺・甕・鉢・高杯・製塩土器等が約150点ほどが確認できた。甕・鉢の類が圧倒的に多く、次に高杯・壺等が混じっている。

壺・甕等の形態・手法の特徴に、「く」字形に折れまがった口縁端部が外開きする傾向が認められ、垂直に立ち上がる壺・甕等より新しい様相を呈している。甕外面は縦位のハケメを主体にしており、器内面は底部よりくびれ部までヘラケズリが施されている。そして、それらは胎土中に6~7mmの砂粒を多く含んでいる。

それはとくに小型の鉢について言える。また、前述した壺・甕と同様に口縁部端を外開きに引き出す鉢が多く、胎土は精製粘土が使用されている。

1609~1626の高杯においても、器内外面は横位のヘラミガキが施されており、胎土には精製粘土が使用されている。また、短脚より下方に広がる裾部には外面からの4孔が穿たれてい



第214図 No. 109 袋状土壤出土遺物（5）(1/4)

奥坂遺跡

る。これらの土器は総じて硬度な焼きに仕上がっていいる。

時期は奥・後・IVに比定できる。

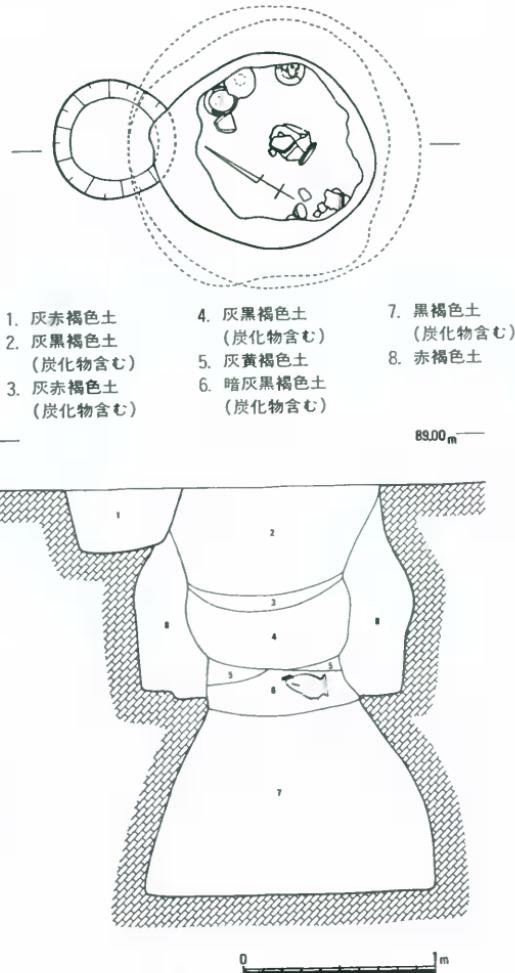
(高畑)

No. 7 袋状土壙 (第215~217図、図版75-1)

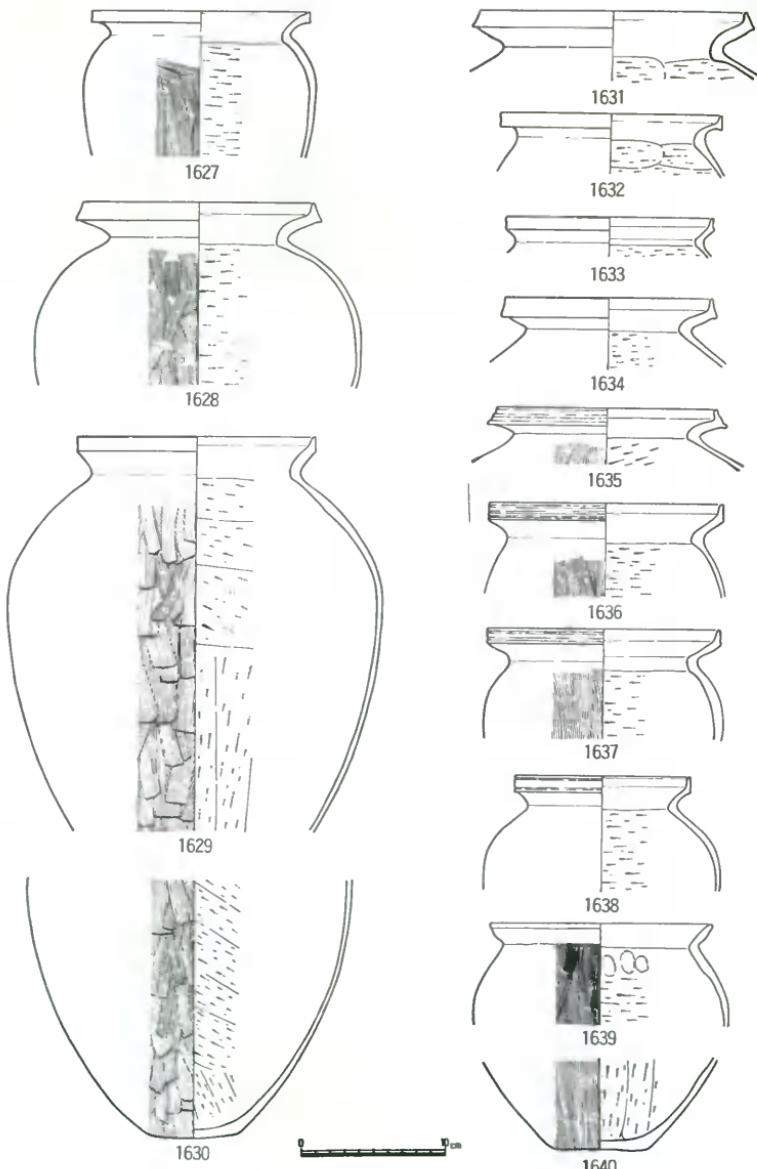
B-8の東端で検出した袋状土壙である。海拔88.50~88.75mの比較的平坦な地点に位置し、近接してNo.8土壙が存在した。

検出面での平面形は梢円形に近い状態を呈し、長径約118cm、短径約100cmであった。検出面からの深さは約212cmと著しく深く、底部は水平で海拔約86.65mのレベルになっていた。底部の水平面の形態は円形を呈し、直径約150cmになっていた。

このNo.7袋状土壙は、断面の形態に特徴がある。すなわち、海拔約87.65mのレベルの壁面が著しく狭くなつて、上位に平坦な面が認められるのである。そして検出面から順に、灰黒褐色土、灰赤褐色土、灰黒褐色土、灰黃褐色土、暗灰黒褐色土が堆積し、壁面の周囲には炭化物を含まない赤褐色土が認められた。このレベルから底部までは、炭化物を含む黒褐色土が厚く堆積し、壁面は約75度に内傾していた。このような調査結果から判断して、No.7袋状土壙は2段階にわたって構築されたと考えられる。海拔約87.65mのレベルを底部にした浅い袋状土壙が何らかの要因で放棄され、

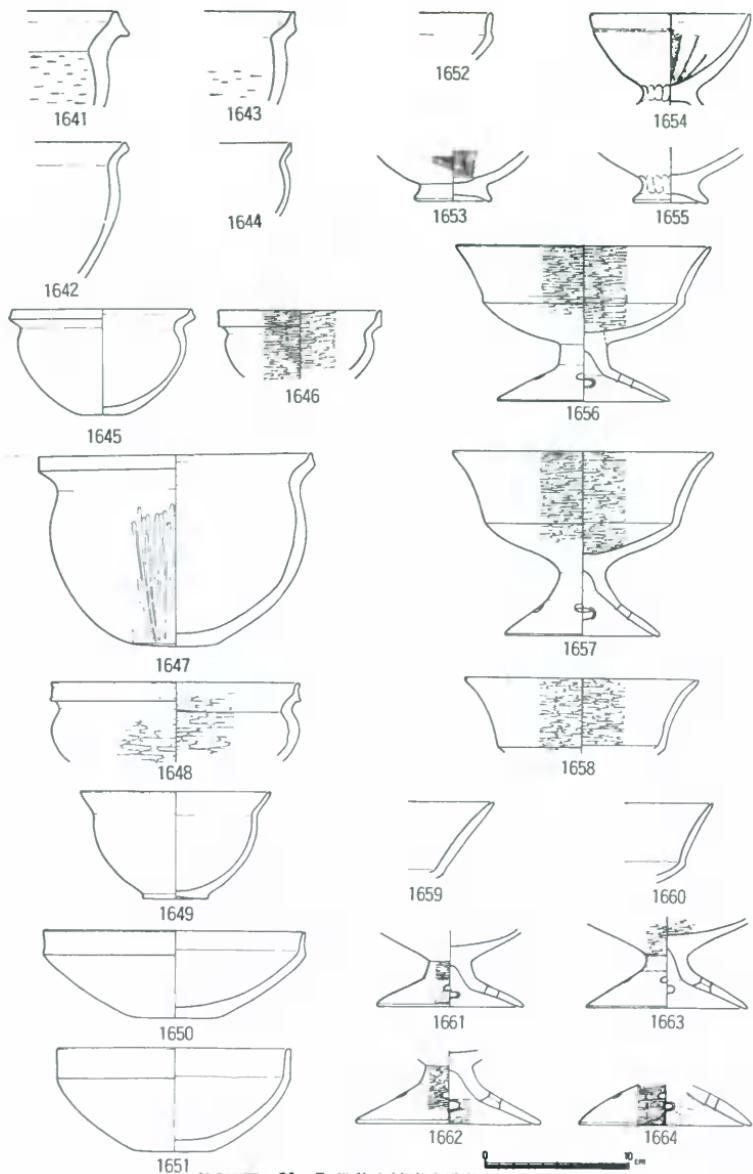


第215図 No. 7 袋状土壙 (1/30)



第216図 No. 7 袋状土壤出土遺物 (1) (1/4)

奥坂遺跡



第217図 No. 7 袋状土壙出土遺物 (2) (1/4)

周囲の壁面が崩壊して土壌内に赤褐色土が積堆した後に、埋没した袋状土壌の底部をさらに掘り窪めて、約2倍もある深さの袋状土壌が新しく造られている。

このNo.7袋状土壌からは、完形品を含む多量の土器が出土している。実測図に図示したように、海拔約87.70mのレベルの炭化物を含む暗灰黒褐土内にも土器は存在したが、大多数のものは下位の海拔87.10~87.40mの間に位置する炭化物を含む黒褐色土内から出土した。土器が多量に検出された部分は、袋状土壌の底部から約50cmも離れていた。

1627から1640は、甕形土器の口縁部から底部の破片である。完形品は認められないが、比較的大きな破片である。口縁部の形態には、上方または斜め上方へ拡張するものが多い。胴部の最大径は、中位よりもやや上方に存在する。底部は平底であるが、やや不安定な様相を呈している。口縁部はいずれもヨコナデを行っているが、外面の胴部には縦または斜め方向のハケメを施しているものが多い。内面胴部の上位は横方向のヘラケズリを行い、下位は縦方向のヘラケズリを施している。

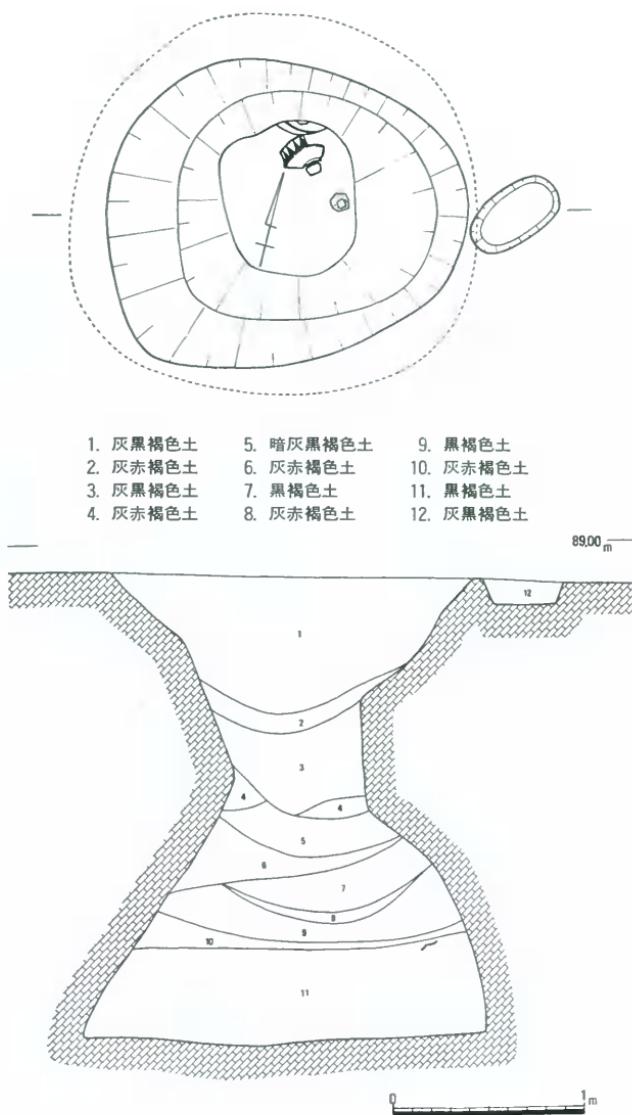
1641から1655の鉢形土器と1656から1664の高杯形土器は、胎土に水漉粘土を使用しているものが多い。鉢形土器の器面は、磨滅して調整が不明なものが多い。外面には縦または横方向のヘラミガキや縦方向のハケメを施しているもののが存在し、内面には横方向のヘラケズリやヘラミガキ以外に、蜘蛛の巣状に描いたハケメ痕跡も認められる。高杯形土器の杯部には、内外面とも全体に丁寧な横方向のヘラミガキを施している。脚部はいずれも短脚を呈し、円孔は4か所に存在する。外面には横方向のヘラミガキと縦方向のハケメを施しているが、内面には横方向のハケメが認められるもののが存在する。

これらの土器は、いずれも奥・後・IVの古相に比定される。

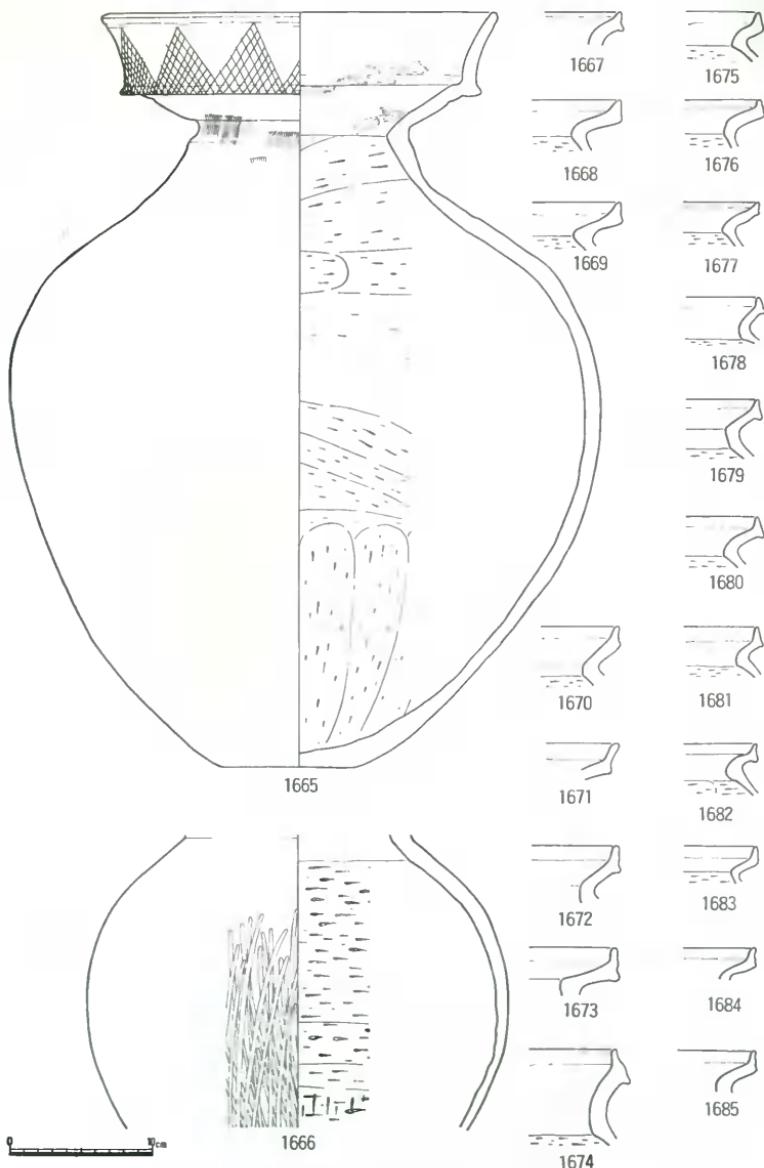
No.99 袋状土壌（第218~221図）

B-8の中央部で検出した袋状土壌である。海拔88.75mの等高線に近接して存在し、北側には大規模で数回の建て替えが確認されたNo.4住居址が検出されている。この袋状土壌は、奥坂遺跡で検出した数多くの袋状土壌のなかでもっとも深く、構築された当時の形態を良好に留めていた。検出面での形態は不整形な円形または楕円形を呈し、長径約186cm、最大短径約160cmを測る。断面の形態は「フラスコ」状を呈し、検出面からの深さは約240cmにもなっていた。したがって発掘調査は極めて困難で、梯子を掛けて作業を進めたが、周辺の壁面が部分的に崩壊し、危険な状態であった。この袋状土壌の発掘調査は8月上旬に行ったのであるが、外部と底部との温度の差は約10度であった。底部の平面形態は、長径約208cm、短径約196cmを測る楕円形を呈し、全体にはほぼ水平に仕上げられていた。底部のレベルは海拔約86.50mで、1665の壺形土器が口縁部と胴部に分離した状態で存在した。この袋状土壌の西側の壁面は底部から約60度に内傾して直線的に立ち上がり、東傾の壁面は緩やかに内湾していた。海拔約87.60mの

奥坂遺跡

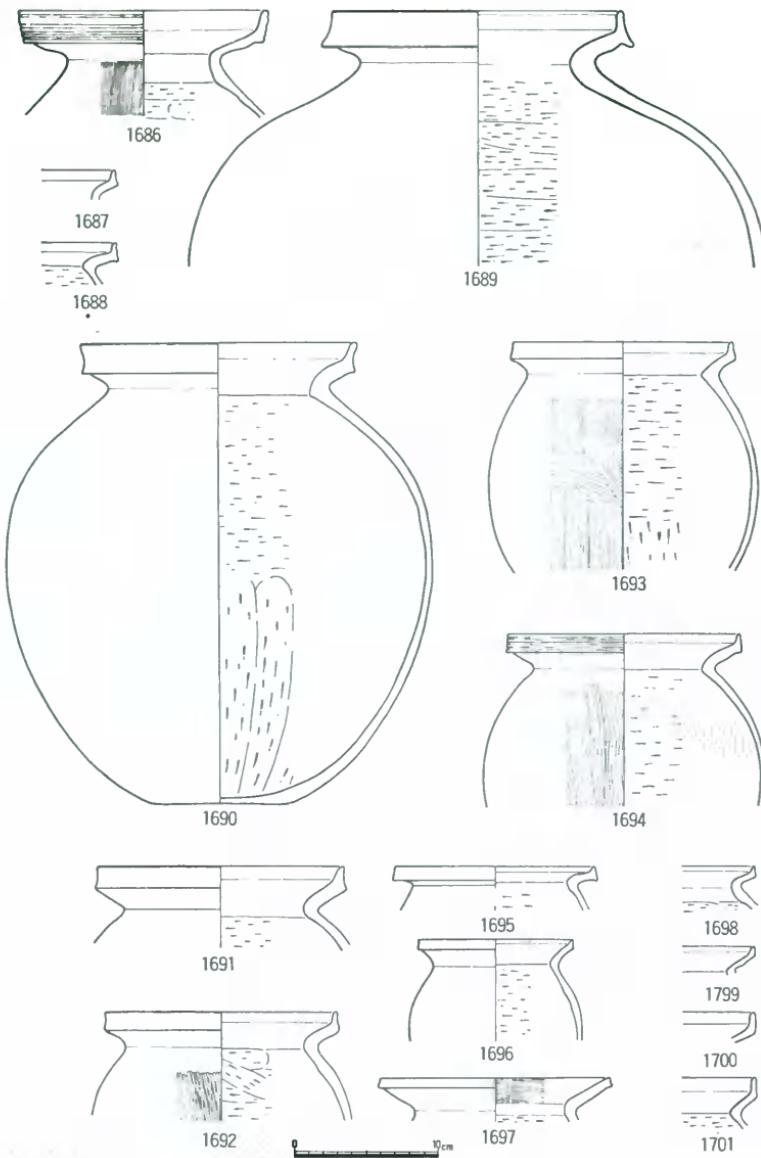


第218図 No. 99 袋状土壙 (1/30)

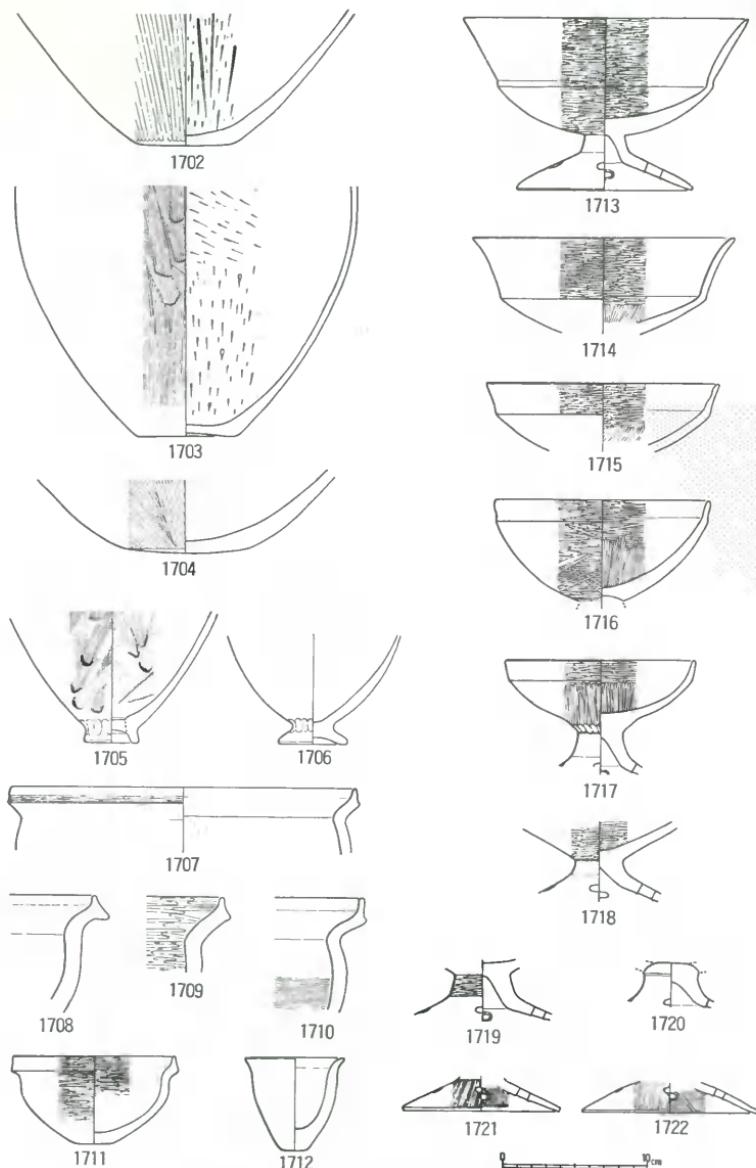


第219図 No.99 袋状土塊出土遺物 (1) (1/4)

奥坂遺跡



第220図 No. 99 袋状土壤出土遺物 (2) (1/4)



第221図 No. 99 袋状土壤出土遺物 (3)(1/4)

奥坂遺跡

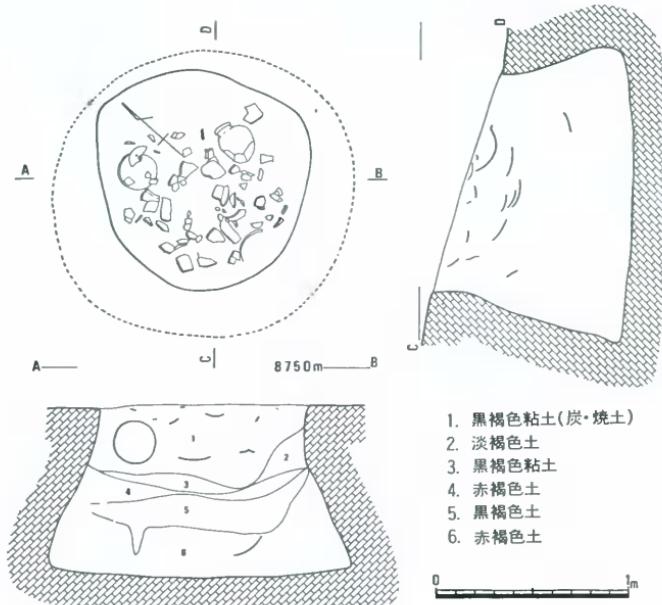
部分の壁面がもっとも狭くなり、直徑約80cm、最大短径約70cmの橢円形に近い形態を呈している。土壤内には炭化物や土器片を多量に含む土砂がレンズ状に堆積していたが、壁面が崩壊して発掘作業が危険であったため、層位ごとに土器を分離して採集することができなかった。

No.99袋状土壤から出土した遺物は、いずれも奥・後・IVの古相に比定される土器である。完形に復元することが可能であったのは、1665の壺形土器、1690の器壁の厚い甕形土器、1711と1712の鉢形土器、1713の高杯形土器の5個体である。特に1665の壺形土器は、口径26.6cm、器高51.5cm、頸部径14.4cm、胴部最大径40.8cmを測る。口縁部の外面には鋭利な施文具で施した鋸歯文が全体にめぐらされ、頸部には縦方向のハケメがわずかに残存している。胴部の最大径は中位よりやや上方に存在し、底部は不安定な平底を呈している。胴部の外面は縦方向のナデを施し、内面は粗いヘラケヅリを行っている。

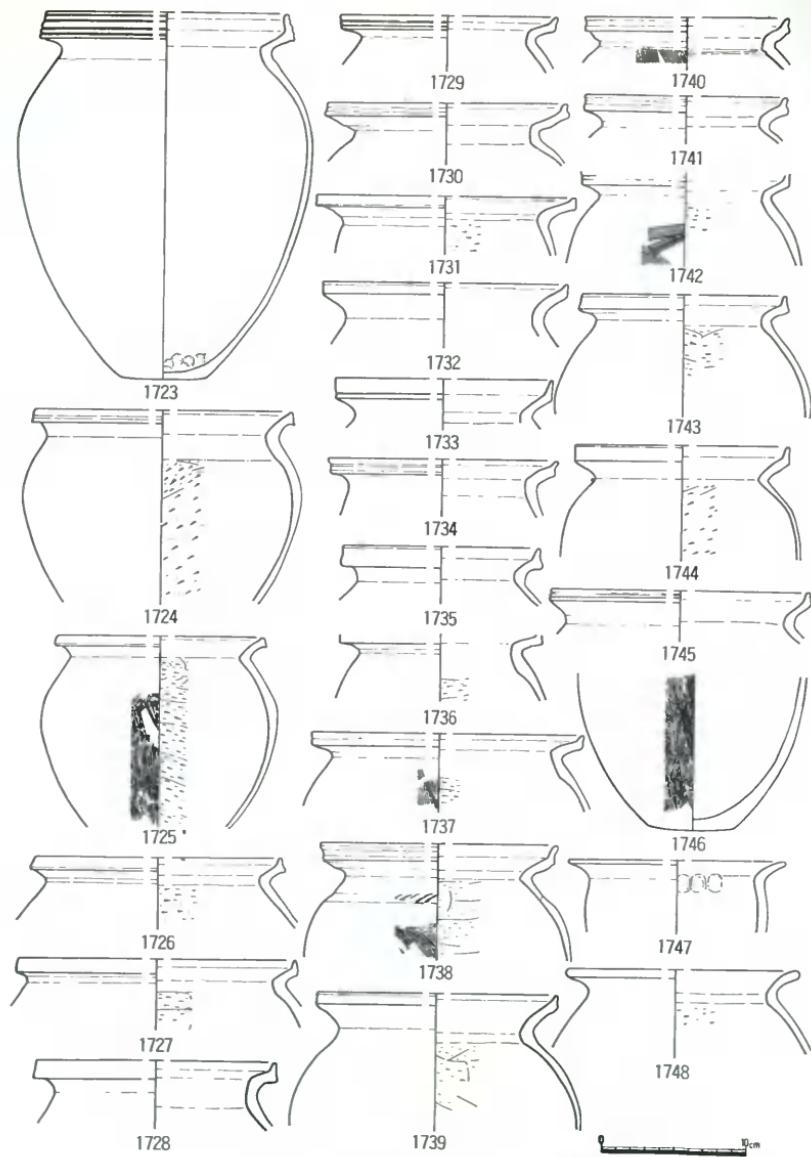
(福田)

No. 103 袋状土壤 (第222~224図、図版77-1)

D-8北西隅、海拔87.20m付近に位置する袋状土壤である。口部直径115×108cm、底直径153×150cm、底部面積1.79m²、深さ100cmを測る。底部中央が若干低く、周縁が高くなり約70度の角度で内傾し、口部近くで垂直に変換して30cmの筒部を有する。土壤内堆積土は6層に分層で



第222図 No. 103 袋 状 土 壤 (1/30)



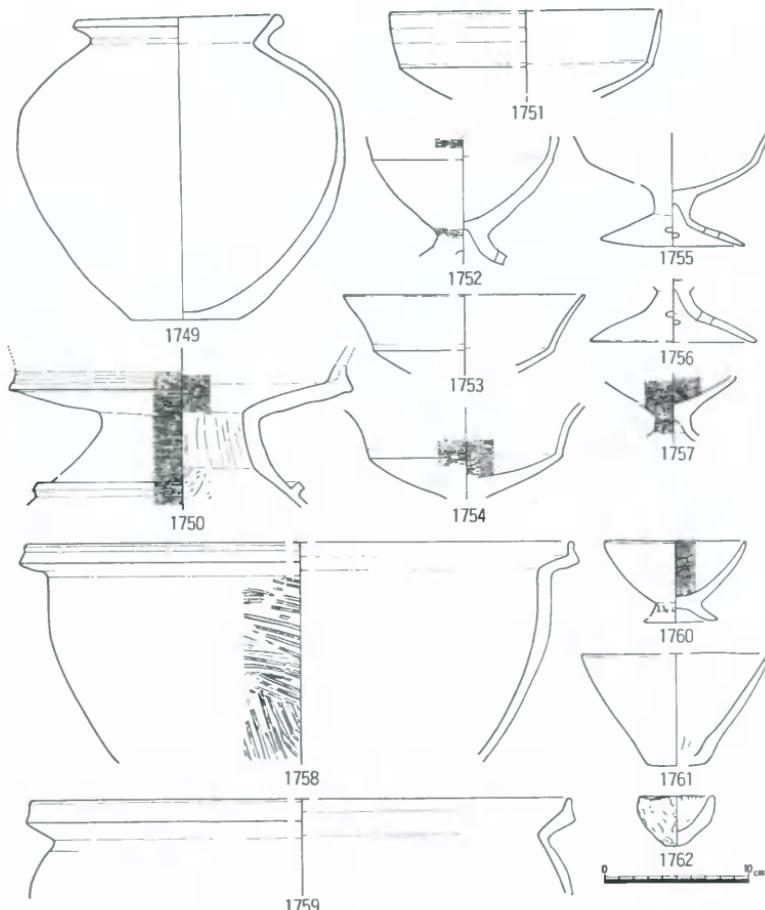
第223図 No. 103 袋状土壙出土遺物 (1) (1/4)

奥坂遺跡

き、遺物の大半が1層に包含されており、ゴミ穴としてNo.81・52・109袋状土壙等と同様の使用目的で利用されたことが理解できる。

遺物は甕形土器を中心に壺・高杯・鉢形土器等がみられる。1723は県南部沖積地の集落で一般的にみられるもので、口縁部にヘラガキの沈線が4条施されている。1726~1745等の甕形土器では口縁端部を外側に引き出す傾向があらわれている。この傾向は鉢形土器1758・1759等についても同様のことがいえる。時期は奥・後・IVに比定できる。

(高畠)



第224図 No. 103 袋状土壙出土遺物 (2) (1/4)

No. 117 袋状土壙（第225・226図）

No. 4 E 住居址のほぼ中央部床面に検出された。E 住居址の中央ピットと思われるP-41に切られて存在する。上部に削平を受けて、本来の径及び深さは不明である。底に近い一部は袋状を呈しているが、いわゆる袋状土壙の多くが底面がほぼ平坦であるのに対し、多少の凹凸がみられ、柱穴状土壙の集合の可能性もある。現状で径100~120cmの不整円形を呈し、深さ約40cmを測る。覆土は暗灰褐色あるいは茶褐色を呈し、一気に埋まった状況をも示す。

出土遺物は土器が数片のみであり、図示できる第226図1763の變形土器の形態手法は弥生後期初頭の特徴を併せている。土器1片だけでいえば、No. 4 住居址存在以前の可能性が強いが、他の袋状土壙で後期初頭まで遡るものはない。

No. 116 袋状土壙（第225・226図）

No. 4 F 住居址の覆土を切り込み、B 住居址及びA 住居址に切り込まれて存在する。そのため平面的には2/3以上に削平を受け、底部はかろうじて平面形を残す。推定復元によれば、長軸約200cm、短軸150cmの梢円形を呈し、深さ約90cmを測る。堆積土層は3層に大別され、最下層では暗灰褐色土の中に茶褐色土がブロック状に堆積している。これは、袋状土壙の上部の崩壊による土層堆積状況を示すものであろう。

出土遺物は變形土器1764・鉢形土器1766・高杯形土器1765などがあるが、いずれも小破片であり数も少ない。1764・1766ともに口縁端部を上方にわずかに拡張させるタイプであり、高杯形土器の短脚化とともに後期中葉以降の特徴を示す。

No. 122 袋状土壙（第225・227図）

No. 4 E 住居址の東寄りの、壁体に接する位置に検出された。D・C・B 住居址の、それぞれP-31・23・14の柱穴に切り込まれて存在する。現状での平面形は隅丸長方形を呈し、長辺約150cm、短辺約100cm、深さ53cmを測る。底部近くで2段掘りされ、長辺部分に袋状掘り込みが顕著である。位置及び各住居址の存続期間などからみれば、単独で存在する可能性は少なく、E 住居址に伴うと考えられる。しかし、本遺跡ではほかに住居址に確実に伴う例はなく、一考を要する。

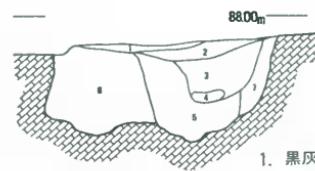
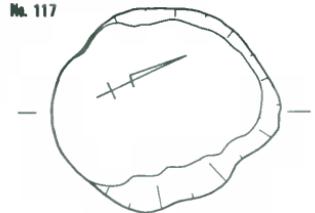
出土遺物は、数片の土器片と砥石がある。土器は「く」字口縁の變形土器1767、口端部が上方に拡張して外面に2条の雑な凹部をもつ小型の鉢形土器1768や、短脚の高杯形土器1769・1770などがある。いずれも後期後半の土器の特徴を示す。砥石は拳大の玄武岩製で900gを測る。自然石の3面を砥面として使用している。

No. 108 袋状土壙（第225・228図）

No. 4 住居址群のほぼ中央部に位置する。住居址のA-A'断面観察によれば、A 住居址の覆土である3層上面から切り込まれており、この地点における住居址廃絶後に存在した状況を示

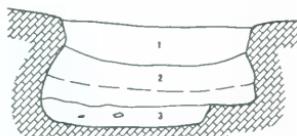
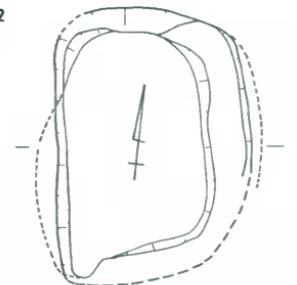
奥坂遺跡

No. 117



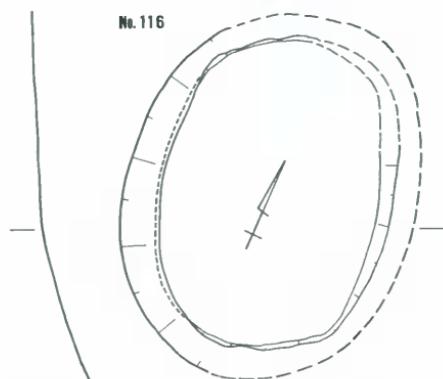
1. 黒灰色土(炭多し)
2. 暗茶褐色土
3. 黄色土(炭含粘質土)
4. 黄色地山塊
5. 黑褐色粘土
6. 暗灰褐色土
7. 茶褐色土

No. 122



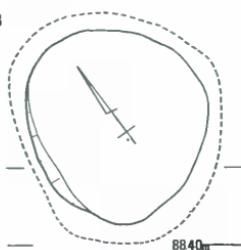
1. 暗黒灰色土
2. 暗茶褐色土
3. 茶褐色粘土

No. 116



1. 暗黒色土
2. 暗茶褐色土
3. 暗灰褐色土
4. 茶褐色土
5. " (H-F覆土)"

No. 108



1. 黒褐色粘質砂
2. 灰褐色粘質土
3. 黄色土塊
4. 黄灰褐色土
5. 黑灰褐色土

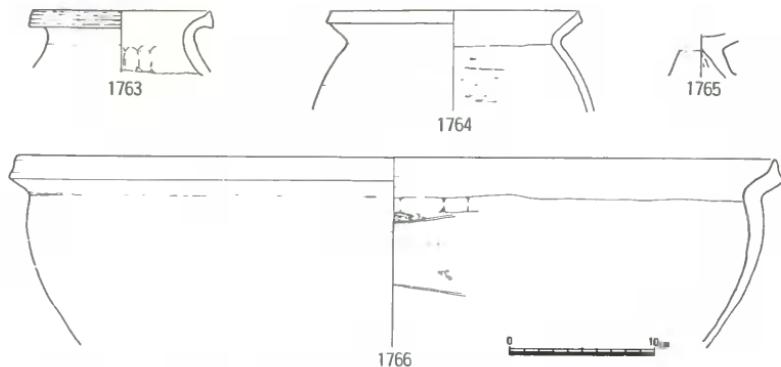


第225図 No. 108・116・117・122 袋状土壤 (1/30)

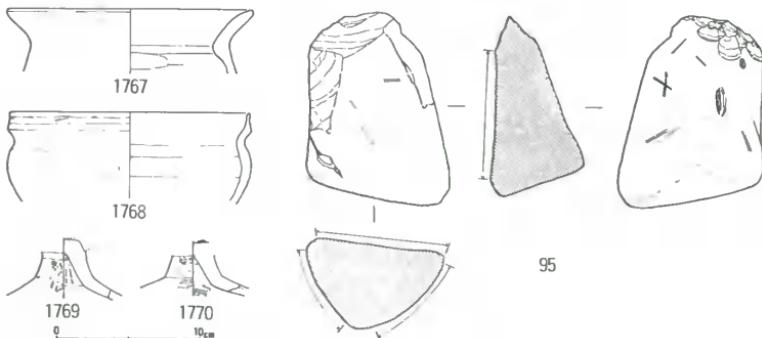
第5章 第1節 奥坂遺跡A地区

す。平面形態は不整円形を呈し、径約100cm前後、深さ約110cmを測る。地山部分から底にかけて、袋状に広く掘り込まれている。

出土遺物は壺形土器1771・1772、高杯形土器1773など数点である。1771は口縁端部が上方に大きく拡張され、後期後葉の特徴を示す。



第226図 No. 116・117 袋状土壤出土遺物 (1/4)



第227図 No. 122 袋状土壤出土遺物 (1/4)



第228図 No. 108 袋状土壤出土遺物 (1/4)

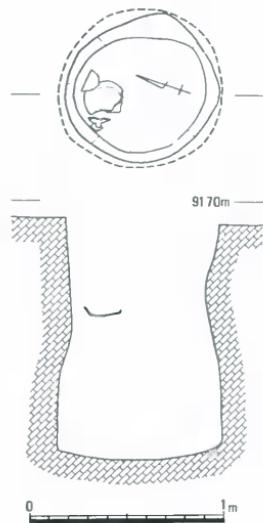
奥坂遺跡

No. 132 袋状土壙 (第229図)

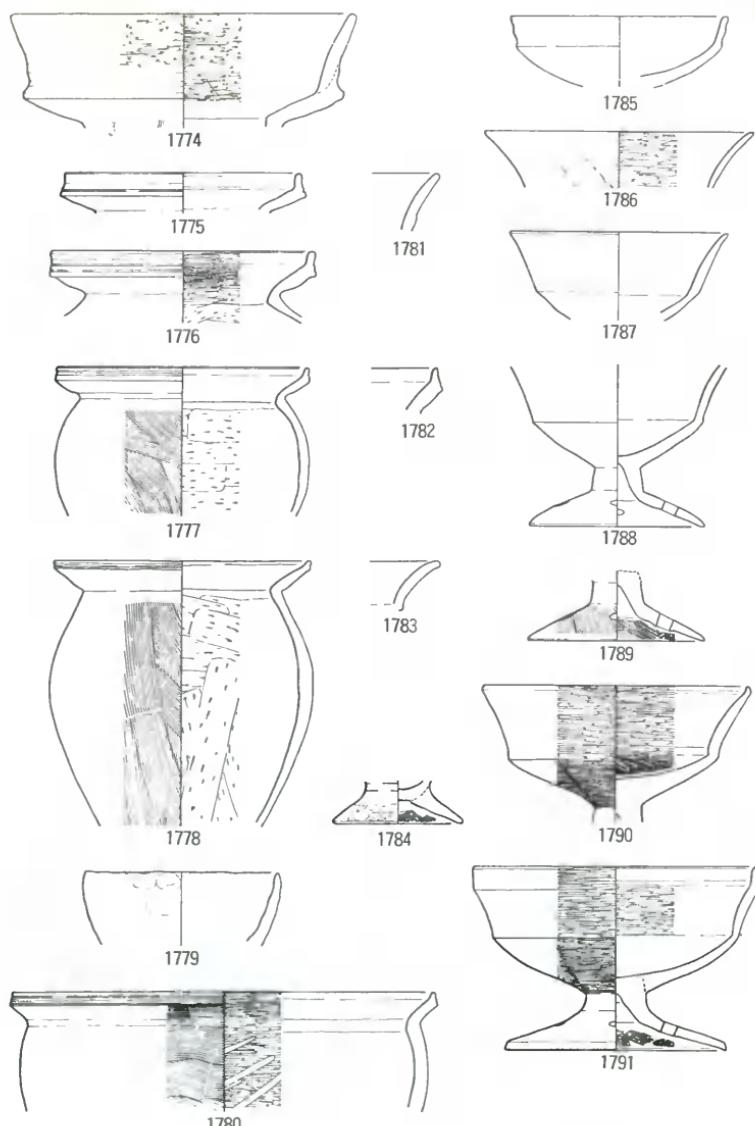
B-5の西辺やや北寄りに位置し、No.62住居址の西にある。平面形および底面形は不整梢円形を呈し、検出面での長径を底面の長径が若干上まわる程度である。深さの中位部よりやや上でくびれている。計測値は、検出面での長径約80cm、短径約73cm、くびれ部での長径約70cm、短径約60cm、底面での長径約90cm、短径約75cm、深さ128cmである。堆積土は、灰褐色土が主であり、黄灰色土ブロック、暗灰色土等が混入している。堆積土中からは弥生式土器片の他に、焼土塊、貝殻等が出土している。堆積状況は、中位部から下位部にかけては山形を呈し、上位部は徐々に水平堆積から凸レンズ状堆積に変わる。弥生式土器片は各層から出土するが、大型片は第229図に示した層位に集中する。この層の直上に貝殻の堆積が顕著である。

遺物は、壺形土器1774・1781、甕形土器1775～1778・1782、高杯形土器1783・1785～1791、台付土器1784、鉢形土器1779・1780等が出土している。1774は灰白色を呈し、胎土中に砂粒を含む。口縁部はやや外傾しながら大きく立ち上がり、屈曲部は突帯状を呈する。横方向のヘラミガキによる仕上げ調整が施されている。1781も同様の口縁部とされるが、仕上げ調整は横位のナデである。甕形土器は、いずれも口唇部が上方に立ち上がり、外面に1～3条の凹線が施されている。内面のヘラケズリは頸部まで達しているが、器壁は厚手である。1775・1782は口唇部が内傾し、1776・1777・1778はほぼ直立する。1776の口縁部内面は横位のヘラミガキによる仕上げ調整が施されているが、他はいずれも横位のナデによる仕上げ調整である。1777・1778の胸部外面は縦方向のハケメ調整が上から下へ施され、内面のヘラケズリは下半が下から上へ、上半は右方向である。高杯形土器は、口縁部によれば、外反しておさまるもの1783・1786・1787、外反して立ち上がり端部で内湾するもの1790・1791、やや外傾して立ち上がり外面に凹線を施すもの1785に分類できる。また、脚の径からも、大型のもの1791、小型のもの1788・1789に分けられる。1786の外面は、斜方向のハケメ調整で終っているが、他は横方向のヘラミガキによる仕上げ調整が施されている。いずれも短脚である。鉢形土器のうち1779は、指頭による押圧調整のうち内面のみナデしている。1786は外面に横方向のハケメ調整を施し、内面は横方向のヘラミガキによる仕上げ調整を施している。

これらの遺物のうち、甕形土器に古い時期を示すものがあるが、壺形土器1774は奥・後・IVに比定しうる。(光永)



第229図 No.132袋状土壙(1/30)

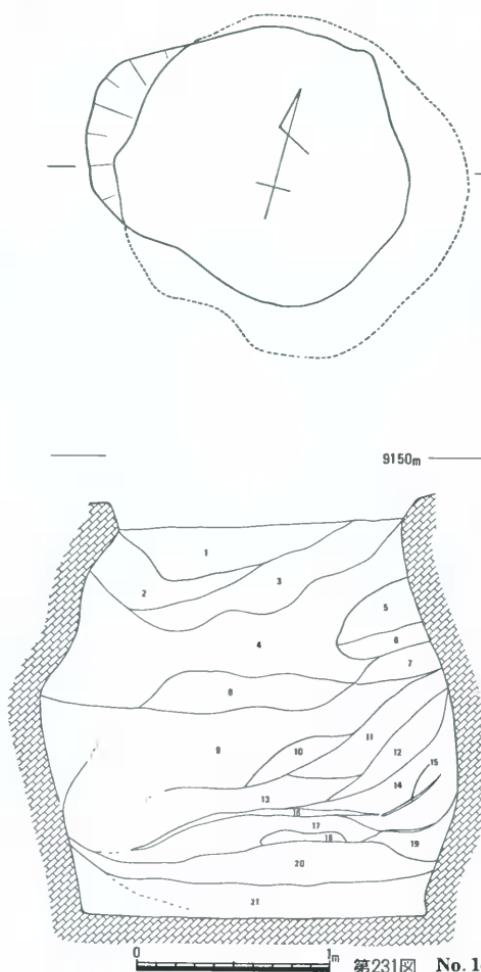


第230図 No. 132 袋状土壤出土遺物 (1/4)

奥坂遺跡

No. 140 袋状土壌 (第231~240図、図版72-1)

D-5南東、海拔91.25m付近に位置する袋状土壌であり、尾根筋上を占地している。口部直径165×143cm、下底直径176×173cm、底面積2.39m²を測り、床面形態は円形を呈する。深さ226cmと深く、No.82・99袋状土壌に続く深さである。底面より約60cm上位までが凸状の堆積が認められ、そこより上部はレンズ状の堆積が認められる。

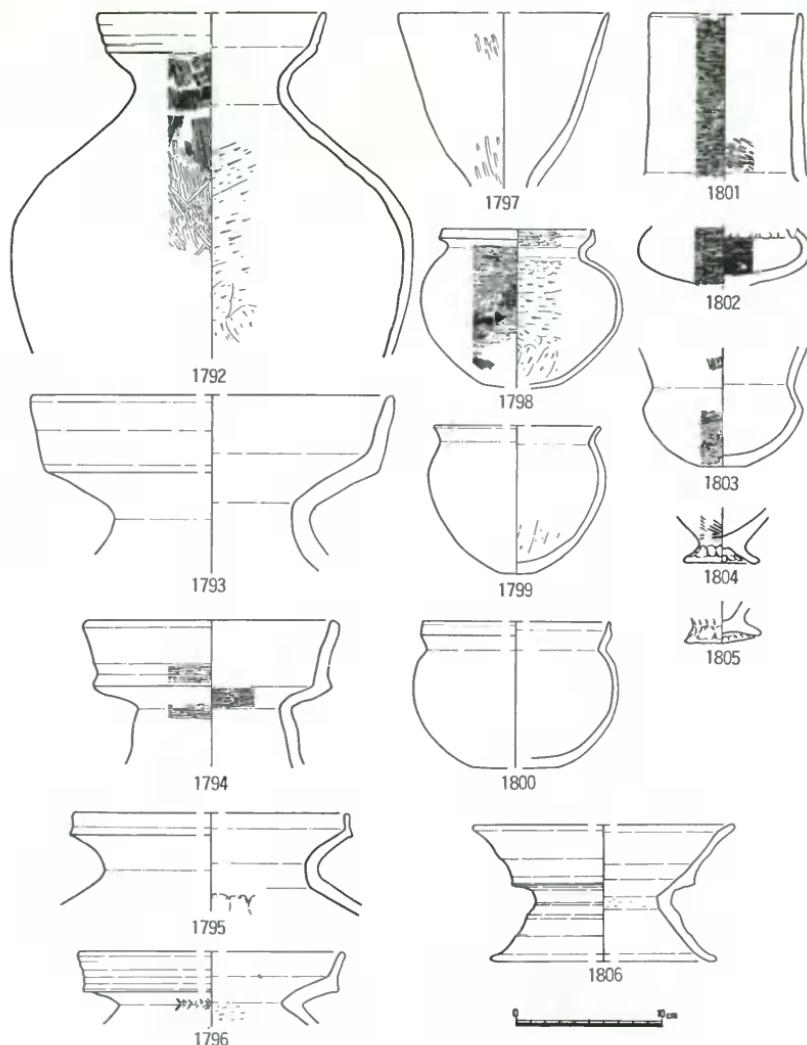


第231図 No. 140 袋状土壌 (1/30)

本土壌もNo.82・109袋状土壌と同様に数多くの貝殻が出土しており、ハイガイ・マガキ・ヘナタリ・アカニシ・ヤマトシジミ・オキシジミ等々があり、鹿角・魚骨も土器片とともに出土している。貝層は大きく2層に分離して堆積しており、下底より70~95cm間、110~120cm間に最も多くみられた。土器の類も貝に混在して、周辺より多く出土している。最終的にゴミ穴として機能していた状況を呈している。

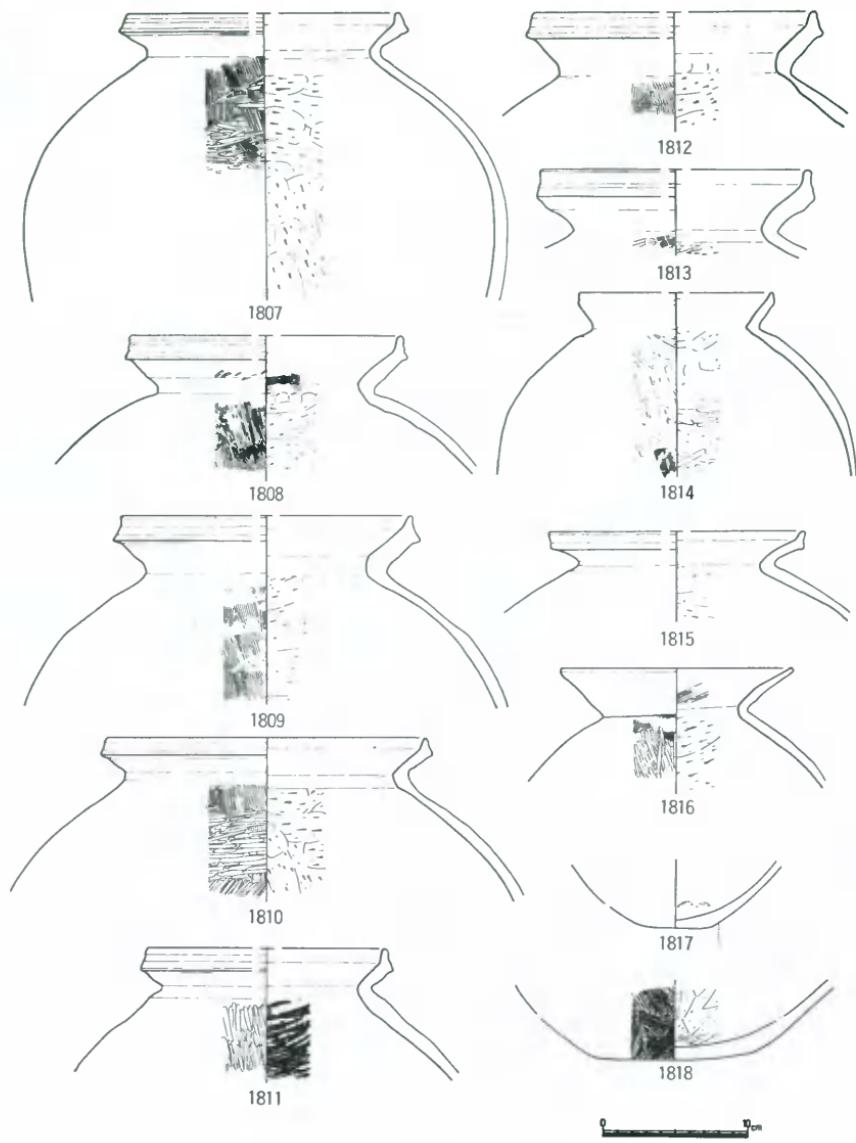
遺物は上層より中層にかけて多量に出土しており、土器を中心である。実測可能なものだけで約

- | | |
|--------------|--------------|
| 1. 淡黒灰色土 | 12. 赤褐色土 |
| 2. 黒灰色土 | 13. 茶褐色土 |
| 3. 灰褐色土 | 14. 暗灰褐色土 |
| 4. 黒灰色土 | 15. 炭 |
| 5. " | 16. 黑褐色土(炭) |
| 6. 淡黄色土 | 17. 茶褐色土 |
| 7. 赤褐色土 | 18. 赤褐色土(焼土) |
| 8. 茶黒褐色土(貝層) | 19. " |
| 9. " | 20. 黑灰褐色土 |
| 10. " (貝層) | (地山ブロック) |
| 11. " | 21. 赤灰褐色土 |

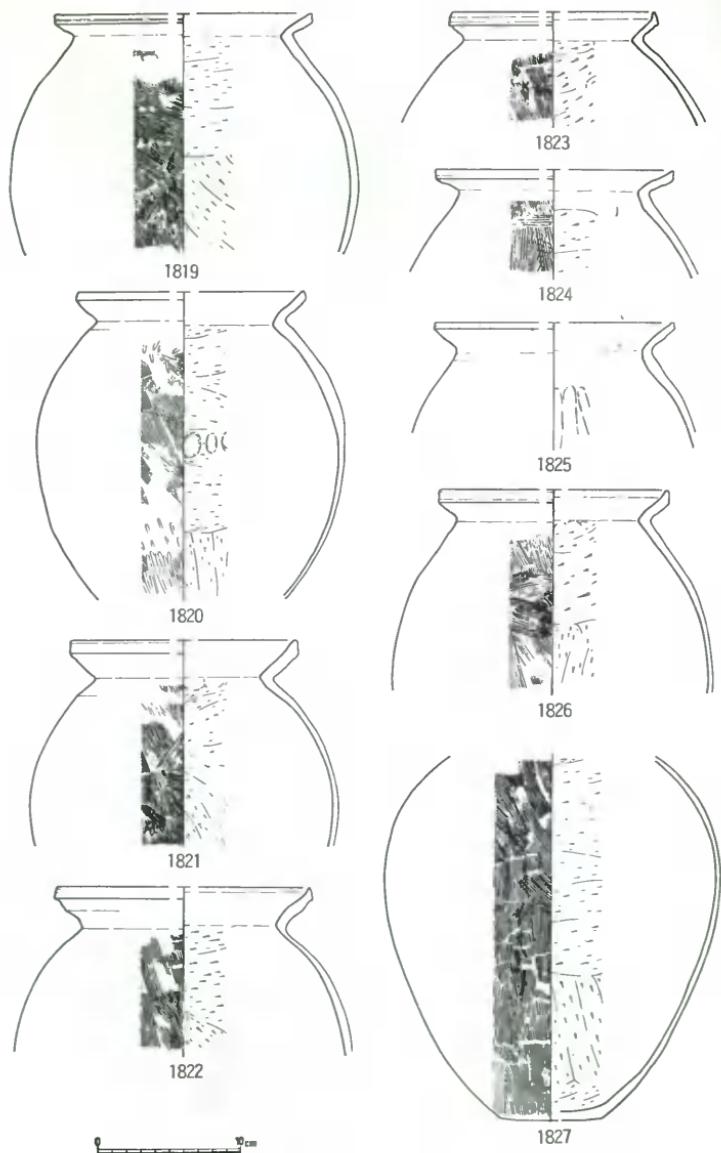


第232図 No. 140 袋状土壤出土遺物 (1) (1/4)

奥坂遺跡

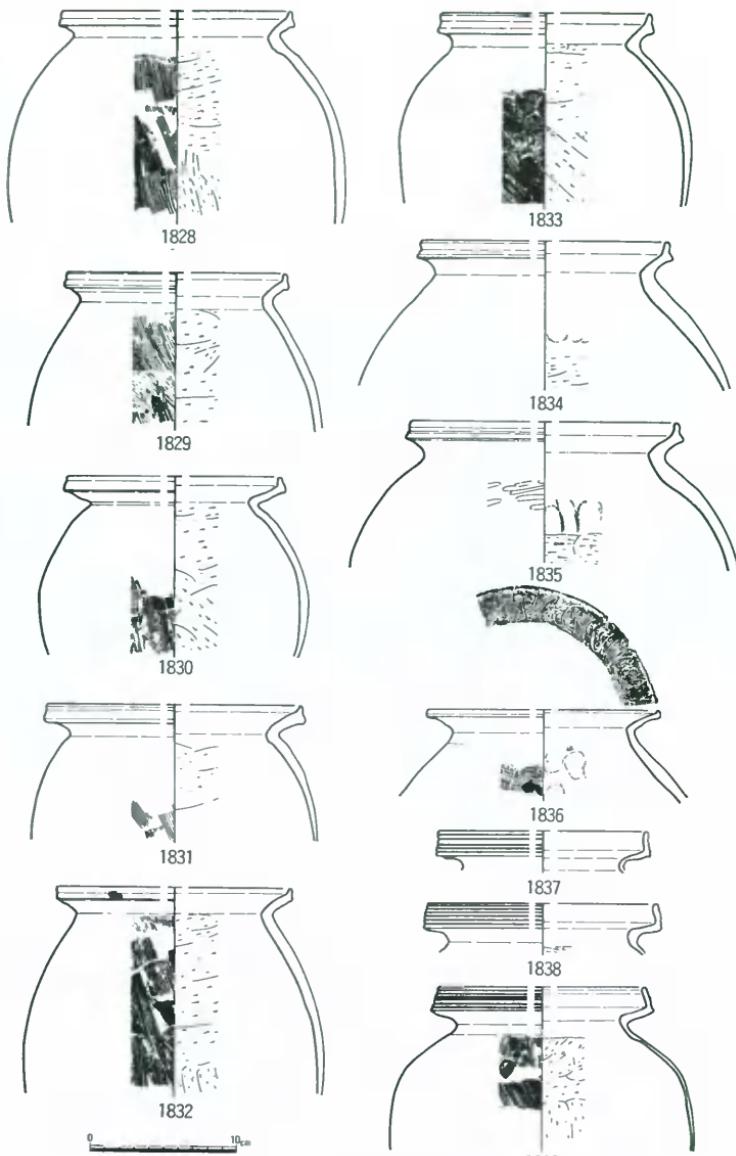


第233図 No. 140 袋状土塊出土遺物（2）(1/4)

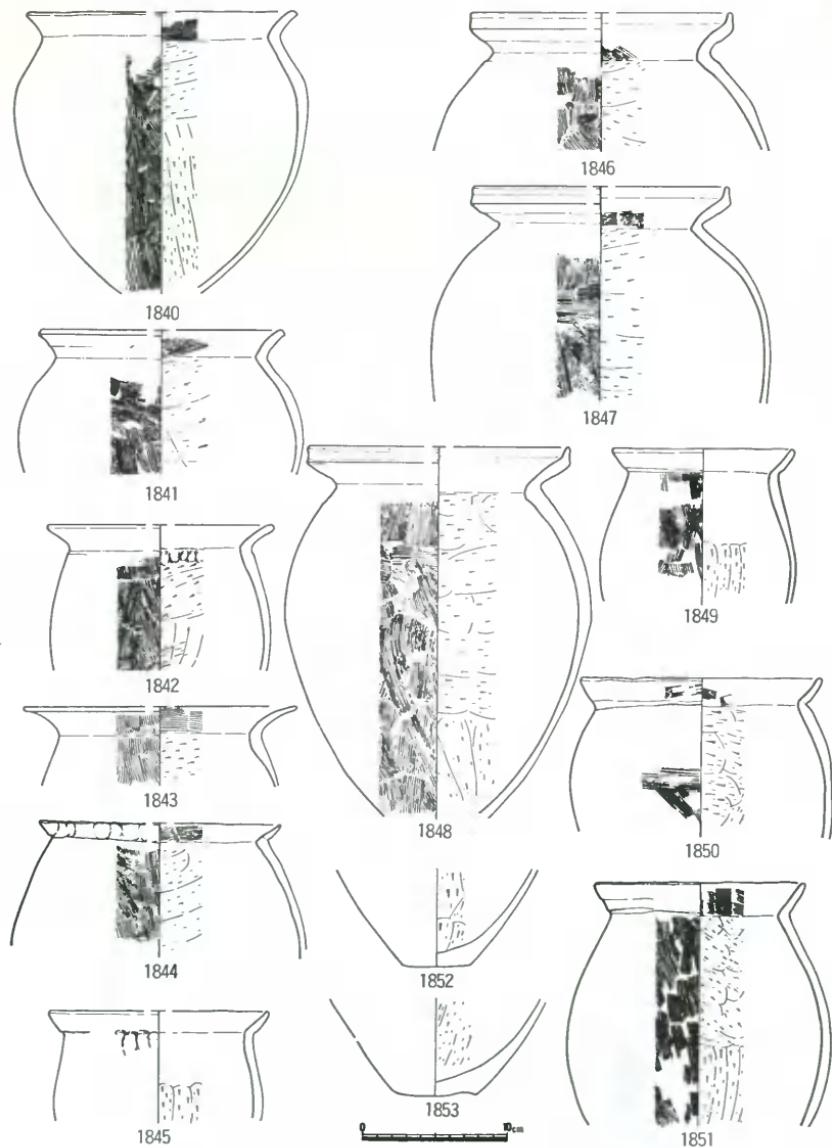


第234図 No. 140 袋状土壙出土遺物（3）(1/4)

奥坂遺跡

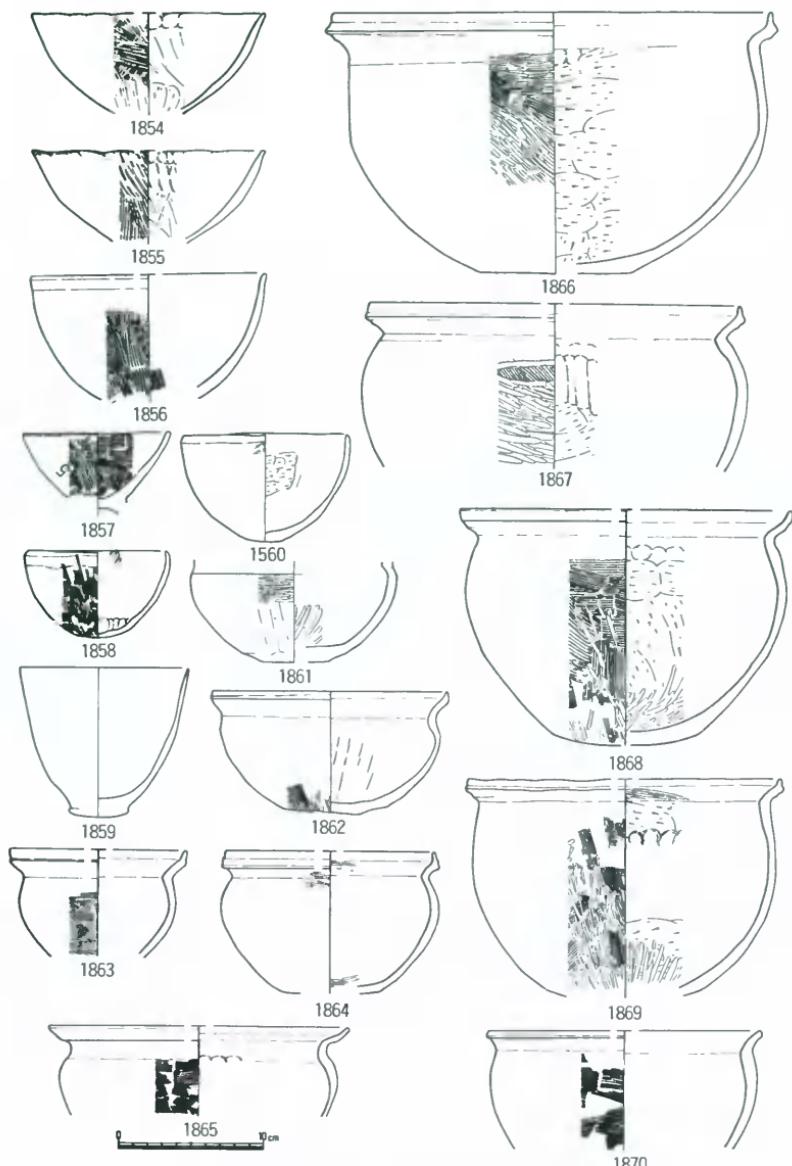


第235図 No. 140 袋状土壙出土遺物(4)(1/4)

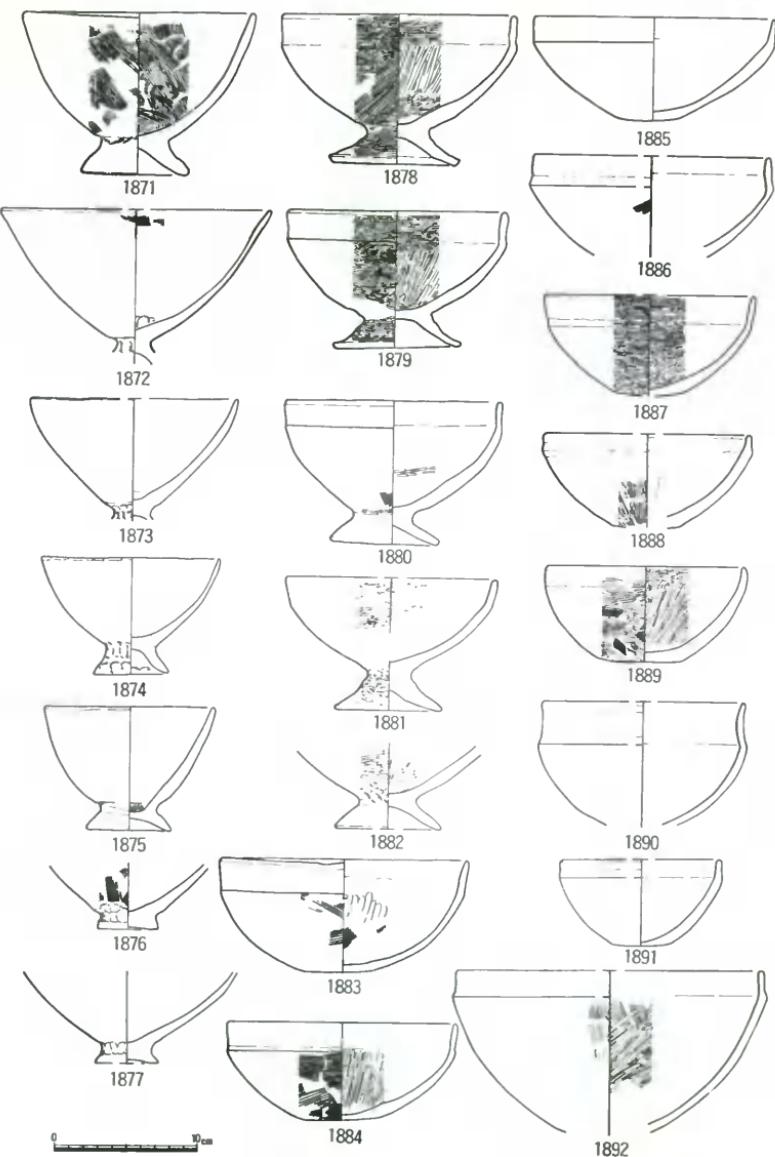


第236図 No. 140 袋状土器出土遺物 (5) (1/4)

奥坂遺跡

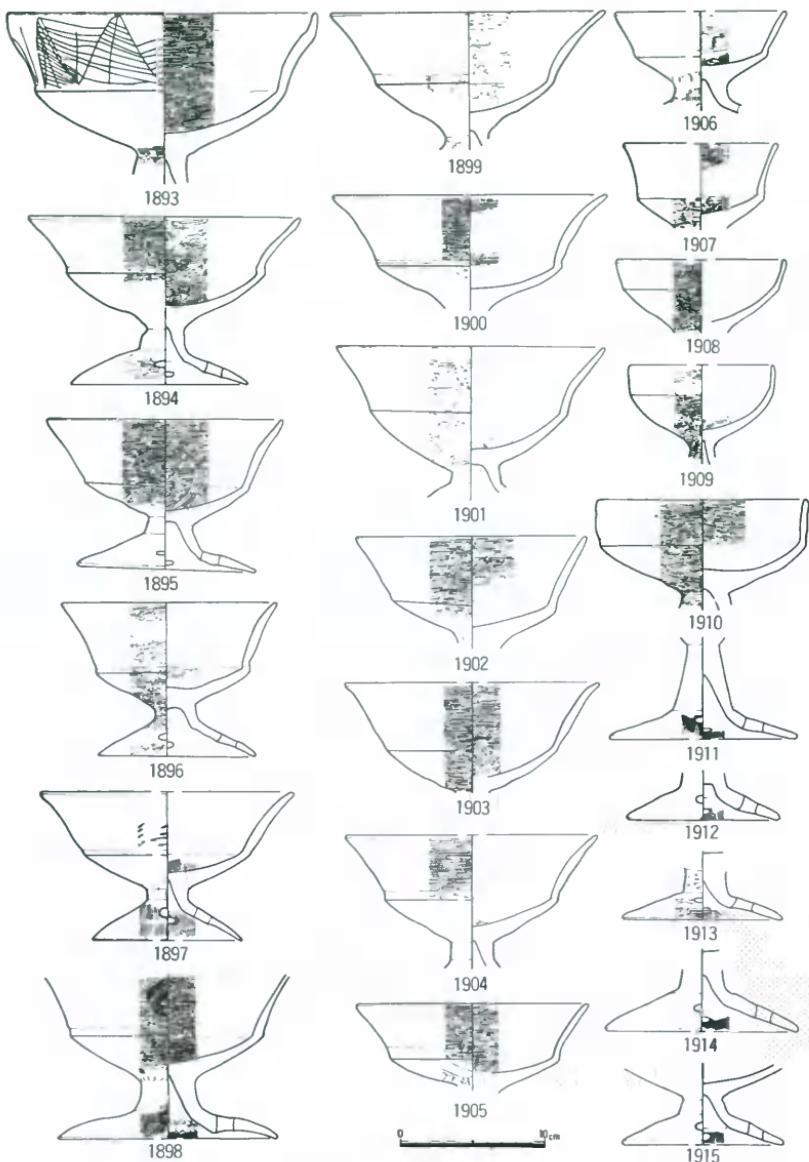


第237図 No. 140 袋状土壤出土遺物 (6) (1/4)

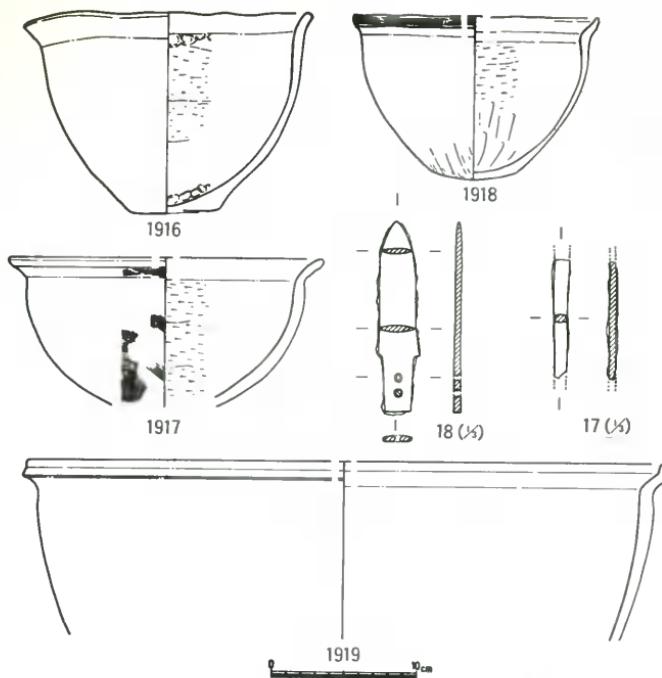


第238図 No. 140 袋状土壙出土遺物 (7) (1/4)

奥坂遺跡



第239図 No. 140 袋状土壤出土遺物 (8) (1/4)



第240図 No. 140 袋状土器出土遺物 (9) (1/3, 1/4)

130点、他に胴部大型片・小片等を含めて150点以上が確認できる。壺・甕・鉢・高杯・鼓形器台・製塩土器等が含まれておる、甕が圧倒的に多く、鉢・高杯・壺の順序がみられる。

壺・鉢・高杯の外表面調整にヘラミガキが多く施されており、甕の外表面調整はハケメが大多数を占めている。甕の胎土中には6~7mm大の砂粒が多く含まれており、ヘラケズリ痕跡内に尾を引いて顯著に認められる。1836は器外面に横位のハケメがみられ、内面に指頭圧痕と細いハケメが施されており、内面に凹凸が著しい。口縁内面にはヘラガキの不規則な波状文が一巡している。奥坂遺跡にあっても稀な器形であり、胎土中に砂粒をほとんど含まない。

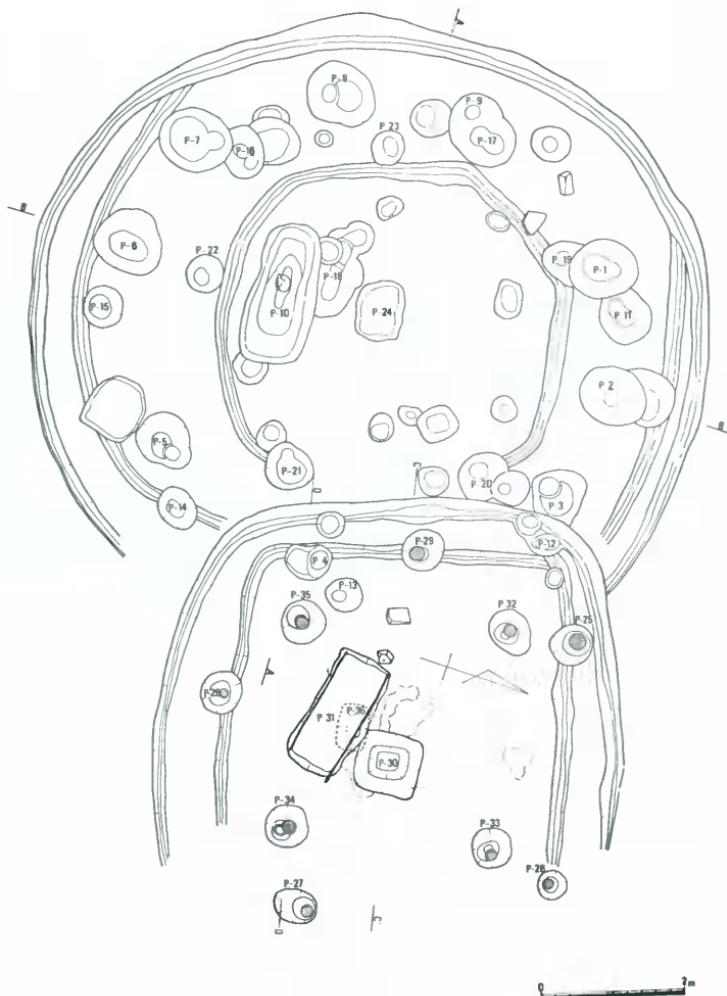
1837~1839は県南部の沖積地にあって一般的にみかける甕である。肩部より「く」字状に屈曲し、そこより内傾しながら立ち上がる口縁部を有する。口縁部外面にはヘラガキによる沈線が5~6条施されている。No.52・140・103袋状土器より同器種が出上している。

時期は奥・後・IVに比定できる。

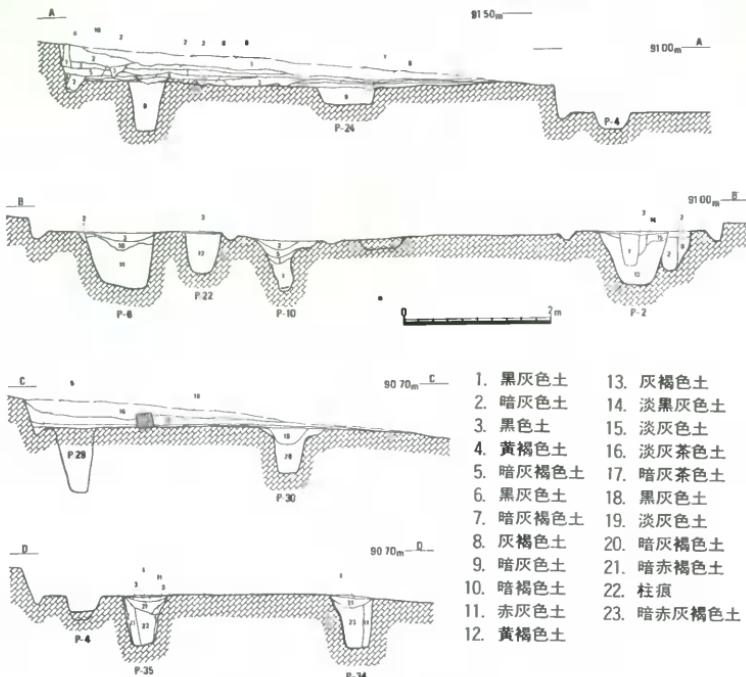
(高畠)

5. 古墳時代前期の遺構・遺物

(1) 住居址



第241図 No. 29・30 住居址 (1) (1/80)



第242図 No. 29・30 住居址(2)(1/80)

No. 29・30 住居址(第241・242図、図版79-1・2)

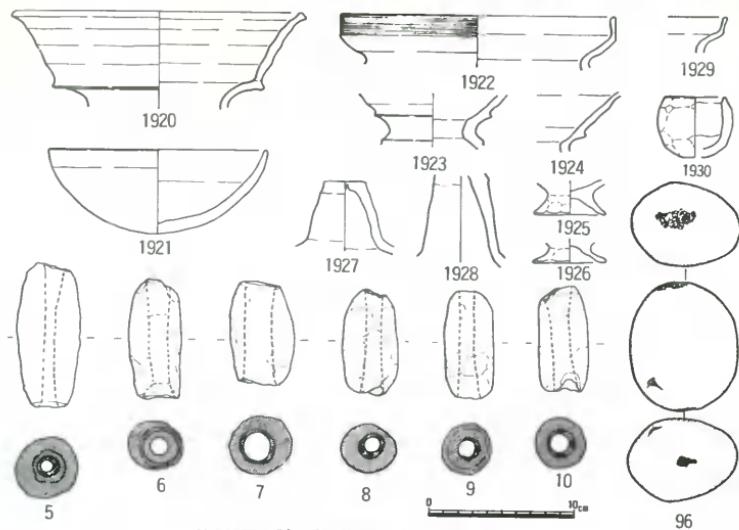
No. 29・30住居址は、東西方向に伸びた丘陵の北東部北緩傾斜面に位置する。これら住居址は、一部重複した形で検出された。しかし、その新旧関係は、No.29住居址東端が既に覆土の殆どを流失していたことから、層序でこれを判断することは不可能であった。ところが、No.29住居址に伴う壁体溝とNo.30住居址の切り合い関係、あるいはNo.29に伴う柱穴の掘り方がNo.30住居址の覆土上面に検出できなかったこと等から、住居の構築の順序は、No.29が最初で、No.30はNo.29の廃絶後と考えられた。以下、これを順に説明していくと、先ず、No.29住居址であるが、柱穴・中央穴の在り方から2回にわたる増・改築の存在が推測される。最初のものは、P-19・20・21・22・23の5本を柱とし、P-24をその中央穴に考えるものである。そして、これに伴う壁体溝は、3本検出できた溝の真中のものが該当する。次に営まれたものに、P-11・12・13・14・15・16・17の7本を柱とし、P-18をその中央穴に考える住居である。壁体溝は、おそらく次の時期の住居に踏襲されたと考えられ、一番外側のものを想定する。中央穴は、若干長

奥坂遺跡

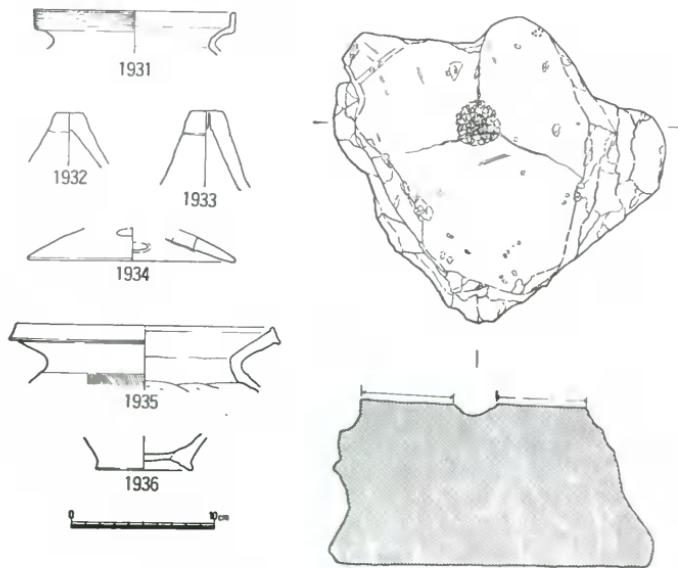
細い形態をとる。最後の住居は、P-1・2・3・4・5・6・7・8・9と9本の柱より成る。中央穴は、前段階のものよりさらに規模を増している。中からは、小型の甕が1点置かれた状況で検出された。しかし、土器自体2次焼成を受け、形状を保つのがせいいっぱいで、取り上げは不可能であった。この住居址の規模は、径約960cmを測る。なお、No29住居址には、さらに中央より幅約20cm、深さ約5cmの溝が壁体溝状に径490cmの規模で検出できた。ところが、この内側には、住居を構成するだけの柱穴が精査にもかかわらず検出できなかつた。また、住居平面図ではP-19~23に切られた状況で示したもの、その詳細も判然としなかつた。溝を境に床面での比高が3cmあるところからベッド状遺構の可能性も存在する。しかし、いずれの時期の住居に帰属するかは不明である。出土遺物には、壺・甕・高杯・鉢・手捏ね・製塙・鼓形器台・土鍤・叩き石等がある。壺1920は二重口縁を呈するもので、口径20cmを測る。内・外ともにヨコナデ調整が施される。細砂を多く含む。甕1922は、径19cmと大型品である。口縁外面には、櫛により沈線が施される。1929は、器表面すべて剥落して調整不明である。高杯1927・1928は、内・外ともに器表が剥落して調整は不明である。1929は、胎土に精選粘土を用いている。鉢1921は、砂を多く含むもので口縁部ヨコナデされ、内面も板状工具によりナデ調整が施されている。外面底部付近は、器表面剥落して調整不明である。手捏ね1930は、外面圧痕が認められる。胎土中には、2mm位の砂粒を含む。製塙土器1925・1926は、いずれも底部のみのものである。内・外ともに剥落して調整は不明である。鼓形器台1923・1924は、いずれも器表面剥落して調整痕は明瞭でない。わずかに内面のヘラケズリ、外面には丹の残痕が認められる。土鍤は、5(176.5g)・6(95.0g)・7(100.2g)・8(89.9g)・9(81.7g)・10(79.2g)を測る。いずれもが指頭により調整された大型品である。

以上の出土遺物からNo29住居址の時期は、奥・古・Ⅱに比定できる。

No30住居址は、No29住居址の廃絶後営まれた住居である。これも壁体溝・柱穴等の在り方から1回の建て増しが認められる。最初のものは、P-32・33・34・35の4本柱から成り、中央やや南寄りにP-36をその中央穴とする。平面形態は方形で、規模は壁体溝間で1辺約480cmを測る。その後増築され、柱穴も4本から5本(P-25・26・27・28・29)に増える。柱穴は、ほとんどが前段階の壁体溝を切って掘られている。中央穴は、P-30で方形2段掘りである。さらにその南側に、幅80cm、長さ180cm、深さ8cmの長方形を呈する土壙が検出できた。また、この土壙の北辺と南辺には、それぞれ幅1~2cmの木枠痕跡が認められた。性格は不明である。住居址の形態は、前段階のものが方形であったのに対して、5本柱のものは若干丸みを増している。最長幅は660cmを測る。遺物は、床面に置かれた状況で砾石が1点、さらに、小破片ではあるが甕・高杯が出土した。甕1931は、口縁部櫛描きによる沈線が施されている。高杯1932~1934は、いずれも外面剥落して調整不明である。胎土は精選されている。1935・1936



第243図 No. 29 住居址出土遺物 (1/4)



第244図 No. 30 住居址出土遺物 (1/4)

奥坂遺跡

は、混入遺物としての可能性が高い。

出土遺物からNo.30住居址の時期は、奥・古・IIに比定できる。

(島崎)

No.41 住居址 (第245図)

F-6南東隅、海拔85.50～85.90m間に位置し、斜面部下位は自然流土により半壊状態にある住居址である。斜面上位に壁体溝約400cmの弧状をとどめるのみである。柱穴は5本が住居内より検出されているが、住居に伴う柱穴は不明である。

遺物は上器小片1937～1943・土鉢11・鉄器19が出土している。1939～1941が最も新しく、1937・1938・1942・1943が奥・中・III～奥・後・I期に比定できる。土鉢は奥・古・II期によくみられ、No.29・46・47住居址より出土している。

19は上部が欠損しており、下半の両刃の部分と茎が残存している。最大長10.25cm、最大幅2.43cm、最大厚0.51cm、重量20.25gを測る。短剣か槍先の可能性が考えられる。

時期は1939～1941より奥・古・IIに比定できる。

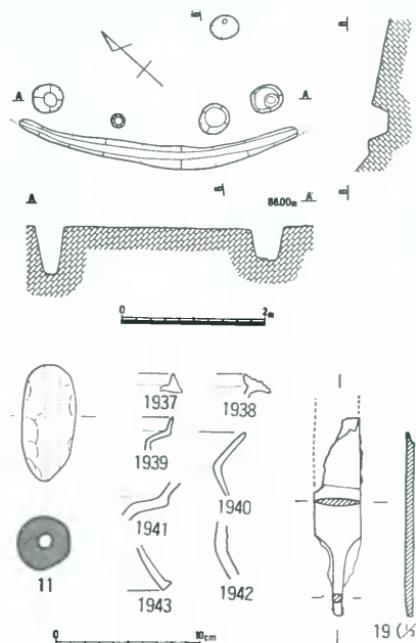
No.45・46 住居址 (第246～248図、図版78・80-1)

D-4・5の中央、海拔92.10～92.40m間に位置する竪穴式住居址である。No.45・46・47住居址は切り合い関係になっており、No.45住居址が最も古く、No.47住居址が最も新しい住居址である。

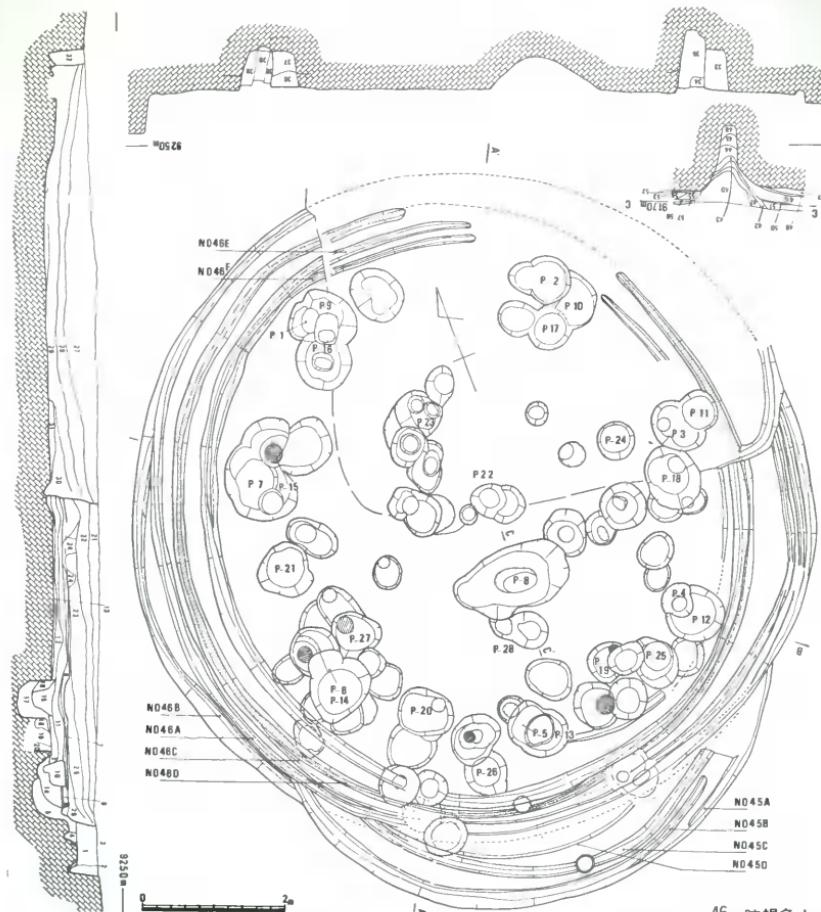
No.45住居址はNo.46住居址によって切れられ床面はすべて除去されており、南側の壁体溝を一部残すのみである。この住居も拡張・重複痕跡をとどめ、最低4回の建て替えが実施されている。最も外側の最大の住居址は直径約700cmを測り、主柱穴は7本より構成されている。

遺物は1944～1948が堆積土中に含まれていた。1944は台付鉢にて器外面縦位のハケメ、内面指頭圧痕が施されている。1945～1948は精製粘土が使用されており、器外面へラミガキが施められる。

No.46住居址はNo.45住居址を切っている円形の竪穴式住居址である。最低6回の

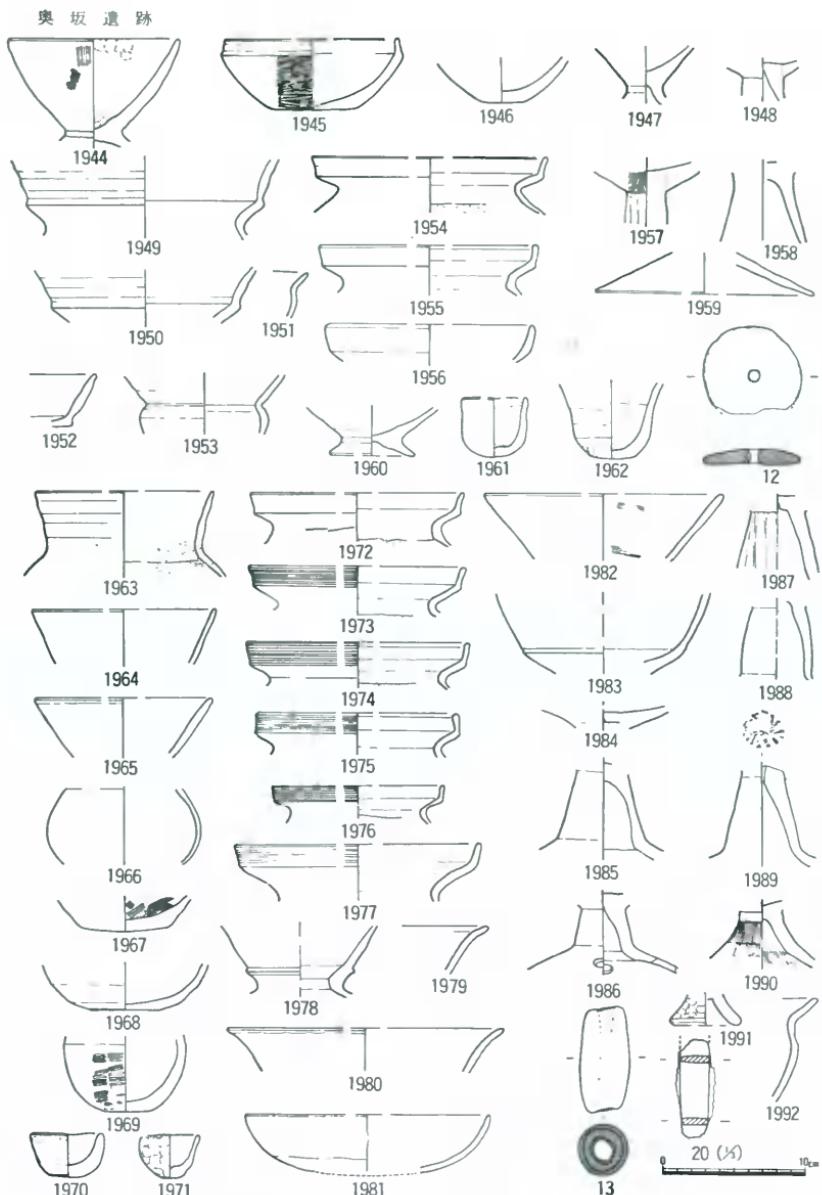


第245図 No.41 住居址(1/80)・出土遺物(1/3, 1/4)



- | | | | | |
|--------------------|----------------|--------------|------------|------------|
| 1. 暗茶灰色土(No.45住覆土) | 13. 黑色土(火災) | 24. 赤褐色土(焼土) | 35. 暗黃褐色土 | 46. 暗褐色土 |
| 2. 淡茶黑色土 | 14. 黃褐色土 | 25. 黑茶色土 | 36. 淡黑色土 | 47. 明褐色土 |
| 4. 淡褐色土 | 15. 淡黑色土 | 26. 黑色土 | 37. 暗黃褐色土 | 48. 黑色土(炭) |
| 5. 黄褐色土(地山ブロック) | 16. 淡黑色土 | 27. 明茶色土(微砂) | 38. 暗茶灰色土 | 49. 暗褐色土 |
| 6. 黄褐色土(床面) | 17. 暗褐色土(P-20) | 28. 淡黑茶色土 | 39. 淡黑褐色土 | 50. 淡褐色土 |
| 7. 淡黄褐色土 | 18. 褐色土 | 29. 黑茶色土 | 40. 暗褐色土 | 51. 明褐色土 |
| 8. 黄褐色土 | 19. 黑色土 | 30. 茶黑色土 | 41. 明褐色土 | 52. 黑色土 |
| 9. 淡茶黑色土 | 20. 淡褐色土 | 31. 緑黃灰色土 | 42. 暗黑色土 | 53. 淡褐色土 |
| 10. 淡黑色土 | 21. 淡茶色土 | 32. 黑色土 | 43. 明褐色土 | 54. 暗褐色土 |
| 11. 淡茶色土 | 22. 淡黑色土 | 33. 暗茶褐色土 | 44. 黑色土(炭) | 55. 褐色土 |
| 12. 黄褐色土(地山ブロック) | 23. 淡黑茶色土 | 34. 淡黑色土 | 45. 明褐色土 | 56. 淡褐色土 |

第246図 No. 45・46 住居址 (1/80)



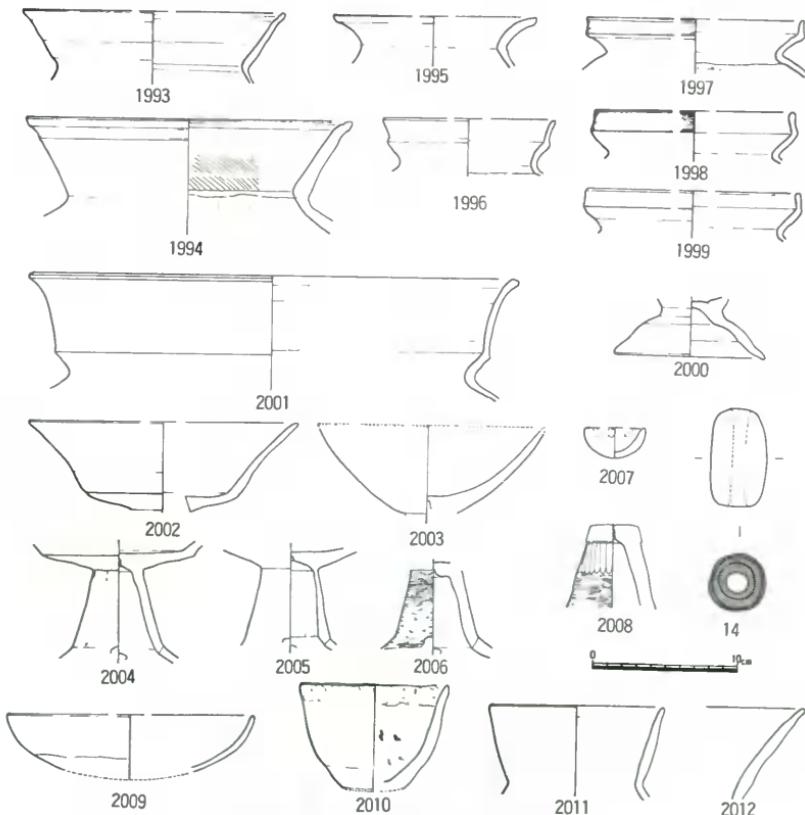
第247図 No. 45・46・47 住居址出土遺物 (1/3, 1/4)

建て替えが実施されており、拡張と縮小が入り混じる状況を呈する。最も新しいNo46Aは長軸920cmを測り、主柱穴はP-1～P-7により構成されており、中央穴P-8が伴う。各住居址プランがほぼ同心円状に展開し、各主柱穴もP-1P-7に重複・切り合ひ関係で存在する。

遺物は前述してきた土器に比較して全体的に器壁が薄く、砂粒が全面に入るザラ目の土器に変化したものが圧倒的に多い。1949～1992までがNo46・47住居址覆土、1993～2012がNo46住居址覆土より検出されたものである。12（38.57g）・13（54.7g）・14（101.6g）等の土製品、1961・1962・1970・1971・2007等の手捏ね品が目立つ時期である。

底部をへらヶズリする椀、高杯脚部の中空・底部の丸底化等が特徴的な存在である。

時期は奥・古・IIに比定できる。



第248図 No. 46 住居址覆土出土遺物 (1/4)

奥坂遺跡

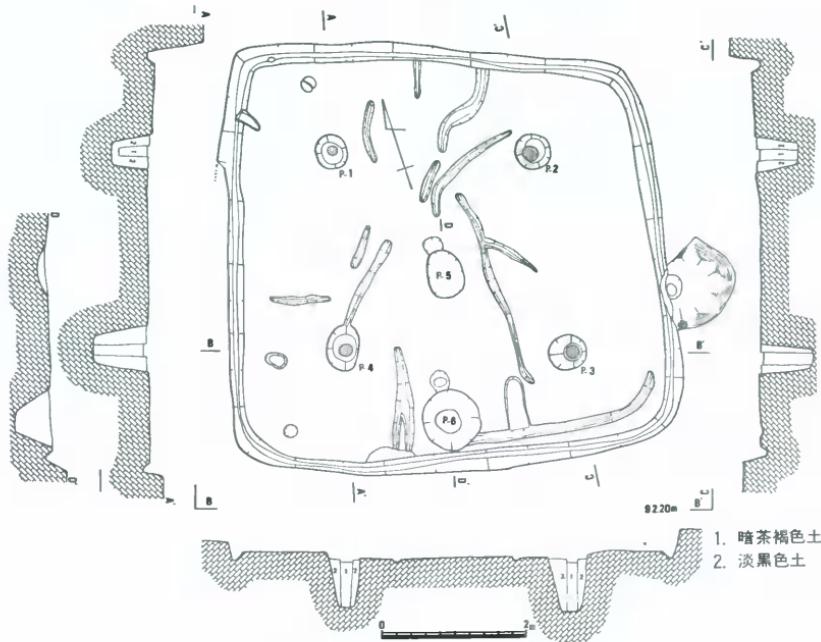
No. 47 住居址 (第249・250図、図版80)

D-4・5中央、海拔 91.90~92.30m 間に位置し、No.46 住居址を切る竪穴式住居址である。南辺が他の面より広く平面形は台形を呈する。長軸600cm、短軸600cm、床面積36m²、床面海拔高は91.50mを測る。

屋内は壁体溝・主柱穴・土壙・小溝からなり、P-1~P-4が主柱穴を構成し、中央穴P-5(深さ10cm)を伴う。住居址中央に向かい若干傾斜を持ち、全体的に浅い土壙を形成している。

貼り床面下には一回り小型の住居址壁体溝が一部残存しており、1回の拡張が実施された住居址であることが判明した。南壁には83×80×50cmの円形の土壙が付設されており、從来ボケットと呼称されているものである。他に南北に走る小溝を数本検出したが、間仕切り風でもあるが明確にできなかった。この期を境に円形→方形の住居プランに移動している。

遺物は2013~2025の土器、15の土錐、98の叩き石が出土している。2023・2024は床面に伴う遺物である。2023は手焙りであり、器高22.6cm、下半最大幅19.2cm、窓の幅14.6cm、高さ10cmを測る。鉢形土器に頭巾をかぶせた格好である。色調は黄褐色を呈し、胎土中に砂粒を多く含



第249図 No. 47 住居址 (1/80)

む。2024は口径11.68cm, 器高7.16cmを測り, 胎土中に4mm前後の石英, 長石粒を多く含み, 色調は明褐色を呈する。

2013~2015は壺形土器, 2016~2018は甕形土器であり, 器壁が薄く, ザラ目の胎土である。



2020・2021は台部であるが類例の少ないものであり, 甕あるいは鉢が上部に付く可能性がある。2022はNo.46・47住居址の覆土中には多くみられ, 比較的大型の椀であり, 体部下半にヘラ削りが施されている。



98は床面出土であり, 最大長12.38cm, 最大幅8.90cm, 最大厚7.48cm, 重量1,230gを測る。石材は石英斑岩が利用されている。15は色調黄灰褐色を呈し, 長径5.75cm, 最大幅3.00cm, 重量56.5gを測る。

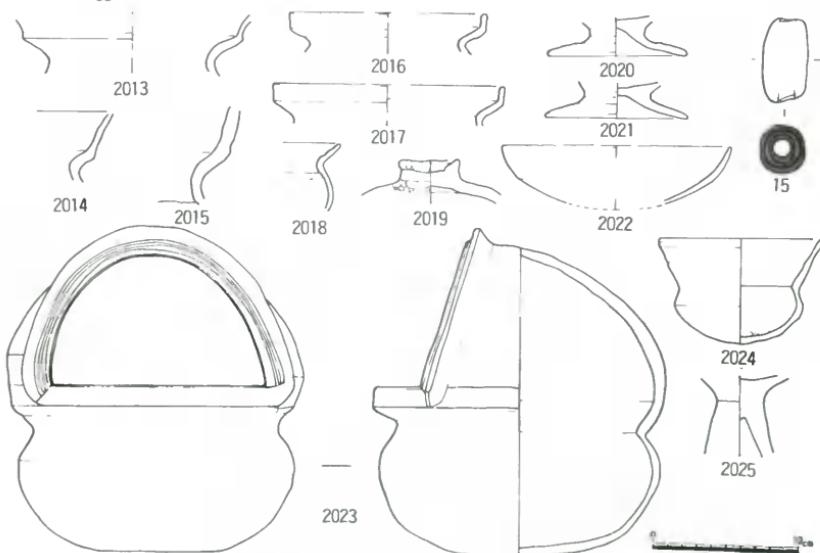
時期は奥・古・Ⅱに比定できる。



No.45・46・47住居址の関係は, No.45住居址が埋没後, No.46住居址がNo.45住居址を切って作られており, No.46住居址が埋没後にNo.47住居址が掘り込まれた形状を呈する。

No.45住居址出土の土器が奥・後・Ⅳに比定でき, No.46・47住居址出土遺物にはあまり大差がないように考えられるが, 椭形土器の小型化が認められる。

(高畠)



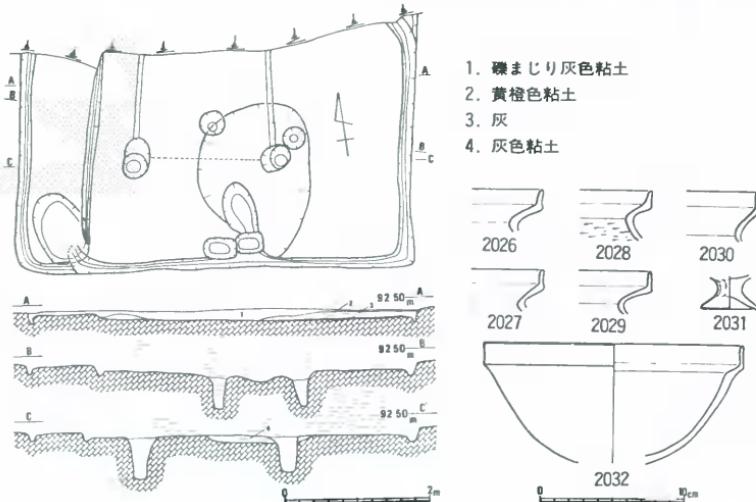
第250図 No. 47 住居址出土遺物 (1/4)

奥坂遺跡

No. 55 住居址 (第251図、図版81)

C-3・4中央に位置し、北端部は工事のため削りとられていた。表土直下で検出されたが、床面までの深さは15cmしかなく、上部が削平されたものであろう。平面形は方形を呈している。調査の結果、建て替えのあることが判明した。当初のものは東西447cm、南北336cm以上で、柱穴は東西に2本並ぶ。柱列の方向は、壁の方向と少しずれている。柱間の距離は、115cmである。柱穴の大きさは、いずれも、直径20cm、深さ45cmを測り、灰褐色粘土で埋まっている。南壁に接するところに、37×30cm、深さ25cmの穴がある。この地点から中央部にかけて、浅い窪みが広がり、細くて浅い壁体溝がめぐる。建て替え後の住居址は西へ拡張している。東西537cm、南北336cm以上で、柱穴は4本柱となる。残存している柱穴は、南側の2本だけであり、柱間の距離は205cmである。柱穴の大きさは30~35cm、深さ50~60cmを測り、灰褐色粘土で埋まっている。柱列の方向は壁の方向と一致し、柱で囲まれた部分が約10cm深くなる。北側が残存していないが、周間にベッド状遺構が存在する。当初の住居部分については、ベッド状遺構をつくるために盛土をしている。南壁に接するところに、長方形45×30cm、深さ13cmの穴がある。当初の住居址に伴うものより西に寄って、南辺の中央部に位置しており、入口に関係する施設であろう。南西隅には、楕円形で、105×68cm、深さ60cmの土壙がある。住居址の隅にしばしばみられる貯蔵穴と考えられる。周囲には、幅の狭い壁体溝がめぐる。

埋土中から出土した遺物は少ない。土器には、變形土器、鉢形土器、台付鉢形土器がある。



第251図 No. 55 住居址 (1/80)・出土遺物 (1/4)

甕の口縁部は、いずれも端部が上方へ屈曲し、拡張している。外面はナデただけのもの2026～2028と櫛描き文を施すものの2030・2029がある。台付鉢形土器2031は脚部のみで、上半部を欠失している。鉢形土器2032は、口縁部が上方へ屈曲し、拡張する。胎土には、いずれも細砂を含んでいる。色調は黄橙色～橙色を呈する。住居址の時期は、奥・古・IIである。（正岡）

（2）袋状土壙

No. 82 袋状土壙（第252図、図版77-2）

D-4の北西部において検出された袋状土壙である。平面形は約140×120cmの長方形に近い形状を示し、底面は約210×190cmのほぼ円形を呈している。深さは、検出面より244cmを測り、底面には幅約10cm、深さ約6cmの周溝が認められた。

この袋状土壙内には、検出面より深さ約90cm付近において貝殻が約10cm層をなして堆積していた。この貝層内には、魚や鳥類の遺体も含まれており、特に魚骨は、貝層の下部に一括廃棄されたかのようにまとまって出土した（これらの動物遺体については第5章の章末参照）。

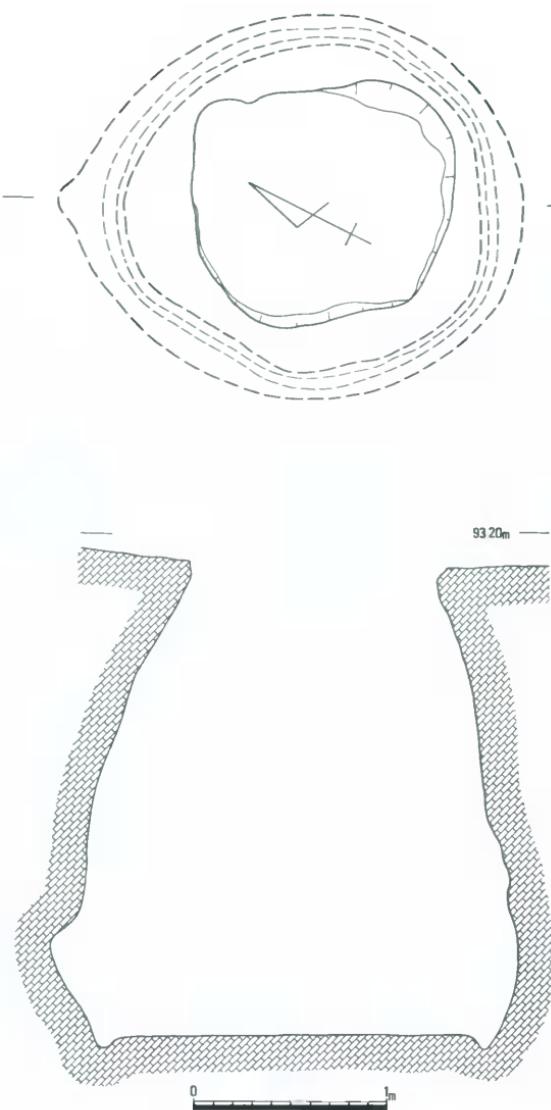
出土遺物のうち土器は、整理箱（54×34×15cm）で11箱を数えた。これらは主に貝層中より貝殻と混在した状況で出土しているが、その上層および下層中からも出土している。

2033～2042は壺形土器であると考えられる。但し、2033は甕形土器になる可能性もある。2033・2034・2036・2037の口頸部はヨコナデ調整で、ヘラミガキやハケメは施されていない。2034・2036・2037・2040は胎土中に3～5mm前後の砂粒を含んでいるが、2038・2041は、1mm以上の砂粒を殆ど含まない胎土をしている。色調は、2033～2037・2040～2042が灰白色、乳白色、浅黄橙色であるのに対し、2038・2039はにぶい橙色とやや異っている。焼成はいずれも良好である。2041は、口頸部がヨコナデ、体部外面はハケメののち指ナデのようである。色調は浅黄橙色、胎土は0.5mm前後の砂粒を含み、焼成は他と比べても良好な土器である。2042は、壺形土器の脚台部ではないかと考えられる。

2043・2045は壺形土器としておきたい。2043の内面はヘラケズリであるのに対し、2045は指頭押えおよび指によるナデ上げである。いずれも1mm以下の砂粒を含む胎土で、焼成は良好である。2043は褐灰色、2045は灰白色を呈する。2044・2046は手捏ねの土器である。

2047～2066は甕形土器である。これらは口縁部の形態によって3つのタイプに分類することができる。2047～2052は「く」字状に外反する口縁部をもつ甕形土器である。口縁部に回転を利用した強いヨコナデはあまり施されず、口縁端部は水平にならない。2048や2052には指頭圧痕がそのまま残っている。2047～2051はほぼ完形に復元できるものであるが、全体的にいびつな感じをうける。基本的に体部外面には縦方向のハケメ、内面はヘラケズリである。2047・2049・2048～2052はにぶい黄橙色、2051は灰白色、2050は浅黄橙色である。2047・2051・2052は3～5mmの砂粒を含み、2049は1mm以下の砂粒を殆ど含まない。2053～2056は口縁端部を上

奥坂遺跡



第252図 No. 82 袋状土壙 (1/30)

方に拡張する變形土器である。2056には浅い櫛描平行沈線文風の文様がみられるが、2053・2055はヨコナデが施されているのみである。基本的な調整は、2047～2052と同じであるが、2053の内面にはヘラミガキが、2055の体部上半には幅5mm単位のハケメが施されている。2053・2055・2056は浅黄橙色で3～6mmの砂粒を含む粗い胎土、2054はにぶい黄橙色を呈し、1mm以上の砂粒は殆ど含まない胎土をしている。

2057～2066は、口縁部を上方に拡張し、櫛描平行沈線文を施している。

2047～2056に比べて器壁も薄く、胎土も良好である。体部外面には細かいハケメのうちタテ方向のヘラミガキが施されている。色調はにぶい黄橙色を呈すものが多い。

2067～2090は高杯形土器である。調整は磨滅のため不詳のものもあるが、杯部内外面および脚部外面に細かいヘラミガ

キが施されているものが多い。2090~2092を除いていわゆる水滸粘土を使用している。2090はほぼ完形に復元できるが、全体にいびつな土器である。

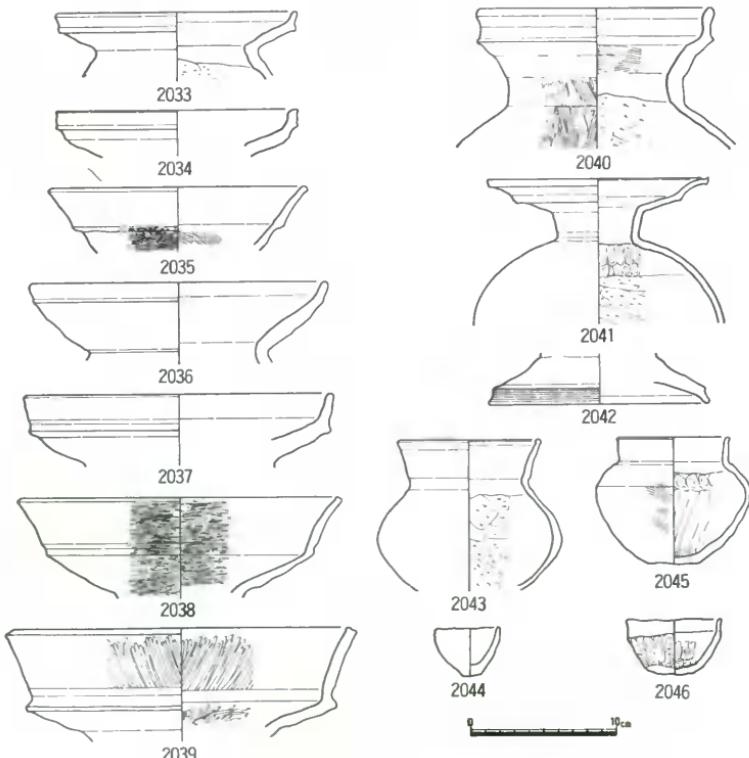
2093~2107は鉢形土器である。2100の底部外面には木葉文が観察できる。

2108は内・外面とも丹塗りの土器片で、鼓形器台の破片ではないかと考えられる。

6は凝灰岩製の管玉で、長さ20.75mm、厚さ6.45mmを測る。

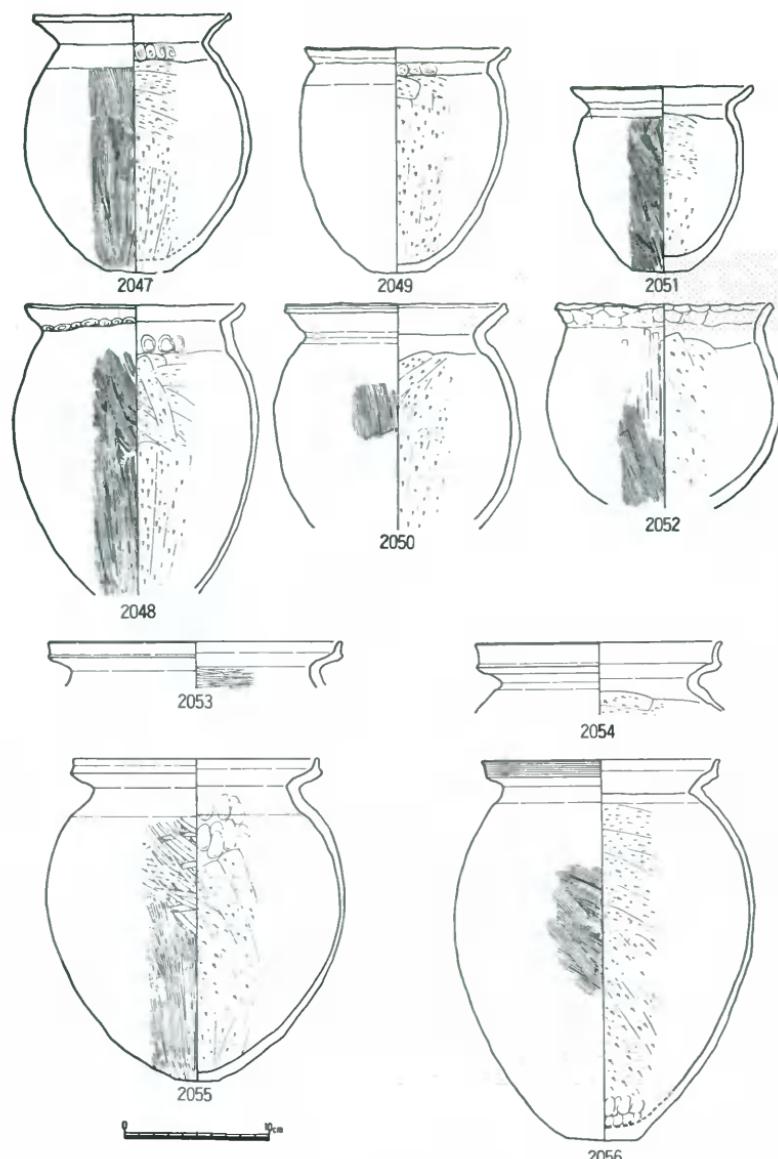
これらの遺物の時期は、ほぼ奥・古・Iであると考えられる。

(平井泰男)

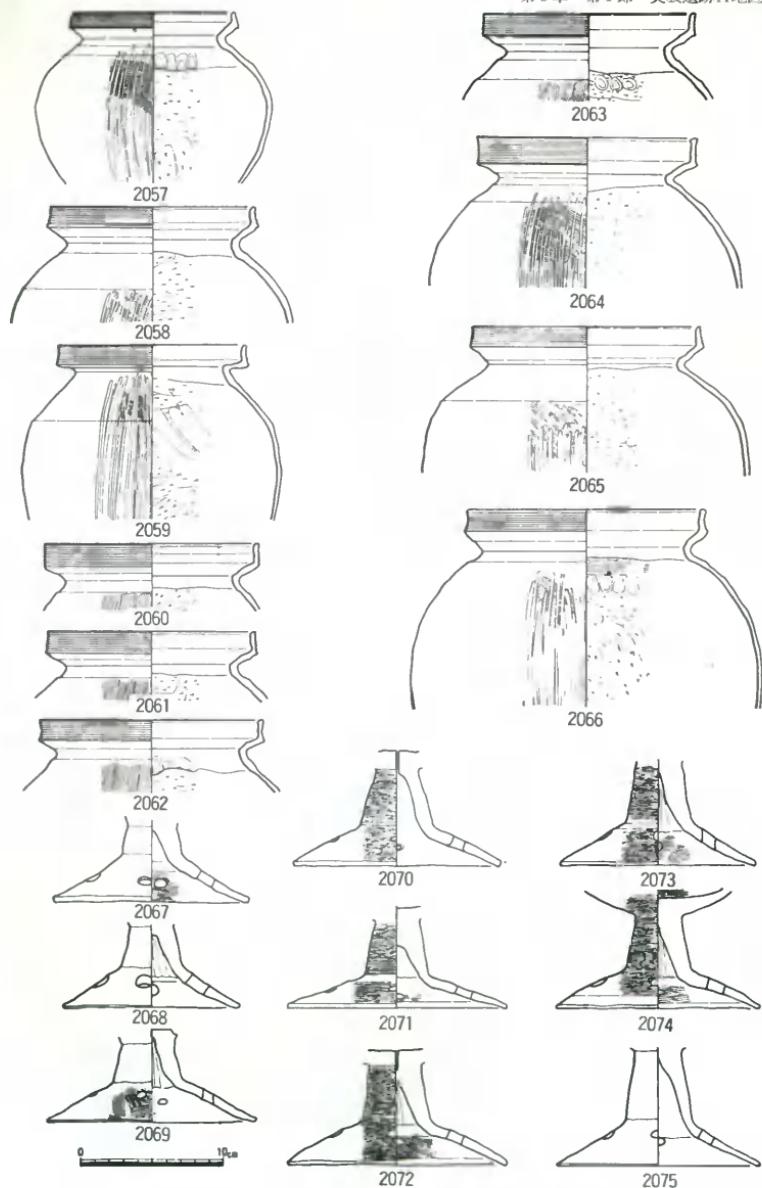


第253図 No. 82 袋状土壙出土遺物 (1) (1/4)

奥坂遺跡

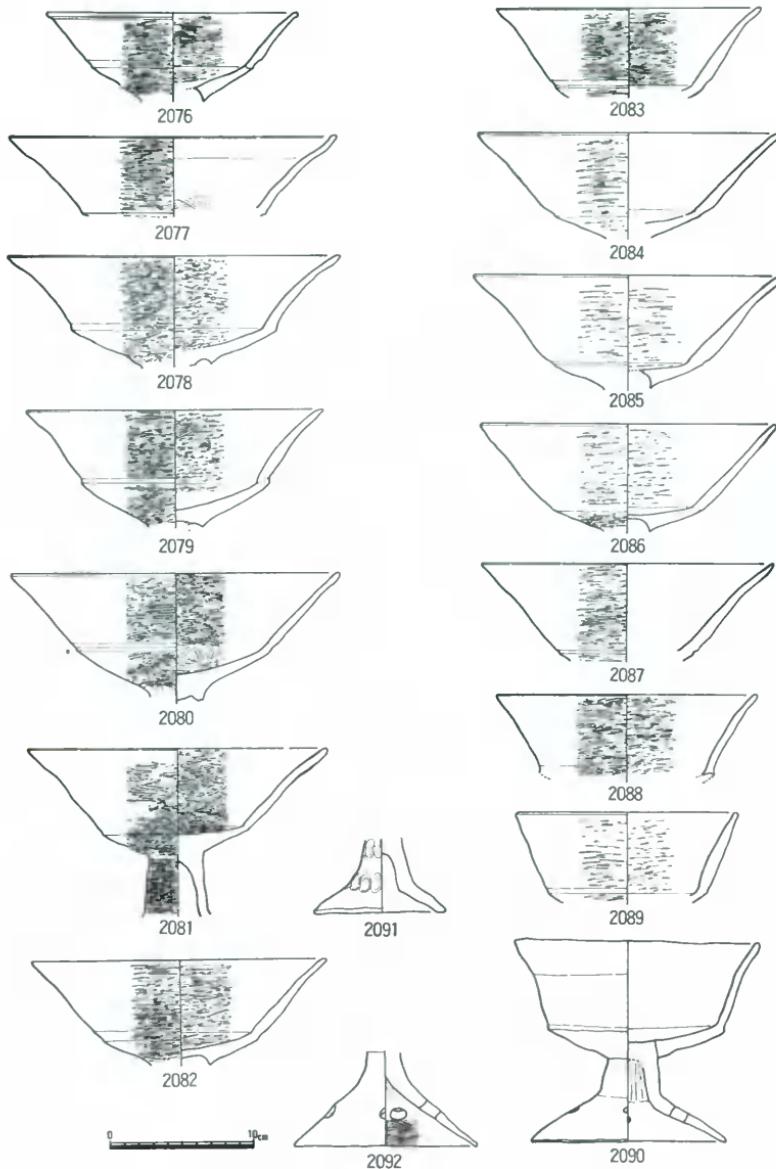


第254図 No. 82 袋状土塊出土遺物 (2) (1/4)

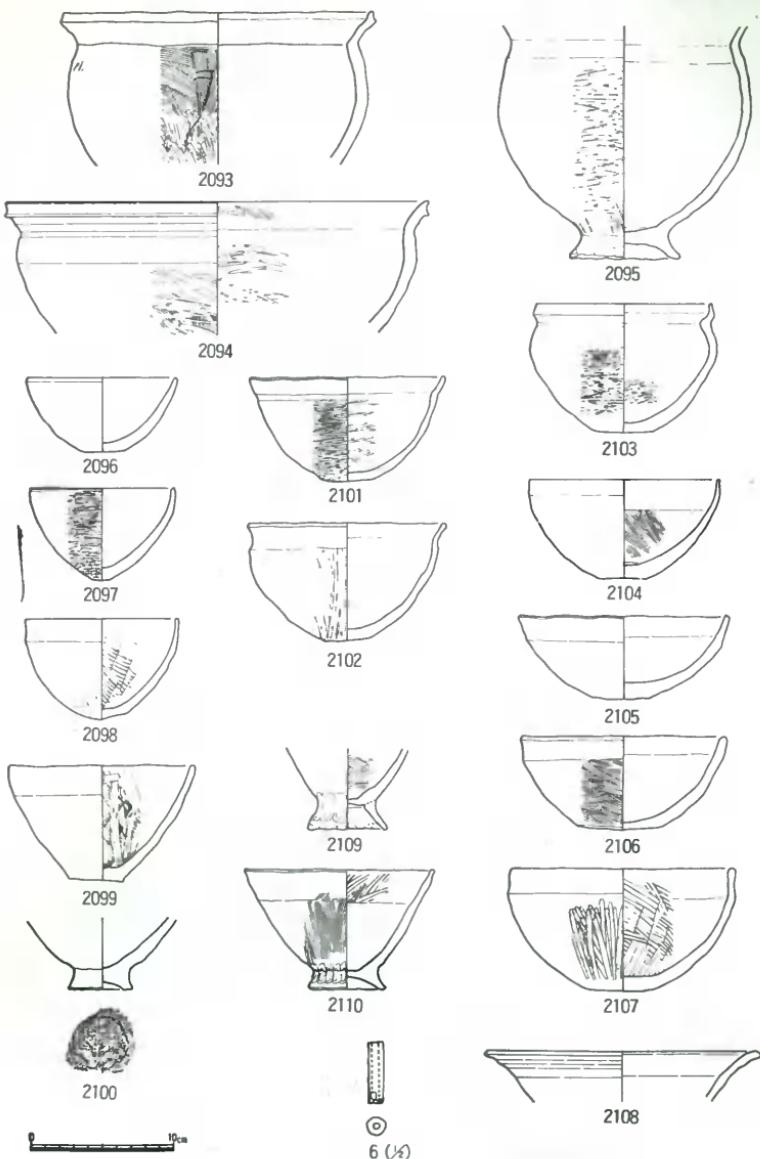


第255図 No. 82 袋状土塊出土遺物（3）(1/4)

奥坂遺跡



第256図 No. 82 袋状土壙出土遺物(4)(1/4)



第257図 No. 82 袋状土壙出土遺物 (5) (1/2, 1/4)

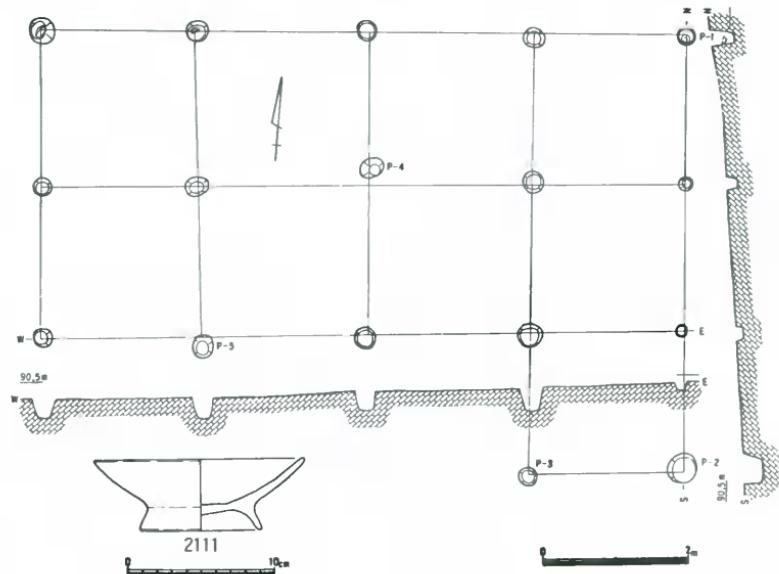
6. 中世の遺構・遺物

(1) 建物

No. 72 建物(第258図)

B-4の中央、海拔90.25~90.80m間に位置し、等高線とほぼ平行する比較的大規模の掘立柱建物である。段状遺構、Na69・63建物等と重複しており、長軸をほぼ東西にとり、南東隅にP-2・3を設け1坪ほど張り出しを持つ。4×2間を基礎とする。東西約880cm、南北約420cm、張り出し部190cm、面積約37.3m²を測る。柱穴は17本あり、いずれも円形で、直径平均22cm、深さ平均24cmを測る。桁行、梁間は190~230cmまでを測り、210cmが最も多く約7尺等間を意識した可能性がうかがえる。P-1は完形の土師器椀を伴っており、口縁部が上に向いて中層より出土している。P-2・3は土師器細片を伴っていた。P-4・5は南北線上にはあるが、東西線上を外れている。

土師器椀は、口径14.5cm、器高4.9cm、底径8.4cmを測り、よくふんばった付高台である。色調黄褐色を呈し、0.5mm以下の砂粒を含む。焼成は土師器として普通のもので、表面はよく剥落しており、調整はほとんど見えない。この土器この形態から、平安時代後半に位置付けるこ



第258図 No. 72 建物(1/80)・出土遺物(1/4)

とができる。したがって建物の焼絶の時期も同様である。

No. 124 建物 (第259図)

B-4の南端、海拔89.75~90.25m間に位置し、No.72建物の南側、約100cmの間隔を有し、主軸方向を東西にとる。規模は3×2間を呈し、桁行約655cm、梁間約405cm、面積26.53m²を測る。柱間は190~230cmまでを測り、210cmを前後するものが多い。P-6には柱穴は検出できなかつた。

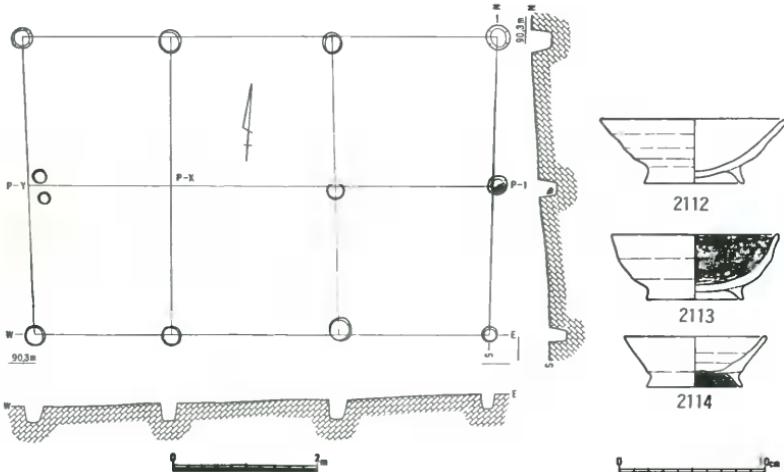
柱穴はすべて円形であり、直径18~32cm、深さ20~26cmを測る。P-1より3点の土師器碗が出土しており、2112は口径約13cm、器高約4.5cm、底径約6.8cmを測り、色調黄褐色を呈する。胎土中には0.5mm以下の砂粒を含んで焼成の良好な碗である。付高台であるが剥落していた。

2113は口径11.5cm、器高4.5cm、底径6.6cmを測る内面黒色の碗である。色調黄白色を呈し、胎土中に砂粒を含む。

2114は完形品であり、口径9.8cm、器高3.5cm、底径6.6cmを測り、内・外表面ともに黄白色、底外面は黒色を呈する。胎土中に1mm以下の砂粒を含み、焼成良好の碗である。

以上の土器を伴うNo.124建物は平安時代後半に比定でき、この期に焼絶したものである。

この事実はNo.124建物がNo.72建物の3×2間に重なり合う柱間および平面形(同数値)、並列する棟方向、類似する土器の柱穴からの出土等より同時期に共存していた可能性が十分にうかがえる。



第259図 No. 124 建物 (1/80)・出土遺物 (1/4)

奥坂遺跡

No. 63 建物 (第260図)

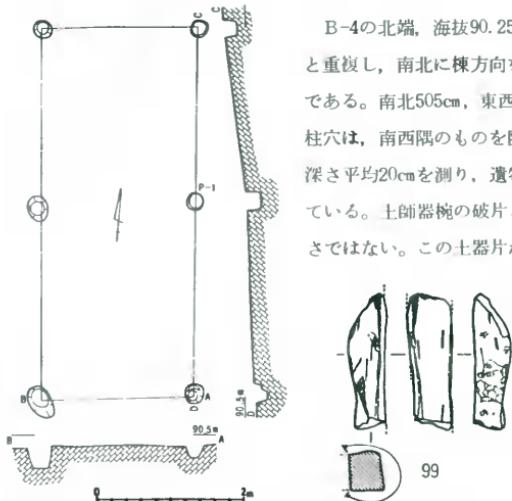
B-4の北端、海拔90.25~90.80間に位置し、No.69建物と重複し、南北に棟方向を有する 2×1 間の掘立柱建物である。南北505cm、東西210cm、面積10.60m²を測る。柱穴は、南西隅のものを除いて円形で、直径平均22cm、深さ平均20cmを測り、遺物はP-1から土器細片が出土している。土師器椀の破片と思われるが、実測できる大きさではない。この土器片から推定すると、この建物の時期は、No.72建物と大差ない

時期、すなわち平安時代後半に比定したい。(浅倉)

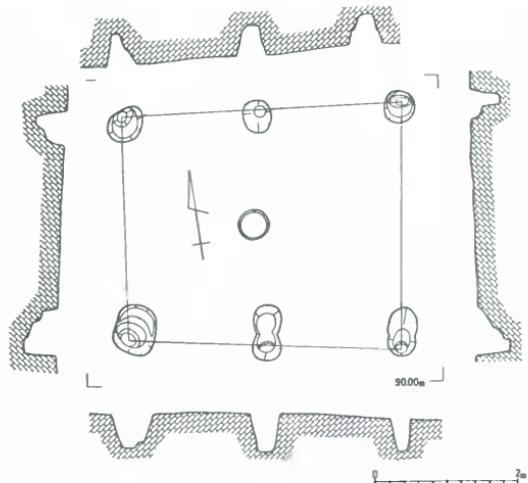
No. 105 建物 (第261図)

C-7中央の89.45~89.70m間に位置し、ほぼ東西に棟方向をとる 2×1 間の掘立柱建物である。桁行374~386cm、梁間309~335cmを測り、西側がすばまる形態をとる。桁柱間は184~197cmを測り平均190cmとなる。南辺桁行に利用されている柱穴は切り合い、重複が認められるが、北辺桁行には存在しない。柱穴直径約40~45cm、深さ約45cm前後のものが多い。

南北の桁行距離はNo.72・124建物の梁間距離に匹敵する数値を示しており、柱穴内出土の土師器皿の小片等からも前述の建物に近い時期が想定できる。(高畠)



第260図 No. 63 建物 (1/80)・出土遺物 (1/4)



第261図 No. 105 建物 (1/80)

(2) 溝・段状遺構

No. 40 溝 (第262図)

F・E-9中央、海拔85.50~87.80m間に位置し、南西より北東に傾斜する全長11mを測る溝である。高所海拔高87.75m、低所海拔高85.43mを測り、高低差232cmという急勾配である。

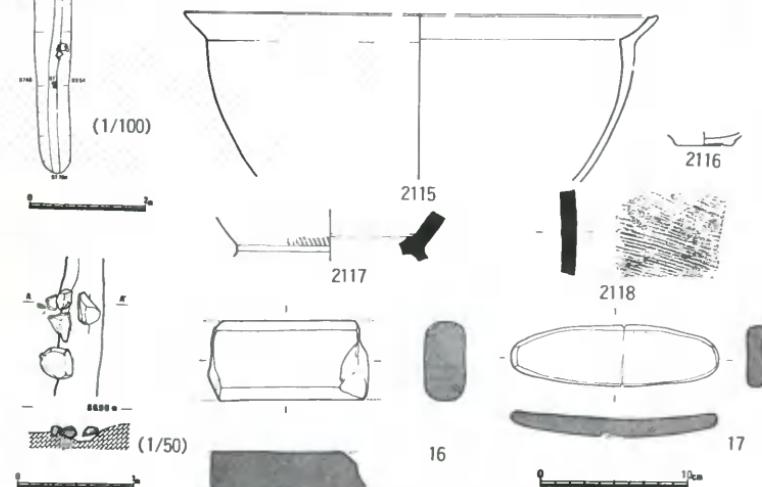
溝幅約65cm、深さ約15cmを測り、ほぼ中央位置に角礫(10~28cm)が6石配されていた。

遺物は2115が溝底に密着して出土した鍋形の土器である。口径32.4cmを測り、色調暗黃褐色を呈し、器壁中は紫青色を呈する。2116は底径約4cmを測り、色調淡茶灰色を呈する粗い造りの土師器椀である。付高台であるが非常に低い円滑なものである。

16・17は土製品であるが、何を形づくったか明確ではない。16は両端を欠損しており、長さ約11cm、幅5.48cm、厚さ2.74cm、重量216.6gを測る。平坦面は円滑な面と若干雑な面の2面が存在する。断面はコーナーが円滑に仕上げられており、手擦風の丸みを持つ。

17は長軸14.2cm、短軸4.3cm、厚さ1.3cm、重量87.0gを測る。全体的に上反りしており、丁寧なつくりで、円滑に仕上げられている。色調黄橙色を呈する。16の土製品の小型であるような形態を呈しており、あるいは舟の形状を簡略化したもの可能性がある。「舟形土製品」と仮称しておきたい。

(高畠)



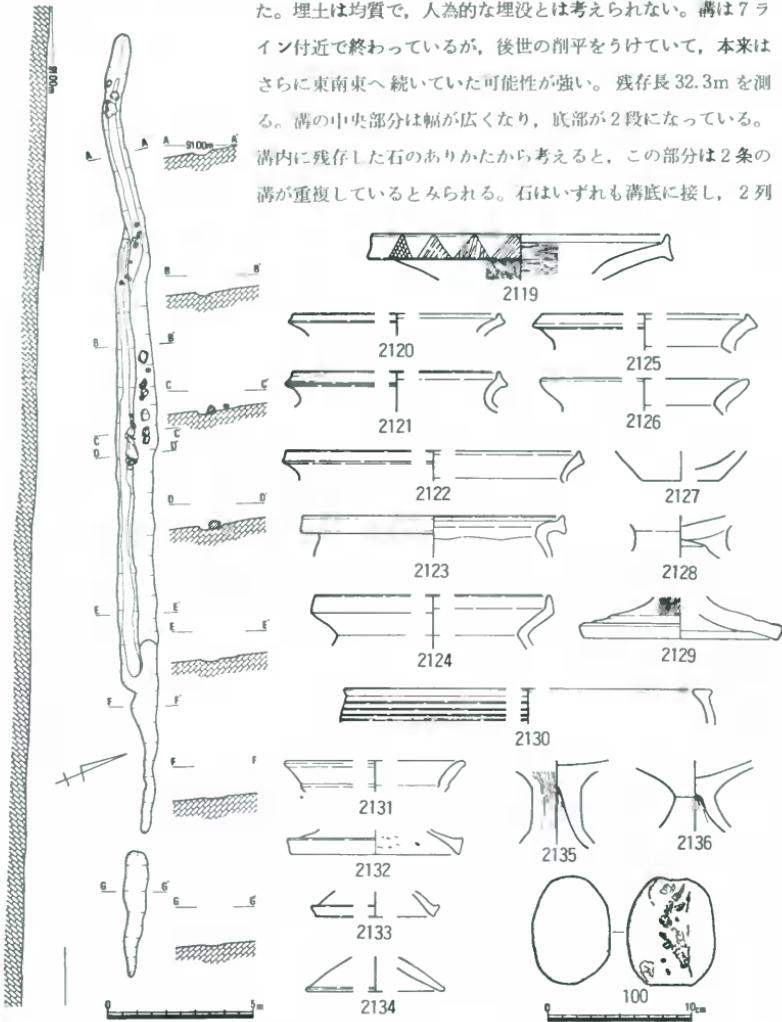
第262図 No. 40 溝 (1/100, 1/50)・出土遺物 (1/4)

奥坂遺跡

No. 19 溝 (第263図、図版87-2)

B-6に位置し、西北西から東南東へ伸びる中世の溝である。埋土は灰黄色土で、弥生時代・古墳時代の遺構の埋土とは明らかに異り、検出時点で中世の遺構であることが推定されている。

埋土は均質で、人為的な埋没とは考えられない。溝は7ライン付近で終わっているが、後世の削平をうけていて、本来はさらに東南東へ続いている可能性が強い。残存長32.3mを測る。溝の中央部分は幅が広くなり、底部が2段になっている。溝内に残存した石のありかたから考えると、この部分は2条の溝が重複しているとみられる。石はいずれも溝底に接し、2列



第263図 No. 19 溝 (1/200)・埋土出土遺物 (1/4)

の平行する石列をなしている。上段の石の数の方が多いことも考えれば、これらの石列はそれぞれの溝底に転落した石と理解しうるからである。このように考えれば、2条の溝の先後関係は、断面D-D'にある大石の位置から、南の深い溝が新しいと判断される。新しい溝は全長15.5mと、古い溝の残存長の半分しかないことから、部分的な改修の可能性がある。溝内への石の転落ということから、溝の北に石積があり、その一部が崩落したことが考えられそうであるが、それにじては、新しい溝での石のあり方にやや問題がありそうである。新しい溝の幅は60~70cm、古い溝も60~80cmとほぼ同規模で、深さは前者で20cm、後者で10cm前後である。この溝から出土した遺物はほとんど弥生式土器であるが、土師器碗の小破片が数点出土していることから中世の遺構に相違ない。ただ、このような中世の遺構に多量の弥生式土器が包含されることの意味がその埋没過程と関連して考えられねばならない。

No19溝から出土した土師器碗の破片はあまりに小片であり図示することはできない。次に、No19溝は中世の遺構であることを強調しつつ、一資料として、埋土出土の弥生式土器を図示しておく。2119は壺形土器である。口縁端部を上下に拡張し、端面に篦描きの鋸歯文を施す。鋸歯文内の施文は、残存しているものについては微妙に異なる。口縁端部にはヨコナデ調整痕を残す。胎土には砂粒が多い。2120~2124は甕形土器である。口縁端部をわずかに拡張させるもの2120~2125・2122・2123、丸くおさめるもの2126、上方へ大きく拡張させるものの3種がある。内面はほとんど頸部までヘラケズリされて、稜線をもつが、2121はヘラケズリの上端がやや下がるかもしれない。いずれもヨコナデ調整で、胎土には砂粒を多く含み、2125には径3mm前後の石粒が目立つ。2127の底部は内外面ともナデで調整する。2128と2129は脚台であるが、形態を大きく異にする。2128はヨコナデ調整で底の中央付近はナデする。内面は調整不明。胎土には砂粒を多く含む。2129は外面端部付近に2条の凹線をめぐらせる。脚端はヨコナデ、それ以外の内面はナデ、外面はヘラミガキである。胎土には砂粒が含まれるが、径4mmの石粒もある。2130は鉢形土器とみられる。残存部分で外面に4条の凹線を施している。内面はヨコナデ調整のようであるが明瞭でない。胎土には砂粒を多く含む。2131~2136は高杯形土器である。器形は変化に富み、時期幅の広いことを示している。2131はヨコナデ調整で丹塗りの土器である。胎土には細砂を多く含む。2132・2133の脚は端部を上方へ拡張させる癖をもつ。2132は、端部はヨコナデで、内面ヘラケズリ、外面ヘラミガキである。胎土には砂粒を多く含む。2134は端部を丸くおさめ、胎土は細砂を含むが精良緻密である。2135・2136は柱状部である。2136は脚が大きく開くようである。ともに外面はヘラミガキされ、内面にはシボリ目を残す。胎土には砂粒を多く含むが、2136には径4mmの石粒がみられる。100は花崗岩製の石錘である。橢円形の長軸に沿って幅25mmの溝をめぐらせていている。

(岡本)

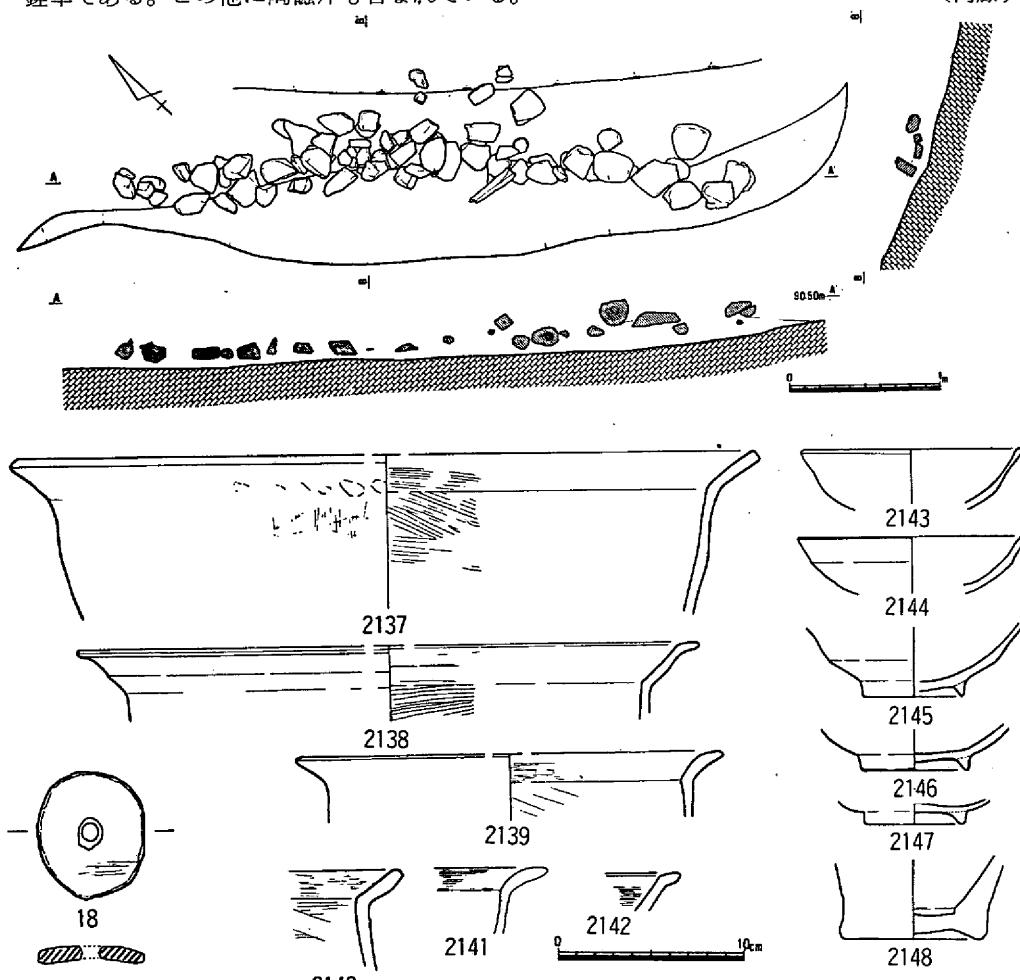
奥坂遺跡

No. 89 集石遺構 (第264図)

E-4の南西隅の北東斜面において、北西一南東（長さ）で420cm・北東一南西（幅）で約70cmの範囲に、20~30cm前後のものから拳大程のものまで約80個の山石が集中して検出された遺構である。これらの石は中央部にわずかに集中している側向がみられるものの、あまり重なり合うことはなく明確な遺構も形成していない。またこれらの集石の下は、南東から北東に斜面に沿ってわずかに段状を呈している他に遺構らしいものは何も検出されていない。

出土遺物としては、集石の間からかなり多くの土器片等がある。2137~2141は土鍋形土器の口縁部片で外面に指頭圧痕の残っているものもあるが、内外面とも粗い刷毛目調整がなされている。胎土は砂粒で煤のためほとんど黒色を呈している。2143~2147は高台付の椀形土器の口縁部片および底部片で胎土は微砂で白っぽい灰黄色を呈している。18は土器片から転用した紡錘車である。この他に陶磁片も含まれている。

(内藤)



第264図 No. 89 集石遺構 (1/50)・出土遺物 (1/4)

No. 33 段状遺構, No. 139・142 溝 (第265図)

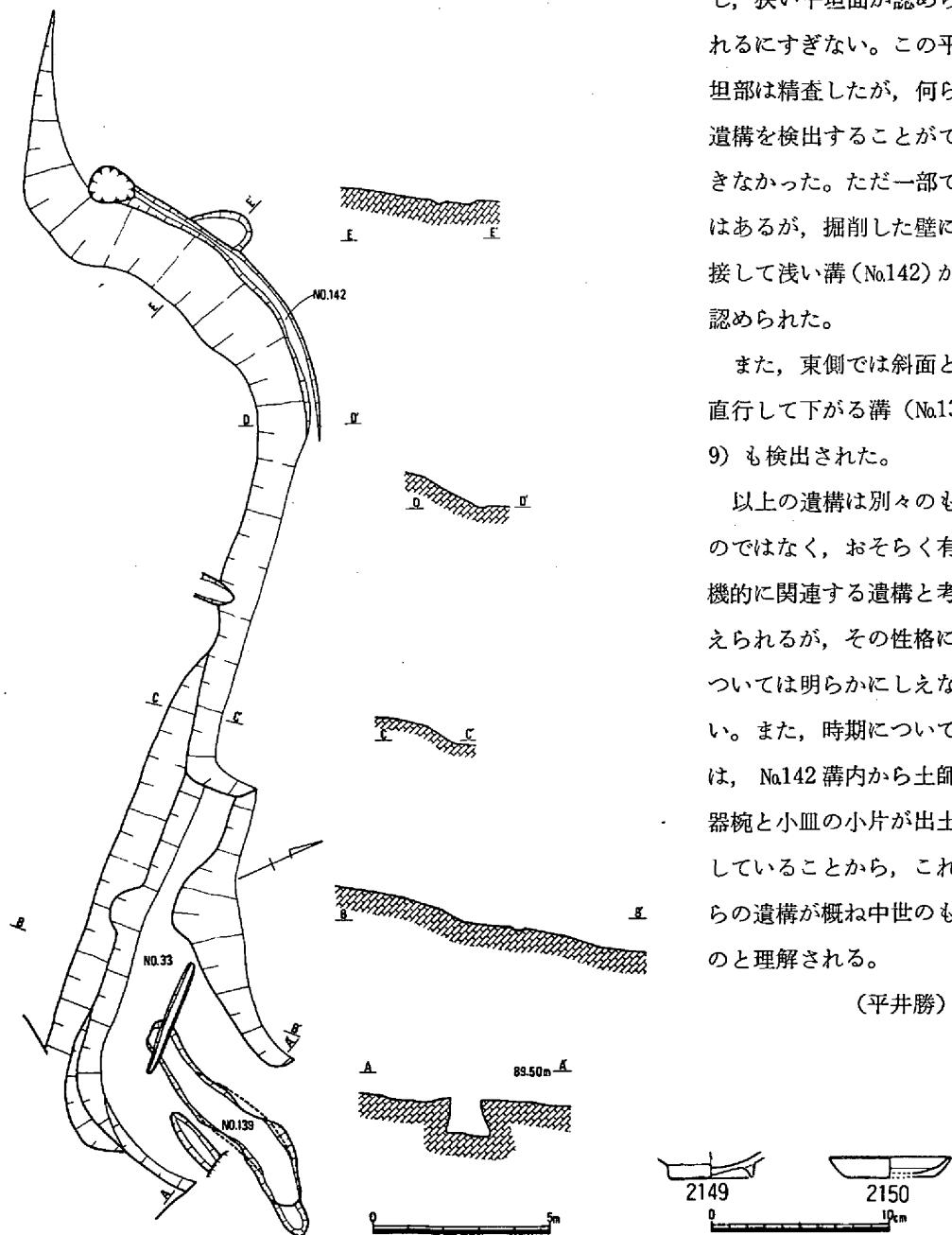
遺構は丘陵頂部北側を少し下がった斜面部に位置している。段状遺構は斜面を削って、その前面に平坦面を造成したものと考えられる。しかし、斜面部であるため、その造成土は流失

し、狭い平坦面が認められるにすぎない。この平坦部は精査したが、何ら遺構を検出することができなかった。ただ一部ではあるが、掘削した壁に接して浅い溝 (No.142) が認められた。

また、東側では斜面と直行して下がる溝 (No.139) も検出された。

以上の遺構は別々のものではなく、おそらく有機的に関連する遺構と考えられるが、その性格については明らかにしえない。また、時期については、No.142 溝内から土師器碗と小皿の小片が出土していることから、これらの遺構が概ね中世のものと理解される。

(平井勝)



第265図 No. 33 段状遺構, No. 139・142 溝 (1/200)・No. 142 溝出土遺物 (1/4)

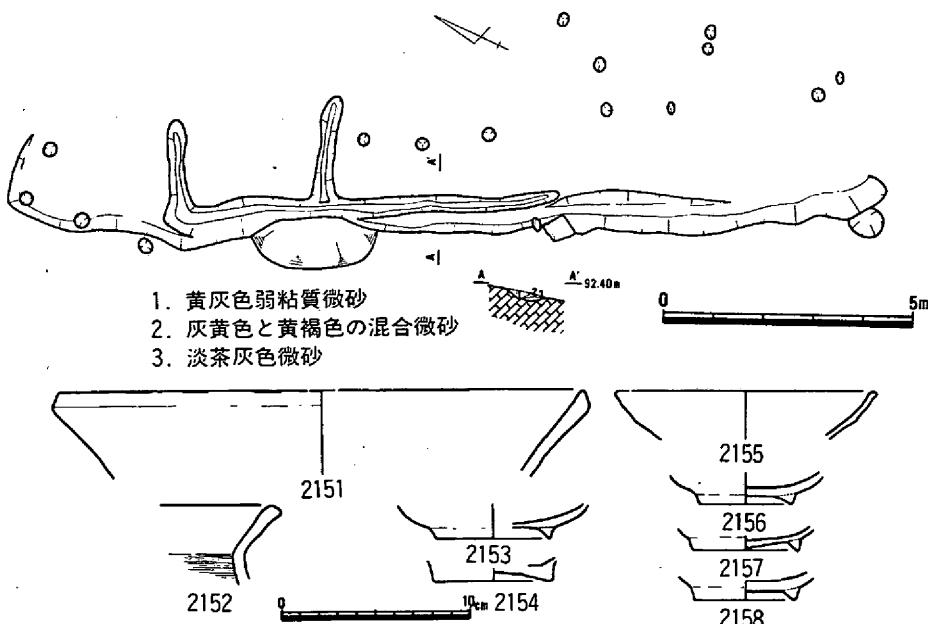
奥坂遺跡

No. 85・86・90・92 段状遺構（第266図）

D-4の北西隅で検出した段状遺構である。海拔 91.75~92.50mの間に位置し、4遺構がほぼ同じレベルに南東から北西方向を示して直線的に並び、隣接する遺構が相互に重複していた。南東端に位置する溝の幅が広い遺構をNo.85段状遺構とし、北西端の壁面が直角に屈曲しているものをNo.92段状遺構とした。No.86段状遺構とNo.90段状遺構は、No.85段状遺構とNo.92段状遺構の中間に位置する遺構である。この4遺構の切り合い関係を検討すると、No.92段状遺構を切ってNo.90段状遺構を構築し、No.86段状遺構を切ってNo.90段状遺構を構築していた。溝の幅の広いNo.85段状遺構は、No.90段状遺構に切られていた。このような結果から、もっとも新しく構築されたのはNo.90段状遺構で、No.85段状遺構とNo.86段状遺構の切り合い関係は不明であった。これらの段状遺構はいずれも「コ」字状を呈する溝または壁面を有し、北東側の地形が低くなつた斜面によって削平されていた。

No.85段状遺構は、検出面での最大幅が約80cmを測る直線的な溝が存在し、両端は削平されて不明であった。検出面からの深さは約5cmと浅く、断面形は「U」字形を呈していた。溝内には、淡茶灰色微砂が堆積し、土器片も出土した。北東側の緩斜面には柱穴と推定される小規模なピットが検出されたが、その検出状況には規則的な配列は認められず、このNo.85段状遺構に伴うものではないと判断した。

No.86段状遺構はNo.90段状遺構と重複していたため、本来の形態が不明であった。No.85段状遺構の溝と連続した状態でやや幅の広い溝が存在し、北東側の斜面に向かってほぼ直角に屈曲し



第266図 No. 85・86・90・92 段状遺構 (1/150)・出土遺物 (1/4)

ていた。この斜面方向へ張り出した部分は、約220cmが残存しているだけであった。この溝の断面形は浅い「U」字形を呈し、内面には淡茶灰色微砂が堆積していた。床面には3か所に柱穴状の小規模なピットが検出され、ほぼ直線的に並んだ状態になっていたが、この段状遺構に伴うかどうかは不明であった。

No.90段状遺構は、検出した4遺構のうちでもっとも新しい段階に構築されたものである。No.86段状遺構とNo.92段状遺構に重複し、屈曲する溝を検出した。この溝は南東から北西方向を示して直線的に約780cmの長さを測り、斜面に向かっては約200cmが残存していた。検出面での幅は約40cmを測り、断面形は浅い「U」字形を呈していた。検出面からの深さは約5cmと極めて浅く、溝内には灰黄色と黄褐色の混合微砂と黄灰色弱粘質微砂が堆積していた。斜面に向かって張り出しているNo.86段状遺構とNo.90段状遺構の溝の間に位置する床面には、精査したにもかかわらず柱穴と推定される痕跡は検出できなかった。

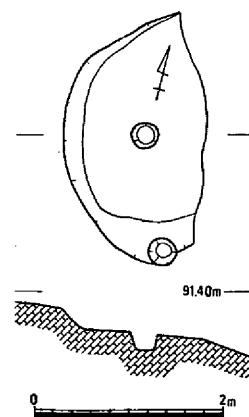
No.92段状遺構は、北西端で屈曲する壁面を検出した遺構である。斜面に向かって屈曲した壁面の長さは約150cmを測り、南東側に位置する壁面は、No.90段状遺構の溝によって削平されていた。壁面の裾部や床面には、柱穴と推定される小規模なピットを4か所で検出したが、このNo.92段状遺構に伴うものかどうかは不明であった。

出土遺物としては、No.85段状遺構およびNo.86段状遺構からかなりの土器片がある。図示できたもののうち2151・2155～2158はNo.85から、2152・2153・2154はNo.86のそれぞれ溝およびその周辺から出土したものである。2152は鍋形土器の口縁部片で、内面は粗く刷毛目調整され、砂粒を含む胎土で淡黄褐色を呈している。2155は椀形土器の口縁部片で、胎土は砂粒を含み黄白色を呈している。2156～2153は断面三角形の高台を貼り付けた椀形土器の底部片で、胎土中に数mmの小石粒が含まれている。色調はいずれも淡黄褐色を呈している。 (内藤)

No. 88 段状遺構 (第267図)

D-4の北辺中央に位置し、No.87住居址の北側にあたる。検出時の平面形は半月形を呈し、最大長約270cm、最大幅約150cm、深さ約25cmを測る。本遺構は性格不明の遺構であり、形状についても、形成された時点では平面形半月形であったのか、東半を流失して検出時の形状になったのかも不明である。

底面は東へ緩やかに傾斜している。底面中央と南肩口で柱穴を検出したが、後者については本遺構に伴うものかどうか不明である。これらの柱穴以外には周辺にも本遺構に付属する施設は検出されなかつた。本遺構の年代については、遺物が出土しておらず、他の遺構との切り合い関係もないため、不明である。 (光永)



第267図 No. 88
段状遺構 (1/80)

7. 時期不明の遺構

(1) 土 壇

No. 125 土 壇 (第268図)

B-5 南西端、海拔89.90m付近に位置する。

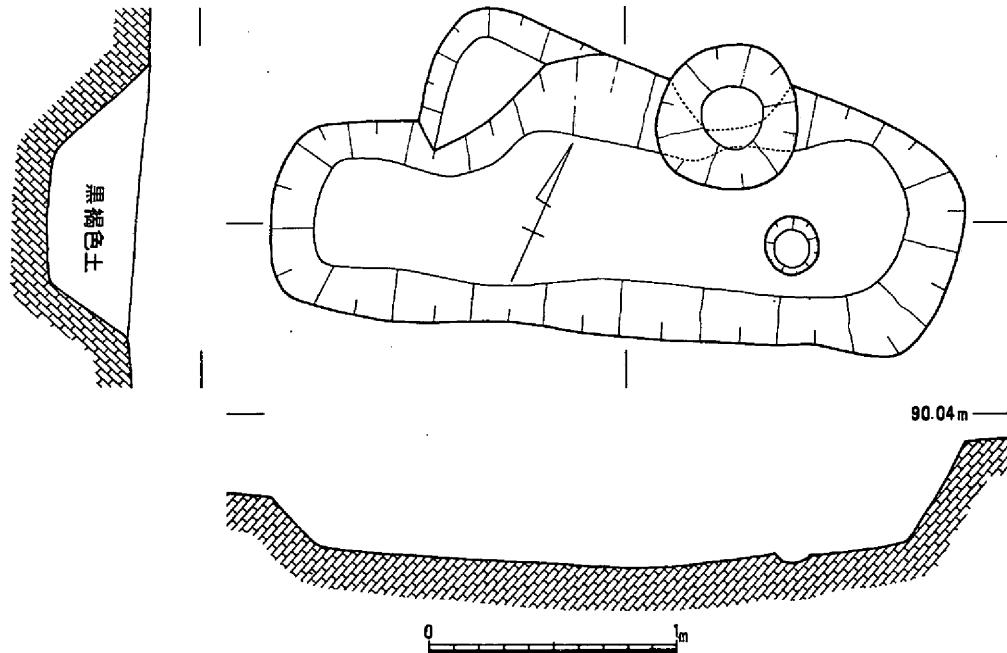
平面プランは隅丸長方形状を呈するが、北側は一部張り出しが認められる。規模は長さ2.8m、幅は中央部で1.1mを測る。底面は長軸方向で見ると中央部に向かって緩やかに傾斜しているが、短軸方向ではほぼ平坦になっている。なお、東端にあるピットとの先後関係は、確認しえなかつた。

土壇内埋土中には多量の炭と焼土粒が含まれてはいたが、その他の遺物は認められなかつた。したがつて、時期については明確にしえないが、他の土壇との関係から、弥生時代中期のものである可能性は強い。

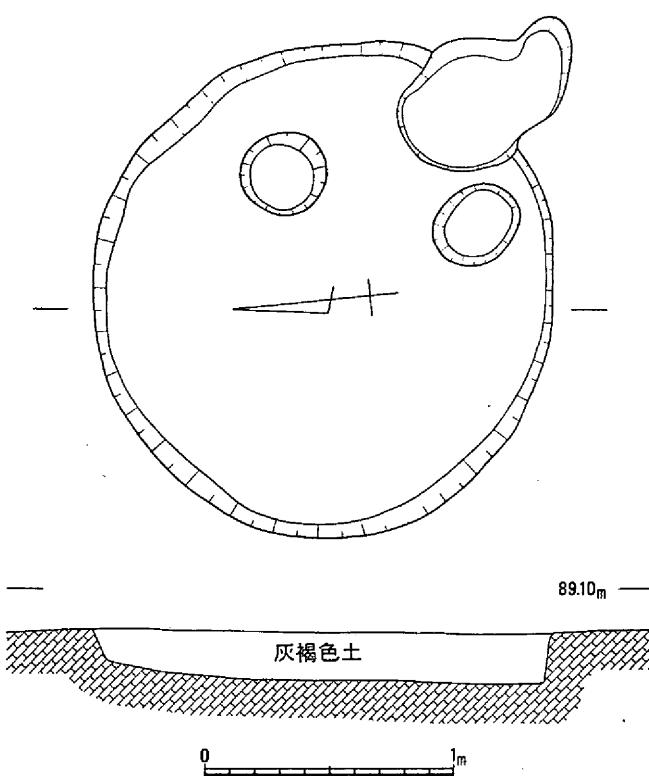
(平井勝)

No. 14 土 壇 (第269図)

B-8 の北西隅で検出した比較的規模の大きな土壇である。海拔89.00mの等高線上に位置し、No.4住居址とNo.13住居址の南側に存在していた。検出面での平面形は円形または橢円形を呈し、長径約194cm・短径約183cmになっていた。検出面からの深さは約18cmと極めて浅く、



第268図 No. 125 土 壇 (1/30)



第269図 No. 14 土 壩 (1/30)

内部には灰褐色土が堆積していた。東側の床面や壁面には柱穴状を呈するピットが検出されたが、いずれもこの土壙を新しく切っていた。

土壙内を精査したが、遺物は存在しなかった。

No. 54 土 壩 (第270図)

C-4 の南西隅で検出した土壙である。海拔92.75~93.00mの間に位置し、近接してNo.136土壙やNo.137土壙が存在していた。検出面での平面形は橢円形に近い形態を呈し、長径約150cm、短径約106cmを測る。南西端に位置する壁面は瘤状を呈して外方向へ張り出し、不整形な形態になつて

いた。この土壙の底部には全体に窪みが認められ、平坦な面が存在しない。中央部からやや南西方向に寄った地点の底部には、後になって新しく掘り込まれたとも考えられる窪みが3か所に存在した。北東方向に寄った地点の底部も、壁面から中央部に移行するにしたがって徐々に傾斜し、全体が水平になつてない。このような状態であったから、検出面からの深さは一定の値が得られず、もっとも深い地点で約35cmになっていた。土壙内には灰褐色土が堆積していたが、部分的には炭化物や砂質土も認められた。

土壙内を精査したが、遺物は出土しなかった。

No. 65 土 壩 (第271図)

B-4 のほぼ中央部で検出した土壙である。海拔91.50~91.75mの間に位置し、近接して奥・中・Ⅲの新相に比定される出入口を確認した住居址を検出している。検出面での平面形は橢円形に近い歪んだ形態を呈し、長径約160cm・最大短径約123cmを測る。検出面からの深さは約14cmを測り、断面形は浅い「U」字形を呈していた。南西に位置する壁面に接した地点には、1個の拳大の礫が存在した。

土壙内を精査したが、遺物は存在しなかった。

奥坂遺跡

No. 106 土 壤 (第272図)

B-8のほぼ中央部で検出した土壙である。海拔88.75mの等高線上に位置し、東側に接してNo.99袋状土壙が存在していた。検出面での平面形は東側の幅が狭くなった隅丸長方形に近い形態を呈し、長径約154cm、最大短径約110cmを測る。検出面からの深さは約13cmと極めて浅く、内面には灰褐色土が堆積していた。この土壙の壁面には、柱穴状の小規模なピットが認められた。東側のものは土壙よりも古いが、残る2か所のピットは土壙よりも新しい。

土壙内を精査したが、遺物は存在しなかった。したがって、時期は不明である。

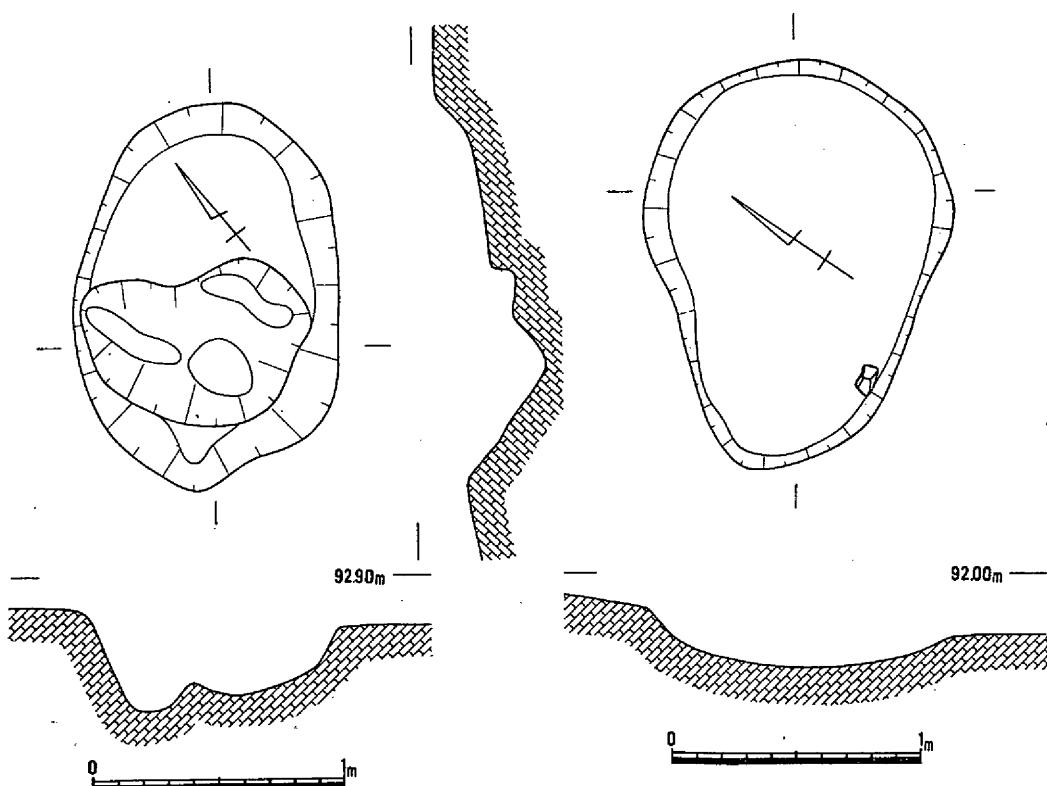
No. 107 土 壙 (第273図)

B-8の中央部で検出した土壙である。海拔88.75mの等高線上に位置し、近接してNo.99袋状土壙とNo.84土壙が存在していた。検出面での平面形は隅丸長方形を呈し、長径約106cm、短径約60cmを測る。検出面からの深さは約20cmを測り、内面に灰褐色土が堆積していた。

土壙内を精査したが、遺物は存在しなかった。

No. 137 土 壙 (第274図)

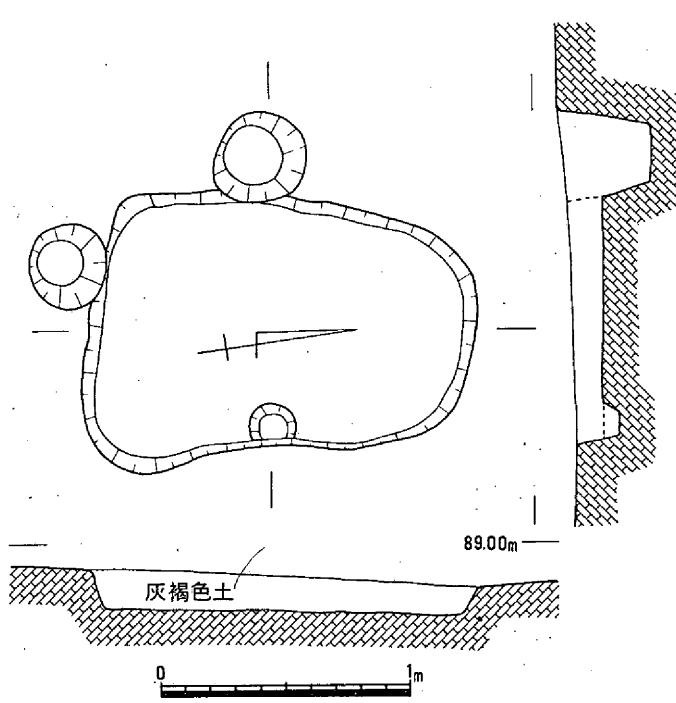
B-4の北西隅で検出した不整形な土壙である。海拔92.50~92.75mの間に位置し、近接し



第270図 No. 54 土 壙 (1/30)

第271図 No. 65 土 壙 (1/30)

第5章 第1節 奥坂遺跡A地区

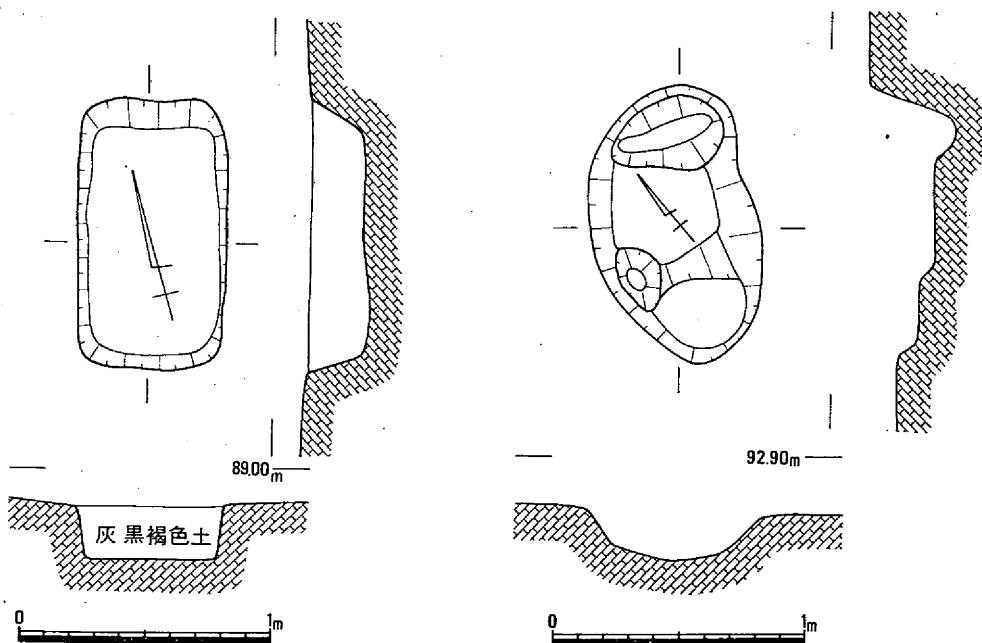


第272図 No. 106 土 壤 (1/30)

てNo.54 土壌やNo.136 土壌が存在した。検出面での長径は約110cm、短径は約66cmであった。また検出面からの深さの最大値は約20cmを測り、南側の底部のレベルが約5cmほど高くなっていた。この土壌の底部には、新しい時期の小規模なピットが2か所に認められた。

土壌内を精査したが、遺物は存在しなかったので、時期は不明である。

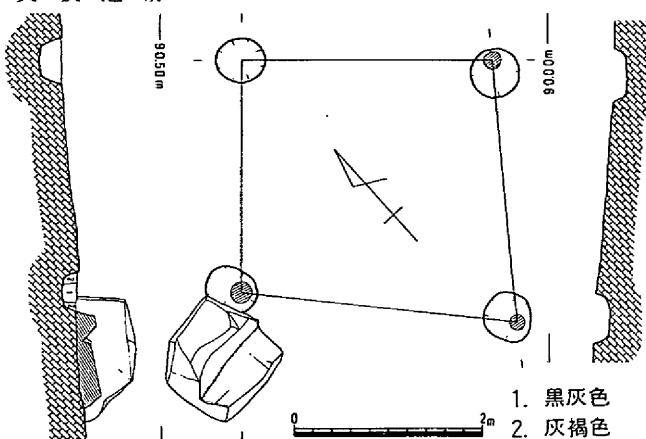
(福田)



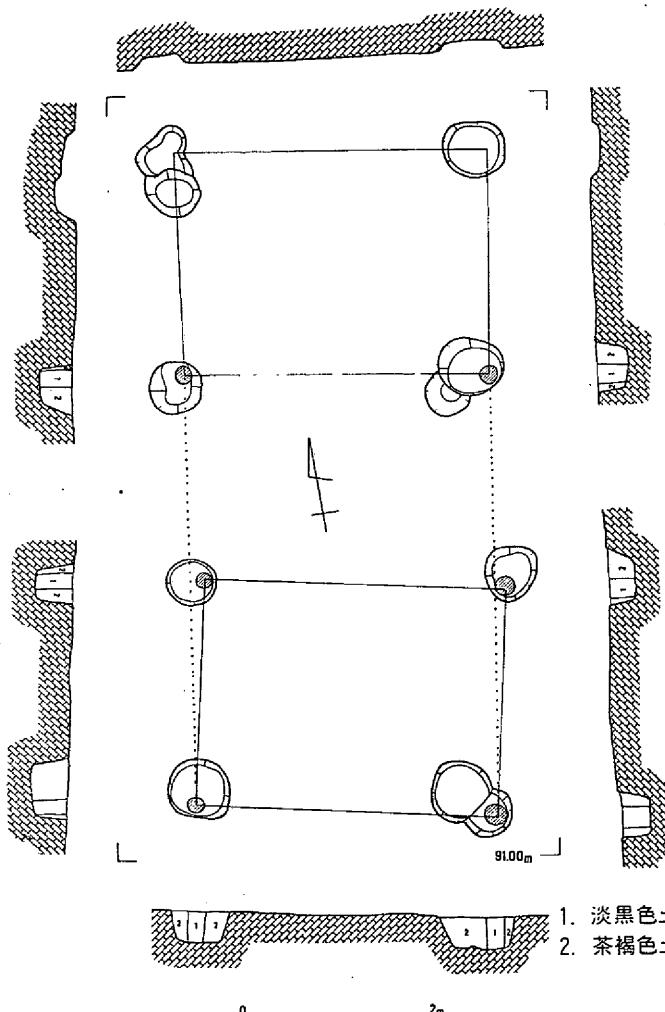
第273図 No. 107 土 壤 (1/30)

第274図 No. 137 土 壤 (1/30)

奥坂遺跡



第275図 No. 60 建物 (1/80)



第276図 No. 27・61 建物 (1/80)

(2) 建物

No. 60 建物 (第275図)

D-7 中央南端, 海拔89.30~89.60m間に位置し, 平面形はほぼ方形に近い掘立柱建物である。

北辺269cm, 東辺279cm, 南辺295cm, 西辺249cm, 若干歪な形態をとり, 面積は7.4m²を測る。柱穴直径約50cm, 深さ約15cm前後が中心になっていて。北側の柱穴を除く3柱穴に直径約15~20cmの柱痕が認められる。西辺隅の柱穴はおのずと配置場所を限定されおり, その西側には115×110×60cmの自然の巨石が存在した。柱穴内埋土より中世等のものではなく, 弥生・古墳時代の建物が想定できる。

No. 27・61 建物 (第276図)

C-6 中央, 海拔90.30~90.70m間に位置し, 単独とも2棟とも考えられる掘立柱建物である。桁行柱間220~243cm, 梁間320~330cm, 面積23.52m²を測る。柱穴直径50~60cm, 深さ約30cmを測り, 6柱穴に直径約15~20cmの柱痕をとどめる。柱穴内埋土等より, 中世とは異り, 弥生・古墳時代の建物と想定できる。(高畑)

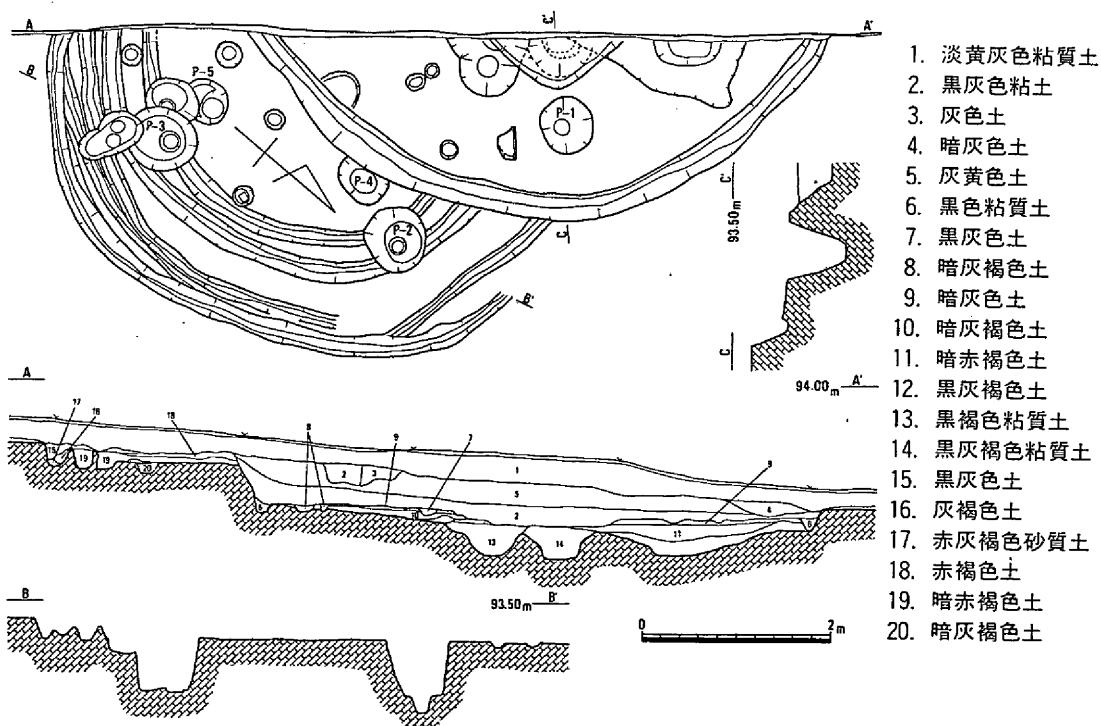
第2節 奥坂遺跡B地区

1. 奥坂遺跡B地区の概要

奥坂遺跡B地区とは、岡山県総合流通センター全域の上水道をまかぬう給水塔の建設予定地と、その地点への進入道路建設予定地に相当する。奥坂遺跡A地区の所在する丘陵の尾根が北東方向に張り出した部分で、比較的緩やかな斜面になっていた。給水塔建設予定地の北東側に位置する地山面は、全体に礫が露出して遺構が存在する状況ではなかった。

検出した遺構は、弥生時代後期に属する竪穴式住居址6軒、建物1棟、袋状土壙1基、土器溜り1か所、中世に属する溝1条であった。これらの遺構のうち袋状土壙と中世の溝は、進入道路建設予定地部分に存在した。

6軒の竪穴式住居址のうち、建て替えが行われていないものは2軒だけであった。No.155住居址には5回の建て替えが認められ、No.153住居址にも5条の壁体溝が検出された。土器溜りから出土した土器の量は整理箱に10箱にもおよび、比較的大きな破片が認められた。(福田)



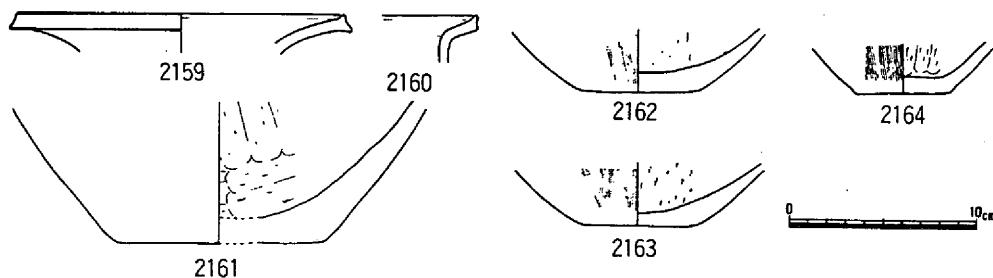
第277図 No. 153・154 住居址 (1/80)

2. 弥生時代後期の遺構・遺物

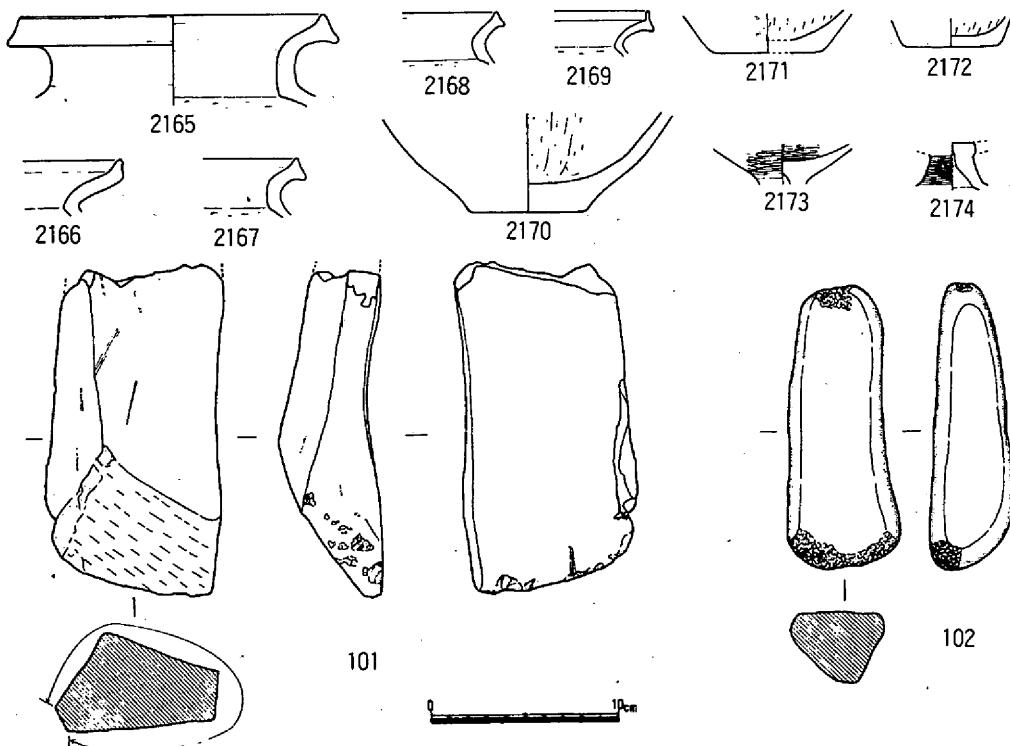
(1) 住居址

No. 153・154 住居址 (第277~279図)

X-24の南東端部で検出した2軒の竪穴式住居址である。南西部分は発掘調査範囲外になるため、調査することができなかった。この2軒の住居址は海拔92.50~93.50mの間に位置し、平面形はどちらも円形を呈すると考えられる。2軒の住居址の切り合いは、No.153 住居址が古



第278図 No. 153 住居址出土遺物 (1/4)



第279図 No. 154 住居址出土遺物 (1/4)

くてNo.154住居址が新しいことが判明した。

No.154住居址は、床面の周囲に掘り込まれた壁体溝と1か所の柱穴（P-1）を検出している。壁体溝の検出面での幅は20～40cmを測り、残存する壁体の最大高は約60cmであった。柱穴の平面形は長径約60cm、短径約55cmの橢円形を呈し、床面からの深さは約60cmであった。この住居址の床面中央部には、P-1の柱穴に近接した地点で屈曲した浅い平坦面が認められた。このような床面の状況から判断して、No.153住居址には「ベッド」が伴うであろう。調査の最終段階に床面を除去して地山面まで削平したところ、柱穴や浅く窪んだ部分が確認された。

No.154住居址から出土した遺物には、奥・後・IVの時期に比定されると推定する土器片以外に、流紋岩製の砥石101と花崗斑岩製の叩き石102が出土している。砥石には4面に使用痕が認められ、途中で欠損している。叩き石の両端には使用痕が顕著に残存し、中位は表面が滑らかになっている。

No.153住居址は、北西部の床面をNo.154住居址によって新しく切られていた。この住居址の残存状態は極めて悪く、床面に5条の壁体溝と4か所の柱穴（P-2～P-5）を検出しただけである。南西の部分は調査範囲外になるため、調査することができなかつた。壁体溝の検出面での幅は15～20cmを測り、断面形は浅い「U」字形を呈していた。P-2とP-3の柱穴は、もっとも外側に検出した壁体溝に伴うと推定され、柱穴間の距離は約260cmであった。P-4とP-5の柱穴は、もっとも内側に検出した壁体溝または内側から2番目に存在した壁体溝に伴うと推定され、柱穴間の距離は約180cmであった。この住居址の壁体溝や柱穴の切り合い状態から推定して、建て替えが行われるたびに床面積が広くなっていると考えられる。

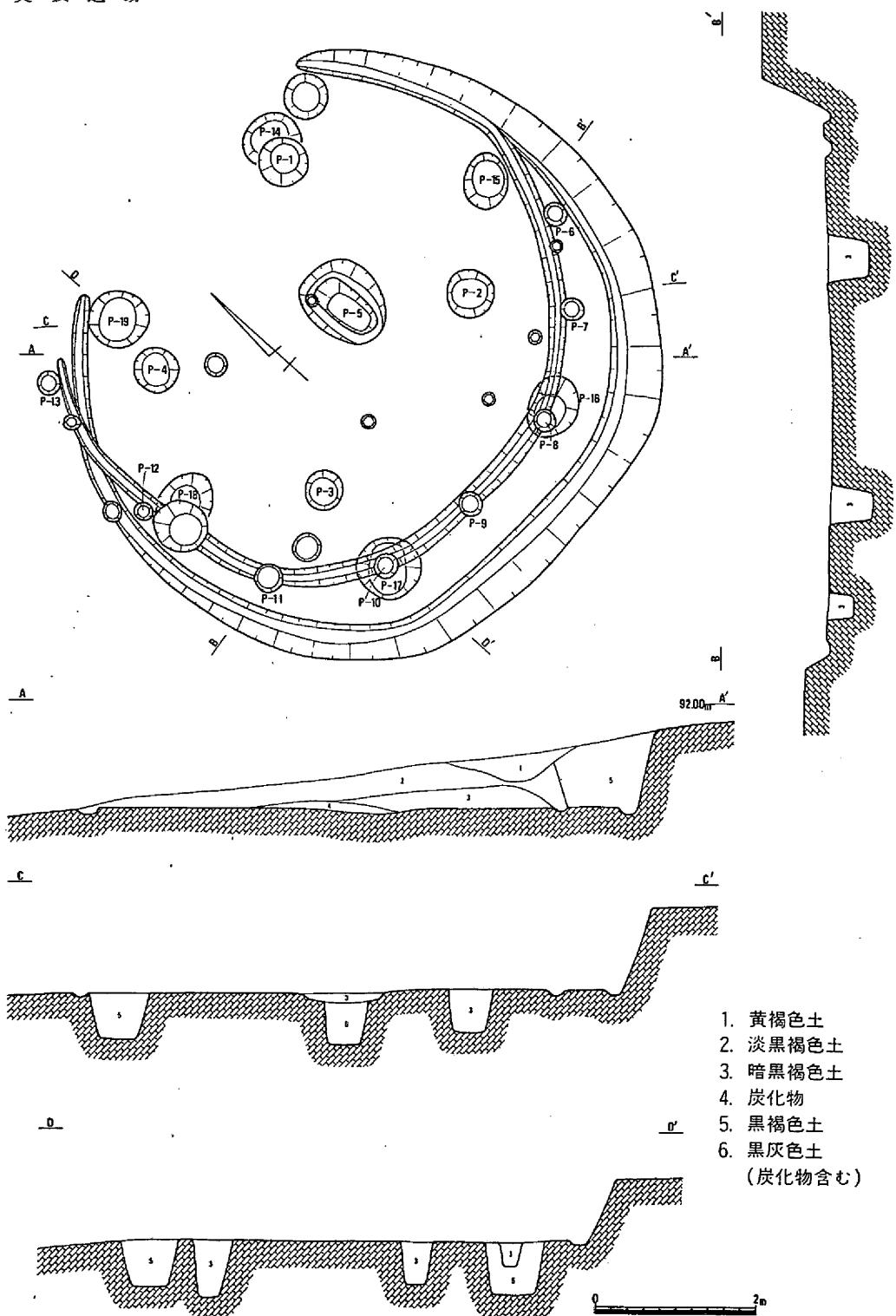
この住居址から出土した遺物は、いずれも土器の小破片である。2159・2160の壺形土器の口縁部と、2161～2164の壺形土器または甕形土器の底部が検出されている。これらの土器は、いずれも奥・後・IIIの時期に比定されるであろう。

No. 156 住居址（第280・281図、図版84-2）

X-25の西隅で検出した竪穴式住居址である。海拔90.50～91.75mの間に位置し、平面形が円形に近い形態を呈していた。この住居址は建て替えが行われ、2条の壁体溝が存在した。

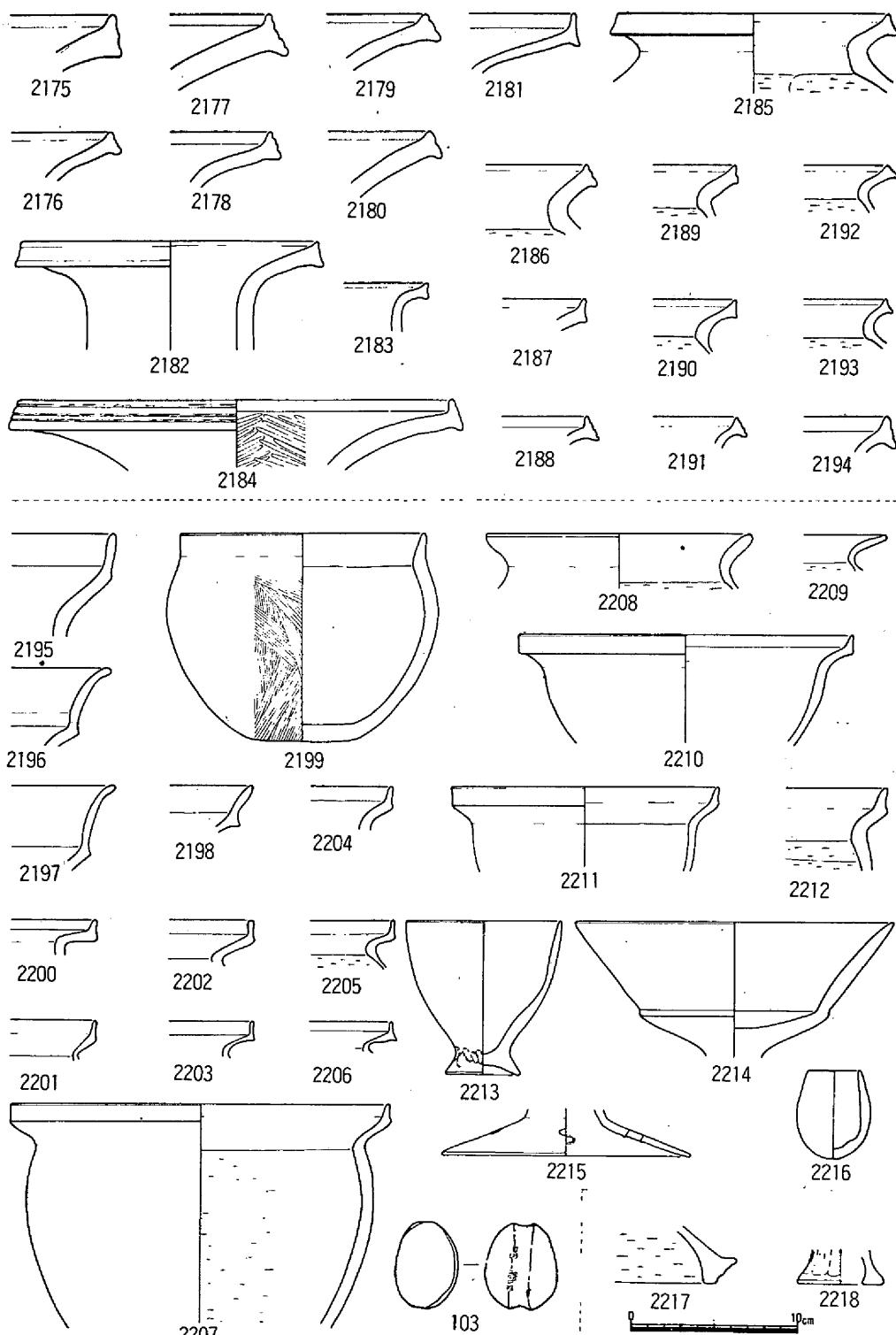
新しい時期の住居址から説明する。この住居址の床面で検出した柱穴は、P-1からP-4の4か所である。柱穴間の距離は、P-1とP-2が約280cm、P-2とP-3が約300cm、P-3とP-4が約250cm、P-4とP-1が約300cmを測り、床面積は約29.21m²であった。壁体溝の検出面での幅は15～30cmを測り、内面に淡黒褐色土が堆積していた。この住居址の特徴は、壁体溝に接してP-6からP-13の小規模な柱穴が8か所に認められたことである。検出面での径は22～35cmを測り、床面からの深さはいずれも約30cmで、底部のレベルが海拔約90.40mになっていた。これらの小規模な柱穴間の距離は120～195cmを測り、北側から北東側の部分には精査したにもか

奥坂遺跡



第280図 No. 156 住居址 (1/80)

第5章 第2節 奥坂遺跡B地区



第281図 No. 156 住居址出土遺物 (1/4)

奥坂遺跡

かわらず柱穴は存在しなかった。この住居址の南側に位置する壁体構は、古い時期の住居址の床面に存在していた。だから8か所に検出した小規模な柱穴は、新しく構築された住居の壁体が崩壊するのを防止するために設けられた「土留め」用の柱痕跡と理解したい。中央穴はやや東側に寄った地点で検出した。平面形は二重になった橢円形に近い形態を呈し、床面からの深さは約53cmであった。この中央穴周辺の床面は浅く窪み、わずかに炭化物や焼土が散布していた。

この新しい時期の住居址に伴う遺物は、2195から2216の土器と103の石錘と考える。これらの土器は、奥・後・IVに比定されるであろう。

古い時期の住居址には、P-14からP-19まで6か所の柱穴が存在した。柱穴間の距離は、P-14とP-15が約270cm、P-15とP-16が約300cm、P-16とP-17が約280cm、P-17とP-18が約265cm、P-18とP-19が約250cm、P-19とP-14が約285cmを測り、床面積は約38.47m²であった。南側に残存する壁体の最大高は約80cmを測り、北側の壁体や壁体構は削平されて存在しなかった。中央穴は検出できなかったが、新しい時期の中央穴（P-5）と重複していた可能性が強い。

この古い時期の住居址に伴う遺物は、2125から2194の壺形土器または甕形土器の小破片である。これらの土器は、いずれも奥・後・Ⅲの時期に比定されるであろう。

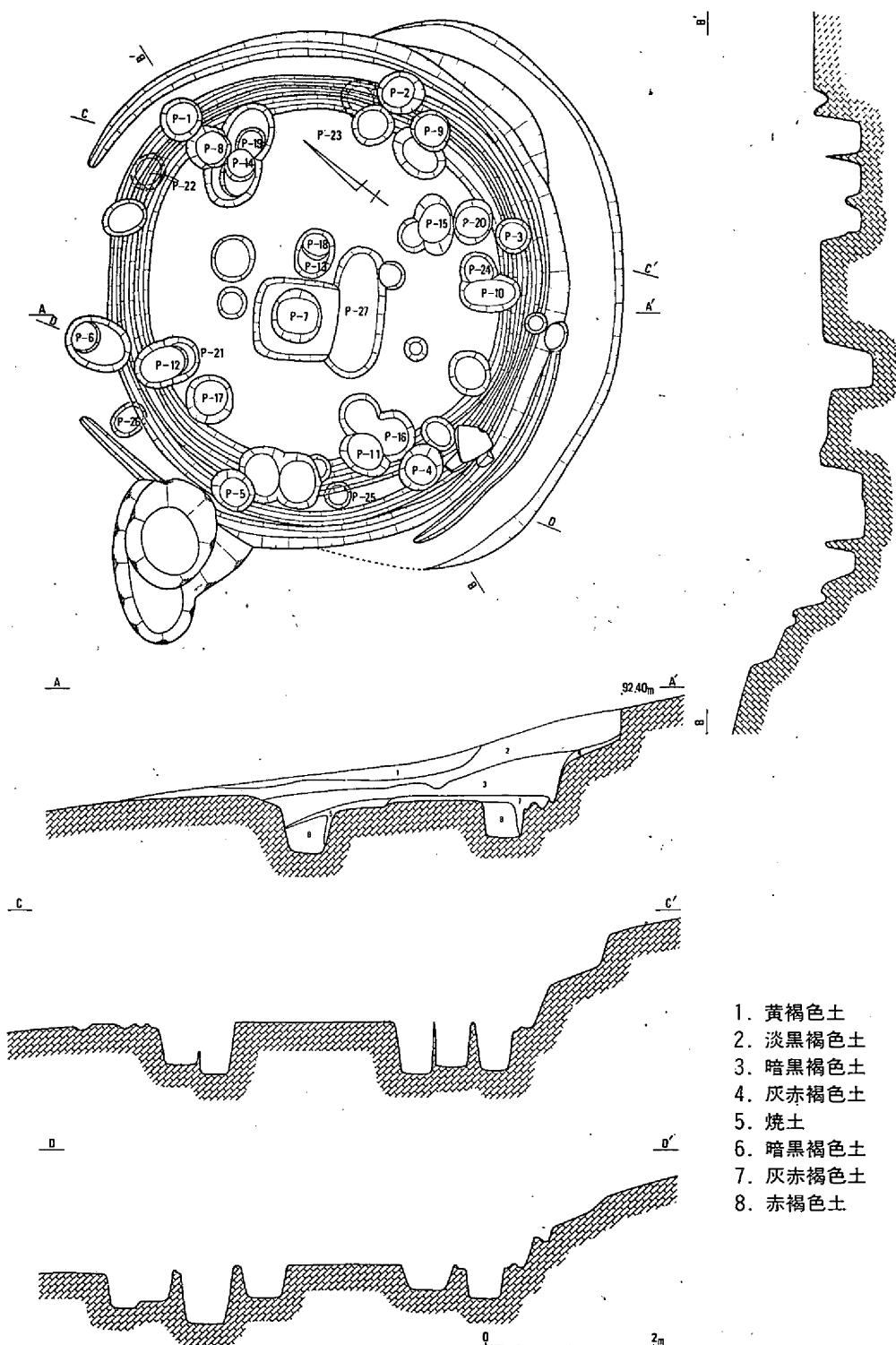
No.155 住居址（第282～285図、図版84-1）

X-25の中央部で検出した竪穴式住居址である。海拔92.00～93.25mの間の位置に、平面形は円形を呈していた。この住居址には5条の壁体構が認められ、4回の建て替えが行われていることを確認した。

No.155A住居址は、もっとも新しい時期に構築された住居址である。この住居址の床面には、P-1からP-6の6か所の柱穴が検出された。柱穴間の距離は、P-1とP-2が約260cm、P-2とP-3が約218cm、P-3とP-4が約293cm、P-4とP-5が約258cm、P-5とP-1が約282cmを測り、床面積は約26.41m²であった。中央穴の平面形は隅丸長方形と円形が重複し、床面からの深さは約58cmであった。なおこの住居址の南側に位置する壁体部分には、三日月形を呈する削平面が検出された。

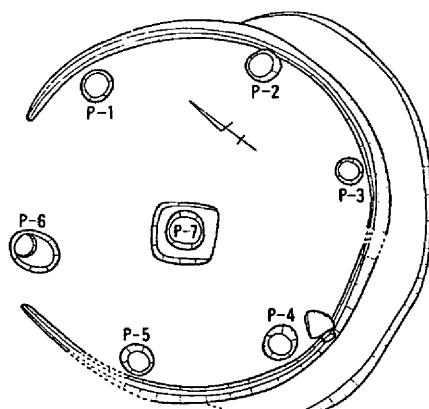
No.155B住居址の規模は、No.155A住居址よりも小さい。この住居址の床面には、P-8からP-12の5か所の柱穴が存在した。柱穴間の距離は、P-8とP-9が約262cm、P-9とP-10が約205cm、P-10とP-11が約241cm、P-11とP-12が約263cm、P-12とP-8が約262cmを測り、床面積は約21.23m²であった。中央穴の平面形は橢円形を呈し、長径約58cm、短径約46cm、床面からの深さ約43cmになっていた。

No.155C住居址の規模は、No.155A住居址やNo.155B住居址よりもさらに小さくなり、検出し

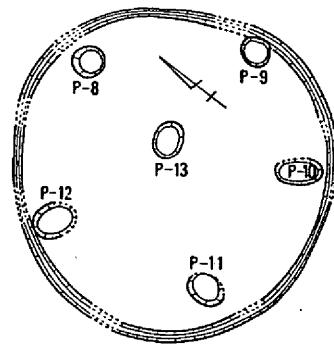


第282図 No. 155 住居・址 (1/80)

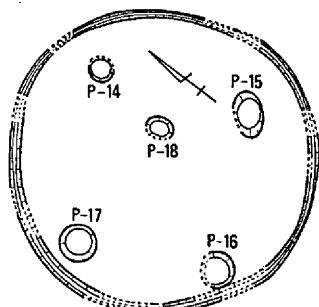
奥坂遺跡



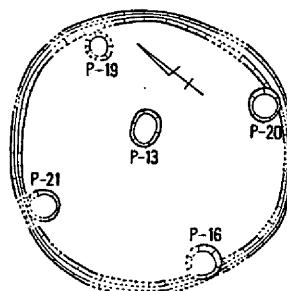
No.155A住居址



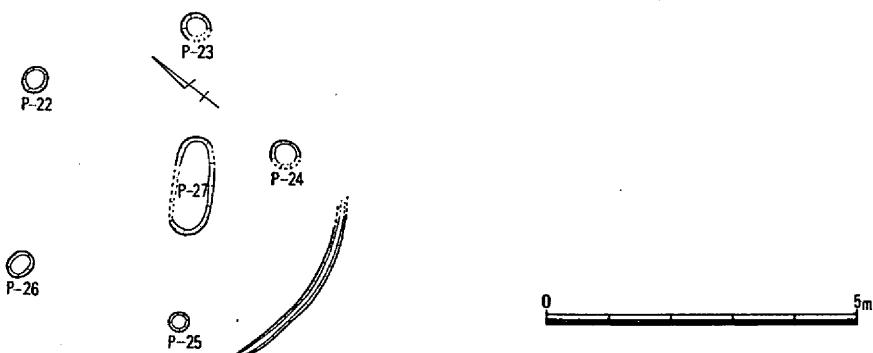
No.155B住居址



No.155C住居址

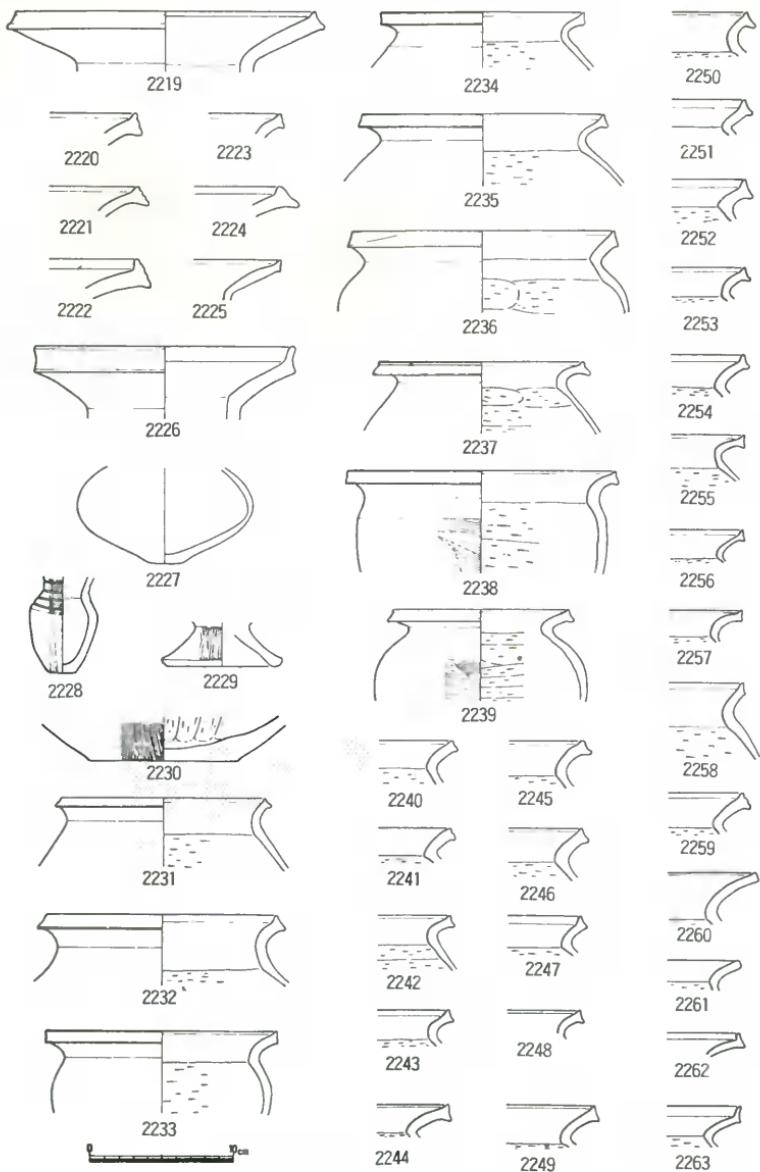


No.155D住居址



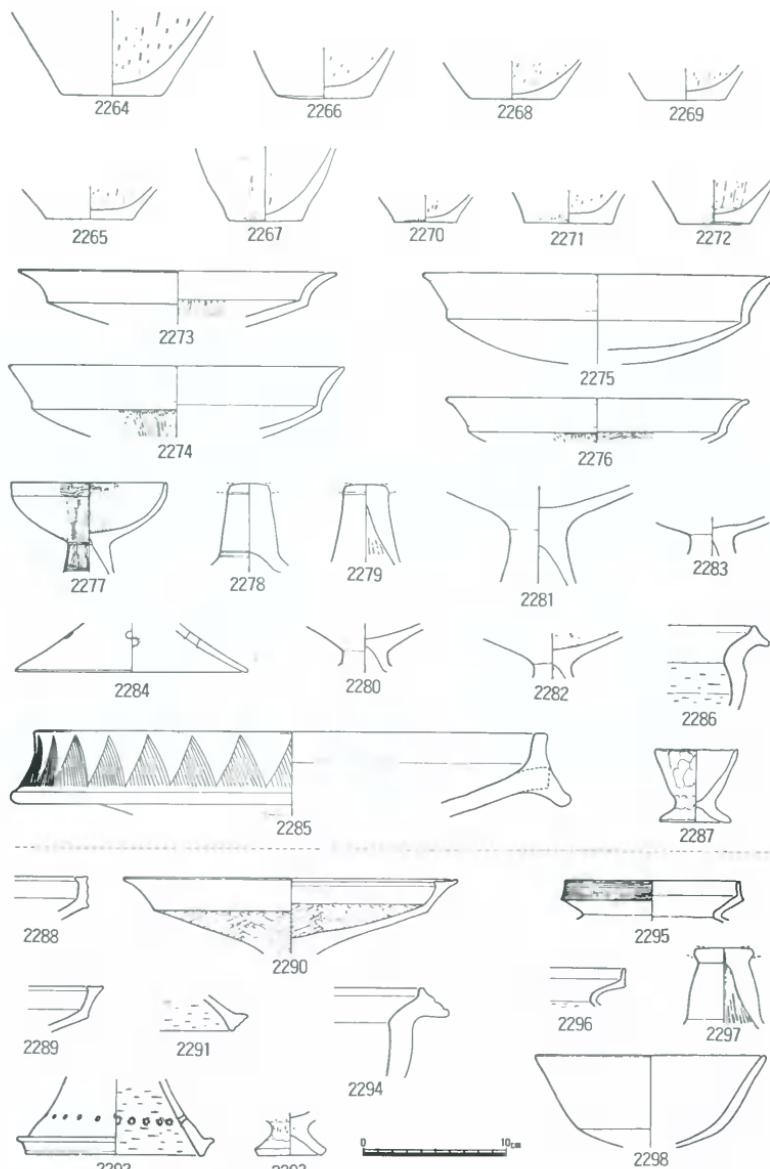
No.155E住居址

第283図 No. 155 住居址変遷図 (1/120)



第284図 No. 155 住居址出土遺物(1) (1/4)

奥坂遺跡



第285図 No. 155 住居址出土遺物(2)(1/4)

た柱穴もP-14からP-17の4か所になっていた。柱穴間の距離は、P-14とP-15が約240cm、P-15とP-17が約258cm、P-16とP-17が約220cm、P-17とP-14が約280cmを測り、床面積は約17.34m²であった。中央穴は北東方向に寄った地点に存在し、平面形は橢円形を呈していた。床面からの深さは約63cmを測り、内部に炭化物を含む黒褐色土が堆積していた。この中央穴の規模は、4か所の柱穴よりもやや小さくなっていた。

No.155D住居址の特徴は、4か所の柱穴が壁体溝に接して存在したことである。南側に位置した柱穴は、No.155C住居址の柱穴と同じでP-16とした。柱穴間の距離は、P-19とP-20が約280cm、P-20とP-16が約270cm、P-16とP-21が約270cm、P-21とP-19が約270cmを測り、床面積は約15.20m²であった。中央穴は、No.155B住居址と同じであった。

No.155E住居址は、南側に位置するNo.155A住居址の外側に、延長約280cmを測る湾曲した壁体溝が残存した。検出面での幅は14~18cmを測り、断面形は浅い「U」字形を呈して灰黒褐色土が堆積していた。この住居址の柱穴は、P-22からP-26の5か所に存在し、No.155A住居址とほぼ同じ規模になると推定される。柱穴間の距離は、P-22とP-23が約250cm、P-23とP-24が約313cm、P-24とP-25が約268cm、P-25とP-26が約296cm、P-26とP-22が約267cmになっていた。中央穴は細長い橢円形を呈し、長径約156cm、短径70cm、床面からの深さは約7cmであった。

この住居址から出土した遺物は、いずれも土器である。大多数のものは奥・後・IIの時期に比定されるが、2288の高杯形土器の奥・後・Iのもの、2295の甕形土器の奥・後・IVのもの、2298の高杯形土器の奥・古・IIのものなども認められた。

No. 152 住居址（第286図、図版83-2）

X-24の北東端で検出した竪穴式住居址である。海拔92.00~92.75mの間に位置し、平面形は隅丸方形に似た円形に近い形態を呈していた。検出面での壁体溝の最大幅は約35cmを測り、北側の地形の低い部分の壁体溝は削平されて残存しなかった。この住居址の床面には、P-1からP-4の柱穴を検出した。柱穴間の距離は、P-1とP-2が約182cm、P-2とP-3が約178cm、P-3とP-4が約182cm、P-4とP-1が約195cmを測り、床面積は約12.56m²であった。中央穴の平面形は橢円形を呈し、長径86cm、短径61cm、床面から深さ6.1cmになっていた。この住居址の床面には、作業台と推定される2個の板石が存在した。

遺物としては少量の土器片が出土したが、いずれも小破片で図化することができなかった。胎土や調整の特徴から、奥・後・IIまたは奥・後・IIIの時期に比定されるであろう。

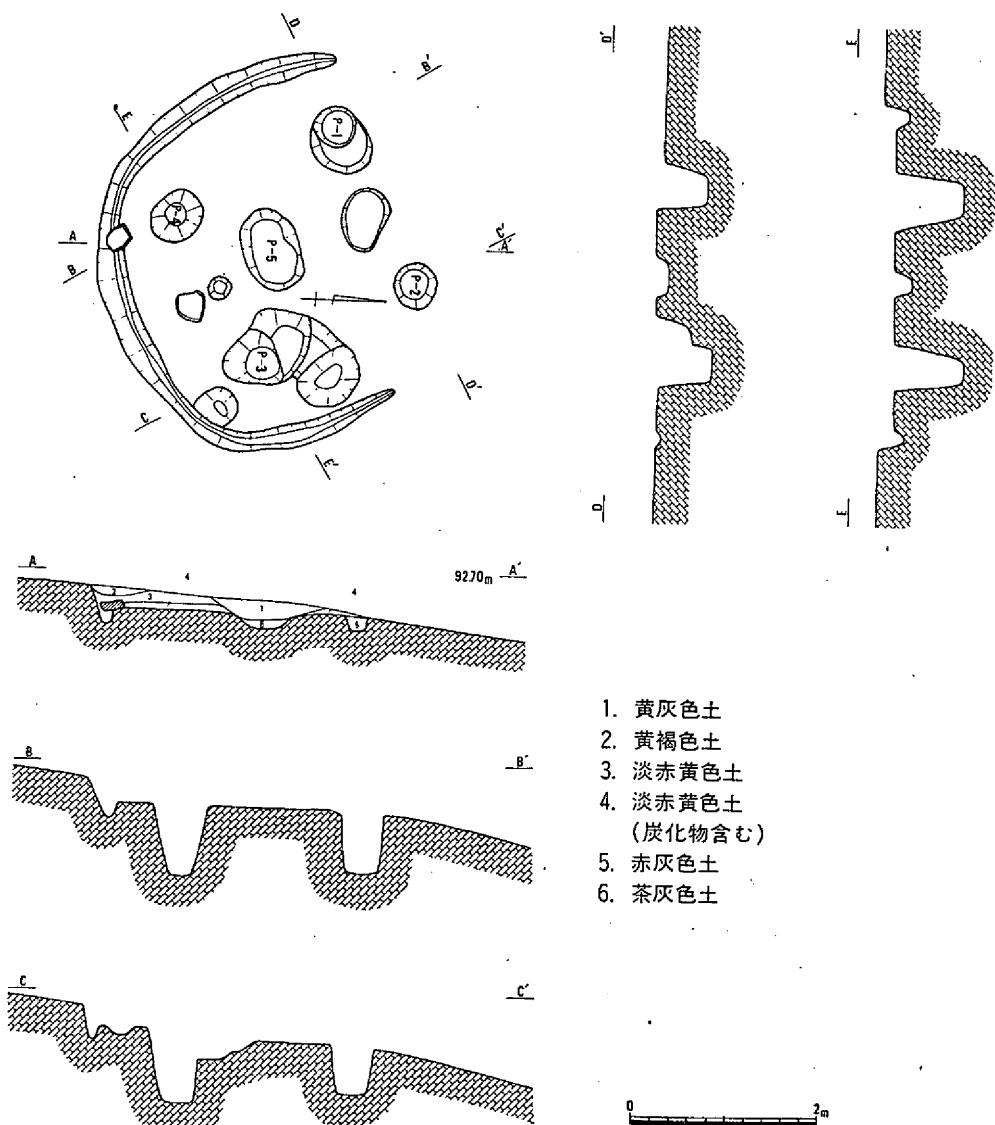
No. 151 住居址（第287・288図、図版83-1）

X-24の東隅で検出した竪穴式住居址である。海拔93.00~93.50mの間に位置し、平面形は円形を呈していた。検出面での壁体溝の幅は15~32cmを測り、内部には黒褐色土と赤褐色土が

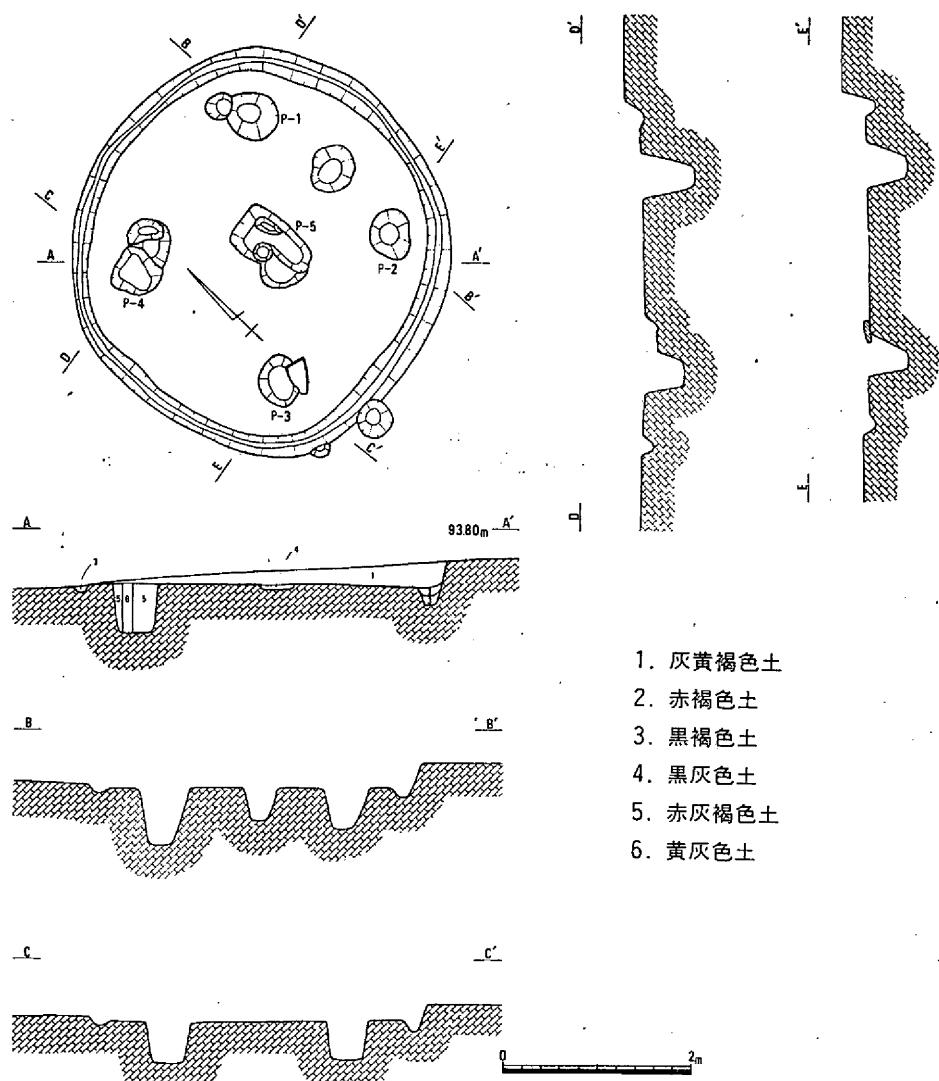
奥坂遺跡

堆積していた。この住居址に伴う柱穴は、P-1からP-4の4か所で検出した。柱穴間の距離は、P-1とP-2が約193cm、P-2とP-3が約194cm、P-3とP-4が約192cm、P-4とP-1が約205cmを測り、床面積は約11.94m²であった。中央穴は不整形な形態を呈して浅く、内部に黒灰色土が認められた。

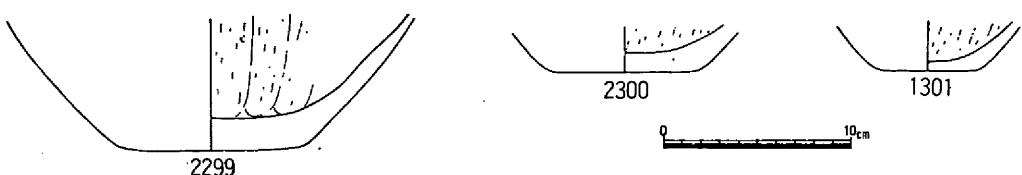
このNo.151住居址からは、平底を呈する壺形土器または甕形土器の底部が出土している。外面は縦方向のナデを施し、内面は縦方向のヘラケズリを行っている。これらの土器は、いずれも奥・後・Ⅲの時期に比定されるであろう。



第286図 No. 152 住居址 (1/80)



第287図 No. 151 住居址 (1/80)



第288図 No. 151 住居址出土遺物 (1/4)

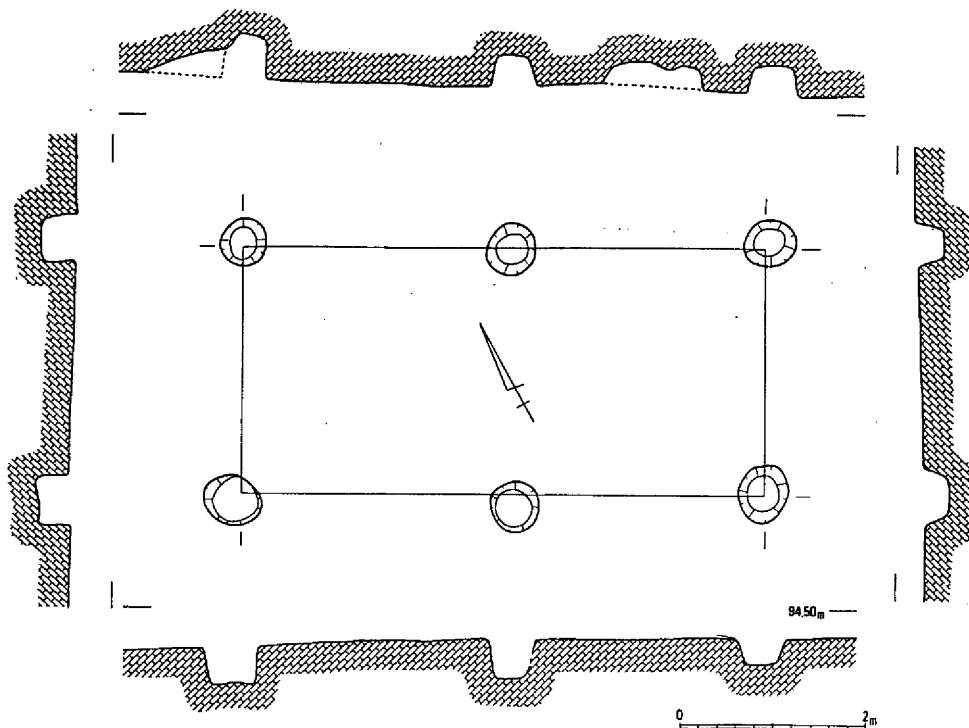
奥坂遺跡

(2) 建物

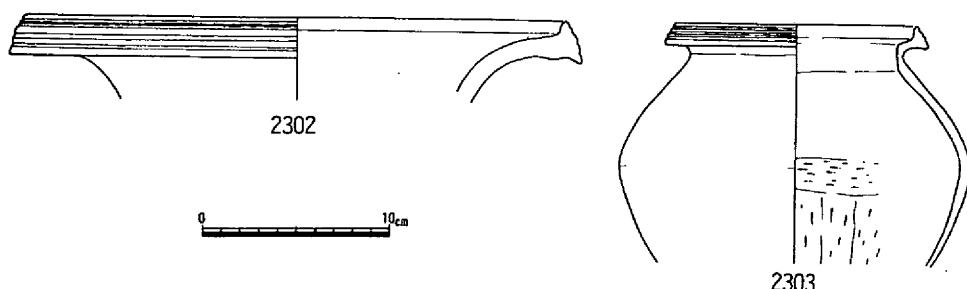
No. 159 建物 (第289・290図)

W-25で検出した奥坂遺跡B地区に存在した唯一の建物である。海拔94.25mの等高線上に位置し、桁行が2間で約560cm、梁行が1間で約260cmになっていた。柱穴の検出面での径は40~60cmを測り、検出面からの深さは20~40cmになっていた。柱穴内には灰褐色土が堆積し、柱痕跡は確認できなかった。この建物の位置より東側には、遺構が存在しなかった。

この建物の柱穴からは土器片が出土したが、実測が可能であったのは2302の壺形土器と2303の甕形土器である。どちらも奥・後・Iの古相に比定される。



第289図 No. 159 建物 (1/80)



第290図 No. 159 建物出土遺物 (1/4)

(3) 袋状土壙

No. 158 袋状土壙 (第291・292図)

進入道路部分のX-22の南東端で検出した袋状土壙である。海拔90.25~90.50mの間に位置し、調査した範囲内では周辺に遺構が存在しなかった。検出面での平面形は橢円形を呈し、長径約157cm・短径約148cmになっていた。検出面からの深さは55~60cmを測り、底部の中央付近に径約40cmの浅い柱穴状のピットが検出され、内部に黒褐色土が堆積していた。底部の平面形は円形に近い形態を呈し、長径約196cm・短径約182cmの比較的平坦な面になって、底部のレベルが海拔約89.60mに位置していた。

この袋状土壙の土層断面を観察すると、上面までほぼ水平に土砂が堆積して袋状土壙が埋没した後に、中央部分が新しく抉られて異質の土砂が堆積していた。つまり、底部から上位にかけて黒灰色土・赤褐色土・黒灰色土・赤褐色土・黒灰色土・淡赤褐色土・淡黒灰色土・淡赤褐色土が徐々に帯状を呈して堆積した後に、中央部分に黒褐色土や淡黒灰褐色土が新しく存在しているのである。このような土層断面の堆積状況は、奥坂遺跡A地区で検出した数多くの袋状土壙には認められなかった。

この袋状土壙から出土した遺物には、土器以外に104の流紋岩製の砥石が存在する。断面形は台形を呈し、2面に使用痕が認められる。

2304は直口壺または台付直口壺の口縁部である。緩やかに外湾して立ち上がった口縁の端部は、全体にヨコナデを施している。胎土には水漉粘土を使用し、赤褐色を呈している。

2305は壺形土器口縁部の小破片である。緩やかに外反して立ち上がった口縁の端部は、さらに上方へ拡張して外面に2条の凹線状の窪みを有する。この口縁部の小破片は、内外面とも全体にヨコナデを施している。

2306~2710は、甕形土器の口縁部破片である。肥厚しながら斜め上方へ張り出した口縁の端部は、上方へ拡張して外面に中央部がわずかに窪んだ面を有する。これらの口縁部は、いずれも内外面とも全体にヨコナデを施している。

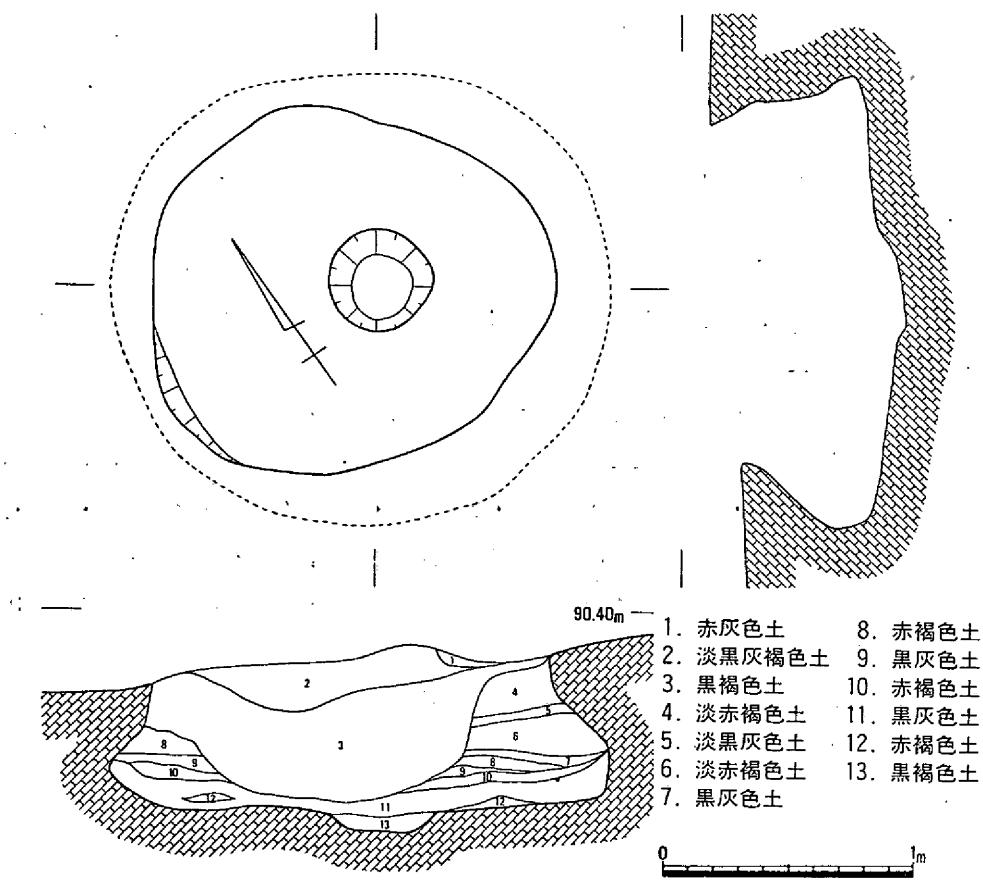
2711は器壁の厚い壺形土器または甕形土器の胴部破片である。頸部は内外面ともヨコナデを施しているが、胴部の内面は粗いヘラケズリを行っている。

2312~2314は鉢形土器である。2313と2314は平底を呈し、胎土に水漉粘土を使用している。どちらも器表面が剥離して、調整が不明である。

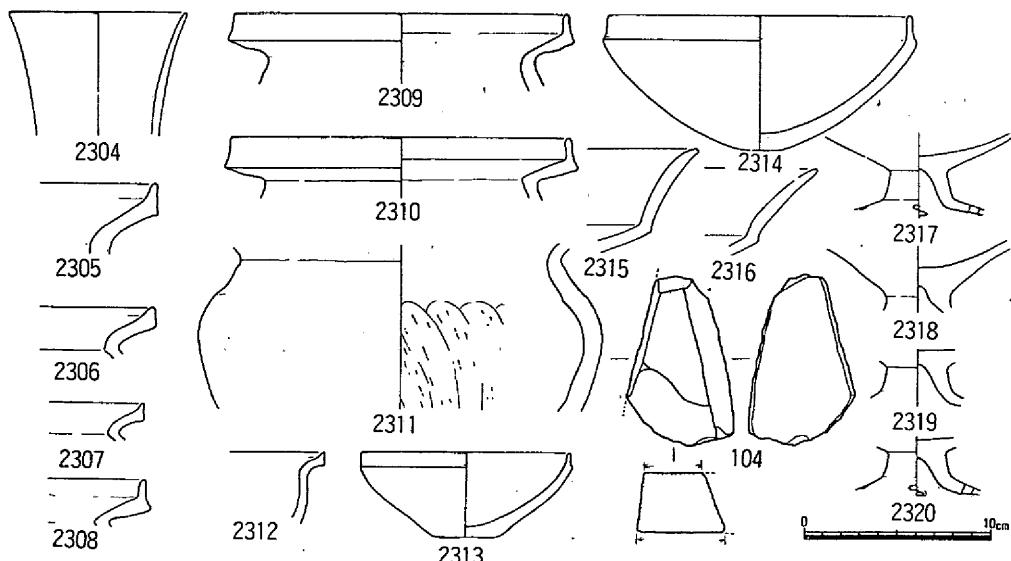
2315~2320は、短脚を呈する高杯形土器の杯部と脚部の小破片である。器表面の調整は不明であるが、いずれも水漉粘土を使用して赤褐色を呈している。

これらの土器は小破片のものが多く、器表面の調整が不明である。器形の特徴から推定すれば、奥・後・Ⅲの古相または奥・後・Ⅳの新相に比定されるであろう。

奥坂遺跡



第291図 No.158 袋状土壙 (1/30)



第292図 No.158 袋状土壙出土遺物 (1/4)

(4) 土器溜り

No. 160 土器溜り (第294~298図)

Y-24の南隅で検出した土器溜りである。No.156住居址の北側緩斜面に位置し、多量の土器が出土した。発掘調査の段階では住居址や土壤が存在する可能性が推定されたが、精査したにもかかわらず遺構は検出できなかった。

2321~2360の多量の土器は、「長頸壺」と呼ばれる壺形土器の口縁部から頸部の破片である。残存状態が良好な大きい破片で、器面に施された調整が明瞭に観察できる。斜め上方へ大きく張り出した口縁の端部は、上下に拡張して外面に浅い窪みや数条の凹線が認められる。口縁端部は全体にヨコナデを施しているが、外面の口縁部から頸部にかけては縦方向のハケメを施しているものが多く、縦方向のヘラミガキを行っているものも認められる。内面の口縁部から頸部にかけてはヨコナデを施しているものが多く、横方向のハケメやヘラミガキが認められるものも存在する。外面の頸部には、縦方向のハケメの上面に螺旋状に描かれた凹線が存在するのが一般で、内面の頸部には横方向のナデまたはヘラケズリを行っている。

2361~2374は、器壁の厚い壺形土器または甕形土器の口縁部破片である。口縁端部の外面には浅い窪みまたは凹線が認められ、全体にヨコナデを行っている。外面の胴部は縦方向のナデまたはヘラミガキを施し、内面は横方向の粗いヘラミガキを行っている。

2375~2383も壺形土器または甕形土器の口縁部であるが、特殊な形態を呈している。

2384は鉢形土器の底部である。器壁が比較的厚く、平底を呈している。内外面とも全体に縦方向のヘラミガキを施しているが、内面の痕跡は外面よりも幅が広くなっている。

2385~2399は、平底を呈する壺形土器または甕形土器の底部である。外面は縦方向のハケメまたはヘラミガキを施し、内面は、縦方向は粗いヘラケズリを行っている。

2400は完形で小型の鉢形土器である。径5.6cm・器高6.4cm・胴部最大径5.9cmであった。口縁部は全体にヨコナデを施しているが、胴部は器表面が磨減して調整が不明である。

2401~2444は、甕形土器の口縁部である。口縁部の外面には凹線または浅い窪みが認められるが、2442~2444の口縁端部は丸く仕上げている。

2445から2451は、鉢形土器の口縁部である。器壁が厚くて大型のものと、口径が16~18cmの小型のものが認められる。

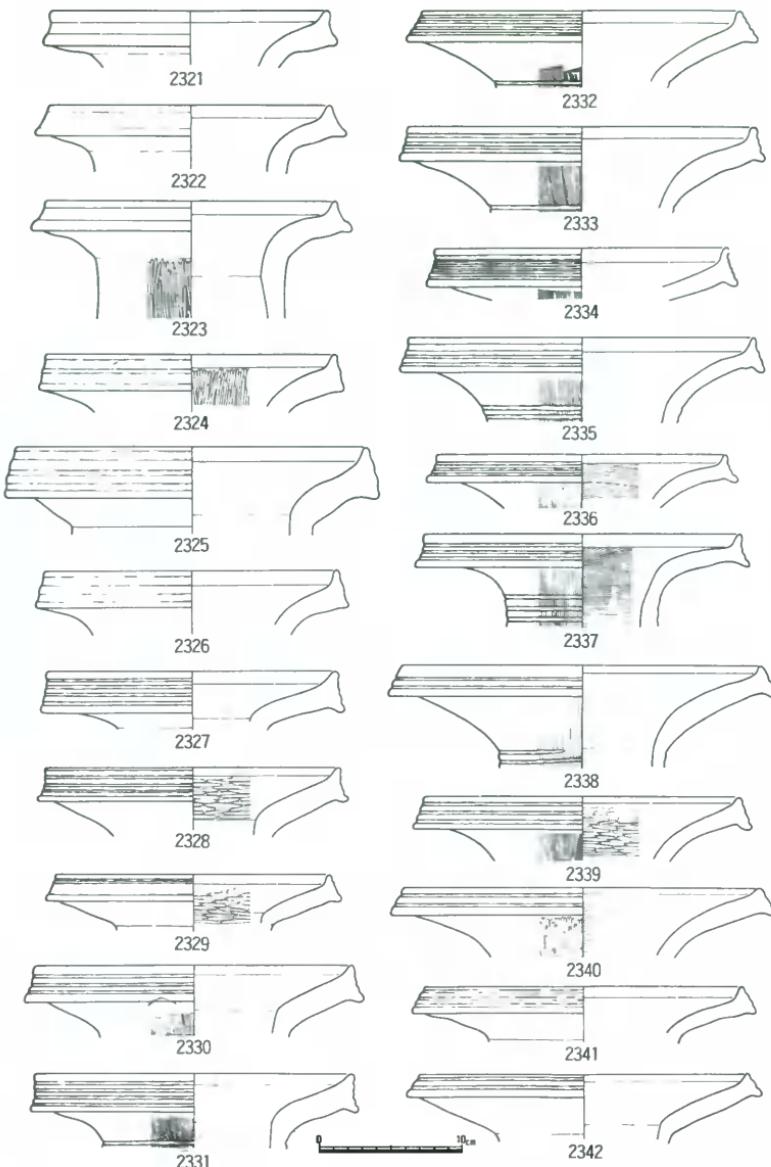
2452~2469は、高杯形土器の杯部と脚部である。脚部の形態には短脚のものが多いが、脚端部に立ち上がりが認められるものや長脚のものも存在する。

2470~2475は、器台形土器の口縁部と筒部である。口縁端部と筒部の外面には、凹線が認められる。筒部に施された透し穴には、長方形のものや円形のものと存在する。

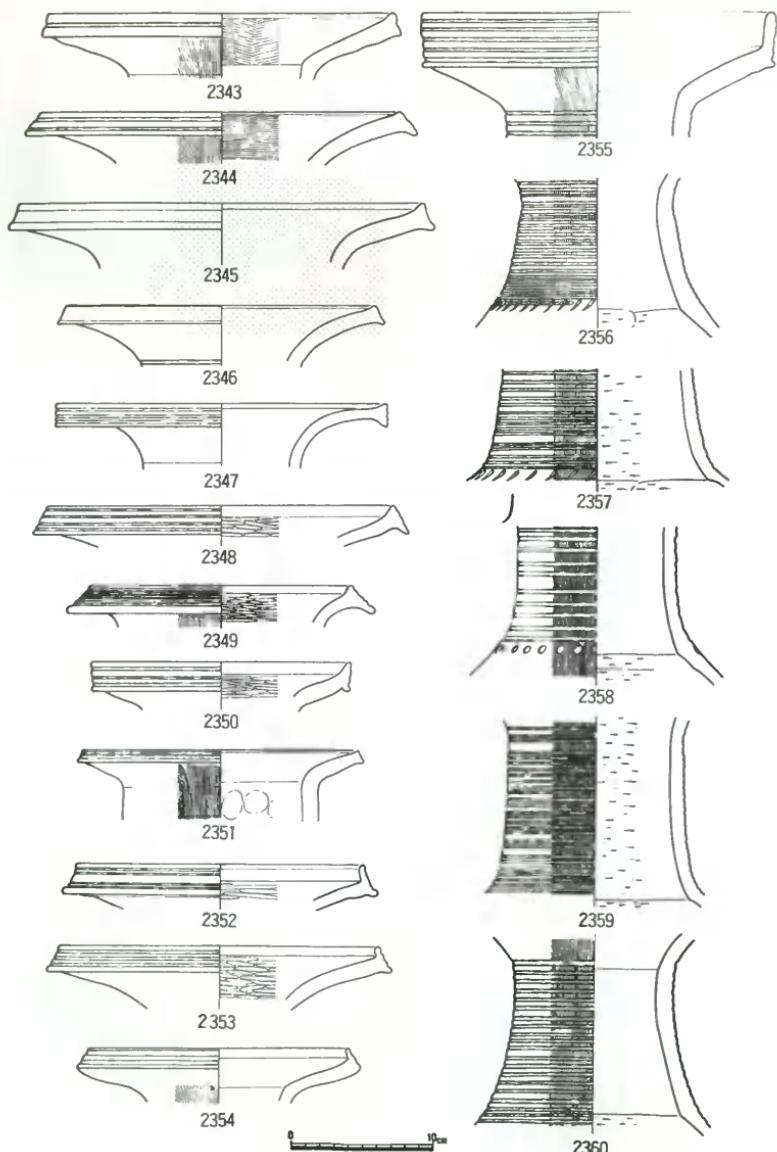
これらの土器は、奥・後・Iから奥・古・Iのものが混在している。

(福田)

奥坂遺跡

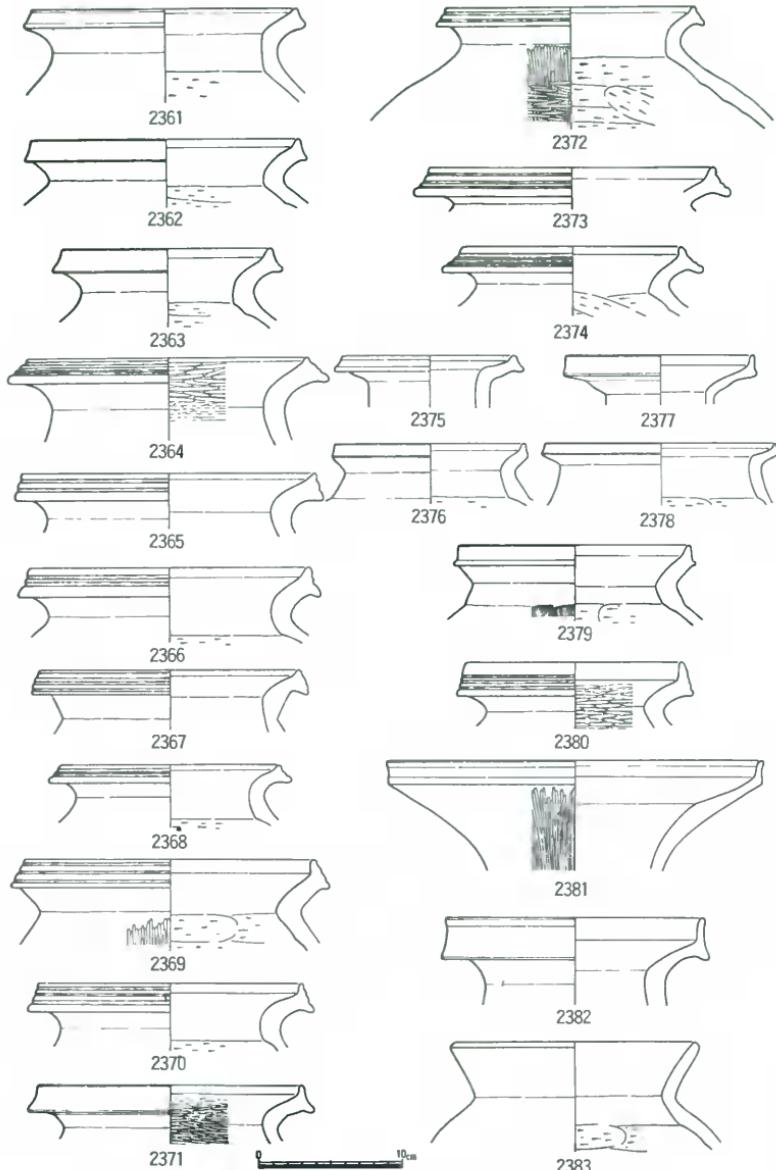


第293図 No. 160 土器溜り出土遺物 (1) (1/4)

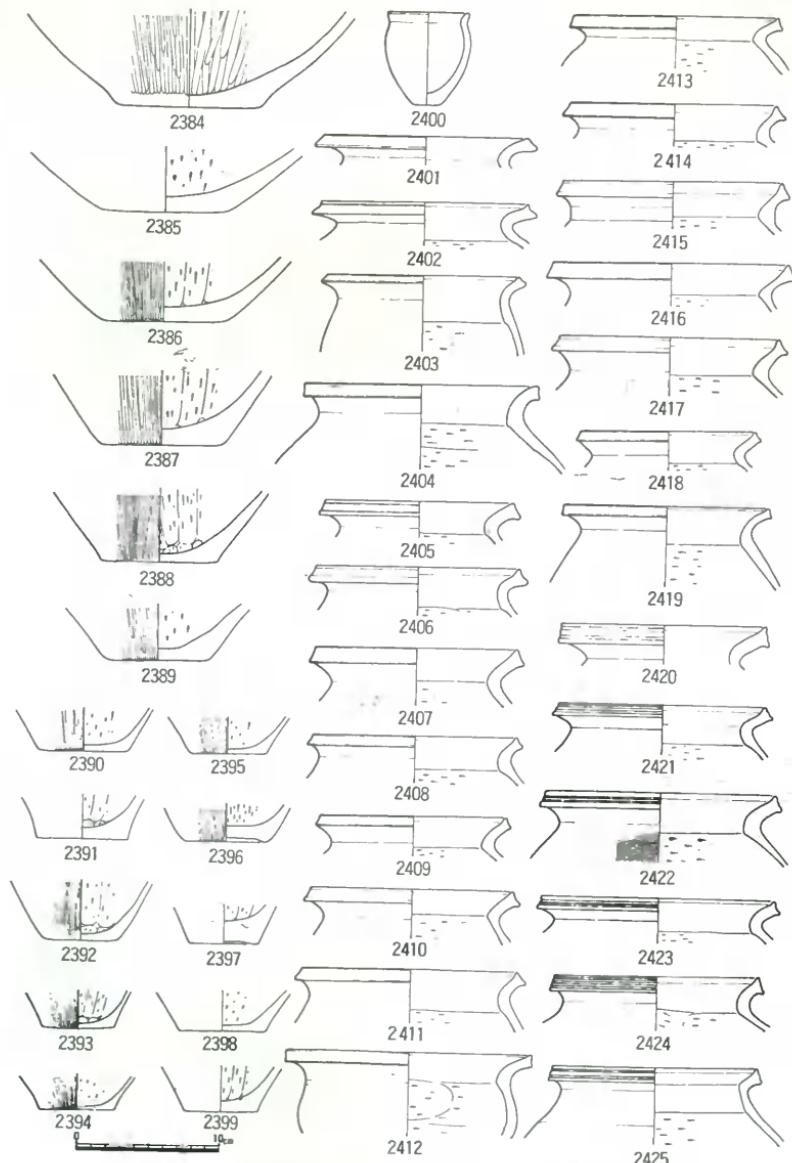


第294図 No. 160 土器濁り出土遺物 (2) (1/4)

奥坂遺跡

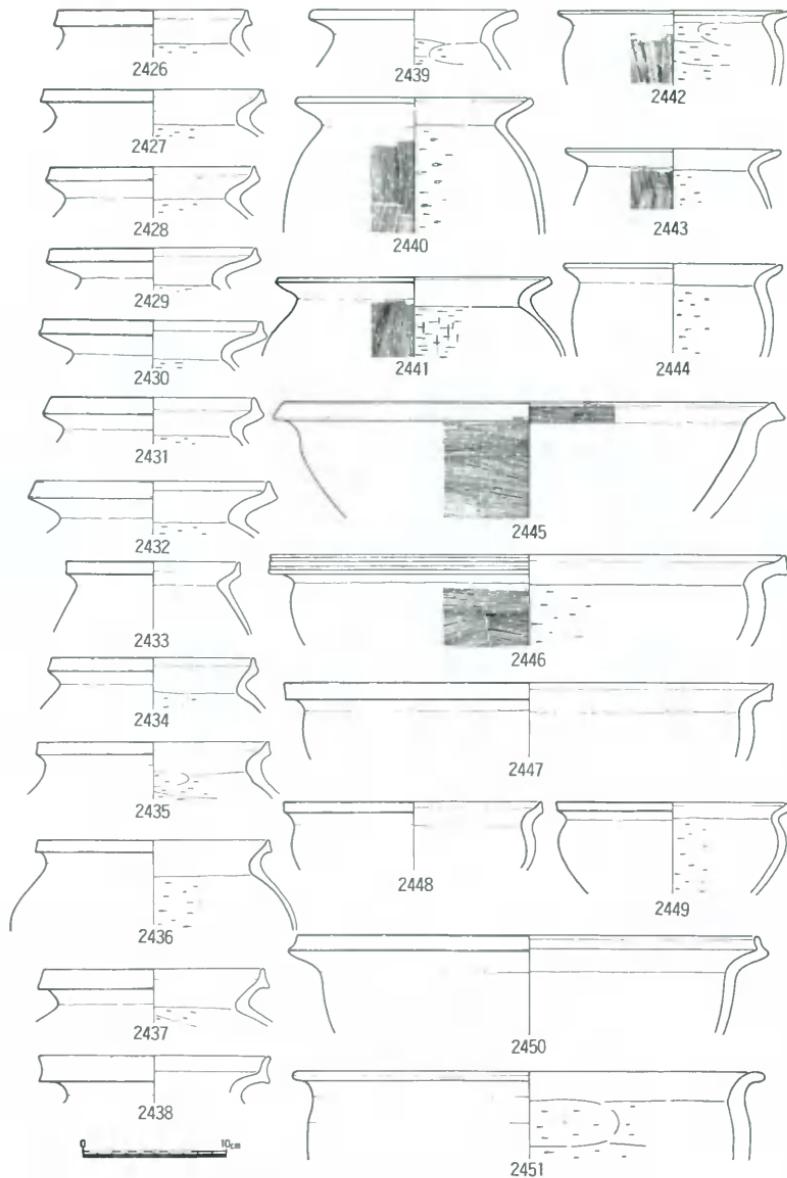


第295図 No. 160 土器溜り出土遺物 (3) (1/4)



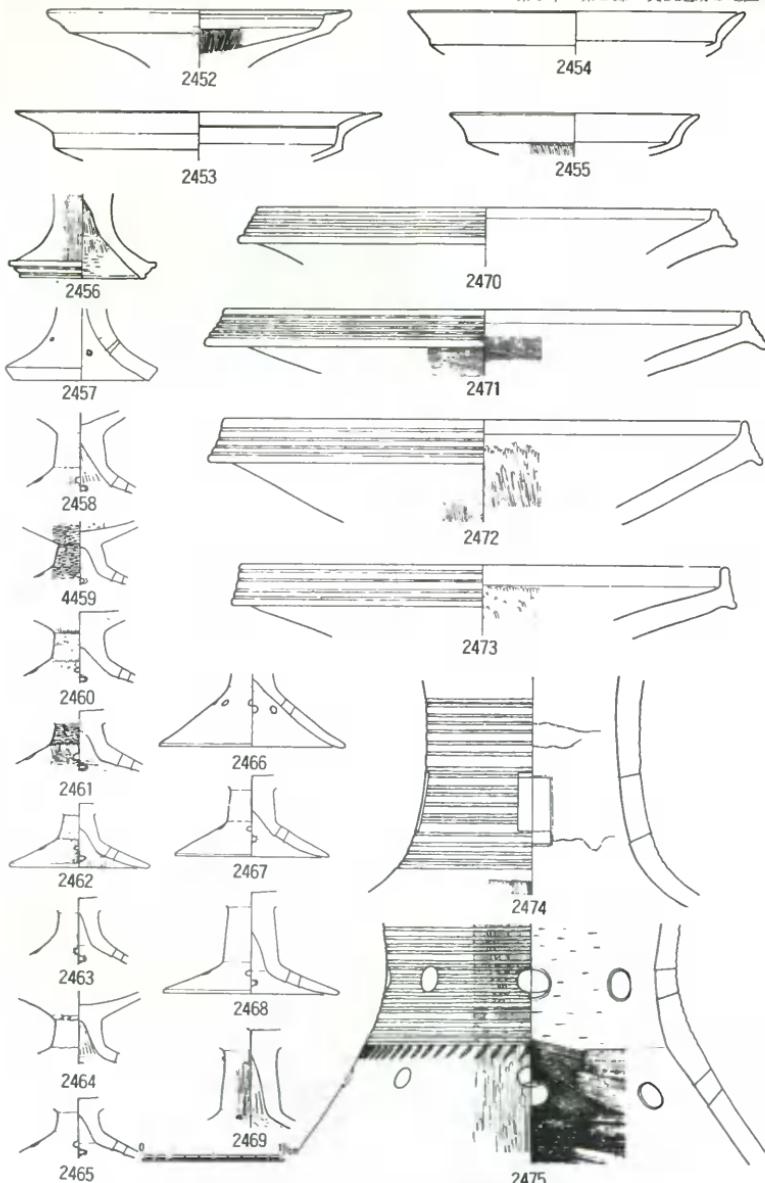
第296図 No. 160土器滴り出土遺物（4）(1/4)

奥坂遺跡



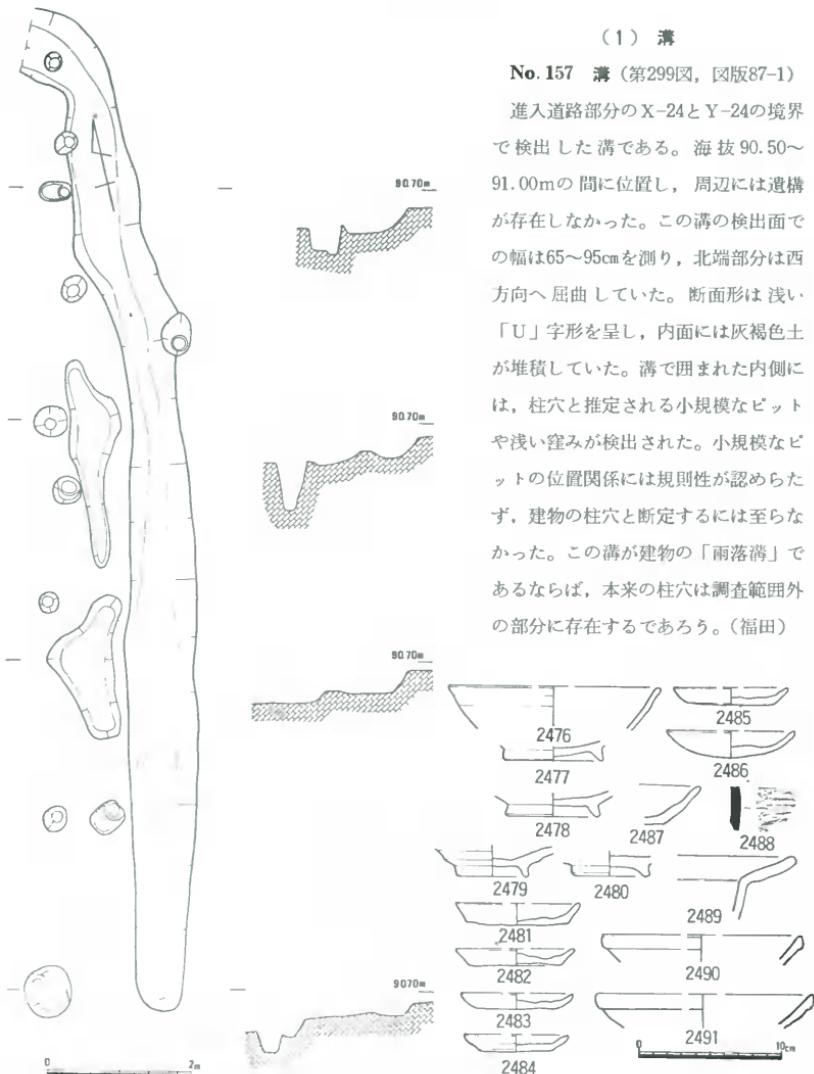
第297図 No. 160土器溜り出土遺物(5)(1/4)

第5章 第2節 奥坂遺跡B地区



第298図 No. 160 土器窯り出土遺物(6) (1/4)

3. 中世の遺構・遺物



第299図 No. 157 溝 (1/80)・出土遺物 (1/4)

表-11 奥坂遺跡遺構一覽表

番号	遺構	時期	番号	遺構	時期	番号	遺構	時期	番号	遺構	時期
1	住居址	奥・後・II	41	住居址	奥・古・II	81	袋状土壙	奥・後・IV	121	柱穴列	—
2	住居址	奥・後・III	42	柱穴列	—	82	袋状土壙	奥・古・I	122	袋状土壙	奥・後・IV
3	住居址	奥・後・IV	43	建物	中世	83	土壙	—	123	住居址	奥・中・III
4	住居址	奥・後・IV	44	袋状土壙	奥・後・III	84	土壙	—	124	建物	中世
5	袋状土壙	奥・後・IV	45	住居址	奥・後・III	85	段状遺構	中世	125	土壙	—
6	土壙	奥・後・III	46	住居址	奥・古・II	86	段状遺構	中世	126	溝状土壙	奥・中・III
7	袋状土壙	奥・後・IV	47	住居址	奥・古・II	87	住居址	奥・後・I	127	土壙	奥・後・III
8	土壙	奥・後・II	48	袋状土壙	奥・後・IV	88	段状遺構	中世	128	土壙	奥・後・III
9	土壙	奥・後・III	49	住居址	奥・中・III	89	集石遺構	中世	129	土壙	奥・中・III
10	袋状土壙	奥・後・VI	50	住居址	奥・後・IV	90	段状遺構	中世	130	土壙	奥・中・III
11	溝	奥・後・II	51	柱穴列	中世	91	袋状土壙	奥・後・III	131	土壙	奥・後・III
12	溝	奥・後・II	52	袋状土壙	奥・後・IV	92	段状遺構	中世	132	袋状土壙	奥・後・IV
13	住居址	奥・後・III	53	建物	—	93	建物	奥・後・II	133	土壙	—
14	土壙	—	54	土壙	—	94	住居址	奥・後・I	134	土壙	—
15	溝	奥・後・III	55	住居址	奥・古・II	95	住居址	奥・後・II	135	溝	奥・後・II
16	土壙	奥・後・III	56	土壙	奥・後・III	96	住居址	—	136	土壙	奥・後・III
17	住居址	奥・後・III	57	袋状土壙	奥・後・III	97	住居址	—	137	土壙	—
18	住居址	奥・後・III	58	土壙	奥・後・III	98	土壙	奥・後・II	138	袋状土壙	奥・後・VI
19	溝	中世	59	土壙	奥・後・III	99	袋状土壙	奥・後・IV	139	溝	中世
20	住居址	奥・後・IV	60	建物	—	100	土壙	奥・後・III	140	袋状土壙	奥・後・IV
21	住居址	奥・後・II	61	建物	—	101	住居址	奥・後・II	141	住居址	奥・後・II
22	住居址	奥・後・III	62	住居址	奥・後・III	102	袋状土壙	奥・後・III	142	溝	中世
23	住居址	奥・後・IV	63	建物	中世	103	袋状土壙	奥・後・IV	143	建物	奥・中・III
24	住居址	奥・後・II	64	住居址	奥・後・II	104	溝	奥・後・II	144	土壙	奥・後・IV
25	住居址	奥・後・II	65	土壙	—	105	建物	中世	145	袋状土壙	奥・後・III
26	土壙	奥・後・III	66	住居址	奥・中・III	106	土壙	—	146	袋状土壙	奥・後・III
27	建物	—	67	土壙	奥・後・III	107	土壙	—	147	土壙	奥・後・IV
28	建物	奥・後・II	68	土壙	奥・中・III	108	袋状土壙	奥・後・IV	148	袋状土壙	—
29	住居址	奥・古・I	69	建物	奥・中・III	109	袋状土壙	奥・後・IV	149	土壙	—
30	住居址	奥・古・II	70	段状遺構	奥・中・III	110	土壙	—	150	住居址	—
31	土壙	—	71	土壙	奥・中・III	111	袋状土壙	奥・後・III	151	住居址	奥・後・III
32	住居址	奥・中・III	72	建物	中世	112	土壙	奥・後・II	152	住居址	—
33	段状遺構	中世	73	土壙	奥・中・III	113	土壙	奥・後・II	153	住居址	奥・後・III
34	住居址	奥・後・II	74	土壙	奥・中・III	114	土壙	奥・後・II	154	住居址	奥・後・III
35	土壙	奥・後・II	75	土壙	—	115	土壙	奥・後・II	155	住居址	奥・後・III
36	住居址	奥・後・III	76	建物	奥・中・III	116	袋状土壙	奥・後・III	156	住居址	奥・後・IV
37	住居址	奥・後・III	77	建物	奥・中・III	117	袋状土壙	奥・後・III	157	溝	中世
38	建物	奥・後・III	78	住居址	奥・後・III	118	土壙	奥・後・II	158	袋状土壙	奥・後・III
39	住居址	奥・後・II	79	土壙	—	119	土壙	奥・後・I	159	建物	奥・後・I
40	溝	中世	80	住居址	奥・後・III	120	住居址	奥・後・II	160	土器溜り	奥・後・III

奥坂遺跡

表-12 奥坂遺跡竪穴式住居址一覧表

細別 住居址	形	規 模		床面積 (m ²)	主柱穴	柱 間 距 離 (北辺より)						
		長 軸	短 軸			P-1~P-2	P-2~P-3	P-3~P-4	P-4~P-5	P-5~P-6	P-6~P-7	P-7~P-8
32A	円 形	(500)	(460)	26.77	4	258	225	240	246	—	—	—
32B	円 形	(500)	(460)	—	4	—	—	—	—	—	—	—
49A	6 角 形	(670)	(600)	34.61	6	210	186	240	180	190	227	—
49B	6 角 形	(670)	(600)	—	6	—	—	—	—	—	—	—
66A	隅丸方形	600	545	327.00	4	265	240	267	285	—	—	—
66B	隅丸方形	517	503	26.00	4	243	222	274	238	—	—	—
66C	隅丸方形	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
66D	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
123	隅丸円形	(408)	(380)	13.58	4	204	180	198	187	—	—	—
87A	隅丸円形	360	(355)	10.40	4	141	142	142	146	—	—	—
95A	円 形	460	(370)	16.90	—	—	—	—	—	—	—	—
94A	不整円形	328	282	6.60	4	124	144	129	147	—	—	—
1	隅丸円形	455	(340)	17.19	4	217	180	201	185	—	—	—
13	円 形	640	640	32.15	6	266	247	228	268	238	257	—
120	円 形	420	403	12.31	4	186	193	208	197	—	—	—
39A	円 形	(450)	(305)	—	4	210	200	(—)	(—)	—	—	—
39B	円 形	400	(300)	—	4	—	—	—	—	—	—	—
64A	円 形	565	538	24.27	4	275	240	243	254	—	—	—
24A	円 形	880	(863)	26.22	10	242	210	210	285	235	200	210
24B	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
24C	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
24D	—	—	—	—	—	282	255	273	257	235	241	282
24E	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
24F	—	—	—	—	—	266	240	180	215	260	—	—
25A	円 形	820	780	29.40	7	275	276	246	285	315	355	—
25B	—	—	—	—	6	322	275	316	285	277	350	—
25C	円 形	640	600	—	6	233	242	183	240	240	230	—
101A	円 形	392	(392)	12.05	—	—	—	—	—	—	—	—
34	楕円形	(273)	265	6.69	4	138	138	116	135	—	—	—
17A	円 形	548	520	22.55	4	268	243	260	235	—	—	—
17B	円 形	587	520	—	—	—	—	—	—	—	—	—
18	円 形	(370)	(108)	14.79	—	—	—	—	—	—	—	—
3	不正円形	605	575	34.78	4	288	240	296	234	—	—	—
2	円 形	467	460	18.39	4	237	200	235	200	—	—	—
50A	隅丸長方形	424	346	14.67	—	—	—	—	—	—	—	—
50B	隅丸長方形	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
78A	—	—	—	—	(3)	—	—	—	—	—	—	—
78B	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
23A	円 形	930	(840)	69.65	8	290	247	248	253	298	270	247
23B	円 形	960	(868)	—	9	278	272	210	223	255	270	252
23C	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
36A	円 形	873	841	61.90	6	397	381	241	397	365	333	—
36B	円 形?	—	—	—	7	254	238	206	254	270	302	254
36C	円 形?	—	—	—	6	286	341	278	302	317	317	—
37A	円 形	1021	939	76.94	8	310	286	269	302	302	245	351

			中央穴(cm)			焼土		付属施設			時 期	備 考
P-8~P-9	P-9~P-10	P-10~P-1	形	幅	深さ	焼土	壌	ベッド 状遺構	貯藏穴	作業台石		
-	-	-	上方下円	53×40	44	○	-	-	-	-	奥・中・Ⅲ	
-	-	-	上方下円	53×40	54	○	-	-	-	-		
-	-	-	楕円形	57×52	34	-	-	-	-	-	奥・中・Ⅲ	中央穴より溝がのびる
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
-	-	-	楕円形	87×60	47	-	-	-	-	-	奥・中・Ⅲ	中央穴の東西両端に2柱穴を有する火災 小→大
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
-	-	-	楕円形	68×52	48	-	-	-	-	-	奥・中・Ⅲ	中央穴より外に溝がのびる
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	奥・後・I	
-	-	-	円形	32×33	36	○	-	-	-	-	14×12	奥・後・II
-	-	-	円形	43×40	26	-	-	-	-	-	奥・後・I	段状の遺構がつく 南側が出入口か?
-	-	-	上方円	48×43	46	-	-	-	-	33×22×12 ○	奥・後・II	
-	-	-	楕円形	65×55	72	-	-	-	-	27×22×28	奥・後・III	火災
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	奥・後・II	
-	-	-	円形	35×40	38	-	-	-	-	-	奥・後・I	出入口が付属
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
-	-	-	楕円形	87×60	47	-	-	-	-	-	奥・後・II	中央穴の東西両端に2柱穴を有する火災 小→大
226	300	275	不整円形	103×85	67	-	-	-	-	50×40	奥・後・II	火災
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0		
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0		
-	-	-	楕丸 長方形	90×50	-	-	-	-	-	-	0	
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	
-	-	-	楕円形	107×50	-	-	-	-	-	-	0	
-	-	-	楕円形	(65)×58	77	-	-	-	-	-	0	火災
-	-	-	楕円形	61×53	65	-	-	-	-	-	0	奥・後・II 火災 小→大→大
40	-	-	楕円形	-	-	-	-	-	-	-	0	- -
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	
-	-	-	-	-	-	○	-	-	-	40×25×20 ○	奥・後・II	中央穴の南北両端に柱穴を有する
-	-	-	不整円形	60×72	30	-	-	-	-	40×32 ○	奥・後・III	火災
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	奥・後・III	
-	-	-	長方形 楕円形	61×42 46×32	45	-	-	-	-	-	奥・後・III	火災 建て替えなし
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	No2A南辺主柱穴を南に拡張	
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	奥・後・III	
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	奥・後・III	
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	奥・後・III	
269	-	-	上楕円 下円	160×120	66	-	-	-	-	-	奥・後・III	柱痕あり 4本の棟上げ柱
240	224	-	-	-	-	-	-	-	-	-		可能性あり まとまらず
-	-	-	円形	71×63	63	-	-	-	-	-	奥・後・III	4本の棟上げ柱
-	-	-	円形	71×64	50	-	-	-	-	-		
-	-	-	円形	75×64	27	-	-	-	-	-		
286	-	-	楕円	82×65	65	-	-	○	-	-	奥・後・III	

奥坂遺跡

細別 住居 址	形	規 模		床面積 (m ²)	主柱穴	柱 間 距 離 (北辺より)						
		長 軸	短 軸			P-1~P-2	P-2~P-3	P-3~P-4	P-4~P-5	P-5~P-6	P-6~P-7	P-7~P-8
37B	円 形	841	794	52.53	7	294	278	254	270	317	262	254
37C	円 形	735	730	41.97	6	278	310	270	325	302	246	—
37D	円 形	698	675	60.16	7	230	222	206	238	198	206	214
37E	円 形	587	556	28.64	4	238	222	246	238	—	—	—
20A		(660)	660	34.19	6	235	250	207	250	220	270	—
20B	円 形	680	650	33.37	7	238	226	200	210	220	200	—
20C	円 形	755	750	44.39	8	240	215	230	215	245	195	205
20D	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
4A	円 形	960	890	73.86	9	320	341	228	241	221	215	195
4B	円 形	880	—	—	9	200	220	220	260	250	220	196
4C	円 形	—	—	60.79	8	260	260	248	170	220	200	230
4D	円 形	—	—	—	8	195	195	170	220	200	205	240
4E	円 形	—	—	—	4	266	260	246	240	—	—	—
4F	円 形	—	—	—	10	340	288	240	266	313	255	260
29A	—	—	—	66.73	—	—	—	—	—	—	—	—
29B	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
30A	隅丸方形	(580)	640	—	5	332	334	334	326	255	—	—
30B	—	(420)	486	—	4	308	280	280	285	—	—	—
41	不 明	(400)	(210)	—	—	—	—	—	—	—	—	—
45A	—	—	—	42.75	—	—	—	—	—	—	—	—
45B	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
46A	円 形	470	470	17.34	7	335	280	240	258	288	258	253
46B	円 形	—	—	—	7	345	235	283	265	300	300	250
46C	円 形	—	—	—	6	320	266	272	260	280	280	—
46D	円 形	826	800	—	—	—	—	—	—	—	—	—
47A	方 形	600	600	36.00	4	270	280	311	277	—	—	—
47B	方 形	600	546	32.76	4	—	—	—	—	—	—	—
47C	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
55A	方 形	540	(350)	—	(2)	—	—	200	—	—	—	—
55B	方 形	448	(350)	—	(2)	—	—	200	—	—	—	—
152	隅丸円形	(350)	380	—	4	182	178	182	195	—	—	—
151	円 形	402	397	11.94	4	193	194	192	205	—	—	—
155A	円 形	612	63	26.41	6	260	218	293	223	258	282	—
155B	円 形	533	513	21.23	5	262	205	241	263	262	—	—
155C	円 形	485	485	17.34	4	240	258	220	280	—	—	—
155D	円 形	453	450	15.20	4	280	270	270	270	—	—	—
155E	円 形	(500)	(500)	—	5	250	313	268	296	267	—	—
154	円 形	(615)	(200)	28.45	(1)	—	—	—	—	—	—	—
153A	円 形	(570)	(340)	59.96	(2)	260	—	—	—	—	—	—
153B	円 形	(441)	(270)	—	(2)	190	—	—	—	—	—	—
154C	円 形	(360)	(220)	—	—	—	—	—	—	—	—	—
154D	円 形	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
156A	円 形	666	(600)	29.21	4	280	300	250	300	—	—	—
156B	円 形	764	(720)	38.47	6	270	300	280	265	250	285	—

			中央穴(cm)			焼 土			付 屬 施 設			時 期	備 考
P-8~P-9	P-9~P-10	P-10~P-1	形	幅	深さ	焼 土	壌	ベッド 状遺構	貯藏穴	作業台石			
-	-	-	上方下円	175×111 32	64	-	-	-	-	-			
-	-	-	隅丸方形	95×94	-	-	-	-	-	-			
-	-	-	隅丸方形	80×79	-	-	-	-	-	-			
-	-	-	隅丸方形	80×79	56		-	-	-	-			
-	-	-	楕円形	65×55	70	-	-	-	-	-	奥・後・III	短脚	
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		小→大	
-	-	-	円 形	50×50	-	-	-	-	-	-			
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		壁体溝はあるが不明	
226	303	-	楕円形	55×40	-	-	-	-	-	-	奥・後・III		
243	275	-	円 形	55×55	-	-	-	-	-	-			
305	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
210	220	280	-	-	-	-	-	-	-	-			
-	-	-	隅丸長方形	195×90	73	-	-	○	-	-	奥・古・I	火災	
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
-	-	-	隅丸長方形	90×85	60	○	-	-	-	-	奥・古・II		
-	-	-	隅丸長方形	65×43	53	-	-	-	-	-			
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		大半削平を受ける	
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	奥・後・III		
-	-	-	楕円形	165×90	119	-	-	-	-	-	奥・古・I	火災	
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
-	-	-	楕円形	66×48	10	-	-	-	○	-	奥・古・II	No46住居址を切る 火災	
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
-	-	-	-	-	-	-	-	○	45×29	-	奥・古・II	中央部に溝凹部(210×155)	
-	-	-	-	-	-	-	-	○	37×29	-			
-	-	-	楕円形	86×61	16	-	-	-	35×30 24	-			
-	-	-	隅丸長方形	90×55	6	-	-	-	39×12	-		火災	
-	-	-	上方下円	100×98 63×58	58	-	-	-	45×40	-		中央穴南側に浅い土壤	
-	-	-	楕円形	58×46	43	-	-	-	-	-			
-	-	-	円 形	45×34	63	-	-	-	-	-			
-	-	-	楕円形	58×46	43	-	-	-	-	-			
-	-	-	楕円形	156×70	7	-	-	-	-	-			
-	-	-	-	-	-	-	-	○	45×20×8	-			
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	用地外に		
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
-	-	-	楕円形	110×90 85×37	53	○	-	-	-	-	奥・後・IV	壁体溝に沿って小穴	
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	奥・後・III		

奥坂遺跡

表-13 奥坂遺跡袋状土壙一覧表 単位(cm)

番号	口部直径	下底直径	底面形態	深さ	土器の有無	時期	備考
5	145×125	174×160	楕円形	120	○	奥・後・IV	○東端に土器が集中する ○砂崎計状の堆積
7	113×101	150×140	円形	211	○	奥・後・IV	○2階状につながる
10	125×115	192×168	楕円形	113	○	奥・後・IV	○底部段状になる
44	260×144	250×170	隅丸長方形	37	△	奥・後・III	○他の袋状土壙と異なる
48	115×90	140×136	円形	110	○	奥・後・IV	
52	213×200	180×175	円形	164	○	奥・後・IV	○埋没後に土壤を掘り土器を放棄
57	155×119	155×120	長方形	41	△	奥・後・III	○他の袋状土壙と異なる
81	245×203	203×203	隅丸方形	205	◎	奥・後・IV	○土器は上層に多く出土する
82	135×122	203×185	円形	254	◎	奥・古・I	○ハイガイ② ○カキ ○魚骨 ○鳥骨
91	254×233	290×256	楕円形	138	○	奥・後・III	○No.3住居址床面下
99	186×158	209×196	楕円形	24	◎	奥・後・IV	○もっとも深い袋状土壤
102	93×87	143×130	楕円形	95	○	奥・後・III	○土器は上層に多く出土する
103	115×108	153×150	正円形	90	○	奥・後・IV	○土器は上層に多く出土する
108	100×97	123×108	楕円形	107	△	奥・後・IV	
109	138×130	184×167	不整円形	193	◎	奥・後・IV	○ハイガイ ○カキ ○魚骨 ○粘土塊
111	92×85	90×85	円形	31	○	奥・後・III	
116	193×151	160×112	楕円形	91	△	奥・後・III	
117	112×103	110×82	楕円形	55	△	奥・後・III	
122	129×102	130×126	隅丸長方形	55	△	奥・後・IV	○底部段状
132	79×74	84×81	円形	124	○	奥・後・IV	
138	148×86	177×145	楕円形	141	◎	奥・後・IV	
140	165×143	176×173	円形	226	◎	奥・後・IV	○ハイガイ ○カキ(多) ○魚骨 ○オキシジミ ○ヤマトシジミ
145	97×92	120×114	不整円形	123	△	奥・後・III	
146	100×87	115×110	円形	83	△	奥・後・III	○砥石
148	89×(83)	100×(92)	隅丸方形	43	△	—	
158	157×148	196×185	円形	60	△	奥・後・III	○埋没後再び土壤を掘る

表-14 奥坂遺跡建物一覧表

建物	規模	柱間寸法(cm)		桁行(cm)	梁間(cm)	面積(m ²)	棟方向	柱穴掘方	時期	備考
		桁	梁							
77	2×1	223~245	247~268	471	268	12.62	東西	円	奥・中・III	柱穴内土器・石器
69	1×1	403~405	240~242	405	242	9.80	東西	円	奥・中・III	No.70段状造構とセットか
143	1×1	449~450	253~270	450	270	12.15	東西	円	奥・中・III	
76	1×1	365~373	270~285	373	270	10.07	南北	円	奥・中・III	
93	4×1	120~170	300	566	300	16.98	東西	円	不明	斜面上部に溝をもつ
28	2×1	252~285	324~332	564	332	18.72	東西	円	不明	
38	2×1	293~300	245~245	600	245	14.70	南東・北西	円	不明	
53	1×1	250	243~247	250	243	6.07	東西	円	不明	
60	1×1	269~295	249~279	295	279	8.23	南東・北西	円	不明	
27	3×1	220~243	320~330	713	330	23.52	南北	円	不明	
159	2×1	270~290	260	560	260	14.56	東西	円	奥・後・I	

表-15 天神坂・奥坂遺跡石器一覧表

単位(mm)

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	備考	時期
7	1	ナイフ形石器	B-1	No2 住居址	サヌカイト	18.85	47.4	9.8	8.03	旧石器	
10	2	砥石	B-1	No2 住居址	流紋岩	74.4	34.4	34.4	150.02	天・後・II	
10	3	石鏃	B-1	No2 住居址	サヌカイト	18.5	14.2	4.3	1.06	天・後・II	
10	4	石鏃	B-1	No2 住居址	サヌカイト	29.5	13.5	3.4	1.67	天・後・II	
11	5	石鏃	C-1	No5 住居址	(細粒)花崗岩	50.5	42.3	34.4	99.24	天・後・II	
14	6	叩き石	E-2	No8 住居址	花崗岩	115.8	116.1	32.5	720.00	天・後・II	
16	7	石核	E-3	No9 住居址	サヌカイト	55.7	76.7	29.6	131.90	作業台下	天・後・II
16	8	?	E-3	No9 住居址	サヌカイト	53.4	44.1	7.4	27.45		天・後・II
17	9	叩き石	E-3	No9 住居址	安山岩	132.6	125.7	38.6	1040.00		天・後・II
17	10	砥石	E-3	No9 住居址	砂岩	92.8	49.9	9.2	58.45		天・後・II
21	11	石斧	B-2	No10 土壙	砂岩	768.0	46.5	28.1	1288.50	覆土中	天・後・II
21	12	石斧	B-2	No10 土壙	砂岩	118.5	70.0	49.0	660.00	叢林叩き石?	天・後・II
21	13	石斧	D-3	No13 等高線	サヌカイト	45.1	29.7	8.1	11.10		
22	14	石槍	表	探査	玲岩	72.9	81.4	47.9	460.00		
23	15	叩き石	C-1	No3 住居址	花崗岩	88.3	69.5	63.0	550.00	天・古・I	
27	16	砥石	A-1	No1 住居址	凝灰岩	93.4	36.8	17.1	76.53	天・古・II	
27	17	砥石	A-1	No1 住居址	粘板岩	98.7	29.6	21.5	76.69	天・古・II	
28	18	石鏃	A-1	No1 住居址	サヌカイト	32.9	44.9	8.0	14.54	天・古・II	
28	19	スクレイバー	A-1	No1 住居址	サヌカイト	22.7	35.5	4.8	4.31	天・古・II	
28	20	スクレイバー	A-1	No1 住居址	サヌカイト	29.1	45.8	6.5	9.82	天・古・II	
28	21	スクレイバー	A-1	No1 住居址	サヌカイト	21.1	40.0	3.2	2.74	天・古・II	
28	22	スクレイバー	A-1	No1 住居址	サヌカイト	36.2	21.1	9.2	8.00	天・古・II	
28	23	スクレイバー	A-1	No1 住居址	サヌカイト	39.8	22.5	6.2	6.20	天・古・II	
28	24	スクレイバー	A-1	No1 住居址	サヌカイト	24.1	36.7	5.1	6.16	天・古・II	
28	25	石鏃	A-1	No1 住居址	サヌカイト	23.9	19.4	3.7	1.85	天・古・II	
64	26	石庵丁?	C-4	No49 住居址	サヌカイト	53.20	90.60	8.10	47.00	奥・中・III	
68	27	石庵丁	C-4	No66 住居址	サヌカイト	38.05	(59.85)	8.20	21.46	奥・中・III	
68	28	砥石	C-4	No66 住居址	流紋岩	73.15	37.15	26.85	67.11	奥・中・III	
68	29	砥石	C-4	No66 住居址	流紋岩	60.25	23.35	15.30	33.04	床面	奥・中・III
68	30	石鏃	C-4	No66 住居址	サヌカイト	36.40	23.15	3.45	2.67	奥・中・III	
68	31	石鏃	C-4	No66 住居址	サヌカイト	22.70	(16.20)	3.20	1.11	埋土未製品?	奥・中・III
68	32	石鏃	C-4	No66 住居址	サヌカイト	21.30	13.35	2.90	0.78	奥・中・III	
72	33	石鏃	B-5	No77 遺物	サヌカイト	27.25	15.60	3.30	1.23	未製品P-2	奥・中・III
78	34	石槍	B-4	No126 流紋岩	サヌカイト	82.25	34.80	10.15	24.03	奥・中・III	
86	35	石庵丁	B-4	No70 段状遺構	サヌカイト	43.45	101.25	10.10	55.05	奥・中・III	
87	36	叩き石	表	採	花崗岩	60.25	53.50	40.40	185.05		
87	37	石斧	表	採	玲岩	156.15	70.70	47.95	920.00	北東斜面	
87	38	石鏃	表	採	サヌカイト	33.95	21.35	3.60	2.86	4往南半製品	
87	39	石庵丁?	B-7	柱穴	サヌカイト	35.65	71.30	11.15	35.42	4往南	
87	40	?	B-7	柱穴	サヌカイト	63.35	81.00	13.45	61.27	P-204	
87	41	?	B-8	柱穴	サヌカイト	41.00	35.40	8.35	11.25		
87	42	スクレイバー	B-8	柱穴	サヌカイト	36.75	42.35	5.40	7.70	P-178	
87	43	砥石	表	採	流紋岩	66.00	25.75	19.70	65.47		
87	44	石鏃	表	採	サヌカイト	(48.10)	16.05	4.35	4.19	ポイントか?	
87	45	石庵丁	E-3	No96 住居址	サヌカイト	44.45	69.55	9.30	26.89		
88	46	砥石	G-2	No95 住居址	流紋岩	55.80	41.70	25.20	81.94	奥・後・II	
88	47	石斧	G-2	No95 住居址	房	114.85	69.15	49.80	680.00	奥・後・II	
89	48	石鏃	E-3	No141 住居址	サヌカイト	33.10	14.60	3.35	1.57	未製品?	奥・後・II
90	49	石鏃	F-2	No94 住居址	サヌカイト	22.20	10.60	2.95	0.66	奥・後・I	
94	50	叩き石	C-7	No13 住居址	石英閃緑岩	143.85	77.65	33.00	640.00	焼土床面	奥・後・III
95	51	石鏃	D-5	No39 住居址	サヌカイト	26.40	14.80	3.10	1.27	奥・後・I	
95	52	石鏃	D-5	No39 住居址	サヌカイト	38.40	18.35	4.85	3.33	奥・後・I	
100	53	石斧	C-6	No24 住居址	細粒閃緑岩	65.70	59.65	24.55	155.28	床面(貼床)	奥・後・II
100	54	石庵丁	C-6	No24 住居址	サヌカイト	(40.55)	(44.15)	9.00	19.05	奥・後・II	
100	55	スクレイバー?	C-6	No24 住居址	サヌカイト	(38.05)	(42.60)	(9.10)	14.55	上面	奥・後・II
100	56	石鏃	C-6	No24 住居址	サヌカイト	36.40	(20.65)	4.55	3.28	奥・後・II	
100	57	石鏃	C-6	No24 住居址	サヌカイト	(30.00)	13.70	4.70	2.55	床面(貼床)未製品	奥・後・II
100	58	?	C-6	No24 住居址	水晶	3.05	2.47	1.96	15.95	床面(貼床)	奥・後・II
105	59	砥石	B-6	No25 住居址	流紋岩	54.80	12.90	30.80	25.49	埋土	奥・後・II
110	60	?	F-2	No93 建物	サヌカイト	38.60	70.65	5.40	17.86	奥・後・II	
110	61	石鏃	F-2	No93 建物	サヌカイト	(16.75)	(15.40)	3.70	0.79	奥・後・II	
123	62	砥石	C-5	No35 土壙	頁岩	(51.45)	(35.25)	22.90	69.14	奥・後・II	
134	63	砥石	B-7	No17 住居址	半花崗岩	(98.10)	(49.30)	51.05	320.00	奥・後・III	
134	64	スクレイバー	B-7	No17 住居址	サヌカイト	(25.00)	(49.60)	(9.55)	9.64	覆土	奥・後・III
134	65	石鏃	B-7	No17 住居址	サヌカイト	(22.90)	15.90	3.50	1.41	覆土	奥・後・III
137	66	砥石	C-8	No3 住居址	流紋岩	119.40	66.40	53.15	470.00	奥・後・IV	
139	67	砥石	C-9	No50 住居址	流紋岩	79.95	37.40	20.75	58.88	覆土	奥・後・IV
139	68	砥石	C-9	No50 住居址	流紋岩	111.40	54.15	24.24	225.58	覆土	奥・後・IV
141	69	石包丁?	C-6	No23 住居址	サヌカイト	41.00	66.25	13.45	40.31	覆土	奥・後・IV
141	70	石鏃	C-6	No23 住居址	サヌカイト	33.25	24.30	4.95	3.63	覆土	奥・後・IV
141	71	石錐	C-6	No23 住居址	サヌカイト	(32.35)	11.90	3.95	1.35	覆土	奥・後・IV
144	72	スクレイバー	C-5	No37 住居址	サヌカイト	38.25	49.75	13.90	14.54	奥・後・IV	
144	73	旧石器の横長剥片?	C-5	No37 住居址	サヌカイト	22.25	(43.35)	7.10	5.98	奥・後・IV	
146	74	砥石	C-5	No36 住居址	流紋岩	135.35	49.30	51.90	460.00	奥・後・IV	
146	75	石斧	C-5	No36 住居址	花崗岩	63.20	74.85	49.75	340.00	奥・後・IV	

奥坂遺跡

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	縦大長	縦大幅	縦厚	重量(g)	備考	時期
146	76	叩き石	C-5	No36 住居址	細粒花崗岩	102.85	58.00	44.75	440.00	柱穴埋形脛口埋土内	奥・後・III
146	77	石庖丁	C-5	No36 住居址	砂岩(變岩)	36.40	89.80	8.15	42.95		奥・後・III
146	78	砥	C-5	No36 住居址	流紋岩	126.50	114.30	28.45	580.00		奥・後・III
146	79	?	C-5	No36 住居址	サヌカイト	59.00	54.65	16.40	68.53	スクレイバー? P-3	奥・後・III
149	80	石斧	B-5	No62 住居址	(細粒)閃綠岩	71.10	53.00	31.25	186.67	中央ピット下層	奥・後・III
152	81	砥	B-7	No20 住居址	流紋岩	151.85	53.45	53.20	440.00		奥・後・IV
152	82	砥	B-7	No20 住居址	流紋岩	73.15	44.10	34.20	194.50		奥・後・IV
162	83	?	B-8	No 4 住居址	サヌカイト	29.55	93.85	11.80	47.10	半磨製表様	奥・後・IV
162	84	石斧	B-8	No 4 住居址	サヌカイト	33.95	19.00	3.85	2.94	表土	奥・後・IV
162	85	砥	B-8	No 4 住居址	流紋岩	9.35	8.51	3.02	283.60		奥・後・IV
162	86	石斧	B-8	No 4 住居址	塊岩	47.23	64.15	45.00	272.04		奥・後・IV
162	87	砥	B-8	No 4 住居址	流紋岩	132.90	134.60	54.30	1200.00		奥・後・IV
162	88	叩き石	B-8	No 4 住居址	結晶雲母岩	16.95	26.80	34.34	243.70	石片から転用	奥・後・IV
162	89	砥	B-8	No 4 住居址	流紋岩	87.05	47.00	56.05	209.34		奥・後・IV
162	90	石錐	B-8	No 4 住居址	花崗斑岩	56.95	49.45	42.90	205.13	床面	奥・後・IV
162	91	砥	D-5	No146 袋状土壤	流紋岩	174.00	174.00	78.00	3040.00		奥・後・III
199	92	砥	B-4	No138 袋状土壤	流紋岩	76.60	61.20	36.10	170.08		奥・後・IV
199	93	石錐	B-4	No138 袋状土壤	花崗斑岩	60.00	68.00	37.00	188.00		奥・後・IV
207	94	スクレイパー	C-4	No52 袋状土壤	サヌカイト	55.75	24.20	4.80	6.13		奥・後・IV
227	95	砥	C-8	No122 袋状土壤	玄武岩	128.00	98.80	64.90	900.00		奥・後・IV
243	96	叩き石	C-5	No29 住居址	石英斑岩	88.55	74.90	53.95	500.00		奥・古・I
244	97	叩き石 or 砥石	D-6	No30 住居址	花崗斑岩	229.00	211.00	117.35	6280.00		奥・古・II
250	98	叩き石	C-4	No47 住居址	石英斑岩	123.80	89.00	74.80	1230.00*		奥・古・II
260	99	砥	A-4	No63 建物	流紋岩	88.95	23.80	29.70	97.00	床面	中世
263	100	石錐	B-6	No19 溝	花崗斑岩	74.55	53.75	60.04	360.00	下層	中世
279	101	砥	X-24	No154 住居址	流紋岩	(172.00)	93.90	51.70	990.00		奥・後・III
279	102	叩き石	X-24	No154 住居址	花崗斑岩	145.90	60.00	40.90	460.00	表土	奥・後・III
281	103	石錐	X-25	No156 住居址	(細粒)花崗岩	50.10	43.50	37.20	113.64	表土	奥・後・IV
292	104	砥	X-22	No158 袋状土壤	流紋岩	86.80	56.20	33.60	222.02		奥・後・III

表-16 天神坂・奥坂遺跡、新屋敷古墳金属器一覧表

図 番号	遺 物	出土地区	遺 構	材 質	最 大 長 (cm)	最 大 幅 (cm)	最 大 厚 (cm)	重 量 (g)	備 考	時 期
17 1	手 斧	E - 3	No.9 住居址	鉄	5.14	4.25	0.85	40.84		天・後・II
17 2	ノミ状工具	E - 3	No.9 住居址	鉄	7.13	1.52	0.88	31.50		天・後・II
17 3	鉄 鎌	E - 3	No.9 住居址	鉄	4.20	1.61	0.31	4.53		天・後・II
102 4	鎌	B - 6	No.25 住居址	鉄	10.47	1.66	0.53	63.10	床面	奥・後・II
134 5	?	B - 7	No.17 住居址	鉄	3.74	3.20	0.77	20.32	覆土	奥・後・III
134 6	?	B - 7	No.17 住居址	鉄	6.95	1.59	0.81	37.80	中央ピット	奥・後・III
137 7	摘 鎌	C - 8	No.3 住居址	鉄	4.35	2.12	0.59	9.44		奥・後・III
141 8	?	C - 6	No.23 住居址	鉄	7.20	1.76	0.79	45.50	床面	奥・後・III
152 9	?	B - 6	No.20 住居址	鉄	2.98	0.98	0.65	3.76		奥・後・III
162 10	?	C - 8	No.4 住居址	鉄	10.19	1.27	0.52	19.20	覆土上層	奥・後・III
162 11	?	C - 8	No.4 住居址	鉄	2.47	1.79	0.69	8.40		奥・後・III
162 12	?	C - 8	No.4 住居址	鉄	4.86	1.00	0.68	9.38		奥・後・III
162 13	?	C - 8	No.4 住居址	鉄	3.56	0.72	0.35	2.23		奥・後・III
162 14		C - 8	No.4 住居址	鉄	3.90	1.10	0.75	6.20		奥・後・III
199 15		B - 4	No.138 袋状土壙	鉄	9.70	1.00	0.41	11.30		奥・後・IV
208 16	?	C - 4	No.52 袋状土壙	鉄	9.20	1.25	0.50	10.70		奥・後・IV
240 17	短 剣	C - 5	No.140 袋状土壙	鉄	9.95	2.22	0.425	20.71		奥・後・IV
240 18		C - 5	No.140 袋状土壙	鉄	6.10	0.80	0.45	7.30		奥・後・IV
245 19	劍 ?	E - 6	No.41 住居址	鉄	10.25	2.43	0.505	20.25	上半分は欠損	奥・古・I
247 20	?	C - 4	No.46 住居址	鉄	5.08	1.50	0.53	13.35		奥・古・I
	鎌	C - 8	No.4 住居址	鉄	3.215	1.94	0.50	7.05	表面	奥・後・III
		C - 9	No.50 住居址	鉄	4.57	1.02	0.74	6.20		奥・後・III
305 21	釘		古 墳	鉄	64.40	6.60	4.55	10.34		
305 22	釘		古 墳	鉄	76.90	4.95	3.65	3.45		
305 23	釘		古 墳	鉄	76.70	5.10	4.50	5.40	床面出土	
305 24	釘		古 墳	鉄	72.25	5.57	5.00	8.24		
305 25	釘		古 墳	鉄	75.70	6.25	4.70	5.10		
305 26	釘		古 墳	鉄	72.25	4.90	3.45	4.05		
305 27	釘		古 墳	鉄	62.65	5.65	4.05	5.66		
305 28	釘		古 墳	鉄	70.75	6.55	5.70	6.13		
305 29	釘		古 墳	鉄	65.40	6.40	4.85	4.94	覆土内出土	
305 30	釘		古 墳	鉄	28.20	6.05	4.70	2.43		
305 31	釘		古 墳	鉄	28.95	4.75	4.50	1.48		
305 32	釘		古 墳	鉄	49.05	3.85	3.80	1.24		
308 33	錢	P - 4	土 壙 墓	銅	23.25	—	1.20	1.96	寛永通寶	
308 34	錢	P - 4	土 壙 墓	銅	24.85	—	1.50	1.50	寛永通寶	
308 35	錢	P - 4	土 壙 墓	銅	25.00	—	1.20	1.67	寛永通寶	
308 36	錢	P - 4	土 壙 墓	銅	23.65	—	1.45	2.42	寛永通寶	
308 37	錢	P - 4	土 壙 墓	銅	23.65	—	1.20	1.37	寛永通寶	
308 38	錢	P - 4	土 壙 墓	銅	24.20	—	1.25	1.85	寛永通寶	
308 39	錢	P - 5	土 壙 墓	銅	28.55	—	1.33	3.24	寛永通寶	
308 40	錢	P - 5	土 壙 墓	銅	24.25	—	1.35	3.23	寛永通寶	
308 41	錢	P - 5	土 壙 墓	銅	24.10	—	1.40	3.05	寛永通寶	
308 42	錢	P - 5	土 壙 墓	銅	24.90	—	1.40	2.94	寛永通寶	
308 43	錢	P - 5	土 壙 墓	銅	25.30	—	1.40	3.01	寛永通寶	
308 44	錢	P - 5	土 壙 墓	銅	24.60	—	1.40	3.27	寛永通寶	
308 45	錢		古 墳	銅	27.55	—	1.10	1.34	寛永通寶	

第3節 まとめ

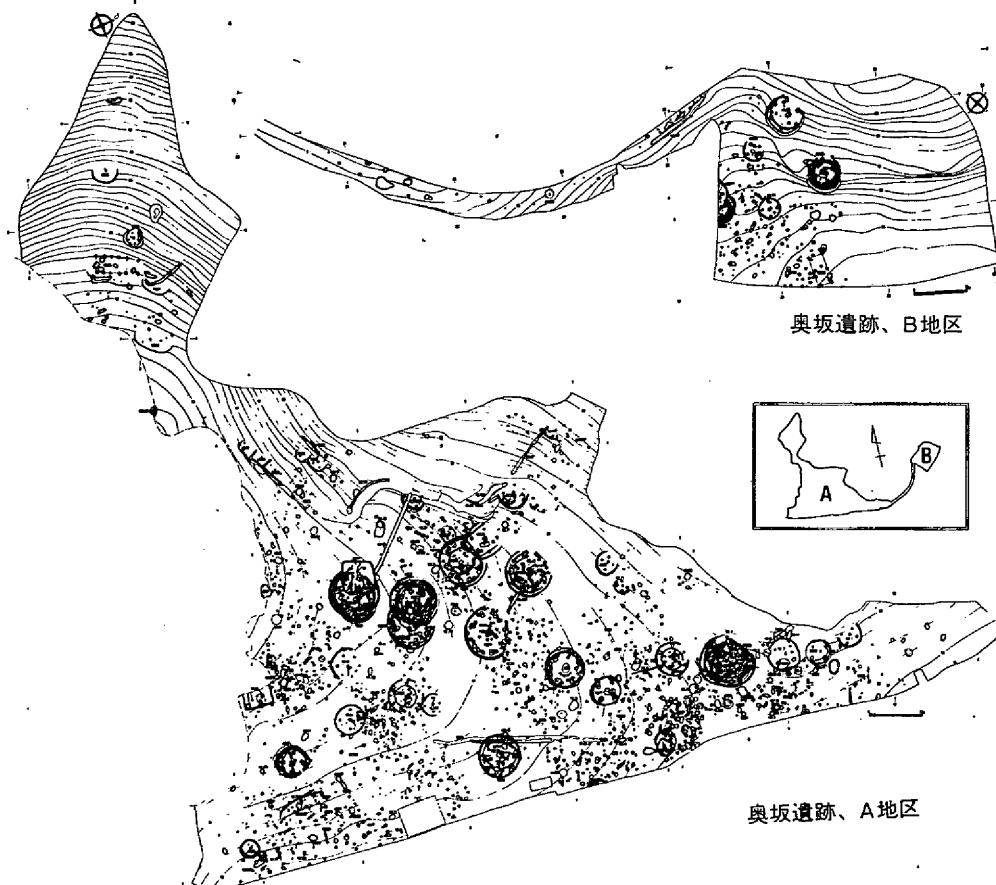
1. 奥坂遺跡の集落

奥坂遺跡は海拔85～95mの丘陵上に位置する。

地形によりA・Bの調査区を設定し、合計約11,000m²範囲の発掘調査を実施した。そして、両地区ともにほぼ同時に並存する各期の遺構が多数認められた（第309図）。

竪穴式住居址（48）・掘立柱建物（16）・袋状土壙（23）・土壙（32）・溝（10）・段状遺構（8）・柱穴列（3）・集石遺構（1）・土器溜り（1）などで総数160遺構を数える。

遺構は弥生時代中期末より分布が開始され（註1），ほぼ継続する状況で古墳時代前半にま



第309図 奥坂遺跡遺構分布図

でおよんでいる。そして、古墳時代後半・奈良時代の両時代を飛び越えて再び、わずかではあるが平安時代の一時期の遺構が存在する。それ以後は何ら遺構を認めることができない。

この地域に人間の生活が最も栄えたと考えられるのは弥生時代中期末より古墳時代前半期までであったと言うことができる。なかでも弥生時代後期半にはクライマックスを迎えており、たとえば竪穴式住居址16軒、県南部では類例の少ない（註2）袋状土壙23基が尾根筋を中心に広範囲に分布し、住居址と貯蔵庫の関連を知る上で貴重な資料を提供している。

時期の決定は編年対比表においてのべておいたが、比較的建て替えの多い竪穴式住居址、床面よりの小片のみ出土の竪穴式住居址等については、その時期決定が困難を極めるものが多く存在している。それらの詳細については、今後さらに具体化してゆく必要性を感じるが、ここでは大まかに奥・後・Ⅲ、奥・後・Ⅳという形でしか関連をのべることができない状況である。また、奥・後・Ⅲの中にあっても、近接する住居址、出土遺物のあまり変化のないほぼ同時期と考えられる袋状土壙により、切られている住居址等も存在し、土器の細分化および住居址の存続期間等の本質的な問題が表出している。

竪穴式住居址のみについてみても、住居址が35か所に分布しており、合計43軒を数える。そして、この43軒の個々に拡張、縮小等の建て替えが認められるものが多く、複雑な様相を呈している。ここでは個々の遺構の関係より各期の集落の在り方を概観し、形状の把握をしておきたい。

奥・中・III期の集落（第301図）

丘陵の頂上より南東に延びる尾根筋を境にして竪穴式住居址は北側に3軒、南側に4軒が所在しており、掘立柱建物5棟、土壙8基、段状遺構（No.69建物に付属）1、総数21遺構により構成されている。他に同時期と考えられる土器片を出土する柱穴が9本検出され、構造物としてのまとまりを欠くが、住居址の分布位置と比較的一致をみせており、居住空間の広がりをみせている。なかでも、遺構は東西隅に集中分布する傾向が認められる。

遺構の配置は高所に位置する中型のNo.49住居址（34.61m²）を中心にして、その周辺に分布する形態をとる。尾根筋北側の緩斜面にあるNo.96・87・32住居址はNo.49住居址中心より約37.5～71.0mの距離を持ち、個々に約37.0～38.5mの等間隔を有する一群を構成している。南側ではNo.150・123・66住居址が同じくNo.49住居址中心より約17～61mの距離を持ち、個々に約28～56mの間隔を有する一群を構成している。個々の住居址中央間の距離は最低17m（壁体溝間では12m）の間隔を有しており、それらを結ぶ線上に意外と柱穴分布が認められない。この事実は各住居址の立地する周縁（約120cm間）に住穴があまり存在せず、住居址周縁を含めて一定のスペースを確保していること等もからめて、竪穴式住居址間を結ぶ通路的な役割り、および

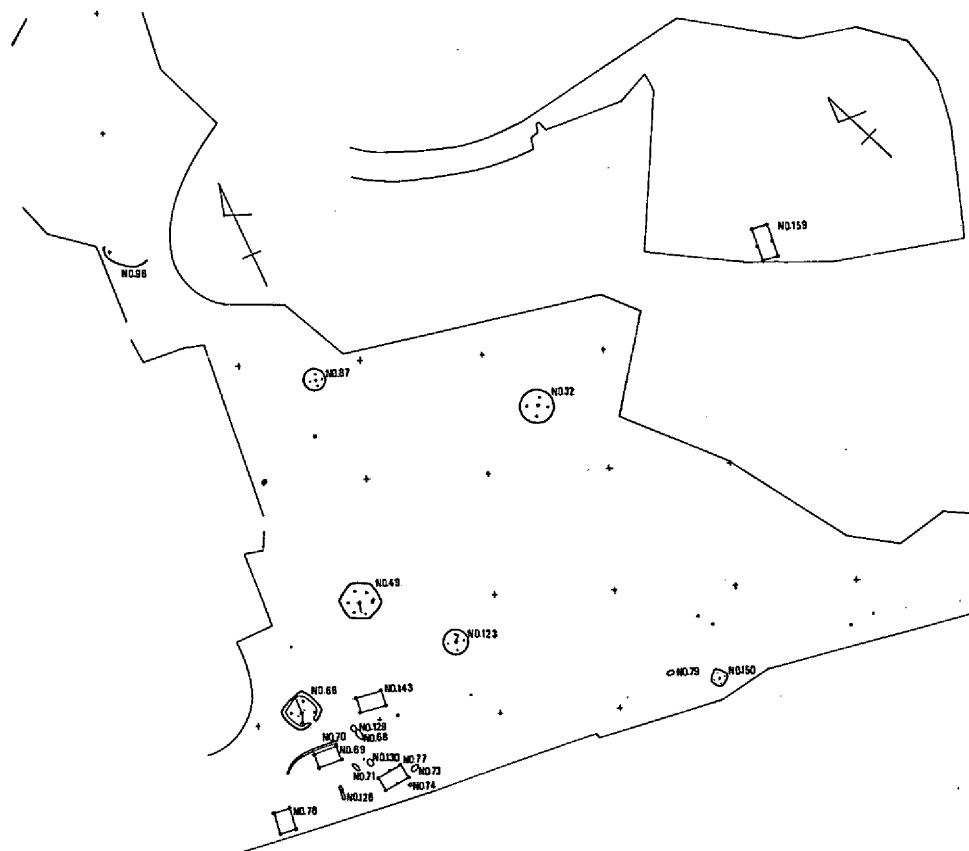
奥坂遺跡

尾根裾の拡張スペース・各戸が住居面積以外にもつ小範囲の生活空間等として、機能していた可能性が大である。

掘立柱建物においても、ほぼ同様のことが考えられる。たとえば、No.66住居址の東側約6mに並存するNo.143建物をみると、建物に沿って北・東・南側の3面に柱穴の存在しない幅約100cmの「コ」の字状のスペースが認められ、No.66住居址間には約30m²の柱穴の存在しない範囲が存在する。住居址・建物等が1軒建つほどのこの範囲は、No.143建物がNo.66住居址と共有する生活空間および両者を結ぶ通路としての機能を果たしていた可能性が考えられる。No.69・76・77建物についても同様の傾向を示しており、その生活空間は斜面部下位にあたり、構造物の東側に多く認められる。

竪穴式住居址、掘立柱建物等の構造物は立地の必要条件として、生活空間を含めた最低限の占地面積が確保されているものと理解しておきたい。

個々の建物を直線的に結ぶ距離は、竪穴式住居間を結ぶ最短距離よりも短い間隔を示してい



第301図 奥・中・III期遺構分布図

第5章 第3節 まとめ

る。№143・69建物間11.7m（建物中心より）、№69・76建物間13.0m、№76・77建物間19.0m、№77・69建物間11.0m、№77・143建物間13.4mを測り、№143・69・76建物は斜位一直線に並ぶ。個々の建物柱穴間距離で最短は№143・69、№69・77建物間の6.5mであり、本来約5m前後の建物間隔を有して並存していた可能性が考えられる。他に気づいた点では、竪穴式住居址間の距離と比較し、それより短い掘立柱建物間には柱穴が密に分布しており、個々の建物を火災の類焼および災害等より遮断する機能を有する構造物の存在を想定することも可能であろう。

個々の住居址間は約12m間隔が妥当な安全基準距離を有していたと考えることができる。

土壌においては、その傾向を欠くが、№126溝状の土壌のみが周囲に約30m²の柱穴の存在しない範囲を有している。他の7土壌とは形状が異り、非常に幅の狭いもので、床面が斜面に沿う傾斜をもつ。土壌は4棟の建物配置内にはほぼ近い距離をもって№129・68・130・71・126、73・74がまとまって出土している。土壌長軸は等高線に直交し、南北方向をとるものが多く、性格等については明確しえないが、ゴミ穴的な機能を有する土壌と考えておきたい。

奥・中・Ⅲの住居址は竪穴式住居を採用し、平面形は六角形・方形・円形の3形態を有する。平面規模は№49住居址が最大で34.61m²、№150住居址が最小で7.42m²を測り、収容人員数に約9名（註3）の差が認められる。

80～90m²の床面積をもつ住居址をAとし、60～70m²をB、40～51m²をC、30～40m²をD、20～30m²をE、10～20m²をF、5～10m²をGとし、ここではA・Bを大型、C・Dを中型、E・F・Gを小型と仮定する。そして、奥・中・Ⅲ期をみると№49住居址がD、№66・32住居址がE、№87・123住居址がF、№150住居址がGとなり、A・Bに入る大型のものは存在せず、中型でも小振りなもの、小型を中心に構成されていることが理解できる。なかでも、中型の№49・66・32住居址等に1～2回の建て替えが認められる。ここでは№49住居址の平面形・規模等より「主屋」的な役割りを果たす機能を有した竪穴式住居址と考えておきたい。また、住居址の数と比較して、掘立柱建物（倉庫）数が多いが、遺跡はさらに南側、西側に延びていたことが確認されており、比較的まとまった単位の集団が形成されていたものと考えられる。

奥・後・I、II期の集落（第302図）

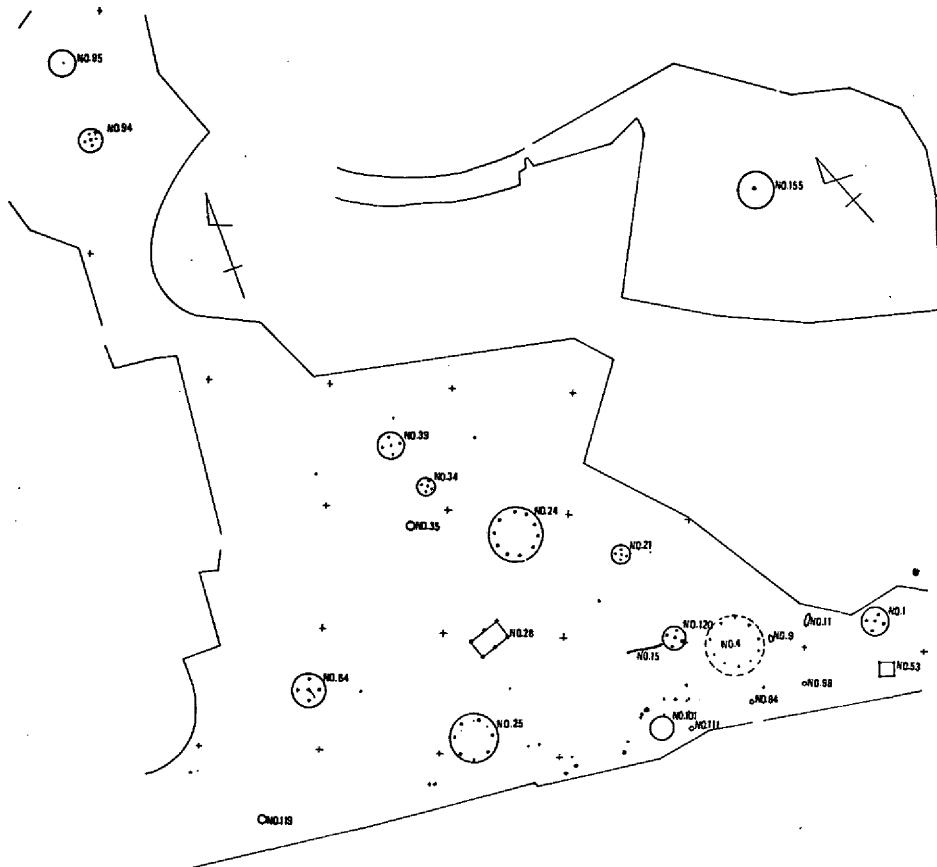
丘陵の頂上より南東に延びる尾根筋を境にして、竪穴式住居址は北側に5軒、南側に3軒が所在しており、掘立柱建物2棟、土壌6基、溝1本、北側に延びる尾根筋に竪穴式住居址が2軒、B地区に竪穴式住居址が1軒、総数20遺構により構成されている。他に同時期と考えられる柱穴が№101住居址周辺に多く分布しているが、構造物としてのまとまりを欠く。しかし、C-8線周辺は他の時期の構造物としてまとまる可能性のある柱穴分布密度ではある。遺構は

奥坂遺跡

奥・中・Ⅲ期よりさらに北方に延び、調査区全域に間隔よく配置された形態をとっている。

遺構の配置は南東に延びる尾根筋を南北に分け、尾根に沿う格好で北側に5軒の並び、南側に3軒の並びが認められ、尾根上に掘立柱建物が建つ。尾根筋北側の緩斜面にあるNo.39・24・21・120・1住居址は個々に16.2~33.5mの距離を持ち、南側ではNo.64・25・101住居址が個々に28.5~31.5mの距離を測る。各住居址中央間の距離は奥・中・Ⅲ期に認められた最低17mの間隔を保有している。次に南北住居址間の距離は15.2~42.5mを測り、No.120・101住居址間が若干狭くなっている。これは両住居址間に尾根筋が存在することを考慮に入れれば11.0m（壁体溝間）も十分な距離と考えられる。

また、各戸が住居址以外にもつ小範囲の生活空間、各構造物を結ぶ通路等の最低限の占地面積が確保していた形跡は、奥・中・Ⅲ期同様に認めることが可能である。なかでも、No.64・39・24・25住居址にはさまれた範囲内は柱穴分布の密度が薄く、C-6線を中心に認められるその部分は、集落の全体的な利用機能を有していた可能性がうかがえる。また、No.24・21・120・



第302図 奥・後・I, II期遺構分布図

101・25住居址に囲まれた部分についても同様のことが考えられる。

建物はこの期に伴う明確なものは発見されず、かろうじて、No.28建物の配置および柱穴内埋土等より可能性を考慮したものである。No.24住居址・No.25住居址にはさまれた格好で、No.24住居址より17.8m、No.25住居址より16.5mの距離に立地し、前述の集落内の全体的利用機能を有する範囲の中央部にあたる。すなわち、No.28建物は集落のほぼ中央部に所在するわけである。

奥・後・I、IIの住居址は竪穴式住居を採用し、平面形はすべて円形を呈する。主柱穴数は4本が基調となり大型化に伴い柱数が増加する傾向を示し、多いもので10本にいたる。平面規模はNo.24住居址が最大で59.62m²、No.94住居址が最小で9.66m²を測り、収容人員に約17名（註4）の差が認められる。奥・中・III期に仮称した床面積によれば、No.24住居址がB、No.25住居址がCの大・中型に入り、No.64住居址がE、No.1・120・101・39・95住居址がF、No.34・94住居址がGの小型に入る。各規模が認められるが、いわゆる大型住居址は少なく、小型住居址が多く約10名以下の収容スペースを持つものが大半を占めている。

細部の時期差については具体性に欠けるが、No.1・120・101・39・95住居址等は奥・後・II期の古相に属し、No.24・25住居址は同時期に存在しながら建て替え拡張されており、その後火災により放棄された新相期のものである。

奥・後・III期の集落（第304図）

奥・中・III、奥・後・I、II期の住居址との立地が異り、丘陵の頂上より南東に延びる尾根筋を占地する4軒があらわれており、北側に3軒、南側に2軒、B地区に3軒、袋状土壙8基、土壙12基、溝1本、総数34遺構より構成されている。

この期の住居址は奥・中、後・I、II期と比較し、大型のものが目立ち、なかでもNo.4住居址（奥・後・II期に存在した可能性もある）のように73.86m²、約22.4坪を測るもののが出現してくる。

從来認められた住居址間の距離の均衡は若干崩れ、No.62・36・23住居址、No.4・3住居址等のように非常に近接するものがあらわれている。No.3住居址の床面下より検出したNo.91袋状土壙、No.3住居址を切るNo.10袋状土壙等は遺構の切り合い関係において前後関係をつかめるが、出土土器よりの前後関係は抽出しにくい状況を呈している。また、前述した住居址間の距離は11.5～14.0m、壁体溝間ではさらに短く、3.5～5.5mを測り住居間が接近しすぎる嫌いがある。この事実は土器の細分化の可能性も存在するが、さらに重要な問題は調査時における人的な処理に帰するところも大であり、その上に時間的制約を受け、工事と並行しながら実施する緊急発掘調査という状況の中にあって生じる歪みでもある。しかし、前述した奥・中・III、後・I、II期の各戸が住居址以外にもつ小範囲の生活空間、各構造物を結ぶ通路等は、概ね踏襲

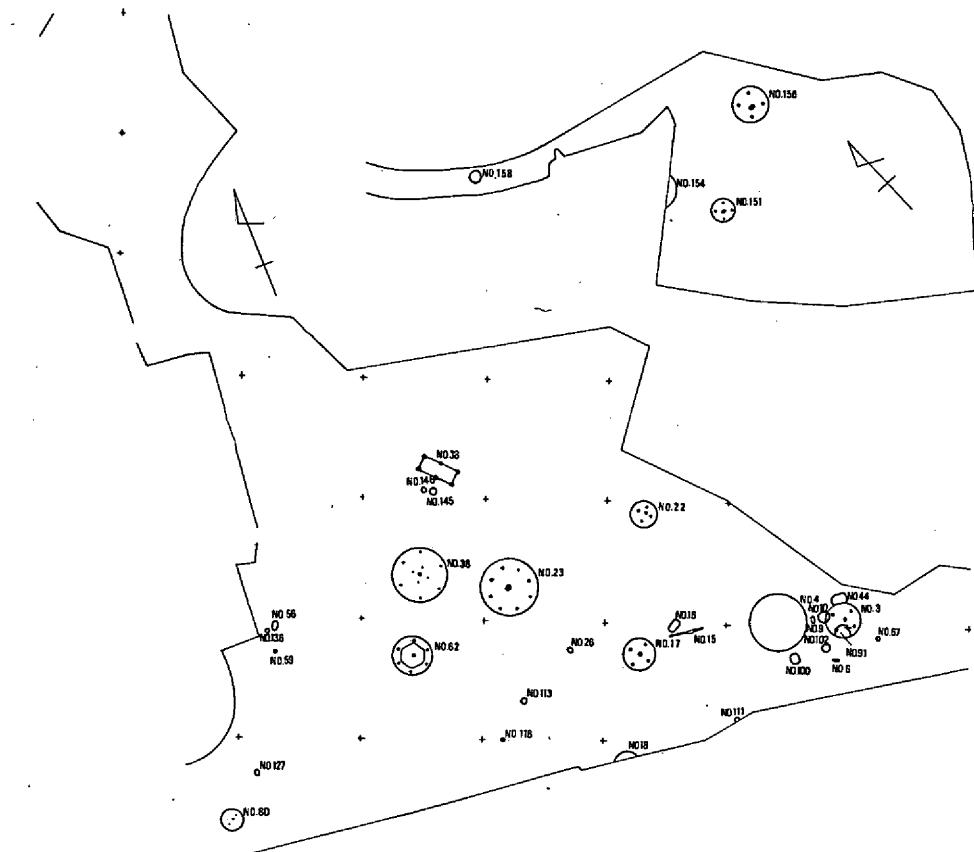
奥坂遺跡

されていると考えられる。

袋状土壙は奥・後・III期において出現し、No.91袋状土壙等が古相の様相を呈する。No.36住居址北側に2基、No.4住居址東側に4基、遺跡の東西2か所に分離し、集中分布をする。個々の住居址に付設されるものではなく、集落全体における6基、2か所の在り方を呈する。この事実は、集落における袋状土壙の集中管理的な様相を表出している。また、これらの袋状土壙の近くにNo.4・36住居址等の大・中型住居址が存在する事実も考慮に入れる必要があるのではないかろうか。

この時期の住居址は、重複、切り合い等の建て替えが顕著に認められ、とくに大・中型住居址に建て替えの傾向が多いようである。No.36住居址で3回、No.4住居址で6～7回の建て替え痕跡が認められ、同一場所を占地し続ける必要性を有する住居址という見方も可能である。また、これらの住居址は火災後にも再び利用された痕跡をとどめるものが目立つ。

しかし、No.80・62・17・22・3住居址等も最低1回の建て替えが実施されており、なかでも



第303図 奥・後・III期遺構分布図

拡張あるいは同規模の建て替えが主流を占める。

「建て替え」には同一の意識による同規模の改築、拡張、縮少の建て替えが認められる。他に時期的ずれをもつ同一意識でない切り合い・重複、建て替えの行われない1回のみの住居址等が存在する。1回のみで終止する竪穴式住居址は奥・後・Ⅲ期では稀な状況である。

奥・後・VI期の集落（第304図）

奥・後・Ⅲ期と同様に竪穴式住居址は尾根筋に占地しており、袋状土壙も尾根筋に多く分布している。

ほぼ一直線に並ぶ6軒の竪穴式住居址、東西に分散する13基の袋状土壙、土壙6基より構成されている。B地区には遺構が存在していないが、同時期の遺物は認めることができる。奥・後・Ⅲ期に比較すると、若干縮小しており広範囲に分布した住居址が直線的に並び、個々の住居址間は15.0~21.4m（住居址中央間）となり、壁体溝間では5.8~15.0mと接近する傾向が認められる。やはり、大型の住居址が集落の中に存在する傾向は奥・後・Ⅱ期以降継続して認



第304図 奥・後・IV期遺構分布図

奥坂遺跡

められるようである。

No.23住居址等には時期決定に関して若干の疑問を残しているが、前述した問題点に集約されそうである。

袋状土壙は増加をしており、D-5線中央を起点に半径約17.5mで円を描くと、その線上に9基の袋状土壙が存在することがわかる(第306図)。このうち、No.81・138・132・140・48袋状土壙等が奥・後・IV期、No.145・146袋状土壙が奥・後・III期、No.82袋状土壙が奥・古・I期に属しており、時期差の存在する中にあって袋状土壙の機能、集落内における位置(占地)は建て替えの多い住居址と共存関係を保ちつつ継続していたものと考えられる。このことはNo.4住居址の東側を中心に直径約20m範囲内におさまる11基の袋状ピットについても同様の事実があつてはまるであろう。しかし、No.103・109袋状土壙は集中分布範囲内におさまらず、斜面部に単独で存在するという例外が認められる。No.109袋状土壙については南側より物が投棄された痕跡をとどめており、さらに南側に竪穴式住居跡・袋状土壙が広がる可能性があり、前者と同様の「まとまり」を持つことも考えられる。No.3袋状土壙の状況はさらに類例を持ち、今後検討を加えていきたい。

ここでは同一場所にくりかえし占地し、建て替えの顕著な大・中型住居址と袋状土壙の同時的な併存の可能性を指摘するにとどまり、その関係は袋状土壙において後述する。

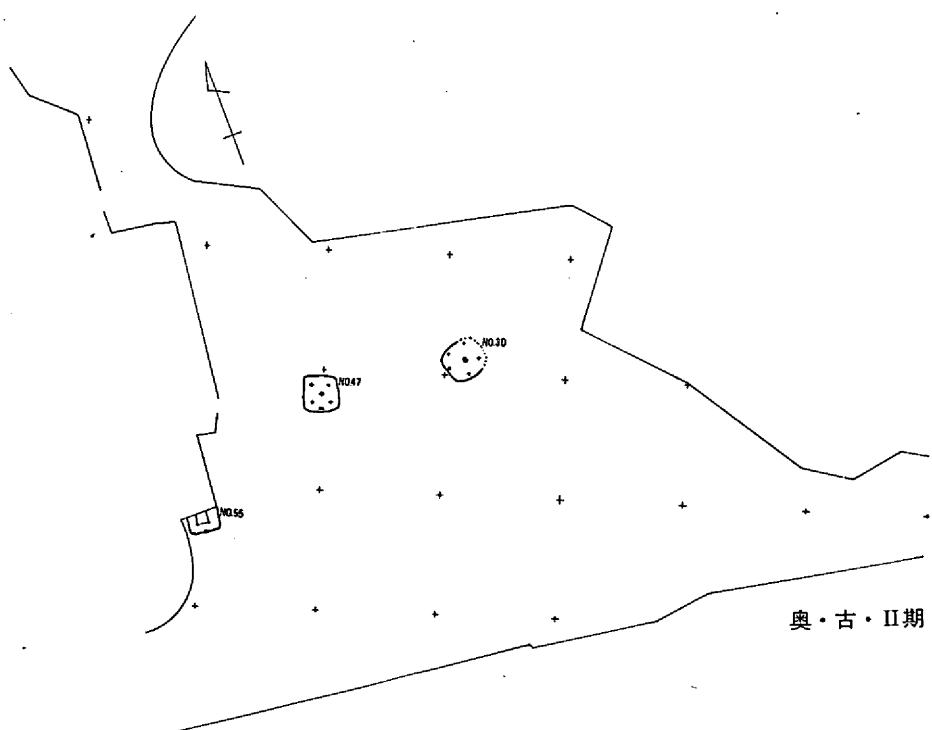
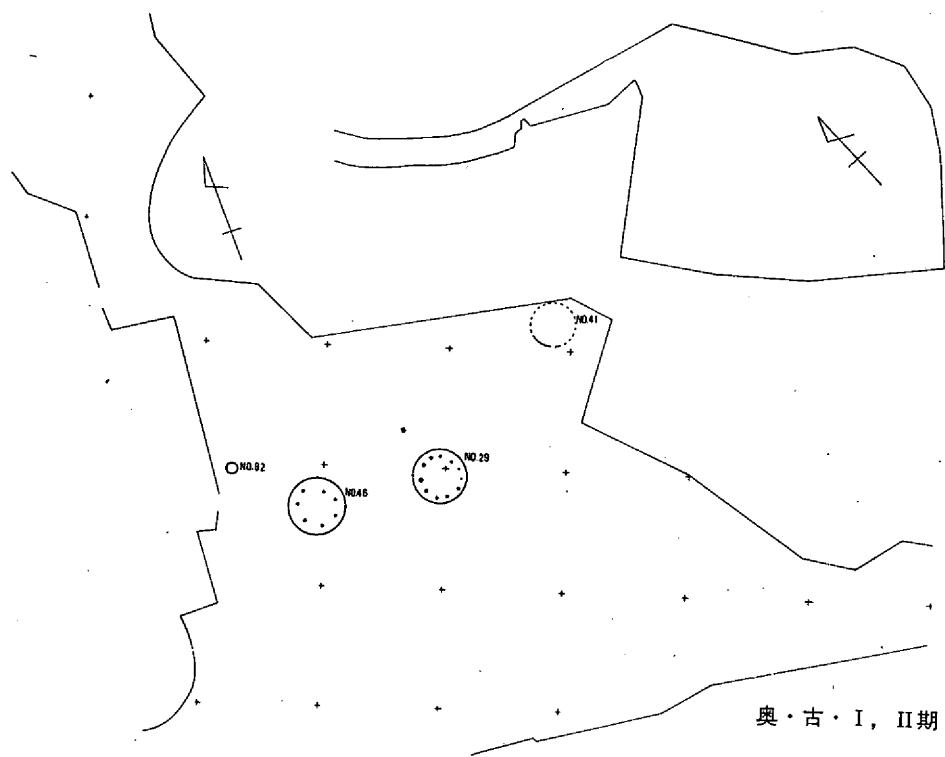
奥・古・I・II期の集落(第305図)

奥・古・I・II期の集落は大きく縮少された状況を呈する。奥・古・I期の新相と考えられるNo.82袋状土壙1基、奥・古・II期の古相と考えられるNo.46・29・41住居址3軒、そして新相と考えられるNo.55・47・30住居址3軒より構成されている。

各遺構は丘陵の頂上より南東に延びる尾根筋を境にして、北側を中心で分布している。

奥・古・I期のNo.82袋状土壙はまったくの単独出土であり、対応する竪穴式住居址は発見されておらず、また、柱穴分布においても奥・古・I期の遺物を含む柱穴は確認されていない。非常に稀薄な遺構分布であり、続く奥・古・II期の古相もしかりである。

3軒の竪穴式住居址は緩斜面部を東西1列に点在しており、No.46・29住居址間21.20m(住居址中央間)、No.29・41住居址31.00mを測る。No.46・29住居址の壁体溝間は11.80mを測り、奥・中・III期より通して認められる住居址間の距離を確保し、住居址間を結ぶ通路的な役割り、および各戸が住居址外にもつ小範囲の生活空間等が十分考慮された配置である。No.41住居址の東方約25mに、No.1・2住居址下位を谷頭とし、北に開口する谷が存在する。我々が調査時の往来に利用した谷底「道」でもあり、近世・近代に稻谷の名称で呼称されていたようである。



第305図 奥・古・I, II期遺構分布図

奥坂遺跡

No.46・29住居址とともに約66.5m²を測り、大型住居址の小振りな部類に入る。両者とも奥・古・Ⅱ期の新相の方形住居址により北東辺を切られる共通点を持っている。No.41は中型住居址の大振りの部類に入り、周辺にはいわゆる小型住居址の分布は皆無となっている。No.46住居址は3回の拡張が実施されたNo.45住居址を切り、拡張・縮小を含め5回の建て替えが行われた住居址である。No.29住居址は1回の拡張・1回の同一規模の建て替えが行われ、大・中型住居址に見られる同一場所を長く占地する傾向が比較的よく認められる。また、No.46・29住居址では主柱穴の間隔配置等がほとんど一致をみている。

奥・古・Ⅱ期の新相であるNo.55・47・30住居址は平面形が円をしており、奥・後・Ⅲ、Ⅳ期には見られなかった形状を有する。No.47・30住居址は前述したNo.46・29住居址を切ってつくれられており、No.55住居址が単独の出現である。その関係はNo.46・29住居址の埋没後を切ってNo.47・30住居址がつくられた土層断面を呈示しており、両住居址間に堆積土が充満する期間が認められる。

No.55・47住居址間（住居址中央間）が28.5m、No.47・30住居址間が24.5mを測り、壁体溝間では18m以上を確保している。住居床面積は30～40m²を測り、中・小型化しており、南辺に沿って円・方形の小土壙が付設されている。各住居址とも1回の建て替えを実施し、拡張がなされている。

奥坂遺跡では奥・後・Ⅳ期より奥・古・Ⅰ期の間に住居平面形が円より方形に変化していることが認められ、住居址規模が縮少されている。

袋状土壙（第306図）

袋状土壙は奥・後・Ⅲ～Ⅳ期、奥・古・Ⅰ期に分布が認められ、奥・後・Ⅲ期に8基、奥・後・Ⅳ期に14基、奥・古・Ⅰ期に1基の総数23基が検出された。

南東に延びる尾根筋高所に環状に分布する9基（Aブロック）、尾根筋低所に密集する11基（Bブロック）の2ブロックに占地して集中する形態をとっている。この形態は奥・後・Ⅳ期においてのべた袋状土壙の占地と建て替えの多い住居址との共存関係を考察する点で重要である。ここでは各期について両者の形状を追求し、概観をのべる。

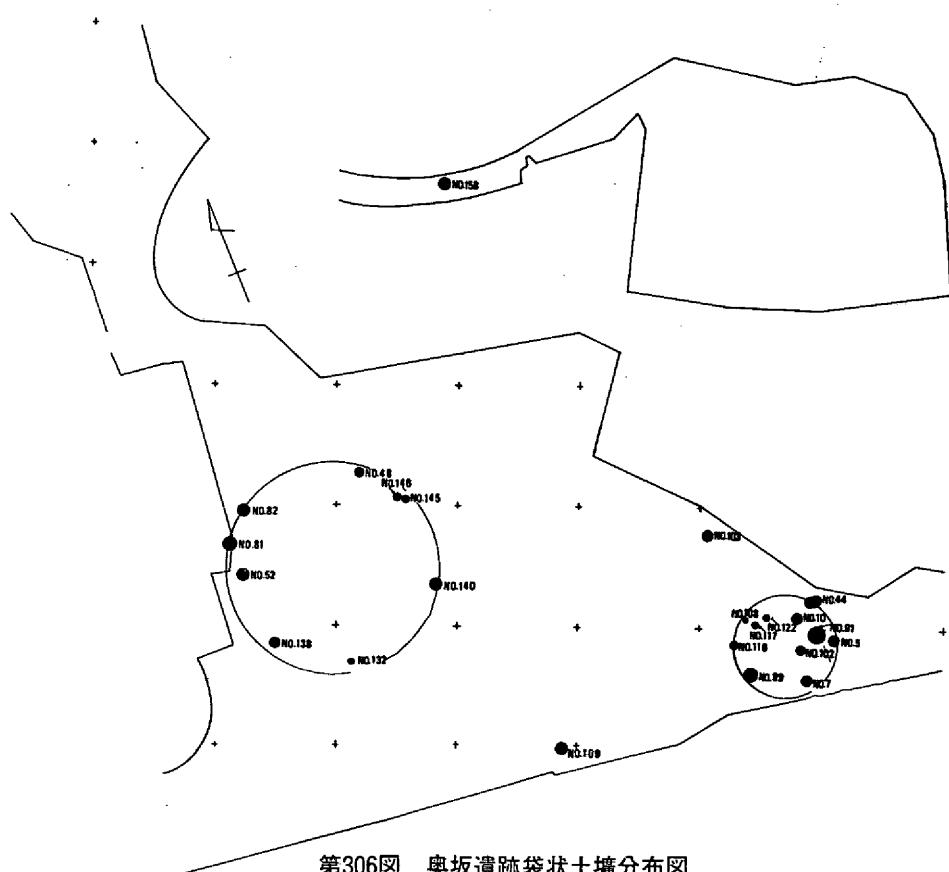
奥・後・Ⅲ期についてみると、AブロックにNo.145・146、BブロックにNo.44・102・122・116・117・91袋状土壙が存在する。No.91・44袋状土壙を除き、総じて小規模であり深さ32～143cm、床面積0.53～1.04m²におさまるものが中心になる。なかに傑出するNo.91袋状土壙のように6.07m²を測るもののが存在する。Aブロックの袋状土壙はNo.36住居址と同時存在をした可能性があり、Bブロックの袋状土壙はNo.4住居址との関連を考えることが可能である。

奥・後・Ⅳ期では全体に増加しており、AブロックにNo.48・132・81・52・138・140袋状土

第5章 第3節 まとめ

壙、BブロックではNo.5・10・108・99・7袋状土壙が存在する。深さは110~226cm、床面積約1.05~3.23m²を測る。奥・後・IV期は奥・後・III期に比較して、深いものが多くなり、当然それに比例して、床面積も増加しており、大・中規模の袋状土壙がこの時期に定着している。No.109・103・158袋状土壙は両ブロックに属さず、単独に出土しており、若干異なる使用目的、管理方法を考慮する必要性も出てくる。総数14基中、No.48・132・5・10・108袋状土壙は奥・後・IV期の古相と考えられ、No.81・52・138・140・99・7等の袋状土壙が奥・後・IV期の新相と考えられる。AブロックではNo.45・37住居址等が共存し、BブロックではNo.4・3等の共存が考えられる。

奥・古・I期ではAブロックにNo.82が1基のみという状況である。奥・後・IV期のNo.81・99袋状土壙と深さ・面積においてほぼ同規模を呈しており大型の部類に入るものである。しかし、遺跡内においてNo.82袋状土壙と同時に共存する堅穴式住居址は検出されておらず、工事による掘削部に存在したと考えざるを得ない。



第306図 奥坂遺跡袋状土壙分布図

奥坂遺跡

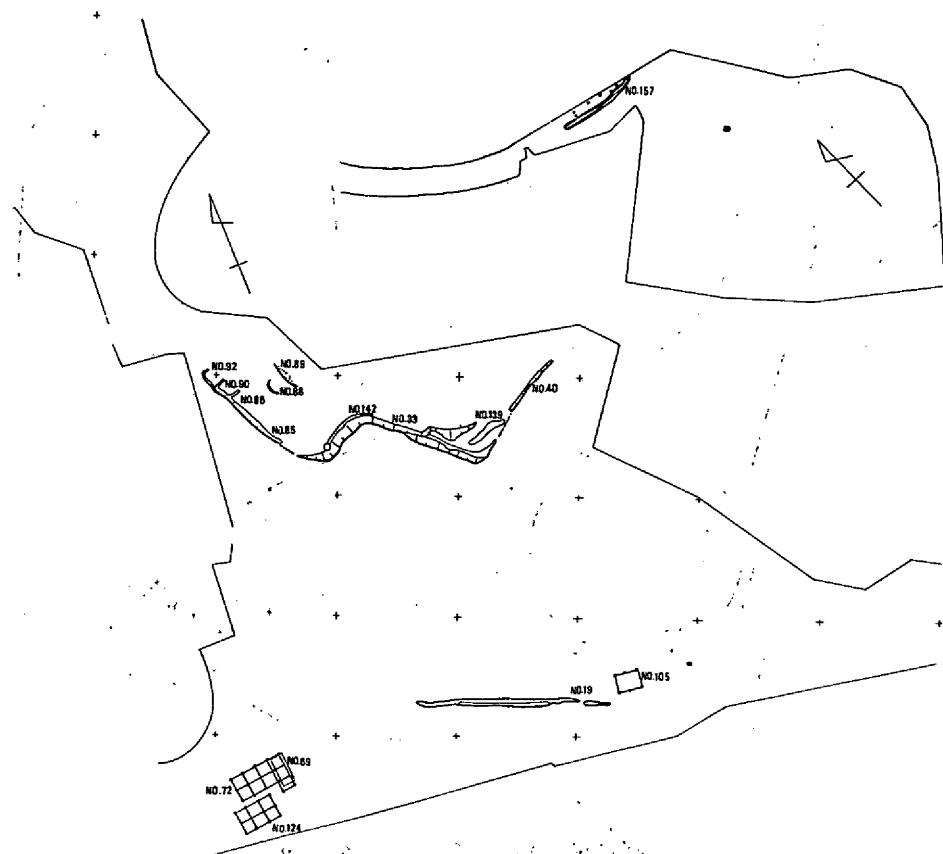
袋状土壙は奥・後・Ⅲ、Ⅳ期を通じて増加する傾向にあったが、奥・古・I期の段階で1基に縮小されており、居住地区的移動、あるいは激減が予想される。この事実は次にくる奥・古・Ⅱ期においても集落の広がり・竪穴式住居軒数の減少等からも裏づけられる。また、天神坂遺跡においても、概ね同過程による集落の変遷が認められた。

奥坂遺跡の袋状土壙は貯蔵穴としての痕跡をとどめたものではなく、その機能が完了後にゴミを投棄する穴に転用されているようである。

中世の集落（第307図）

丘陵の頂上より南東に延びる尾根筋の端部、北側斜面部、南側緩斜面部、B地区の4か所に分散して遺構が認められる。

北側斜面部の遺構は比較的勾配のある地区を平面形で「W」の字状に掘削して、まず大規模な段状の遺構を形成している。その規模は東西約60m、南北17mを測り、そこには溝・柱穴・



第307図 奥坂遺跡中世遺構分布図

配石等が認められる。調査時にはNo.85・86・88・89・90・92・142・33・139・40と個々の遺構名を使用したが、本来、非常に計画性をもった「W」の字状を形成していたものと考えられる。No.85・86・89・139・40遺構出土の土器類より平安末～鎌倉期の年代を想定することが可能である。

尾根筋の端部に位置するNo.19構・No.105建物は遺物を含まず、時期の決定は困難であるが、No.72・124建物等と有機的関連を持ちながら、共存していた可能性を考えている。これらの遺物は、天神坂遺跡の中世の時期と共通した特徴点を持っており、No.13寺跡等と関連を有しながら存在した可能性が強いと考えられる。

火災を受けた住居址と柱穴（第308図）

竪穴式住居址はA・B両地区の35か所に分布し、合計43軒を数える。しかし、この数値は住居址廃絶期のみのものであり、43軒の個々に建て替えの認められるものが存在し、実質住居址軒数は約90軒を数える。その内に火災を受けた住居址が14軒存在し、ほぼ全域に分布が認められる。それらには2つのタイプがあり、火災より廃棄されたものをA、火災後に再び建て替えが利用されたものをBとする。AにはNo.32・66・24・25・17・36・22・3・13・50・29住居址の11軒があり、No.32・66住居址が奥・中・Ⅲ期、No.24・25住居址が奥・後・Ⅱ期、No.17・36・22・3住居址が奥・後・Ⅲ期、No.50・13が奥・後・Ⅳ期、No.29住居址が奥・古・Ⅱ期にあたる。No.50住居址については火災に若干の疑問が残る炭化材の出土状況であり、また掘開後も早い時期に埋めもどされた痕跡が認められた。

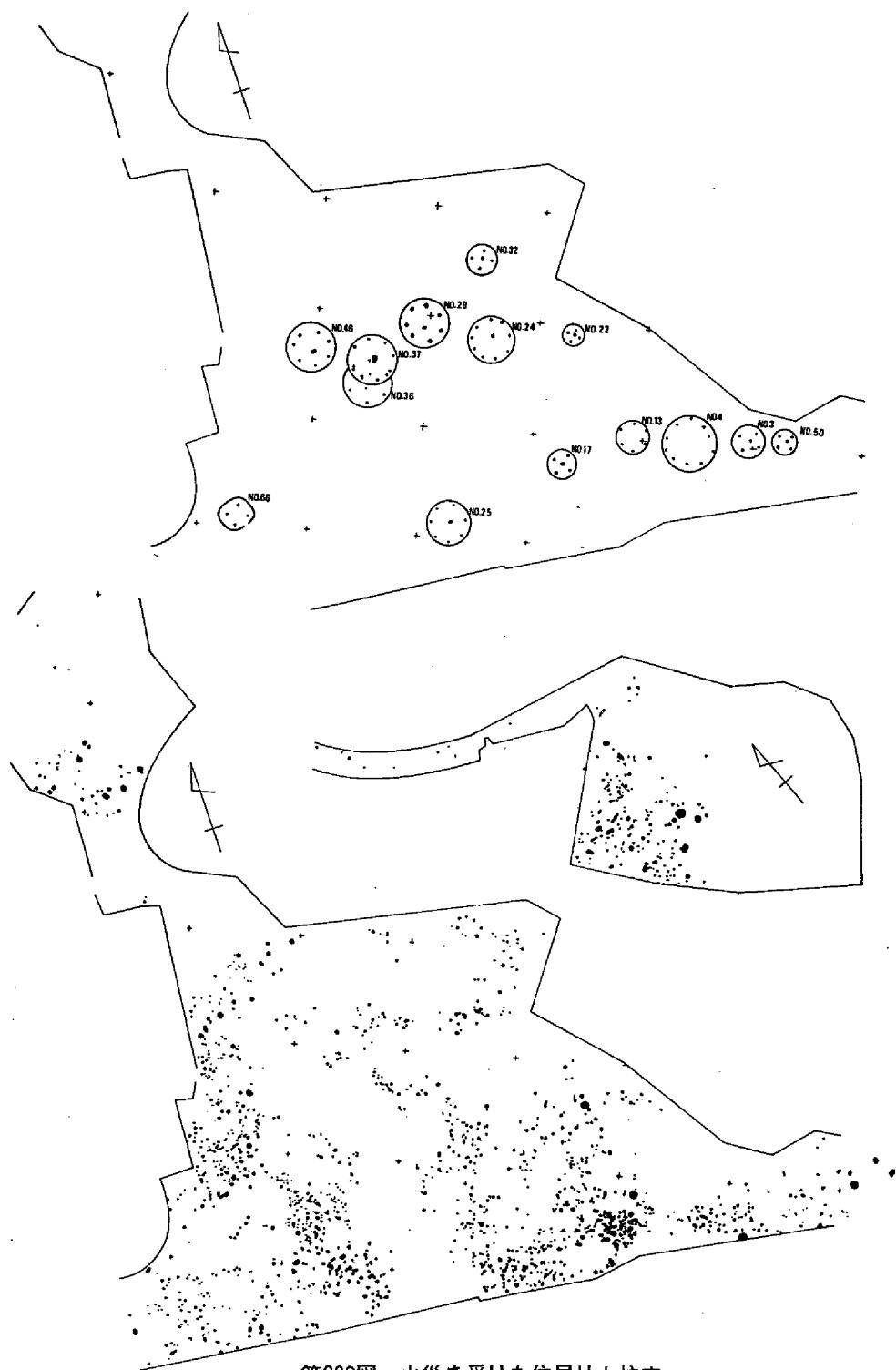
BにはNo.4・37・46住居址の3軒があり、No.4住居址が奥・後・Ⅲ期、No.37住居址が奥・後・Ⅳ期、No.46住居址が奥・古・Ⅱ期にあたる。Bの3軒の住居址は床面積60m²以上の大型であり、No.4住居址が10回以上、No.37住居址が7回以上、No.46住居址が5回以上の建て替えを実施し、長期にわたり使用した痕跡をとどめる。火災住居址を放棄せずに再び使用せざることをえない住居址の占地であり、また、集落内における「主屋」的な特殊な機能を持つ家屋の可能性が考えられる。

Bの住居址を中心とした格好で袋状土壙が分布する事実は、両者間の機能が相互に関連するであろうことを裏付けている。

柱穴分布図は各期の建物の存在を追求するために作成したものであるが、各期の遺構の広がりをおさえるものにとどまり、目的は達成できなかった。しかし、各住居址間の距離、住居址間を結ぶ通路、および各戸が住居址以外にもつ小範囲の生活空間等に関しては非常に示唆的な道標となったことは事実である。

（高畠）

奥坂遺跡



第308図 火災を受けた住居址と柱穴

註

- 註1 天神坂遺跡では後期旧石器時代のサヌカイト製のナイフ形石器が1点出土しており、奥坂遺跡では珪岩円錐、珪岩半裁礫、サヌカイト原石(11×6×4cm)等が多数表採されていること等より、さらに古い時代の存在を推定することができる。
- 註2 正岡睦夫・山磨康平・平井勝「西山遺跡」『大木建設株王子団地文化財発掘調査委員会』真備町教育委員会 1979・10
 計8基の袋状土壙が確認されており、比較的小型で底部径・深さともに100cmを前後するものである。放棄された土器より弥生時代中期後半～後期後半までの時期に比定されている。尾根筋部分に立地する傾向がうかがえ、1号墳周辺にまとまりをみせている。
- 註3 関野克「埼玉県福岡村縄文時代前期住居址と竪穴式住居の系統に就いて」『人類学雑誌』五三一八 1938
 住居に起居した人数を考察するのに、千葉姥山貝塚の一住居址(12.2m²)にみられた5人の死体、および住居拡張の1回平均3m²を求め、 $(\frac{\text{竪穴面積}}{3} - 1)$ という数式をあらわしている。その数式にあてはめると、No.49住居址は $(\frac{34.6}{3} - 1) = 10.53$ 人、No.150住居址は $(\frac{74.2}{3} - 1) = 1.47$ 人となり約9名の差が認められる。
- 註4 註3と同様の数式にあてはめたものである。しかし、この問題は各住居址が持つ機能に左右されるもので、竪穴式住居址には必ず人が起居したのか、あるいは物置的利用等が存在していたのか等について検討する必要が出てくる。
- 補註 紙面の都合で鉄器・石器についての考察を実施できなかったが、一応、鉄器・石器の一覧表を参照していただきたい。
 石器は弥生～古墳時代と全期かけて認められるが、石槍・石錘・石鎌・石庖丁等は奥・後・Ⅱ期の新相にはほとんど姿を見せなくなり、漸進的ではあるが奥・中・Ⅲ期より砥石の量が増加しており、奥・後・Ⅲ、Ⅳ期にそのピークが認められ、遺構分布密度に比例している。
 鉄器は奥・後・Ⅱ期に手斧・ノミ状工具・鉄鎌等が若干出土している。全体的な鉄製品の量は奥・後・Ⅲ、Ⅳ期に多く認められ、摘鎌・短剣(槍先)・ノミ状工具等が出土している。

図版



岡山県総合流通センター第2期工事用地航空写真

図版 2



1. 天神坂遺跡見学会



2. 奥坂遺跡見学会



1. 天神坂遺跡トレンチ調査（南西より）



2. 天神坂遺跡トレンチ調査（西より）

図版 4



1. No. 2 A 住居址（南より）



2. No. 2 A・B 住居址（北東より）



1. No 9 A 住居址火災状況（西より）



2. No 9 A 住居址（北より）

図版 6



1. No. 9 A・B 住居址（北より）



2. No. 7・8 住居址（東より）



1. No.18段状遺構（西北西より）



2. No.18段状遺構（南西より）

図版 8



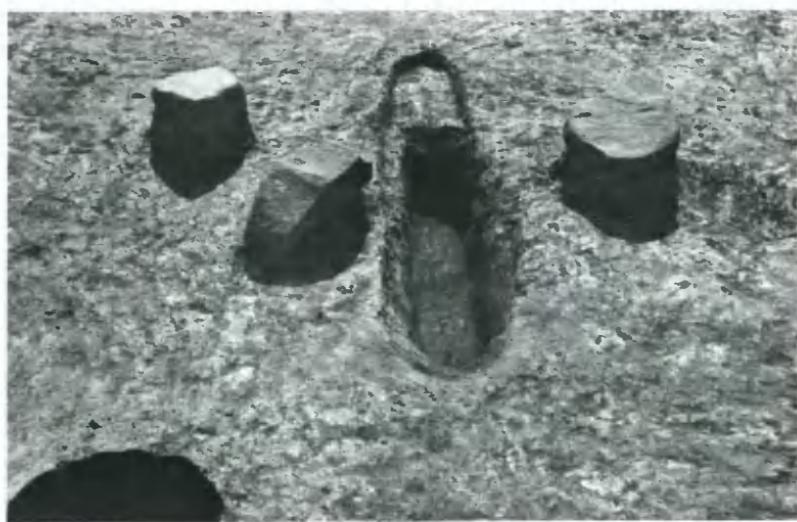
1. No. 5 住居址（東より）



2. No. 6 住居址（東北東より）



1. No. 3 住居址（南より）

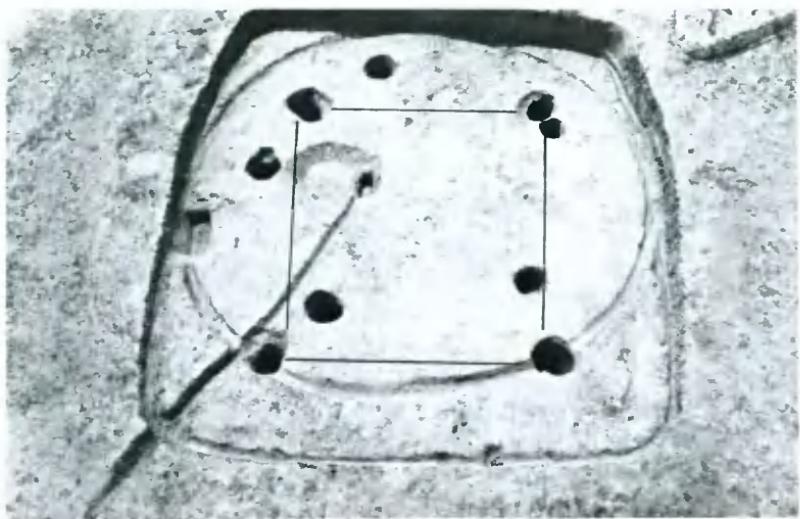


2. No 3 住居址中央穴周辺（南より）

図版10



1. No.4・14住居址（東より）



2. No.4・14住居址（東より）



1. No 1 A 住居址（南東より）



2. No 1 住居址（南東より）

図版12



1. 天神坂遺跡全景（南より）



2. 天神坂遺跡全景（北より）



1. No.15土壤墓（南より）



2. No.16土壤（南より）

図版14



1. No.13寺跡（東より）



2. No.13寺跡埋没状況（西より）



No.13寺跡（北東より）

図版16



1. No.13寺跡瓦出土状況（南南東より）



2. No.13寺跡瓦出土状況（南より）



1. No.13寺跡礎石（北より）



2. No.13寺跡礎石（東より）

図版18



1. No.13寺跡遺物出土状況（北より）



2. No.13寺跡遺物出土状況（南東より）



1. No.13寺跡遺物出土状況（南南西より）

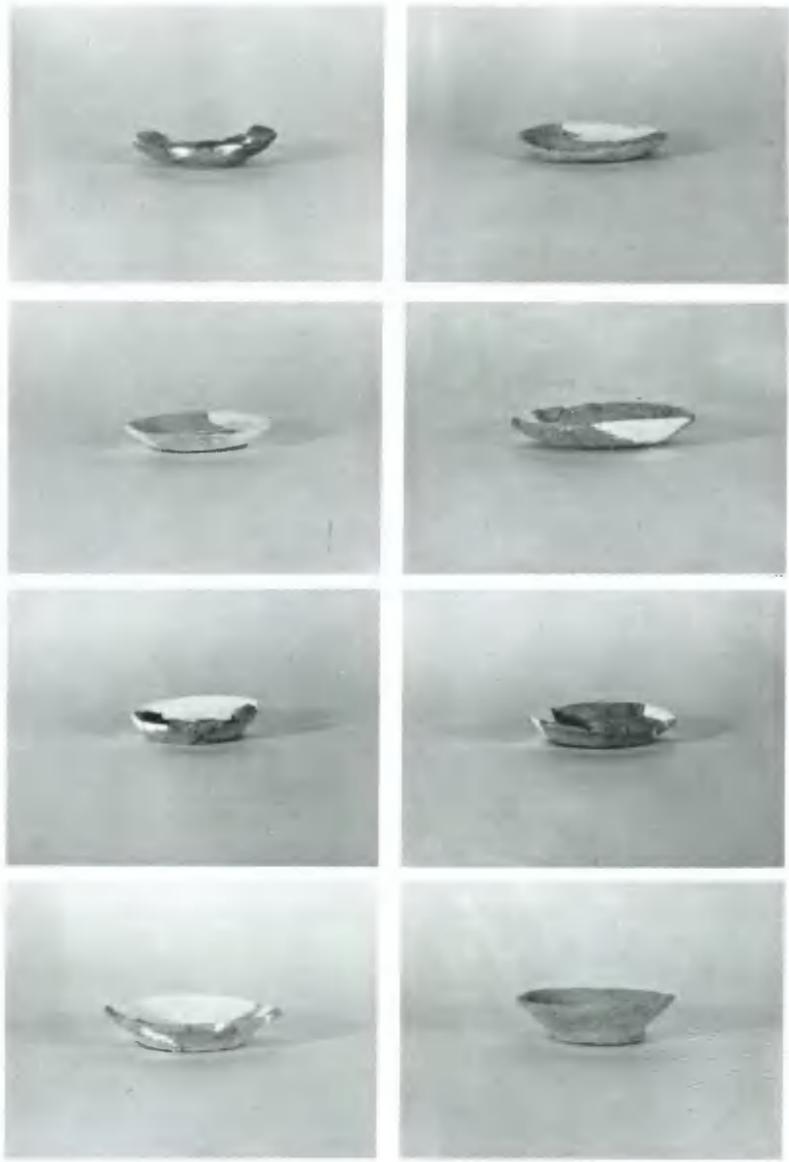


2. 調査終了後の天神坂遺跡（奥坂遺跡より）

図版20



天神坂遺跡出土遺物



No.13寺跡出土遺物

図版22



174



175



176



177



205



169

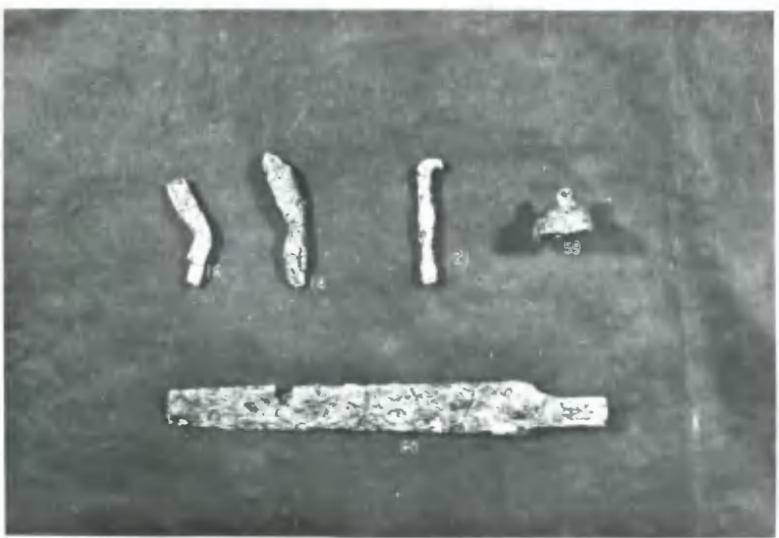
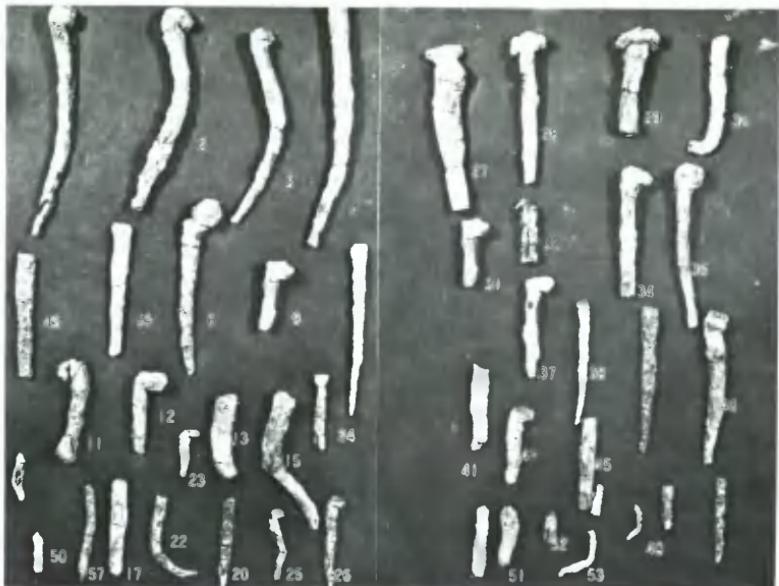


170



171

No.13寺跡・No.15土塚墓出土遺物



13寺跡出土鐵器

図版24



N M - 1



N M - 2



N M - 3



N M - 4



N M - 5



N H - 12

No 13寺跡出土軒丸・軒平瓦



NH-1



NH-20

No.13寺跡出土軒平瓦

図版26



NH-5



NH-18

No.13寺跡出土軒平瓦



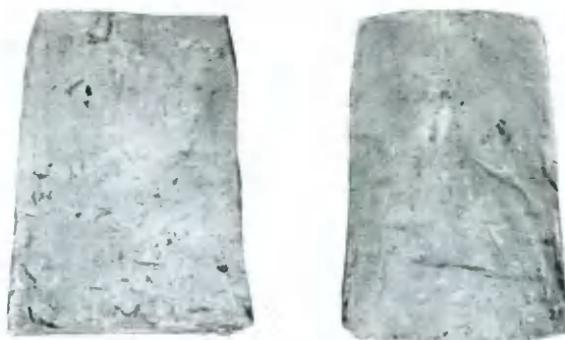
NH-2



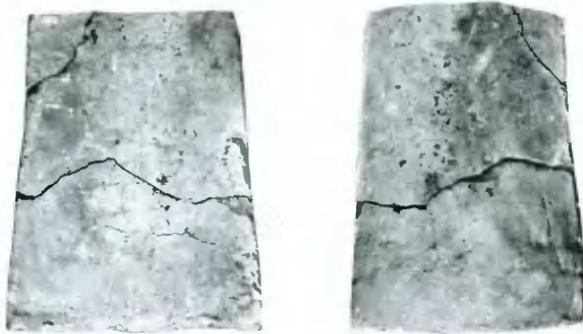
NH-3

No.13寺跡出土軒平瓦

図版28



N H - 4



N H - 6

No.13寺跡出土軒平瓦



NH-7



NH-8

No.13寺跡出土軒平瓦

図版30



NH-9



NH-19

No 13寺跡出土軒平瓦



NH-10



NH-14

No.13寺跡出土軒平瓦

図版32



N H - 11



N H - 13



N H - 15

No 13寺跡出土軒平瓦



328



324



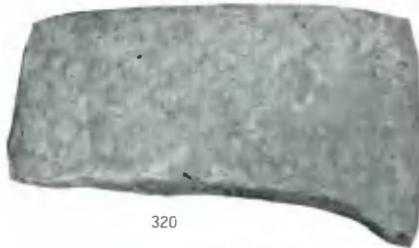
322



321



327



320



329

図版34



H-25



(D-85)



(D-94)

No.13寺跡出土平瓦



H-36



H-16



H-5

No.13寺跡出土平瓦

図版36



(D-77)



H-22



(D-92)

No.13寺跡出土平瓦



(C-61)



H-33



(D-115)

No.13寺跡出土平瓦

図版38



H - 28



H - 7



H - 3

No.13寺跡出土平瓦



H-15



(D-110)



H-3

No.13寺跡出土平瓦

図版40



N - 2



N - 4



N - 5



N - 6



N - 1



N - 3



No.13寺跡出土熨斗瓦



(D-202)



(E-312)



(D-245)



(C-203)



(C-199)



(C-234)

No.13寺跡出土丸瓦

図版42



(C-227)



(C-223)



(E-318)



(C-215)



E-301



(A-18)



No.13寺跡出土丸瓦



(D - 252)



(C - 204)



(C - 193)



(D - 225)



(E - 315)



(D - 275)

図版44



1. 奥坂遺跡遠景（北西より）



2. 奥坂遺跡 A 地区全景（真上より）



1. No. 2・3・4 住居址検出状況（東より）



2. 奥坂遺跡全景（東南東より）

図版46



1. №32住居址（南より）



2. №49住居址（南西より）



1. No.66住居址（北より）



2. No.123住居址（南南東より）

図版48



1. №87住居址（南西より）



2. №93建物（西より）



1. №77建物（東より）

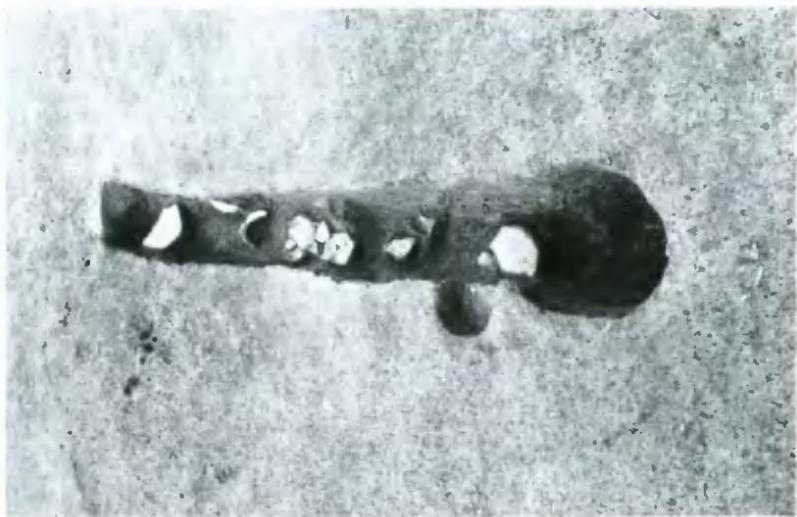


2. №76建物（西より）

図版50



1. No.69建物（東より）



2. No.126溝状土壤（南より）



1. No.94住居址（東より）



2. No.95住居址（北西より）

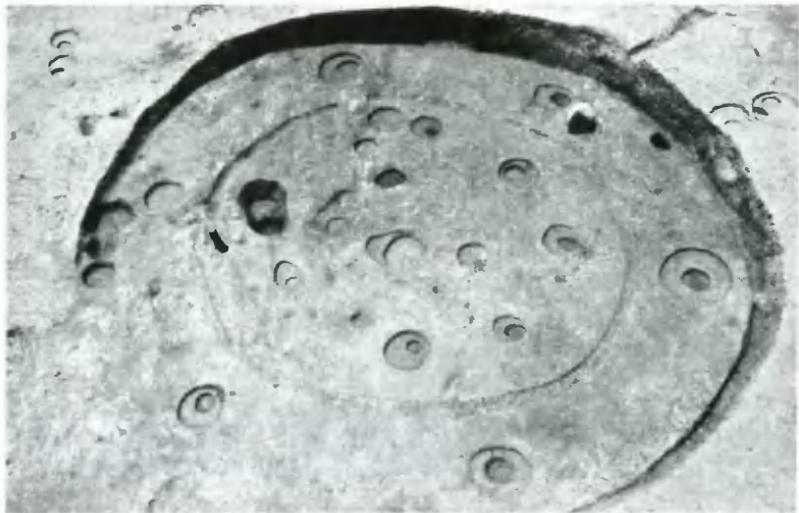
図版52



1. No. I 住居址（北より）



2. No. I 住居址（北より）

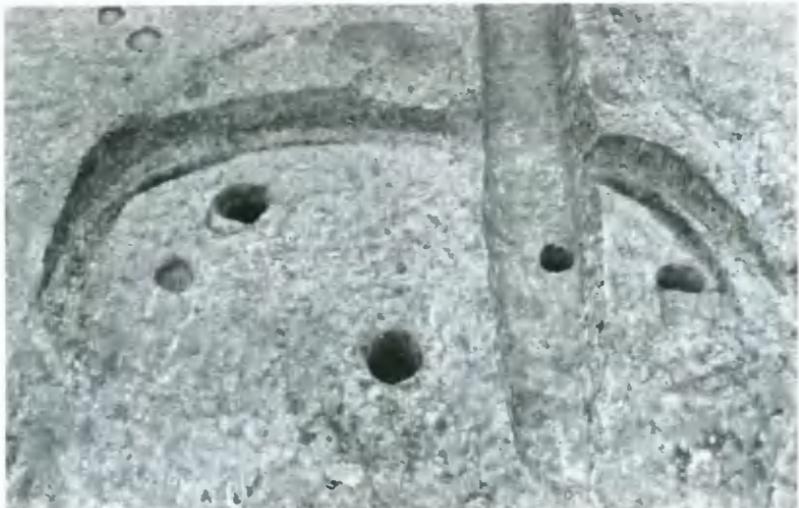


1. No.13・120住居址（南西より）

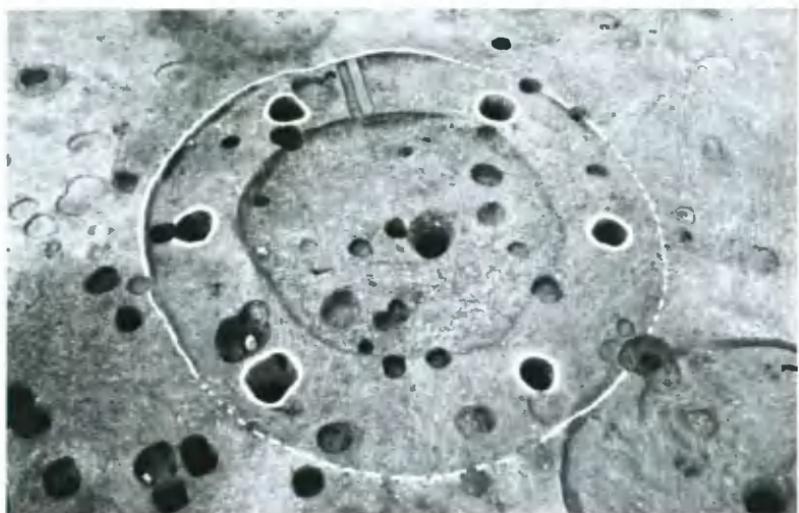


2. No.13・120住居址（南西より）

図版54



1. No.39住居址（西南西より）



2. No.62住居址（南西より）



1. No.64住居址（南より）



2. No.64住居址遺物出土状況（南東より）

図版56



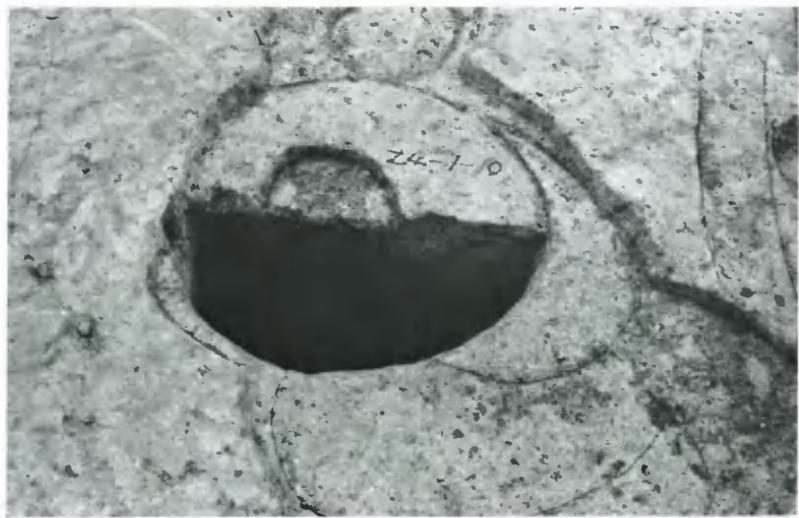
1. No24住居址（南南西より）



2. No24住居址（南南西より）

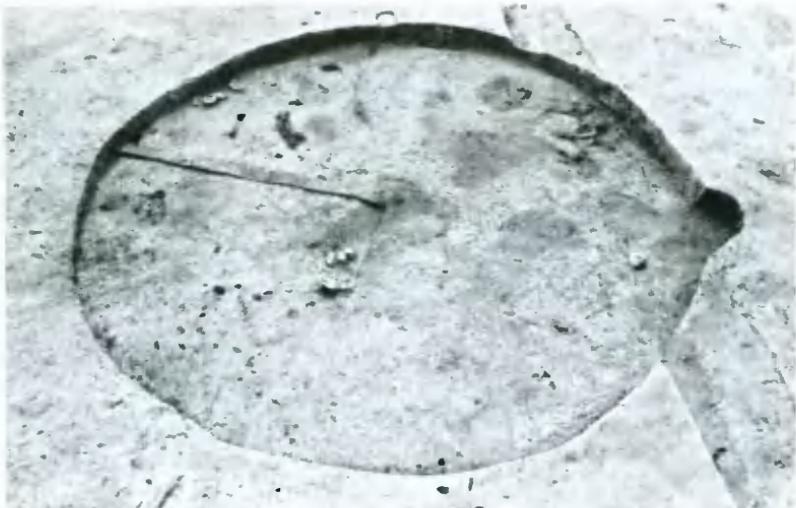


1. No24住居址火災状況（北北西より）



2. No24住居址柱穴切り合ひ状況（西より）

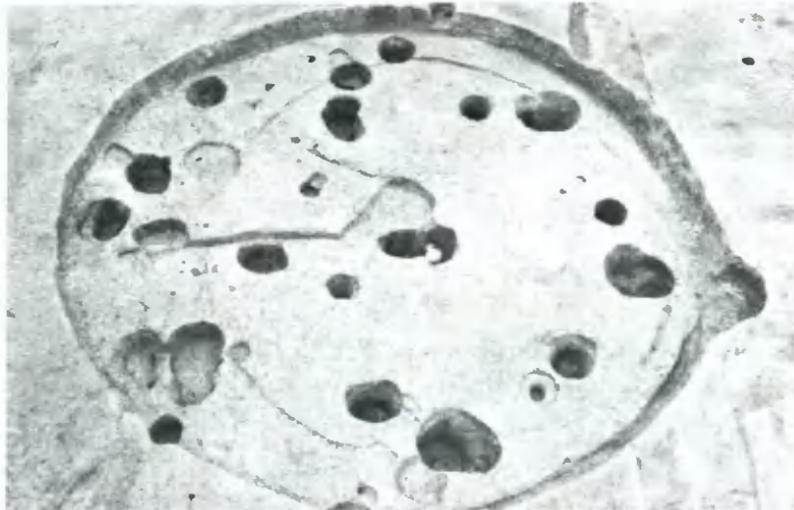
図版58



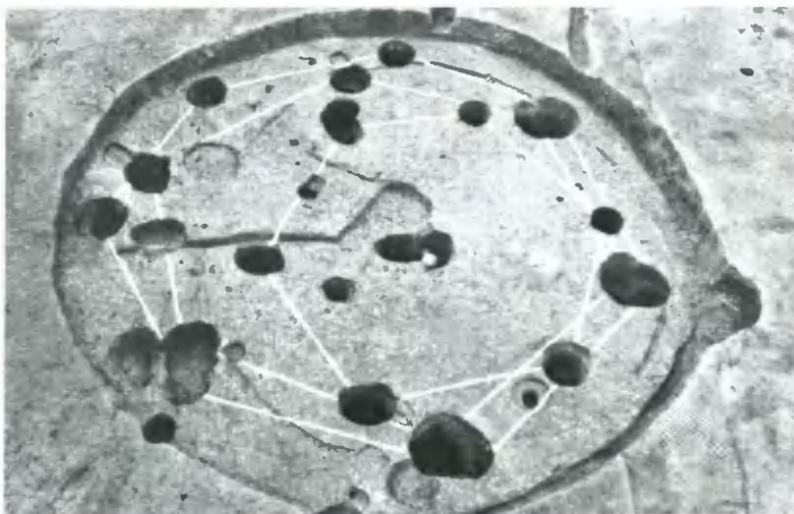
1. No25 A 住居址（南東より）



2. No25 A 住居址（南東より）



1. No25 A · B · C 住居址（南東より）



2. No25 A · B · C 住居址（南東より）

図版60



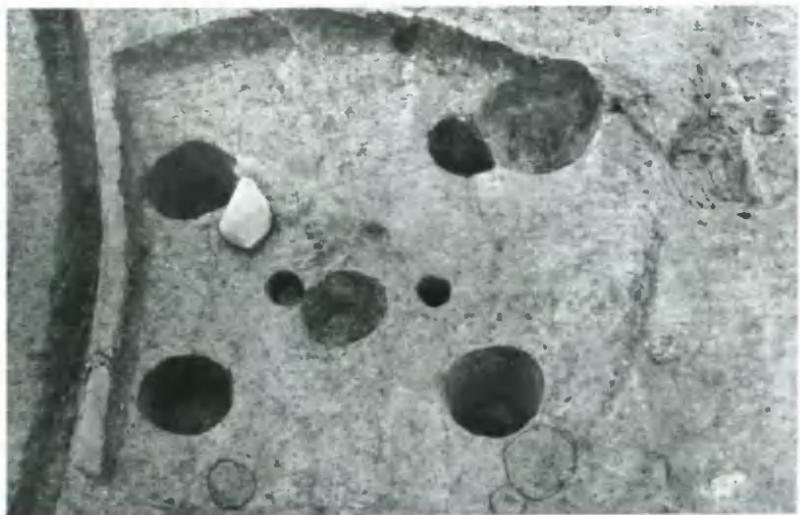
1. No.25 A 住居址遺物出土状況（東より）



2. No.25 B 住居址中央穴内壺（北より）



1. No.101・150住居址（北より）



2. No.34住居址（東より）

図版62



1. No.17住居址火災状況（南南西より）



2. No.17住居址（南南西より）



1. No. 3 住居址火災状況（南南西より）



2. No. 3 住居址（南南西より）

図版64



No 2・50住居址（北北東より）



No 2・50住居址切り合い状況（西北西より）



1. No23住居址（南南西より）



2. No23 A・B住居址壁体溝の切り合い状況（西より）

図版66



1. No.37 A 住居址（南東より）



2. No.36・37住居址（北東より）

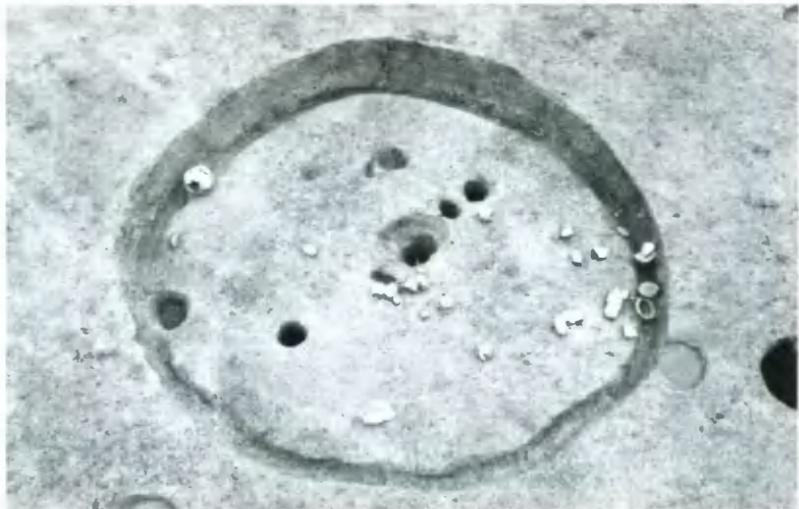


1. No22住居址火災状況（東より）



2. No21・22住居址（東より）

図版68



1. No80 A 住居址火災状況（南より）



2. No80住居址（南より）



1. №20住居址（南より）



2. №20住居址（東より）

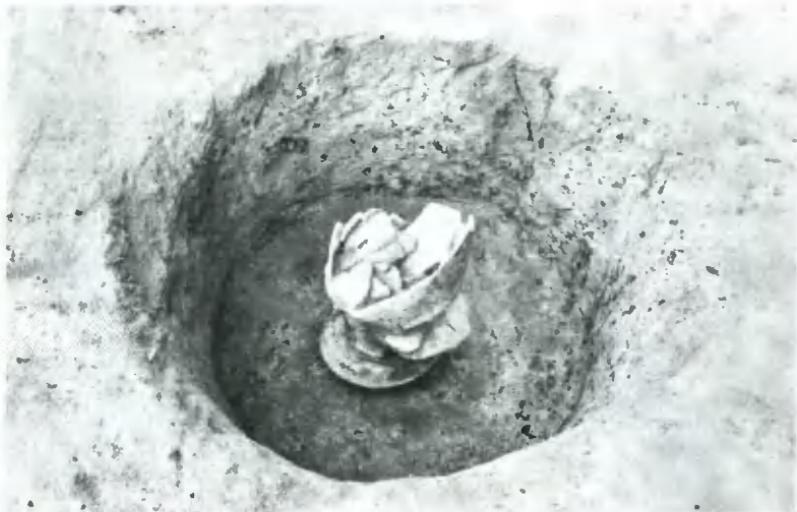
図版70



1. No 4 住居址（南より）



2. No 4 住居址（南より）



1. No.112 土壌（南より）



2. No.8 土壌（北より）

図版72



1. No140袋状土壠（西北西より）



2. No48袋状土壠（東より）



1. No.91袋状土壤（東より）



2. No.5 袋状土壤（西より）

図版74



1. No10袋状土壤（西より）



2. No52袋状土壤（北東より）



1. No 7 袋状土壤（北東より）



2. No 145・146袋状土壤（南南西より）

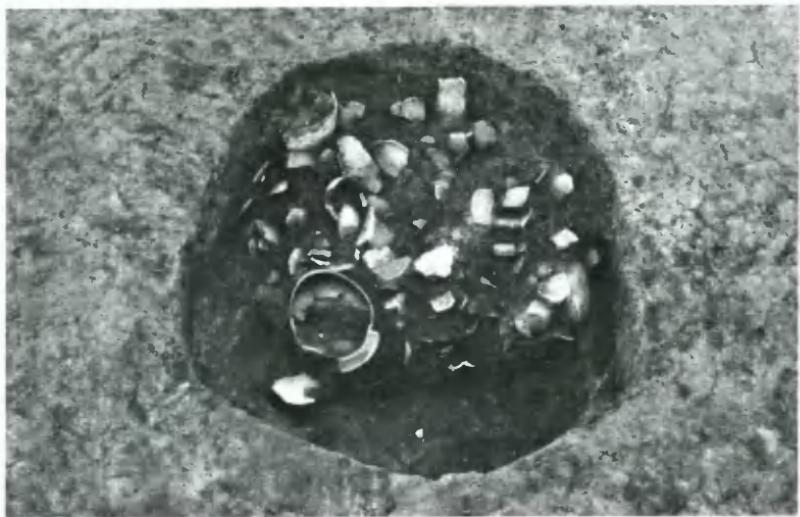
図版76



1. No.109袋状土壤遺物出土状況（北東より）



2. No.109袋状土壤貝類出土状況（南西より）



1. No.103袋状土壤（北東より）



2. No.82袋状土壤（南より）

図版78



1. №46住居址柱穴切り合い状況（東より）



2. №46住居址土層断面（西より）



1. No.29住居址（東より）



2. No.30住居址（東より）

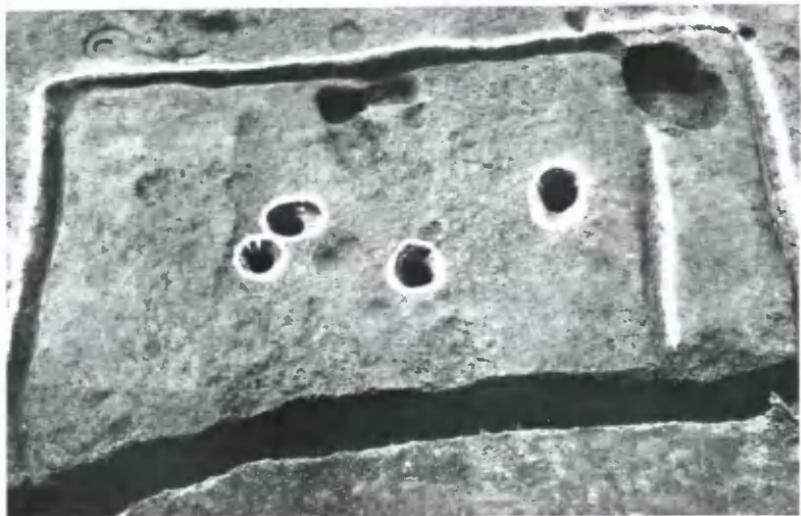
図版80



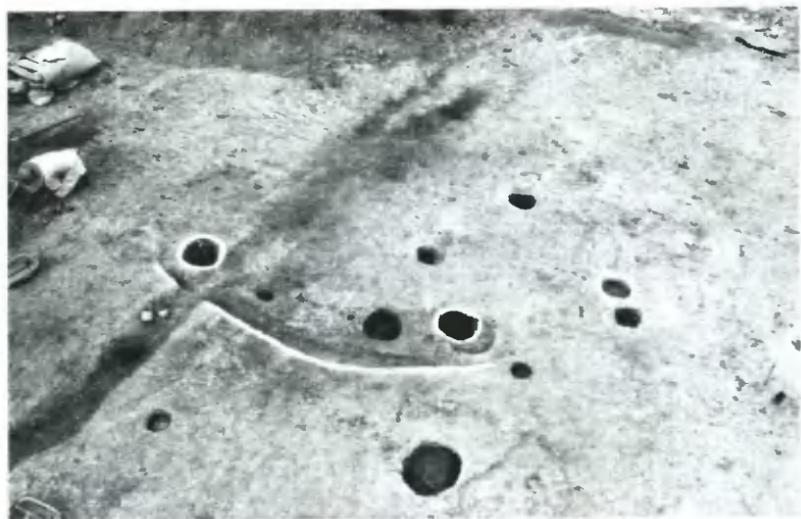
1. No45・46・47住居址（東より）



2. No47住居址（南南西より）



1. No.55住居址（北北東より）

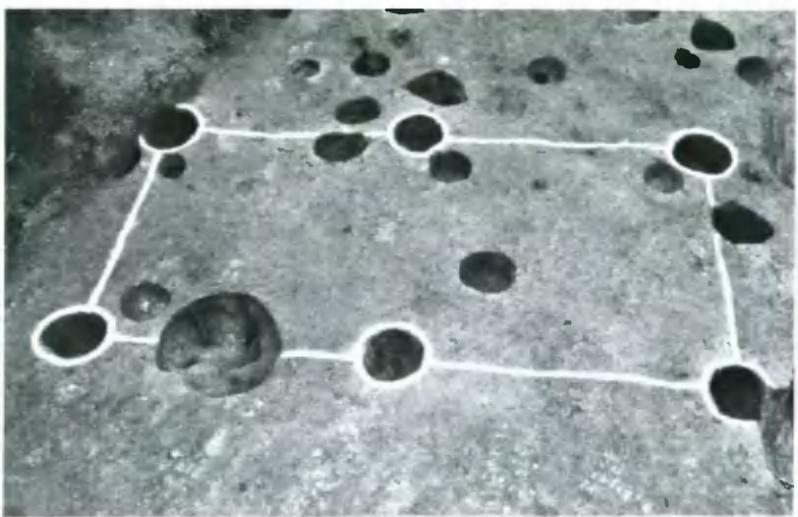


2. No.42住居址（南南西より）

図版82



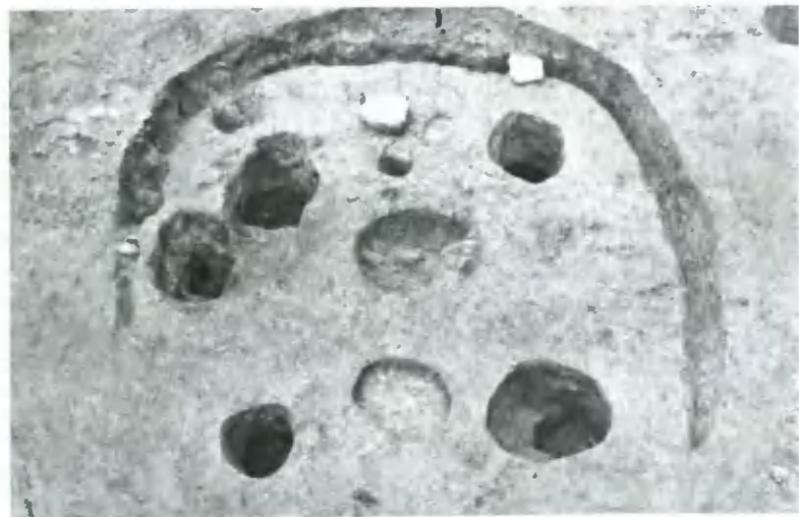
1. No.38建物（南西より）



2. No.159建物（東より）



1. No 151住居址（西より）



2. No 152住居址（北北西より）

図版84



1. No.155住居址（北西より）



2. No.156住居址土層断面（東より）



1. No.156住居址土層断面（東より）



2. No.156住居址（西より）

図版86



1. 奥坂遺跡B地区遺構全景（東より）



2. 奥坂遺跡B地区遺構全景（南東より）

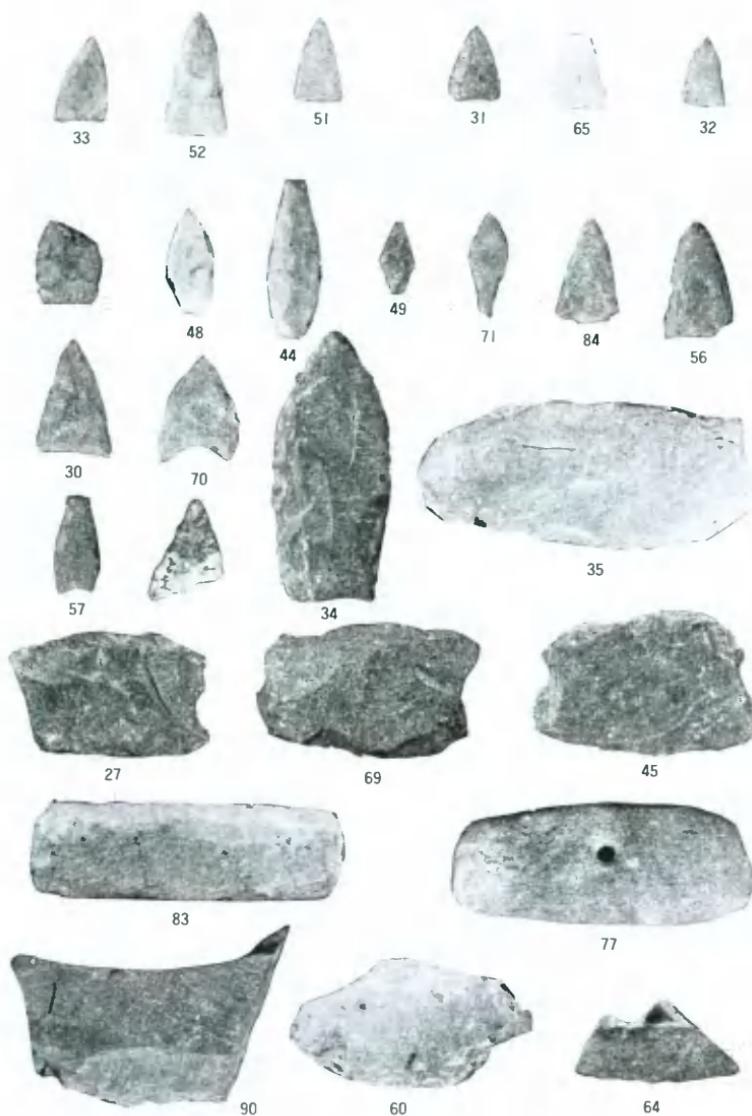


1. No.157溝（東より）

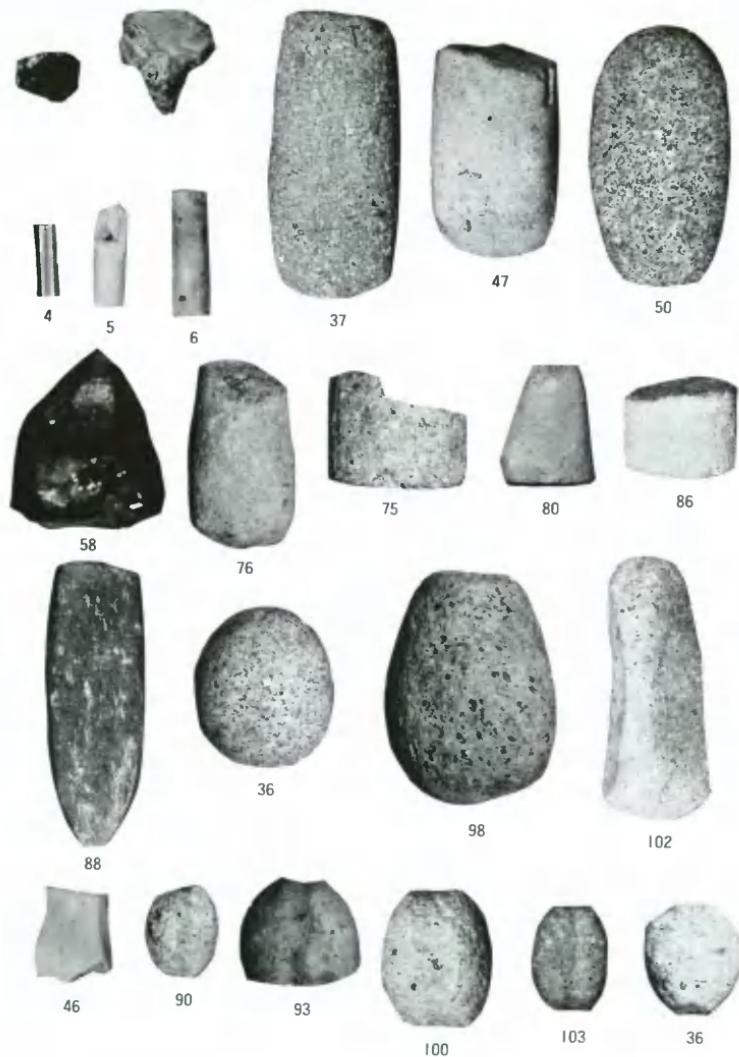


2. No.19溝（東より）

図版88

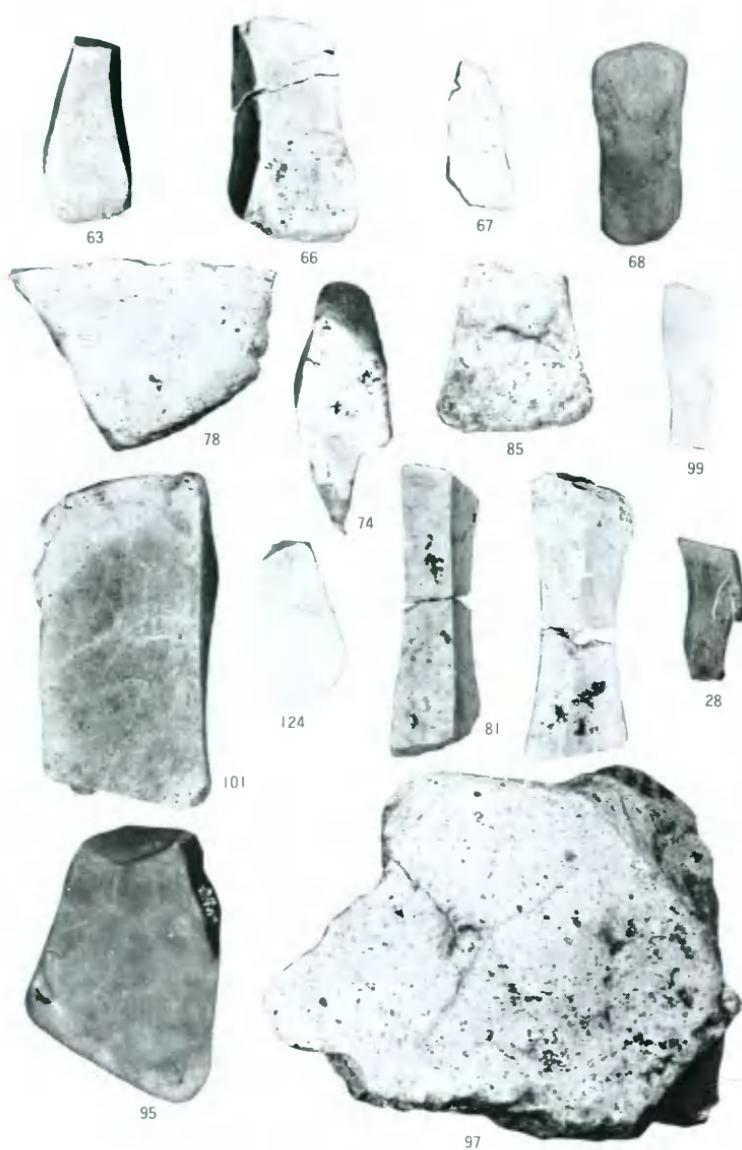


奥坂遺跡出土石器(1)

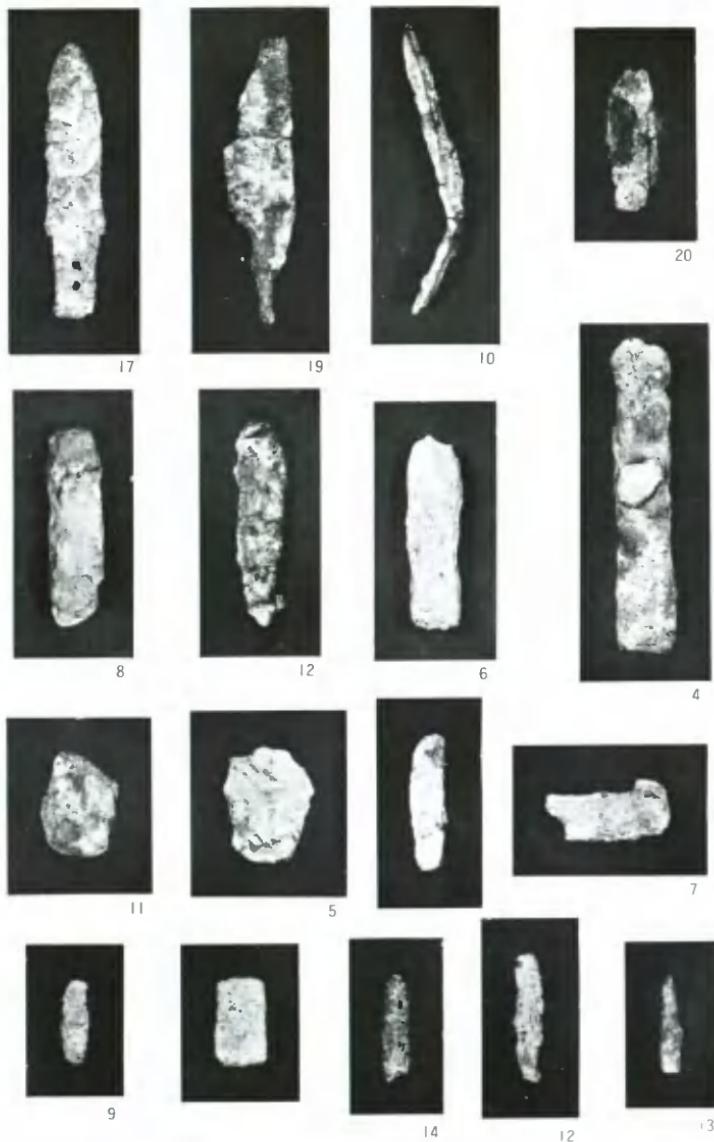


奥坂遺跡出土石器(2)

図版90



奥坂遺跡出土石器 3



奥坂遺跡出土鉄器

図版92



383



377



384



423



385



393



392

奥坂弥生時代中期III



奥坂弥生時代後期 I・II

図版94



奥坂弥生時代後期III・IV



図版96



1524 1711



1654



1649



1645



1657



1647



1647



奥坂弥生時代後期IV



1522



1523



1526



1508



1521

奥坂弥生時代後期IV

図版98



奥坂弥生時代後期IV



1377



1387



1394



1342



1344



1340



1343

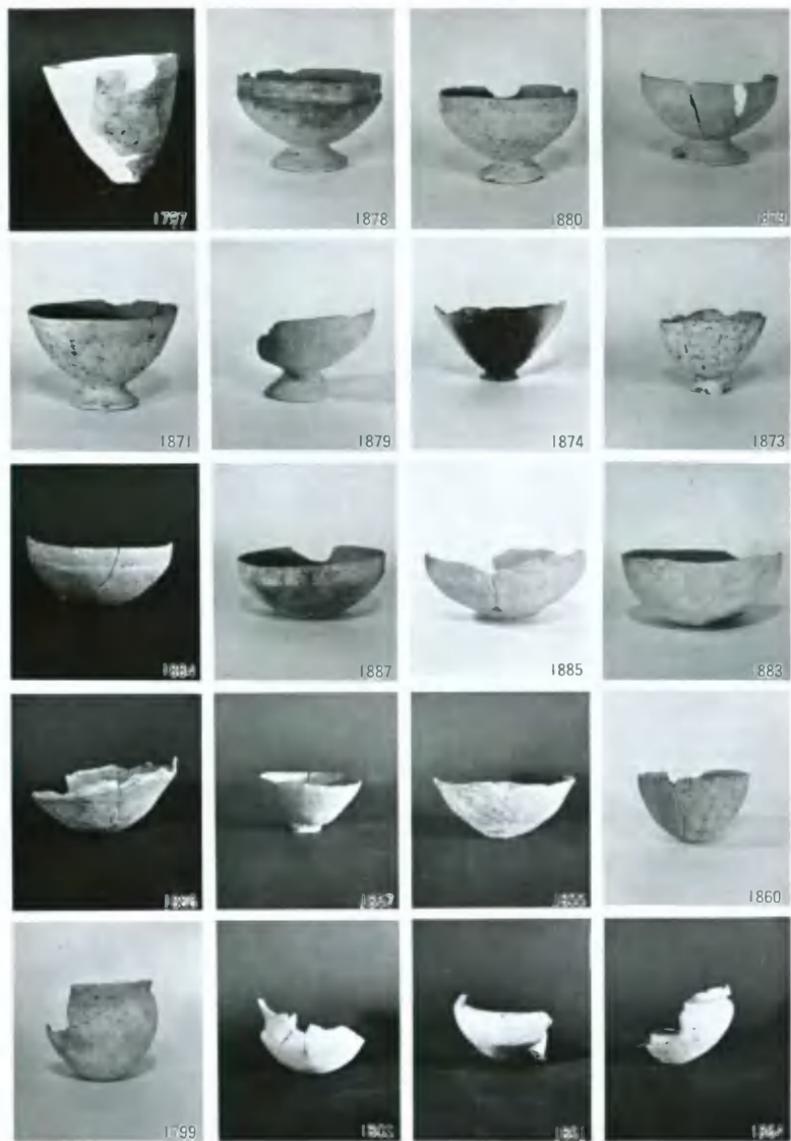


1341



1342

図版100

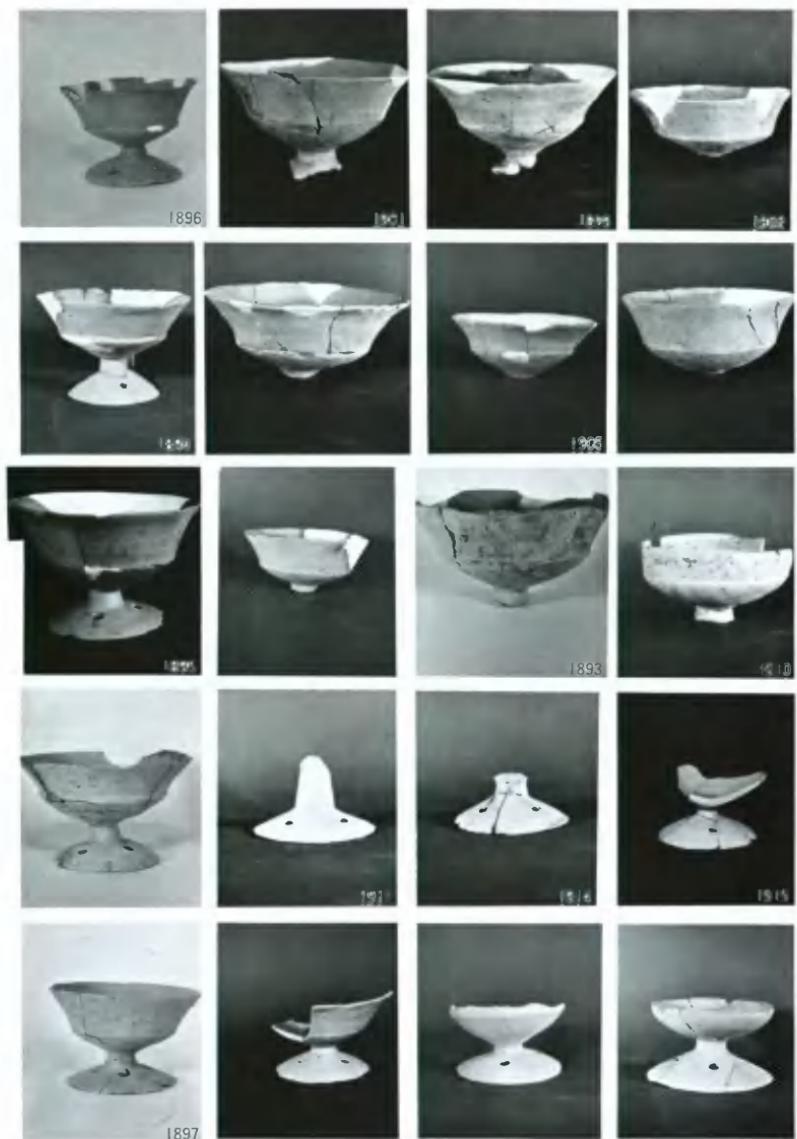


奥坂弥生時代後期IV



奥坂弥生時代後期IV

図版102

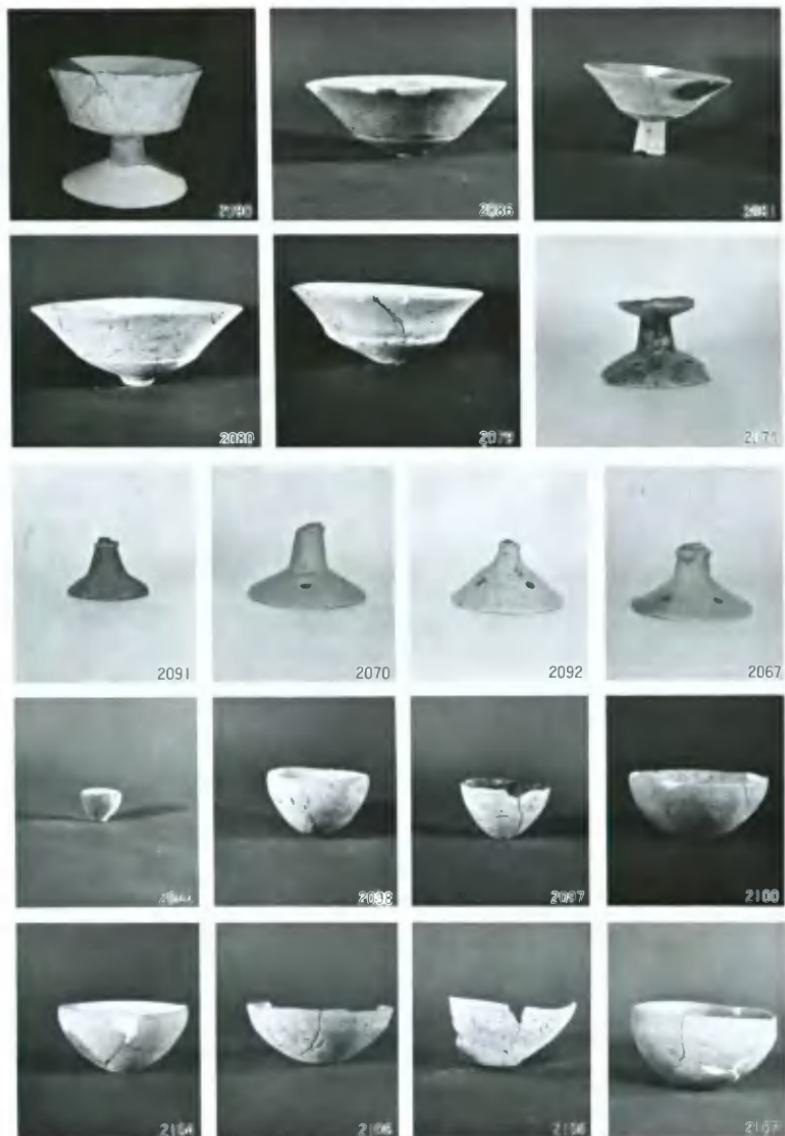


奥坂弥生時代後期IV (No.140袋状土壤)



奥坂古墳時代前期 I

図版104



奥坂古墳時代前期 I (No.82袋状土壙)



2023



2112



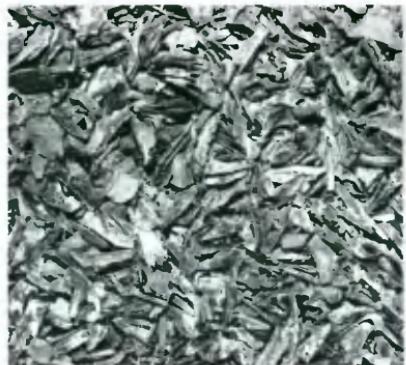
2113



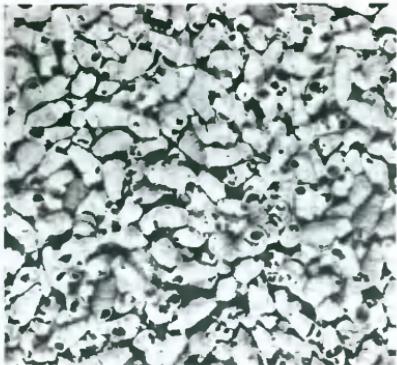
2114

奥坂古墳時代前期II・中世

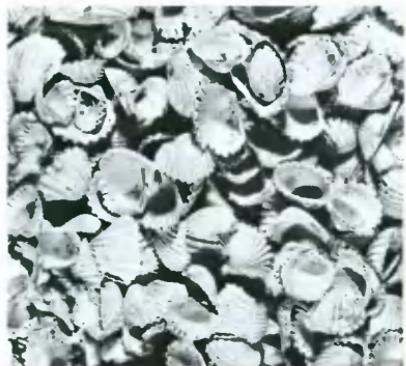
図版106



1 . No 140袋状土壤 魚骨



2 . No 140袋状土壤 ヘナタリ



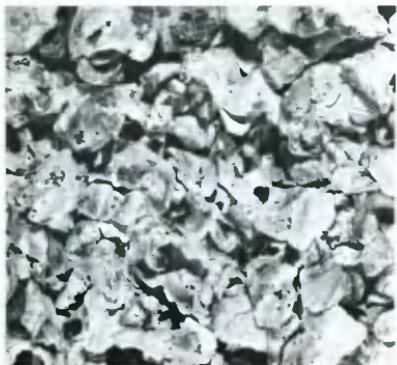
3 . No 140袋状土壤 ハイガイ



4 . No 140袋状土壤 カキ



5 . No 82袋状土壤 ハイガイ



6 . No 82袋状土壤 カキ

袋状土壤出土遺物

奥坂遺跡 No.82 袋状土壙出土の貝・魚・鳥類 遺体について

早稲田大学考古学研究室 金子浩昌

1. はじめに

本資料は、奥坂遺跡において検出された古墳時代前半期に属する貯蔵穴中より出土したものである。古墳時代のこうした動物遺体は、これまでに知られる機会は少なく、また貯蔵穴という特殊な遺構内で採集されたことも珍しい例といえよう。しかも、ここに遺された動物遺体、特に魚骨類の保存は良好で、当時の人々の水産資源利用の状況を知るための、もっとも良い資料といえよう。さらに、貯蔵穴中での出土は、それ自体一定の範囲に埋存するものであるところから、一括資料として重要であるし、骨の保存からいっても、多くの部位からなる骨格が、限られた地点からの出土であるが故に、個体間の関係を見るのに都合が良く、遺骸の残存状況を正確に知ることも可能になってくる。このような資料が完全に発掘、調査されるということになれば、そこから得られる情報は多くの分野にわたり、かつまた示唆に富むものとなろう。

報告にあたって、この貴重な資料の調査の機会を与えられた岡山県教育委員会に深く感謝の意を表するとともに、直接のご教示やお世話をいただいた関係者には心からの御礼を申し述べたいと思う。

2. 動物遺体の種類と内容

軟体動物門 Phylum Mollusca

腹足綱 Class Gastropoda

前鰓亜綱 Prosobrancia

中腹足目 Mesogastropoda

ウミニナ科 Potamididae

1. ウミニナ *Batillaria muliformis*

5個が採集されている。火を受けて焼けた痕跡が見られる。殻が灰白色に変色し、非常に脆くなっているようである。殻頂、殻口の破損している標本の多いのもそのためであろう。殻径は7~10mm前後のものと思われる。内湾泥底の干潟に群がる。

2. カワアイガイ *Cerithideopsis djadariensis*

この貝も、火を受けて焼けたような状態の殻の変色が見られる。殻頂、殻口部ともに破損し

奥坂遺跡

ている。殻径は10~11mmくらいのものである。泥の多い内湾の泥底に棲息する。

タマガイ科 Naticidae

3. ゴマフダマガイ *Cryptonatica tigrina*

5個のうち1個が、灰白色に火を受けた状態に変色している。殻が丈夫なためか、比較的保存は良い。殻径は小さいもので20mm、大きいもので24mmである。瀬戸内海には多産する貝で、別名ヘソクリという。内湾の砂泥底に潜入し、二枚貝を捕食する。

新腹足目 Neogastropoda

アクキガイ科 Muricidae

4. アカニシ *Rapana venosa*

著しく殻の破損している標本のみである。これは殻が大きくなく、薄いためであるかも知れない。殻柱が5個数えられる。潮間帯から20mくらいの内湾の砂泥底に棲息する。

二枚貝綱 Pelecypoda

翼形目 Pteriomorphia

フネガイ科 Arcidae

1. ハイガイ *Tegillarca granosa*

大小の殻が出土している。右殻が6個、左殻が3個ある。殻長24mmくらいから60mmまでの大きさのものが含まれる。45mm以下のものが多いようである。瀬戸内海沿岸の貝塚では、もっとも多い貝種の一つである。内湾奥の泥底に棲息する。

イタボガキ科 Ostreidae

2. マガキ *Crassostrea gigas*

小さな殻のもののみが採集されている。殻はすべて左殻である。殻高で40mmから60mm近くまでのものである。7個があり、そのうち1個が灰色に変色した殻のものである。

異歯目 Heterodontia

シジミガイ科 Corbiculidae

3. ヤマトシジミ *Corbicula japonica*

小さい殻が出土している。右殻が3個、左殻が5個ある。殻長25mm以下のもののみである。焼けている殻はない。汽水産である。

マルスダレガイ科 Veneridae

4. オキシシジミ *Cyclina sinensis*

大形の殻3個が採集されている。右殻が3個、左殻が1個ある。殻高は55mmくらいである。内湾の潮間帯の泥底に棲息する。

リュウキュウマスオガイ科 Asaphidae

5. イソシジミ ? *Nuttalia olivacea*?

左殻の破片が、1個出土しているのみである。また、かなり破損している標本であるため、疑問も残る。同科のフジナミガイ *Hiatula boeddinghausi* あるいはムラサキガイ *H. diphos* の可能性もあるが、一応イソシジミとしておく。イソシジミ、ムラサキガイであれば、内湾の潮間帯から10mくらいの泥底や砂泥底の棲息である。

脊椎動物門 Phylum Vertebrata

軟骨魚綱 Class Chondrichthyes

サメ目 Lamniformes

科不明種 family indet.

椎体 4

椎体は、横径7.0mm、長さ7.0mmほどのものである。ドチザメやホシザメなど、沿岸に棲息する小さいサメ類のものであろうと思われる。

エイ目 Rajiformes

科不明種 family indet.

椎体 31

椎体は、横径9~10mm、長さ5~6mmのものが21点と、それより小さいものが10点ある。

硬骨魚綱 Osteichthyes

ウナギ目 Anguilliformes

ウナギ科 Anguillidae

ウナギ *Anguilla japonica*

内臓骨

歯 骨 R1

脊 柱

脊 椎 1

歯骨の全長 43.0mm

ハモ科 Muraenesocidae

ハモ *Muraenesox cinereus*

頭蓋骨と内臓骨

前上顎骨 2

篩 骨 2

鋤骨板 2

前頭骨 1

奥坂遺跡

歯骨 R1

この標本のうち、1個は前頭骨部分を欠いている。また鋤骨板には、犬歯状の大形の歯が1個残存していた。

前頭骨幅 13.4mm

ダツ目 Beloniformes

ダツ科 Belonidae

ダツ属 *Strongylura sp.*

内臓骨

鼻骨 RL各2対

Lのみ1

歯骨 L2

標本は短く折れ、原形を留めるものはない。長い骨であったために、発掘調査時に折れてしまったようである。3個体分くらいの骨が埋存していたことが推察される。

スズキ目 Perciformes

スズキ科 Serranidae

スズキ *Lateolabrax japonicus*

内臓骨

主上顎骨 R2

歯骨 R4, L1

関節骨 R2, L3

主鰓蓋骨 R2, L1

肩帶

鎖骨 R5, L2

担鰓骨

臀鰓血管間棘 3

鰓棘

臀鰓第二棘 9

標本はかなり断片的であり、部位によっての量差が大きい。たとえば、歯骨は右側のみに限られているのに対して、関節骨は左右のものが出土するといった状態である。

歯骨の連合部の高さは、次の通りである。

(L): 7.3 7.3 9.7, (R): 10.6 10.8

歯骨はわずかに4個体であるが、臀鰓の第二棘は9個体もあり、もっと多くの個体数を数

奥坂遺跡No.82袋状土壙出土の貝魚鳥類遺体について
えることができる。それによると、大小二つの大きさのものに分けられそうである。また、この棘の基部に切り傷をつける標本が2例あるが、おそらく棘を切り離そうとした作業であったのであろう。

マハタ属? *Epinephelus* sp.?

内臓骨

前上顎骨 R1

主上顎骨 R1, L1

歯 骨 R4, L2

関節骨 R1, L3

舌 顎 骨 R1, L1

前鰓蓋骨 R2, L4

主鰓蓋骨 R1

担鱗骨

臀鰭血管間棘 4

鰭 棘

臀鰭第二棘 3

歯骨全長計測値 (mm)

R	28.0	39.0±	39.0±
L	27.0	32.2	32.0±

やや大きさを異にしたハタ6個体分ほどがあった。

ニベ科 Sciaenidae

属・種不明 Gen. et sp. indet.

内臓骨

主上顎骨 L1

前上顎骨 R2, L1

歯 骨 R2, L1

大形の個体になるものである。近海泥底に棲む魚であり、旧児島湾奥には多く棲息していたのではなかろうか。貝塚などでの出土例は少なく、今回のように多くの骨の出土したのは初めてである。

タイ科 Sparidae

クロダイ *Acanthopagrus schlegeli*

奥坂遺跡

頭蓋骨

上後頭骨 1

内臓骨

前上顎骨 R6, L4

歯 骨 R2, L4

関節骨 R1, L3

肩 帯

肩甲骨 R2

担鰭骨

臀鰭血管間棘 8

鰭 棘

臀鰭第二棘 6

保存の良い前上顎骨と歯骨が、遺されている骨の大部分である。

前上顎骨は左4個、右6個が出土しているが、左右同大のものは大小3組で、他の右3個、左1個は大きさを異にするのでそれぞれ別個体であるところから、最少個体数は7個体になる。

前上顎骨の大きさは、次の通りである。（+：推定値）

R:	19.8	22.6	26.0	27.0	30.6	31.5
L:	16.0	20.0			+	31.3

歯骨は、左右が揃うもの1組、他は揃わない。大きさは、ほぼ前上顎骨に比定されるものを含む。

フグ目 Tetraodontiformes

フグ科 Tetraodontidae

フグ科の一種 Tetraodontidae gen. et sp. indet.

内臓骨

上顎歯 (R, L) 同一
R1 } 大型標本

R2, L1 — 小型標本

下顎歯 (R, L) 同一
L1 } 大型標本

(R, L) 同一 — 小型標本

奥坂遺跡No.82袋状土壙出土の貝魚鳥類遺体について

前鰓蓋骨 R1
主鰓蓋骨 R1 } これは小さい同一個体のものと思われる。

歯 骨 同一個体と思われるもの

上段 R・L は上顎歯計測値、下段 R・L は下顎歯計測値

R:	$\left\{ \begin{array}{l} 47.1 \\ 47.0 \end{array} \right.$	$\rightarrow 39.4$	$\left\{ \begin{array}{l} 27.0 \\ 22.0 \end{array} \right.$
L:	$\left[\begin{array}{l} 47.0 \\ - \end{array} \right]$	$\left[\begin{array}{l} 17.4 \\ - \end{array} \right]$	$\left[\begin{array}{l} 13.0 \\ - \end{array} \right]$
R:	$\left[\begin{array}{l} 34.0 \\ - \end{array} \right]$	$\left[\begin{array}{l} 13.0 \\ - \end{array} \right]$	
L:	$\rightarrow 41.4$		

歯骨は、上下、左右の揃ったものが、このNo.82袋状土壙内に埋存していたのではないかと思われる。

大、中、小の3個体分のものと、別に2個の上顎歯があり、計5個体分の歯骨があったことになる。このうち中形の標本で、体長が40cmくらいになる大きさのものである。

標本は、他に内臓骨のいくつかがあり、特に大形の個体のものに属する標本である。大形の頭蓋骨らしい骨は見えないので、顎骨とその周辺の部分だけが切り取られたのであろうか。

カサゴ目 Scorpaeniformes

コチ科 Platycephalidae

コチ (マゴチ) *Platycephalus indicus*

頭蓋骨

鋤骨 2

基底後頭骨 1

前頭骨 1

内臓骨

主上顎骨 R1

歯骨 R7, L7

関節骨 R3

口蓋骨 R2

主鰓蓋骨 R7, L7

脊柱

第一腹椎 2

腹椎 17

尾椎 13

肩帶

奥坂遺跡

鎖骨 R1, L5

以上が、コチの遺されていた骨の主要部位である。歯骨および主鰓蓋骨が主として遺された骨であり、その他の骨の大きさが極端に違うことが注目される。標本で数の多い主鰓蓋骨や歯骨から最少個体数が推定されるが、歯骨で見る限り実数はさらに多く、9個体分くらいになるらしい。それは大形の歯骨が左側にのみ4個、やや小さい歯骨が右側に5個、計9個体分があったと推定されるからである。

埋存していたコチの大きさは、小さい個体で体長30cm程度のものが2ないし3個体あり、他はそれよりはるかに大きい個体のものである。

鳥綱 Class Aves

ガンカモ目 Anseriformes

ガンカモ科 Anatidae

ガンカモ科の一種 Anatidae gen. et sp. indet.

右中手骨 1

全長 41.5mm

中形カモの中手骨である。鳥骨はこの中手骨の1点のみで、他に断片すら発見することはできなかった。

3. No. 82 袋状土壌出土動物遺存体の特徴

奥坂遺跡No.82袋状土壌から出土した動物遺体は、大部分が貝類と魚類であった。このようにほとんど水産資源のみから成る埋蔵物は、この土壌が、特定の動物を対象としたものであることを示している。

土壌中から動物遺体の出土することは、縄文時代にかなりの例が知られている。大別して植物遺存体の埋存と、動物質遺存体の埋存とに分けられる。植物遺体は、ドングリ、クリ、トチ、クルミなどの堅果類で、これらは、土壌に入れられることによって、凍結することなく、ほぼ一定温度・湿度に保たれる。したがって、その目的は貯蔵と考えてよいであろう。しかし、魚類や貝類の場合、土壌内では腐敗を防ぐことはできない。むしろ、廃棄するための穴とみなした方がよいと思われる。

貝類の場合は、純貝層となって土壌内に埋存する例が、東北・関東地方を中心として知られ、ごく短期間の堆積であることが貝の成長輪の観察からも証明されている。秋田県大畠貝塚では、二つのフラスコ状ピットにサメ類、エイ類、ニシン、サケ科、マダイ、クロダイ、ブリ、サバ類、コブダイ、カサゴ科、アイナメ、コチ、ヒラメ、ウシノシタ科の魚類を中心とした埋存があり、ブリ、サバの1才未満と思われる若い個体が目立った。また、出土した部位骨

奥坂遺跡No.82袋状土壙出土の貝魚鳥類遺体について

に片寄りがみられ、解体・調理した痕跡（頭部を取り除いたり、“開き”にした状態を推定させる）をとどめていた。

このように、土壙内という特殊な出土状況は、出土遺物が限られるという短所もあるとはいえる、時間的にごく限られた時期の所産であり、その保存率を算定したり、同一個体か否かの確認を通して、かなり具体的な当時の生活の一端を知り得る可能性をもっているといえよう。

これをふまえた上で、本遺跡での土壙の埋蔵物の場合を考えてみよう。

本遺跡で多くの遺存体を出土したのは、魚類骨であった。それらは、種類によって、その骨格の保存状況が、かなり異なるのであるが、ウナギ、ハモ、ダツ、コチ、クロダイ、フグ類などの保存状況をみると、いずれも、頭部の骨が大部分を占めている。特に、頸骨部分を比較的よく遺していた（ハモ、ダツ、フグは、脊椎骨はほとんど含まれていないようである）。一方、それらの頸骨の、上下、左右の大きさを比較してみると、大きさがばらばらであり、対になるものは少ない。

こうした点をみると、これらの魚が、すでに解体処理された後のものではなかったかということを予測させるのである。これらは貯蔵のためではなく、食用にするため解体された後ものであったと考えるのである。さらにいえば、もし解体調理のために、まず頭部を切り離し、はじめから食用とせず、頭部のみ丸ごと捨ててしまったのであれば、もっと左右（あるいは上下）が対になって残存していてよいはずである。したがって、細かくいえば、いったん食用にあてられた後、その残余を廃棄したものではなかったかと推察するのである。

フグの大型の歯であるとか、クロダイ、スズキ、ハタなどの臀鰭の尾棘のような、利用できない部分の骨がよく遺されていたことは、縄文時代以来の貝塚での遺存の特徴と似かよっている。したがって、この点から考えても、本遺跡の土壙が、廃棄用のものであった可能性が高いのではないかと考える。また、貝類には一部焼けているものがみられたが、魚類骨には火を受けた跡はみられなかったように思う。料理法は、煮ることが中心であったのであろう。

ところで、この遺構でもっとも特徴的に出土した魚類遺体は、その種類の構成をみると、それ自体、当時の人々の利用していた魚類の内容を示していることになり、そこに人為的に働いた選択が当然あると思われる。しかし、その背景になった自然環境も、間接的にうかがい知ることができる。出土した魚種の生息場所をみると、大形のフグであるとか、ハタ類のように、岩礁地帯に棲む種類もあったが、多くは、内湾の砂泥棲の種類である。このことから、これらの魚は、この遺跡が直接に面する旧児島湾の入江内で、大部分漁獲されたものといえよう（一部は、外海に出ての捕獲が考えられようが……）。こうした推測は、たとえばこの遺構内出土魚種に、瀬戸内海に特徴的なマダイ、サワラといった外海種が、まったく含まれていないことからも、首肯されることである。

奥坂遺跡

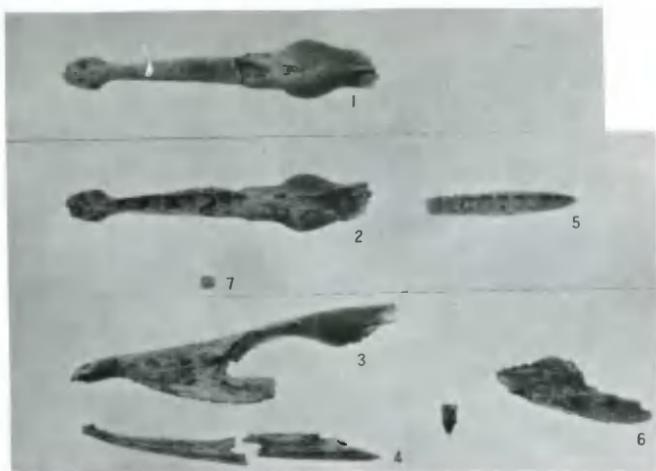
おそらく当時、古墳時代前半期には、なお広大な入江が展開していたはずであり、こうした海の沿岸に、魚が多く接岸してくる夏から秋にかけての漁獲であったのであろう。ただし、コチは、大小含めて9個体みられ、もっとも多いが、産卵期（地方によって異なるが5月から8月）が釣りの好シーズンといわれている。また、フグ類も5個体出土しているが、この漁期は、1年中可能だが、特に秋から冬といわれている。したがって、これらの埋蔵物が、どのくらいの期間で形成されたかを、厳密にいうことは難しい。けれども、1年以上にわたることはないとと思われる。鳥類の遺体で、冬期に主として飛来するカモ類の骨が、わずかに1点あったが、断片的な骨であることから、同時期に捕獲されたものかどうかは問題が残る。

貝類については、汽水産のヤマトシジミのあることから、湾奥の河口に近い環境が、この近くに存在したことが推測され、また泥底棲のハイガイ、オキシジミ、マカキなどは、この湾内での採集であろう。しかし、採集量は魚骨に比較して少ない。

今回調査されたN=82袋状土壙より採集された動物遺体を通して、以上のような捕獲の条件、季節などが推測された。さらに、土壙内にあったのがほとんど水産資源に限られたこと、魚具などの道具類が検出されなかつたことなどは、ここが単なる投棄の場所ではなく、特に水産資源に対して特別に選定された場所で、ここにおいて何らかの祭礼的な行為の行われたことも考えられるのであるが、これについては、他の共伴する遺物などと考え合わせてみなければならないであろう。少なくとも、当時の人々の日常の食生活をそのまま反映していると、簡単に結びつけない方がよいと思われる。

追記

魚種骨中にニシン目 Clupeiformes、ニシン科 Clupeidae ヒラ *Ilisha elongata* (歯骨右2、左2、すべて別個体) が確認された。個体数も多く、重要魚であったろう。沿革、河口の魚であり、多獲されたのではなかったろうか。



上段 ハモ

1 ~ 3 頭蓋（前上顎・篩・鋤骨板・前頭骨）

1.上面、2.底面、3.側面觀

4 右歯骨

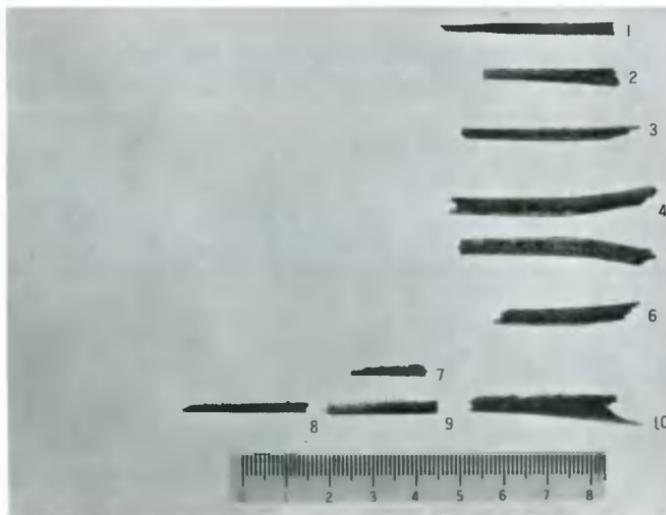
5・6 鋤骨部分

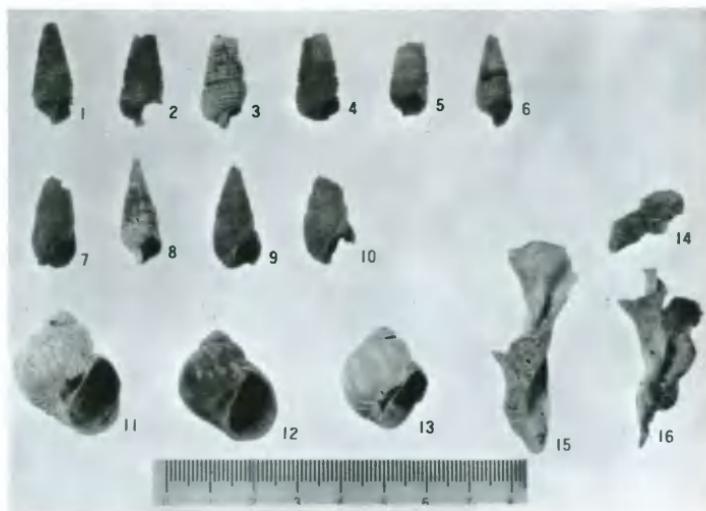
7・8 鋤骨衝

下段 ダツ属

1 ~ 6 鼻骨部分（3.4.6.左、5.右）

7 ~ 10 歯骨（7右、8 ~ 10左）





上段

1 ~ 6 カワアイガイ

7 ~ 10 ウミニナ

11 ~ 13 ゴマフダマガイ

14 ~ 16 アカニシ

下段

1 ~ 3 ハイガイ

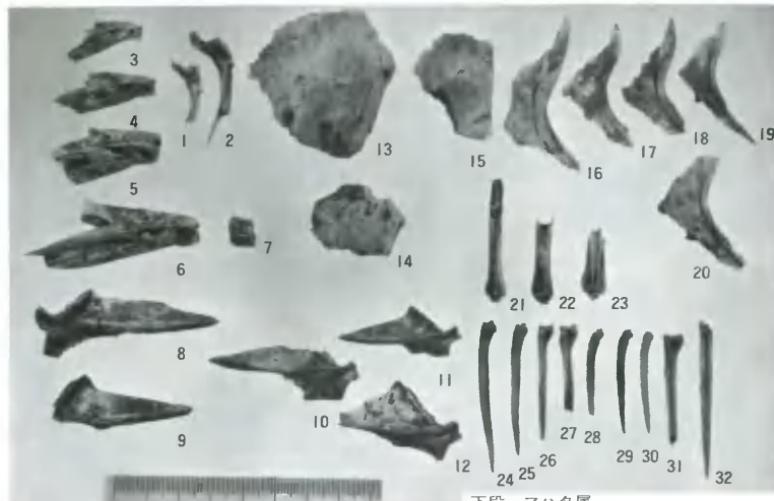
4 イノシジミガイ

5 ~ 6 マガキ

7 ~ 9 ヤマトシジミ

10 オキシジミガイ



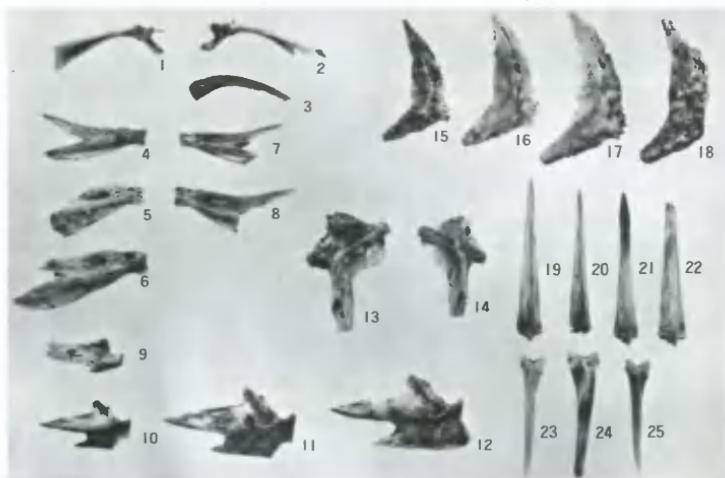


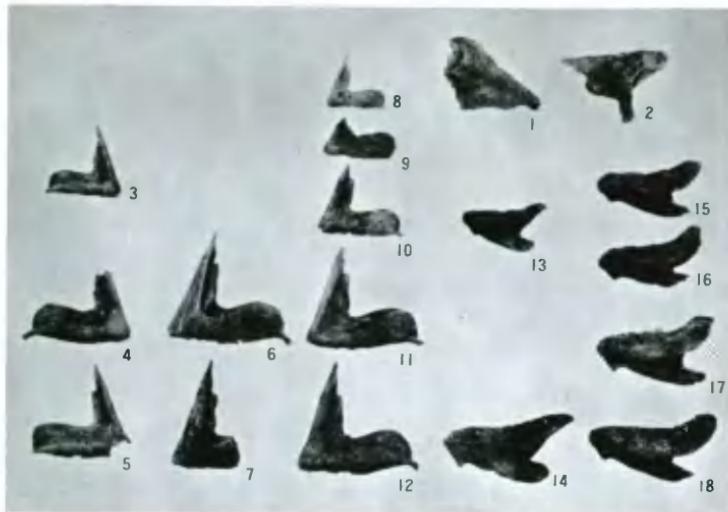
上段 スズキ

- 1・2 右主上顎骨 13・14 右主鰓蓋骨
- 3～6 左歯骨 15 左主鰓蓋骨
- 7 左齒骨 16～20 右鎖骨
- 8・9 右関節骨 21～23 脊鰭第2棘血管間棘
- 10～12 左關節骨 24～32 脊鰭第2棘

下段 マハタ属

- 1・2 主上顎骨 (1.左、2.右)
- 3 右前上顎骨
- 4～9 歯骨 (4.5.6.右、8.9.左)
- 10～12 左關節骨
- 13・14 舌顎骨 (13.右、14.左)
- 15～18 左前鰓蓋骨
- 19～22 脊鰭第2棘血管間棘
- 23～25 脊鰭第2棘



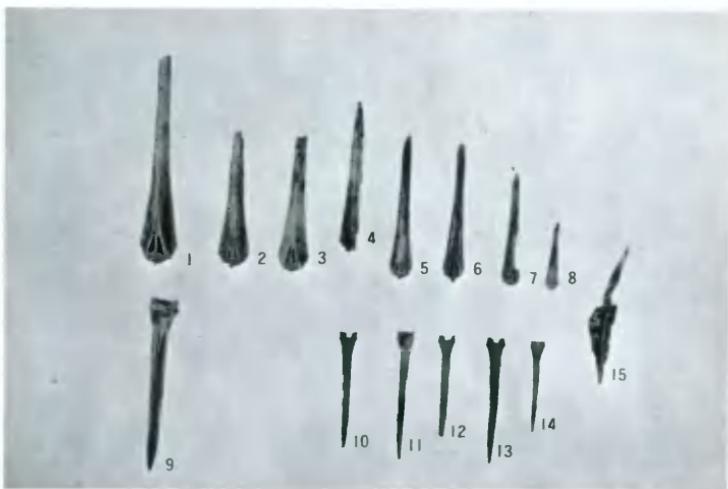


上段 クロダイ

1・2 上後頭骨 15~18 左歯骨
3~7 右前上頸骨
8~12 左前上頸骨
13~14 右歯骨

下段

1~8 脊椎第2血管間棘
9~14 脊椎第2棘
15 背鰭棘と神経間棘





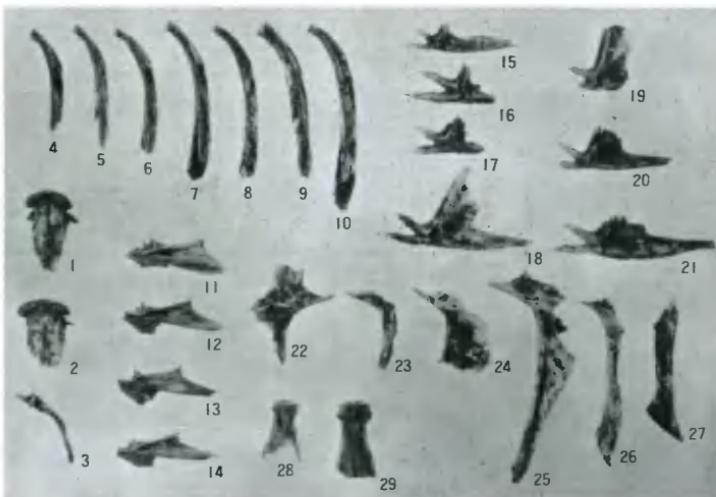
上段 ニベ科

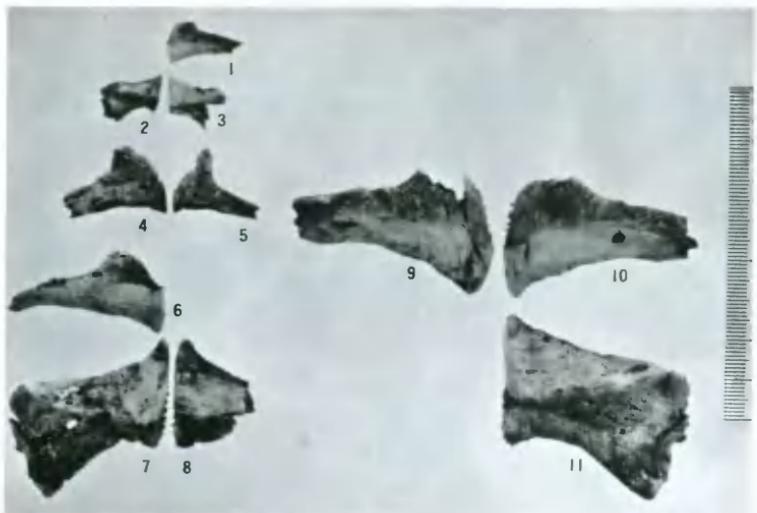
- 1・2 右前上顎骨
- 3 左前上顎骨
- 4 左主上顎骨
- 5・6 右歯骨
- 7 左歯骨

下段 コチ

- 1・2 鋤骨
- 3 主上顎骨
- 4-10 右歯骨
- 11-14 右間節骨
- 15-21 右主鰓蓋骨

- 22 右鎖骨
- 23-27 左鎖骨
- 28-29 尾部棒状骨



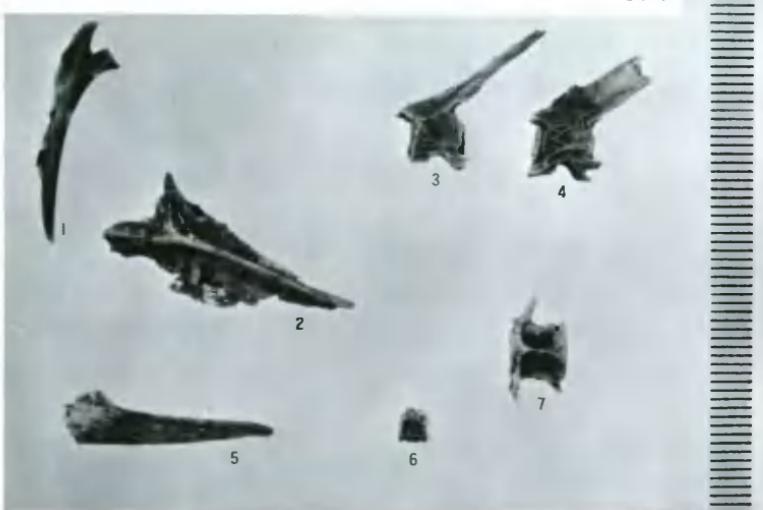


上段 マフグ科 属・種不明

1・4・5・6・9・10 上顎歯 (右4・6・9、左5・10)
2・3・7・8・11 下顎歯 (右2・7、左3・8・11)

下段 マフグ科 属・種不明

1	右主鰓蓋骨	5	右歯骨
2	右前鰓蓋	6	尾椎骨
3・4	椎体	7	不明種
	ウナギ		尾椎骨



第6章 新屋敷古墳

第1節 はじめに

本古墳は、岡山県総合流通センター建設地内に包摂された遺跡の1つで、都窪郡早島町矢尾の丘陵地に所在していた。早島町内の遺跡分布地図（註1）によると、遺跡番号が1番の「矢尾古墳」として掲載されているが、早島町矢尾地区は範囲が極めて広いだけでなく、今後に遺跡が新しく確認される可能性も否定できないので、本古墳に近接した矢尾地区の集落名を付した「新屋敷古墳」に名称を変更した。

岡山県総合流通センターの建設基本構想が発表され、新屋敷古墳が建設予定地内に含まれることが判明した段階で、岡山県教育委員会はこの古墳を現状で保存することを強く申し入れた。ところが建設工事の設計によると、古墳が所在する地点は幹線道路が貫通する要所に位置し、設計を変更して道路を迂回させることは不可能であったため、やむなく記録保存のための発掘調査を実施する措置を取ったのである。

なお早島町は遺跡の分布が極めて少ない地域であり、古墳はこの新屋敷古墳が唯一のものであったため、岡山県総合流通センターの緑地帯へ石室だけを移築することにした。（福田）

第2節 立地と調査前の概況

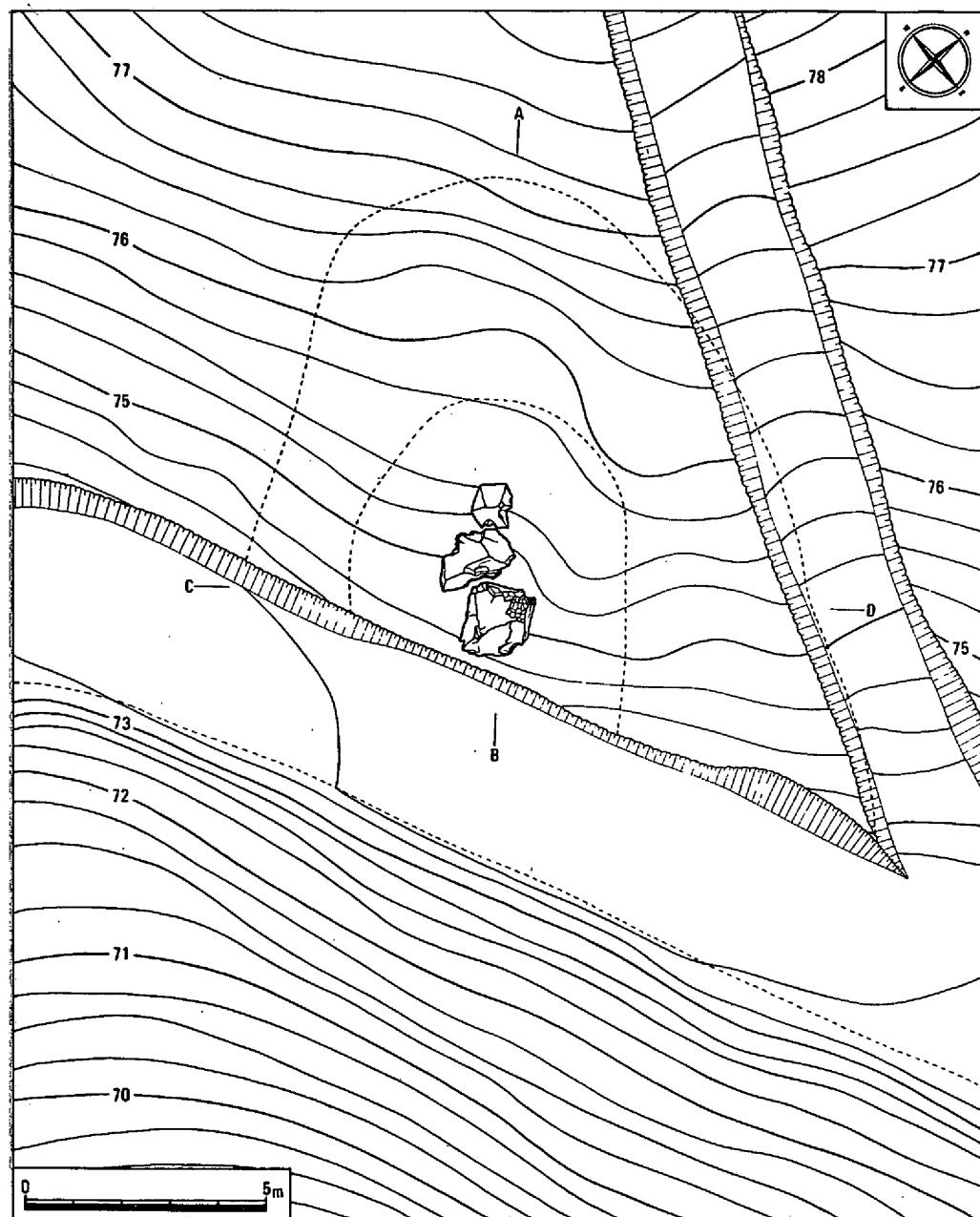
本古墳が立地した地点は、約10軒からなる新屋敷の集落より北西方向に約1200m寄った「備南台地」と呼ばれる低位丘陵である。眼下には、国道2号線と県道岡山倉敷線を結ぶ道路に沿って狭い谷水田が細長く認められるものの、可耕地が極めて少ない谷地形になっている。

本古墳は南東方向に開口している谷部に面した緩やかな丘陵斜面に所在する横穴式石室の古墳で、周辺を丹念に踏査したにもかかわらず、本古墳以外には古墳が存在しなかった。もっとも近接した地点に確認されている古墳は、倉敷市栗坂に所在する西栗坂古墳（註2）で、直径約17m、高さ約1.7mの計測値が得られている。

この新屋敷古墳は緩斜面から急斜面に移行する海拔74.00～77.25mの間に位置し、雑木や細い竹が群生する荒地と化していた。石室の入口付近と周溝の一部は、丘陵上の果樹園や畠地に通じる農道によって削平されていた。墳丘の盛土は流出して3個の天井石が露出していたが、

新屋敷古墳

構築された当時の位置を保持していたものは1個だけで、残る2個は横にずれたり石室内に転落していた。この古墳には構築された当時に5～6個の天井石が存在したと考えられたため、現存しない天井石を地形の低くなった斜面で捜したが、見つけることができなかった。南西側

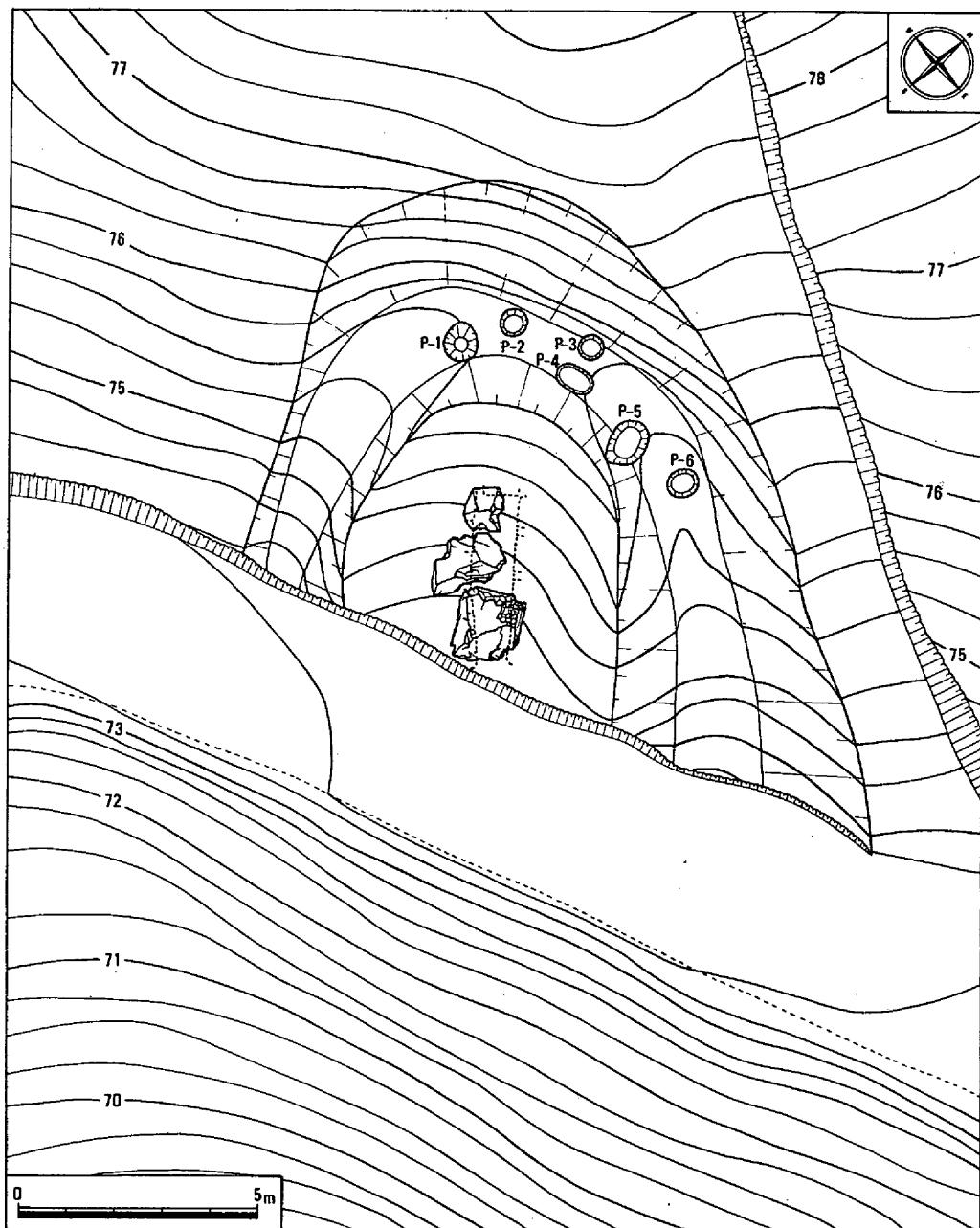


第310図 新屋敷古墳調査前測量図 (1/150)

第6章 第2節 立地と調査前の概況

の側壁は奥壁に近接した部分の石材が除去され、大きな穴が掘り込まれていた。石室内には天井石の高さまで土砂が堆積し、人頭大から拳大の石も数多く認められた。周溝部分は土砂が厚く堆積し、奥壁に面した地点がわずかに窪んでいるのが確認された。

(福田)



第311図 新屋敷古墳調査後測量図・近世土塚配置図 (1/150)

第3節 調査の概要

1. 墳丘と外部施設

調査開始前に観察したように、墳丘の盛土は完全に流失して3個の天井石が露出していた。しかも、構築された当時の位置を保持していたものは1個だけで、残る2個は横にずれたり石室内に転落していた。また、奥壁に近接した両側壁部分には大きな穴が掘り込まれ、石材が除去されていた。

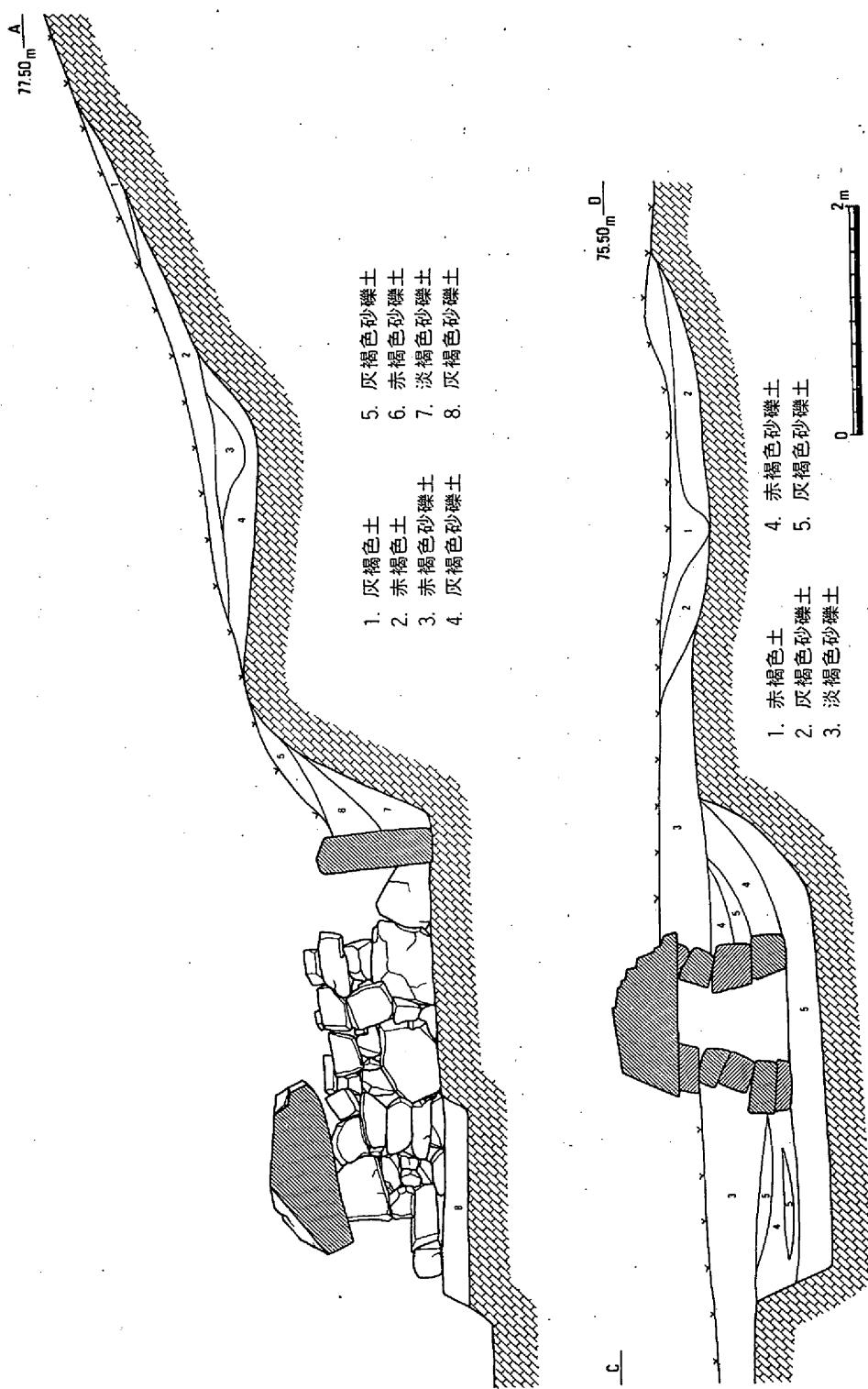
外部施設として、墳丘の端部に存在する周溝を検出した。平面形は逆「U」字形を呈し、地形の低くなった部分の周溝は、果樹園や畠地に通じる農道によって削平されていた。石室中央部から北西方向の周溝底部までの距離は約530cmを測り、石室の長軸方向に直交する方向の径は約900cmになっていた。周溝の検出面での幅は200~500cmを測り、検出面からの深さは極めて浅くなっていた。奥壁の北西方向に位置する周溝の土層断面を観察すると、底部から上位にかけて灰褐色砂礫土、赤褐色砂礫土、赤褐色土が堆積し、底部は海拔約75.60mのレベルになって天井石の上面とほぼ同じ値になっていた。北東方向に位置する周溝は、幅が著しく広くなっている。周溝の土層断面を観察すると、底部は奥壁の北西部より約100cmも低くなっている。周溝の土層断面を観察すると、底部は奥壁の北西部より約100cmも低くなっている。周溝の土層断面を観察すると、底部は奥壁の北西部より約100cmも低くなっている。

石室の入口に面した部分は、農道によって削平されていたばかりか急斜面になって下降していたから、精査したにもかかわらず、遺構や遺物は検出できなかった。

2. 石室の掘形

掘形の平面形は、奥壁部分の幅が短くて石室方向に長い隅丸長方形または台形に近い形態を呈していた。また、石室の中央部から入口方向にかけては、掘形の床面をさらに約20cmの深さに掘り窪め、灰褐色砂礫土を埋めていた。なぜこのように掘形の床面を2段に掘り窪めていたのか、精査したが理解できなかった。あえて想像をたくましくすれば、排水を意図していたのかもしれない。

掘形の奥壁部分での幅は、検出面で約380cm、床面で約220cmを測り、検出面から床面までの深さは約150cmになっていた。この掘形の断面形は上に開いた「U」字形を呈し、奥壁と掘形の法面の間には床面から上位にかけて淡褐色砂礫土、赤褐色砂礫土、灰褐色砂礫土が認められた。掘形の中央部での幅は、検出面で約450cm、床面で約300cmを測ったが、石室の床面での幅は約260cmであった。北東側の側壁と掘形の法面の間には、灰褐色砂礫土と赤褐色砂礫土



第312図 新屋敷古墳墳丘断面図(1/60)

新屋敷古墳

が交互に認められた。石室入口付近での掘形の幅は、中央部よりも全体に広くなっていたが、斜面に構築されていたから、検出面から深さは浅くなっていた。

本古墳の石室は、掘形に対してわずかに北東側に偏在して構築されていた。南側に位置する石室入口横の掘形には、比較的広い空間が認められた。

3. 石室の構造

石室の構造は、南東方向に開口した無袖の横穴式石室である。石室の主軸方向は、N-46°-Wを示していた。石室の入口付近は、農道によって削平されていた。天井石は3個のみ残存し、構築された当時の位置を保持していたものは1個だけであった。南西側の側壁は奥壁に近接した部分の石材が除去され、大きな穴が掘り込まれていた。

石室の構築に使用されている石材は、本古遺の周辺で産出する玄武岩や花崗岩の自然転石と考える。原則として奥壁や側壁の根石には大型で安定した石材を用い、上段にはやや小型の石材を使っていた。石材間に生じた隙間には、玄武岩や花崗岩の小割りした石を充填していた。両側壁は、床面からわずかに内傾して立ち上がる持ち送り積みになっていた。壁面には、粘土等による目張りや赤色顔料の塗布等の痕跡は認められなかった。

床面を基準にして計測した石室の残存長は、北東側壁で約330cm、南西側壁で約360cmになっていた。石室の幅は、奥壁部分で約90cm、入口部分で約63cmを測り、平面形が撥形を呈していた。床面から天井石までの高さは、構築された当時の位置を保持していた天井石が残存した地点で80~105cmであった。床面は奥壁から石室の入口方向へ移行するにしたがって緩やかに下降し、奥壁付近と石室の入口では約10cmの高低差が認められた。石室の入口付近の床面は、石室の掘形の床面をさらに約20cmの深さに掘り窪めて、灰褐色砂礫土を埋めていた。掘形の法面と石室の壁面の間には、控え積み石は存在しなかった。

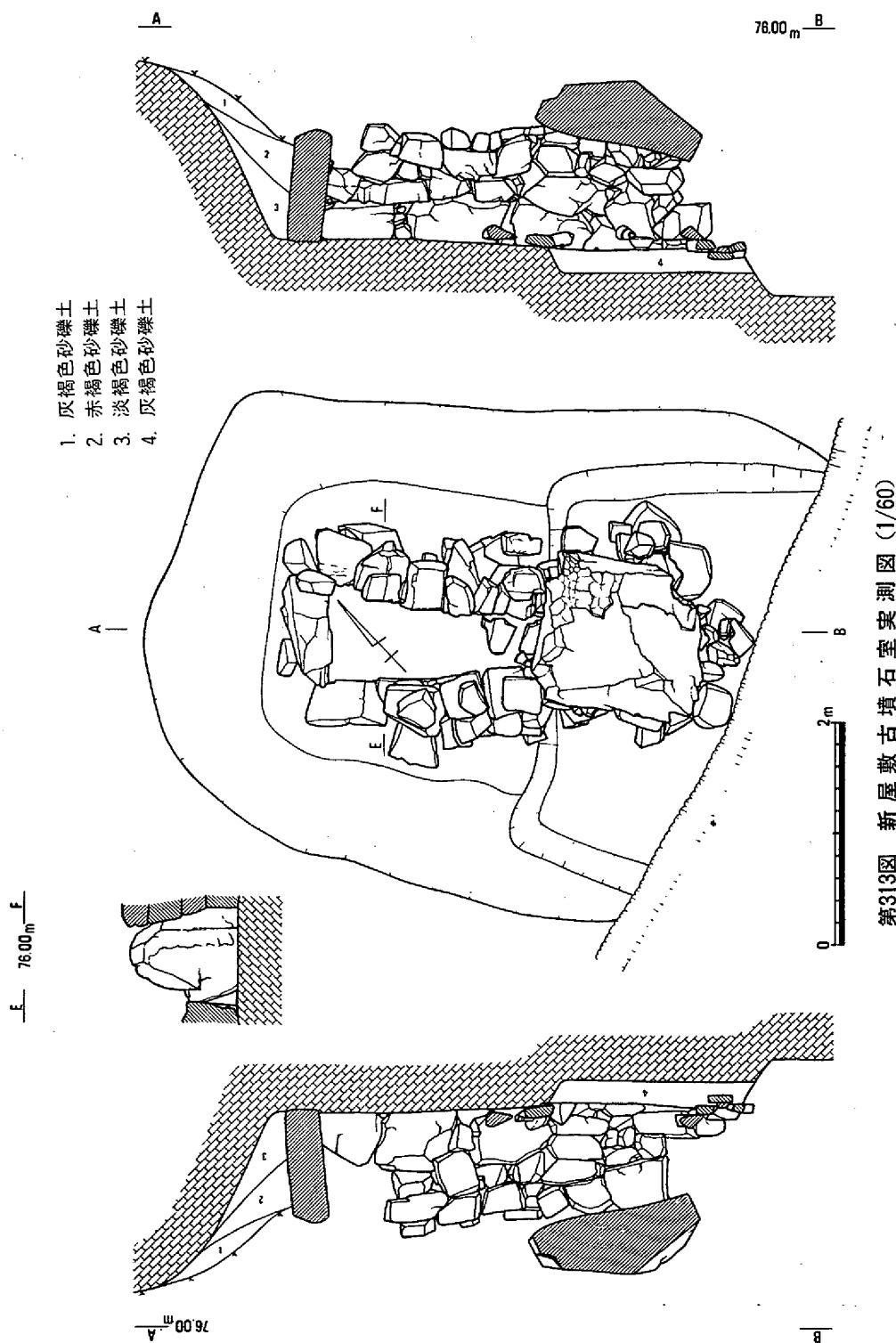
奥 壁

奥壁は、石室の幅に見合うだけの比較的巨大な石材を、広口に立てて据えていた。この石の最大幅は約90cm、高さは約95cm、厚さは約30cmで、両側壁との接続部分の壁面には石材が存在しなかった。構築当時から石材が存在しなかったのか、あるいは石室が破壊されて石材が持ち去られたのか、断定するには至らなかった。

北東側壁

北東側壁は南西側壁よりも遺存状態が良好であったが、天井石が残存しなかった奥壁に面した地点は、上位の石材が持ち去られていた。玄室と羨道を区別する袖は存在しないが、床面から内傾して立ち上がる持ち送りが顕著に認められ、上端の壁面は内側へ約20cmも張り出していた。この北東側壁は、東端に位置する石室の入口付近が農道によって削平されていたため、残

第6章 第3節 調査の概要



第313図 新屋敷古墳石室実測図 (1/60)

新屋敷古墳

存する根石よりさらに東端へ伸びて構築されていた可能性も考えられる。

この北東側壁は石材をほぼ4段に積み上げ、根石には5個の安定した石が認められた。いずれも広口積みにして据えており、隙間には拳大の割り石を詰めていた。これらの根石を据えた順序を検討すると、まず奥壁に接する位置に比較的大きな石を置き、その後は石室の入口部分から順々に、奥壁に向かって4個の石を広口積みにしていった。すると最初に奥壁に接して置いた石と最後に据えた石の間に隙間が生じ、拳大の割り石3個によってその隙間を埋めていた。2段目の石材の大きさは不揃いであったが、一般に横口積みをしていた。最初に石材を据えたのは、根石を並べて隙間が生じた位置である。その後は、奥壁に面した地点に1個の石を横口積みにして置き、さらに奥壁方向から2番目に位置する根石の上に2個の石材を並べ、石室の入口方向から順番に比較的大きな石を根石上に構築していた。3段目の石材も横口積みにされたものが多かったが、比較的大きな石の間に生じた隙間に詰められた石材は、小口積みになっていた。この3段目に存在した石材の構築順序は、中央部を境にして方向が異っていた。つまり、奥壁から中央部に位置した石材は、中央部から奥壁方向に向けて構築され、中央部から石室の入口に認められたものは、中央部から石室の入口に向けて構築されていたのである。構築順序の方向が逆になって生じた中央部の空間には、比較的大きな石を据えていた。床面から4段目に構築された石材は、天井石と接する位置に相当する。この部分はいずれも比較的小さな石を小口積みにし、上端面に天井石が据えられて安定するように考慮されていた。したがって、隙間を埋めて上端面が平坦になることに重点が置かれていたため、石材を構築する順序に規則性は認められなかった。

南西側壁

南西側壁は北東側壁よりも遺存状態が悪く、天井石が残存しなかった奥壁に面した地点は、大きく抉られて石材が持ち去られていた。石室の入口に面した部分は農道によって削平されていたため、根石は残存したものの2段目から上位の石材が存在しなかった。北東側壁と同様に床面から内傾して立ち上がる持ち送りが顕著に認められ、上端の壁面は石室の内側へ約20cmも張り出していた。

南西側壁の根石は、奥壁に面した地点に広口積みにした2個と中央部に据えられた1個が大きくて安定していたが、中央部から石室の入口の間に存在した根石は比較的小規模であった。これらの根石が揃えられた状況を検討すると、まず石室掘形の床面をさらに掘り窪めて灰褐色砂礫土を埋めていた不安定な床面に板石を並べ、ほぼ同じ大きさの板石をその上位に重ねて高さを整えた後に、大きくて安定した3個の石を奥壁から中央部に向けて並べていた。この南西側壁を構築するのに使用された石材は大きさや形態が不揃いで、奥壁へ寄った部分の2段目は奥壁に向かって順番に据えられていたものの、全体的には構築手法に規則性は認められなかっ

た。南西側壁は天井石が乗せられるだけに種々の石材を使用していたため、3段から5段に構築され、場所によって相違していた。

このように、本古墳の側壁の構築状態は極めて不安定で、調査を実施していた段階にも崩壊するのではないかと感じられた。

天井石

墳丘の盛土は流出して3個の天井石が露出していたが、構築された当時の位置を保持していたものは1個だけで、残る2個は横にずれたり石室内に転落していた。本古墳には、構築された当時に5~6個の天井石が存在したと考えられたため、現存しない天井石を地形の低くなつた斜面で捜したが、見つけることができなかつた。地元の古老の話では、近年まで5個の天井石が認められたが、農道が敷設された後に現状のように3個だけになつたといふ。当時の位置を保持していた天井石の規模は、約135×145cm、厚さ約55cmの計測値になつてゐた。

棺台

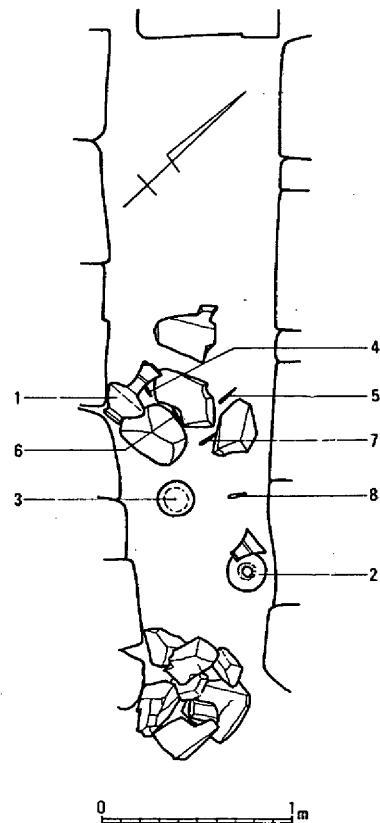
石室床面の中央部で、棺台と推定される4個の石を検出した。いずれも人頭大の角礫で、床面に密着していた。これらの石は中央部に集中して存在し、規則的に配列した状況は認められなかつた。

閉塞石

石室入口部分の床面で、閉塞石と推定される8個の石を検出した。いずれも人頭大から拳大の大きさの角礫で、無造作に固まって置かれていた。本古墳の石室入口部分は農道によって削平されていたから、さらに南東方向にも石が並べられていた可能性が強い。

4. 遺物の出土状況

本古墳から出土した遺物は、石室中央部床面の棺台と推定される石の周辺に存在した。2492の台付長頸壺は、南西側壁と棺台の間に横に倒れて出土した。口縁端部をわずかに欠損しているものの、ほぼ完形に近い土器である。2493の台付長頸壺は、石室の入口に近接した北東側壁に寄って出土した。底部は床面に密着していたが、頸部で欠損した状態にな

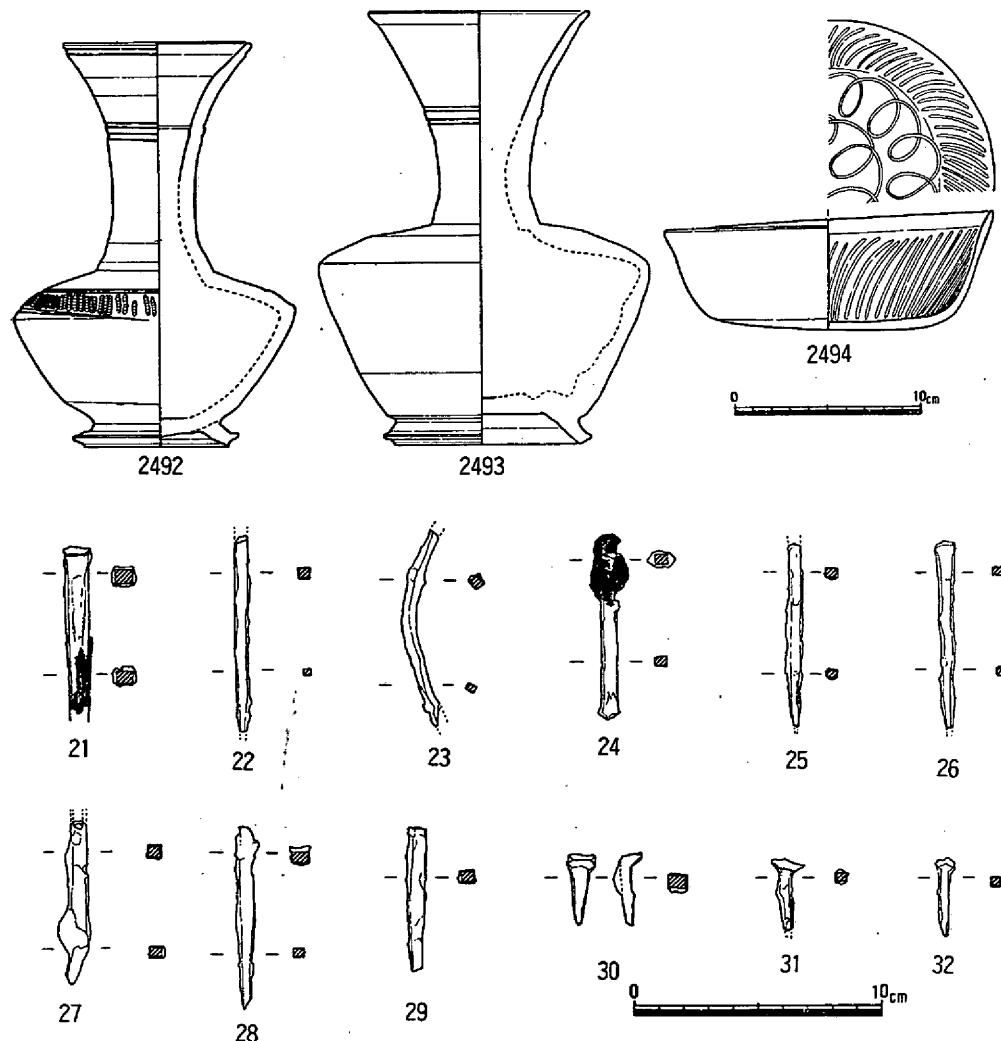


第314図 遺物出土状況 (1/40)

新屋敷古墳

っていた。おそらく側壁に寄って副葬されていたため、不安定な側壁が何らかの要因で緩み、台付長頸壺の口縁端部に圧力を掛けたために欠損したのであろう。2494の土師質の杯は、2492と2493の台付直頸壺の中間地点で検出した。口縁部が床面に接した倒置の状態で出土し、底部は土圧によって破損していた。木棺に使用されたと推定される鉄釘が、棺台と推定される石の周辺から5本も出土した。また覆土に混在した状態で、7本の鉄釘が出土している。

奥壁に面した床面を精査したが、遺物は存在しなかった。奥壁に面した両側壁部分に大きな穴が掘り込まれて石材が存在しなかったため、床面まで盗掘が進んで副葬品も持ち去られたのではないかと推定されたが、盗掘壙の底部は床面まで達していなかった。したがって、本古墳の奥壁に面した部分には、本来から遺物が存在しなかったのであろう。このような調査結果か



第315図 新屋敷古墳出土遺物 (1/3, 1/4)

ら、本古墳には追葬が行われた形跡は認められず、短期間で放棄された可能性が強い。

5. 出 土 遺 物

2492は須恵器の台付長頸壺である。口縁端部をわずかに欠損しているものの、ほぼ完形品である。この土器の計測値は、口径9.8cm、器高21.2cm、胴部最大径14.8cm、頸部最小径4.3cm、高台接地部径7.6cmであった。緩やかに外湾して立ち上がった口縁の端部は、全体に丸く仕上げて外面に1条の凹線状の窪みがめぐらされている。外面の頸部は全体に回転ナデを施し、中位よりやや上方に2条の凹線状の窪みが認められる。胴部の最大径は中位より上方に存在し、比較的鋭く屈曲している。肩部にはハケ状工具の刺突痕跡が認められ、2条の凹線状の窪みが施されている。高台は斜め下方へ「ハ」字状を呈して短く張り出し、外面には中央部が浅く窪んだ面を有する。この高台は貼り付けで、継ぎ目を丁寧にヨコナデしている。胎土中には1mm大の長石を多く含み、焼成は良好で明灰色を呈している。ロクロの回転方向は、時計廻りである。

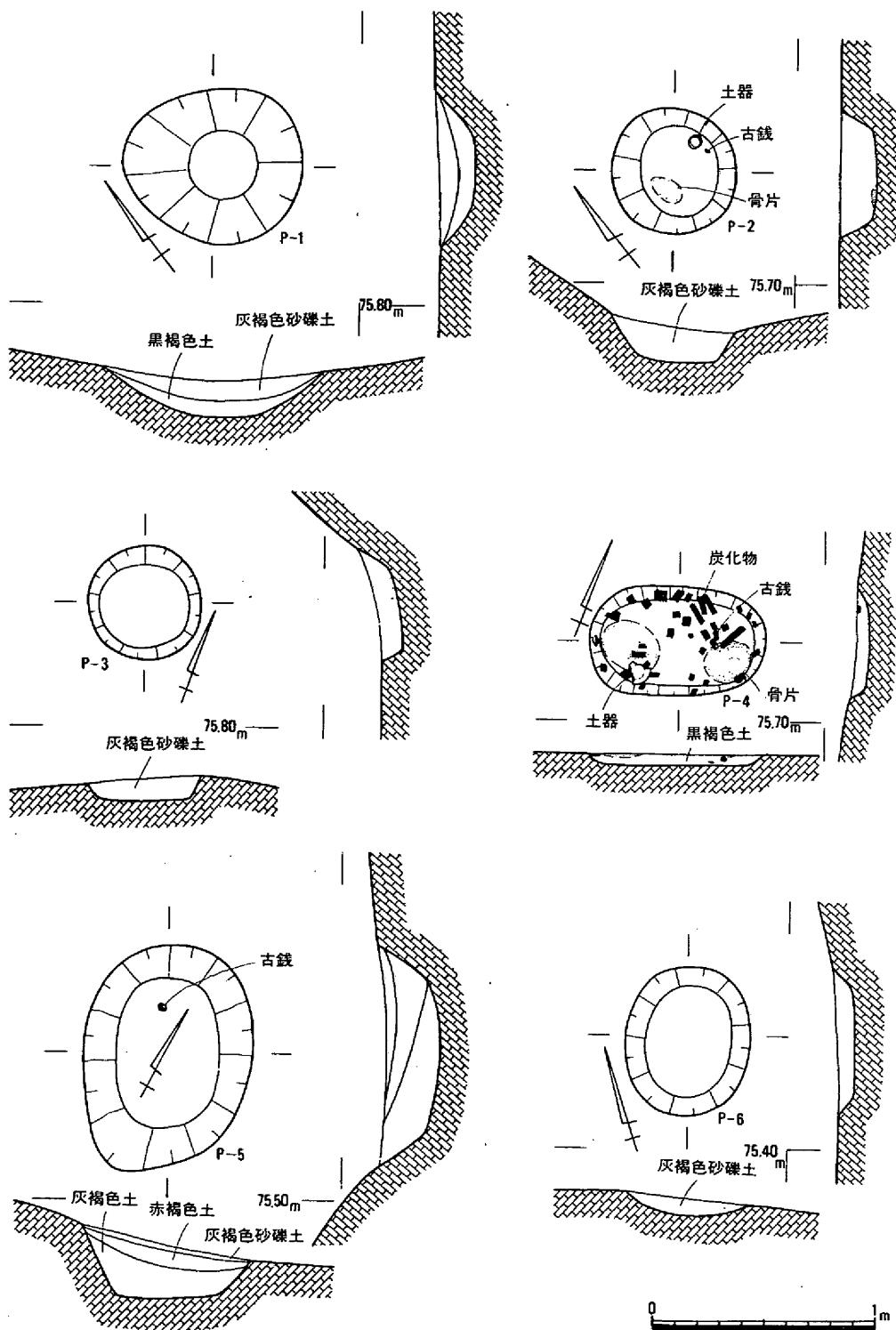
2493も須恵器の台付長頸壺であるが、2492よりも全体に器形が大きくなっている。この土器の計測値は、口径11.7cm、器高22.7cm、胴部最大径17.5cm、頸部最小径4.7cm、高台接地部径9.8cmであった。器壁が薄くなりながら緩やかに外湾して立ち上がった口縁の端部は、全体に丸く仕上げている。外面の頸部は全体に回転ナデを施し、中位に2条の凹線状の窪みが認められる。最大径を有する肩部は、比較的鋭く屈曲している。胴部は全体に回転ナデを施し、凹線状の窪みや文様は認められない。高台は貼り付けで、「ハ」字状を呈して短く張り出している。胎土中には1mm大の長石を多く含み、焼成は良好で明灰色を呈している。

2494は土師器の杯である。口径17.4~18.8cm、器高4.3~6.3cmを測り、全体に歪んだ形態になっている。斜め上方へ立ち上がった口縁の端部は、わずかに外湾して全体に丸く仕上げている。底部の器壁は口縁部よりも厚くなり、全体に細かいハケメが認められる。内面には暗文が存在している。口縁部には縦方向に連続して施し、底部には螺旋状の文様が二重に描かれている。胎土中には砂粒が少なく、焼成は良好で赤褐色を呈している。

これらの土器は、8世紀前半の時期に比定される。

土器以外の出土遺物として、鉄釘と推定されるものが12本も出土した。このうち出土位置が確認できたものは5本だけで、いずれも棺台と思われる石が存在した中央付近で検出した。これらの鉄釘と推定されるものには、完形品が1本も存在しない。また出土地点の配置状況には規則性が認められず、木棺痕跡を推察するには至らなかった。表面に木質が付着していたものが2本だけ存在するが、木目の方向が互いに相違している。これらの頭部は逆「L」字状に折り曲げ、断面は方形または長方形を呈している。

新屋敷古墳



第316図 新屋敷古墳周溝内検出近世土壤墓 (1/30)

周溝の覆土中からは、「早島式土器」と呼ばれている高台付碗2495・2496と小皿2497～2500が出土した。これらの土器はいずれも中世に属するもので、本古墳が埋没した後に周溝内に持ち込まれたと考える。

6. 周溝内検出近世土壙墓

本古墳の周溝からは、6基の近世土壙墓を検出した。平面形は円形または梢円形を呈し、土師質土器や古銭（寛永通寶）が出土した。

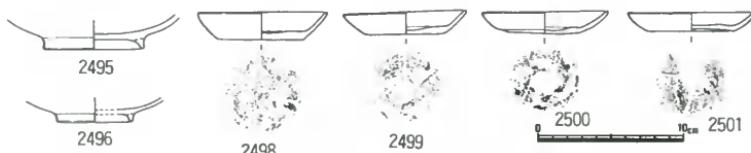
No. 1 近世土壙墓 平面形は卵形を呈し、長径約80cm、短径約69cm、検出面からの深さ約20cmになっていた。土壙墓内には黒褐色土と灰褐色砂礫土が堆積し、遺物は存在しなかった。

No. 2 近世土壙墓 平面形は円形を呈し、径約56cm、検出面からの深さ約16cmになっていた。土壙内には灰褐色砂礫土が堆積し、土師質の小碗と古銭片以外に骨片を検出した。

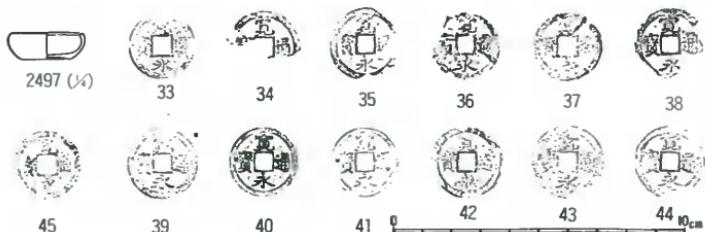
No. 3 近世土壙墓 平面形は円形を呈し、径約50cm、検出面からの深さ約10cmになっていた。土壙内には灰褐色砂礫土が堆積し、遺物は存在しなかった。

No. 4 近世土壙墓 平面形は梢円形を呈し、長径約78cm、短径約48cm、検出面からの深さ約5cmになっていた。土壙墓内には炭化物を多量に含み、中世の土器が混入していた。出土遺物としては、6枚の古銭（寛永通寶）と骨片を検出した。

No. 5 近世土壙墓 平面形は梢円形に近い形態を呈し、長径約103cm、短径約76cm、検出面



第317図 新屋敷古墳周溝内出土遺物 (1/4)



第318図 新屋敷古墳周溝内検出近世土壙墓出土遺物 (1/2, 1/4)

新屋敷古墳

からの深さ約25cmになっていた。土壌墓内には底部から上位にかけて灰褐色土、赤褐色土、灰褐色砂礫土が堆積し、6枚の古銭（寛永通寶）が出土した。

No. 6 近世土壙墓 平面形は円形に近い梢円形を呈し、長径約65cm、短径約56cm、検出面からの深さ約8cmになっていた。土壌墓内には灰褐色砂礫土が堆積し、遺物は存在しなかった。

（福田）

第4節 まとめ

都窪郡早島町矢尾の南東方向に開口している谷部に面した、緩やかな丘陵斜面に所在する横穴式石室の古墳である。石室の入口付近と周溝の一部は、果樹園や畠地に通じる農道によって削平されていた。墳丘の盛土は流出して3個の天井石が露出していたが、構築された当時の位置を保持していたものは1個だけで、残る2個は横にずれたり石室内に転落していた。

周溝の平面形は石室方向に長い歪んだ梢円形を呈し、検出面での幅は約200cmから約500cmを測る。検出面からの深さは全体に極めて浅く、石室の北西方向に位置する地形の高い部分の周溝底部は、天井石の上面とほぼ同じレベルになっていた。

石室は無袖の横穴式石室で、床面からの高さは約130cmから約180cmを測る。残存する石室の長さは約360cmを測り、床面での幅は約60cmから約90cmで、奥壁部分が入口部分よりも広くなっていた。石室の入口部分には、閉塞に使用されたと推定される8個の角礫が存在し、中央部分には棺台と思われる4個の扁平な石が認められた。奥壁には安定した1個の大きな石を据えていた。側壁は種々の石を3段から5段に持ち送り積みしていたが、石の間には比較的広い空間が生じて、不安定な状態になっていた。

石室の掘形の断面形は、上方に開いたU字形を呈していたが、石室の入口部分は奥壁部分よりもさらに深く掘り窪め、灰褐色砂礫土を埋めて床面にしていた。

石室内から出土した遺物には、須恵器の台付長頸壺2個と土師器の杯1個以外に、棺に使用したと推定される鉄釘12本が認められた。これらの土器の形態的特徴から、本古墳は8世紀前半に構築されたと考える。

なお周溝内からは、土師質土器や古銭（寛永通寶）が伴う6基の近世土壙墓を検出した。平面形は円形と梢円形を呈するが、いずれも検出面から極めて浅くなっていた。

（福田）

註

註1 岡山県教育委員会『岡山県遺跡地図』第三分冊 岡山県教育委員会 1975年

註2 倉敷市教育委員会『倉敷市文化財分布図』 倉敷市教育委員会 1976年



1. 新屋敷古墳調査前天井石配置状況（南東から）



2. 新屋敷古墳調査前石室正面状況（南東から）

図版108



1. 新屋敷古墳調査時全景（北西から）



2. 新屋敷古墳調査時全景（南西から）



1. 新屋敷古墳石室掘形土層断面（南東から）



2. 新屋敷古墳周溝部土層断面（北東から）

図版110



1. 新屋敷古墳天井石除去後石室全景（南東から）



2. 新屋敷古墳天井石除去後石室全景（南西から）



1. 新屋敷古墳石室掘形全景（南東から）



2. 新屋敷古墳調査後全景（南西から）

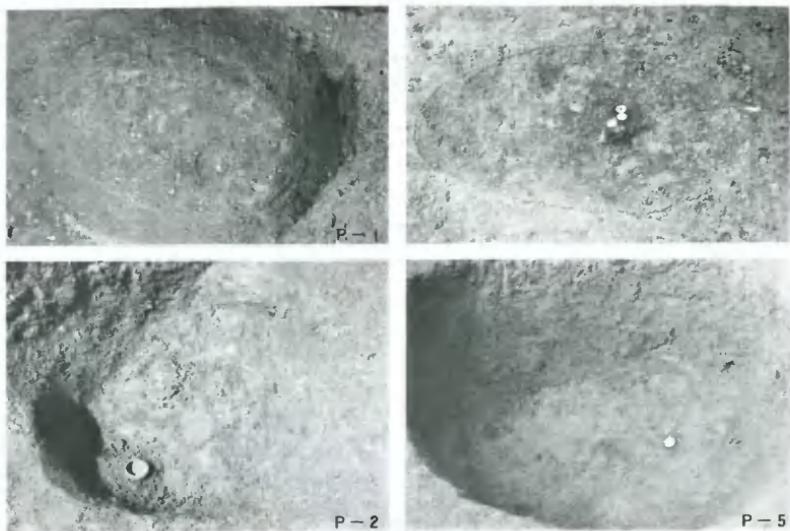
図版II2



1. 新屋敷古墳石室内遺物出土状況（南東から）



2. 新屋敷古墳石室内遺物出土状況（南東から）

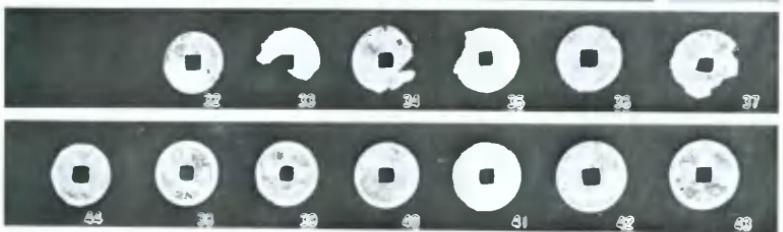
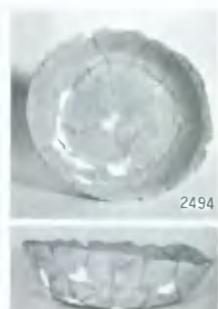


1. 新屋敷古墳周溝内検出近世土壤墓



2. 新屋敷古墳周溝内検出近世土壤墓配置状況（北西から）

図版114



新屋敷古墳出土遺物と周溝内検出近世土壤墓出土遺物

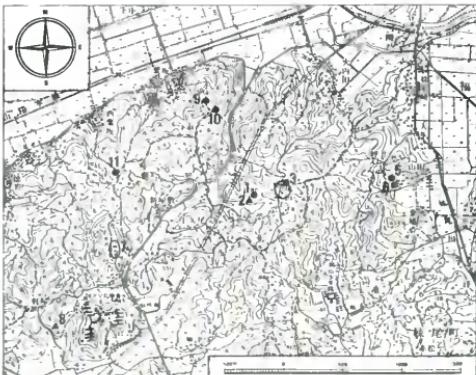
付載 塚山古墳

1. はじめに

奥坂遺跡B地点調査区の調査もほぼ終了近くの昭和56年10月、流通センター内の一画に緑地公園として整備・保存される塚山古墳周辺の踏査を試みた。しかし、時節がら古墳の所在する山林は、低雜木と枯れた雜木とが相俟って密に覆い茂り、古墳の確認すらもおぼつかない状態にあった。その状況に鑑み、それら低い雜草木の除去を行い、古墳の存在を明瞭にすべき必要性を痛感した。幸い奥坂遺跡B地点の調査の方もそのほぼ大半を終了していたため、作業員の何人かを古墳およびその周辺の草刈りに当てることが出来た。ところが実際に雜草木を除去してみると、古墳は、盛土を流出し天井石こそ露呈させているものの、わずかではあるが周溝の存在が確認できた。そこで筆者は、さらに石室内を含めて古墳の墳形及び周辺地形の測量を思いつき、ただちに実施した。以下、この塚山古墳の墳丘および石室の測量報告を行うものである。なお、本古墳の測量実施にあたっては、福田正継・中野雅美両氏の御指導、御援助を得た。記して謝意を表します。

2. 古墳の位置と環境

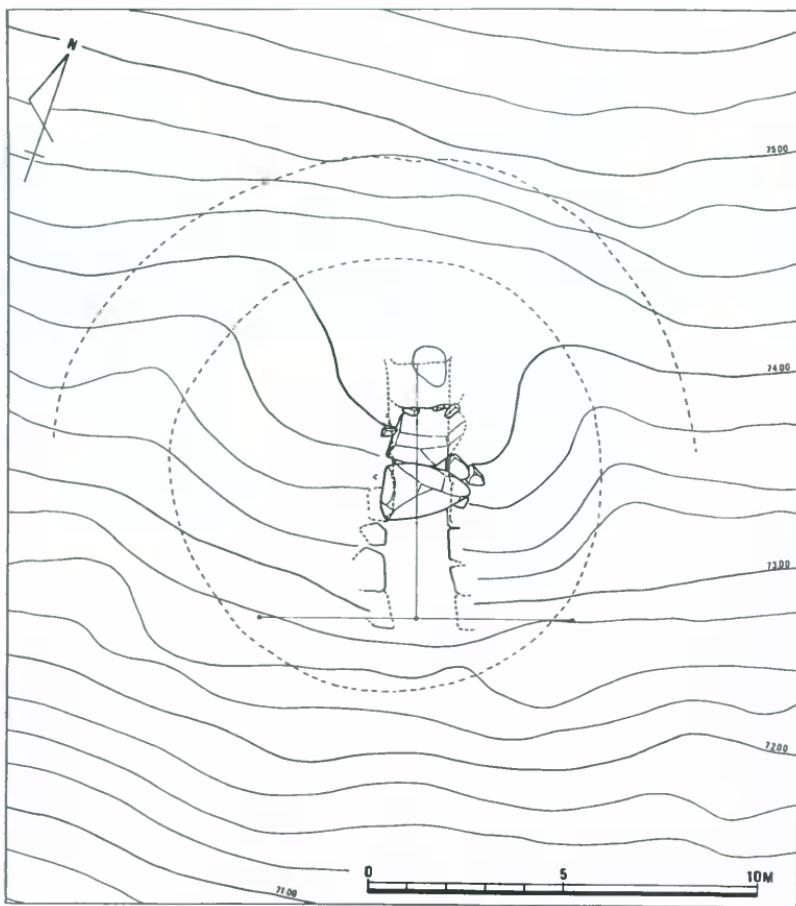
本古墳は、奥坂遺跡の立地する標高99mの東西に伸びた丘陵よりさらに西になだらかに派生した舌状を呈する丘陵の中腹に南面して位置する。行政上は、岡山市大内田永坂1097番地に所在する。現在古墳の眼前には、300~400mの距離を隔てて標高60~70mの丘陵が東西に伸び、視界を遮っている。そして、土地造成以前はその丘陵と本古墳の立地する丘陵との間に、東から西方にかけて幅50m程度の狭小な山間水田が展開していた。さらに、山間水田の一番奥ま



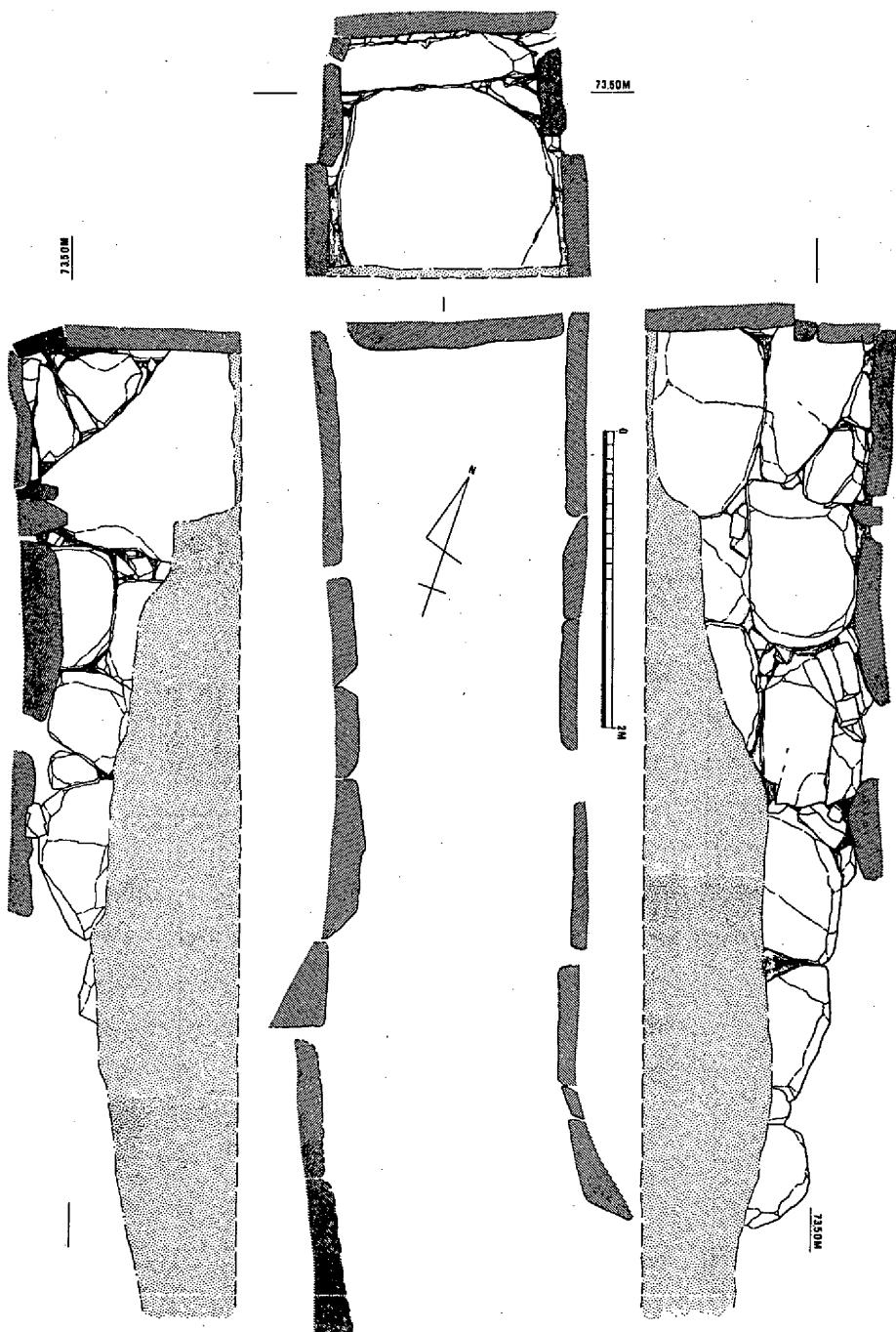
1. 塚山古墳
2. 須恵器採集地点
3. 塚山古墳群(仮)
4. 新屋敷古墳
5. 浄泉寺裏山1号墳
6. 浄泉寺裏山2号墳
7. 矢尾神社遺跡
8. 矢尾奥坂骨蔵器出土地点
9. 東栗坂1号墳
10. 東栗坂2号墳
11. 西栗坂古墳

第319図 早島丘陵における塚山古墳関連遺跡分布図
(1/50000)

った所には、溜池がつくられ、灌漑用水の確保が計されていた。今日でも北面する丘陵の端所には溜池が多く見られる。一方、足守川下流域の低湿地は別として、この山間部においては、水田農耕を可能とする可耕地はほとんどみられない。それはわずかに古墳の眼下に展開する狭小な地域に求められるにすぎない。この環境を反映してか本古墳周辺地域の古墳の存在は、足守川流域の地域に比較した場合、皆無といつても過言ではない。わずかに、今回調査が行われ、8世紀の第1四半期頃の築営が明らかとなった新屋敷古墳（4）と、本古墳の東約200m



第320図 塚山古墳墳丘実測図 (1/150)



第321図 塚山古墳石室実測図(1/50)

の塚山と呼称される地域に10基近くで構成された古墳群（3）がかつて存在していたことが知られる（註1）にすぎない。それらはいずれも横穴式石室を内部構造とする古墳で、おそらく6世紀後半以降の所産と考えられるものである。一方、古墳以外には、8世紀中葉以降に位置づけられる骨蔵器（註2）が早島町矢尾奥坂（8）で出土しているのが注目される。

3. 墳丘

古墳は、舌状を呈する丘陵中腹南面の傾斜角約20°の比較的ゆるやかな斜面に1基忽然と築営されている。地形測量の結果、石室の北背後には、幅2.5~3.0mの周溝痕が半円形にめぐるのが確認できた。そのことから古墳は、径約13.5mの円墳であることが推測された。現在墳丘は、その大半を流出しており、天井石が2枚露呈している。

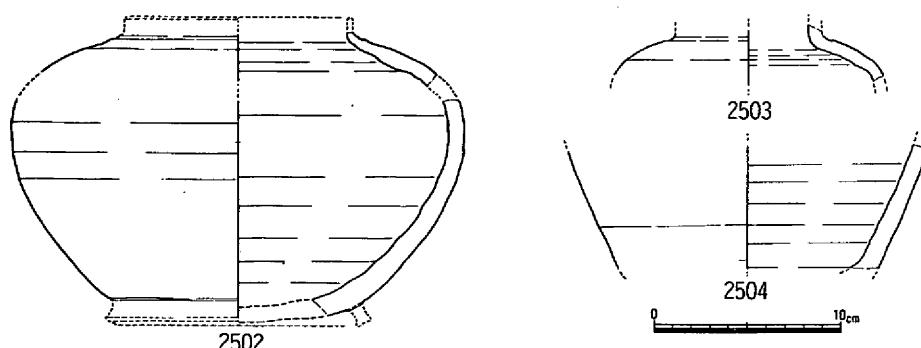
4. 石室

横穴式石室は、墳丘の中央を東に若干ずれて位置する。石室の主軸は、N-18.5°-Wである。石室の平面プランは、発掘調査を行っていないので、現在の状況でのみしか判断できない。しかし、現状では奥壁から7mにわたって袖部の存在を物語るような状況になく、また、推定床面を天井下1.5~1.6mと考えて類推しても、さらに羨道は続きそうにない。このことから、石室は無袖でほぼ短冊形を呈するものと考えて差支えあるまい。石室の規模は、流入した土砂のため判然としない。ここであえて数値をあげれば、羨門から奥壁まで約7.0m、玄室の幅約1.6m、床面から天井まで約1.5~1.6mが推測される。

石室は、基本的には約1.0mくらいの花崗岩により、2段に比較的整然と構築されている。天井石は、現在3枚が残り、その長さは3.70mを測る。

5. 古墳南斜面採集の須恵器

塚山古墳の墳丘測量中、既に重機等により削平を受けた地点より偶然にも須恵器、土師器片



第322図 塚山古墳南斜面採集の須恵器(1/4)

の採集ができた。採集地点は、古墳より南に約30m程下がった所である。

(1) は、胴部最大径約23.8cmを測るもので、口径約11.8cm、最高約16.2cmが推測される。器種は、口縁部を欠損するため判然としないが、丸みをもった胴部と肩部、高台の剝離痕、さらに胴部から肩部へかけての厚みが頸部に至ると急に薄くなること等から、高台付の短頸壺として差支えないと考える。内面は、すべてヨコナデ調整により仕上げられる。外面もまたヨコナデにより仕上げられるが、底部から胴部下半に若干ヘラケズリ痕が認められる。胎土は、精良なもので、焼成も堅緻である。色調は、内、外面ともに灰白色を呈する。

(2) は、(1) より比較的肩の張る壺である。頸部は、器厚が肩部のものとほとんど変わらないことから(1) より長いものが想像できる。器種は、高台の付かない長頸壺であろう。

(3) は、胴部のみの小破片である。器種は、胴部が直線的に肩部へと伸びることから、肩に綫線をもつものと考えられる。おそらくは、台付長頸壺であろう。

なお、この他にも、器種不明の土師器細片が1点あるが、今回割愛した。

以上説明した3点の須恵器は、その特徴からいざれも同時期のものと考える。(1)は近接する早島町矢尾奥坂から出土した骨蔵器(註3)と比較した場合、胴部最大径の在り方(註4)に矢尾奥坂例に先行する要素が認められる。このことから時期は、8世紀中葉頃に位置づけられよう。

結語

地形測量の結果、塚山古墳は、径約13.5mの円墳であることが推測された。しかし、墳丘及び石室内では古墳の築造時期を判断する際の良好な資料となりうる須恵器、土師器片等の発見には至らなかった。したがって、塚山古墳の築造時期は、主に横穴式石室の形態に頼らざるをえない。塚山古墳の石室が無袖で短冊形の平面形態をとることは既に述べたとおりである。

今日までに県下で発掘調査等により解明された横穴式石室は数多い。その中で、塚山古墳と同じ石室平面形態をとるものには次のものがあげられる。

岡山市今谷1号墳(註5)、新屋敷古墳(註6)、倉敷市大池上第8号墳(註7)、真宮第5号墳(註8)、備前市惣田奥4号墳(註9)、鴨方町阿坂古墳(註10)、真備町高津池北古墳(註11)、山陽町岩田12号墳(註12)、新見市岩倉2号墳(註13)、神郷町安信1号墳・同2号墳・同5号墳(註14)、塚谷古墳(註15)、勝央町西ノ谷11号墳・同19号墳(註16)、久米町落山古墳、釜田1号墳・同2号墳、芦ヶ谷古墳、高岩1号墳、コウデン2号墳、荒神西古墳、大沢2号墳、稼山1号墳(註17)

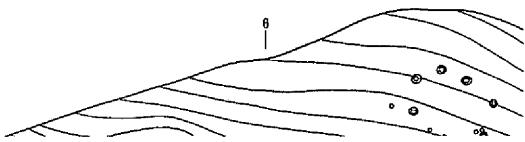
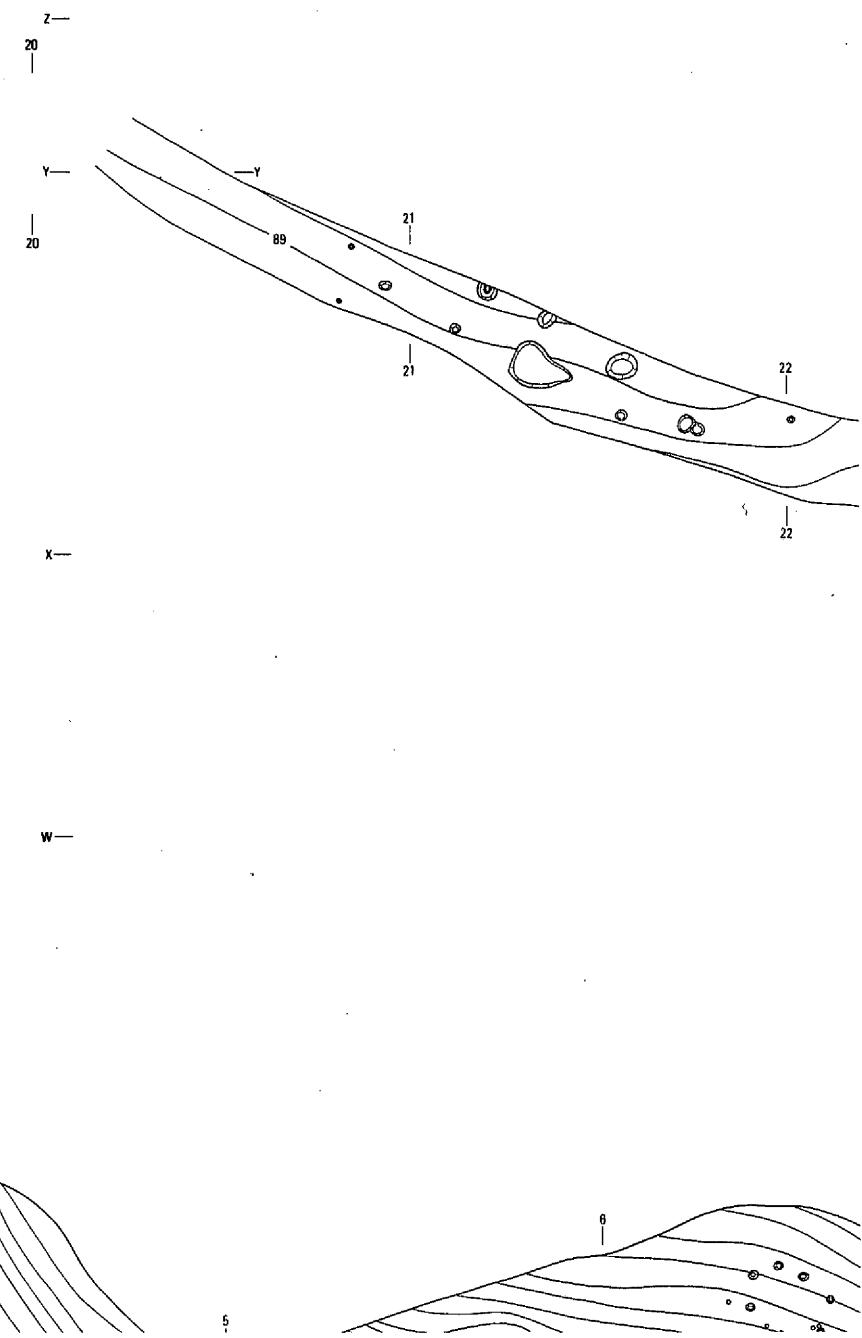
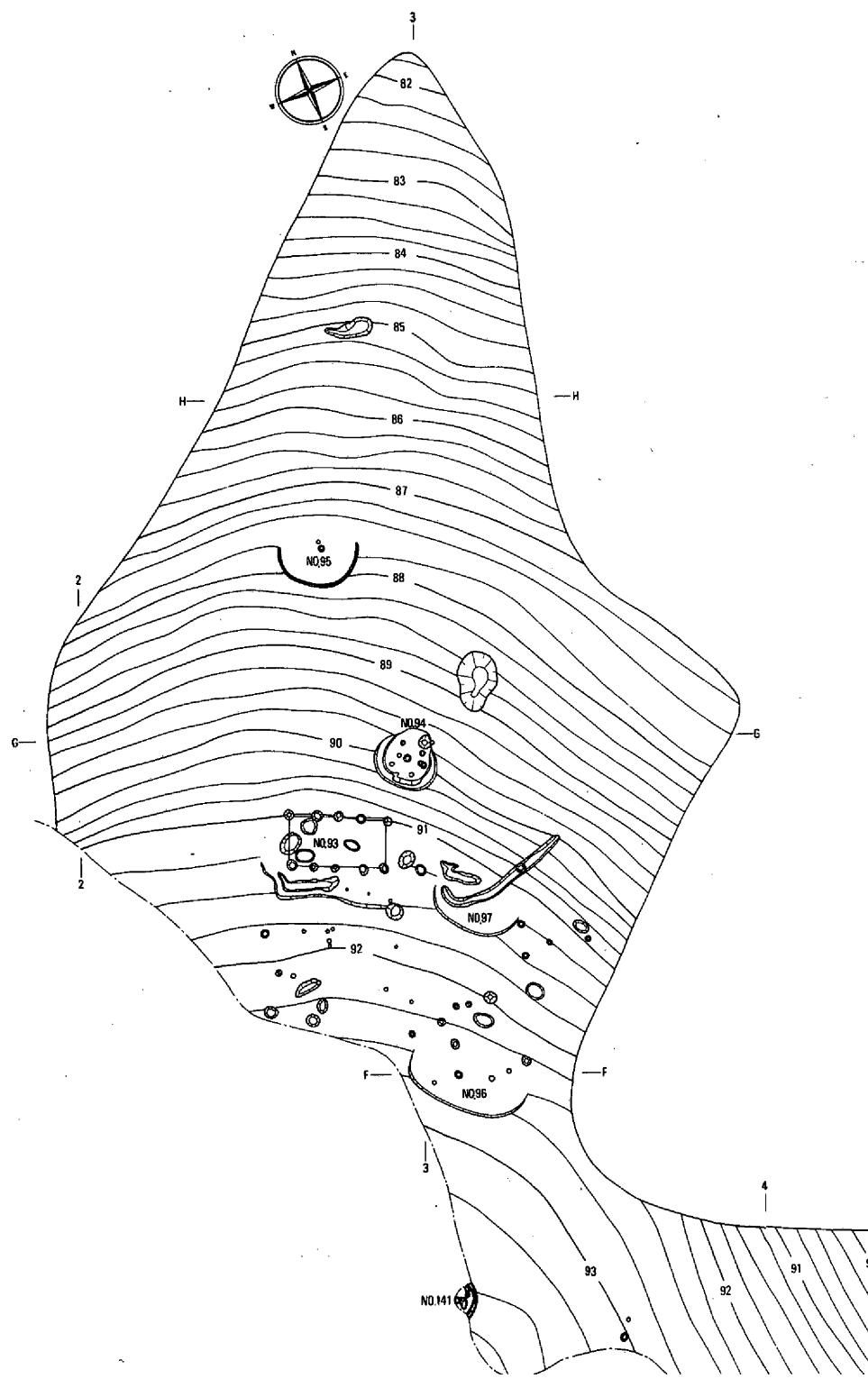
以上羅列してみたが、これらは出土した須恵器のみで判断する限りおおむね6世紀末を上限に8世紀代までの間に位置づけられる。この類例を参考にすれば、塚山古墳の築造は、6世紀

の末を大きく溯ってはありえないと考える。

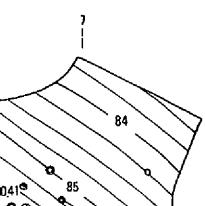
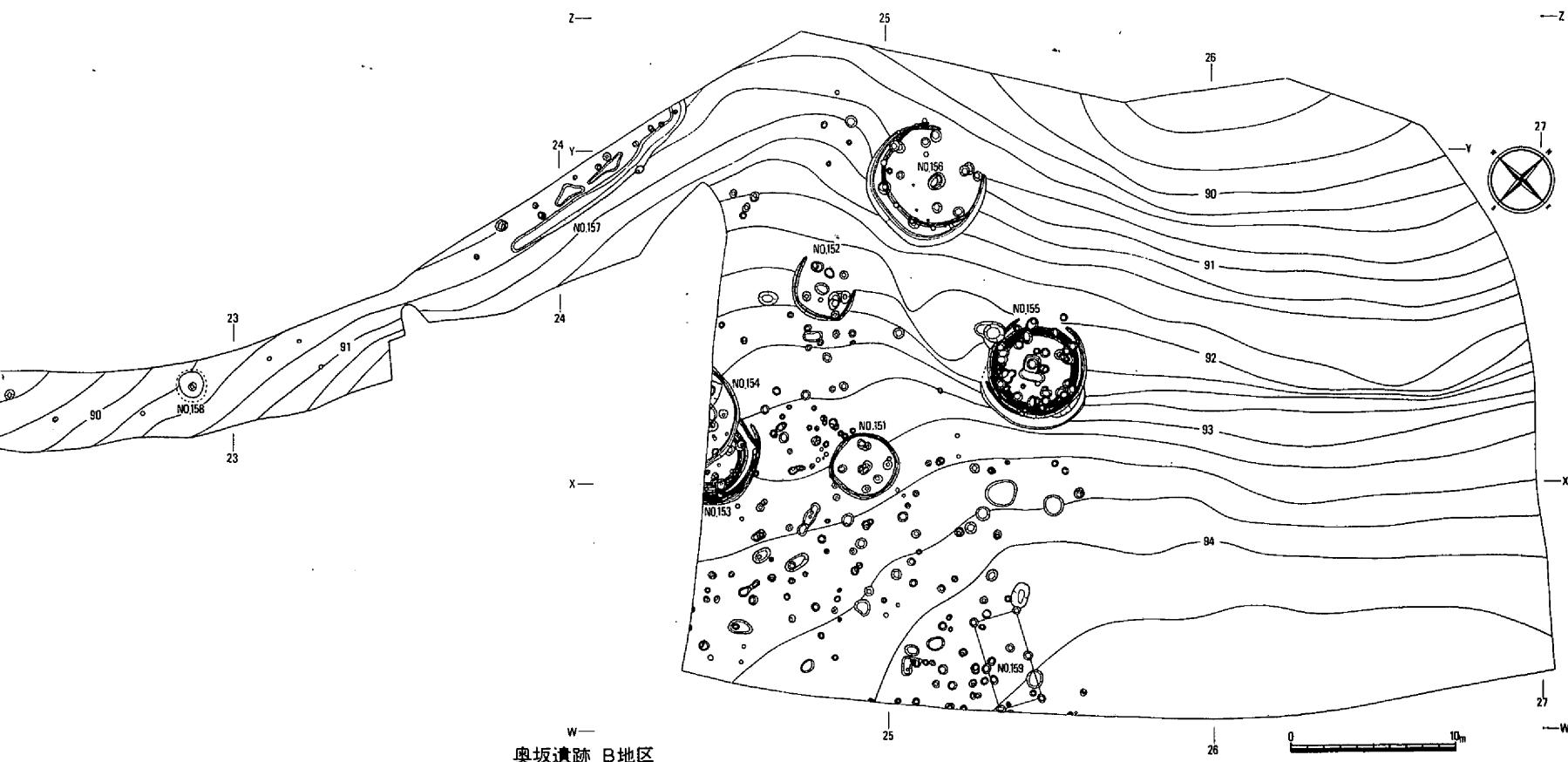
次に、塚山古墳の南斜面で採集した須恵器であるがいったいどういう性格のものであろうか。ここで考えられるものに、① 塚山古墳に追葬されていたものが何らかの契機により転落した。② 古墳以降に骨蔵器として古墳の南斜面に埋納されたもの。等2とおりの可能性が考えられる。備前市惣田4号墳には8世紀第2四半期まで追葬例(註18)の存在から①の可能性もまんざらくなはない。しかし、それ以上に古墳の築造時期との隔たりと、早島町矢尾奥坂における骨蔵器の単独出土例の存在等から、おそらく②の可能性の方が高いと考える。いずれにせよ発掘調査をふまえていないため確証を欠くが、考えられなくもない事象である。(島崎)

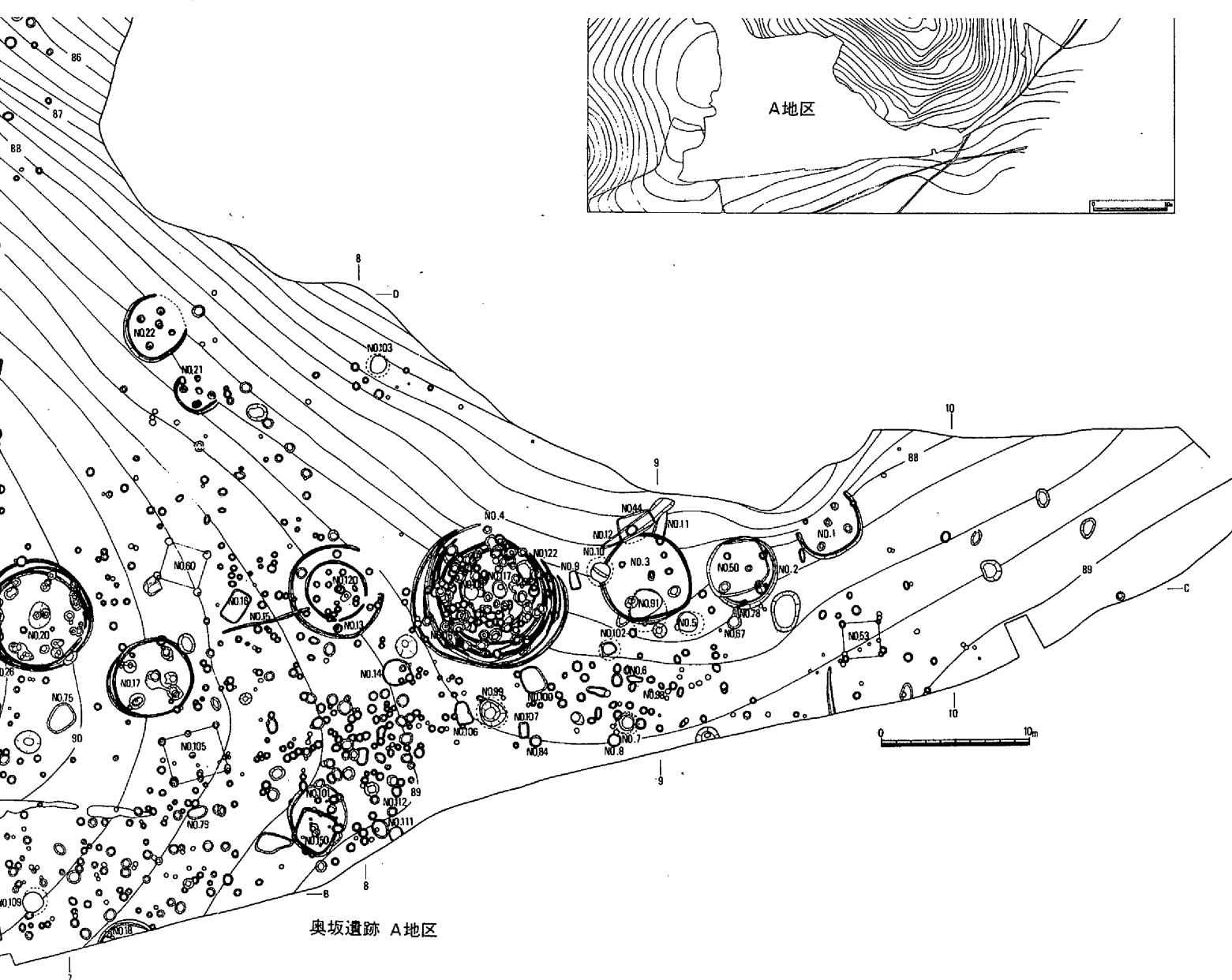
註

- 註1 最近まで塚山に存住していた人の話によれば、かつて塚山集落近くには古墳が多数あり、遺物の出土もあった。ところが、造園ブームのあおりをうけて塚山に所在する古墳の石材はすべて庭石利用のため持ち去られたということである。
- 註2 伊藤晃「早島町矢尾奥坂出土の骨蔵器」『倉敷考古館研究集報』第16号 1981年6月 倉敷考古館
- 註3 註2と同じ。
- 註4 黒崎直「近畿における8・9世紀の墳墓」『研究論集IV』奈良国立文化財研究所学報第38冊、1980年3月
- 註5 岡山市教育委員会「今谷1号墳発掘調査概報」『岡山市文化財保護年報』1978年3月
- 註6 本報告書所収。
- 註7 小野一臣・間壁忠彦「大池上古墳群8号」『倉敷考古館研究集報』第10号 1974年11月 倉敷考古館
- 註8 山本雅靖・間壁忠彦「真宮古墳群5号」『倉敷考古館研究集報』第10号 1974年11月 倉敷考古館
- 註9 間壁忠彦・間壁蘋子「惣田奥4号墳」『倉敷考古館研究集報』第17号 1982年11月 倉敷考古館
- 註10 伊藤晃「阿坂古墳の調査」『山陽自動車道建設に伴う発掘調査』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告42 岡山県教育委員会 1981年3月
- 註11 平井勝「高津池北古墳」岡山県真備町総合公園内埋蔵文化財発掘調査委員会 1982年3月
- 註12 神原英朗「岩田第12号墳」『岩田古墳群』山陽町教育委員会 1976年3月
- 註13 岩田博・浅倉秀昭「岩倉遺跡、岩倉古墳群」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査8』岡山県教育委員会 1977年3月
- 註14 井上弘・平井勝「安信古墳群」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査8』岡山県教育委員会 1977年3月
- 註15 正岡陸夫・二宮治夫「塚谷古墳」『中国縦貫自動車道に伴う発掘調査8』岡山県教育委員会 1977年3月
- 註16 山磨康平他「勝央中核工業団地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」勝央町教育委員会 1976年
- 註17 村上幸雄「稼山遺跡群II」久米町教育委員会 1980年3月
- 註18 註9と同じ。









第309図 奥坂遺跡遺構全体図 (1/400)

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 53

天神坂遺跡
奥坂遺跡
新屋敷古墳

昭和58年3月20日 印刷
昭和58年3月31日 発行

編集 岡山県教育委員会
印刷 山陽印刷株式会社